

令和二年度 鶴見大学大学院 博士（文学）学位申請論文

# 発掘資料を基盤とした川端康成研究

和洋女子大学 総合研究機構 近代文学研究室

主任研究員

深澤晴美

## はじめに

昨二〇一九（令元）年は、川端康成生誕一二〇年であり、川端が日本初のノーベル文学賞を受賞して五〇年でもあった。川端論は数多いが、文学にこめた川端の思いの全貌を知るには、まだ基礎的な資料集めの段階から探求の余地がある。川端没後に編まれた新潮社版『川端康成全集』全三五巻補巻二巻（昭五五・二〜昭五九・五）<sup>1)</sup>は、それまで五度刊行された川端選集・全集がいずれも自選集であったのに対し、「虱つぶしに諸紙誌を探るといふ方針を採った」<sup>2)</sup>川端初の本格的全集で、川端研究において最も基礎的な文献である。だが、川端が遺した発表原紙の切り抜きや手控え等を基に編集されたものであつたため、網羅的に見えても尚多くの遺漏があつた。例えば処女作としても今日高く評価されている「十六歳の日記」（大一一四（一九二五）・八〜同・九）<sup>3)</sup>でさえ、梶井基次郎が思い出させてくれたので第二著作集『伊豆の踊子』（金星堂、昭二（一九二七）・三）に収録出来たと川端自身が明かしているように、川端の手控え等から漏れていたとしても、その作品の文学的質や研究的価値が低いとは一概に言えないのである。

筆者はこれまで多数の川端全集未収録作品等の新資料を見出し、随時発表してきた。それらの成果を踏まえて小谷野敦氏との共著『川端康成詳細年譜』（勉誠出版、二〇一六・八。以下、『詳細年譜』と略す）を編纂したが、同書刊行後も新資料を発掘した。第Ⅰ部で論じた「星を盗んだ父」「時代二つ」「父」は『詳細年譜』刊行以前の発掘作品であり、「妻競」「名月の病」は『詳細年譜』刊行以後の発掘作品である。第一章では未発表小説「星を盗んだ父」の、第二章では大正時代の新聞に掲載された諸作品の解説を通して、まず作家川端の初期の問題を考察した。

新聞調査の困難性と意義については後述するが、やはり多くの場合消耗品として扱われる雑誌の調査も、別の難しさがある。第Ⅱ部第一章〜第六章では、そうした雑誌調査によって新たな川端像に迫った。各誌の調査に当たっては、全集未収録

文を含めた川端の文章のみならず、座談会やグラビア、訪問記事、特集、催し物・新連載・近刊の予告類、読者頁、編集後記等にも注意し、各雑誌や当時の社会における川端を考察した。第一章は中学時代の川端の投書作品を探索して作家川端誕生以前を見、第二章は大正時代から晩年まで長く関わった「中央公論」「婦人公論」を軸に、中央公論社との関わりを通して作家川端を概観し、問題を抽出した。第三章～第六章で主に取り上げたのは文芸誌より低いものと見做されてきた「女、子供」を対象とした雑誌で、これらを通して「女、子供」に対する「男、成人」としての、特に近代日本を生きた作家としての川端の眼差しの特異性を論じた。拙稿（後掲「初出一覧」13～16）発表時点ではほとんど研究の俎上に載せられていなかった少女雑誌・婦人雑誌・児童誌評価の機運も、近年漸く高まりつつあり、今後の研究の進展が期待される。<sup>4</sup>

第七章では主に地方紙に、第八章では内容見本に掲載されていた新資料を手掛かりとして、これまで看過されてきたテーマを考察した。よく旅をした川端の動静を知るには、川端や関係者らの書簡・随筆類に加え、地方紙も有効である。例えば、川端が戦後の転換期を迎える一契機ともなった原爆被災地視察（後述、第九章一）や「千羽鶴」続篇の構想に関わった大分の旅行と同様に、第七章では、川端と沖繩との関わりを考察したが、ここで問題とした戦前及び米国統治下の沖繩行についても、複数の地方紙に当たること、その行程を始めとして現地での座談会・講演等折々の川端の生の言葉も拾うことができ、そこから旅の意図や川端の社会観・文学観もうかがえた。第八章では、「旅人」芭蕉に対する関心と共感が作家以前から晩年に至るものであったことを、芭蕉を核とした「旅の小説」群の執筆や「雪国」の改稿、講演での発言等も含めて考察し、その根底には第六章で論じた〈故郷〉喪失感があったことを明らかにした。第九章では、最晩年の書簡二通を通して、晩年の問題のみならず、第七章とも絡めた川端の平和への思いやその実践的活動等にも目を向けた。

第Ⅰ部第一章及び第Ⅱ部第八章、第九章は文学館所蔵資料を用いたが、第Ⅲ部では、各地の文学館調査で発掘した新資料を纏めて紹介した。各文学館には原稿・書画等の肉筆資料や活字資料他、作家所縁の種々様々な品が保存されているが、

まだ十分な調査・活用が為されているとは言い難い状況にある。

**第一章**では、全集・叢書等の内容見本に掲載された全集未収録の推薦文等六五篇の各概要を示し、解題を付した。カラー写真入り数十頁を越す豪華版からリーフレットまで、内容見本の形態は多様だが、大半はカタログとして捨て去られている。国立国会図書館等を含めて一般の図書館では保存されていないが、幸い日本近代文学館・神奈川近代文学館には大正頃からの数千点が残されていると判明し、一点一点確認して川端の文章を拾い上げた。研究資料としての内容見本の価値と可能性については後述するが、「文豪」川端の推薦文は各方面で重宝され、その内容も多岐に亘っている。個々の注文に応じた比較的短い文章ではあるが、作家論の糸口として見落とせないものも孕んでいることは、**第Ⅱ部第八章**からも明らかである。

**第二章**では、『詳細年譜』以降に五つの文学館で発掘した川端関係未翻刻書簡三〇八通を、適宜解題を付して紹介した。作家研究において書簡が有用であることは贅言を要しないが、日記類と同様に、「解読の困難と内容の守秘性」<sup>6)</sup>もあって未調査・未翻刻のものも多い。『詳細年譜』では、伊豆近代文学博物館蔵の山田兼次宛書簡(昭一八・二・三)や、大田区立郷土博物館蔵の<sup>7)</sup>小島政二郎・視英子宛電報と書簡(昭四四・九・二〇)等も紹介した。キャプションもなく展示されていた前者は養女の件に触れた最も早い時期の資料でもあるが、従来の研究では、熱海文藝懇談会の活動を契機に親交を深めた山田との関わりも含めて見過ごされていた。時期推定が可能な書簡は、諸家の回顧文中に引用されているものもネットオークションや古書店で出品されたものも『詳細年譜』には注を付けて載せ、そうした書簡や回顧文によって様々な人物との交流も掘り起こせた。本章でも、日付不明の書簡は可能な限り執筆時期の推定をし、文学館による推定時期が誤っているものは注記して正し、年月日順の書簡一覧表も併載した。

尚、本稿『発掘資料を基盤とした川端康成研究』では、引用を除き、平成以降は西暦を、それ以前は元号を用い、適宜両者を併記した。ここに紹介した新資料や提起した課題によって、川端研究がより深まり、広がることを切に願っている。

注

- (1) 以下、三七巻本全集と略し、川端文の引用は同全集による。
- (2) 三七巻本全集「第三五巻 解題」(昭五八・二二)。
- (3) 「伊豆の踊子」の装幀その他」(昭二・五)。拙稿「十六歳の日記」研究史」(深澤晴美・細谷博編著『川端康成 作品論集成 第五巻「十六歳の日記」「名人』おうふう、二〇一〇・九)を参照されたい。
- (4) 例えば「少女の友」をめぐって、遠藤寛子『少女の友』、その栄光の時代」(『少年小説大系 別巻五少年小説研究』三一書房、一九九七・一)、同『少女の友』とその時代―編集者の勇氣 内山基』(本の泉社、二〇〇四・一)、『少女の友』創刊100周年記念号 明治・大正・昭和ベストセレクション』(実業之日本社、二〇〇九・三)等の出版が為されたのは、拙稿(後掲「初出一覧」13、一九九六・一二)発表後であった。
- (5) 詳しくは、拙稿『千羽鶴』のゆくえ―『波千鳥』試論―」(お茶の水女子大学「国文」昭六一・七。後、羽鳥徹哉編『日本近代文学研究資料新集二七 川端康成・日本の美学』(有精堂、一九九〇・六)、馬場重行編著『川端康成作品論集成 第七巻「千羽鶴』(おうふう、二〇一二・一)等に収録)を参照されたい。
- (6) 三七巻本全集「補巻一 解題」(昭五九・四)。
- (7) 同館には、小島視英子『現代不作法教室』(二見書房、昭四四・一〇)に川端が寄せた「序文」(川端全集未収録)の原稿等も所蔵されている。
- (8) 真室二郎、生方たつゑ、兼子蘭子、内藤初穂、真船豊、安田善一他。

# 『発掘資料を基盤とした川端康成研究』 目次

はじめに

## 第I部 新発掘初期作品の読解

### 第一章 未発表小説「星を盗んだ父」

—モルナールの戯曲「リリオム 或るならず者の生と死（裏町の伝説）」翻案の試み—

#### 一 執筆時期の推定

1 用いられている原稿用紙について

2 原作者名「フエレンク・モルナー」の表記について

3 「翻訳全盛時代」とその急速な失速

#### 二 執筆の背景

1 「リリオム」の原型・森鷗外「破落戸の昇天」と学生時代の川端康成

2 川端岩次郎宛書簡（大正九年一月二五日附）が提示する問題

【演劇との関わり—松竹合名会社と帝大劇研究会—】

【第六次「新思潮」の継承—菊池寛との関係—】

3 商業誌への執筆—水守亀之助・加藤武雄・佐佐木茂索との関係—

4 大正一〇年四月、「MERRY-GO-ROUND」の腹案

5 鈴木善太郎訳『白鳥』（大正一三年六月）刊行前後—金星堂との関わり—

20 18 16 14 11 10 8 8 7 6 4 3 3 1 i

6	二冊の幻の著、川端康成訳ジョン・パリズ『さようなら』と川端康成『驢馬に乗る妻』	23
三	その特質―恋愛ドラマから「肉親の深い神秘的愛情」を焦点とした小説への改変―	25
1	戯曲「リリオム」の邦訳四種と小説「星を盗んだ父」の懸隔	25
2	「リリオム」を原作とする映画、ミュージカル「カルーセル」等の作品群と「星を盗んだ父」	32
四	川端文学の中で―今後の検討課題―	36
<b>第二章</b>	<b>新聞掲載の発掘作品―「妻競」「時代二つ」「名月の病」「父」―</b>	46
一	新聞調査の困難性と意義	46
二	「妻競」―「鉢かづき」から「鏡破物語」、ブルースフ「鏡」へ／新進作家川端の自負―	48
三	「時代二つ」―境界としての首つりの松／境界を侵す子供達―	52
四	「名月の病」―「山猫のやう」な少女と「猿のやう」な妻／名月への昇天―	55
五	「ちよ物」系譜中での「父」―感傷的な〈私〉から〈彼〉への変貌―	64
1	〈彼〉の誕生―「生命保険」「非常」から「父」へ―	66
2	〈彼〉の誕生を促したものの―「ちよ物」と「孤児としての私の私小説」―	72
3	〈彼女〉の形象に向けて―「父」以後の〈彼〉―	75
<b>第Ⅱ部</b>	<b>雑誌掲載発掘文等による考察</b>	87
<b>第一章</b>	<b>投書家時代の川端康成―「文章世界」「文章倶楽部」「新潮」「文藝雑誌」発表一三作品―</b>	89
<b>第二章</b>	<b>時代との交点を探って―「婦人公論」「中央公論」における川端康成―</b>	100

一	編集者藤田圭雄との繋がり	106
二	藤田就任以前―「抒情歌」まで―	107
三	「牧歌」連載など―満州事変の頃―	109
四	「愛する人達」連載など―太平洋戦争勃発へ―	116
五	終戦後―「虹いくたび」連載など―	119
六	文芸映画の隆盛―「美しさと哀しみと」連載など―	121
七	『日本の文学』編集、「女流文学賞」選考など	125
八	ノーベル文学賞受賞以降	129
<b>第三章 戦前・戦中の少女小説―「少女倶楽部」から「少女の友」へ―</b>		
一	「少女倶楽部」時代（昭和七年〜十一年）―「大人のための文学なんか、書くもいやらしい」―	140
二	「少女の友」時代（昭和一二年〜一八年）―「軍部にきらわれて」―	147
1	創刊四五周年「記念のことば」―「みな戦争前のことである」―	147
2	連載小説「乙女の港」―少女幻想共同体ということ―	149
3	連載小説「花日記」―続くヒット作―	153
4	連載小説「美しい旅」―「悉くの作に一貫してゐるもの」―	154
5	戦争への傾斜の中で―「作文」選など―	161
<b>第四章 戦時下の側面―「新女苑」における川端康成―</b>		
一	「少女の友」姉妹誌としての「新女苑」―「自己を創造せんとする若き婦人」のために―	166



二	川端と「新女苑」(昭和一三年～一八年)	168
1	「小品欄」選—《女性的なるもの》と《日本》—	169
2	小説執筆—「大牡丹」「旅への誘い」「朝雲」—	177
3	「岡本かの子」に触れて—《東方の大きい母》を求めて—	185
第五章	「ひまわり」に見る戦後の川端康成—《少女期の終焉》と少女小説の終焉—	191
一	巻頭文「美しい言葉」と懸賞少女小説選(昭和二二年)	193
二	「ひまわり・らいぶらり」誕生、川端責任編集「婦人文庫」復刊(昭和二二年～二六年)	195
三	少女小説の発表(昭和二四年～二七年)	197
1	短篇小説「椿」—養女だった妹—	198
2	連載小説「歌劇学校」—束の間の《少女》の時／歌劇学校という場—	199
3	連載小説「万葉姉妹」—「あなたとわたしはおなじよ」／「住吉」三部作から「古都」へ—	201
4	連載小説「花と小鈴」—《永遠の少女》の形象とその背景—	204
第六章	川端康成の女性文章・綴方選—喪われた《故郷》への憧憬／絶対の距離—	211
一	戦前・戦中の活動	215
1	「婦人公論」「新女苑」小品欄、『模範綴方全集』の選等—「純粹な肉声」を—	215
2	「文学の病氣」「文学の毒氣」—「故郷を失った文学」が提起した問題—	217
3	『女性文章』刊行と「英霊の遺文」—昭和『万葉集』の夢想—	221
二	戦後の活動	225

1	「赤とんぼ」綴方、「婦人文庫」小品の選等―「なほ失はぬもの」を―	225
2	「雪国」改稿に触れて―フェミニズム批判の彼方へ―	228
3	「白鳥」廃刊後―自らの創作に向けて―	232
4	「東方の歌」―幻の《日本》への回帰―	237
<b>第七章 川端康成と沖繩―幻の長篇「南海孤島」／米国統治下の沖繩行―</b>		
一	幻の長篇「南海孤島」―戦前の企て―	245
二	昭和三三年、米国統治下の沖繩行	251
1	戦跡の巡拝、民芸の鑑賞	253
2	沖繩タイムス主催「川端を囲む座談会」、乙姫劇団	254
3	ハンセン病療養所愛楽園訪問と講演「逢い難くして……」	257
4	琉球新報主催「川端康成氏を囲んで 文学を語る座談会」	260
5	「タイムス文化講座講演」	262
三	沖繩行以後の川端と沖繩	265
<b>第八章 川端康成における芭蕉／「雪国」の《天の河》再考</b>		
一	「不易流行」と故郷喪失―初期の評論―	278
二	「旅の小説」の試み―「牧歌」「旅への誘ひ」「東海道」／「旅情」から「旅愁」へ―	279
三	捨子の「かなしみ」と旅人芭蕉―「故園」の《私》の叫び―	282
四	「雪国」―《天の河》の加筆と改稿―	283

五	「しぐれ」―≒二人で一人、一人で二人≒の願い―	287
六	美との邂逅と創造―「ほろびぬ美」「美の存在と発見」他―	288
<b>第九章 最晩年の書簡二通</b>		
一	新発掘・成瀬記念館蔵上代たの宛川端康成書簡について	293
	―パール・バックのノーベル平和賞推薦依頼に関して／平和への願いと国際的活動―	293
1	川端とパール・バックの接点―「ノー・モア・ヒロシマズ」／国境・人種を越えて―	295
2	世界平和アピール七人委員会等における川端の平和活動	299
3	ノーベル平和賞推薦依頼を断った背景	300
二	川端康成最後の書簡―「不浄」ということ―	304
<b>第三部 新発掘資料編</b>		
第一章	内容見本類に見る川端康成―新発掘推薦文等六五篇・各篇概要と解題―	315
第二章	文学館・記念館所蔵書簡に見る川端康成―未翻刻書簡三〇六通 解題と一覽―	344
一	書簡解題	346
二	書簡一覽	379
<b>初出一覽</b>		
		390
<b>終わりに</b>		
		392

第 I 部  
新発掘初期作品の読解



## 第一章 未発表小説「星を盗んだ父」

### ―モルナールの戯曲「リリオム 或るならず者の生と死（裏町の伝説）」翻案の試み―

川端康成「星を盗んだ父」は、ハンガリーの作家 Molnar Ferenc（一八七八―一九五二）の戯曲「リリオム 或るならず者の生と死（裏町の伝説）」を翻案した短篇である。この原稿二二枚を初めて目にしたのは、二〇一一年六月、大阪府茨木市立川端康成文学館での川端生誕月記念企画展関連講座に講師として招かれた折で、前館長の時代から同館が所蔵していた川端の自筆原稿があると田中洋子館長からうかがって拝見したのは、「フエレンク・モルナー作 川端康成述」と記された原稿だった。これは三七巻本全集未収録であり、従来の川端研究では全く触れられたことが無いものだったので、早速調査を開始した。

#### 一 執筆時期の推定

まず問題となるのは初出である。川端文学館の決済書類は既に保管期限切れで破棄されていたが、一九九四年七月の業者市で神田神保町の八木書店が入手し、翌年二月二二日に川端文学館が購入したことまでは判明した。田中館長によれば折本に仕立てて帙に入れられていたとのことだが、誰がどんな経緯で持っていたかは辿れなかった。川端以外の名で発表された可能性や、改題された可能性も考慮して調べたが、これを掲載した雑誌・新聞・児童書を含む書籍も、これに言及した文献も見出せなかった。例えば川端周辺では、「青空」及び第七次「新思潮」の同人で「文藝時代」にも執筆した飯島正が、鈴木善太郎の訳（後述）によって「リリオム」に惚れ込み、日本語訳は勿論、英・仏・伊訳まで集め、原語も独学して翻訳（後述）も果たしており、その「モルナー熱」を随筆等に多々記している他、横光も渡欧後の「ある愛情」（昭一三・九）でモ

ルナルに触れているが、やはり彼らにも「星を盗んだ父」に対する言及はない。筆者の調査を踏まえて、二〇一二年及び一三年の夏には川端文学館で本原稿が特別展示され、「新潮」二〇一三年三月号には原稿一枚めの写真と拙文も添えて全文の翻刻を掲載、新聞各紙等で報道もされ、同年八月二五日には茨木市共催・川端康成学会茨木大会で筆者が講演「茨木市立川端康成文学館蔵・未発表小説「星を盗んだ父」について」も行ったが、新たな情報は一切寄せられなかった。

原稿は黒インクで書かれており、黒鉛筆書きの訂正部分も川端初期の筆跡である。一枚目の右上に「104」という赤鉛筆書きはあるが、いつの時点で誰が記入したか不明で、本文には校正の跡もなく、誤記と思われる箇所も多数残されたままである<sup>1)</sup>。ことから、未発表作品と考えられる。

#### 1 用いられている原稿用紙について

用いられている四〇〇字詰め原稿用紙は、枠が黄色で左下には「神楽坂山田製」とあり、「神楽坂」と「山田製」の間にスペースはない。武田勝彦「川端康成書簡」<sup>2)</sup>・浦西和彦「川端康成未発表書簡二十通―中河与一あて書簡十七通ほか―」や日本近代文学館『没後二十年川端康成展』(一九九二・五)等の図録に加え、川端文学館・日本近代文学館・八木書店にも協力頂いて、昭和初年代までで判明したものを年代順に整理して以下に列記する。

- ① 「松屋製」  
大正九年六月二日附  
川端岩次郎宛書簡
- ② 「文房堂製」  
同年一月二五日、二八日附  
川端岩次郎宛書簡二通  
一〇年一月八日附  
鈴木彦次郎宛書簡
- ③ 「新思潮社原稿紙」  
同年四月(日附不明)  
川端岩次郎宛書簡

- ④ 「ハタ印原稿紙」  
 一一年七月一八日消印、二〇日頃、  
 同年一月一日附 川端岩次郎宛書簡三通  
 一三年「新小説」三月号発表 「篝火」  
 同年「婦女界」七月号発表 「咲き競ふ花」(第一回)  
 一四年(推定) 中河与一宛書簡  
 一五年「若草」三月号発表 「現在と今後」  
 昭和二年六月七日 中河与一宛書簡  
 同年執筆(推定) 「生活の内幕」  
 三年執筆(推定) 「勤王の神」<sup>(4)</sup>  
 四年「若草」四月号発表 「花嫁姿」  
 六年「改造」七月号発表 「水晶幻想 鏡」(一二枚目まで)  
 同年 同前 「水晶幻想 鏡」(二三枚目〜三六枚目まで)  
 ⑨ 「神楽坂 山田製Y」 伊福部隆輝宛書簡(川端文学館蔵。全集未収録)  
 ⑩ 「牛込神楽坂下 山田紙店Y」 七年一〇月一日消印  
 ⑪ 「川端康成」(名入りの用紙) 八年「改造」七月号発表 「禽獣」  
 ⑫ 「牛込神楽坂下 山田紙店Y」 九年「中央公論」三月号発表 「虹」

⑪の「禽獣」の原稿は日本近代文学館所蔵だが、伊藤整「川端康成展」<sup>(5)</sup>(昭四四・三・一二)によれば、昭和四三年の秋、「東京の人」の原稿と共に古本市に「美しく装幀された完全なものとして出品され」、高価な下値がつけられて競売されたの



を館が努力して入手したが、川端は原稿に無関心であつたらしく、川端展の為に手に入れたかつた「伊豆の踊子」「雪国」「山の音」等の原稿も完全なものは見当たらなかつたという。今回の調査で確認できた資料はごく限られており、異なる用紙が併用されたことも考えられるが、川端は文房堂製(②)・ハタ印原稿紙(④)を比較的纏まつた期間用いた後に、山田紙店の用紙(⑦)⑩、⑫)を長期に亘つて使用するようになったとは言えよう。他の用紙は現段階では用例が少なく、どの程度継続して用いられたか不明で、例えば⑤は湯ヶ島温泉から出されており、この年の大半を過ごした同地で入手した可能性もある。山田紙店に直接うかがつたが、先代は死去され、戦前の資料も焼失したとのことで、同店から有効な情報は得られなかつた。しかし「星を盗んだ父」で用いられた⑦は⑧に先行する型のようで、後述する大正一三年八月一九日附の川端宛片岡書簡も⑦と同型であることから、大正一三年夏には流通していたと確認できる。

## 2 原作者名「フェレンク・モルナー」の表記について

原稿用紙と共に注目されるのが、原作者名の表記の仕方である。「築地小劇場」昭和二年一〇月号の「モルナル雑話」(本文は無署名。目次には「蛇頭生」とある)に、「日本の某翻訳家はフェレンクと読んで平然としてゐた。近頃ようやくフェレンツと書いてゐた」とある。ここで揶揄されているのは、大正一三年六月刊行の『白鳥』(金星堂)において「リリオム」を初めて邦訳した鈴木善太郎で、管見によれば、川端が用いた「フェレンク・モルナー」の表記は同書刊行時に初めて見られたものである。それ以前の他の訳者・紹介者は、森鷗外が「フランツ・モルナル」、小山内薫、若月紫蘭、山中静也が「フランツ・モルナア」(小山内演出の「悪魔」は「モルナル」と紹介されている)と記しており、後述するように鈴木関係であっても『白鳥』刊行前には「フェレンク」の表記は見られず、表記自体も揺れているのである。

『白鳥』が評判となつたことは後述するが、その刊行後も、書評や広告等は書名の表記に倣っているものの、「フェレンク・

「モルナー」の表記が一般化してはいない。『愛の劇場 演劇論集』（彩雲社、昭二・五）では「フェレンク・モルナア」を用いていた鈴木も、「モルナル雑話」で指摘されていたように、七月刊行の第一書房『近代劇全集第三八巻 中欧編』には「フェレンツ・モルナア」作として「リリオム」等三篇の訳を発表、以降はこの表記を用いなくなっている。後の類似例には「フェレンク・モルナル」「細君恋愛犯罪探偵術」（新青年編輯部『新青年叢書五 近代恋愛術』博文館、昭四・七）、萩原雅之「フェレンク・モルナル」（『丸』昭二四・一一）の二例が見られた程度である。演劇や翻訳文学に強い関心を持ち、築地小劇場とも近しかった当時の川端については後述するが、先のような指摘のあった表記を後々まで用い続けたとは考え難い。ごく限られた時期・範囲でしか見られない「フェレンク・モルナー」の表記を用いた「星を盗んだ父」は、大正一三年六月から昭和二年頃に執筆されたと考えられる。そしてこれは、前節の推測とも合致するのである。

### 3 「翻訳全盛時代」とその急速な失速

『白鳥』が刊行された大正一三年、川端は四月に創刊された「世界文学」を時評で批判的に取り上げ、「新潮社、春陽堂、金星堂等が、大々的に海外文藝の翻訳の叢書の出版に着手し、翻訳全盛時代を現出しようとする文藝界の時潮」に言及している。その「世界文学」五月号「出版月報」にも、「弊堂が翻訳専門の雑誌を創設した事を始めとして、他に類似の雑誌も二三」あり、「近時刊行される単行本はその七割程は海外文学の翻訳」とあるのだが、同誌は早くも九月号で終刊した。実は翌大正一四年度は「出版界が不況のために、この上もなく逼塞したといふ中にも殊に翻訳物は、更に売れなかつた」、「訳者が原稿を仕上げても、景気の出るまでは原稿のまゝ寝かしておくといった有様で、いつか世に出されてもいゝ筈のものが、どの位、そのまゝ出版屋の手に保留されてあるか分らない」、「出版書肆が、商策の上から、刊行を見合せるのは止むを得ない」（『文藝年鑑』二松堂、大正一五・二）とも記されるに至ったのである。

大正期の「シリーズのかたちにはならなかったアンソロジー、合著」に照明を当てた紅野敏郎は、「叢書・文学全集・合著集覧」<sup>(9)</sup>や『大正期の文芸叢書』<sup>(10)</sup>では中絶した叢書等も多数挙げており、これらを参照すれば、「七〇巻をくだることはない」と宣伝していた新潮社の『世界文藝全集』も三二巻まで（大九・一一〜一五・一〇）しか確認されておらず、一五〇冊の予定だった『海外文学新選』も三九冊（大一一・三〜一五・一一）しか出なかったとわかる。金星堂の叢書については後述するが、『春陽堂訳述叢書』も、佐佐木味津三訳述『サアニン』（大一一・九）の巻末には、「名著傑作二十五篇を選んで『文藝春秋諸作家』が訳述するとあり、裏表紙の広告には石濱金作・今東光・酒井真人等による一二冊を予告している。ここに当然挙がっていないはずの川端の名が見えないのは、後述の『さようなら』を刊行予定だったためかとも推測されるが、以下続々刊行とあった同叢書も、今回の調査で確認できたのは大正一四年二月刊行までの一一冊だった。

以上、原稿用紙・原作者名表記・出版状況から、「星を盗んだ父」は、大正一三（一九二四）年六月の『白鳥』刊行後程なく、「翻訳全盛時代」と謳われた頃に叢書等の原稿として執筆されながら、その後の翻訳物に著しかつた出版不況で出版社の手に保留された可能性が高いと考えられる。大正一三年後半頃からの出版ビジネスの急速な失速と、その後の円本ブームに注目した山本芳明も、「大正十五年と昭和二年の間には大きな断層が存在している」と指摘しているが、次章では「リリオム」を主としたモルナール（煩雑になるので、以下は引用等を除いて作者名は現行のモルナールで統一する）の当時の受容状況も踏まえつつ、大正末頃までの川端を考察することで、「星を盗んだ父」執筆の背景を探ってみたい。

## 二 執筆の背景

1 「リリオム」の原型・森鷗外「破落戸の昇天」と学生時代の川端康成

「リリオム」は、明治四二（一九〇九）年一月七日にブダペシュトで初演された。その真価が認められたのは大正三（一九一四）年のベルリンでの上演以降だったと言われているが、それ以前に森鷗外は「昴」大正元（一九一二年）八月号に短篇「破落戸の昇天」を発表しており、これがモルナールの初邦訳となった。当時既に「破落戸の昇天」はドイツ語訳が刊行されていたが、いち早く鷗外が訳出したのは、「リリオム」の原型と知って翻訳する気になったのではないかと推測されている。<sup>(12)</sup> 鷗外は翌大正二年にもモルナールを「三田文学」に訳出した（「最終の午後」五月号、「辻馬車」六月号）他、田中栄三編『近代劇精通』（靱山書店、一二月）に未刊の小山内薫訳『悪魔』の梗概も紹介した。<sup>(13)</sup> やや遅れて小山内も、「新小説」大正三年一〇月号で『悪魔』の作者としてアメリカにまで聞こえている「モルナールの短篇を鷗外が訳していると言及した上で、ウイーンで見た「狼の話」を紹介、大正四年四月には無名会で「悪魔」の演出を手がけ、若月紫蘭「新劇壇の一年」（『帝国文学』一二月号）でも東儀鉄笛を中心とした無名会の活動の一つとして取り上げられた。

一方川端はまだ茨木中学に在籍中であつたが、既に大正二年には小説家を志望して文芸雑誌等を読み漁るようになっており、中学時代の「当用日記」や「生徒日誌」には、鷗外を「現今十二文豪」に選んだ（大四・一・二二）、鷗外は「相変わらずはつきりとよい」（大五・五・一六）といった記述が散見され、投書も試みるようになっていた（後述、第Ⅱ部第一章）。「破落戸の昇天」を収録した鷗外の『諸国物語』（国民文庫刊行会）が刊行されたのは大正四年一月であるから、同作も読んだ可能性は高い。また、「独影自命」（新潮社版一六巻本全集「あとがき」（昭二三・五〇二九・四）を纏めたもの。第Ⅲ部第二章一 **075 福永武彦** 宛参照）に引用された「大正五年十二月三十一日の歳晩感」には、（文学志望の）「私の希望に好意を持つてゐてくれるらしい義愛従兄（筆者注、秋岡義愛（明二三〇昭四七））。後述、第Ⅱ部第一章、第九章二）の紹介で、三田の新進南部修太郎」と文通をなし得たと特筆されており、その文通の様子は「大正五年当用日記」「大正五年ノート二」「故郷 南部修太郎氏に」<sup>(14)</sup> にかがえる。南部のことを書いた後年の「最初の人」（昭一一・八）には、南部の影響で一時は志望

も三田の文科へ変更し、「三田文学」にも親しみを覚えたとも記されており、文学熱も加速していたようだ。

大正六年三月に受験の為上京した川端は、九月に一高に入学する以前、中学時代の友人正野勇次郎宛六月二五日書簡には、<sup>(14)</sup>五年程かけて熊王丸という戯曲を書きたいと記しており、既に戯曲への強い関心が見られる。一二月の「自由日記」には、「例の通り特等席に入つて」日本館で歌劇を観て、自作が上演される「華々しい空想」をしたり(二日)、読了したばかりの「罪と罰」に感銘して「日本のものに多く目を曝してゐた馬鹿らしさを初めて痛感させられ」、小山内の「泰西名篇の上演につき島村抱月氏に質す」(「中央公論」一二月号)を読んで、「理論上正しいに違いなからう」と思う(二八日)一方で、「殆ど文芸劇を見た最初と云つてよい」芸術座の「生ける屍」(一〇〜十一月)に接した時の「熱情的に劇の研究を思ひ立たされた」感動も振り返ったりしたことが綴られている。野末明が当時の川端の観劇体験等も詳細に辿っているが、この時期に川端が演劇を志し、海外文学に目を開いていたことに注意したい。

大正九年九月に川端は東京帝大英文学科に入学、「鷗外も、大学時代、いや、その後もえらいと思つて読んだ」と後年振り返っている(「作家に聞く」昭二八・三)ように、「読書ノート」には、鷗外の「還魂録」(八月二三日)、「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」(十一月一日)に続いて「諸国物語」(一六日〜二一日)の記録もあり、初読か再読か不明ながら、モルナールの「辻馬車」「最終の午後」「破落戸の昇天」も二一日に読んだと確認できる。以降の日記類からも、鷗外の「十人十話」等の翻訳や英文によって、海外の作品も積極的に読んでいることがうかがえる。

## 2 川端岩次郎宛書簡(大正九年一月二五日附)が提示する問題

「破落戸の昇天」を読んだ当時の川端を考察する際、見逃せないのが、川端の中学の時の後見監督人川端松太郎(大九・五・六没、享年五七。後述、第Ⅲ部第二章一〇〇川端義一宛参照)の妹婿・川端岩次郎宛同月二五日附書簡である。岩次郎(明

七・六・一一（昭二九・一一・三）は川端の祖父所有の家屋敷を買い取って移り住んだ人物で、主家の「康成を自家にとつて大切な人と心得、学生時代の川端に手紙をやったり、お金を用立てたりした」とされる。<sup>(16)</sup>「驚くべき浪費家」（大正六年 自由日記「一二月五日」とかねてより自認していた川端は、「口癖のやうにこの頃云つてゐる通り、ほんとに何か翻譯でも引き受けて金を手に入れないと切りぬけられない」（大正九年日記「三月一六日」といった経済的な逼迫状態を慢性化させており、岩次郎宛書簡の大半は借金を申し込むものだが、特に同書簡で注目されるのは、「芝居の方にも小説の方にも出世の糸口」が見つかったとして、「松竹合名会社研究員」に大学の推薦でなった、「二月以後は「新思潮同人」といふ肩書で翻譯その他」により損失を補う決心であると記している点である。

【演劇との関わり―松竹合名会社と帝大劇研究会―】

まず問題となるのは「松竹合名会社研究員」<sup>(17)</sup>という記述で、北村喜八「大震災前後―劇と評論十二年史」（「劇と評論」昭一二・七）によれば、当時松竹では「新しい劇作家を養成しようとして給費生といふ制度を設けて、月々いくらかづつ呉れた、「何人位つくつたのか明瞭な記憶はないが」仲間では田中總一郎がその一人だったとある。大正一〇年一月八日附鈴木彦次郎宛川端書簡に「松竹から舞台稽古を觀に来られよと云つて来たさうで御座いますな。上京早々勢揃へして觀劇したいもので御座いますな」というのもこれに関係していると考えられる。後年の今東光「今東光の文壇巷説」（「噂」昭四六・一一。後『毒舌文壇史』徳間書店、昭四八・六）には、川端の提案で希望者を募つて月に芝居を一、二回立見に行つて劇評会をやっている内に、メンバーを無料招待してもらおうとやはり川端が提案し、二人で松竹に行つて自分が交渉したとも回顧されている（『十二階崩壊』（中央公論社、昭五三・一）では「新思潮」創刊の頃が描かれているが、今独特の誇張も多い）。

松竹キネマ合名会社は大正九年二月創立、四月に松竹キネマ俳優学校を開設し、この一一月に松竹キネマ研究所と名称を改め、所長を小山内薫とした。林靖治編『女優事始め』（平凡社、昭六一・一二）によれば、映画芸術への道をめざす俳優学

校と商業的映画作りを主張する蒲田撮影所とは相容れず、小山内が大谷竹次郎理事と相談の上、本郷座内に移って実際の制作活動による実験を始めたのがこの研究所である。小山内総指揮により外国映画の影響を強く受けた第一回公開作品「路上の靈魂」(大10・四・八封切)以下三作が作られたが、世界恐慌と営業方針から大正10年七月末に解散し、小山内は同社顧問となった。「(研究員として)来年あたりから腕次第の仕事をします」と先の書簡に記していた川端だが、「路上の靈魂」プログラムに掲載された松竹キネマ研究所研究生一四名の中に川端等の名はない。キネマ合名会社の研究員・給費生とは別なのか、封切前に川端等は研究員ではなくなっていたのかは不明である。

川端「文科生の頃」(昭六・九)では帝大劇研究会を振り返って、小山内や土方与志も時々顔を出して指導していた、清野暢一郎が主事で北村喜八や田中總一郎もいて、自分や鈴木彦次郎、石濱金作など新思潮の同人も学生控室の例会に出席し、座談会だけでは物足らず、試演をすることになった、岡田嘉子が「髪」とかいう一幕物で北村と共演し、これを題材にしたのが「文科大学挿話」(大15・五)だったと回想している。ここに名の挙がった北村、田中、鈴木、石濱や後述の酒井眞人は、川端とは英文学科の同期である(但し、川端は一年六月に国文学科へ転科)。また「文壇波動調」(大13・一一)では、夭折した旧友江崎孝夫は、三高時代から田中等とエラン・ヴイタル座を起し、田中、清野、北村等と帝大の劇研究会で活動し、花柳章太郎等と共にダンセニイ劇の舞台に立ったとも記している。

先の試演の日程や演目は文献によって相違しているが、試演当時の「読売新聞」(大10・六・二三)に清野が発表した「帝大劇研究会に就て」<sup>(19)</sup>には、六月二二日から二四日の三日間、演目は他に秋田「二十一房」・北村「狂人を守る三人」とあり、劇研究会は本年二月極少数の同志が作り、研究も実演も行うつもりで、大学所有の小劇場建設さえ考えているとも記されている。また、北村の回顧によれば、会を起したのは清野や江崎孝夫等で次に田中や自分等が入った、その頃は殆ど具体的な活動をしていなかったが、新劇運動を起こそうとして教授連の賛同を求めたり、趣意書を送って寄附を求めたりし

て、大正一〇年六月の第一回試演は「二日」続けて満員にし、川端は会計係をした、秋には第二回の試演も計画していたが実現せず、新学期と共に会は法科を中心とした鑑賞主体のものに変わったという。秋庭太郎『日本新劇史（下）』（理想社、昭三一・一一）によって補足すれば、顧問は小山内薫・秋田雨雀・山本有三、岡田は帝大初の演劇運動だった吾葉会第一回私演（大八）が初舞台で、工藤正治『岡田嘉子 終りなき冬の旅』（双葉社、昭四七・一〇）には、童話劇協会が四ツ谷の実業家梅田邸内に借りていた稽古場で岡田が秋田雨雀「埋もれた春」の立稽古をしているところに、北村・川端・鈴木らが吾葉会の先輩達に倣って試演の出演依頼（清野訳、レビン「詩と散文」）に來たとあり、この時のことが前述の「文科大学挿話」の冒頭に活かされていると分かる。尚、野末論が大正一〇年六月二四日の試演の日の日記として引いているのは一一年の同日（土曜）のレコード・コンサートの日のもので、川端自身が「独影自命」に引用する際に「新思潮」のコンサートと誤って説明を加えているが、同日記によれば、試演と同じ青年会館で催され、小山内が講演している。牛原虚彦によれば、土曜にはよく小山内主催のレコード・コンサートが催され、小山内が解説し、手伝った者にひそかに小遣いも渡していたという。

後に川端は「新思潮」の歴史を概観して、小山内を中心とした第一次は近代劇の紹介につとめ、第二次は自由劇場の運動と呼応するところがあり、第三次、第四次の同人の多くも先づ戯曲を書いたと記し、<sup>(21)</sup>「早稲田の人たちは戯曲をほとんど書かず、「新思潮」の人たちは多く戯曲を書いた<sup>(22)</sup>」とも述べている。岩次郎宛書簡にも記していたように、第六次「新思潮」創刊を企てた川端等も、芝居と小説の両面での活動を考えていたようである。実現はしなかったが、その創刊号の「同人雑記」には、石濱と鈴木と思われる二人が、「近いうちに脚本号を出したい」、嘘でない証拠に今東光が一幕物を書き、「川端も「転生」を書いている最中だ（X）」、「酒井は映画劇を書いている（Y生）」とある。

川端が大学を卒業したのは大正一三年三月だが、『白鳥』も刊行された六月には築地小劇場も創立され、小山内・土方に誘われてその文芸部に入った北村は、翻訳劇を次々と上演するに当たり、英語とドイツ語の書を主として「海外の新戯曲と新



しい演劇研究書の目ぼしいものを残らず」読んだという<sup>(23)</sup>。後述するように、鈴木訳「リリオム」の上演(大一一五)に続いて、昭和二年には築地小劇場も小山内訳による「リリオム」(六月)「悪魔」(九月)を上演し、一〇月に刊行された近代社『世界戯曲全集 第二二巻中欧編』にもモルナール作品四篇(小山内訳「悪魔」「リリオム」、北村訳「赤い粉碎機」「硝子の上靴」)が収録された。川端は「築地小劇場」(大一一四・一)に推薦文「ほかの芝居は見ない」を書き、後の「日本古典の感覚美を嘆賞」(昭七・一・一一)でも、「学校時代にはロシア作家の全盛時」で、「イプセン、ストリンドベリーもよく読んだ。」「築地小劇場で上演されたものもみたから特に思い出深い」と語っているが、演劇に積極的に関わっていく中で北村や小山内等からも刺激を受けつつ、同時代の海外の文学への関心を高めていたことは、「リリオム」翻案の背景を考える上で重要である。

【第六次「新思潮」の継承―菊池寛との関係―】

次に「新思潮同人」といふ肩書で翻訳その他で損失を補う」という点だが、一高時代に川端が「校友会雑誌」(大八・六)に「ちよ」を発表したことは知られているものの、従来の研究では「水蛇」<sup>(ハイドラ)</sup>という雑誌の創刊を企てていたことは看過されてきた。「大正九年 日記」には、酒井眞人から聞いて鈴木、石濱と共に同人になり(二月五日。四人は二年に進級した八年九月から一高の寮で同室の和寮一〇番になっていた)、酒井と話して「いよいよ集つただけの原稿で初号を出す手筈をすゝめる事に決」し(三月三十一日)、「水蛇」について酒井、石濱と話をした(四月六日)とある。

この九年秋には、「新思潮」継承を菊池から認められた。中富坂の家へ石濱、鈴木、酒井と行って菊池に初めて会ったと川端は繰り返し書いているのだが、鈴木「新思潮前後」(「太陽」昭四七・八)には、十月のある日、湯島サロンで新雑誌の題号を相談していたところ、偶然合った菊池から、つまらん名を付けるな、本気にやるなら新思潮を譲ってやると言われて翌日家を訪問したとある<sup>(26)</sup>。鈴木の回想文に先行する石濱「あの頃この頃」(「文藝春秋」昭七・一。同号は「十周年記念号」で、川端も「菊池寛氏の家と文藝春秋社の十年間」の一文を寄せている)では、一面識もなかった菊池宅を川端・今・酒井・鈴

木と五人で突然訪ねたとあり、川端もこの記述によって記憶を補ったのか、鈴木<sup>(26)</sup>の記憶間違い等なのか、いずれにせよ、発刊された形跡がない一高時代の「水蛇」が、東京帝大入学後間もなく、菊池の承諾を経て第六次「新思潮」として誕生したと推測される。尚、同誌創刊号の酒井「同人雑記」には、当初は暮に発行される予定だったのが延びて、第四、五次が創刊されたのと同じ二月一五日になったとあるが、一月の岩次郎宛書簡では既に二月刊行予定になっていたと分かる。

さてここで注意したいのは、翌一〇年の秋に「結婚の話があつて、生活に困るらしいので翻訳の口でも紹介してもらはうと」三、四ヶ月ぶりで菊池宅を一人で訪れたと川端が記していることであり、一〇年九月二十九日附岩次郎宛書簡では「文学界にも本年中に乗り出す考です。もう人の世話になつて居る歳でもありませんので、出来るならば近々から金取仕事を始めます」と漠然とした言い方だったのが、一〇月二一日附書簡では「此間から雑誌社や本屋にいろいろ相談してゐますが、あてはあつても火急の間に合はないのです。十二月頃から少しずつ売れさうです」と変わっている点である。伊藤初代との一件については後述する（次章五）が、一〇月の書簡は初代の父に結婚承諾を得るために盛岡へ行く旅費を借りようとしたもので、菊池宅を訪ねたのもその頃と推測される。しかし、その際に得たのは「翻訳の口」ではなく、菊池が「母之友」に連載中だった「慈悲心鳥」の代筆<sup>(28)</sup>の口で、日記にも「正月以来は全く感興寸毫もなき事柄を綴り居るなり」（大正一一年五月二日。この時に代筆中だった六月号で、連載打ち切りとなつた）等とあるように筆が進まず、菊池から度々催促も受けており、同作代筆中は、菊池が川端に他の仕事を積極的に紹介することはなかつたと考えられる。

菊池が「文藝春秋」を創刊したのは「慈悲心鳥」連載終了の翌一二年で、川端は一月号に「林金花の憂鬱」を発表し、二月号からは編輯同人に加えられた。また、一三年三月に「篝火」を発表した「新小説」は、菊池が春陽堂から編輯を依頼され、その下で斎藤龍太郎が担当するようになってから菊池の勧めで書いたと「独影自命」で回想しており、後の「古い日記」（昭三四・一〇）では、「婦女界」に「咲き競ふ花」を連載した（大一一・三七〜一四・三）のも菊池の推薦によるもので、菊

池に英語の通俗小説三冊も参考に借りた、稿料は一月百円で「書生一人の下宿暮らしには十分のはずであつた」とも明かしている。更に文藝春秋社の「文藝講座」第一号（大・一・三・九）「講座掲載予定」には、「川端康成氏の修辞学は、同氏の新しき研究で、仲々興味あるものと思つたので予定外だが次号から載せる事にした」とあり、第六号（同・一・二）<sup>(29)</sup>に川端の「文章学講話 現代作家の文章を論ず」が掲載されているのも、菊池の配慮によると思われる。

「だらしなく無心が続けて、その後の数年間は、菊池氏に養はれたも同然」とは「文学的自叙伝」（前述、注（27））の言葉だが、「月々僕からの援助がほしいのなら、文藝春秋の稿料をこめて、月額二十円位にきめてほしい」、「もつとも、昨夜云つたやうな仕事を手伝つて呉れれば、まとまってだしてもいい」という菊池書簡（大・二・一・一・二附）<sup>(30)</sup>と照らし合わせれば、「慈悲心鳥」以降も代筆等をしたと推測される。菊池の「受難華」（「婦女界」大・一・四・三・一五・一二）は横光が、「不壊の白珠」（「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」、昭四・四・二二）同・九・六）は川端が書いたと川端から聞いたと木村徳三が記しているが、菊池の児童物の再話・翻訳等の多くに代筆が混入していると言われている。<sup>(31)</sup>「星を盗んだ父」の場合は「川端康成述」と明記されてはいるが、初期の川端を考える上で、菊池との関係は、代筆や下訳、原稿の依頼・推薦、書籍の貸借等も含めた、より多面的な検討が必要である。

### 3 商業誌への執筆―水守亀之助・加藤武雄・佐佐木茂索との関係―

「十二月頃から少しずつ売れさうです」と一〇月二一日附書簡にあつた通り、「新潮」一二月号の評論を皮切りに、川端は商業誌に発表し始めた。「私の得た最初の原稿料」という「文章倶楽部」のアンケート（大・一・四・一）でも「新潮」に批評を一〇枚書いて一〇円貰つたと答えているが、これについて戦後の「独影自命」では、初めて原稿料を得た「南部氏の作風」は水守亀之助の好意によるもので、翌年「文章倶楽部」に小品翻訳（一月号「街道」）「Golsuway」、「Oasis of Death」ダン

セニイ。<sup>(33)</sup> 二月号「芝居から帰つて」チエホフ)を出したのは加藤武雄の、二月の「時事新報」に時評を書いたのは佐佐木茂索の好意によるものだったと明かしている。これは戦前の「文学的自叙伝」での、「無名弱少の頃」に受けた水守氏や加藤氏や佐佐木氏など「編輯者としての好意も忘れられぬ」という記述から一步踏み込んだもので、後年の「三十五年間」(昭三〇・四)では、「原稿のアルバイト」の道をつけてくれた加藤氏・水守氏、「文芸時評を私に初めて書かせてくれた」佐佐木氏、「よくこづかひをもらつてゐた」菊池氏と各々から受けた恩義を書き分けてもいる。

この四氏は、川端の文壇的処女作とも言える「招魂祭一景」(大正一〇年四月刊行の「新思潮」第二号に発表)を「多少賞讃せる文壇の士」として五月三日の日記に久米正雄等と共に列挙されており、「処女作を書いた頃」(大二三・六)にも「時事新報の学芸部にゐた佐佐木茂索氏と小島政二郎氏だつたかが」同紙に匿名で認めてくれたとあるように、「雑誌社や本屋にいろいろ相談」(前述、岩次郎宛書簡)する際、自作に注目してくれた人をまず頼つたとうかがえる。水守『わが文壇紀行』<sup>(34)</sup>にも、水守の『愛着』出版祝賀会(一〇年五月二四日)に久米が川端と石濱を連れてきたのは「読売新聞」で「招魂祭一景」を誉めた縁もあつてと思われ、後に二人は社へ原稿を売り込みに来て、川端は「論文風のもの」を書き出したが遂に完成しなかつたとある。

大正一一年の日記には「水守加藤両氏とも関係少し混雑して、去年の秋の如くならず。菊池氏とも去年の秋初代がことに初めて助けを得し時代とは稍間隙あるやう思はれて致方なし」(四月四日)とあり、「六月十日心覚えの借金」として「千代事件以後」「菊池氏より二百円以上」等は借金とは言い難いものの計六百円以上、「秋十月より月額以外の金、(原稿料文具十二円、新潮六十四円、時事十八円)」とも記している。当時は菊池の仕事を手伝って月々五〇円貰うことになっていたと「独影自命」で明かしているのは「慈悲心鳥」代筆の報酬と考えられるが、原稿料はこの時点では三カ所からしか貰っていないと確認できる。まだ六月の時点で「南部氏の作風」しか掲載していない「新潮」から六四円も得ていたのは、前述の「論文

風のもの」の前借分も含んでいると推測される。七、八月号に発表した「里見弴氏の一傾向」は四〇枚程度で、里見の技巧表現を論じたいと「去年の秋頃から」水守に約束しながら、途中から欲が出て「里見弴研究」として大がかりなものになって新年号から間に合わず、此一文はその一部分と断りがあったが、頓挫したようである。次に「新潮」に発表されたのは二年二月号の時評で、「里見弴研究」だった。これも川端から打診したようで、一月の日記には、水守から「返事」を得て、原稿の催促を受けつつ速達で送った経緯や、「加藤氏留守」で「水守氏に寄る」も、「余一人にて訪れしと知らば、何か例の仕事の要求か、金談と思ふべし」(一四日)と恐れていたこと等も書かれている。「新潮」には大正一二年も評論を二回書いたのみで、同誌に創作が初めて掲載されたのは大正一四年二月号の「落葉と父母」だったが、戦後の昭和二三年一月三十一日水守宛書簡にも初めて原稿を買って頂いた頃を思い出すと記し、水守の葬儀(昭三三・一二・一九)には胆石で入院中だったにも拘わらず参列する等、川端は水守に感謝の念を長く持ち続けていたようである。

「文章倶楽部」の加藤には「近火」を預けていたことが、「発表方督促も気が咎む」とある大正一一年六月二三日の日記からわかるが、同題の小説は後に「随筆」の大正一五年八月号に発表されており、先の翻訳の次に「文章倶楽部」に掲載されたのは一一月号の評論だった。一年の「新思潮」に川端が発表した小説は三月号の「一節」のみで、<sup>(36)</sup>評論も前述のもののみだった。翌一二年には前述したように「文藝春秋」が創刊し、「新思潮」も七月に復刊、「文章倶楽部」には四月号に最初の小説「男と女と荷車」も発表されたが、他の新たな執筆先は容易に得られなかったようだ。

#### 4 大正一〇年四月、「MERRY-GO-ROUND」の腹案

大正一〇(一九二一)年四月、ニューヨークにおけるシアター・ギルドの「リリオム」が大評判となり、やがて世界各国の劇場がこぞってこれを上演するようになった。シカゴ在住の山中静也によって、「匈牙利劇作家モルナア氏の紹介」ジ

エー・ツエベエニエイ」の記事が訳出されたのは、その二年後の「文学世界」大正一二年七月号である。川端は同号の小説を月評で取り上げており、山中の記事―「妊娠中の妻を打擲し、子供の為に金を盗まんと企てて死に、天国から星を盗んで其児に与えた無頼漢」の話「リリオム」は、妊娠中の妻に暴力を振るい、離婚後に愛児が生まれたモルナアにとつては「氏自身の血を持つて描いた懺悔でもあつたに違ひない」等―も読んで、鷗外の「破落戸の昇天」と「リリオム」との類似性に遅くともこの時点では気付いたと推測される<sup>39</sup>。

ここで注意したいのは、既に「大正十年・大正十一年日記」に「十年四月〔予定〕腹案中」として、先の「転生」と共に「MERRY-GO-ROUND」楽行周」が掲げられ、「公園は大変な人出なり。メリイ・ゴウラウンドの娘は居らず」（五月一日）、「夕飯後公園に廻る。仲見世裏曲馬のあとは玉乗に改修中。楽行周のピアノひき今日は銀杏返し。ニコニコ遊樂園出来てゐる」（同四日）と記されていることである。「リリオム」を原作とするミュージカルが「CAROUSEL（回転木馬）」の題で広く親しまれるようになるのは戦後のことで、「破落戸の昇天」には回転木馬も星を盗む話も出てこないのだが、川端の「星を盗んだ父」の文中には、リリオムとユリイが会おう「廻転木馬」に「メリイ・ゴウ・ラウンド」と特にルビが付せられているのも目に留まる。既に松竹研究員を経験し、「新思潮」同人達と劇研究会にも参加し始め、翻訳等によって収入を得ようとしていた川端が、山中「モルナア氏の紹介」以前の大正一〇年四月の段階で、ニューヨークで評判になって国際的な評価を得つつあった「リリオム」にいち早く着目し、「MERRY-GO-ROUND」の執筆を企てた可能性は十分考えられる。小山内等との接点が幾重にもあった川端周辺では、青年会館で稲田稔等の「最終の午後」が上演されたり（大正一〇・二・一六）、山中以前に田中總一郎も海外でのモルナール上演に言及したり（「朝日新聞」大正一一・五・六）している。「林金花の憂鬱」は「浅草〔公園〕景物記稿」なる長文」と「日記」（大正一一・一・二）にあり、「浅草公園を背景」として「活動小屋の女給とか、曲馬娘、玉乗娘とか、卑しい女ばかり出る長い奇妙な小説」を書こうと思っていたと「大火見物」（大正一一・一一）に記した

りしていることから、「MERRY-GO-ROUND」もそうした浅草物の長篇の一部とも思われるが、「文学的自叙伝」に「銀座より浅草が、屋敷町より貧民窟が」自分には「抒情的」、「浅草のけちな小屋のいんちきな見世物に片つ端から興味を持ち、初めて褒められた「招魂祭一景」は曲馬娘、「文藝春秋」創刊号の小品「林金花の憂鬱」の林金花は蒟蒻少女、一高生の時に流しの藝人と歩いたのが「伊豆の踊子」で、行きたいのも「東方の亡国」と記し、後年の「浅草紅団」について（昭二六・五）でも、受験勉強で上京した「田舎者の私には浅草が異常な魅力」で、浅草蔵前の従兄の家に居候し、神田の予備校に通う傍ら浅草公園へ通い、高校時代は浅草オペラの時代を体験し、大学の前半は浅草の鳥越に下宿し、その後も浅草通いをしたと回顧する川端であるから、腹案中の「MERRY-GO-ROUND」も遊園地の客引と若い女中の「リリオム」の世界に通じるものだったろうし、愛読した鷗外の訳した短篇と同工の「リリオム」の梗概を知れば強い興味も持ったと思われる。

5 鈴木善太郎訳『白鳥』（大正一三年六月）刊行前後—金星堂との関わり—

大正一三年、二月には石川欣一が「フランツ・モルナア五篇」を収録した『パイプをくはえて』（大阪毎日新聞社）を刊行した。その「序」には、重訳は大嫌いだが、モルナアが好きなのと、ハンガリー語を知らないのと、この男が一向日本で知られていないのと、重訳を余儀なくさせられたとあり、モルナールの知名度は日本ではまだ低かったことがうかがえる。

同年六月に刊行されたのが、「リリオム」「痴人の愛」を併録した前述の鈴木訳『白鳥』である。同書を出版した金星堂は「震災後、新興の文学、演劇、美術がクロスする中心的な場」であったとして、曾根博義「出発期の金星堂—『文藝時代』終刊まで<sup>(40)</sup>」は、金星堂がこの年の四月から「世界文学」、五月から『先駆芸術叢書』、一〇月から「文藝時代」を刊行していることにも注目し、同社が果たした役割を詳察している。「独影自命」にも「横光利一・今東光・中河与一らの新感覚派の人々や、佐々木味津三・金子洋文・稲垣足穂・佐佐木茂索等の処女作品集もみな金星堂から出た。いづれも私の『感情裝飾』より

先きである」と記されているように、川端の処女作集『感情装飾』（大15・6）や次の『伊豆の踊子』（昭2・3）も同社から刊行されており、それぞれ三五篇中一三篇、一〇篇中三篇の初出は「文藝時代」だった。

「文藝時代」発刊の経緯については、川端も「独影自命」で同人の書簡を引用しながら辿っており、八月七日川端宛横光書簡の時点で川端・片岡が編集を担当すると決定している。同月九日附佐々木味津三宛書簡には「今度の雑誌の責任を自分で大半負はねばならぬ如何してなつたのか」分らないと漏らしつつも、一五日附同書簡では前日に片岡と創刊号の方針を立てたとして主要記事を伝えている。大正七年に金星堂を創業した福岡益雄によれば、「文藝春秋」を通じて川端らと親交を深め、金星堂の編集部には中河がいたが、「文藝時代」の名前の発案も、発行元になってくれと相談を持ちこんだのも川端で、当時川端は洋服を買うゆとりがなくてまだ学生服を着ていた、片岡と二人で金星堂に顔を出して編集に夢中になり、「会えば文学談義で、外国の新しい文学に対するあこがれは実に強烈」だったという。<sup>(41)</sup> 震災の翌年、社屋は現在の神保町に建築されたが（六月一日移転と、「世界文学」六月号巻末にある）、番頭格であった門野虎三も、二階一二畳の編集室では「文藝時代」の同人会編集会議も全て行われ、「新鋭の作家たちのクラブのような観を呈していた」と証言している。<sup>(42)</sup> 川端・片岡が第三号まで編集を担当した「文藝時代」は、同人の輪番制を経て昭和二年三月号から金星堂の飯田豊二編集となり、五月号で終刊した。同人による「合評会」には福岡も第一回（大15・3）から加わっているが、川端の「入京日記」（同・5）には金星堂に行つて石濱や飯田と夕方まで玉を突く、<sup>(44)</sup>「上京記」（昭2・5）にも金星堂の東野と阿佐ヶ谷に行き、横光も一緒に家を捜して貰うとあるように、金星堂とは公私にわたる付き合いがあった。

「世界文学」の文学的評価については疑問もあるが、その月報等は当時を知る参考になる。以下関連記事等を挙げると、

四月創刊号\*『先駆藝術叢書』広告。「四月中旬発売予定」の三冊の他に<sup>(45)</sup>「二十七冊以下続々刊行」として、鈴木訳、フラン



ク・モルナア『リリオム』も予告。

五月号\*鈴木訳、フランツ・モルナー「暇乞ひ」及び鈴木「匈牙利の国民的詩人モルナー」を掲載。後者には、「先年「リリオム」が紐育で出版された時、著名な通俗小説以上の売行を見た」とある。

\*土屋長村による月評で、「蒼穹」掲載の本田松治訳、モルナー「横つ面二つ」が取り上げられる。

\*月報の「出版近事片々」で、近刊の鈴木『白鳥』が「フランツ・モルナア最近の傑作集」として言及され、『先駆藝術叢書』の『リリオム』は、鈴木訳、フランツ・モルナアの『良人の正体』（第八編）に差し替えられる。

七月号\*六月発売の『白鳥』見開き広告。「欧米の各劇場は数年間に亘りて熱狂的大入りを続けた」、「佐藤春夫氏は本書の刊行を激励し、モルナーの翻訳ならば自分もやりたいとまで言はれた」とある。

八月号\*「月報」で、「七月と八月とは何処とも出版を休む例」なので、九月になれば『良人の正体』を刊行する他、「秘密裡に着々計画を進めてゐるものが、十指に余る程ある」と言及。

九月号（同号で終刊）\*「出版消息」で、『白鳥』は「谷崎潤一郎氏、佐藤春夫氏、菊池寛氏等は、銷夏の旅行にわざわざ本書を携帯され、尚、原作の秀抜なると、訳筆の流暢なるとを賞揚された。中にも「リリオム」の如きは悪魔的な無頼漢を取材として、童話的な愛すべき表現を以つてした」と喧伝。

\*「文壇消息」で、「リリオム」が一〇月頃から築地小劇場で上演されることになったとお知らせ。

\*「編輯だより」には、「外国文学の翻訳が、今怒濤の如く殺到しつゝある」が中には杜撰なものもある、本誌は来月から直接経営となって面目を変えたとある。

「朝日新聞」（七月二二日）の『白鳥』広告にも「本書を台本として近日東都に上演の予定」とあったが、後述するように鈴

木沢「リリオム」の上演が果たされたのは大正一五年六月の近代劇場で、築地小劇場では昭和二年に小山内訳で上演された。その間、一四年八月には『白鳥』を三分冊した『フェレンク・モルナー傑作選集』（第一輯が「リリオム」）が刊行されているが、これは、当時よく見られた残部処理による販売と推測される。「文藝時代」同年九月号の裏表紙の同書広告には、モルナーは「今や世界劇団の寵児」、「本邦でも」文壇の人々が競って激賞として先谷崎・佐藤・菊池の名を挙げ、特に「リリオム」はモルナーの諸作中随一、「粗野の涙と愛に充ちた悲喜劇」と紹介している。尚、『先駆芸術叢書』鈴木訳の第八編はユージン・オニール『獣物』（大一四・五）に差し替えられ、『先駆芸術叢書』自体も一二巻に縮小されて大正一五年一月に完結した。

## 6 二冊の幻の著、川端康成訳ジョン・パリス『さようなら』と川端康成『驢馬に乗る妻』

ところで、『白鳥』刊行直前の大正一三年四月には、「川端康成氏 ジョン・パリスの「きもの」の姉妹篇「さようなら」を訳了 春陽堂から近刊」と、「読売新聞」よみうり抄（二七日）や「朝日新聞」学芸だより（二八日）に報じられている。実はこの川端訳『さようなら』は、宗像和重編「よみうり抄による新感覚派日録—大正13年〜昭和2年」<sup>(47)</sup>にも『さようなら』は六月京文社刊。ただし訳者は若柳長清。川端訳については未詳」と注があるように（正しくは若柳訳は『さよなら』、「星を盗んだ父」と同様に活字化されなかったようだ。前年の一二年八月に刊行された若柳訳『きもの』（京文社）の方は、その「序」に、原著の刊行は一昨年の四月だったが「発行忽ちにして数十版を重ね、一躍英国第一流の人気小説となった」とあり、若柳の訳本も新聞に大々的な広告やその反響が何度も掲載され、話題となっている。その姉妹篇『さよなら』の原著が刊行されたのは大正一三（一九二四）年で月は未詳だが、おそらく前著『きもの』の売行き等に注目していた川端はすぐさま姉妹篇翻訳に着手したのであろうが、前作と同じ訳者・出版社で『さよなら』が刊行されることが明らかとなり、川

端の訳本刊行は見送られたと推測される。六月七日の「読売新聞」掲載の『さよなら』の広告には、前冊（四六版五百余頁）を上回る七百頁近い大冊、「訳稿一千枚」、渡来した英国青年牧師の目を通して「浅草の白首、横浜のチャブ屋、田舎の廓の娼妓生活等の淫蕩な裏面」や「新しき女性」「聖者」其他日英両国の凡ゆる階級に亘る人物が描かれるとある。その『さよなら』巻末には、「『きもの』 問題の排日小説 参百式十版を突破す！」と前著も広告されたが、翻訳不況もあり、『さよなら』は『きもの』ほどの反響はなかったようである。

また、翌一四年五月二三日の「よみうり抄」には、川端の短篇集『驢馬に乗る妻』を文藝日本社から近刊と報じられたが、これも刊行されなかった。校正刷で読んだ伊藤永之介がその書評を「最近収獲二篇短評」（『文藝時代』大一四・一〇）に書いていることは長谷川泉に指摘があり、<sup>(49)</sup>「文藝日本社といふのは、私の父の進藤延が創立した出版社」という進藤純孝『伝記川端康成』（六興出版、昭五一・八）は、「文藝日本」は何号まで出たのか、手許には一五年の雑誌はなく、大正一四年一二月号には「『破産』を控へた雲行き」もうかがわれると記し、幻に終わった書として「文藝日本」の創刊号（大一四・四）に掲載された『現代短篇小説選集第五篇 驢馬に乗る妻』の広告も写真で紹介している。同誌では、川端の処女著作集に關して、次の五月号のみは書名が『孤児の感情』となつてはいるものの、「印刷進行中」（六月号）、「七月中旬発売」（七月号）、「九月上旬の発行予定」（八月号）と刊行予定が延期されながらも毎月予告されていたが、九月号以降は広告も出なくなつてゐる。九月二二日附川端宛尾崎士郎書簡には、「文藝日本社の印税はよほどしつかりと言質をとつておかれる方よろし 横光君なども本が出てから長い間印税をくれないと言つてへコたれてゐた」とあり、<sup>(50)</sup>横光からの書簡にも「印税の件、實際不埒だね」（一〇月。日附不明）、「菊池師は川端の本を（例のひつかかつてゐる本）僕が買ほふかなと云つてゐたが通知があつたか」（一二月一日）とある。この一二月の書簡を引用した「独影自命」で川端は、菊池が買おうかと言つた本とは「なんのことだつたかと思ひ出せない」と記しており、他の箇所でも幻の処女著作集に言及していない。これは「はじめに」で述べ

たように、「十六歳の日記」でさえ二年後には失念していた川端であるから、戦後の「独影自命」の時点では幻に終わった書のことを忘却していたと思われる。

大正一三年四月、爆発的な売れ行きを誇っていた話題書の姉妹編として大部の「さようなら」を訳すも刊行できなかった川端が、創作の傍ら次に取り組んだのが、世界的な名声を得、日本での初演も予定されていた「リリオム」の翻案であったと推測される。それは金星堂が「秘密裡に着々計画を進めて」（大一三・八）いた頃であったかもしれないが、殊に翻訳物に著しかった出版不況の中で、『さようなら』『驢馬に乗る妻』と同様に「星を盗んだ父」も日の目を見ず、出版社に預けたまま忘れてしまったと考えられる。

三 その特質―恋愛ドラマから「肉親の深い神秘的愛情」を焦点とした小説への改変―  
では、『白鳥』（大一三・六）刊行以後の「リリオム」受容史の中で、川端の短篇「星を盗んだ父」はどのような特質と意義があったのだろうか。以下、「リリオム」邦訳四種や英訳等との比較も踏まえて考察する。

1 戯曲「リリオム」の邦訳四種と小説「星を盗んだ父」の懸隔

「リリオム」の邦訳には、次の四者の訳がある。

① 鈴木善太郎訳、『白鳥』（前述）。『近代劇全集 第三八巻中欧編』（第一書房、昭二・七）等における訳は、これを一部改稿したもの。底本はシアター・ギルドで用いられた Benjamin F. Glazer による英訳台本「LILLIOM, A LEGEND IN SEVEN SCENES AND A PROLOGUE」（一九二二（大一一〇）・四・二〇初演。五月刊）。フルトン劇場で九ヶ月目の興業をしていた「無頼漢」も見たという鈴木<sup>(51)</sup>の訳は、日本での「リリオム」初演である劇団「近代劇場」創立一周年記念公演<sup>(52)</sup>（大一一五・

六・二六、二七。長谷部孝演出、金平軍之助・佐々木勝子主演。国民新聞社講堂）でも用いられた。金星堂「出版消息」（『世界文学』大一一・九）に「モルナルの翻訳に一生を捧げん」意気込みと報じられた鈴木は、後にモルナルの作品集八冊（第一書房、昭三・三〇・九・四）の翻訳も手掛けた。

② 小山内薫訳、『世界戯曲全集 第二二巻中欧編』（近代社、昭二・一〇）。小山内「解説」には、五月に築地小劇場で青山杉作が演出する時に作ったもので、「シアタ・ギルドの英訳台本」（前述）と「ピトエフ一座の仏訳台本」（一九二三・六）は大分相違していたが、概して優れていると思った後者に大部分は従い、下訳は高橋邦太郎に負うところが多かったとある。六月一日初日、友田恭助・山本安英共演。「リリオム」は友田の当り狂言となつて、築地座でも再演された（昭八・四・二九初日。伊藤基彦演出、田村秋子共演）。

③ 徳永康元訳、岩波文庫『リリオム』（昭二六・六）。原語からの初邦訳で、底本はブタペシュトのフランクリン社一九二三年版。飯島正は「英訳は、上演台本であるためか」過不足や改作等が相当目についた、「強気でやんちゃな、そのくせやさしい心情をたたえた無頼漢リリオム」を写すのに、鼻つばしの強い、そのくせ人情味のある江戸っ子弁を用いた徳永訳は、「浅草六区」に昔入り浸っていた自分にとっては殊更に懐かしく、「ブタペシュトの遊び場」もそのようなものではないかと想像されると記している（「凶書」昭二六、二三号）。新劇としては築地座以来二三年ぶりに文化座公演で用いられ（昭三一・一・二四初日、佐佐木隆演出）、二度再演された（昭四〇・二・二二、一九九八・三・二二初日）。

④ 飯島正訳、中公文庫『リリオム』（昭五一・一二）。同書の飯島「解説」によれば、一九二一年のフランクリン版原本を底本として、徳永の訳、「ベンジャミン・グレイザーの至って自由な英訳、イニャツイオ・バルラとアルフレード・イエリの忠実なイタリア語訳」を参照したものの。

大正一三年四月、川端は創刊された「世界文学」（前述）を時評で取り上げた際、「今日の文章界」は「洋文脈、或いは西洋

流の表現法が、新しく生きようとしてゐる時」だが、翻訳文には用語の乱雑不統一や句法の生硬、文法上の過誤等が見られる、翻訳家も母国の言葉や文章に感覚や良心を持ち、日本語と日本語を愛してもらいたいと批判した。その川端が翻案した「星を盗んだ父」を前記①④の邦訳と読み比べると、文体は異なるものの、表現は①鈴木『白鳥』訳に最も近い。例えば川端が「濃い緑色の空がくれて春の真珠色に輝いて来た。」としている箇所は、グレイザー訳では「The spring iridescence glows in the deep blue sky.」、②は「春の空が青く輝く。」、原語から訳した③④でもそれぞれ「春の空は透明な濃紺色に輝いている。」「春の空は、すきとおるダーク・ブルーとなつてかがやくのである。」となつているが、鈴木のみは二著共に「濃い緑色の空に春の真珠色が輝く。」と訳している。

「訳筆もまた精妙を極めて居る」（『読売新聞』大二三・八・九）と評価され、谷崎・佐藤・菊池も「訳筆の流暢なる」を賞揚した（前述、「世界文学」大二三・九）という①に対し、②は日本語が「かなり古風」で「現代人の気持とそぐはない感じ」を舞台に残したと、再演時ではあるが酷評もされている（辻久一、「劇作」昭八・六）。前述したような交わりもあつた小山内の訳に「星を盗んだ父」が先行していたか現段階では断定できぬが、直接的な影響の跡は認められなかった。川端の「星を盗んだ父」は、日本でも割合流布していたというグレイザー<sup>(53)</sup>の英訳を底本として、①の鈴木『白鳥』訳を適宜踏まえて文章が練られたと推測される。グレイザーの英訳及び①等の邦訳との比較から「星を盗んだ父」の特質を検討したい。

まず特筆すべきこととして、作品構成の大幅な改変が挙げられる。原作の「リリオム」は時間の流れに沿つた七場から成り、ベンジャミンの英訳や①②の重訳では、場がそれぞれ明示されている。①を例に挙げると、プロローグ<sup>(54)</sup>「ブダペスト郊外の遊園地」、第一場「遊園地内の寂しい場所」、第二・三場「ホーランダー写真館」、第四・五場「郊外の汽車道の土手」、第六場「天国の法廷」、第七場「ユリイの家」となつているが、僅か二二三枚、三段落に短く纏められた「星を盗んだ父」は、次のように語り起こされている。

寂しい片田舎の広場にある、傾きかかった小さい家にも春が来て、ささやかな花園が花を持つてゐた。よく晴れた日曜日であつた。花園の中のテエブルで母と美しい娘とが貧しい昼飯をしたためてゐた。テエブルもまた母子二人きりの寂しい食事にふさわしいやうな粗末なものであつた。(傍線引用者)

これに該当するのは「リリオム」第七場冒頭で、①では、

十六年後。広い、寂しい場所にある小さな、傾きかかった家、家の前には低い籬に囲まれた小さな花園がある。(中略)垣根の向うに田舎街が耕地の広い遠景の中に見えて居る。／春の晴れた日曜日。／花園の中に二人用のテーブルが置いてある。／ユリイとその娘のルイゼ、ヴォルフ、マリイ等が花園の中に居る。

と、リリオムが死んで「十六年後」、四人がいる場の設定が「上演台本」のト書きとして淡々と記されているのに対し、「星を盗んだ父」冒頭では、ユリイの友人夫婦の存在を消去し、傍線のように擬人法を加えて、「寂しい片田舎」の「母子二人きり」の「傾きかかった小さい家」の侘しさを強調する一方で、訪れたばかりの「春」と「ささやかな花園」とによって作品全体を仄かに暖かく、美しいものにしてている。この「花園」の語や「寂しい」場所という表現はいずれも原文には無く、鈴木訳「花園」の該当箇所は、ベンジャミン訳では「a tiny garden」、他の邦訳も「小さい庭」。鈴木訳「寂しい」はベンジャミン訳では「bare」で、川端は①に倣つたと推測される。「星を盗んだ父」では「寂しい」「片田舎の」「寂しい」「貧しい」「粗末な」「昼飯」「美しい娘」といった「リリオム」にはなかった形容も加えて、より主観的で流麗な文体となっている。

作品の特質を考える際に注意したいのは、戯曲を小説に翻案した「星を盗んだ父」では、原作の台詞を抽出してほぼ忠実に訳している会話文よりも、先の冒頭部のように、原作の説明的なト書きの内容を踏まえながら情景描写を工夫し、更には原作の台詞の内容も加味して独自の作品解釈を多々加筆している地の文の方に、作品としての個性がより認められることである。

先の冒頭部に続いて、母娘は「新しい仕事の話」をする。そこへ「青褪めた顔」の男が「黒装束の男」二人に付き添われて現れ、死んだ父親のことを話題にする。その時の母娘の心情について「星を盗んだ父」では次のように書きこまれている。

\* (母は黙つてゐた。) 娘の前で夫の厭はしい死に就て話したくなかつたのである。

\* (男が余り夫のことをしつこく聞くし、彼のことを知つてゐるらしいので) 母は余計なことを娘にはなされやしないかと不安を覚えたのだつたが、娘は何も知らずに云ふのだつた。

\* 娘は顔も知らない父親を美しい夢に描いてゐるのだつた。そして、この男が父を知つてゐると云ふものだから、いそいそと近づいて聞いてみた。

\* 無邪気な娘は嬉しさに (「それぢやお父さんは、〜」)

\* 聞いてゐた母は驚いた。娘が父親に対して描いてゐる美しい夢を、無惨にも叩き毀されるのは恐ろしいことだつた。

このように父に対して娘が描いている「美しい夢」(「夢」については後述)と、それが闖入者によって破壊されるのを恐れる母の心理とが追われている。「青褪めた顔」の男は娘に星を見せるが、この場面はベンジャミン訳では「Takes from his pocket a big red handkerchief in which is wrapped a glittering star from Heaven.」(①)では「リリオムはポケットから大きな赤いハンケチにつつんだ星を取り出す。ハンケチをとって、星をさします。星は光る。」で、他の邦訳もほぼ同様)だが、「星を盗んだ父」では「男はポケットから赤いハンカチを出した。包みの中からこの世ならぬ美しさできらきら輝く宝石の



やうなものが現れた。」と、「星」の語を用いず、直喩によって生き生きと描かれている。

「星を盗んだ父」第一段落（原稿用紙八枚）で名を与えられているのは娘のルイゼのみで、母娘と男の関係は伏されている。謎の男の内面は、娘を打った場面も「がっかりと絶望したようにうなだれた」（ベンジャミン訳は「LILLIOM, who bows his head dismayed, forlorn.」『白鳥』では「リリオムは気落ちして淋しく首を曲げる」と外から書かれたのみで、一切明かされていない。「打たれても痛くなかった」不思議を知る為めには、ルイゼがまだ生れない前、十六年昔の舞台に返らなければならぬ。」と、原作にはない文によって最初の段落は終わっているのである。

第二段落（原稿用紙一枚）では、「リリオム」の第六場までが過去として凝縮して語られ、謎の男と娘の母も漸くリリオムとユリイの名を得て三者の関係が明瞭になる。抄出された会話文以外は主に川端の解釈によるもので、これにより「不思議」が解き明かされていく。

\*そして二人は結婚したのであつたが、幸福に暮らせよう道理はなかつた。ユリイは純真な乙女心の外に何一つ持つてゐなかつた。それに十八になつたばかりの初々しい彼女としては、さんざん不品行をやつて来た気の荒い男の側にあることが第一いたいたしい重荷だつた。（傍点は原文）

\*父親になる―このことはリリオムを力強い喜びで躍り上らせた。（中略）この喜びに興奮してしまつた彼は前後の見境ひもなく、一層恐しい誘惑に陥つてしまつた。赤ん坊のために金が欲しかつたのだ。手段を選んでゐられなかつたのだ。良心が狂<sup>マ</sup>んた<sup>マ</sup>のだ。

\*ところが、十六年の後のリリオムは悲しいことに矢張り昔のリリオムだつた。彼は天上の星を盗んで地上へ行つた。娘にやりたい哀れな心根だつた。それが善行だと思ふ哀れな性格だつた。そればかりか、彼は娘のルイゼを打つてしまつたのだ。一つの善い事をしに天上から来た彼だつたのに―。

と、ここに至ったリリオムの性情に着目して語られている。一方、「モルナル独特のおもしろ味と詩情」を感じさせるシーンと評される<sup>(55)</sup>、リリオムがアカシヤの花の匂いを嗅ぐ恋の始まりの場面や鉄道線路の土手下で身を潜めて呟く場面も、ストーリー展開には直接関わらない箇所ではあるが、「星を盗んだ父」でも削除されずに生かされている。殊に後者の、線路がゴオゴオ軒をかいて唾をし、電信の針金がブンブン唸り、その針金で人間が話すのを聞いている雀が片方の眼を上向けて（何を話しているか聞きたいね）と云う風に俺（リリオム）を見ているという、擬人法やオノマトペに満ちた「子供のやうな」吐きは、川端が「新進作家の新傾向解説」（大・四・一）で指摘した新傾向——「そこには、一種の擬人法的描写がある。万物を直感して全てを生命化してゐる。対象に個性的な、また捉へた瞬間の特殊な状態に適当な、生命を与へてゐる。そして作者の主観は、無数に分散して、あらゆる対象に躍り込み、対象を踊らせてゐる」——にも繋がるものである。新感覚派的な表現の萌芽も思わせる前述の「星を盗んだ父」冒頭部とも相俟って、読者に清新な印象を与えるものとなっている。

第三段落（原稿用紙二枚半）は現在時に戻り、「リリオム」第七場の続きが語られている。第一段落の初めに登場した「黒装束の男」が、この段落の半ばに「黒装束の天国の巡査」として再び現れ、リリオムを天上へ連れ戻す。彼らはここでも黒子の如く言葉を一切発せぬまま速やかに退場し、再び母娘二人が残される。この段落はいずれの訳でも原稿用紙三枚前後分の該当部分が比較的忠実に訳出されているが、ベンジャミン訳では「Nearby an organ-grinder has stopped. The music of his organ begins.」とある結び（①も「手風琴弾きが近くに止まる。その手風琴の音楽が始まる。」で、他の邦訳も同様）が、「星を盗んだ父」では、オリジナルな一文も加えて次のように閉じられている。

手風琴弾きが春の野を来て、家の前に立止まりながら静かな曲を奏<sup>かな</sup>で始めた。夫と妻、父と娘——肉親の深い神秘的な愛情が春の陽のやう<sup>ママ</sup>温かく漂つてゐた。

「リリオム」では全体の割に過ぎない第七場が、「星を盗んだ父」では以上のように第一段落と第二段落到振り分けられて、全体の過半数を占めている。「犯罪をしくじって自殺するところまで」の「世相劇らしい進展を見せる」場面に対して、この第七場は「すっかり現実を離れて」、「近代劇の暗鬱な雰囲気とは違って甘美な情調」が漂い、「童話みたい」だと評されるだけに、「公衆はこの作の自然と超自然の不思議な混合の解し難い幻想に当惑し」、ブタペシュトの初演は失敗したとも言われている（『白鳥』緒言）。そうした異質な第七場を現在時に定め、第六場までを過去として短く挟みこませた「星を盗んだ父」の構成は、「リリオム」の「センチメンタリズム」というか抒情性というか、そこにプラスされた童話味のようなもの<sup>(56)</sup>をより活かすものとなっていると言えよう。

また、「回転木馬館の若い客引と貧しい娘、そんな二人の出会いにからんで恋の手練てくだを知りつくした年増おんなと相棒のこれもならずものの伊達男、とくれば何れはモルナアルの世界である」と言われる「リリオム」では、ユリーの求婚者の大工等三〇人余りが次々と登場して恋物語が繰り広げられる一方で、娘ルイゼは第七場に至って漸く登場するのだが、「星を盗んだ父」では、過去を語る第二段落で言及される人物をかなり絞り込んだのみならず、現時で言葉を交わすのは父母娘の三者に限られ、まずルイゼに焦点が当てられていた。生まれてくる子供の為に罪を犯して自殺したリリオムが、また娘の為に星を盗んで訪ねてくる場面から始まり、「肉親の深い神秘的愛情」を提示して終わるといふ枠組みを持った物語の中心に据えられていたのは、恋ではなく肉親愛であり、そうした主題を端的に表していたのが次章で考察するその特異なタイトルだったのである。

## 2 「リリオム」を原作とする映画、ミュージカル「カルーセル」等の作品群と「星を盗んだ父」

原題の「リリオム」は主人公の名であるが、英訳台本の「CAST OF CHARACTERS」に「"Lilium" is the Hungarian for Lily, and the slang term for "a tough".」と記されているように俗語では「(ろ)ろき」(鷗外訳では「破落戸」)の意味もある。『白鳥』緒言」も俗語の意味を記した上で、「ならず者」だが「同時に又人間的な性格の持主」であるリリオムの魅力を描き、小山内訳の舞台を紹介した「築地小劇場」六月号も「ならず者」を意味する」と言及、番組表にも「悪い奴だが気のいい男可愛い男」と記されており、「星を盗んだ父」でもやはり、「ならず者と云ふ意味」と特に括弧書きで注意が促されていた。

「リリオム」はアメリカ、フランスで映画化もされ(一九三〇年、一九三三年)、築地座でも前述のように再演されたが、「女と云ふ女はみなユリイとリリオムとのために泣いてゐるので御座います」といった当時の言葉や、<sup>(59)</sup>「善意ではじめたことからは必ず何か拙い結果が生じて、逆にその相手を傷つけてしまひ」、「内心では妻を愛しながら、結局最期まで素直にその気持をあらわすことができずに死んでしまふ」リリオムは、「現代人の悲しみ」を代弁しているといった戦後の徳永「解説」に見られるように、観客、若しくは読者の多くは、「ならず者」としてしか生きられなかったリリオムや、そうした彼と「純真」なユリイとの恋に涙し、共感したようである。

一方、「リリオムがゆつくりと舞台から消え、おそらくは地獄に行くことを示して終わる」<sup>(60)</sup>戯曲の陰鬱さに、大団円を求める動きもあった。日本では、榎本健一(エノケン)によるラジオオペレッタ「リリオム」(昭七・一一)は、キャバレーの客引をしていたリリオムが罪を犯して死に、天国で裁判を受けた後に「一切の夢から覚めて真人間になつて」「ユリイと共に幸福な生活をはじめ、といふおとぎ話風なもの」(「毎日新聞」六日)に変えられたようである。同月に浅草公園の常磐座「エノケン一座」(菊谷栄脚色・演出)で上演された「リリオム」は、テーマ曲は「ジャズれリリオム」、飛行服の踊り子や女神も登場し、「世界与太物全集 第四回ハンガリー編」と銘打って浅草松竹座で続演された(昭九・一一)が、リリオム役を得

意としたエノケン、戦後も「リリオム」を日比谷有楽座で演じ（昭二一・三、藤田潤一脚本、笠置シヅ子共演）、興味深い発言もしている（後述）。

アメリカでは、ミュージカル「Carousel（回転木馬）」がブロードウェイで八九〇回のロングランを記録した（一九四五年初演、ロジャース&ハマースタイン）。舞台も一八七三年のニューヨーク地方の港町に移され、回転木馬の呼び込み人ビリーと女工ジュリーの出会いの場として「回転木馬」が幕開きから置かれた。また、ヘンリーキングによる映画版「CAROUSEL」（一九五六年）は、天界で星磨きをしていたビリーが妻と娘の危機を知って一日だけ下界に降りていくメルヘンティックなもので、下界に降りる資格を星守が与えられるか判断する為にその生前を振り返るといふ形で、原作の写実的な部分を過去として挟み込ませた枠組みとなったが、これは「星を盗んだ父」が先取りしていたものであった。数々の賞を受けたロンドンのリバイバル版（一九九二年、キャメロン・マッキントッシュ）では、回転木馬は観客の前で組み立てられることになり、最初と最後に「まるで永遠に回り続ける回転木馬のように」逼迫した響きを持つ「カルーセル・ワルツ」が流される等の改変もあったが、やはり終幕近くでビリーは「How I loved you」と歌い上げ、「貧しい男女の愛を、現実と天国という異界を結ぶファンタジーの形で叙情性豊かに描いた」と日本でも好評だった。後の銀河劇場「回転木馬」上演時も、「人生の目まぐるしく回る感じのアリユージュンとして最初に回転木馬がある」<sup>(82)</sup>、「ミュージカル向きの一話のおとぎ話」と評された。

前述のように「星を盗んだ父」でも「廻転木馬」は特に「メリイ・ゴウ・ラウンド」とルビを附して印象づけられていたが、象徴性を帯びた「回転木馬」をタイトルにしたこれらの作品は、宝塚等でも上演されて広く親しまれた一方で、「すごくわかりやすく楽しいエンタテイメントに仕上げられ」ていて「戯曲の持つ『伝えられなさ』が置いていかれている」と違和感も表明された。例えば、「二〇〇年の時空を超えた余りにも不器用な夢のかたち」とリーフレットにある松居大悟脚色・演

出「リリオム」(二〇一二・五・二五初日、ゴーチ・ブラザーズ企画、青山円形劇場)のパンフレットには、「本当のハッピーエンド」をめぐる松居と主演の池松壮亮との対談も掲載されている。

以上のような、原題通りの「リリオム」や戦後の「CAROUSEL(回転木馬)」といった作品群の中にあつて、「星を盗んだ父」という題は異色である。この題名には大正一三年の火星大々接近による天文学ブーム<sup>(63)</sup>(当時の「文藝時代」には、「童話の天文学者」という佐藤春夫の「序」を添えたイナガキタルホ(稲垣足穂)の『二千一秒物語』や『星を売る店』の広告も、『白鳥』の広告と共に載せられている)の影響も考えられるが、注意されるのは、昭和一〇年九月に川村花菱「星を盗む男」が新派によつて東京劇場で上演されていることである。この芝居については、文化座初演時パンフレット(佐佐木隆)や東宝『回転木馬』パンフレット(倉橋健)でも言及されているが、映画「狂った一頁」(大一五・七)の井上正夫と、後に舞台「雪国」(昭一二・一二)に立つ花柳章太郎とが共演したという点でも興味深い。国立劇場所蔵の台本を確認したところ、舞台を日本に変えて大幅に改変した翻案であつた。主人公利吉は曲馬団で働いているならず者で、お袖の妊娠を知り、生まれてくる子供の為に金を盗もうとしてピストルで撃たれ、行方不明となる。一六年後にひよっこり帰ってくるが、相棒の鉄五郎が娘おちよを攫つて金にしようとしたので殺し、名乗り得ずに姿を消す。こうした展開は、「星を盗んだ父」よりも、主人公の名をやはりタイトルとした日活映画の時代物「金的力太郎」(伊丹萬作脚色・監督、片岡千恵蔵主演)に近い。「盛り場の客呼び力太郎」が「町の娘おそめと会つてはじめて愛を知り、同せい数十日、やがて妻の妊娠、失業による貧乏、盗み、失敗」の後に江戸を離れ、数年後に戻るも妻は結婚しており、「子供のために」去る(「朝日新聞」昭六・七・三。「最初の字幕で断り書がしてある通りに前半は「リリオム」の翻案」とある)という先行作「金的力太郎」と同様に、「星を盗む男」では童話的な要素も全く失われている。「星を盗んだ父」との題名の類似性については、『川村花菱脚本集』(大一三・一二)が『白鳥』と同年に同じ金星堂から刊行されており、「人間座を率ひ復興の帝都に雄飛する著者唯一の脚本集」といったその広

告も、『白鳥』の広告と共に「世界文学」に繰り返し掲載される等、前述した金星堂を中心とする文化圏にあった花菱が、川端の翻案について何らかの情報を得ていた可能性も考えられる。

尚、国立劇場には日本教育テレビの「星を盗む男」（東宝テレビ部制作、竹内伸光脚本）の台本も所蔵されている。坂本文吉（呼込みジョー）榎本健一・ユリ子八千草薫、「VTR35年11月24日」とあるが、「35年 月 日午後七時三十分〜八時」と放送月日は空欄である。内容を確認したところ「リリオム」の翻案ではあったが、花菱の脚本とも川端の短篇とも特に関連は認められず、花菱の戯曲の題のみを流用したのかとも思われる。

「リリオム」の「真味」は「天上の星を盗んで来る」ところにあるとの指摘は早くから為されており（水木久美雄「近代劇場のリリオム」、「演劇研究」大一五・七）、「星を盗んだ父」も後年の二つの脚本も「星を盗んだ」ところに注目してそれをタイトルにした点では共通しているが、「星を盗んだ父」のみは、「父」としてのリリオムの在り方、「父」と娘（及びその母としてのユリイ）の繋がりをこそ中心に据え、「ならず者」の側面よりも「星を盗んだ父」としてのリリオムに焦点を絞っている点で、その類似性が偶然であるか否かにかかわらず、「星を盗む男」二作とも、他の恋物語とも根本的に異なっている。これこそがこの作の最大の特徴であり、原作と全く異なる構成と題名は、これを明確に表していたのである。

#### 四 川端文学の中で―今後の検討課題―

浅草でリリオムを演じた榎本健一は、リリオムの中の「東洋的な、極端に言えば日本人、も一つ乱暴に言えば或る時代の浅草ツ子の持つて居た様な下町の体臭に、僕は無茶苦茶に惚れている」と、江戸っ子弁的な徳永訳を用いた文化座初演時のパンフレットに言葉を寄せている。同パンフレットには、音楽担当の石井勲も、「自己の善性と、気の弱さ」を照れ隠しするリリオムは、欧州人というより日本の長屋にでも転がっていきそうで、「浅草の木馬場」に移して上演しても使えそうだと記し

ていたが、後年の「木馬館のユリッペー下町の伝説」(二〇一〇・一一・六、七、西澤實脚本・演出、朗読集団「ぶれさんばうず」)では、大正時代の浅草花やしきの「木馬館のユリッペ」こと野澤由理夫を主人公にした話芸朗読舞台が試みられた。そうした「リリオム」と並ぶモルナールの代表作が「パール街の少年たち」(一九〇七年)で、首都ブダペシュトの場末の裏町パール街の少年達が「赤シャツ団」と戦う少年小説は、川端の描いた浅草に於ける「紅団」も連想させる。同作の初邦訳は松室重行『パウル街の少年団』(主婦之友社『世界名作家家庭文庫』昭一六・一二)とされるが、それ以前に鈴木三重吉が「パテ・クラブ(劇)(モルナルによる)」「赤い鳥」(昭七・八)として部分訳をし、山本和夫編著『ますらを 少年愛国映画物語』(高山堂書店、昭一〇・一二)が映画「ますらを」(一九三四年、フランク・ボーセージ監督製作)を元に翻案はしていた。現段階ではモルナルに関する川端の言及は確認されていないが、前稿で言及したように既に大正一二年の時点で浅草公園を背景とした長篇を目論み、次いで「星を盗んだ父」も執筆した川端が、いち早くLouis Rittenbergによる英訳(一九二七(昭二)年)を読んでこれをヒントにし、内容は全く異なるが日本の「赤シャツ団」の都市小説「浅草紅団」(昭四・一二・五・二、九)を書いたと考える余地もあろう(未翻訳の海外作品にも川端が目配りしていた例は、次章の二及び四でも述べる)。「屋敷町より貧民窟」が私には「抒情的」、行きたいのも「東方の亡国」で、「親なし子、家なし子だつたせぬか、哀傷的な漂泊の思ひがやまない」(「文学的自叙伝」という川端と、ユダヤ系の父を持ち、ナチスに逐われてアメリカで客死したモルナルとの比較文学的考察は今後為されてよい。

「デテールの取扱方に於ては写實的」だが、その基調や場面々々を構成する雰囲気は於て「飽くまでも浪漫的」で、「寧ろ空想と、美しい夢と、詩と、憧憬を除いたら、彼の戯曲の中には何物も残らないと云つていい」とはモルナルをよく知る鈴木 of 言葉だが(「あとがき」、前述『近代劇全集 第三八巻』)、川端文学に於いても、例えば「伊豆の踊子」でも多くの「空想」が繰り返されていたように、「空想と、美しい夢と、詩と、憧憬」は重要な要素であった。「母を知らない」川端が震災



直後の「死体の臭気のなかを歩きながら」した「大火見物」(大一一・一一)の空想(「母が死んで子供だけが生きて生れる。人に救はれる。美しく健かに成長する」)や、「自分が死んでも子が生きてゐる」という「永生不滅」(大一一・一一)の願いは、リリオム・ルイゼの父娘関係の中である程度果たされていた。原作では娘が父リリオムに描いていた「美しい夢」はひとたび危機に曝されたが、川端の「星を盗んだ父」では、「深い神秘的愛情」に守られ、温められた。

だが、この頃から川端が数多く執筆し始めた掌篇(最初の「短篇集」七篇が「文藝時代」に発表されたのは大正一三年一月)では、「神秘的傾向」や「夢」と並んで「家庭からの解放」が大きなモチーフとなり、「親子のつながりといふもの」の夢想から弾き出されていく《孤児》が語られた「父」(大一一・一〇・三)。後述、次章五)に見られるように空想や夢は打ち砕かれ、やがて憧憬は対象との絶対的な距離を思い知らせるものとなっていく(後述、第Ⅱ部第六章)。「のんきな空想」(大一一・二)で「非センチメンタルなもの」として挙げられた「人工妊娠術」は、未発表小説「時代の祝福」(昭和二年五月の岐阜講演以降の執筆と推定される)では、〈彼〉(「私の処女作は「篝火」といふ小説でした。」と岐阜での講演で話している)の「悪夢」「奇怪な詩」として、「親子といふ厄介な絆が地上から消えてしまひ、夫婦といふ鎖も重い目をして引きずることがなくなるでせう」と語られる。肉親の絆への嫌悪は「禽獣」(昭八・七)に極ま<sup>(65)</sup>って行くのである。

## 注

(1) 「新潮」での翻刻時に、明らかな誤記二〇数カ所を正した。

(2) 「解釈と鑑賞」(昭五五・五〇六・七)。

(3) 関西大学「国文学」(一九九九・三)。同大学に問い合わせたところ、後掲の昭和二年六月七日の書簡は「神楽坂と山田製の間スペースはなく、褪色しているが黄色の枠らしい」と回答があった。

- (4) 「国文鶴見」(二〇一三・三)に翻刻した片山倫太郎から、この型であるとの回答と原稿の写真を頂戴した。
- (5) 初出「毎日新聞」。『伊藤整全集 第二四卷』(新潮社、昭四九・六)。
- (6) 作家としての出発期に、「狂った一頁」一作にとどまらぬ演劇・映画への並々ならぬ関心があったことは、拙稿「千羽鶴」の劇化・映画化をめぐる(「江古田文学」一九九九・一一)でも指摘した。
- (7) 「創刊二雑誌批判」(「読売新聞」四月一三日(二九日)。同誌七月号「放題録」(無署名)では、「川端康成とかいふ近頃帝大の国文科を這ひ出した菊池門下」が矛盾だらけの批判を本誌に加えて得意になっていたと揶揄されている。
- (8) 「大正期の「叢書」について」(『白樺の本』青英舎、昭五七・五。初出「日本古書通信」昭五一・六)。
- (9) 『近代日本文学大事典 第六卷』(講談社、一九九二・三)。
- (10) 雄松堂出版、一九九八・一一。初出「日本古書通信」(一九九二・三)一九九八・一二)。
- (11) 「年末回顧の文献について」(宗像和重・山本芳明編『編年体大正文学全集 別巻』ゆまに書房、二〇〇三・八)。  
山本『カネと文学』(新潮選書、二〇一三・三)は、円本ブームが新たな出版不況をもたらしたと考察している。
- (12) 徳永康元「鷗外とハンガリー作家」(『ブダペストの古本屋』恒文社、昭五七・四。初出『岩波講座 文学』月報一〇、昭五一・一〇)。鷗外の用いたドイツ語翻訳原本は、小堀桂一郎によれば一九二二(大元)年四月五日刊。徳永が戦後に「リリオム」を初めて原語から邦訳したことは後述する。
- (13) 鷗外と小山内の関係については、水品春樹『小山内薫』(時事通信社、昭三六・一〇)等に詳しい。
- (14) 川端香男里「新発見川端康成青春書簡九通」(「新潮」昭六二・八)。
- (15) 「築地小劇場と川端康成」(『康成・鷗外―研究と新資料』審美社、一九九七・一一。初出、川端文学研究会編『川端文学への視界8』銀の鈴社、一九九三・六)。

- (16) 羽鳥徹哉「川端家の親戚たち」(『作家川端の基底』教育出版センター、昭五四・一。初出「文学」昭五一・三)。
- (17) 野末(前述、注(15))は「研究員」について未詳とし、岩佐壮四郎「川端康成と演劇」(田村充正・馬場重行・原善編『川端文学の世界四 その背景』勉誠出版、一九九九・五)にも研究員や後述する試演についての言及はない。
- (18) 牛原虚彦『路上の霊魂』の想い出(小山内薫を偲ぶ会編『小山内薫三十周年記念』昭三二・一一)。
- (19) 「朝日新聞」(六月一九日)では日程は二二日午後六時半より、「読売新聞」(同二〇日)では日程は二三、四日、演目は「狂人を守る三人」の代わりに田中「素描」となっている。台本となった清野の訳文を掲載した「行路」一〇年六月号には、二四日の試演順序のパンフレットが挟み込まれていると紅野「逍遙文学誌一九四」(『国文学』二〇〇七・八)に指摘があるが、演目は「素描」の方が載っている。当時から情報は混乱しており、日程については北村や秋庭は二三、四日、工藤や林編『女優事始め』は二二、三日としている。
- (20) 「帝大劇研究会の頃」(『新しき演劇へ』原始社、大一五・一〇)、「あの頃の仲間五」(『帝国大学新聞』昭五・二・二四)。後者を復刻した井口哲郎編『北村喜八 年譜と著作目録』(私家版、改訂版一九九六・二)所収の年譜には、北村は大正一〇年四月に英文学科に転部し、帝大劇研究会に参加、一二年八月に川端から「新思潮」の原稿を頼まれて小説を書き、一三年一〇月にも川端の依頼で「文藝時代」一二月号に評論を書いたとある。井口「北村喜八ノート四」(『石川県立小松高等学校研究紀要』昭六一・四)には、「新思潮」には小説「或死」「妙な邂逅」を書いたとあるが、一二年九月の大震災で同誌は刊行できなかった(後述)。「文藝時代」一三年一二月号には北村「時代が呼吸してゐない戯曲壇」が掲載された。
- (21) 「芥川龍之介と菊池寛」(昭二四・一〇)。尚、「新思潮派の人々」(昭九・六)は福田清人の代筆であることが、昭和九年五月二二日の福田宛速達でわかる。

- (22) 「山本有三・豊島與志雄・久米正雄」(昭二五・七)。
- (23) 「私の読書遍歴」(『日本読書新聞』昭二七・七・二三)。「北村喜八 年譜と著作目録」(前述、注(20))に復刻。
- (24) 「ほかの芝居は見ない」は、川端全集未収録として「文藝空間8」(一九九二・四)に全文再掲、福田淳子が解説。「日本古典の感覚美を嘆賞」は、「文章を語る(一)」として「帝国大学新聞」掲載、拙稿「川端康成・未刊行作品五篇」(後掲「初出一覧」7)で翻刻・解説した。
- (25) 川端「菊池さんと私」(昭三五・三・六)等。
- (26) 「太陽」昭四七・八。読売新聞文化部『実録川端康成』(読売新聞社、昭四四・七)でも同様の鈴木直話の直話が記されている。記憶に細かいぶれはあるが、鈴木は「新思潮時代の川端康成」(『歴史と人物』昭四七・七)、『まぶたの人』(岩手日報社、昭六二・七)等で、ほぼ同趣旨の発言をしている。
- (27) 「若い者を甘やかせる」(大二三・四)。「文学的自叙伝」(昭九・五)等にも同様の記述がある。
- (28) 福田淳子「菊池寛『慈悲心鳥』と川端康成―代作問題をめぐって―」(『文藝空間8』前述、注(24))・「川端康成における文学活動始動期の考察」(『解釈と鑑賞』二〇一〇・六)、片山宏行「菊池寛ノート―代作問題について―」(『菊池寛の航跡』和泉書院、一九九七・九。初出「青山語文」一九九四・三)が詳細に論じている。
- (29) 『川端全集』では大空社で復刻された版に依拠して大正一四年七月発表としているが、これは再版である。同講座は損失補填の為に会員を幾度も募集して再販を繰り返したことが、「編集後記」からうかがえる。
- (30) 川端康成記念会・茨城県近代美術館『文豪が愛した美の世界―川端康成コレクション展』(二〇一〇・三)。
- (31) 『文藝編集者 その聲音』(TBSブリタニカ、昭五七・六)。「菊池寛全集」には「解題者の埒内を越えることなので、この際は控へておくことにした」(郡司勝義「第八巻解題」文藝春秋、一九九四・六)として、代筆が問題となっ

た「受難華」「慈悲心鳥」「不壊の白珠」の三作も収録されている。尚、木村については第Ⅱ部第二章注(2)及び第Ⅲ部第二章一021中里(佐藤)恒子宛、043宗岡薫宛参照。

(32)

拙稿「川端訳」童話について―そのリストと実際―(和洋九段女子中学校・高等学校「紀要」一九九五・三、一九九六・三)でも言及したが、児童文学関係のほとんどが菊池の著・訳・編になっている『小学生全集』(興文社・文藝春秋社、昭二・五〇四・一〇。全八八巻)に関しては、自身も下訳をしていたという坪田譲治の証言もあり、男性編集者や所属の決まらない新入社員、社内存在した婦人達の手も加わっていたことが明らかにされている。「菊池寛全集 補巻第四解題」(武蔵野書房、二〇〇三・三)には、今まで菊池の児童文学については「何も言はれて来なかつたので、改めてこれを一つ独立させ」、「菊池寛の執筆した児童文学」の全部(二二篇)を収めたとある。

(33)

菊池訳、ゴールズワージー『法律の轍』(春陽堂、大10・六)の「跋」には「知人の二三に下訳を頼んで」と明記されていると片山「菊池寛ノート」(前述、注(28))に指摘があり、川端もそうした下訳等をした後に翻訳の口を求め、『慈悲心鳥』の代筆も依頼されたと考えられる。また、「ダンセニイなどは、僕が日本で一番早くよんだのではないかと思ふ」(「半自叙伝」昭四・六)という菊池は、この前後に「ダンセニイ戯曲集の序」(松村みね子訳、警醒社書店)を大正一〇年一月に、ゴルスワアジイ・ダンセニイの章を含む『英国愛蘭 近代劇精髓』を大正一四年九月に刊行している。「文章倶楽部」一月号の川端の翻訳作品の選択は、菊池の訳業等との繋がりの色濃いものであることをまず確認しておきたい。

(34)

朝日新聞社、昭二八・一一。桑本幸信『水守亀之助伝』(孔文社、一九九二・七)は、水守が川端を月評で取り上げたのは「招魂祭一景」ではなく「ある婚約」で二月二四日だったと、先行研究の誤りを正している。

(35)

『水守亀之助資料目録』(相生市教育委員会、昭五六・三)。

- (36) 大村彦次郎『文士のいる風景』（ちくま文庫、二〇〇六・六）。
- (37) 同号（第五号）で「新思潮」は休刊。この夏に書いた「湯ヶ島での思ひ出」を踏まえて、「伊豆の踊子」（大一一・一、二）と「少年」（昭二七・九）が成った。詳しくは拙稿「少年」論（田村・馬場・原編著『川端文学の世界二』その発展）勉強出版、一九九九・三）を参照されたい。
- (38) 「国民新聞」の「七月の小説」（大一一・七・三）同・同・一四）で、新井紀一「橋畔の人々」を取り上げている。
- (39) 田村道美「野上弥生子と『近代劇全集』（『香川大学教育学部研究報告』一九九四・九）は、同全集で「リリオム」を読んだ野上が「破落戸の昇天」とも比較しつつモルナアルに驚嘆していると指摘、両作の相違点も整理した。
- (40) 「日本近代学館年誌」（二〇〇七・九）。曾根はこの後も、「金星堂からみた昭和文学―文学史と出版史の間」（『昭和文学研究』二〇一二・三）を発表。
- (41) 『実録川端康成』（前述、注（26））。因みに「文藝春秋」は金星堂から刊行された菊池の随筆『文藝春秋』（大一一・一）の書名に拠ったものである。川端は大正一三年三月に大学を卒業した後も七月まで制服で通したと聞いたと、上林暁が「柳緑花紅」（改造社版『川端康成選集』月報八号、昭一三・一一。後『上林暁全集一四』筑摩書房、昭四二・五）や「川端康成」（古木鐵太郎・上林暁『現代作家印象記』赤塚書房、昭一四・一一。後『上林暁全集一三』昭四二・三）に記している。
- (42) 金沢文圃閣編集部『金星堂／語ろう会のころ―出版書籍商回想録』（二〇一一・六）。「文藝時代」発刊の計画を「中河を通じて福岡は知って、むしろこちらから」版元になろうと申し出たのであろうとあり、先の福岡の言とは相違している。松山悦三『作家追想』（社会思想社、昭四〇・一一。「文藝時代」創刊時に、「人間」の編集長として「金星堂の編集部長」を兼ねていたと記している）には、当時川端は大学の制服を着て通っていた、校正の多忙な時など横光、

中河の諸氏よりも早く出社して仕事をしていたようだとあるが、門野によれば、松山は大正一〇年に最初の常勤編集員として入社、中河が入社した十二年に辞めたという。

(43) 「読売新聞」の「よみうり抄」一月二八日。

(44) 雑誌「金星」の「文壇風聞録」(大14・11)には、川端が伊豆に引籠って球撞きをしているとある。尚、同年四月号では「作家の印象」として川端を特集し、横光利一・武野藤介・鈴木彦次郎の文を掲載し、五月号には『白鳥』の見開き広告も出ている。

(45) 第一篇の伊藤武雄訳、ゲーリング『海戦』他。同誌では『先駆藝術叢書』の広告を毎号大々的に出しているが、五月号の同叢書の広告では、小山内らによって六月から開設される小劇場と連携して進むと付言されている。『海戦』は、築地小劇場第一回公演作となった。

(46) 佐藤は『先駆藝術叢書』の命名者だと、曾根「出発期の金星堂」(前述)に指摘がある。

(47) 紅野編『新感覚派の文学世界』(名著刊行会、昭五七・一一)。

(48) 羽田美也子「ジョン・パリソ作『キモノ』―最も物議を醸したジャポニズム小説」(『国際文化表現研究』二〇〇七・三)には、パリソについて「判っていたのはペンネームのみ」とあるが、パリソの本名の他、モデルや訳者、京文社社主のこと等も「読売新聞」三月二四日「ブック・マン」に書かれている。他にも同紙(三月九日、四月一〇日)や「朝日新聞」(三月一日、五月一六日、七月六日)等に関連記事が見られる。

(49) 「川端文学五十の知識」(『国文学』(昭四五・三)。後、『長谷川泉著作集五』(明治書院、一九九一・一一)。

(50) 『定本横光利一全集 第一六卷』(河出書房新社、昭六二・一二)。

(51) 「劇場協会の印象(八)」(『朝日新聞』大一一・七・二九)。記事の内容からも、上演されていた「無頼漢」は「リ

リオム」のことと考えられる。

- (52) 演出した長谷部孝の一文が「朝日新聞」六月二五日に掲載されている。
- (53) 英訳は、刊行七ヵ月後の一二月に六版を重ねている。
- (54) 飯島「解説」(前述)には、プロローグとしての黙劇の場面はフランクリン版の原本にも一九二八年の著作集本にもなく、遊園地に馴染みがない外国人の為に付け加えたものと思われるとある。
- (55) 西沢揚太郎「民芸「リオム」―五十年目のモルナル」(「テアトロ」昭五一・八)。
- (56) 浅野時一郎『私の築地小劇場』(秀英出版、昭四五・九)。
- (57) 飯沢匡「リオムの作者」(「悲劇喜劇」昭四八・一二)。
- (58) (55)に同じ。
- (59) 早川三代治「モルナル」(『ラインのほとり』明窓社、昭八・一〇)。
- (60) ニコラス・ハイトナー「MUSICAL OR MYTH?」(同文は、「回転木馬」の演出家ハイトナーがイギリスのシャフツベリー劇場公演プログラムに書いたもの。訳文は東宝パンフレット、一九九五・五)。飯沢(前述、注57)によれば、築地座の公演も「全く暗い妙なもの」だった。
- (61) 「毎日新聞」(一九九五・一・一三)。来日上演時の劇評である。
- (62) 小田島恒志「演劇時評(第二回)」(「悲劇喜劇」二〇〇九・七。石原千秋・今村麻子との対談)。
- (63) 草下英明『星の百科』(社会思想社、昭四六・一)、同『星日記 私の昭和天文学』(草思社、昭五九・一二)他。
- (64) 鳥越信「パール街の少年たち」のブダペストっ子たち」(『児童文学入門』国土社、昭三七・一二)。
- (65) 拙稿「禽獣」論―その「入子型」的構造を回って―(『芸術至上主義文芸』昭六三・一二)を参照されたい。



## 第二章 新聞掲載の発掘作品―「妻競」「時代二つ」「名月の病」「父」―

### 一 新聞調査の困難性と意義

日々消費される新聞を対象とした研究調査は、文芸誌と比べて全般に遅れている。川端全集未収録小説「父」を「東京朝日新聞」のマイクロフィルムで見出したのは、一九九〇年の秋であった。この偶然の発見から、昭和五九（一九八四）年に完結した川端初の本格的全集にも尚盲点があることに気付き、早速『朝日新聞記事総覧 大正編人名索引』（日本図書センター、昭六〇・一〇）を確認したところ、先の小説「父」は川端の名が明記されているにもかかわらず同索引から漏れていた一方で、初出未詳とされていた小説「貧者の恋人」（初収本『僕の標本室』（昭五・四）では、「昭和三年」とのみ末記）は、昭和三年ではなく前年の昭和二年五月五日「朝日新聞」に掲載されていることが判明し、「文学」（一九九二年春号）に「父」全文を紹介し、「貧者の恋人」の初出についても言及した（後掲「初出一覧」9）。また、『朝日新聞記事総覧 昭和編人名索引』他や諸紙の索引・記事一覧を参照したところ、次のA～Dにより①～⑦の川端全集未収録作品等も確認できた。

- A 紅野敏郎編『読売新聞文芸欄細目（下）』索引（日外アソシエーツ、昭六一・六）
- ① 「時代二つ」（大一五・七・一九）
- B 「文芸時報」復刻版別冊『解題・総目次・索引』（不二出版、昭六二・一二）
- ② 「片岡石濱二氏の作」（大一五・二・二〇）
- ③ 「文壇の改革其他」（昭四・二・七）
- ④ 「新興芸術派論」（昭五・六・一九）

\*索引では漏れているが、⑤「映画雑感」も「文芸時報」(昭三・一一・一五)に発表。

(「片岡石濱二氏の作」以外は、順に「エム記」「y記」「完〇記」と末記あり。)

C 「帝国大学新聞」複製版付録『人名索引』(不二出版、昭六〇・五)

⑥ 「日本古典の感覚美を嘆賞」(昭七・一・一一)。「談」と末記あり。

D 『満州新聞』芸文記事一覧「朱夏」一九九一・一

⑦ 「体験の成果」内容の新鮮さと技術的未熟」(昭一七・一・三)。

これらのうち、①③④⑤⑥は「新潮」(一九九二・六。後掲「初出一覧」7)に「解題」を添えて、②⑦は「文藝空間8」(同・四)に拙稿「川端康成「ちよ物」試論―全集未収録作品「父」を核として」(後掲「初出一覧」10)「別表「ちよ物」一覧」川端康成全集未収録作品について」も添えて紹介した。

今日では「読売新聞」「朝日新聞」等の大新聞は記事の検索もある程度可能になってきており、複製版作成時に総目次や索引を付せられることもあり、『詳細年譜』を編む際にはそれらが大きいに役立った。だが、地方紙等の多くは、実際の紙面(マイクロフィルム、マイクロフィッシュを含む)を網羅的に見ていくしか手立てがなく、調査は一層困難である。『詳細年譜』刊行後に調査した「都新聞」も、複製版(中日新聞社監修、柏書房)が一九九四年に、柏書房編集部編『都新聞明治期記事・人物索引』(柏書房)も二〇〇〇年に刊行されたが、大正期以降の索引類はなく、やはり紙面を通覧するしかなかった。

同紙は戦時中の昭和一七年に、新聞事業令により「國民新聞」と合併して現在の「東京新聞」となったが、「文藝欄」を新設したのは大正一一(一九二二)年一〇月の紙面改革時で、土方正巳『都新聞史』(日本図書センター、一九九一・一一)によれば、わずか二段という狭いスペースながら、後に同紙の売り物となったという。一方川端が初めての稿料を得たとして

いるのは、前章で述べたように大正一〇年一二月の「新潮」である。今回はまず、大正一〇（一九二二）年以降大正末（一九二六）年までの同紙を詳細に調査した。その結果、新たに確認できた後述の全集未収録作品「妻競」<sup>つまくらえ</sup>「名月の病」は「新潮」二〇一八年四月号に全文を紹介し、その解説（後掲「初出一覧」<sup>6</sup>）では初出未詳であった「朝の爪」<sup>7</sup>も同紙に発表されていたことも言及した。また、同紙掲載の川端関連記事は、「昭和五年までの川端康成・その一断面―小谷野敦・深澤晴美共編『川端康成詳細年譜』拾遺―」（「群系」二〇一八・五）で紹介した。同紙への川端の発表は、大正一三（一九二四）年一月の文芸時評「新春文壇の收穫」（五、八、九日）に始まり、一五年「名月の病」（一〇月三日）までの三年間に集中しており、以降は昭和五（一九三〇）年二月八日の「作家の選挙観戦記」第八回「犬養健君政見発表演説会」のみである。『詳細年譜』編纂時の調査でも、昭和五年以降は、昭和六年の榎本健一他「レヴェウ座談会」（一〇月二二日〜十一月一六日）、昭和九年の探訪記事「愛犬家を訪ねて」（一月二二日）での関わり程度で、川端文の同紙への執筆は確認できず、「名月の病」以降、同紙から離れていったと見て取れる。ちなみに川端が「浅草紅団」を「東京朝日新聞」夕刊に連載して大評判を得たのは昭和四年末から五年であるが、「名月の病」を発表した大正一五年には既に新感覚派の新進作家として活躍中で、一月に「伊豆の踊子」を発表し、六月には処女作品集『感情装飾』（金星堂）も刊行していた。

以上のような新聞調査により、今後も新資料が発掘できる可能性は十分にある。筆者の調査以外にも、「福岡日日新聞」連載小説「美しい！」（昭二・四・一一〜同・五・二二）の発見もあったが（「中央公論」二〇一三・八）、そうした新資料が川端文学研究、ひいては近代文学研究においてどのような意義があるか。新聞調査によって確認しえた諸作の中から、特に重要と思われる四作「妻競」「時代二つ」「名月の病」「父」を取り上げて読解を試みることで、検証したい。

## 二 「妻競」<sup>つまくらえ</sup>―「鉢かづき」から「鏡破物語」、ブルースフ「鏡」へ／新進作家川端の自負―

「妻競」は、三七巻本全集第三五巻「解題」（昭五八・二）で、「著者の作品手控一覽」に「大正十三年十二月 都新聞所載「妻競」とあつたが遂に本文を入手出来なかつたと触れられたのみで、『詳細年譜』にもその旨を注記するに留まつていたが、「都新聞」の調査により、大正一三（一九二四）年一月三〇、三十一日の同紙第五面「文藝」欄に（上）（下）の二回に分けて発表されていることが判明した。当時の同欄は三段組だったが、「妻競」は両日ともほぼ一段分、併せて四〇〇字詰原稿用紙換算四枚程の七段落から成る随筆で、水守亀之助「雪解けの日に―脚本と私―」・木蘇毅「創造か発見か（一）現在文藝作品側面観」・「消息」・「来月の雑誌」等が併載されている。川端は数え二六歳、東京帝国大学文学部国文学科在籍中だったが、この前年には「文藝春秋」の同人にも加わり、同紙でも「文藝春秋の選抜十二人」（五月一三日）として取り上げられるようになっていた。この一三年一月には、同紙に初めて「新春文壇の収穫」（前述）が掲載され、『新思潮』年頭復活辞<sup>2</sup>を書き、「時事新報」にも「冒険的未来」（一三日）を発表、その後一五日頃から二月二四日まで伊豆湯ヶ島の湯本館に籠って卒業論文「日本小説史小論」に取り組んでいた。卒論は九二枚で中絶したが恩師藤村作らの恩情により三月に卒業、一〇月には「文藝時代」を創刊し、横光と共に新感覚派運動の旗手となつていった。中絶した卒論は、江戸時代までの日本の古典を羅列し概観した生硬なものだったが、その「序言」部は「藝術解放」三月号に「日本小説史の研究に就て」として発表された。卒論の執筆途上で生み出されたこの「妻競」も、以下に見るように卒論の豊かな副産物であつたと言える。

深川の木場の金持の家で貰つた風呂桶を、頭からかぶつて帰つた十返舎一九や、酔たあげく足鼎をかついて踊り、さて、その鼎が抜けなくて耳と鼻が欠け落ちるほどの痛い目にあつたと「徒然草」に書かれてゐる、お調子者の仁和寺の法師やなぞよりも、同じかづきでも御伽草紙中の「鉢かづき」の少女が私は好きだ。

と、「妻鏡」は長い一文で始まっている。江戸時代の戯作者一九や鎌倉時代の法師の滑稽なエピソードを紹介した上で、「鉢かづき」の少女の話題に移ったかと思うと一転して、第二段落では、「一たい、鎌倉室町時代には、ずるぶん構想の奇妙な小説が多いのだが、私は「とりかへばや物語」と「鏡破物語」と、この「鉢かづき」とを面白いと思つてゐる。」と、新たな二つの物語が提示される。このように思いがけない作品が縦横無尽に文中へ呼び込まれていくのが、「妻鏡」の大きな魅力である。

殊に注目されるのは、室町時代の「鏡破物語」からロシア・シンボリズムの作家ワレリイ・ブリュースフの「鏡」（一九〇二（明三五））へと連想が飛躍しているところである。川端は第三段落で「変な小説」として「とりかへばや物語」を紹介し、第四段落では、「鏡破物語」と云ふのは、近江の国の翁が京に来て、美人の写っている鏡を見て鏡の底にその美人がいるのだと思つて買って帰つたが、妻が見つめて嫉妬した、鏡を破つても弓で射ても消えないものがいるので青くなつて山奥へ逃げていくという小説だ、と紹介している。川端は明示していないが、この梗概は卒論で参照した長谷川福平『古代小説史』（富山房、明三六）のほぼ引き写しであり、時間も逼迫して、湯ヶ島に籠つていた川端は本文を見直す余裕がなかったのかもしれないが、この作品に強い興味を持っていたのは確かである。澁澤龍彦「お伽草子と鏡男」がこの物語を「鏡男絵巻」という小篇」として取り上げ、「何よりおもしろいと思うのは、鏡のような文明の小道具が、この物語のなかで、主要な役割を演じているということ」と注目したのは川端没後の昭和四八年で、その時点でも目に入りにくい作品だった。一方、「この小説は謡曲「松山鏡」が原だもとと云ふ説もある。「鏡」と云ふ、ブリウソフの小説が聯想されて面白い。」と川端が第四段落末尾で作品名と作者名のみさりと触れている「鏡」は、鏡の中の女との争いの末に精神病院へ移された「わたし」の語りによる短篇で、「現実の世界と想像の世界、〈眠り〉と〈現うつ〉、〈生活〉と〈ファンタジー〉のあいだには明確な境界が存在しないという思想」<sup>(5)</sup>で統一したという作品集『地軸』に収められたが、初めて和訳されたのは、同じく川端没後の昭和四八（一

九七三)年の草鹿外吉訳・ブリュートソフ『南十字星共和国』(白水社)だった。同書では「鏡の中―精神病医の記録より」と題して訳された同作は、その後、沼野充義編『ロシア怪談集』(河出書房新社、一九九〇)や東雅夫編『書物の王国11 分身』(国書刊行会、一九九九)にも収録されている。このようにまだ一般に知られていなかった日本の古典と海外の現代作品との二作に着目し、軽やかに「物語合」ものがたりあわせ―「妻競」中に、「今で云ふと合評会月でも相当するやうな物語合は平安朝の昔からあつた」と記している―をして見せたところに、東京帝国大学国文学科在籍の新進作家としての川端の面目も躍如としていると言えよう。そして、この意外な二作を繋ぎ合わせているのが《鏡》のモチーフだったのも見逃せない。

川端文学において、《鏡》は重要なモチーフの一つである。「雪国」の「夕景色の鏡」(昭一〇・一)、「白い朝の鏡」(同)や短篇「水月」(昭二八・一一)等では非現実の美が幻想されたが、そうした川端の《鏡》への強い傾斜(ここでは《鏡》に対する恐怖)をいち早く示した文章としても、この「妻競」は注目されよう。その結びは、

「鉢かづき」を読んで、私はちよつと新進作家を思ふ。新進作家と云ふ名は鉢のやうなものだ。鉢のためにいちめられ世に軽んぜられもするが、鉢があるので命が助かることもある。そして鉢がとれた暁、新進作家の名が取れた暁には、天性の美は輝きださずにゐない。鉢かづき姫が妻競べに勝つたやうな日が、新進作家にも近くめぐつて来やう。

と、第五・六段落で述べた中世の鉢かづき姫の「妻競」における勝利が、第七段落では現代の新進作家の勝利への期待に繋げて閉じられている。「妻競」は、若き川端の瑞々しい感性と自負が感じられる文学的随筆であり、戦後の「とりかへばや物語」口語訳(昭二三・一―七)のみならず、継子譚(貴種流離譚)の「ハッピーエンド」―「鏡破物語」「とりかへばや物語」「鉢かづき」の「三篇とも、ハッピーエンド過ぎるので気抜けがするが」と、「妻競」でも不満は漏らされていた―を踏み破っ

た「住吉」連作や「千羽鶴」「古都」等の執筆（後述、第Ⅱ部第八章五）にも連なるものとして注目すべき作品である。

### 三 「時代二つ」―境界としての首つりの松／境界を侵す子供達―

小説「時代二つ」は、大正一五（一九二六）年七月一九日の「読売新聞」朝刊第四面「よみうり文芸 月曜付録」に、「荷風先生と語るの記」（神代種亮）・「東京新譜」（サトウハチロー）等と共に掲載された。同紙に川端は大正一二年の「二つの時代」と「脂粉の顔」評<sup>(8)</sup>（八月一一、一二日）以来、評論類を何度か執筆していたが、小説の発表はこの「時代二つ」が最初である。川端は同紙に同一五年は「新感覚派映画聯盟に就て」（四月二七、二八、三〇日）、「十月雑誌連評」（一〇月一〇、一二日）も書き、翌昭和二年五月には、川端初の新聞連載小説「結婚なぞ」を一〇回に亘って発表している。

新聞紙面には「短篇」とあるが、量的には原稿用紙にしてわずか五枚の本作は、当時流行していた掌篇と言える。川端はこうしたごく短い小説を特に「掌の小説」と呼んで、「時代二つ」の前月には、「掌の小説」三五篇を集めて処女著作集『感情装飾』<sup>(9)</sup>（金星堂）を刊行している。「独影自命」では、作家としての出発期に集中的に書いた「掌の小説」を、「人間の一つの「解放」を書いた」、「結婚や家庭からの解放」「無知、無道德」「無貞操」を通して「いのちの悲哀と自由」を歌ったと述べているが、上下に分かたれたこの「時代二つ」も、古今二つの時代を語って、《境界》無化に繋がる「一つの「解放」を描いた「掌の小説」と言えよう。「上」は、次のように始まっている。

弘法大師の化身が、病める人々や哀れな人々を救ふために、諸国を遍歴遊ばされてみると云ふ風説が山奥の寒村にも伝はつてゐた。／一人の虚無僧が松の根を枕に深々と若草に埋もれて眠つてゐた。／子供の群がわらびを摘みながら松の木へ近づいて来た。

「弘法大師の化身」が諸国を遍歴しているという風説がまだ流れていた時代と、「山奥の寒村」という舞台がまず示される。季節は春、「松の根」を枕に眠るいわくありげな「一人の虚無僧」に焦点が当てられ、次いで子供の群が登場し、「虚無僧は薄目を開いて青空を眺めた」とテンポよく話は進行していく。

「やツ、首釣りの松ぢや。」／と、一人の子供が腰を伸ばした拍子に松を見て叫ぶと、ほかの子供達も一斉に、／「わツ、」／と、飛退いた。／「お前死ぬぞよ。松の崇りで死ぬぞよ。」

「松の崇り」への恐れが、「近寄ると死ぬんぢや。」「お前先へ行け。」と口々に繰り返される子供達の言葉によって強調される。「誰もこはがつて摘まんから、一ぱい生えてるんぢや」とあるように、わらびが生え茂った「首釣りの松」の辺りは村人達にとって禁忌の場となっている。「首釣りの松」のある「丘」は「旅の僧」が辿り着いた村の入り口であると同時に、村人達にとっては村の果てでもあり、次の場面で「若い男と娘」が首を吊りに来ているように、最も天に近いそこは、生と死とを分かち隔てる境界として描かれている。

こうした「近寄ると死ぬ」という伝承のある松は、古来から各地にあったようだ。近藤健史「境界領域と樹木―古代文学における「松」―」（『語文』一九九一・二）は、その一例として「出雲国風土記」も引用しつつ、「境界的、呪術的な意味」を持つ「松」の古代文学における役割を論じており、本作を考察する上でも示唆に富む。「本来、松は異郷からくる神を待つ樹木であったことから「松」と名付けられた」とも言われており、「天に向かってそそり立つ樹木（松）が天神の降りてくる依代」であり、「他界との境界」でもあったと近藤は指摘しているが、そうした境界性を「時代二つ」の村人達も「丘」の松



に認めていたから、「首釣りの松」と名付けて畏れたのであろう。だからこそ、その根を枕に昼寝する旅の僧（村の共同体に属さぬ外部の者、ある意味で異界のモノ）を当初は大人も子供も口々に「死神」（生死の境界を司るモノ）と呼んでうろたえた。そして、「首釣りの松」を「美しい松ぢや」と称え、「死神」と忌避されても「カンラ、カラ、カラ、カラ」と笑う虚無僧―この笑いは、同月発表の掌篇「帽子事件」の、「上野の山の天狗」とも「不忍の池の河童」とも言われる正体不明の男の高笑いの表現としても用いられており、僧の特異性を示している―がその枝を切落として「崇り」を払うやいなや、「弘法大師様」（異郷からきた救世主）と崇めるようになり、この「大師様」に率いられてならば、「天狗山」の杉を伐つたり、「魔の池」の鯉を獲つたりといった聖域侵犯も恐れなくなったのである。

短い「下」では、「上」の部分が実は子供達の聞いた先祖の「昔話」であったと明かされる。古今二つの「時代」は並置されているのではなく、昔を語った「上」が現代の「下」に組み込まれる入れ子型構造になっている。そしてこの「上」は、聖域を侵すことで富を獲得した先例として「下」の子供達に捉えられ、彼らが隣村や隣家との境界を外に向かって拡張させていく推進力となったのである。

だがこの「二三十人の子供」は「警察へ呼出され」、「村長と、校長と、警察署長とが憂鬱な顔をして並んでゐる前へ立たせられた」。「下」の時代には、「上」の時代には無かった近代国家の象徴としての学校や警察という制度が、子供達の行動を抑止する装置として用意されていたのである。「上」で「こはごは」ながらも松の木へ近寄ったのも子供達であり、彼らの屈託の無さは、「下」でも共同体を維持すべき村長等の憂い顔と対比されてはいる。しかし、定住後も共同体の規範に束縛されなかった「上」の時代の虚無僧のような特権性は、「下」の時代に生きる彼らにはもはや許されない。そしてまた見落とせないのは、「下」の子供達の「勇敢な」行動を支えていたのは「弘法大師」の神話（かつての「風説」）に他ならず、それは、「首釣りの松」「天狗山」「魔の池」といった神話自体は否定しなかった「上」の時代の山奥の寒村の民の心性を受け継いだ

ものでもあったが、もはや「下」の大人達はそうした神話を持ってなくなっていることである。大正末年の都会の知識人である作者川端は、二つの時代の語り手として、「どこか遠くの国を遍歴してゐる新しい弘法大師が助けに来てくれることを、信じて疑はぬ寒村の子供等の夢が迷妄に過ぎぬことも、彼らにしても生い立てばそうした夢を持ってなくなることも分かっている。そこには、神話を持たた「上」の時代の村人達や「下」の時代の子供達への、憧れも苦さもあつたらう（後述、第六章）。しかし、反復が多用された会話文と、「た」止めで統一された地の文とから成るこの掌篇では、「いのちの悲哀と自由」が、感傷を交えることなく淡々と語られ、閉じられていたのである。

川端は戦後の「大樹」（昭二六・一）に、「私は大木や老木が好きである。何歳ごろから好きになつたのか、日本国中や地方別の大木名木の写真帳や目録などを買ひ、それを見て歩きたいと思ひ、自分でも大木や老木の写真を取つたりした。」「老木や大木に私がひかれる心は書くのがむづかしい。自然と人間との象徴としてであらうが……。」と記したが、既に昭和一二年の軽井沢集会堂での文化学院夏季講習会講演「信濃の話」（「文藝」一〇月号発表。後述、第Ⅱ部第八章二）でも、「文学の話よりも木の話の方が気が楽」として、「木に乳垂銀杏とか、連理の松とか、化粧柳とか、名前をつける、その名前をつけることには、人間の気がある、これがとりもなほさず文学」で、そこから「文学は出発」しているが、そこにまた「文学の永遠の悲しみ」もあり、「喜び」もあると話している。そうした「名木」をテーマにした初期作品としても、この「時代二つ」は注意されよう。

#### 四 「名月の病」―「山猫のやう」な少女と「猿のやう」な妻／名月への昇天―

「名月の病」は、先の「時代二つ」と同年の大正一五（一九二六）年一〇月三日「都新聞」第一面「文藝」欄に発表された。同欄にはそのちようど一月前に「朝の爪」も掲載されていたことも新たに判明したが（前述）、川端自身が「掌の小説」

に分類している「朝の爪」と同じく原稿用紙で三枚程度の「時代二つ」も、やはり「掌の小説」の一篇と位置付けられる。「朝の爪」では「いよいよ明日結婚出来るぞ。」と恋人から告げられる貧しい娘が描かれたのに対し、「名月の病」では温泉宿に妻と滞在中の（彼）が描かれている。川端自身も「朝の爪」発表後、九月半ばから伊豆湯ヶ島の湯本館に逗留し、本作を発表した一〇月上旬に一時上京した後、（松林）秀子を迎えて湯本館での暮らしを始めている。同館は先行する「伊豆の踊子」でも踊子達を二度目に見た宿として描かれているが、同じ舞台をモデルとして用いながら、「名月の病」は随分と毛色の変わった不可思議な掌篇となっている。名月の夜の出来事とその短い後日談との二段から成っているが、

「北京にはずるぶん奇怪な病気がありますね。」／「へえ。」／「目玉の飛出す病気がありますよ。」／彼は同じ温泉宿の客と碁を打った後で、支那漫遊談を聞いてゐた秋の夜である。

と、「秋の夜」の温泉宿で、バセドウ病を想起させるような「目」にかかわる北京の奇病の話（彼）が耳にするとところから始まっている。いったん自分の部屋に戻った（彼）は、内湯に入った後、「月の光が一ぱい」の夜更けの川原へ向かう。そこで目撃した「奇怪な」出来事は、次のように描かれている。

彼は湯を出て川原へ妻を迎へに行つた。橋の上から外湯を見た。外湯に大きい満月が浮んでゐた。さつきの少女が湯から胸を出して山猫のやうに目の前の月を睨んでゐた。かぶつと月に噛みついた。そして、頬を膨らませながら力一ぱいに湯を吹出した。月のかけらが銀の砂のやうに散つた。／それから、少女は山猫のやうな姿で、湯の面が静まり月が円く整ふのを待つてゐた。また月を食つて吐出した。／彼は橋を渡つた。妻が岩に片手を掛けて谷川の上へ倒れかかりながら、

水の上の月をふうふう吹いてみた。猿のやうに口をとんがらせて吹いてみた。

続いて「○」で区切られた第二段落となる。

その夜から山の少女は二日病つて死んでしまった。／彼は妻がかかりつけの婦人科の医者と思ひ出した。／「どうも汚ない女ばかりをいぢつてゐるので。」と、その医者は云つてゐた。／そこで彼は手紙を書いた。

第一段落の冒頭と同じく一文ごとに改行され、畳みかけるように物語は展開する。そして、医者「御意に適う患者」として、「名月」を飲んで「頓死したる山の乙女」と後述の「溺死」した「秋の蛾」とを知らせる（彼）の候体の手紙で、掌篇は唐突に閉じられている。こうした奇妙な病と死に満ちた世界を皓皓と照らし出していたのが、谷川の「大きい満月」だった。

月と言え、ギリシア神話には、月の女神・処女神ディアナが森で沐浴しているのを王子アクテイオンが垣間見て、鹿に変えられるという話がある。川端にはギリシア神話に取材した「ナアシツサス」(昭二・一一)、「抒情歌」(昭七・二)、「虹いくたび」(昭二五・三〇二六・四)等の作品があり、「名月の病」と同月発表で、やはり《月》をモチーフとしている「犠牲の花嫁」に、鹿に化ける人物が登場しているのも気になるところである。満月の夜に外湯の少女を垣間見る「名月の病」の作品の着想は、ギリシア神話が一つの契機であったと考えられる。

だが「支那漫遊談」、殊に北京の奇病の話題から始まる「名月の病」では、より直接的には月をめぐる中国の複数の故事が踏まえていることは見落とせない。ここで注目されるのは、「名月の病」発表直前の九月に、川端が『支那文学大観 第八卷』(支那文学大観刊行会)において「唐代小説」一四篇<sup>(11)</sup>の翻訳を発表していることである。同巻には「新思潮」以来川端

の文学仲間であった鈴木彦次郎と今東光も翻訳を執筆しており、<sup>(12)</sup>他の巻には芥川龍之介・谷崎潤一郎・佐藤春夫といった作家も翻訳を担当している。川端がこの翻訳に取り組んだ背景や川端訳の特徴に関しては既に幾つかの論文もある<sup>(13)</sup>ので本稿では触れないが、この時期に中国文学への川端の関心が高まっていたであろうことは看過出来ない。

川端が後年色紙に好んで書いた「掬水月在手」は、唐の詩人千良史の詩「春山夜月」の一節で、「水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香衣に満つ」は禅語（『五祖法演語録』）としても知られているが、「名月の病」では橋の上から見た「山猫のやう」な少女と、橋を渡って見た「猿のやう」な妻とが対比的に（彼）に捉えられている。この「岩に片手を掛け」た妻の姿は、「猿猴捉月図」として日本でも古来から親しまれた猿猴（猿）の姿そのものであり、川端の戦後の小説「北の海から」（昭二五・一二）でも、次のように大きく取り上げられている。

水のなかの月をつかむやうに、ほんたうにあの人と私との二匹の猿が小枝にぶらさがって手をつなぎのぼして、水にうつる月を掬はうとしてゐる絵のやうに、たとひ流れ散る月かげでありませうとも、せめては冷たい水に入れた私の手のなかに月を浮べたいと思ひます。人の姿でも人の心でもありません。私が水のなかの月かげでございませう。

「みづうみ」（昭二九・一〇―一二）着想の源に「猿猴捉月図」があつたとして、「北の海から」も引用しつつ戦後の川端を論じたのは谷口幸代だが、<sup>(14)</sup>「猿猴捉月図」への川端の強い関心は、既に「名月の病」時点にあつたと指摘できる。谷口は言及していないが、川端の父や川端自身も画家を志したことがあつたのみならず、川端の叔父秋岡義一（前述（第一章二））した義愛の父）が日本画家・橋本雅邦のパトロンをしていた縁で、雅邦の弟子・河内雅溪に川端の一高時代の保証人を頼んでもおり、川端が早くから「猿猴捉月図」に親しんでいた可能性も十分にある。釣り好きの雅溪が大正一五年の秋（「名月の病」

執筆の頃)にも釣りに来て湯本館へ泊ったことや、湯本館には画家がよく来ることなどが「伊豆の踊子」の装幀その他(昭二・五)にも記されており、そうした画家たちとの間で「猿猴捉月図」が話題になったこともあったかもしれない。

この「猿猴捉月図」には、水ではなく空の月に向かって手を差し伸べるものもあるが、「名月の病」に先行する掌篇「月」(大二三・一二)の末尾で、童貞を重荷に感じていながらも捨てられない〈彼〉が、

空を仰ぐと満月だ。月が明るいで月が空にたつた一人だ。彼は両手を月に伸ばした。

「ああ！ 月よ！ お前にこの感情を上げよう。」(傍線引用者)

と都会の満月に向かって両手を伸ばす姿も一つの捉月図と見え、この掌篇「月」を掉尾に置いた『感情装飾』は、あたかも月(満月)に「感情」をお供えしたような形で編まれているとも考えられる。また、共に掌篇である「月」の〈彼〉と「名月の病」の「妻」とは、二幅の「捉月図」として対を為しているとも言え、後述する川端文学における〈月〉のモチーフは、『感情装飾』刊行後も「犠牲の花嫁」と併走しつつ、「名月の病」執筆へと連なり、展開していったと考えられるが、その密かな繋ぎ目には「猿猴捉月図」があったことを確認しておきたい。

ところで故事「猿猴捉月」では水月を取ろうとした猿が溺れ、叶わぬ望みを抱く愚かしさが戒められるのだが、「名月の病」では「猿」に見立てられた妻ではなく、月を飲んだ少女が病死する。そして、火に入る夏の虫のようにインク壺に映った月を目がけて飛んだのか、秋の蛾も溺死していたのを〈彼〉が発見する。では、川端独自の設定と言えるこの二つの死は、何を意味していたのだろうか。

「蛾」は三日月の状態も形容するが、中国で中秋に祀られる月の女神・嫦娥じょうがの「娥」をも連想させる。嫦娥の母・常羲は

帝俊の妻で、一二個の月を生んで月を洗ったと言われ（『山海経』）、仙女だった嫦娥が地上に下りた際に不死ではなくなったとも伝えられている（『淮南子』、後述）。不老不死の薬を盗み飲んで（その理由については様々な伝承がある）月宮へ逃げ去ったとされる嫦娥は、時代が下るにつれ、月中で孤独をかこつ憂愁の美女と考えられるようになり、唐詩にもしばしば詠まれ、日本にも紹介された。

例えば、夏目漱石の「草枕」（明三九）にも「桂の都を逃れた月界の嫦娥が」と李商隱の「嫦娥詩」への言及があるが、「名月の病」掲載と同年の八月一六日「都新聞」の「月曜読物」で「月百姿」が二面を使って特集された際にも、「藤原衛彦氏談」には「ダイアナ処女身を見て呪はれた男 小鹿に化したアクテイオン」と共に「嫦娥の美しさに憧れ天上した玄宗帝」といった中見出しも付けられている。また、大蘇（月岡）芳年「月百姿」の中から「孤家月」「捨小舟」二枚の絵の写真も併載されているが、芳年の「月百姿」には「嫦娥奔月」もあり、嫦娥を描いた一枚として知られている。

嫦娥（常娥）について川端が明確に言及したのは、戦後の小説「明月」（昭二七・一一）である。「仲秋の明月」に生まれて美しく生い立った姪の月子をいとおしむ（私）が、漢文学者が夕刊に書いた「月と兎」という随筆に目を留めたとして、紀元前四世紀の「楚辞」に月の腹に兎がいるとあること、白楽天が月の「白兎は薬をつく。」と歌ったが、薬は不死の仙薬であること、紀元前二世紀の「淮南子」には月の中に蝦蟇がいて月を食うとあることと共に、「嫦娥といふ妻が、西王母から夫のもらつて来た不死の仙薬を盗み飲んで、月のなかへ逃げ去つたといふ伝説」についても触れている。ここに記されているのは「玉兔搗藥」「嫦娥奔月」といった中国の故事だが、川端は戦前の『竹取物語 堤中納言物語 とりかへばや物語』序文（昭一二・二・八）でも既に、「先学の考証研究」として「竹取物語」の出典の一つに「嫦娥伝説」を挙げている。「名月の病」に先行する卒業論文「日本小説史小論」（大一一三・三、前述）でも、「竹取物語」を立項して、「支那の神仙譚に負ふところ多く」「漢文学や仏書の恩恵が多すぎ」、「作者の美しい空想と思はれたのは、作者の学識で」、「平安朝時代の外来思想の浸

潤の程度に就ては、津田左右吉氏の「文学に現れたる我が国民思想の研究」の「貴族文学の時代」なぞに、縷説されてゐる。」と指摘もしているから、「名月の病」執筆時にも嫦娥に関する知識は当然あったと考えられる。だが注意すべきは、「明月」でも月子をかぐや姫になぞらえていたように、川端の関心は「竹取物語」との関連に焦点化しており、川端が強く惹かれたのは嫦娥の奔月ではなく、結婚を拒み続けたかぐや姫の名月の夜の昇天であつたということである。

「昨日山から来たばかりで、温泉に慣れて居りませんから、恥しいんでございませう。」と宿の女中に言われる「名月の病」の少女は、湯殿に下りて来る作品登場時には「一六七の女中」とあつたが、「裸になつて裏へ出た」場面では「彼女」、前述の外湯の場面では「少女」、その死後に書かれた〈彼〉の書簡中では「山の乙女」と呼び方が変化しているのも見落とせない。女中の一人に過ぎなかつた少女は、混浴の内湯には入らぬまま、名月の夜から「二日病わづらひつて死んでしまつた」ことで、〈彼〉の中では八月の十五夜（中秋の名月）に昇天したかぐや姫と同じく、聖処女（天つ乙女）として昇天したかのように変容していったことを物語っている。そうした視点に立てば、月を希求した掌編「月」の童貞の〈彼〉と、この「名月の病」の（処女と思しき）少女も呼応していると言えよう。

「名月の病」では、婦人科医に「汚ない女」と呼ばれる娼婦達―川端も小説「温泉宿」（昭四・一〇―五・三）等で「曖昧宿」の女達を描いている―を底辺として、宿の女中、彼の妻、「山の乙女」と、〈彼〉によつて女が四層に弁別されている。そして少女も蛾も、名月を求めて死ぬことで医者「御意に敵ふ」清らかな「患者」となり得たと〈彼〉が考えているように描かれている。名月に魅せられて狂わされたのか、この野生の少女は「山猫のやうな姿」で名月に噛み付くのだが、中国の金華地方には月光の精気を吸収して妖化する家猫の伝承もあり、中国に限らず、猫には女性的なイメージが強く、多くが女神や女性の魔物であり、猫の眼は月に喩えられてもいる。

また中国には、月宮から零れた嫦娥の明珠が水中で光を放ち、川で洗濯をしていた農婦・施妻の口へ飛び入り、身ごもつ



た施妻は美しい女兒、後の西施<sup>(16)</sup>を産んだという伝説もある。水に映る月影を飲むことは月の精を体に入れることとされ、月神の申し子が生まれるとか、半月や月蝕の夜に身籠った子は「片輪」になるとかいうのは「世界的な信仰文化の一環」とみられてもいる<sup>(17)</sup>。であれば、婦人科にかかっている〈彼〉の妻が名月の夜にとった奇怪な行動は、妊娠を望むが故であったと推測される。月を全身で飲んで死んだ少女と異なり、月を吹くのみで「一命」を取止めた〈彼〉の「愚妻」は、子を産もうが産むまいが、この先も昇天することなく、「妻」として《橋》のこちら側の現実世界を生きていくと想像される。

戦後の「独影自命」で川端が自身の最初の「伊豆の小説」と振り返っているのが、「名月の病」前年に発表した「白い満月」(大一四・一二)であったように、伊豆滞在の当初から《月》、殊に満月は川端の大きなモチーフだった。以降も川端は、長く過ごした湯ヶ島の月を随筆や小説で度々書いている。混浴を恐れる十四五の娘に「浴室から新しい夫を呼ぶようになる前に」月の宮へ行って水晶の化石になれ」と、処女性喪失を嫌悪する「温泉女景色」(昭三・八)の〈彼〉は、「名月の病」の〈彼〉のその後を思わせる。「月光を音立てて蹴散らし」、「馬もろとも矢のやうに空の月目がけて飛んで行く少女の野生の美を描いた「馬美人」(昭二・五)については、川端が『支那文学大観』(前述)で訳した「神女伝」中の「蚕女」との共通点も指摘されている<sup>(18)</sup>。「蚕女」は川端初期の新聞連載小説「海の火祭」(昭二・八・一三〇―一二・二四)から戦後の「白馬」(昭三八・八)へ連なる《馬と娘》のモチーフの淵源ともなっているが、蚕は「蛾」の幼虫である点でも、少女の昇天という共通項を持つ「馬美人」は、「名月の病」との関連性が深い掌篇であると言えよう。こうした中国の古典と川端文学との関連は、今後の研究課題の一つであることを指摘しておきたい。

月を巡る「竹取物語」に「高い清純さ」と理想への「憧れ」を読んだ川端は、戦後も前述の「北の海から」「明月」の他、随筆連載「月下の門」(昭二七・二一―二二)も執筆している。その中の一篇「月見」では、

私は月があれば月を見る。しかし月を見ると、いつも日本のかなしきといふやうなものが身にしみる。月の古文学を思ひ出すからとはかぎらない。月や夜空そのものから感じるの、それはむしろなさない自己嫌悪をとまなふ。

と述懐しているが、晩年近いノーベル文学賞受賞記念講演「美しい日本の私」（昭四三・一二・一二。後述、第Ⅱ部第八章六）では、月を詠んだ道元禪師や明恵上人の古歌も引きつつ、「月を見る我が月になり、我に見られる月が我になり、自然に没入、自然と合一してゐます」と語つてもいる。そうした我と月との一体化は「北の海から」にも通じるものであるが、その源は「名月の病」の月を求める少女と蛾も、或いはその先行作「空に動く灯」（大二三・五）——「人間が死ぬのは月夜であつて、花でも飾つた小舟が、死人を月へ迎へに大空を流れてくるのだといい。」、「人間が、ペンギン鳥や、月見草に生れ変るといふのでなくて、月見草と人間が一つのものだといふことになれば、一層都合だがね。」と（友人）に願望を饒舌に語らせている——の、月を見る月見草と人間も皆「合一」<sup>(19)</sup>して月夜に昇天していく幻想にあつたと言えよう。川端初期の主客一如・万物一如の思想については羽鳥徹哉が論じているが、死へと誘う月光の下、少女と蛾を等し並みに眺める（彼）もまた、或いは名月による目の病に犯されていたのであつたらうか。

補足となるが、川端と同じノーベル賞作家ルイジ・ピランデッロ（ピランデルロ）が、題の類似した「月の病」を「名月の病」に先行して書いていること、また「名月の病」にやや遅れて、魯迅が「奔月」を発表していることにも触れておきたい。

「月の病」（「Male di Luna」）は、一九一三（大正二）年九月二二日に「コリエーレ・デッラ・セーラ」紙に掲載された短篇で、「十五夜」（「Quinta decima」）と改題して一九二五（大正一四）年にベンポラード社から、一九三三（昭和八）年に

モンダドーリ社（一九三八（昭和一三）年新版）から刊行され、同作をベースにしたオムニバス映画「カオス・シチリア物語」（一九八四（昭五九）年）も作られた。

ピランデッロの戯曲は岩田豊雄（獅子文六）らによって早くから日本に紹介され、演劇関係者らに大きな影響を与えており、演劇に革新をもたらす作品として高い評価を得ていた代表作「作者を探す六人の登場人物」は築地小劇場で大正一三（一九二四）年一〇月に初演された。川端も、「非常に面白いと前から聞いてゐて、脚本まで読んで楽しみにしてゐた」（「ほかの芝居は見ない」<sup>20</sup> 大一四・一・一）と述べ、昭和元（一九二六）年三月「少女と文芸」でも築地小劇場で近頃上演された戯曲としてピランデッロ「各人各説」を大きく取り上げるなど、同時代人として注目している。このことから、川端が「月の病」について何らかの情報を得ていたことは十分考えられる。内容は全く異なるものの、ピランデッロの「月の病」というタイトル（もしくはそこに描かれた、満月の度に狂うという病）が「名月の病」発想のヒントになった可能性もあろう。妻が長く精神病院に入っていた彼の作品には狂人やそれに近い人物がしばしば登場するが、彼の描いた狂気や近親相姦は、この当時の川端の「白い満月」（前述）や「狂った一頁」（大一五・七。衣笠貞之助監督による映画も同年九月二四日に公開された）でも大きなテーマとなっていることも付言しておく。

一方、魯迅「奔月」は、日を射た羿の神話と、羿が西王母から貰った仙薬を盗んで月に逃れて月精となった嫦娥の神話を、『淮南子』『列子』等を材料にしてアレンジした小説で、川端の「名月の病」直後の一二月に発表され、『故事新編』<sup>21</sup>（上海・文化生活出版社、一九三六（昭一一）・一）に収録された。ほぼ同時期に日本の川端と中国の魯迅が同じ故事を踏まえつつ、全く異なる相貌の創作を發表している点も指摘し、今後の比較文学的課題としたい。

## 五 「ちよ物」系譜中での「父」―感傷的な〈私〉から〈彼〉への変貌―

「父」は川端が「東京朝日新聞」に初めて発表した小説だが、やはり全集未収録、未刊行である。先の「名月の病」と同日（大15・10・3）の「東京朝日新聞」日曜朝刊第七面「読書頁」に、石原亮の詩「くも」、エミイ・レエデル作の彫刻「馬」（「ドイツ現代美術展出品」と付記あり）の写真と共に掲載された。「馬」は親子を思わせる二頭の彫刻作品だが、後述するように小説「父」は親子関係を焦点とした作品であり、文中に「昔馬市で栄えた」ともあるので、ある程度「父」を意識しての掲載であったかもしれない。

「東京朝日新聞」朝刊では、大正末から昭和初めにかけて短篇小説を随時掲載していた。紙面に「短篇」と冠されているものもないものがあるが、「父」は後者である。川端はこの後同紙に、「貧者の恋人」（昭二・五・五、木曜。前述）、「盲目と少女」（昭三・二・一七、金曜）、「日本人アンナ」（昭四・三・九、土曜）といった、いずれも自ら「掌の小説」に分類する作品を発表しており、原稿用紙八枚の「父」もその一篇と考えてよからう。内容的には、習作期も含めて十数年に亘って書き続けられた「ちよ物」である。川端は、五〇歳を記念した戦後の新潮社版一六巻本全集（昭二三・五〇二九・四）で初めて、伊藤初代（ちよ）との一件を記した当時の日記を「よく生まれなかった作品の影」としてその長い「あとがき」（後の「独自自命」）に引用し、「草稿のつもりで作品集には入れずにおいた」（「同」）数篇も収録し、「海の火祭」第六章「鮎」（後述⑭）を「はなはだ物足りない」（「同」）としながらも「南方の火」として纏めることで「ちよ物」再執筆を最終的に断念した。初代との恋愛事件から三〇年、「再生の第一年」（「同」）と意識された戦後まで川端が長く拘り続けた「ちよ物」だが、作家伝的興味からの言及のみが多く、作品として論じられることは少なかった。「あつけなく、わけもわからずに破れた」（「同」）とされる破約の原因等については、初代側の資料も含めて検証されねばならないだろうが、やはり問われるべきは、川端が体験をどのように作品化したかであり、その作品化が川端に何を齎したかであろう。本節では、全集未収録作品「父」を「ちよ物」系譜に新たに加えて考察することで、作家川端を探りたい。以下に、主な「ちよ物」及び関連作品を挙げる。

(執筆年月未詳) ① 「絵葉書(習作)」

大正一二年 ② 「南方の火(一)」(八月)、

一三年 ④ 「篝火」(三月)、

一五年 ⑦ 「伊豆の踊子」(一・二月)、

⑨ 「彼女の盛装」(九月)、

昭和二年 ⑪ 「処女作の祟り」(五月)、

⑭ 「鮎(「海の火祭」六)」(一〇月九日〜二九日)

六年 ⑮ 「二重の失恋」(一月)

七年 ⑯ 「父母への手紙(第一・二信)」(一・四月)、

九年 ⑰ 「南方の火」(七月)、

一五年 ⑲ 「母の初恋」(一月)

③ 「日向」(二一月)

⑤ 「生命保険」(八月)、

⑧ 「伊豆の帰り」(六月)

⑩ 「父」(一〇月三日)

⑫ 「霰」(同)、

⑬ 「時代の祝福」(六月以降)

⑰ 「父の十年」(六月)、

⑲ 「浅草に十日ゐた女」(七月)

## 1 〈彼〉の誕生―「生命保険」「非常」から「父」へ―

掌篇ながら、「父」は初代との婚約から破約までを初めて描いた作品である。中軸になっているのは、父忠吉を尋ねての盛岡「岩谷堂行」(「独影自命」)を素材とした部分だが、この大正一〇年一〇月二九日の岩谷堂小学校訪問を最初に題材にしたのは⑤の掌篇「生命保険」である。⑤では、〈私〉(西田)の回想の形で、友人と共に雪深い山に娘の父を訪れた日とその翌朝、及び都会に戻って二、三日後の歳晩に、大病院の副院長と歩いた夜更けを語っている。娘の父は事実と異なり「牧師館」

の小使と設定され、他の「ちよ物」には登場しない副院長が描かれている。娘の父に「西田の父は戦死した」と偽ったのは友人だが、〈私〉は余りにも細い腕を娘の父に隠していた自らの「狡猾な卑屈」を思い、「父母の顔さへ知らぬ孤児」であることを娘に話さなかった「自責の念」にかられる。また副院長からは、「影が片輪だね。心の影がさ、小さい時からの境遇がいかなのだよ」、「(早死した親の子は早死するかもしれないなど) お前は迷信家だよ。迷信家だよ」とも、「生命保険があるよ」とも言われ、「若い学生の身空」で生命保険を「非常な名案」らしく思う自分が「情けなく」もなる。

このように小説「生命保険」の焦点は、娘の父訪問で顕在化していく〈私〉の孤児意識、殊に《生命保険》に集約される早逝の怯えにあり、孤児である自己と常に向き合わざるをえない〈私〉の在り様が、虚構を交えて追及されている。一方、家出して三年になる娘については、「自分に言葉をかけてくれる男を拒絶することをまだ知らない程若い年頃」で、「胸が、わくわくして夢のやうになづいたただけの話である」と、〈私〉の側からごく表面的に言及されるのみで、娘からの破約はただ描かれていない。

次の⑥の短篇「非常」は、破約を題材とした最初の発表作である。あなたに話せないというみち子の事情は明かされず、その心情を探る手掛かりも、先行作「生命保険」と同じ〈私〉(北島友二)の回想という形式の制約の下、「非常」と記した大正一〇年十一月八日の手紙の他には極限られたものしか提示されない。「みち子の実父が手紙で言つてやつたんぢやないだらうかね。あの時承知はしたものの―」という友人の言葉に、「北国の小学校の寂しさうな小使の姿」を心に浮かべ、「あの男か、あの男の家庭に暗い影があるのだらうか」と〈私〉は考えてもみたが、対面したみち子に初めて「現実の苦痛」を認め、〈私〉の「空想の感傷」に「拉きつづぶ」されての破約だったと受け止める。そして、〈私〉がそう理解した時点で、みち子は口を開かぬまま、作品は突然のように閉じられている。

だが語り手は、〈私〉が結婚に過分の「夢」と「空想」を抱いていたことを、手紙が届く以前を回想する冒頭から明確に示

していた。「すべての女の女らしい人情だけに目をつけてゐる」、「(上京の日を報せる) 手紙が来さへすればいいのだ。なんとかして、みち子が東京に来てしまひさへすればいいのだ」(傍線及び括弧の補足は引用者) という箇所や、更には、岐阜へ向かう車中で「空想」に傾いていく場面でも、独善的な〈私〉の在り様が、執拗なまでに語られていた。言うならば、「空想の感傷」に浸りがちな自己の性情こそ破約の原因であったという認識に立って語り起こされていたのであり、そうであつてみれば、もはやみち子の側の事情は〈私〉には問題でなく、そうした自己発見を語り終えた時、必然的に〈私〉の物語も終わったのである。しかし、前作「生命保険」と異なり、結婚への「空想の感傷」に耽つていた自己に突き当たつた⑥「非常」の〈私〉からは、その感傷の根にある筈の孤児としての閱歴が剥奪されていた。そうした〈私〉の描き方は、心情は十分に辿れないながらも、経歴が初めて明らかにされたみち子の描き方と、対照的だつたのである。

では、「非常」では示唆にとどまつていた「岩谷堂行」を、破約の直接的な契機として新たにクローズアップした⑩の本作「父」ではどうか。「彼女の父親のことをちつと考へてゐると、親子のつながりといふものの感じが胸にしみ込んで来て、自分が目の下の早瀬に乗つて遠くへ流されてゐるやうな気持だつた」の一文に、〈彼〉のやや特異な感性―先行作「神います」(大―五・七)にも、「彼はさうさうと流れる谷川の音を、自分がその音の上に浮んで流れてゐるやうな気持で聞いた」という類似した表現がある―が垣間見えるのみであるかのような描き方になつてはいるが、題名にも示されているように、「父」は終始「親子のつながり」をめぐつて展開しており、〈彼〉はこの「親子のつながり」から弾き出された者として位置付けられていたと考えられる。

「父」は、序破急を思わせる三段落構成になっている。第一段落の岐阜市の「河添ひの宿」での婚約の場面では、まず〈彼〉の問い掛けによって、婚約したばかりの彼女の父の名(作治)と住まい(岩手県の片田舎)とが明らかにされ、〈彼〉が「貧しい一人の農夫を頭に描いた」ことも記されている。父の姓(田中)と娘の名(君子)も第二段落で分かるのだが、〈彼〉の

名は最後まで伏されている。先行作ではいずれも〈私〉は命名されていたが、「生命保険」では父娘が無名、「非常」では父のみ無名だったことを考え合わせれば、「父」では冒頭から彼女の父の存在がクローズアップされていたと言えよう。だが、その父以上に読者に印象づけられるのは、「養家を踏つけても仕方がない」と考える一方で、「実の父から直接にもらひたかつた」、「実の父と縁を切らせるのは、彼女のためにさびしい気がした」と、殊更に実の父を問題にする〈彼〉である。

同じ婚約の場面を描いた先行作の④「篝火」では「君も知ってゐる通り僕には何も無いし、君はお父さんがあるが……」と触れられるのみで、戦後の「南方の火」(前述)でも同様であり、⑨「彼女の盛装」でも「実父や養父母の承諾も得て」と実父は養父母と同等でしかなく、掌篇の③「日向」や⑬「時代の祝福」(前述、第一章四)ではそうした言葉さえなかったのに比し、本作における〈彼〉の父に対する拘泥は特異である。この〈彼〉に対置されているのが、父のことに触れられるや大きく動揺する〈彼女〉である。第二段落で父が語る五年に及ぶ音信不通の状態も、〈彼女〉の拘泥とも読めよう。その時の〈彼〉は、語り手によって説明される〈彼女〉の複雑な胸の内を全く見ていない。〈彼〉は、「彼女の父が土よりほかの物ではよごれてゐない農夫」であるように、彼女が親子関係で「濁る」ことのないように、という強い願望に支配され、「親子のつながり」に独り思いを凝らすのみだったのである。

次の第二段落では、「昔馬市で栄えた名残のために一層やせてゐた」父の町に舞台が移動し、鶉飼の季節から寒々とした季節へとやや時も移ろい、その間の経緯も簡単に語られる。養家から結婚することが出来ないと知った彼女は、彼が「自分のところへ来てから父のところへ行け」と幾ら言つても「一度国へ帰つてから」と言い張り、「娘の口から結婚の約束をしたと父にははせるのは、彼女の父に彼女を不良少女らしく思はせることになる」と思つて、〈彼〉は父の町へ急いで来たという。換言すれば、〈彼〉は父と娘の「親子のつながり」を純に保とうとしたのだが、「一目見て」分かる程、血の濃さを思わせる彼女の父は、〈彼〉が婚約の証拠に持参した娘の写真を見て涙をこぼす。先行作「生命保険」における孤児の〈私〉が、「娘



を渡せと脅迫してゐるやうな気持が挫けて、少し悲しくな」つたのと同様、「父」の〈彼〉も、「目を閉ぢ」、「くぢけてしま」う。娘に対する父の深い思いにぶつかって、親子の絆を軽視していた自身の強引な言動を省みつつも、その絆から疎外されている自己を見せつけられたのである。結婚を承知したその翌朝、〈彼〉の車を「いつまでもたゞずんで」見送る父の姿を、「近づいてくる寒さを恐れて身を伏せてゐるやうな東北の町」に溶かし込んで、この段落は終わっている。

最後の第三段落では、まず三つの短いセンテンスで、父訪問が引き起こした波乱を畳み掛けるように語る。先に〈彼〉が来訪を娘に秘してほしいと父に駄目押ししたのも、「四人づれの物見遊山気分で、みすばらしい父を見たことを、娘自身のやうに恥ぢてゐる」たからだったと明かされ、彼女の「あおざめて」「すさまじい剣幕」に、〈彼〉は「彼女の自尊心」をひどく傷つけたと知る。

「ですから私、父を呼寄せて一緒に暮しますわ。芸者になつてやるわ。うんと墮落をして父を養つてやるわ。そしたら、あなたと父と、お二人で泣いてくださいますわね。」―彼女の言葉通りに、「おことわりをしたから」「国へ帰つて真面目に暮せ」と彼女の父が言ってきたのか、〈彼〉にも読者にも不明のまま、後の「雪国」の駒子の「あの子があんたの傍で可愛がられてると思つて、私はこの山のなかで身を持ち崩すの。しいんといひ気持」（「手毬歌」昭一一・五）という言葉にも遠く響いていくやうな、他の「ちよ物」にはない彼女の激しい台詞で、作品は急速に収斂している。それは、「親子のつながり」に甘い夢を抱き、結婚によってこれに働きかけ、加わろうとしていた〈彼〉が、現実の激しい感情を初めて叩き付けられた瞬間であった。「彼女のために」というのは自己欺瞞に過ぎず、しかも、彼女と父との「親子のつながり」は、〈彼〉には理解できず、手の届かぬところにあつたのである。

「親子のつながり」に対する〈彼〉の感傷は、⑥「非常」で〈私〉自身が初めて「客観」させられた結婚に対する「空想の感傷」と同様、⑤「生命保険」で描かれた孤兒的来歴によると考えられる。だが、⑩「父」も⑥「非常」も、⑤「生命保

「険」にみられたような孤児としての〈私〉の造型が目指されていたのではなかった。そして、より私小説的な⑥「非常」が自明のこととして〈私〉の外的説明を省いたのとも異なり、むしろこの「父」では、〈彼〉を背後に退かせることで、父への強いコンプレックス故に〈彼〉を拒み、父と〈彼〉とに「泣いて」もらう為に父を呼び寄せ、芸者になって墮落してやるという彼女と、故郷で娘をひとり思うしかなかった父との、悲しい愛の絆が前面に据えられていた。そして、「親子のつながり」への感傷故に彼女と正面から向き合えず、ついにはその感傷という逃げ場さえ失う〈彼〉が、突き放して描かれたのであった。彼女等を照らし出していた筈の〈彼〉は、いつしか彼女等にその弱さを照らし返されていたのである。

以上のように、⑤「生命保険」の〈私〉(西田)と無名の娘は、⑥「非常」の〈私〉(北島)・娘(みち子)を間に挟んで、⑩「父」の無名の〈彼〉と彼女(君子)へと、二者の描き方の変化には方向性が認められた。表層的な重心は、〈私〉の側から彼女の側へと次第に移行し、〈私〉を〈彼〉として対象化する視点を持ち得た⑩「父」では、〈彼〉と彼女、彼女の父の三者が抱え込んでいる領域のズレも明確に描かれ、そのズレに無自覚であった、或いは「目を閉ぢ」続けようとした〈彼〉の感傷は、作者によって打ち砕かれようとしていたと言える。

大正一〇年一〇月、理由不明の初代の拒否にあった川端が、自分なりの解釈を試みることで不条理を克服しようとして直面したのは、己の根にある孤児の感傷であったようだ。当時の日記には、「孤児感傷」「新晴」「非常」等千代物を書かうとしきりに口にす」(大一一・四・三。「独影自命」引用の際には、「孤児感傷」は削除され、読点の補い等あった)、「新思潮のために書かんと思へる「孤児」、みぢめを<sup>マ</sup>表白する気して、書くこと厭になる」、「独居のとき、なすこと思ふこと、些少なことに、いやしき現る。孤児根性、下宿人根性、被恩恵者根性」(大一二・一・六)、「岐阜一件のごとき、早く書き終へ、やがて新しき方に向ひたし」(同・同・七)といった記述が続く。大正一二年一月二五日の日記には、初代が帰郷したとの噂に、「岐阜にありて不幸なりし時、千代しきりに父と妹を思ふ。余とのことの中も父と妹を思ひ居るに一寸不平なりし。今また

久しく父と妹を思ふ。余、自ら余を寂しむ。久しぶりにて刺す如き、孤児の悲みを味ひたり。よるべなき魂の寂しき。彼女、よるべを北国に見出し得るや。父子、姉妹の愛いかに彼女を休ましむるや」（傍線部は「独影自命」に引用の際、削除された）といった記述もあり、「父子、姉妹の愛」といった「よるべ」を持つ初代によって、孤児である自分を強く意識させられていたこともうかがえる。自己崩壊の危機から脱するためにこそ書かねばならなかった「ちよ物」が、「孤児感傷」を重く底に沈めて難渋していた様が、日記からありありと伝わってくるのである。

幾つかの習作を経て「ちよ物」としては初めて発表された②「南方の火（一）」（大一一・八）が、「新思潮」連載一回めで中絶した背後にも、この「孤児感傷」の問題はあった。破約後の初代の「帰国に筆を止む」（五月二〇日の日記）と心組みされ、婚約が成った二度めの岐阜行きから書き起こされたにもかかわらず、「いろいろのものから解脱することを祈念」していた（俊夫）は、「新しい感傷」と「自己嫌悪」を覚えた前回の岐阜行きの方の回想の方に牽引されて語りも停滞し、婚約の場面さえ描けず、みち子は語り手にも理解されぬまま「薄っぺらに笑つ」た宙吊り状態で置き去りにされてしまったのである。

その婚約の場面を回想した次の③「日向」④「篝火」にしても、語り手は常に、自己嫌悪から一瞬浄化された③「日向」の（私）や、現実のみち子と「空想の世界で踊らせてるた」彼女とのギャップに「美しい名の結婚とは、一人の女を殺して私の空想を生かさうとすることではないか」といった自省を迫られた④「篝火」の（私）の側に寄り添い、（私）に日向の記憶を呼び覚まさせた娘（③）、ギャップを見せつけたみち子（④）の側には背を向けていた。後の⑥「非常」に連なっていく⑤「篝火」の（みち子）には、③「日向」の（娘）に比べ肉体獲得への作者の努力も見られるが、（私）の感傷を客体化させるだけの力は、まだ持ち得ていなかったのである。

〈私〉の描き方の変化を考える時、注目すべきは、⑥「非常」と⑩「父」の間に⑦「伊豆の踊子」が発表されていることである。かつて、中村光夫「川端康成論」（昭三二・七〇九。『論考』川端康成』筑摩書房、昭五三・四）は、その原型となった「湯ヶ島での思ひ出」（大一一・八、⑤「生命保険」に先行する）とも比べつつ、「伊豆の踊子」を「私小説とちがった手付で、「私」を扱うことを覚えた手始めの小説」で、「私」は半ば意識的に非個性化された、物語の語り手であり、ちようど能の舞台の脇役のように、踊子を登場させ、彼女を引き立てる役を果たしてい」と評し、山本健吉「伊豆の踊子」（『近代文学鑑賞講座13 川端康成』角川書店、昭三四・一）は、「このような抽象化された『私』は、その後『禽獣』<sup>(24)</sup>や『童謡』や『雪国』などの作品における『私』のあつかい<sup>(25)</sup>方の出発点をなしている。告白や自己表現への道でなく、「私の記憶に光り流れてゐる」ものを捉えるための工夫である」と論じた。

「伊豆の踊子」に早くも認められたこうした〈私〉の描き方が三人称の〈彼〉として変貌していったその分岐点に本作「父」があり、苦渋しながら繰り返し執筆された「ちよ物」は、この〈彼〉の誕生に深く関わっていたと考えられる。

「油」、「葬式の名人」、「孤児の感情」などは、孤児としての私の私小説と見るべきであらう。「十六歳の日記」につながつてゐる。また、後の「父母への手紙」、「父の名」、「故園」などにもつながつてゐる。「伊豆の踊子」、「篝火」などにも、この孤児は顔を出してゐる。

と「独影自命」にあるが、そうした「孤児としての私の私小説と見るべき」作品の多くは、この「伊豆の踊子」前後に発表されている。しかもそれらは⑤「生命保険」から⑥「非常」に至る大正一三年八月一二月の、広義の「ちよ物」<sup>(26)</sup>が集中的に書かれた後、⑧「伊豆の帰り」（大一一・五・六）までの小空白期―但し、「十七の秋」に結婚の約束をしながら破ったきさ子が

「去年」二十になったと記され（「青い海黒い海」大一四・八）、娘を迎えるための新しい貸間へ移ると同時に、結婚の話も破れたと語られる（「明日の約束」同・一二。第三部第二章一 **001 川端義一宛参照**）ようなことはあった―を埋めるような形で、次々と発表されているのである。

「私小説的文学観の崩壊」（中村「川端康成」前述）の只中であって、「文藝時代」を足場とした作家活動を展開していた川端は、秀子との出会い（大一四・五頃）から結婚へといった私生活上の転機も迎えていた。初代との恋愛（孤児意識の新たな覚醒）↓婚約（孤児意識からの解放の予感）↓破約（孤児意識の尖鋭化）↓秀子との出会い・結婚（再び、感傷としての孤児意識の否定）といった図式は⑤「生命保険」等の作品に見て取れるが、これは「ちよ物」を書くことで川端自身に見えてきた構図であつたろうし、前述したように破約を孤児としての自己の在り様との関連で強く意識した川端が、⑥「非常」で別出するに至つた感傷を乗り越えていくには、「新感覚派」としての主張と一見反するようであつても、「私小説」によって自己を見据え、表出することこそが不可欠であつたろう。「葬式の名人」（大一二・五）の「肉親達のことを私から口を切つて人に語つたことも、人にたづねたことも今日までに一度もない。こゝに書くのが初めてだ。小説は唯独り自ら密かに思ひである」（傍線部は、昭和二年三月『伊豆の踊子』収録の際削除された）という言葉は、当時の川端の小説観の幾分かをうかがわせている。同作が発表されたのが、「新感覚派」と命名される以前の「創刊間もなくの「文藝春秋」が初めて同人達の小説を掲載した」（「独影自命」と自身記憶する舞台<sup>(27)</sup>であり、また、新感覚派として出発後、「新潮」に小説を出した初め」（同）が「孤児の感傷」（大一四・二）であり、先の②「南方の火」の連載第一回も復刊した「新思潮」の創刊号に発表されているように、「孤児としての私の私小説」は川端にとって特別な位置を占めていた。

殊に、「孤児感傷」以前の〈私〉と二七歳の作者である〈私〉との出会い―「忘れられた過去の誠実な気持に対面した」とその「あとがき」にも記されている―を記した「十六歳の日記」（大一四・八、九）を「ちよ物」小空白期に発表しえたことは、<sup>(28)</sup>

作家川端にとって大きな意味があった。翌一〇月には、これに力を得たかのように、岐阜行き前に成った最初の私小説「油」が、新たな挿話も盛る等改稿して発表され、自己の文学の原点―「孤児の悲哀」を云々する「空虚な感傷の遊戯」からの脱却への願い―が再検証されている。

更に、孤児根性故に失恋したと考え、「幼稚な恋愛小説」を書き渋り苦しんだ「二十三の秋から二十五の夏まで」（川端に即せば大正一〇年の秋から一二年の夏）の「感傷」を否定しさろうとする〈私〉（北条栄吉）を描く「大黒像と駕籠」が発表されたのは、「伊豆の踊子」の後、「十六歳の日記」の祖父像に対応する「祖母」が発表された九月だった。②「南方の火」が中絶したのに対し、「大黒像と駕籠」は習作「真鍮の大黒像」（大正一一―一二年頃執筆か）にはなかった(28)転機を書き、集中的に発表された「私小説」に区切りをつけた。先の「独影自命」で「孤児としての私の私小説」としてその作品名が挙げられていたように、⑩「父母への手紙」（昭七・一―九・一）を飛び石としつつも、「父の名」（昭一八・二―三）、「故園」（同・五―二〇・一。後述、第八章三）の頃まで、「私小説」は見られなくなっているのである。

一方、私小説系の作品群「ちよ物」について見れば、大正一三年の⑥「非常」以降の小空白期を破った一五年六月の、自ら恋にピリオドを打つ⑧「伊豆の帰り」（原題「恋を失ふ」）に続いて、「祖母」発表と同じ九月には、〈私〉ならぬ〈彼〉の内面を追いつつも、破約後の彼女を描いた⑨「彼女の盛装」が発表され、「ちよ物」の中でも氾濫していた〈私〉（長篇として執筆された②「南方の火」とその習作「新晴」のみは俊夫）は、再び試みられた連載⑨「南方の火」（昭九・七、やはり一回で中絶）を除き、影を潜めている。そして翌月発表されたのが、本作「父」だったのである。

### 3 〈彼女〉の形象に向けて―「父」以後の〈彼〉―

大正一五年九月に湯ヶ島へ移った川端が、「父」を発表した一〇月に秀子を迎えたことは前述した。翌昭和二年四月五日の

上京まで発表されなかった「ちよ物」だが、五月には⑩「処女作の祟り」・⑪「霰」が相次いで発表されている。

⑩の掌篇「処女作の祟り」は狭義の「ちよ物」ではないが、異彩を放つ作として注目される。破約を含めて全ては処女作「ちよ」の祟りとして不吉な挿話を語り続ける作家の〈僕〉は、「処女作だけは明るい幸福なお書きにならないといけない。人間はその誕生を祝福されなければならないと同じです。」と、「大真面目で」新進作家に向けて言わないではない拘泥がある。作中で引用される〈僕〉の処女作「ちよ」に「肉親のない私」とあるように、「芸術創造の恐ろしさ」を語る〈僕〉の言葉は「僕がこの世へ生まれた」「偶然であり、また必然」の恐ろしさを語る言葉として読者に読まれることを期待している。「宿命論者じみた神秘主義」に陥りつつある〈僕〉、自分の暗い生い立ちが「他人の運命までも支配」していると怯えている〈僕〉、処女作に崇られて出会ったとして彼女達（伊藤初代は四番目の〈ちよ〉として登場している）を等し並みに扱う〈僕〉は、作者川端と語り手〈僕〉とを重ね合わせていく素朴な読みへと読者を誘っていくが、実は作者によって寧ろ〈僕〉は戯画化されてもいる。「私小説的発想そのものを逆手にとった私小説克服の試みといふべき手法」とは初期の井伏鱒二に対しての東郷克美の評であるが、同時代に川端もまた同様の模索をし、新たな手法を獲得しつつあったと言えよう。

⑪と同月発表の短篇⑫「霰」では、⑥「非常」⑨「彼女の盛装」の後日が題材となっているが、破約についてはその経過や原因への言及はなく、父訪問については示唆されるのみで、〈彼〉（新吉）は父に対して「娘と新吉との結婚にも、また娘と内藤との結婚にも、唯無意味に近い承諾を与へてあるよりどうすることも出来ないであらう」と考えている。作中では、「空想するのを恐れ」つつ空想を巡らしてしまう〈彼〉が、「彼の感傷には他人のやう」な友人永見や、栄子を連れ去った内藤等によって相対化され、「狂人のやうに勝気で強情な」栄子が、不在であるが故にかえって多面的に、永見と〈彼〉の会話や女給の良子の話の向こう側に、或いは婚約の時の「彼の美しい記憶」の中に浮かび上がる筈であったかとも思われるが、共に描き切れぬまま終わっている。題材を同じくする後の⑬「浅草に十日ゐた女」（昭七・七）も、新吉の空想部分を大幅に

削除して「痛ましい破滅」に至りそうな彼女（リラ子）の「生まれつき」の悲劇を強調しようとしながらも成功していないことも合わせて、鮮明な初代像の造型が川端にとつていかに困難であったかを思わせる。初収録された一六巻全集において「暴力団の一夜」から「霰」に改題されているのが象徴しているように、この⑫で描かれていたのは、〈彼〉でも彼女（栄子）でもなく、栄子を失った〈彼〉の水のように拡散していく「悲しみ」であり、⑩「父」の「早瀬に乗つて」の一節も想起されるような「何かが突然彼を空虚にして置いて遠くへ流れて行つたやうな気持」であり、「水のやうに心の奥へ流れて来」る「微かな冷たいもの」であり、三月の朝の霰に呼応していく感傷の抒情であつたと言えよう。

初代との一件をとにかくも全円的に再構成したのは、川端初の新聞連載長篇⑭「海の火祭」（前述。昭二・八・一〜同・一・二・二四）の「鮎」の章である。内容・描写の面では④「篝火」・⑥「非常」・⑫「霰」等の旧作に多くよりながらも、「岩谷堂行」を素材にした部分が、父の里は湯ヶ島に変えられた上で、婚約に至る二度の岐阜行きまでと突然の破約以後との各々の回想の起点として時雄の連想の要に位置づけられている。⑥と異なり、友人連れで「貧しくみすばらしい父」を見に行かれた彼女が強い不快感を示す場面も加えられてはいるが、本作「父」のように破約とは直結されていない。時雄の連想の流れによる回想という枠組みの中で、以前の「ちよ物」での分析とは多少の揺れも見せつつ、時雄の心情が過剰なまでに語られる一方で、破約の理由が時雄に分からなかったのと同様に、時雄の強い願いに反して掴み得ない弓子は、章末尾の「それが七年前のことだ。時雄にはいまだに弓子といふ女が分らない。伊豆の温泉へ度々行つて、父のところへ帰りはしまいかと、彼女に会ふ機会を待つてゐる。」という言葉に端的に表れているように、同作でも自立した明確な像を結びえていない。

だが時雄自身にも、「二八の乙女」の**人形**と思つてゐた」（傍線部は後述の「南方の火」への改稿時に削除された）、「熱病じみた空想が破れた軽い驚きを感じた」と意識されていた弓子像は、長篇全体の中で立体化されようともしていた。「鮎」の後の章では、弓子の側からも、あれは「この私」ではなく「あの人の夢の人形」だと指摘され、時雄の新しい恋人菊子の為



に「あの人の心の底に残つてゐる私の影」を拭き取ろうと宣言される。しかし、作中での七年という時の隔たり故か、或いは「海の火祭」の当初の構想の中にはなかったものを「苦しまぎれに挿入した」（「独影自命」という「鮎」の成立事情故か、「鮎」と他の章との間では弓子像そのものに亀裂が生じており、企ては失敗に終わっている。戦後の一六巻本に「鮎」のみを独立させて収録されたことは前述したが、回想の額縁となっていた章の冒頭と末尾を削除し、父の里が「田舎」と変えられるといった改稿も為された「南方の火」（昭二三・八）だが、時雄の語りを突き破っていく力を奪われた弓子は、〈彼〉の感傷的な回想のベールの向こうに遠のいて、手法的には後退してしまっている。

「海の火祭」への自己評価は「独影自命」にも見られるようにかなり厳しいものだが、「文藝時代」の廃刊、「処女作の崇り」にも書かれたような初代の新たな噂や、妻秀子の早産・流産等と公私共に動揺の続いた中で、「ちよ物」集大成的な「鮎」の章をとにかくも執筆したことで、川端はこの系譜にもひとまず区切りをつけた。この後、「化粧の天使達」（昭五・九）中に初代に触れた詩「雨傘」「恩人」があるものの、⑮「二重の失恋」（昭六・一）まで「ちよ物」は見られない。この空白期によつて「ちよ物」を前後期に分かつなら、⑮が偶然の再会をテーマとした⑧の改稿であったように、後期作品には前期作品の焼き直しの側面もあったが、素材が生に近い形で繰り返し提出された前期と異なり、後期では後述するような韜晦や虚構の中へ素材が塗り込められ、狭義の「ちよ物」の枠を越えていったとも言えよう。

そうした変化も見られる後期「ちよ物」のモチーフは、再会、若しくは未だ果たされざる再会へのアンビバレントな思いであった。「浅草赤帯会（「浅草紅団」）」（昭五・九）には「全く思ひがけなく十年振りで」醜く変わり果てた林金花を見かけたことが書かれ、「舞踊」（昭六・四。この前年に初代は再婚している）には初代に擬せられる鈴子が再婚を報せに雪の日に訪ねてきたことが書かれていることにもうかがわれるが、それらに表出された思いはかなり屈折している。

初代の川端家来訪は、川端秀子によれば昭和七年三月上旬だが、「見知らぬ姉」（「現代」昭七・三、「朝日新聞」への広告

は二月二一日)には、「十年も会わない彼女」が「この三月ばかりの間に六七度」も〈私〉(島村)の勤める出版社に呼び出しの電話をかけてきて、彼女の店で再会して幻滅したことが描かれている。初代の夫の失敗、転職等、羽鳥徹哉『作家川端の基底』(前述、第一章注(16))の調査と符合する点も見られ、少なくともこの時点で川端は、初代に関するかなり正確な情報を得ていたとかがえる。

この「見知らぬ姉」を挟む形で、五信から成る⑩「父母への手紙」の第一信(「若草」一月号。「朝日新聞」への広告は昭和六年一二月一三日)と第二信(「文学時代」四月号。「朝日新聞」への広告は七年三月一九日)とが発表されている。⑩は「父となることを恐れる男」と自己規定する作家の〈私〉が、「若い娘さん達の読む雑誌」の為に「亡き父母への手紙」という形式で書きつつある「短い小説」と語られる連作だが、第一信(⑤「生命保険」を原形としたような形で、少女の父を訪ねたことも触れられている)では、「十年も経って」「泣きながら」会いたがる少女のことが断片的に語られ、「見知らぬ姉」に見られたような再会へのアプローチが実際にあったかと思わせる。そして第二信ではその少女の来訪があからさまに綴られ、第三信以降は初代の一件を直接題材にはしていないが、連作の大きなモチーフの一つには初代との再会があったといえよう。

この初代の来訪を素材としたものに、⑪「父の十年」・⑫「姉の和解」・⑬「母の初恋」がある。⑪は父に連れられての来訪という形で改変し、⑫は妻の妹も登場させて題材を膨らませ、後年の⑭では、彼女の没後、その娘を彼が養女にするといった大胆な虚構が為されていく(川端家を訪問した初代には、前夫の子を引き取って貰いたいという目論見があったろうと秀子は推測している)。これらは狭義の「ちよ物」ではないが、こうした後日譚的作品で新たに描かれたのは、秋子の父を介しての秋子と譲治の心の「通い合」いであり(⑬)、各々の妹を思う「姉の心」による昔の恋人房子と妻芳子の「和解」と、そこから新吉が見出すやもしれぬ曙光であり(⑭)、佐山の心にきらめく、母民子から娘雪子へと貫く「愛の稲妻」(⑮)であっ

た。もはや孤児的設定は為されなくなった（彼）だが、彼女側の血縁による（彼）の救済という点に、作者川端の血への拘りが照らし出されている点が注目される。

しかしこの拘りはあくまでも伏流水であり、表面に描き出されたのは（彼）ではなく彼女（若しくは彼女の娘）の方であった。⑰⑳のいずれも本作「父」と同じく父訪問を破約の契機としているが、⑰で僅かに残されていた「自分の旅心の美しさに酔ひながら」とか「子供じみた正義感」といった譲治に対する語り手の視点は、㉑では消えている。新吉の「純な学生らしい正義感」を父の「みじめな姿を笑ひに行つた」と誤解した房子が、「父も信じる事が出来」ずに「きびしい手紙」をよこしたのだと裁断する（彼）は、自分はただ「裏切られた者」と考えている。語り手の視線は「境遇の暗さと不幸」（⑰）故に（彼）に「そむいた」彼女の在り様とその後の変遷の方へより多く注がれているが、それはこの二作に限らず焼き直したなものも含めた後期作品にほぼ共通しており――⑱「父母への手紙」では、「夢のおとぎばなしのやうな」恋心が「女の子に通じ」なかったと、（私）の側も問題にされていたが――、多く（私）（（彼））の側に破約の原因を求めた前期とは対照的である。

⑰では、親に「犬ころのやうに捨て」られたと「自ら嘲るやうな、また哀れむやうな調子」で言っていた「酒場女」秋子――「霰」等で描かれた上京後の初代像に重なる――が一〇年後、破約の件で「叱ってくれるのはお父さんだけだ」と、「親身の情愛」に泣き、「あの頃の私には、人の心の真実なんてちつとも分らなかつた」と詫びる。そして、父に東京を案内しようとして「悲しさを紛らすやうに」提案した譲治に、彼女は「泣き濡れた眼に明るい喜び」を溢れさせる。㉑では、再会した房子への幻滅、職を失った現在の状況を明かせなかつたことへの自嘲、妻芳子姉妹への申し訳なさといった陰鬱な気分が覆われた新吉に対し、自身の不幸故に棄てた男に美しい夢を紡ぎ続け、その夢を妹に託した房子は、再会によっても何ら傷つかない。

㉑「母の初恋」でも、読者に鮮烈な印象を与えるのは、「初恋は、結婚によっても、なにによっても、滅びないことを、お母さんが教へてくれたから、私は言はれるままにお嫁入りする」と手紙を綴り、「ただ一度の愛の告白であり、佐山へただ一度

の抗議」をする雪子である。これらの作品では、読者は〈彼〉の目を通して彼女達の根の美しさに気付かされるのである。

「私はそれを材料として一つもろくなものは書けなかった。不用意、不消化に吐き出したのでは、いひわけにもならぬ（「独影自命」）、「大きく重い「体験」」（「伊豆の踊子」の作者）昭四二・五〇四三・一一）であったのに「数篇書いた一つも救へ」ず、「悔恨よりも慙愧が強く、思ひ出すのもつらい自己嫌悪」（同前）とは川端一流の誇張にしても、「ちよ物」もまた「失いきれぬ自己」（川嶋至「大正期の川端康成」）故にやはり「告白や自己表現」に傾きがちで、個々の作品の完成度はけっして高くはなかった。だが、「伊豆の踊子」を境として、「私小説」と同様に「ちよ物」でも優位を占めていた〈私〉が〈彼〉にとつて代わられるといった変化も確かにあり、習作期も含む「ちよ物」前期の終わり近くに発露された「父」は、そうした「ちよ物」の中にあつて、「伊豆の踊子」に見られた〈私〉の描き方を継承しえた作品であり、そうした描き方は、「ちよ物」等の「私小説」ではなく、後期に見られたような虚構作品へと受け継がれていったと言える。

この〈私〉（〈彼〉）は、中村等が指摘したように、旧文学の〈私〉とは全く異なる、川端独自の〈私〉（〈彼〉）であつた。ただ、川端自身も「女の相手を「無」のやうに書いたのは、モデルにたいしておのれをむなしうするためでもあつて、あの男が私といふわけではない。「伊豆の踊子」では「雪国」ほど、モデルにたいしておのれをむなしうはしてゐない」（「伊豆の踊子」の作者「前述」）と注意を促したように、〈私〉（〈彼〉）は「非個性化」「抽象化」されているのではなく、また傍観者として書かれていたのでもなかつた。「二十歳の私は自分の性質が孤児根性で歪んでみると徹しい反省を重ね」と漏らさないではいけない⑦「伊豆の踊子」や、⑩「父」等のように、〈私〉（〈彼〉）は、ヒロイン等を照らし出す光源のような位置にまで退いて尚、孤児の影を払拭しえていなかった。そして、その消しきれない痛みは、〈私〉（〈彼〉）が見つめることで命を吹き込んだと言ってもよいヒロインによって、逆照射されていたのであつた。作者川端は、「無」のやうに「描いた〈私〉

(彼)と痛みを共有しながらも、その感傷を乗り越えようとしていたのである。

中島国彦「雪国」の背後に潜むもの<sup>(34)</sup>は、「川端の選んだのは、さまざまな心のメカニズムによって「感傷」を薄めること」であり、そのためには「見る立場の島村は背後に退き、駒子の存在の確かさ、人間としての生命感が前面に出て」なければならなかったと、示唆深い指摘をしている。小林裕子「川端康成の「疑似母性」思慕」<sup>(35)</sup>も戦後の、「眠れる美女」や「片腕」を「モノにまで行き着かざるを得ぬ自分自身を、冷徹に見据えた作品」と捉え、「彼の作品が抒情的でありながら、感傷的ではない——自分の女に対する身勝手さを感傷によつてごまかさないという点は、川端康成の鋭敏さであり、やはり評価したい」としている。「父」に認められた川端的一人称(彼)の問題は、川端が拘り続けた「感傷」の内実と絡めながら、「私小説」以外への、また戦中・戦後の作品群への、縦横への幅広い目配りによつて更に明らかにいかねばなるまい。

## 注

- (1) 大正一三年九月三日掲載。三七巻本全集の「解題」には、初刊本の『僕の標本室』(新潮社、昭五・四)の文末に(大正一五年八月)と記されているとあるが、これは執筆年月と考えられる。
- (2) 三七巻本全集には発表誌紙は未詳、遺されている切抜きが唯一のものとなるが、文中に「一月から三月までは、本号のやうな略式の体裁で、仮りに間をつないで置く」、四月から花々しく復活することから、中河与一宛大正一二年一月九日書簡(浦西和彦「川端康成未発表書簡二十通」、前章注(3))に「パンフレット」とある「新思潮」一月号(現存しているか未詳)に発表されたものと考えられる。
- (3) 「読売新聞」掲載の「よみうり抄」に「二四日、卒論提出のため上京。」とある。
- (4) 初出は「読売新聞」(七月一六日)、「空想の詩画集」第三回。『人形愛序説』(第三文明社、昭四九・一〇)収録。

- (5) 作品集『地軸』第二版の序文。草鹿外吉「ロシア・ソビエトSFの系譜」(後述『南十字星共和国』)から引用。
- (6) 『現代語訳国文学全集 第三巻』(非凡閣、昭二二・八)に川端の名で「とりかへばや物語」の訳が掲載されており、三七巻本全集に収録されているが、同年五月九日及び一四日附塩田良平宛川端書簡(『日本近代文学館』一九九二・三・一五)を参照すれば、これは塩田の代筆であり、戦後の川端訳文(「巻の二」までで中絶)とは別文である。
- (7) 拙稿「川端康成「住吉」連作」(『芸術至上主義文芸』昭六〇・一一)、『千羽鶴』のゆくえ(前述、「はじめに」注(5))、「古都—天神さん」に託されたもの(『国文学』一九九一・九)等で論じた。
- (8) 『一つの時代』は犬養健の、『脂粉の顔』は藤村千代の創作集。いずれも改造社刊。
- (9) 川端文学研究会編『論集 川端康成掌の小説』(おうふう、二〇〇一・三)掲載の「掌の小説」一覧表によれば、同書収録作中最も長いもので原稿用紙八枚分である。
- (10) 拙稿「川端康成「虹いくたび」論—虚空にかかる〈反橋〉／虚像の反復—」(『芸術至上主義文芸』二〇〇四・一一)を参照されたい。
- (11) 剣侠伝(段成式)・虬髯客伝(張説)・馮燕伝(沈亜之)・紅線伝(楊巨源)・劉無双伝(薛調)・謝小娥伝(李公佐)・杜子春伝(鄭還古)・南柯記(李公佐)・神女伝(孫頴)・海山記(韓偓)・開河記(韓偓)・李林甫外伝(亡名氏)・東城老父伝(陳鴻)・長恨歌伝(陳鴻・白居易)。
- (12) 鈴木は五篇、今は六篇を担当。川端の数の多さが際立っている。
- (13) 馬朝紅「川端文学と異界—唐代小説とのかかわり」(『学習院大学人文科学論集VI』一九九七・九)、常思佳「川端康成と唐代伝記小説」(『日本近代文学会北海道支部会報』二〇一一・五)、彭柯然「川端康成と翻訳—唐代小説を中心に」(『熊本大学社会文化研究』二〇一七・三)。

- (14) 「川端康成『みづうみ』の図像学―「猿猴捉月図」の構図」(『日本近代文学』二〇〇八・五)。
- (15) 同特集の青々園「いゝ所へ出るお芝居の月」には、「戻り橋」でも鬼女の出端から始終月がからんで居る。橋の上で綱と鬼女とが月を仰いで、その光にうつる流れに鬼女の恐ろしい影が浮ぶ。たまらないほど風情の多い場面である」と指摘されている。歌舞伎「戻り橋」では、一条戻橋で娘に出会った渡辺綱は、水に映る姿によって娘は鬼だったと知る。立回りの末、右腕を奪われた鬼は天へ飛び去って幕となるが、『月』『橋』『天空に飛び去る女』のモチーフは「名月の病」と共通する。綱が片腕を切り落としたのは若い美女に化けた茨木童子(川端の出身地、大阪府茨木所縁の鬼)ともされ、『腕』のモチーフは、後年の川端「片腕」(昭三八・八〇―一一)とも関連する。この特集を川端が参照した確証は得られないが、こうした『月』をめぐる伝承等は人口に膾炙したものであった。
- (16) 春秋戦国時代、越王の勾践が呉の弱体化を狙って呉王夫差の元に送り込んだとされる美女。長期間の戦乱にあえぐ呉越の民を苦しみから救うため、玉帝の命を受けた嫦娥が、明珠から西施へ変わったとされる。
- (17) 松前健「月と水」(『日本民俗文化大系二 太陽と月』小学館、昭五八・四)。
- (18) 嶋隆「馬美人の昇天」(國學院大學院長谷川泉ゼミナル編「鷗外・康成・鱒二 長谷川泉ゼミナル論文集」一九九四・一〇)。日本でも馬娘婚姻譚は広く伝えられている。今野円輔『馬娘婚姻譚』(岩崎書店、昭三一・一)参照。
- (19) 「川端康成と万物一如・輪廻転生思想」(『作家川端の基底』前章注(16))。
- (20) 前章注(24)を参照されたい。
- (21) 一九二六(昭元)年末から一九三五(昭一〇)年に発表された小説七篇に、「一九二二年一月作」と末記された「補天」を加えた、故事に基づく八篇を収録している。
- (22) 「川端康成「投函されなかった恋文」(『文藝春秋』二〇一四・八)では、川端の未投函と推測される書簡や初代の

書簡が初公開され、水原園博『川端康成と伊藤初代 初恋の真実を追って』（求龍堂、二〇一六・五）で詳細に伝えられた。習作「絵葉書」（執筆年月未詳）には、「彼女が家出すべき筈であった正月元日」の一月ばかり前の〈彼女〉の最後の手紙に「私は自分自身を忘れあなたを忘れ真面目に暮す、私はあなたの心を恨む、私を恨むなら沢山恨んでくれ」といったことが書かれていたとあるが、これは公開された初代書簡一〇通目（大一一〇・一一・二五）と同内容であり、川端が原資料をほぼ忠実に作品に活かしていることをうかがわせる。

- (23) そうした川端の在り方は、後の「抒情歌」（昭七・二）の竜枝等にも投影していると思われる。「〈現実〉を排除して、「私」の真実だけを語ることで自己の主体を獲得し直そうとしている」と論じた田中実『抒情歌』の愛・覚え書——〈語り手の抱え込むもの〉と〈他者〉——（『近代文学研究』一九八九・八。後、「〈語り手〉の抱え込むもの——『抒情歌』川端康成——と改題して『読みのアナキーを超えて』（右文書院、一九九七・八）収録）は、示唆深い。

- (24) 拙稿「禽獣」論——その「入子型」的構造を回って——（前章注（65））では、従来見落とされがちであった、「禽獣」の〈彼〉の抽象化され得ぬ翳りの部分を考察した。

- (25) 上田渡『伊豆の踊子』の構造と〈私〉の二重性（『國學院雑誌』一九九一・一）は、「テキスト内で語っている〈私〉とテキストそのものを語っている〈私〉の語りのレベルの違い」を論じ、「そういう読みを見えにくくしている未分化な〈私〉の存在」も指摘、「雪国」の島村のように三人称の固有名詞でも使ってあれば、二様の〈私〉の区別はもつとはっきりしただろう、としている。

- (26) 大正一三年九月「夢四年」（後に「弱き器」「火に行く彼女」「鋸と出産」三作へ改作）、同一二月「写真」。

- (27) 五月号は臨時創作号と銘打たれていた。川端は既に、創刊号に「林金花の憂鬱」（大一一・一）、第四号に「精霊祭」（同・四）も発表していた。



(28) 日記の「発見が「十年後」とは「あとがき」の虚構で」「日記はもつと前から私のところにあつた」(「鳶の舞ふ西空」昭四五・三)とある。この時期に発表されたことにまず注意したい。拙稿「十六歳の日記」研究史」(前述、「はじめに」注(3))を参照されたい。

(29) 大正一二年一月八日の日記に書かれた「ある機会ありし女数へ」といった体験等が取り入れられている。詳しくは拙稿「川端康成「ちよ物」試論―全集未収録作品「父」を核として」(後掲、「初出一覧」10)。

(30) 「私」意識の変容」(「国文学」昭六二・八)。「幾重にも変形され戯画化された「私」であり、作者と「私」の間にはつねにある距離が保たれ、その距離を自由に操作することで自己を巧みに韜晦するのである」とも論じている。東郷は、梶井の「檸檬」における「私」は決して等身大の作者ではなく、「えたいの知れない塊」をかかえこんだ「私」の感受性そのものであり、その動きを徹底的に凝視し、拡大することによって、日常性をふみこえた緊張した美を作り出しているとも指摘しているが、「霰」等における川端の試みも、この意味で「昭和の作家に共通した「私」の方法化」と言える。

(31) 「独影自命」には、「非常」でみち子に会った時、彼女は親の家に行かれたのが嫌らしかった」とある。父訪問が、破約にどの程度影響があったか不明だが、破約に言及した一二作品のうち、習作①とその挿話を盛り込んだ⑨、⑧とその改稿⑮、⑯の五作では、「岩谷堂行」の事実さえ触れていない。

(32) 『川端康成とともに』(新潮社、昭五八・四)。以下、特に断っていない秀子の証言は同書による。

(33) 『美神の反逆』(北洋社、昭四七・五)所収。

(34) 副題「一九三五年秋の湯沢滞在をめぐって」。「国文学」昭六二・一一。

(35) 「新日本文学」一九九二・一。

## 第Ⅱ部

### 雑誌掲載発掘文等による考察



## 第一章 投書家時代の川端康成―「文章世界」「文章倶楽部」「新潮」「文藝雑誌」発表一三作品―

「文学的自叙伝」（昭九・五）で川端は、大阪府立茨木中学の二級下に「中学世界」や「少年世界」等の「投書家の花形として有名」だった大宅壮一がいたことに触れ、「私もほんの僅か投書をして見たが、落選ばかりで、俳句が二三度小さく印刷されただけだった。「文章世界」の十二秀才の投票があつたり、投書華やかなりし頃である。」と語り、「独影自命」の冒頭でも、「私の投書は時も短く数も僅かであつた。東京の文学雑誌では、俳句などが一二度選外佳作にはいつただけである。投書家であつたとは言へない。当時は投書が盛んで、その水準も相当高く、中学時代の私が及ぶところではなかつた。」と述べている。こうした発言を背景に、猪瀬直樹『マガジン青春譜』（小学館、一九九八・五）は「川端康成と大宅壮一が夢見た「雑誌王国」―画期的評伝・青春小説」と帯に謳い、部屋の四方をめぐる鎖ほどのメダルを投稿で得ていると噂された大宅と、「投稿すれども採用されず、という結果がつづき落胆した」川端という対比を描いているが、川端の中学時代（明四五・四〜大六・三。数え年一四歳〜一九歳）の投書掲載作品は、実は選外も含めるならば俳句二、三にとどまらない。

以下の①〜⑬に列挙するのが、これまでに知られていたものも含め、筆者が確認し得た川端の投書掲載作品である。調査範囲は、三七巻本川端全集（以下、『全集』と略す）補巻一（昭五九・四）所収の日記・手帖等に名が挙がっている雑誌等（但し、「天才文学」「京阪新報」は未見）を中心に、「文章世界」「文章倶楽部」「新潮」「文藝雑誌」「中学世界」「学生」「雄弁」「日本少年」「中央文学」「団欒」「秀才文壇」「万朝報」の大正五年（一九一六年。その前後も若干含む）としたが、「団欒」は七月号のみ、「秀才文壇」は一〇月号のみしか確認できなかった。調査にあたっては、日記等に見える秋川紅春・愛岡慕秋・愛岡慕川・君島千春・君塚静春・生島彰・阿部開浪子・花子・竹内といった筆名と思われるものにも留意し、またそれ以外の名であっても、大阪からの投稿作品は『全集』収録の川端の歌稿等と照らし合わせた。

- ① 「文章世界」 三月号 (選外) 鐘つけば銀杏のはらり／＼哉
- ② 「同」 五月号 (選外) 朧夜や石段登る僧の影
- ③ 「同」 六月号 (選外) 桃の山村侘び人の花見かな
- ④ 「文章倶楽部」 七月号 (秀逸) 牡丹見る舞妓の帯の陽炎へり
- ⑤ 「同」 同 (選外) 旧墓地に肥料樽並ぶ暑さ哉
- ⑥ 「文章世界」 八月号 (選外) 五月雨や湯に通ひ行く旅役者
- ⑦ 「新潮」 同 (選外) 忍び来る舞妓の袖に螢哉
- ⑧ 「文章倶楽部」 同 (選外) 蚊遣火に遠く坐りて恋もあり
- ⑨ 「同」 九月号 (選外) 物よめば物読む悲し物書けばものかく悲し若く死なむ我
- ⑩ 「同」 同 (選外) 忠魂碑に青葉月漏や宮の森
- ⑪ 「同」 一〇月号 (選外) 夕散る百日紅や秋近し
- ⑫ 「文藝雑誌」 同 (秀逸) 今朝町に下僕の捨てし狂犬の午には帰り来て悲しくなけり
- ⑬ 「同」 同 (掲載外佳作) 書翰文「青葉の寮より」

この内、⑥は保昌正夫作成の川端年譜(『川端康成短篇全集』講談社、昭三九・二)で早くも指摘されており、林武志編『鑑賞日本現代文学 15 川端康成』(角川書店、昭五七・一一)では③も確認された。川端香男里「全集補巻一 解題」(昭五九・四)にも後述する「大正五年 当用日記」七月四日の記載に触れて「文章倶楽部」七月号に④⑤が改変の上掲載されている

との言及もあり、『「文章倶楽部」総目次・索引』（不二出版、昭六〇・六）の佐久間保明「解説」が、同誌に川端が投稿していたことは「案外知られていないようである」として⑧⑨⑩⑪も指摘した。実は⑪は〈俳句ほか〉（『全集』二四卷）に見え、他にも小さく「文俱」等と付記されている句や歌があり、それらは「文章倶楽部」等へ投稿したか投稿するつもりで書き留めておいたものであろうと推測されるのだが、こうした投稿句等は、中学時代は「文学への目覚めがあり、習作がなされた重要な時期」と日記等も辿りながら位置付けた羽鳥徹哉「中学時代の川端康成」（『作家川端の展開』教育出版センター、一九九三・三）も含めて、調査されることなく看過されてきた。「今日自分は切に小説の傑作が祖父のモデルで出来るをうたがない 一つ書いて中央公論に出して見ようかと思ふ」と「大正三年 当用日記」の五月三日に記した翌四日から始まったのが小説「十六歳の日記」に描かれた日々であったが、本章では、前掲の①②③を手掛かりに、「十六歳の日記」の日々以降、作家以前の川端の投書家時代に注目したい。

「大正五年 当用日記」（以下「日記」と略す）の一月一日には、「多読と共に多作し各雑誌に投じてみたい」と新年の抱負が記されたが、その一方で「歌といふものは内容は小さい貧しいものと思へてならない」（三日）、「文章世界」を読んだが「感心したり印象を与へられた作は一つもなかつた」（九日）といった歌や投稿雑誌への不満も漏らされていた。「俺の心が文学を以つて立たうとしてゐる 俺にじつとしてゐられないと自覚させたこの冬に充分の何かの収穫を得ずばなるまい」（一三日）と文学への志が高まってきた川端は、飽き足らぬものを感じつつも「二三の雑誌に投じた短歌があたつた時の熱中も予想され」（二二日）て投稿を試みたようだが、「中学世界にも学生にも」名は出ず（二五日）、「文章世界等に破れ」て「兎角私の原稿が活字になるといふ野心と好奇心とから京阪新報社へ道をたづねて」行った（二月一八日）。

三月一日の日記には「夜文章世界三月号植竹より来る」とあるのみだったが、二四日の日記には「帰舎つて今日始めて私の俳句が三月号の文章世界のはしくれに出てゐたのを末藤君から知った」、二五日には「鐘つけば銀杏はら／＼山の寺」と

して一二月頃に投稿したのが三月号に「銀杏のはらり／＼哉」と改めてのせられてあつたのには幾分かの光明を認めて早速文章世界や新潮中学世界への歌俳稿を書いて今朝ポストに投げた」と記されている。これが前掲の①であり、「秋川紅春（大阪）」の句として同号に掲載されているから、同じ筆名で掲載されている②共々、川端初期の投稿掲載作品と推測される。<sup>(4)</sup>

①の原形は、「大正三年 手帖」に「十一月十九日」と付された次の短歌、

銀杏の「木より」技より小鳥とび立ちて黄の葉はら／＼秋風に散る

辺りまで辿れようが（引用者注・以下、『全集』からの引用中の「」は、川端が一旦書いて消した部分を示し、傍線・ルビ等は原文のママ）、「大正四年 ノート三」には、投稿した句「かねつけば」の他、

朧月美しきひな僧の立ち話

白遊<sup>マ</sup>やひな僧二人菜<sup>マ</sup>「種」の花道

の句もある。また「大正四年 手帖」には、

陽炎や 雛僧二人「菜花道」  
菜の花畑に 蝶一つ

とあり、大正五年とされる「歌稿一」<sup>(5)</sup>にも、

○鐘つけば銀杏いてふ はら／＼山の寺  
のほらり／＼哉  
文 秋川  
五年三月號  
文章世界

と、投稿句・掲載句を併載の上、掲載誌・掲載名も記録し、その後には、

○陽炎やひな僧二人菜〔種〕花道

三月二十四日 文世 秋川紅春

○朧月美はしきひな僧の立話

○朧月石段にひな僧の影二つ

三月二十四日 文世 秋川紅春

といった記述があり、二五日の朝に早速投函したと日記にあった句が、この「ひな僧」の三句と考えられる。これらの句やそれを改めて掲載された②には、後述の京都体験を経た舞子の句（④⑦）に通う耽美的な情緒も感じられる。

①③及び⑥が掲載された「文章世界」は、明治三十九年三月に博文館から創刊され、「大正、昭和の文学関係者はほとんどこの投書欄から育ってきたといってもよいほど」（『日本近代文学大事典』第五卷、講談社、昭五二・一一）の影響力を持った雑誌で、俳句は内藤鳴雪選、「募集規定」によれば一人三句以内、締切は毎月三日正午だが、先の日記の記述から、投稿後に間を置いて掲載されたり、選者により手が加えられたりすることもあったと分る。「歌稿二」には「俳句二句活字になりて



夏に入る」の句があるが、その前後に衣更の歌があり、後述する⑤⑨の草稿がその後に書かれていることから、この句は、①②が掲載された五月の川端の得意な気持ちを詠んだものと推測される。

日記及び「大正五年 習作ノート」の三月六日の記述によれば、三月には「京阪新報」に「H中尉に」及び「短歌二十首程出した中から四首」が初めて出、皆に「内密にする為に」君島千春の筆名を用いたが、「自分の書いたものゝ活版となつたとあつては嬉し」く、「直広告して」しまつている（掲載順としては、三月一日発行の①の方が先か）。四月には日本文藝協会の「文藝雑誌」が、五月には「新文壇」を前身とした新潮社の「文章倶楽部」が創刊され、川端は三月一日には日本文藝協会に、四月一四日には天才文学社に入会した。この一四日の日記には、「主に文章世界新潮を中心として文壇に出た若い人々の結合によつて投書欄の不自由を一際除き去り絶対の青年自由のために成立せられた天才文学社に入会する 清水柳三郎中村白葉米川正夫山内秋生其他の人がゐるし若々しい生氣に可成りの後援を得て立つた社は強い歩調を社会に占めるだらうを断言する」と期待が記され、一六日には「肉筆で清水中村山内の連名」の葉書が届いたとある。進級前の三月三一日の日記には、「来学期からは一つ奮発して卒業する時には各読書文壇に相等の基礎を据えておきたいと思つてゐる（発信）文章世界読者通信欄」と決意を新たに書き留めており、「歌稿一」には、「四月十七日 天文 川」等と記された歌も八首見える。<sup>⑥</sup>「天才文学文藝雑誌新潮文章世界万朝報京阪新聞」に投書しやうとするのは可成りの努力であらねばならない（五月九日）と諸誌に次々と投書した様は、まず日記によつて確認できる。四月二二日から五月八日までには日記の空白・楽書・欠損期間だが、六月二一日の日記に「前月から続けた投書が帝都〔文〕 雑誌の文〔芸欄〕叢欄に〔汲〕波立たしめん事を日々待つてゐる」とあるように、その間も投書に励んでいたと推測される。

「大正五年 生徒日誌」の四月六日には、③の草稿と考えられる「桃の山村夫子連の花見かな」が見える。この日は始業式で、前日に叔父の家から寄宿舎へ戻り、九日には室員を連れ九條山に登っているが、「自分の桃山のある村を指して皆に故

郷だと云つた時は淋しかった」とあり、望郷の思いが込められた句と読める。「歌稿一」には「桃の山村夫子〔然と〕連の花見かな 四月二十日 文世 川端」と記されており、二〇日及び翌日の日記は天候のみとなっているが、六日に想を得た句を二〇日に推敲して「文章世界」宛に投稿したのであろう。村夫子は「村の物知り。田舎の先生」の意で、「村夫子然と」は軽い嘲笑のニュアンスも感じられるが、「詫び人の」の改稿は川端の手によるものか「文章世界」側のものは不明である。

狂犬を詠んだ⑫と同一の歌もこの「歌稿一」には「五月七日 日文（大）川端」として載せられているが、翌日八日の日記に「十円の懸賞のかゝつてゐる文藝雑誌の懸賞に依じて京阪に出した和歌三首投じ」とあることから、⑫の歌は日本文藝協会の大懸賞に投稿したものと推測される。この大懸賞については、「文藝雑誌」四月創刊号の「日本文藝協会規定」に、会費半年分六十銭以上（第一回の申込者は半年分六十二銭以上）を払い込んだ会員のみが、一回二百円以上千円までを懸ける春秋二回の大懸賞募集に応ずることができると記されている。「募集規定」によれば春の大懸賞の締切は五月二〇日（毎号の懸賞の締切は毎月末日最終便）で、金銭的に苦しかった川端には懸賞金も大きな魅力であったことから早々に同協会に入会したと考えられる。「歌稿二」には、同じく狂犬を題材とした歌「狂犬を遠く捨てんと街にゆ〔けど〕きしに先にかへりて悲しく吠けり」・「今朝町に下男しもべの捨てし〔と云ひし〕狂犬の〔早くも〕午には帰り来て悲しくなけり」が、「行く春」を詠んだ歌と「若葉」の歌の間に見え、おそらくこの二首と⑫の三首を三月末から四月頃に京阪新報に投稿し、五月七日に「文藝雑誌」へ再投稿したと推測される。「歌稿一」にはやはり狂犬を詠んだ句「狂犬のあくびも長し春の庭」が「日文 四月十三日」として記されているから、この句も日本文藝協会の「文藝雑誌」へ投稿されたと考えられる。

だが、「文藝雑誌」は五月の第二号でいったん廃刊となる。通知を受けた川端は、六月二四日には「大きな金をかけた懸賞に応募したのも無駄となつた」、「俺の囊中は十幾銭」と嘆きつつも、「文藝雑誌に投じ京阪に発表した長詩」を早速焼き直して「文章世界」に投稿している。七月四日の日記には、「朝文章倶楽部着 俳句欄の秀逸8に秋に見る舞妓の帯の陽炎へり 次

に旧墓地に肥料樽溢る〔夏〕暑さ哉が活字になつてゐる 一寸嬉しい 和歌は出たらめだったので没書になつてゐる」と④⑤掲載の喜びと、「文章世界秀才文壇新潮」に名が出てなくて落胆したが、「新潮」の「俳句に短文は自信ある」から八月に後れたのかも知れないなどと書かれている。この④⑤や後述の⑧⑨⑩を掲載した「文章倶楽部」は、同誌「募集規定」によれば、一人五首乃至五句、締切は当初は前月十日（八月号記載の「規定」からは前月三日）。短歌は金子薫円、俳句は石橋十堂の選。「選外」だった⑤の類似句は、「歌稿二」に「旧墓地のこえたるあふる夏の昼」、「大正五年 生徒日誌」の「五月三十日―五月三十一日」に「旧墓地の肥料樽あふる夏の書」が見える。一方、「秀逸」に選ばれた④の牡丹と舞妓の取合わせは、「歌稿二」の「紅牡丹みつむる舞子風〔青し〕薫る」にも見える。三月の日記には、五日に友人らと京都へ行った後、「京都の情緒に是非耽溺したいと思つてゐる 幹彦さんによつてあれだけ書かれたけれどまだ／＼書く事があると叫びたい」（八日）、「此間京都へ行つてから私の心には京都詩の京都と唯舞妓の姿が浮かぶ」（九日）といった記述が続き、四月一日には単身京都新京極に遊んで都をどりも見物し、大和屋が満室で宿屋の主人と同じところで寝てもいる（「日記」「生徒日誌」「京都のMさんへ」）。この中学時代最後の春に、長田幹彦や舞妓に象徴されるような京都への強い傾斜があったことは注意される。投書に打ち込んだ成果は、翌八月号で三誌に句掲載という形で表れている（⑥⑦⑧）。六月二〇日の日記に「文章世界」に俳句を送つたというのが⑥であろう。「大正四年 手帖」に「川原月舞妓（と）のそでに蚩かな」、「歌稿一」に「川原月舞妓の袖に蚩かな」「忍びゆく舞妓の袖に京蚩」とある⑦は、「八月に遅れた」ものか、二二日に「歌稿を新潮に投げる 可成り自信のあるものである」というのが句も含めてであったか、或いは七月六日の〈発信〉に「新潮社 文俱」とあるのが⑦と⑧であったか、いずれとも考えられる。「新潮」の投稿の締切は毎月八日、俳句は鳴雪選である。

⑨は、二五日に「短歌を六首君塚静春と川端康成の二人となして文章に投じ」とあるものと思われる。軽んじている俳句が活字になつて、専心している短歌が冷遇されるのが悲しいといった記述が、七月七日、一二日の日記にあるが、ようやく

活字となった短歌が⑨で、「歌稿二」には「書」物よめば「書」物よむかなし物かなへし物書く「かなし」さびし若く死  
「ぬ」なん身は」とある。「大正五年 手帖断片」の一二月二五日に、「己は悲しい等いふ字を今までのやうに多く用ひたく  
ない 而しどうやら短歌でも作ると悲しの外のごまかしは切がないのでやむなく何でもかんでも悲しだ」と記しているよう  
に、「悲し」の語は前述の⑫にも見え、川端の短歌は俳句以上に感傷的なものが目立つ。山田吉郎にも指摘があるが、<sup>(10)</sup>「歌稿  
一」冒頭に「座右銘」として、「おれは二十五歳で死ぬと思へ 各々の瞬間は他の短い生命の一部分だと思へ」と書き付けて  
いるように、《早逝》はこの後の川端文学でも大きなテーマとなった（前述、第I部第二章五1）。

また、先の「歌稿二」の「書」物よめば」の歌の直前には、⑩と初句が同じ「夕散る勿忘草に君思ひひとり寂しむ鉢の色  
かな」があり、（俳句ほか）には、⑩と同一の句の他、同趣向の短歌「真寂しく夕静かに百日紅散れり大氣にきにはらし」も  
見え、この歌の頭にも「文俱」と記されている。

一方、「文藝雑誌」は経営を植竹書院から生方敏郎らに移して九月に復刊し、一〇月号には前述の⑫に加えて、掲載外佳作  
として⑬「若葉の寮より 川端康成（大阪）」も発表されている。この⑬は内容未詳だが、題名からすれば⑫と同じ「若葉」  
の頃に書いて大懸賞に間に合うべく投稿したものの廃刊となり、復刊後に選ばれたのであろう。但し廃刊前は、大懸賞・毎  
号の懸賞とも書簡文（生方敏郎選）は二十字詰六十行以内、短歌（若山牧水選）は三首以内であったが、復刊後は、書翰文  
十行以内、締切は毎月五日に改められており、⑬は短く書き直して再投稿したのかもしれない。

「文藝雑誌」復刊後も日本文藝協会と会員の川端との関係は続いており、戦後に発表された連載小説「少年」（昭二三・一  
二）引用の一二月七日の日記には、大阪での懇親会に是非出席してほしいと生方から葉書が来たと記されている。尚、「独影  
自命」で引用された「歳晩感。大正五年十二月三十一日」の日記によれば、⑬と類似した題名を持つ「青葉の窓より」とい  
う文章も「京阪新報」に載せられたようだ。同紙に載せてもらったのは「大抵一度何かの雑誌で落選」した作品で、「低級な

新聞も面白くなくな」った等の理由から、秋には同社との交渉も終わった、「大正五年は私の子供らしい夢をみじめにくつがへした年だった」とあり、

この年のはじめには、色々読み考へるばかりでなく、色々書いてみる希望を持つてゐた。夏には「文章世界」、「新潮」、「秀才文壇」などの懸賞にも応募してみた。そしてそれらは何の反響もなしに自己の不才を立証したに過ぎなかつた。それからふとしたことから書いたものが活字になつたのも、青葉の頃から黄葉の頃までだつた。

と、半ば挫折した投書家時代が、既に過ぎ去つたものとして回顧されている。同じく「独影自命」で引用された翌六年一月九日の日記には、帝大に進むならいつそ文学の学者になろうかという思いに揺らぎながらも、「しかしまだほんたうに筆は捨てたくない。いや捨てないだらう」とある。同年三月に茨木中学を卒業した川端は、一高受験の為に上京し、従兄秋岡義愛の紹介で文通していた新進作家南部修太郎（前述、第I部第一章二一）を訪ねても行つたが、「子供らしい夢」から作家の道へと歩み始めていたのである。尚、⑥の「旅役者」の句も含めて、川端と俳句については第八章で改めて考察したい。

### 注

- (1) 茨木中学校作文用紙一枚両面に書かれているという（俳句ほか）には、俳句二二句（うち「文俱」と記されたもの五句）、短歌二五首（同じく「文」四首、「新」一首、「文俱」三首）が見える。
- (2) 作品の成立等については、拙稿「十六歳の日記」研究史」（前述、「はじめに」注（3））を参照されたい。
- (3) 「独影自命」引用の同日の日記は詳細である。他の引用例から「大正五年 習作ノート」の字句を整えたものと類

推される。

- (4) 川端は「師の棺を肩に」を「私の書いたものが雑誌に出たはじめ」（「独影自命」）としており、『全集』も大正五年頃「団欒」発表としていたが、六年三月号掲載であったと宮崎尚子「新資料紹介 川端康成「生徒の肩に柩を載せて葬式の日、通夜の印象」」（熊本大学「国語国文学研究」二〇一二・二）が明らかにした。これにより、雑誌に出たのは俳句の方が先であることも判明した。

- (5) 今村潤子「川端康成と俳句」（『尚絅大学研究紀要』一九八九・二）は、「歌稿一」に三月号と書かれているが「文章世界」にはこの句はなく、同誌にあるのは二句（③⑥）のみであり、それらは「歌稿」にはないと述べているが、誤りである。尚、「秋川」の筆名を用いた①②は、『「文章世界」総目次・執筆者索引』（八木書店、昭六一・二）でも川端の句と認識されておらず、検索できない。

- (6) 七月七日と一二日の日記には、初号以来発行が遅いのが心配だとある。

- (7) 「解題」に、この博文館発行の当用日記はその後も欠損・空白期間があり、七月二七日以下は見出されていないとある。「独影自命」に一部引用された大正五年九月一日から六年一月二二日までの日記は、原稿紙に一一五枚ほどありと記されており、「少年」引用の日記もこれとほぼ同一である。引用の後、処分されたと推測される。

- (8) 「秋に」とあるのは、正しくは「牡丹」。「解題」に、日記等の解説は困難とあるが、「牡」と「秋」、漢字の「丹」と変体仮名の「に」を校訂者が読み違えている。

- (9) 「大正三年 手帖」は、「解題」によれば、内容から判断して手帖前半の余白を利用して大正五年に草稿が書かれたと推測される。「大正四年 手帖」に記されたこの句も、内容的に五年に書かれたものである。

- (10) 「川端康成 少年期の短歌活動」（『日本文芸論集』昭六三・九）。

## 第二章 時代との交点を探って―「婦人公論」「中央公論」における川端康成―

前章ではまだ中学生だった川端の投書家時代をみたが、明治三二（一八九九）年生まれの川端は、第I部で述べたように、東大在学中の大正一〇（一九二一）年に第六次「新思潮」を発刊、大正二二年には「文藝春秋」の編集同人にも加わり、卒業後間もない翌一三年に「文藝時代」を創刊することで作家として出発した。それは猪瀬直樹『マガジン青春譜』（前章で言及）の指摘するように、ちょうど「マガジン」の時代の幕開けでもあった。川端自身、「これまでの私には、編輯者の私の作品に対する愛情が感じられ、その義理に追ひ迫られないと、絶対に書けぬといふ悪習が身にしみてゐた」と記し、「私の小説は、編集者との共同作品ですよ」とよく言っていたというが、新聞や一部の書下ろしの他は雑誌が唯一の発表舞台であり、ファックスやメールもなかった当時、作家と雑誌の関係は、同人雑誌のみならず一般誌に於ても担当編集者を仲介とした密接なものだった。

ところで老舗の中央公論社が『二十世紀日本文学の誕生 中央公論文芸欄の一〇〇年（明治・大正編）』（一九九六・一一）、『激動の昭和文学 同（昭和編）』（一九九七・一一）の二冊の臨時増刊を刊行した後、出版不況の中で遂に読売新聞グループの傘下に入ることとなったのは一九九九年、川端生誕一〇〇年の年であった。先の『昭和編』ではV期に分けて同誌掲載作品を概観しているが、「社会派と芸術派」と題されたII期のトップには川端の「抒情歌」（昭七・一二）を置き、「近作では「抒情歌」を最も愛してゐる」（「文学的自叙伝」昭九・五）との言葉を引用し、「新感覚派の旗手とされたが、不遍不党の姿勢を貫く」、「『婦人公論』に「日も月も」「美しさと哀しみと」を連載」とコメントしている。またコラムでも、同誌に川端が発表した最後の作品「竹の声桃の花」（昭四五・一二）に加えて、「婦人公論」掲載の「純粹の声」（昭一〇・七）も「抒情歌」執筆当時の「美意識を知るための重要な資料」として紹介しており、「中央公論」「婦人公論」両誌における川端の位置

を考える一つの手掛かりとなる。「嶋中社長を中心とした全社的サービスを心掛けていた」<sup>(3)</sup> 永井荷風・谷崎潤一郎の特権的な立場とは異なるものの、川端と本社との関わりは多彩で、見るべきものも多い。

本章では晩年までの長きに亘って執筆した「婦人公論」「中央公論」を軸として川端と中央公論社（現・中央公論新社）との関わりを整理し、幾つかの新資料も踏まえつつ作家川端の歩みを概観し、問題点を摘出して次章以降で考察したい。まず、両誌に発表した川端の文章及び「同社出版物他」の一覧を次に掲げる。同社出版物としては、川端の単行本及び川端が内容見本等に序跋文や推薦文を書いているもの（それぞれ「序」「推」と略記）を挙げた。尚、太字で示した①～⑫は筆者の調査で見いだした三七巻本川端全集未収録文であるが、選評等③④⑥は第六章で、推薦文⑦⑧⑩は第Ⅲ部第一章で紹介する。

「婦人公論」	「中央公論」	出版物他
大二三・七「新浦島物語」 大二三・一〇「恋愛論一場」 大一四・四「新時代の嘲笑的讚美」 大一一・六「燕」 大一一・八「伊豆の娘」 大一一・六「恋を失ふ」 昭三・八「温泉女景色」	昭五・七「風鈴キングのアメリカ話」 昭六・六「空の片仮名」	



---

昭一〇・七「純粹の声」

昭一二・一〇一二 小品欄「選評」

昭一二・五②「牧歌」作者の言葉」

昭一二・六〇一三・一二「牧歌」

昭一四・六④懸賞短篇「選評」

昭一四・八「復信 中里恒子様」

昭一四・一二⑤「愛する人達」

---

昭六・一〇「文芸時評」

昭七・二「抒情歌」

昭九・三「虹」

昭九・六「作家と作品」

昭一〇・一「二黒」

昭一〇・五「田舎芝居」

昭一〇・一〇「四竹（「虹」四）」

同・同①「現代作家三十四人」

昭一一・八「菅の花（「雪国」五）」

昭一二・五「十一谷義三郎」

昭一三・一「生花」

昭一三・一〇③「選者の一人として」

---

昭一二・一二・二〇『級長の探偵』

昭一四・五〇六『模範綴方全集』

全六卷

作者の言葉

昭一五・一〇一二「愛する人達」

昭一八・一〇「土の子等」

〔戦後〕

昭二五・一〇三

「全国未亡人の短歌・手記」選後評

⑥一・二月選後評は全集未収録

昭二五・四「未亡人は生きている」

全国未亡人の短歌・手記を選んで

昭二五・五 作文欄「推薦の辞」

昭二七・一〇二八・五「日も月も」

昭二八・三〇三二・一二 文章欄

昭一五・一「正月三ヶ日」

昭二六・一「ルイ」

昭二六・九「三人目」(文芸特集9)

昭二七・一「冬の半日」(同10)

昭二八・四「無言」

昭一七・一二・一五

『満洲国の私たち』序

昭二四・九・三〇 岡鹿之助

『フランスの画家たち』推

昭二五・一〇二六・一二

「少年少女」文章欄「選の言葉」

昭二五・八・二五『浅草物語』

昭二六・五〇二九・一二 谷崎潤一郎

『新訳源氏物語』全一二巻、推

昭二八・五・一〇『日も月も』

「選の言葉」

昭三一・五「伊豆」  
昭三二・五 座談会

「『雪国』の女たち」

昭三五・一二 予告「古い都（仮題）」

昭三六・一〇～三八・一〇

「美しさと哀しみと」

昭三六・一一 座談会

「結婚への喜びと怖れ」

昭二八・七 対談「或る日の対話」

（夏季臨時増刊）

昭三一・一「夕焼け」

昭三五・一一「匂ふ娘」

昭二九・三・三一 映画「伊豆の踊子」

（二度目）封切

昭二九・九・一〇 吳清源

『莫愁（再刊）』序

昭二九・一〇・五『伊豆の旅』

昭三一・一〇・五『日も月も』新書版

昭三二・四・二七 映画「雪国」封切

昭三二・一二⑦『谷崎潤一郎全集』推

昭三三・七『幸田文全集』推薦文

昭三四・七「遠く仰いで来た大詩人」

昭三五・五・一三 映画「伊豆の踊子」

（三度目）封切

昭三六・一〇～三七・六 放送劇

「美しさと哀しみと」

---

昭三六・一二 グラビア

「古都を訪ねて」

昭三七・八⑨ 「鎌倉に遊ぶ」

昭三八・五 「女流文学賞」第二回選評

「二人の作家の長所」

昭三九・一 「新春作家女優対談」

昭三九・五⑫ 「女流文学賞」第三回

選評「みづことな『秀吉と利休』」

昭四〇・四 グラビア

『『美しさと哀しみと』の傍で』

昭四二・八 対談

「結婚してから十年」

---

昭三九・五 「人間随筆」

昭四二・五 座談会「われわれは

なぜ声明を出したか」

---

昭三七・五・二八⑧ 谷崎潤一郎

『『瘋癲老人日記』推

昭三八・二・四⑩ 『世界の文学』推

昭三九・一⑪ 「責任と自負」

昭三九・二〇 『日本の文学』全八〇巻

昭三九・三・一六 『日本の文学』38川端』

昭三九・一一 谷崎潤一郎

『新々訳源氏物語』推

昭四〇・二・二〇 『美しさと哀しみと』

昭四〇・二・二七 映画

「美しさと哀しみと」封切

昭四一・一 『谷崎潤一郎全集』推

昭四一・九⑩ 「有馬稲子」『花咲く扉』

昭四二・七・一三 対談「徳田秋聲の

人と作品」

<p>昭四三・一二 グラビア 「ノーベル文学賞の顔」</p>	<p>昭四五・一二「竹の声桃の花」</p>	<p>昭四三・三・四く同・四・二六 「美しさと哀しみと」放映</p> <p>昭四三・一一く四四・二 『川端康成作品選』</p> <p>昭四三・一二・一〇 『川端康成少女小説集』</p> <p>昭四四・一・二五 映画「日も月も」 封切</p> <p>昭四四・二・二 対談「宇野千代を かこんで」</p> <p>昭四四・二・二〇『日も月も』（改版）</p>
------------------------------------	-----------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

一 編集者藤田圭雄との繋がり

川端と中央公論社との関係を論じる際、見落とせないのは編集者藤田圭雄の存在である。藤田は昭和八年一月入社、秋頃から「中央公論」で川端の担当となり、一〇年から「婦人公論」へ、一二年八月からは出版部へ移り、戦争により一九年七月に中央公論社も改造社と共に情報局から廃業を申し渡されたが、二三年八月に出版部長として復社、一二月取締役・理事就任後も、二九年九月に兼務を解かれるまで、二四年九月から「少年少女」編集部長、二六年一〇月から「婦人公論」編集

部長、二八年八月から「中央公論」編集部長を歴任した。こうした藤田の編集の下で、川端は一覧表の「虹」「作家と作品」「二黒」「純粹の声」「牧歌」「日も月も」の発表や、『級長の探偵』の刊行も為した。三七卷本全集に収録された藤田宛書簡来簡四六通（昭九・六・一四附〜四五・九・一二附。藤田の節目等にも書簡を出している（昭九・一一・一八、昭一九・八・一）の他に、第Ⅲ部第二章にも関連未翻刻書簡を紹介したが、前掲の一覧表の「婦人公論」小品欄（戦前）・文章欄（戦後）、『模範綴方全集』、「少年少女」文章欄等の選も、藤田との縁で行っている（全集未収録文③④⑥も含めて第六章で詳述）。

藤田は編集の第一線を退いた後も、川端の小説執筆の場として京都の武市邸を同社嘱託の末次俱子（昭二六・六入社、翌年一月退社）と共に手配する（昭三四・一二・一三）<sup>4</sup>等している。川端は三島宛書簡にも、「明土曜また中央公論の藤田君と京都ニ参ります 京都ニ来年から仮りの宿を得てしばらく見物したいのです 出来るならば新古今集の時代東山時代など書いてみたいもくろみもあるのですが」（同月一日附）と記しており、そうした時代小説は遂に書かれなかったものの、「婦人公論」の「日も月も」「美しさと哀しみと」や「古都」（朝日新聞）昭三六・一〇・八〜三七・一・二三）<sup>5</sup>「たまゆら」（小説新潮）昭四〇・九〜四一・三）等の連載小説では、京都がいずれも重要な意味を持たされている。藤田は、川端が招聘されたハワイ大学へも川端に請われて同行した他、家族ぐるみの旅行も度々しており、川端との親交について、『ハワイの虹』<sup>6</sup>や「日記の中の川端さん」<sup>7</sup>も纏めている。後者からは、二八年一月場所あたりから毎場所、千秋楽の日に中央公論社の枡を川端一家の為に取っていたこと、三三年一月に川端が胆石で東大病院に入院した際は、藤田が車で送り、<sup>8</sup>嶋中社長夫妻や「中央公論」の笹原金次郎（昭二三・五入社。三六年四月号〜四一年一月号まで編集部長）が出迎えたこと等もわかる。

## 二 藤田就任以前―「抒情歌」まで―

「当時は「中央公論」と「改造」との二雑誌が作家の檜舞台といふことになつてゐた。その檜舞台に初めて出たのが「温

泉宿」であつた。私は三一歳で、友人達よりもおそかつた。月評などを多く書き散らし、力ある作品はまともでないで過ぎた」と川端は「独影自命」で振り返っているが、「温泉宿」は「改造」四年一〇月号発表、「中央公論」への登場は更に遅く、第一作は「風鈴キングのアメリカ話」（昭五・七）だった。それ以前は、川端は中央公論社へは「婦人公論」に随筆等数篇を發表しているにとどまっている。「独影自命」では、「婦人公論」より「近頃見た田舎娘の批判」を書いてくれとの手紙。承諾の旨、返信。」という大正一四年六月一九日の日記を引用し、これは八月号の「伊豆の娘」で、六月号の「燕」や「文藝春秋」「文藝時代」にそれぞれ書いた短文数篇も、「湯ヶ島にゐて湯ヶ島を書いたもの」で、「後にこれらを一纏めにして「伊豆湯ヶ島」と題した」と述べているように、この一四年頃から長く湯ヶ島で過ごした川端は、月評や伊豆を素材とした随筆・小説を多く書いた。<sup>9)</sup>「恋を失ふ」（大一五・六「伊豆の帰り」と改題）は新旧のタイトルにも表れているように、恋の終りと共に伊豆時代の一区切りをも示す作品である。同作で描かれた三月の上京後、市ヶ谷での秀子夫人との生活も始まり、再度一〇月から翌昭和二年四月まで湯ヶ島に滞在し、「高円寺から熱海へ、私の不作の時は続いてゐた」（「独影自命」という熱海時代（昭二・一二〜三・五）を挟んで「婦人公論」へ「温泉女景色」（昭三・八）を發表したが、この後「純粹の声」（昭一〇・七）まで同誌への執筆は途絶え、代わって「中央公論」への作品發表が始まっている。

秀子によれば、中央公論の「宮崎さん」（不詳）、次に佐藤観次郎が原稿依頼に来たが、「あの頃の『中央公論』と言ったら大変権威のある雑誌」だったにも拘わらず川端は断わり、「結局断り切れなくて書くことになったのが先の「風鈴キングのアメリカ話」だったという。佐藤（昭五・一入社）の回想によれば、編集部に入って最初に訪問した作家が「浅草紅団」（「朝日新聞」昭四・一二・一二〜五・二・一六。九月号の「新潮」「改造」で完結）で話題となった川端で、「三月号の中間物」として「随筆風のもの」を二十枚書いて貰う<sup>10)</sup>つもりが三時間粘っても承諾が得られず、代わりに川端が推薦した武田麟太郎が書いたのが「浅草、余りに浅草的な」だったという。同作は五年三月号に掲載されており、川端が「檜舞台」への發表を

断ったのは「浅草紅団」が完結していなかったからなのか、理由は判然としない。

この「風鈴キングのアメリカ話」は、同誌翌月の正宗白鳥「文芸時評」で触れられた程度であまり話題とならず、続く「空の片仮名」(昭六・八)は後に代作問題も起こり、共に川端生前は未刊行に終わった。次の小説が前述の「抒情歌」で、「抒情歌」に現れたやうな心霊説を、私は現実的には必ずしも信じてゐないが、魂の詩としては信じてゐる。この作はその入口を淡く歌つたものとして、私の氣に入つてゐる<sup>(12)</sup>とも、「この後も私が靈魂の不滅やあの世の存在を信じることはむづかしいだらうけれども、この「抒情歌」の世界をなほ深い象徴に書く日は来るかもしれない<sup>(13)</sup>」ともいう自愛の作だった。「母の顔を知らない」川端が「母のことを書いた」のがこの作だ」と横光が言つたと、川端自身が記しており、三島も「川端康成を論ずる人が再読三読しなければならぬ重要な作品<sup>(15)</sup>」と指摘している。

桜木町三六番地時代(昭六・四く九・六)には、「中央公論」の佐藤と「改造」の水島治男(後述。第Ⅲ部第二章一 038 水島治男宛も参照されたい)が「家でよく鉢合わせになつて、おたがいライバル視していたよう」だったと秀子は回想しているが、「抒情歌」以降、佐藤が担当したと思われる昭和七、八年には「中央公論」への作品発表はない。川端は「改造」に「禽獣」(昭八・七)等執筆した一方で、次章で述べるように「少女倶楽部」を始めとした少女雑誌への執筆が増え、八年一〇月には文芸復興の旗印を掲げて「文學界」を創刊、編集同人としてこれに深く関わつていった。<sup>(16)</sup>

### 三 「牧歌」連載など―満州事変の頃―

川端全集には、前述の藤田書簡・来簡のみならず、「改造」で昭和三年末以降川端を担当した上林暁<sup>(17)</sup>の書簡と、その後任の水島の書簡・来簡(昭一〇・三・一一附く三六・六・二一附、七通)も収められている。それらを読み合わせると、例えば「花のワルツ」は、「改造」「文學界」「文藝」に分載(昭一一・四く一二・一)される前年、藤田宛書簡(昭一〇・二・二二



附)に「花のワルツ」といふ映画のための小説を中央公論に出して貰ひたい」、映画となり且つ「中央公論や改造に十分載る価あるのを」去年から書きたいと思っていた、いづれ腹案きまって相談に伺うと、ごく早い段階で打診していたことが分かる(その後の経緯は、「改造」の水島宛書簡(同・一〇・二三附) 水島来簡(昭一一・三・三〇附) から察せられる)。この「花のワルツ」の構想・執筆の間に、やはり分載の形で発表されたのが「虹」で、初回(昭九・三)と第四回(昭一〇・一〇)が「中央公論」に掲載されている。川端は、「バラバラのコマギレ死体のやうな発表のし方は、自己にも読者にも不実なのは無論ながら、その全き姿は作品集でと、自ら慰めて来た<sup>(19)</sup>」としながらも、「浅草を少し遠ざかつてから浅草の残りの夢を追ふやう」な「虹」は、「私の浅草の小説のうちでは好きな作品<sup>(20)</sup>」と述べている。その第四回「四竹」が発表されたのは中央公論五十周年記念号の特集「現代作家三十四人」で、各作品冒頭に作家の言葉が無題の囲み記事で紹介されている。川端は次のように記している。

全集未収録文①(特集「現代作家三十四人」昭一〇・一〇)

自分の文学的経歴に就ては、改めて語りたいものもない。ただ私達が小説を書き出した頃と比べて、今は種々のむつかしさが加はり、自分がそれと必ずしもよく戦つてゐないことを、恥しく思ふくらゐのものである。しかし、自分などはまだ習作時代であり、同年輩の人々に比べても、自分は甚だ子供じみた仕事ばかり続けてゐるやうであるから、健康でもよくなれば、本腰を入れた仕事もやがて始められるだらう。

「健康でもよくなれば」とあるが、「去年の三月は、不眠過労の結果、一人こっそり入院していた」「不眠」(昭一一・五)と翌年になって明かしているように、この昭和一〇年は体調を崩して二度も入院していた(二月二十八日〜三月七日、六月前半

（八月五日）。だが、藤田が異動した「婦人公論」には「純粹の声」（前述）を発表、「中央公論」にも他に随筆「二黒」と小説「田舎芝居」を書いている。「今は」とあるが、翌年には二・二六事件も勃発、川端は「以後文化暗黒の時代か」と佐藤碧子宛二月二八日書簡にも記しており、当時の文学をめぐる状況については後述する（第六章一・二等）。この一〇年以降一二年六月までを羽鳥徹哉は「川端の虚無からの回復の時期」と捉え、「田舎芝居」のように浅忍非道な悪や死の現実を見据えることもその回復の一つの手掛かりだったと論じている。<sup>(21)</sup>「田舎芝居」は、大正一五年の「入婿殺人事件」を警察の捜査実例集を参照して作品化したもので、「編輯後記」にも「創作不振」の唱えられる折から「川端康成氏が新しき工夫になれる」力作と触れられた野心作で、川端も「実録によつてゐるので、私の作品のなかでは異色を持つ」、「徳田秋聲氏に再三褒めていたのが、記憶に残つてゐる。<sup>(22)</sup>」と振り返り、『川端康成選集 第二巻』（改造社、昭一三・五）にも、「二十歳」と「田舎芝居」とは、私の旅から直接生まれた作品ではないが、旅の小説のこの巻に挟み入れて、そこに一種の語勢を与へたいと思つた。（あとがき）として収めている。

「二黒」は「新春運命双六」として「一白」から「九紫」までの九人の文章を集めたもので、川端は「人間の心に宿るあらゆる運命観は、結局はただ甘さである。」「私自身の星の二黒について、また十二支の亥については、別に考へたこと」はないと記している（干支の亥については後述、第九章二）。上野馱着で原稿を送つたとある藤田宛書簡（昭九・一一・七附）でも「二黒」について考えたことがないので弱つたと記しているが、川端には「恋を失ふ」他「ちよ」物で描いた初代が丙午であつたことから構想した小説「南方の火」（前述、第I部第二章五）があり、後の随筆「人間の星」（昭一三・二）では、文学者といふものは「いつ死んだつて、どこかその人の「星」らしい仕事を仕遂げてゐる感じがある」と述べ、「もう四十といふ自分の年を思ひ合せて」もいる。早世の怯えについては前章で言及したが、父の享年三二、母の享年三八も超えて「四十」の不惑を迎えたのは、川端にとって殊に感慨深いものであつたと思われる。

先の藤田宛は湯沢からだが、同日附の秀子宛書簡には「空気の厳しきは仕事出来さうでよろし」ともある。「雪国」が「文藝春秋」「改造」等の各誌で分載され始めたのもこの一〇年の一月からで（詳しくは第八章四）、「雪国」の旅（昭三四・一〇）に引用の「文藝春秋手帳」によれば、九月二七日に「中央公論の佐藤氏」に会い、三〇日から湯沢に滞在、一〇月末と推定される秀子宛書簡に「日本評論デ（原稿料を）クレヌノナラ、原稿取り戻シ」、他へ「売ルナラ中央公論デモ改造デモドコデモヨイガ、中央公論ノ方ヨカロウ」、「改造ノ方イイカモシレナイガ、直グ金クレルカドウカ」とあった第四回「徒労」は結局「日本評論」一二月号に発表されたが、第五回「萱の花」は「中央公論」翌一一年八月号（七月一九日頃発売）に発表された。これは水島宛（六月二六日附）に、「七月ハまた／＼中央公論に大迷惑かけ何とも云ひ様ありません 八月ハ其中央公論と文藝春秋の他に花のワルツあり」とあるように、七月号に執筆する約束が果たせず、秀子宛（七月六日附）に「七日中央公論へ送ることになるでせう」とあったもので、「編輯後記」でも「新境地を描く「萱の花」の力篇」と言及された。

佐藤の「中央公論」編集長時代（昭九・二〜一二・一）に川端は、同誌への作品発表も増えたのみならず、岡本かの子や北条民雄の作品の推薦もしている。<sup>(23)</sup> 川端はかの子から推薦を依頼された「ある時代の青年作家」を「中央公論」へ取り次いだり（昭九・六・一四附藤田宛書簡）、かの子も川端宛（昭一〇・一〇・二四附）に、佐藤が遭う都度「川端さんも非常に力をいれられて居るから是非自分も」と言ってくれたので「鶴は病みき」を佐藤に送った、口添えしてほしいと書いたり、編集部の松下秀麿にも、川端が推賞し、届けてくれる筈だったがと断りながら「落城後の女」を送ったと伝えたりしている（昭一二・五・三〇）。同作は三月二日に川端へ送って、「中央公論」への推薦を依頼していた。一方、一一年九月二日附秀子書簡には、「中央公論の佐藤氏より」として北条の「癩院受胎」採用決定の手紙の抜き書きも見られる。これは、「中央公論」から川端を通じて依頼されていたもので、<sup>(24)</sup> 目を通した上で「中央公論」へ推薦したと、八月二五日に北条に書簡で知らせていた。この作は同誌一〇月号に発表され、遺稿「道化芝居」も一三年四月号に発表された。

一一年一〇月二三日附秀子書簡に「中央公論から電話あり宿知らせました」とあるが、この時川端が新年小説を断った為に二八日には松下がわざわざ上林温泉まで来たと三〇日附秀子宛書簡にある。松下の回想にも「収載予定の一篇ができないので」行ったとあるのだが、佐藤が編集長を離れた一二年の「中央公論」には、十一谷義三郎（四月二日没）の追悼文を発表したのみである。一方「婦人公論」では、前述の小品の選を一年間行い、初めての連載も始め、結び付きを急速に深めている。二月九日付藤田書簡に「小説のことよろしく願ひいたします、なるべく五月号からいただけるよう御腹案御立て頂き度く」とあるが、その五月号には次のような連載予告が発表された。

#### 全集未収録文② 「牧歌」作者の言葉（昭二一・五）

私の作風のなかには、牧歌的なものがあるので、それを心ゆくばかり生かしてみたく、「牧歌」と題した。所を信濃に選ぶといふことの外は、まだ明らかな形がない。毎月信州へ行って、実際に見ながら、そして調べながら、書き進めて行くつもりである。筋立てや人物には余り縛られず、その時々心のままに流れ出る、牧歌本来の自然でありたい。従って、成功も失敗も風まかせである。歌が途絶えたら退場する。

昨年信州に二月程遊んで、この国を書きたいと思ったのが起りである。幸ひに一年続けば、少なくとも信濃の風物の牧歌暦とはなるだらう。先づ雪解の春の牧場から見て廻る筈である。しかし旅人の眼は、その土地と人との深く触れることがむづかしく、皮相に流れ勝ちである。この点読者の教へを得たい。以上の次第で、婦人雑誌向きの小説にはなるかどうか分らぬが、一つくらゐはかういふ作品も見逃して置いてほしいものだ。

これは「本誌六月号より新連載二大長篇小説」とある折り込み広告に、林芙美子「南風」作者の言葉」と共に、各々の顔写

真を添えて紹介されたもので、同号の「編輯者より愛読者へ」でも新連載への言及があった。「昨年信州に二月程遊んで」というのは、一一年一〇月一六日からの信州入りを指し、一月八日に初めて戸隠を訪れて一泊、二二日に鬼無里村へも行って、執筆意欲が湧いたようだ。この一二年は、当初は「夏から秋の初めまで、信州を見て廻り、それから琉球へ渡り」、琉球に三四ヶ月ゐて、書き下ろしの長編を一つ書く。」と「文學界」の「同人雑記」（昭一二・九）にも記していたが、「昨年十一月と今年の八月と私は二度とも長野から登つて来たので、今度は柏原からの道を選んだ。」（戸隠山にて「同・一一」とあるように、秋の終わりまで「牧歌」の取材を続けて<sup>(25)</sup>いる。翌一三年の「旅中」（「文學界」六月号。四月二八日執筆）でも、「牧歌」を書き、また戸隠へ来た。<sup>(26)</sup>「戸隠は一月で、つまり雑誌に連載の一回分ですますはずであつたのに、半年以上かかつてしまった。」とあり、「信州の方は早く一段落をつけて、琉球へ行かねばならぬ。」としながらも、「信州の小説は、まあ四五年がかりでゆつくり書くつもりだから、そのうち鉾脈にもぶつかるだらうと楽しみにしてゐる。」と記され、「木曾馬籠」（昭一四・一二）にも「追々と信州は普く歩きたい」とある（琉球行きについては後述、第七章）。

このようにして、当初「一年続けば」と言っていた「牧歌」は一九回と長期化した。刊行中の改造社版九卷本川端選集（昭一三・四〜一四・一二）の第二巻では、「伊豆の踊子」は「私の旅の小説の幼い出発」であり、「近作の「雪国」や「牧歌」は、その旅の小説が少しく育つて来たもの」で、「この旅の小説といふものに、今後は尚意義を認めて、いろいろの風に試みることを、私の仕事のひとつとしたい」（「あとがき」）と位置づけ、選集最終巻では、「連載の間「婦人公論」に一方ならぬ迷惑をかけながら、序の口までしか書けなかつた」が、「作者の愛着がある作品なので、選集に入れてみたかつた」（「同」）<sup>(27)</sup>として、「牧歌」の一部を「戸隠の巫女」として収めている。盧溝橋事件（昭一二・七・七）の直前に書き始められた同作は、戦時下の川端の「日本回帰」を考える上でも、川端の一連の「旅の小説」としても、重視されるべき作品であり、改めて後述（第六〜八章）する。この「牧歌」連載中には、「中央公論」にも「生花」が発表されている。先行研究は少ないが、華道

に関する出版物の隆盛と戦争による衰退との境目に発表された作品であり、芸道の世界の愛憎を描くという意味で「千羽鶴」の先駆として位置付けられ、「名人」との関連の強さもうかがえるといった指摘が谷口幸代にある。<sup>(28)</sup>

川端にとって同社からの初の単行本であり、初の少年少女小説集ともなった『級長の探偵』が刊行されたのも、「牧歌」連載中だった。一三年一月号の折り込み広告には、「川端氏が少年少女の為に小説を書いてゐる、といったら吃驚なさる方も多いかと思ひます。しかし、川端氏の持つ優しい情操と、暖い心情は、子供の為に、良い娛しい読物を生まないでは居りません。美しい文章の中に面白いお話の数々が匂つてゐます。「私の書いたものの中で、この少年少女小説ほど好きなものはない」と言つてゐる氏自身の言葉にも香はしい内容がお分りだと思ひます。少年の日、かうした良き娛しき読物に心洗はれる子供たちの幸福こそは、何にもたぐひないものでありませう。」とある。

同書は、出版部に移ったばかりの藤田が「破天荒な豪華本」を作ろうと考えて一二年八月末か九月初めに軽井沢まで出向いたところ、川端はすぐ承諾し、作品も自選したものだといふ。<sup>(29)</sup>川端はかつて、「この間中央公論社から、いはゆる童話にあらざる少年小説でなにを推賞するかと問はれた時、私は自作の「級長の探偵」「開校記念日」その他と、敢て答へておいた。自作の名を聞くだに顔をそむけるが常の私であるが、不幸にして、日本の作家のすぐれた少年小説を知らぬがゆゑにである」と記していたが（「コドモ座」昭九・六。質問したのは、当時「中央公論」で川端を担当していた藤田か）、川端の少年少女小説を一つも読んでいなかったのに川端初の少年少女小説集の企画を進めたという藤田の念頭には、この時の言葉があったのであろう。表題作を巻頭に「開校記念日」以下九篇を収録、きれいな本が出来たと川端は喜んだという。だが晩年の昭和四五年に『名著復刻日本児童文学館』（ほるぷ出版）が刊行された際には、同書の復刻を藤田に「いやです」と断り、「あなたもあの内容をいいとは思わないでしょう」と言つたとのこと、同書は川端没後の第二期に復刻された（昭四九・一〇）が、戦前・戦中の川端の少年少女小説については次章で、最晩年の川端については第九章で述べる。

#### 四 「愛する人達」連載など―太平洋戦争勃発へ―

川端は「牧歌」連載終了後、琉球へは行かず、昭和一四年一月から三月まで熱海に逗留して、「名人」の素材となる碁の観戦記を書き、『模範綴方全集』の選も藤田と共に行い、「新女苑」での選も始めた（後述、第四章、第六章）。一五年正月号は、「中央公論」に「正月三ヶ日」、「文藝春秋」に「旅人宿」、「文藝」に連載「母の読める」（この四回目で中絶）と各誌に執筆したが、この後は、三本の少女雑誌・婦人雑誌連載―「少女の友」連載中の「美しい旅」（後述、第三章二四）、「新女苑」新連載の「旅への誘ひ」（後述、第四章二二）―次のように予告した「婦人公論」の読切連載小説―に力を注いでいる。

#### 全集未収録文⑤ 「愛する人達」作者の言葉（昭一四・一二）

毎月一つづつ読切小説を書ひて行つて、一年続けることは、私には幸せな楽しみである。それを同じ雑誌の同じ読者に見てもらへることに、温かい親しみを感じる。長篇小説とはちがつて、作者は月々新しい気持が湧くし、読者には退屈される憂へが少い。十二の小説をまとめて、「愛する人達」としたのは、主として恋愛小説を集めてみたいからだ。一つ一つがとりどりに美しく、十二揃つて更に美しくなれば、作者の本懐である。

理想としては、各篇それぞれに主題や人物の性格をちがはせたいものだが、せめて女主人公の境遇や年齢くらゐは重複させず、書き方を変へて、色彩の変化を持たせたい、とにかく、私が作家生活に入つて以来、一年に十二篇の小説が書けたことはまだないのだから、むづかしいにはちがひないものの、出来るだけ努力せねばならぬ。十二篇続けて読まれては、一作家の鼎の軽重を問はれるのに十分で、油断ならないから。

「新年号予告 婦人公論が贈る現代最高の芸術欄 新連載四大小説」として、阿部知二「旅人」、武者小路実篤「幸福な家族」、林芙美子「十年間」の各「作者の言葉」が作者の写真も添えて掲載された。こうして始まった「愛する人達」は、掲載各号目次に「連載短篇」と記された特異な発表形式の作品として注目される。主に旅先で執筆されたため、その執筆進捗状況は秀子宛書簡等からよく分かる。幾つか例を挙げると、

\*熱海から、昭和一四年一月二三日附「今日明日で、少女の友片づけ、婦人公論すまし一寸帰り」

同年一二月七日附「中央公論」、今夜あたりから。なるべく短くするつもり」

↓一二月一八日、「婦人公論」一月号に「母の初恋」（前述、第I部第二章五三）発表。熱海の宿の描写あり。

同月二二日頃、「中央公論」一月号に「正月三ヶ日」発表。

\*熱海から、昭和一五年一月三〇日附「婦人公論は、一日朝に全部着かぬかも知れぬが」 ↓二月一五日、「婦人公論」

三月号に「悪妻の手紙」（「ほくろの手紙」と改題）発表。（以下も同誌は前月一五日発売）

\*蒲郡から、同年三月三一日附「婦人公論やつてゐます」 ↓「婦人公論」五月号に「夜のさいころ」発表。

\*箱根から、同年六月二日附「婦人公論も今夜から書くつもり」

\*興津から、同四日附「今朝五時半までかかって婦人公論、とにかく三十枚書いた。なにがなんだか分らぬ悪作なのもや

むを得ぬ。間にあったか、どうか知らんが」 ↓「婦人公論」七月号に「夫唱婦和」発表。

\*川奈から（後述、第III部第二章一 **095**川端秀子より中里（佐藤）恒子宛）、同年一二月七日附、川端は三〇日に熱海で「少

女の友」と「婦人公論」を済ませた。

↓「婦人公論」一二月号に「年の暮れ」発表。（「少女の友」には「美しい旅」を連載中。）

「連載短編書くのは楽しみにしてゐましたが、結局追はれ通しで、大幻滅の結果のやうです」（五月二日林芙美子宛）と漏ら



しつつ、三回の休載（四、九、一〇月号。一〇月号「編輯後記」には「川端氏はじめ四氏の創作欄」とあり、間際まで待っても入稿できなかったと推測される）を挟んで「愛する人達」九篇が発表された。その中から「燕の童女」「母の初恋」の二篇が出版者大悟法利雄<sup>(30)</sup>により選ばれて収録された『正月三ヶ日』（新声閣、昭一五・一二）の「あとがき」に川端は、「燕の童女」は、新造船新田丸に試乗の帰途、大佛次郎氏と同車の特急燕で所見の女兒、を描いたのだけれど、鮮やかでない。「母の初恋」では、母の死の章に作家の愛着があり、そのところの少女は可愛く、少し涙をこぼしながら書いた。」と記しており、一五年四月二〇日に見た女兒が翌月発売の六月号「燕の童女」の題材に早速使われたこともわかる。「母の初恋」については前述したように、母の死とその娘の登場が〈ちよ〉像との決別と再創造を象徴してもいた。「中央公論」掲載の表題作「正月三ヶ日」についても、「私には無造作にまた無数に書ける種類の作品、そして私の念願に反する。」「浅く触れた笑話と言へぬことはないが、卑しくあらうとして卑しさに落ち切つてゐなければ、作者は先づそれでよしとする。」と言及している。

『愛する人達』（新潮社）の初版が刊行されたのは一六年一二月、太平洋戦争勃発の月だった。戦後の高見順「解説」（新潮文庫、昭二六・一〇）は、「その頃の多くの作家の多くの小説集のように硝煙の臭いが作品のなかに立ちこめているということが一向にない」どころか「平和否定の声が荒々しく叫ばれていたときに当って、「平和な時代」に想いをいた<sup>(31)</sup>」していることに注目し、終戦直後にそのままの形で重版が出されたのも「稀な事柄」と指摘したが、この連作後、終戦までに両誌に発表されたのは、「土の子等」（昭一八・一〇）のみである。これは農民短歌で知られた吉植庄亮の農場（千葉県印旛郡）を七月一三日に訪れたルポルタージュで、川端はこれ以前にも、「日本の母」（「読売報知」昭一七・一〇・三〇）、「日本の母」を訪ねて」（「婦人画報」同・一二）といった戦時ルポを書いているが、「土の子等」では、吉植の農場で勤労奉仕をしている国民学校の児童達の写真三枚と共に、その綴方も四篇抜き書きされており、文中の「同行のF君」は藤田と推測される。

また、藤田宛七月三一日附書簡に「満洲の綴方の本」の「序文は急ぎ書きます」と触れているのは大村次信編『満洲国の

私たち』で、これは満洲国協和会青少年団中央統監部で日満露蒙の文集を編纂して謄写版にしたのを中央公論で出してもらえるよう、川端が一月九日藤田宛書簡で依頼したものである。その一月附の序では「勿論、政治的意図のもとに募集されたとは言へ」と断りながらもその意義を述べ、「日文は藤田氏と私が一応選択」したと記され、一二月に刊行された。一九年七月一〇日、中央公論社も戦争による廃業を迎え（前述）、戦前の同社への川端の関わりはこの書が最後となった。

##### 五 終戦後―「虹いくたび」連載など―

終戦後の川端の仕事は、昭和二〇年九月に出版社として発足させた鎌倉文庫の実務から始まった。それは、「私はその事務の多忙に、敗戦のかなしみをまぎらはすことが出来たのは幸ひだった」（「敗戦の頃」昭三〇・八）というような打ち込み方だった。川端は二三年六月に会長に就任したペンクラブの任務にも精力的に取り組んでいき、「月下の門五 日本ペン・クラブ」（昭二七・八）にその活動の概略が記された他、「婦人公論」二六年一二月号にも、「日本ペンクラブ代表帰国報告文芸講演会」（一月一九日、有楽町読売ホール）で川端会長の挨拶、その他数氏の講演があるとお知らせが出る等している。戦後の中央公論社との関わりも、創作からではなく、昭和二五年の「婦人公論」「青少年少女」等の選から始まっており（後述、第六章）、「婦人公論」「中央公論」における戦後第一作は「中央公論」二六年正月号の「ルイ」であった。愛犬ルイの思い出に絡めて妻の流産や養女に触れた私小説的な題材故か、その文末には（つづく）と記されていたにもかかわらず、一回のみの発表で終わった。次の「三人目」（昭二六・九）と「冬の半日」（昭二七・一）は、「中央公論 文芸特集」の九、一〇号に発表された。この「文芸特集」は、二四年一〇月に臨時増刊の形で創刊されたもので、終刊号となった一〇号の「文壇人物評論」では川端も取り上げられている。

一方「青少年少女」編集部長を務めた藤田は、同誌廃刊（昭二六・一二）と前後して「婦人公論」の編集に戻った。これに

伴う形で、川端も「少年少女」廃刊まで文章欄の選を続け、「婦人公論」二七年一月号から「日も月も」の連載を始めた。この正月号のグラビア「新年」には、愛犬バロンも写った川端一家の写真（撮影、林忠彦）と共に、川端麻沙子（政子）「父と犬」が掲載された。<sup>(32)</sup> 養女麻沙子（政子）が川端について書いた珍しい文章なので、以下に全文を引用する。

父は無口でめったに私を叱ったりしませんので、不満に思うこともありますが、時々旅行さきから下さるお手紙は、しみじみとした父の有難さを感じます。たゞ読むだけですまされないような気持ちになります。

犬は雑種が二匹とその子犬が二匹、それからワイヤーが一匹いますので、その辺にある玩具になりそうな物なら何でも、くわえてじゃれまわって喜んでいきます。あまりいろんな物をこわされると私の責任のようで、犬の代りにいいわけをします。時々外へ飛び出して捉えるのに家中大騒ぎをします。お行儀が悪いので訓練を受けています。でもいないと淋しく、父と同じように大事な存在です。

戦後の川端は、「婦人生活」での「虹いくたび」（昭二五・三〇二六・四）を口切りに、婦人雑誌での中間小説の連載が目立ったが、「日も月も」はその第二作にあたり、翌二八年には並行して「婦人画報」でも「川のある下町の話」を一年間連載した。「虹いくたび」の方は完結直後に一六巻本川端全集へ収録されたものの単行本化されなかったの<sup>(33)</sup>に対し、「日も月も」は連載終了直前の二八年四月号には早くも単行本の広告が出た。「京都の茶会に始まるこの物語は、更に鎌倉に、東京に、幽艶な筆をくり展げる。切なくも美しい川端文学の心髄！」と紹介され、<sup>(34)</sup>とある五月号にも、「5月上旬発売」、「齢五十を越して硯筆ますます艶やかさを増し、芸術院の荣誉<sup>(34)</sup>にかがやく巨匠川端康成氏が、婦人公論に昨年一月より書きつづけ、美しい野心作として大好評裡に終わった傑作長篇。美しくも悲しく心に沁みわたるような愛と悩みのロマンス」とある。七月

号「ブック・ガイド」<sup>(35)</sup>では芝木好子の同書の感想が載り、八月号には「美しい骨董品を描写し鑑賞しつつ、この世のむなしさを書いたこの小説は、平安朝期の作品を思わせもする」といった週刊朝日の評も引用された。<sup>(36)</sup>同書は九月号には「重版出来」、十月号には「好評3版」とあり、昭和三二年一〇月には新書版も出た。

同連載の終了と前後して川端は文芸欄の選も始めているが、小説の発表は三六年の「美しさと哀しみと」の連載開始まで途絶えた。この間同誌の編集長は、藤田の後、三任の山本英吉、社長兼務の嶋中鵬二<sup>(37)</sup>を経て、創刊五〇〇号にあたる昭和三年一一月号から三枝佐枝子（昭二一・四入社。着任は昭三三・九・一）が総合商業婦人誌初の女性編集長となった。知的硬派路線から教養的軟派路線へといった嶋中方針を一層具体化していった三枝は、文芸欄の充実の他、芸能人の新しい分野での起用等も図り、その編集長時代には、二〇万部台だった「婦人公論」が四〇万部台に迫る勢いに達した<sup>(38)</sup>という。

## 六 文芸映画の隆盛―「美しさと哀しみと」連載など―

「このところ『文芸映画』が好評で、相当多くの観客を動員したところから、その制作が流行の観を呈している」として「婦人公論」に座談会「文芸映画をめぐって」<sup>(39)</sup>が掲載されたのは二九年四月号だが、川端作品の映画化も相次いだ。<sup>(40)</sup>作家としての出発期に演劇・映画への並々ならぬ関心があったことは前述したが（第一部第一章）、この頃には映画の原作者としても婦人読者になじみを深めていたことが誌面にも反映されている（或いは深めるように誌面作りが為されている）ことは、例えば「スクリーン・ステージ」で映画「千羽鶴」<sup>(41)</sup>（二八年一月一五日封切）試写の感想を舟橋聖一・小松清が書いたり（昭二八・二）、「雪国」映画化（岸恵子主演）に際して座談会『「雪国」の女たち』<sup>(42)</sup>（昭三二・一・五。豊田四郎監督、池部良、岸恵子、八千草薫。司会十返肇）が掲載されたりしていることに見て取れる。「小説のふるさと『伊豆の踊子』をたずねて」<sup>(42)</sup>（昭三一・五）で伊豆の写真（撮影林忠彦）に川端が小文「伊豆」を書き、編集部による解説が添えられているのも、「伊豆の踊

子」二度目の映画化と『伊豆の旅』<sup>(43)</sup>刊行を受けたものと思われる。また有馬稲子・岸恵子・久我美子との座談会「結婚への喜びと怖れ」(昭三六・一一)のリーダーには、「フランスで結婚生活を送るシアンピ夫人岸恵子を久しぶりに日本に迎えて、結婚式をまぢかに控えた有馬、久我の二女優が多忙な時間をやりくりして、やっと一堂に会し、川端先生を囲んで語り合う、仕事を持った女性の結婚のむずかしさと、新しい結婚生活への夢」とあるが、川端はこの三人が昭和二九年に結成した「にんじんくらぶ」を後援したのみならず、三二年五月のパリ郊外での岸の婚礼に保証人として立ち会い、有馬の結婚式(昭三六・一一・二七)でも親代わりをした。「風景」に連載した「岸恵子さんの婚礼」(昭三六・一〇・九)は有馬の婚約の噂につれて岸の婚礼を思い出したと書きだされており、「朝日新聞」にも「鰐淵晴子さんのくちびる」(昭三六・五・二〇)、「有馬稲子」<sup>(45)</sup>(同・一〇・二)を執筆、これらの文章にも彼女等に対する親愛の情が溢れている。有馬が「婦人公論」で「告白的自叙伝」の連載を始めるや(昭三七・九)、その文章を「川端康成先生が絶賛された」<sup>(46)</sup>(同・一〇月号「コージー・コーナー」と触れられてもいる。

また、女優との写真に作家がコメントを加えていくグラビア「作家と女優」シリーズの第二回「鎌倉に遊ぶ<sup>(47)</sup> 川端康成氏と鰐淵晴子」(昭三七・八。鰐淵は「伊豆の踊子」三度目の映画で主演)<sup>(48)</sup>では、五頁に亘って五枚の写真が載せられ、その解説として二頁目から以下の川端の文(全集未収録文<sup>(9)</sup>)が付けられている。

全集未収録文<sup>(9)</sup> 「作家と女優(2) 鎌倉に遊ぶ 川端康成氏と鰐淵晴子」(昭三七・八)

(二頁目) 「御仏なれど美男」の鎌倉大仏の前で、私はなんともなさない顔をしてゐる。

一 昨年の映画『伊豆の踊子』のころとは、鰐淵さんもずるぶる娘らしくなった。

『伊豆の踊子』の上映の時、私はニュー・ヨオクにゐて、そのホテルへ、鰐淵一家が訪ねて来てくれたのに、私は出

歩いてみて会へなかった。日本にもこんな美少女があると、私はアメリカ人たちに晴子さんを見せたかったのだが。

最近ハワイで、歌手のプレスリーが、晴子さんの手を握りつづけて、はなさなくて、お母さんの気をもませたといふ。  
(前頁)

由井ヶ浜<sup>ママ</sup>で、晴子さんが私を見つけて走り寄って来てくれるところか。私はライター<sup>ママ</sup>の火もうまくつかない。

(三頁目) 晴子さんが砂浜で日光浴をしてゐるのを、私が護衛してゐるのでもないやうである。

晴子さんはきれいに伸びた姿である。海岸で軽装の晴子さんは明るく清新な少女である。

(四頁目) 円覚寺山門前の石段で、おもしろい写真である。上と下の人物にどういふつながりがあるのか、謎のやうである。

海岸の写真にもこれにも、晴子さんの美しく整った顔が見られる。

(五頁目) 鎌倉近代美術館の中庭だが、円覚寺につづいてこれも抽象じみた写真である。

以上いづれももつと親しみを現せばいいのに、カメラを向けられると、私はかたくなるらしい。

同号の「コージー・コーナー」では、「鰐淵さんに「ショット・パンツになって下さい」といったら、傍から川端先生が「ぼくも着がえましようか？」とニヤリ。和やかな雰囲気で撮影完了(葛尾)」と、その様子を伝えている。「上映の時、私はニュー・ヨオクにゐて」とあるが、川端は同月二日から米内務省の招きで渡米、七月にはブラジル国際ペン大会に出席したが(後述、第九章一三)、ワシントンからの五月一四日附一栄(秀子)宛書簡に、「明日からのニューヨオクで、踊子を演じた」<sup>(49)</sup>と記していたが、六月二一日の書簡では、「鰐淵はる子さんが昨夜か今夕ホテルに来るはずだったが現れなかった。よほどいそがしいらしい」とあり、二五日にはボストンへ発ち、

八月一九日に帰国した。

三六年から連載された「美しさと哀しみと」の予告「古い都（仮題）」（昭三五・一一）には、「編集長の三枝さんに、ワシントンやニューヨークで度々お会いしているうちに、連載小説を書くように言われ、遠い空ののんきさもあって、承知してしまいました。」とある。三枝と同宿だったことは一二日附・一四日附一栄（秀子）宛書簡（後者に「明日から三枝さんとは別の旅路」とある）に記されており、「旅信抄」（昭四二・四）中の一一日の記事にも三枝の名が見え、この頃に連載の直接的な交渉があったと推測されるが、この渡米直前に川端は嶋中に借金の保証人になってほしいと依頼もしている（後述、第Ⅲ部第二章一 **069 中央公論嶋中嶋二宛書簡**）。当時川端は、「新潮」で「眠れる美女」を連載中（昭三五・一〜三六・一一。但し、昭三五・七〜一二は休載）で、後には「朝日新聞」で「古都」の連載（前述）も始まるが、これらと平行して「美しさと哀しみと」は三三回に亘って「婦人公論」に連載された。同作は評判を得たようで、早くも三六年一月号には連続放送劇として放送される知らせが見られ、京都と鎌倉を往復する形で展開していく作品に関連したグラビア「古都をたずねて 文化勲章を受賞した川端康成氏の横顔」（昭三六・一一）も組まれている。最終回掲載の三八年一〇月号「コージー・コーナー」では、「けい子は、運命の波を切って行った。「をはり」と書かれた原稿をいただいた夜、何かが砕け散ったような気持だ。思い出多い三年間だった（葛尾）」、「二年十ヶ月にわたって連載されました川端康成先生の「美しさと哀しみと」は、今回をもって完結（三枝）」と触れられた。

この後も「婦人公論」は、岸との対談「新春作家女優対談 ボン・ジュル親代り先生」（昭三九・一）、「結婚してから十年」（昭四二・八）を掲載、澤野久雄「岸恵子さんの嘆き」（昭四四・三）でも川端への言及がなされた。また、久我は後に映画「日も月も」（松竹、昭四四・一・二五封切。川端も特別出演した）で、道子を演じた。

## 七 『日本の文学』編集、「女流文学賞」選考など

編集者伊吹和子によれば、<sup>(55)</sup>「美しさと哀しみと」は「中央公論社創業八十周年記念出版」である『日本の文学』の川端集に、「類書とは違う魅力」を狙って、単行本化するに先だって収められることになった。川端はこの全集の編集も務めており、次の文章が両誌に掲載されている。

### 全集未収録文⑩「責任と自負」(昭三九・一)

後代にも伝え、海外にも出すというのが、出版者の志であつて、編集者たちも自分を、この全集の仕事に生かしたいと願っている。その自分の強い編集者各人の文学観は合議取捨されて調和には達するものの、なお、この全集の随所に、特色を印するだろう。このような文学全集には、あまりに奇警な独断はゆるされぬが、特色にも責任と自負を持たなければ、編集に参加の意味がない。そして最善に近づけようとする編集会議は、毎回、私を疲れさせるほど、烈しく、おもしろい。

「婦人公論」では、前月の折り込み広告に続き、一月号巻末の広告頁には、編集をした谷崎潤一郎、川端康成、伊藤整、高見順、大岡昇平、三島由紀夫、ドナルド・キーンの文と、池田弥三郎「表記の整理賛成」、推薦の言葉(手塚富雄、吉田精一、細田菊雄、太田薫、森繁久弥、尾上梅幸、中島弘子)、「日本近代文学と『中央公論』」が一七頁に亘って掲載された。「中央公論」でも、推薦の言葉は前月に、川端等編集者の言葉は一月号に掲載された。「疲れさせるほど」とあつた編集会議は、「美しさと哀しみと」連載中の昭和三八年に数回行われており(「高見順日記」によれば、五月二九日に依頼を受け、六月四日、七月二・一七・三〇日、八月一七日に会合)、前述の伊吹の回想には、収録作品についての川端の厳しい発言や配本順の決定経緯等に関しても言及されている。



「美しさと哀しみと」は三八年暮れから翌年初めにかけて最終部分が加筆されて校了となり、川端集は谷崎集（二月五日）に次いで第二回に配本（三月一六日）され、同巻を責任編集した三島との対談「川端文学の周辺」（一月一四日）も付録として纏められた。当日の朝刊各紙では、「最新長編『美しさと哀しみと』400枚一挙収載」として林房雄の評（「朝日新聞」昭三八・九・二八）も引用し、「三島由紀夫氏の斬新な編集とユニークな解説とによって、いよいよ光彩を放つ川端文学の画期的集大成」と広告され、この時点で「既に28万部を突破」とあるように全集物では空前の売れ行きとなった。この後川端は、責任編集した巻の付録で、徳田一穂（「徳田秋聲の人と作品」昭四二・七・一三）、宇野千代・丸谷才一（「宇野千代をかこんで」昭四四・二・二）との対談もしている。

「美しさと哀しみと」連載中には、「女流文学賞」の選考委員にも加わっている。この賞は三枝時代に創設されたもので、三六年一月号<sup>(56)</sup>「コージー・コーナー」に、来年度からは女流新人賞に加えて「女流文壇の最高権威ともいふべき女流文学賞を設け、本誌の女流文壇への一層の意欲を表したい」と予告されていた。川端が正宗白鳥（昭三七・一〇・二八没）の後任になったと報じられたのは「第二回「女流文学賞」選考迫る」とある三八年三月号で、「年間を通じて女流作家の作品（小説・戯曲・評論）のなかから文学関係者による推薦カードを中心に」候補作を選び、選考委員会の審査によって決定するとある。三七巻本全集で三八年一〇月号掲載とある第二回の選評は五月号の誤りで、次の第三回選評は全集未収録である。

#### 全集未収録文⑫ 「みごとな「秀吉と利休」」（昭三九・五）

眼が疲れるので、いくつかの文学賞の委員のつとめを果たせなくなった。文学賞の委員は限られた時日に、何編もの小説、あるいは詩歌、評論、随筆その他を、無理にも読ませられたり、比較評価の困難なものから無理にも選ばせられたりする。苦痛の時もある。しかし、候補は大方その年間の傑出、主要の作品であるから、読んでよろこびがあり、励ま

しや教えを受ける。その上選考会では、委員諸氏の真剣な、周到な、時には激烈な、また意表な作品論、文学論が聞ける。「人に逢はば多く道を問ふ」である。私たちの年では、日常こういう機会が少ないので、委員をやめるのは自分のために惜しい気もするが、しかたがないことである。八十歳ほどで、「秀吉と利休」のような長編小説を書かれた、野上弥生子氏に思いくらべて、ふがいないことである。

今年の女流文学賞では、熟読できなかった候補作もあるので（略読はしたが）、私は発言をひかえて、ただ委員諸氏の意見を聞いていた。まず全委員が「秀吉と利休」を推したのは、順当の帰結であろうと私にも考えられた。「秀吉と利休」は近年のすぐれた収穫の一つ、得難い本格風小説の一つである。利休という、美の創造者、茶道の教祖の史実の扱い、ことにまた野上氏が加えたフィクションはみごとで、沈着、周密な作品の構え、作品の流れである。私は後日ゆっくり再読、三読したい。委員会の席上、野上氏の自作についての話にも、私は心を打たれた。

力のこもった大きい長編と比較された場合、小さい短編一つでは不利であるが、中里、城、竹西の諸氏の短編も、これらの作家のいいものであった。

受賞の言葉、選評（川端に続いて井上「秀吉と利休」を推す、平野「捨てがたい「遠い虹」、野上「五篇を読んで」、受賞の順で掲載。選評にも「委員をやめるのは」とあるようにこの回で川端は選考委員を降り、翌年三月号「第四回女流文学賞」選考迫る」では、今回から川端に代って丹羽文雄を選考委員に迎えたと言及された。

「美しさと哀しみと」は連載終了後も、三九年八月号に澤野久雄「美しさと哀しみと」の坂見けい子」が掲載され、巖谷大四「婦人公論」連載小説名作選」（一月号）の中でも「その10」として取り上げられた。特に、四〇年二月の単行本刊行と映画（松竹、篠田正浩監督）封切に際しては、「読む者をして思わず声をあげさせる」（澤野久雄氏）「絶対的魅力をた

たえた不倫の聖書」(小松伸六氏)など、諸家絶賛の最新長篇を、よそおい新たに贈る」(三月号)、「挿画入愛蔵版大增刷出来」、「殉愛の思い出に生きる女流画家と、魔性の愛に身をゆだねる女弟子との恋の姿を描いて、映画封切同時に俄然話題沸騰」(五月号)といった広告が掲載されたのみならず、四月号にはグラビア「「美しさと哀しみと」の傍で 音子(八千草)・けい子(加賀)を訪ねた原作者川端康成氏」が生まれ、「ぶらりと松竹大船撮影所のセットを訪れた」ある日の様子が三頁に亘って紹介された。川端は「加賀まりこ」<sup>(58)</sup>(昭四〇・六)では、「美しさと哀しみと」の「けい子といふエキセントリックな、やや妖精じみた娘」と、「雪国」の「雪中のふしぎな妖花の印象を生かした」葉子とを演じた加賀を見て、彼女の為に「美しい夢と現、天界と魔界とに生きる、幻の妖精を書いてみたい欲望にとらへられてゐる」と書いているが、伊吹の回想にも川端は往々「雪国」と対比して「美しさと哀しみと」を語っていたとあり、両作品を考える上で興味深い視点を提示している。

一方「中央公論」では、「日も月も」<sup>(59)</sup>の連載終了直前に「無言」を発表しているが、これは「言葉をあえて封じた小説家」を描いて「鬼気のただよう短編」と評されるような作品だった。二八年七月夏期臨時増刊号には、吉川英治との対談「或る日の対話」があり、目次には「東洋の古玩、人物、文学を語って涼風逸気除るに溢れ来る二時間の清談」と記されている。この時に吉川の別荘へ川端と同行したのが松下で、当日の様子は『去年の人』(前述、注(23))にも書かれている。「中央公論」七〇周年記念の昭和三〇年新年号は、前月の「編集後記」で「既に定まっている主な内容」として川端作品が予告されたが果たされず、翌三一年正月号に「夕焼け」が発表された。「古い日記」(前述、注(42))によれば、その続稿は紛失したとのことで、一月一七日には「中央公論」記者が「原稿のこと」で来たが、「今月も「中央公論」は間に合はぬか」(二九日)と思っていたところ、「中央公論社から電話、三日まで待つと」言われて「あわてる」(三〇日)とある。軽井沢を舞台とした同作の続きはこの後も発表されず、同誌へは七五周年記念の昭和三五年一月号の「匂ふ娘」まで小説の掲載はない。「匂ふ娘」は睡眠薬によって死んだ母とその母の匂いを受け継いだ娘を描いて、戦前の「母の初恋」や、「新潮」での連

載が中断されていた「眠れる美女」にも繋がる作である。その前年の「遠く仰いで来た大詩人」（後に「永井荷風の死」と改題）は荷風の追悼特集に寄せたものだが、三九年の特別付録「風報」に載せられた「人間随筆」もやはり追悼文で、その目次には、「風報」は「一昨年百号をもって終わった」が、「これは故尾崎士郎氏を追悼する別巻第一百号」だと記されている。「尾崎士郎弔辞」<sup>(61)</sup>（二月二一日附）も書いた川端は、「風景」で連載中の「落花流水」でも「一月あまり前、尾崎君がなくなつて、私は尾崎君の湯ヶ島と馬込とを背景とした幾つかの小説や「人間随筆」を読んだばかり」と触れ、尾崎の『小説四十六年』（講談社、昭三九・五）への「献詞」（四月二四日附）も書いている。

また「中央公論」四二年五月号には、石川淳・三島由紀夫・安部公房との座談会「われわれはなぜ声明を出したか―芸術は政治の道具か？」が載せられている。目次に「文化大革命と日本知識人の態度をめぐる賛否両論の渦を起した声明の真意」と書かれているように、二月二八日に出された共同声明には大きな反響があった。川端は、「四人という顔ぶれは、私としてはおもしろい」、「この声明にどういう異論、反論が出ても、別に何とも思わない」、自分は「ペンクラブに關係」があり、「ハンガリー問題、パステルナーク、ソ連文学者の投獄裁判についての国際ペン、日本ペンの声明に賛成した」、「こんどのアピールも中国だけに向けたものでないと解釈されていい」といった発言をしている。

## 八 ノーベル文学賞受賞以降

翌四三年一〇月七日に川端のノーベル文学賞受賞が決定、これを受けて「婦人公論」一二月号では、井上靖「川端康成氏の人と文学」・円地文子「川端さんのこと」を掲載した他、四頁に亘るグラビア「ノーベル文学賞の顔」を組み、「婦人公論」誌上の連載小説「日も月も」や「美しさと哀しみと」でなじみ深い氏は、また長い間「文章」の選者でもあった。ことに長期連載をした「美しさと哀しみと」は連載中から評判を呼び、ラジオ、テレビ<sup>(62)</sup>、映画化され、さまざまの美女によって物語

が再現されたのも記憶に新しいことと思う」と同誌との結び付きを振り返り、「美しさと哀しみと」冒頭の原稿の写真も載せ、「コージー・コーナー」でも言及した。一方、「中央公論」の同号では、サイデンステッカー「川端文学の美しき矛盾」とドナルド・キーン「川端先生と日本の伝統」を載せて特色を出した。

また記念出版として、『川端康成作品選』（昭四三・一一。『日本の文学』の川端集に、「十七日夜記」と文末にある三島「長寿の芸術の花を」と先の「中央公論」掲載の二文や口絵等を加えたもの）、『川端康成少女小説集』（同・一二。『級長の探偵』の収録作を一部差し替えたもの）、改版『日も月も』（昭四四・二。新たに加山又造が装丁）の三冊が上梓された。「婦人公論」四四年一月号には、「ノーベル賞受賞作家の会心作！」として、『美しさと哀しみと』の大増刷出来（この後、昭四五・八、四八・二にも改版刊行。いずれも加山装丁）、「決定的集大成」の『川端康成作品選』、「いとごたちへのクリスマスプレゼント」に『川端康成少女小説集』と広告があり、四月号には『日も月も』が、「愛人の許に走った母、孤独のうちに逝いた父、自ら命を断った恋人：古都の自然と伝統の美を背景に、愛に破れ背信に傷つきながらも真摯に生きる女心を描いて、文豪の美意識の結晶を示す長篇」と広告された。

授賞式に出発する少し前の頃、川端はかつて谷崎源氏に関わった伊吹に源氏訳を手伝ってほしいと話したとのことだが、これは遂に実現せず、三九年六月から「新潮」で断続的に連載されていた「たんぽぽ」も一〇月号の第二二回で中絶した。ノーベル賞受賞後の新たな作品発表は、「髪は長く」（「新潮」昭四五・四）、「竹の声桃の花」（「中央公論」同・一二）、「隅田川」（「新潮」昭四六・一一）の、いずれも一五枚程の短篇三作のみだった。「竹の声桃の花」が発表されたのは「中央公論」創刊千号記念号（一一月一〇日発売）で、その春に「中央公論」編集部に移った伊吹が八月下旬に執筆了承を得ていたが、校了体制に入った後の一〇月二六日によく題のみ決まり、二八日に最初の一枚が出来、二九日は担当者が印刷所と鎌倉を四度往復し、最後の一五枚目を受け取ったのは三〇日の夜という難航ぶりだったという。川端は、「千号の祝ひ原稿でやむ

なくホテルへこもりましたところ二日ほどで（胆石が<sup>64</sup>）痛みさう二なり逃げて帰りすこぶるはんばな文章でおつとめの次第となりました」と、石濱恒夫宛（十一月一日附。括弧内引用者）に書いているが、「たんぼぼ」でも引用した道元の言葉を典拠とするこの作品は、「清冽な葉擦れにも似た文豪の珠玉短篇」と目次に記されている。

昭和四七年四月一六日、川端は自殺を遂げた。「婦人公論」六月号は瀬戸内晴美（翌年得度して寂聴、後述第四章二三、第五章三三）「川端康成先生を悼む」を、「中央公論」は六月号に舟橋聖一「死と川端康成」（翌月の「筆者と編集部への手紙」欄にこれに関する投書「作家の死」も掲載）、サイデンステッカー「川端康成と共に一つの時代は去った」を、七月号に栗原雅直「新しい鳶―川端康成の終焉」を載せた。「中央公論」巻末「ですくさいど」の六月号に、「白布の端からあのなつかしい白髪がこぼれていました。白布の下に信じられないほど穏やかなお顔がありました。川端先生、長いこと有難うございました。どうぞ、天上からお導き下さいますように」と記した伊吹は、七月号では次のように結んでいる。「川端先生の御本葬の日、青山斎場の隅で、残飯を貰っている野良猫を見ました。鎌倉のお宅の、先生の座布団でいつものどを鳴らしていた黒いペルシャ猫は、あの夜以来何を考えて過ごしているでしょうか。」

七回忌にあたる昭和五三年五月号では、呉直彦の回想文「川端康成 “美しき死” の謎」を掲載、「編集後記」にも「川端先生逝つて六年。あらためて歳月の足どりの速さに驚きます。もう桜の季節です」と記された。尚、川端没後に中公文庫として『美しさと哀しみと』（昭四八・八）、『ある人の生の中に』（昭五五・一〇）、『伊豆の旅』（昭五六・四）、『浅草紅団』（昭五六・一二）、『高原』（昭五七・八）の五冊が刊行されている。

## 注

(1) 『新日本文学全集・川端康成集』あとがき（改造社、昭一五・九）。

- (2) 木村徳三「哀悼の底で」(「新潮」昭四七・六臨時増刊)。木村は「改造」編集者として昭和一四年から一九年五月まで川端を担当し、戦後は川端に請われて川端らの鎌倉文庫「人間」編集長となった。詳しくは拙稿「川端訳」童話について―そのリストと実際 (二)― (前述、第I部第一章注(32))を参照されたい。
- (3) 粕谷一希「回想の中央公論社」(「季刊アステイオン」一九九七・秋号〜一九九八・秋号。後、第二部等を加筆して『中央公論社と私』(文藝春秋、一九九九・一一) )。粕谷は昭和三〇年三月入社、「中央公論」編集長を四二年五月号から四五年四月号まで務めた(『中央公論の八十年史』(中央公論社、昭四〇・一〇)の年表参照。以下、同社の編集者の着任年月等は主にこの年表の記述による)。

(4) 藤田『「古都」の家』(「川端文学研究」昭五六・一一)。

(5) 拙稿『「古都」(天神さん)に託されたもの』(前述、第I部第二章注(7))を参照されたい。

(6) 晩成書房、昭五三・九。

(7) 川端文学研究会編『川端文学への視界1〜3』教育出版センター、昭六〇・一、昭六一・三、昭六二・一二。

(8) 後述、第III部第二章一 **070 藤田圭雄**宛年不明三月六日書簡にも、見舞いの礼が書かれている。

(9) これらや「恋を失ふ」等、湯ヶ島時代については前述、第I部第二章四及び五。拙稿「独影自命」(『伊豆と川端文学事典』勉誠出版、一九九九・六)や「少年」論(前述、第I部第一章注(37))も参照されたい。

(10) 『編集長の回想』(東京書房、昭三三・一一)。

(11) 龍胆寺雄「M・子への遺書」(『文藝』昭九・六)は、菊池と川端の代作を攻撃し、「空の片仮名」は内田憲太郎の作だと述べた。

(12) (1)に同じ。

- (13) 岩波文庫版『抒情歌・禽獣』あとがき、昭二七・六。
- (14) 『心の雅歌』（細川書店、昭二三・七）の一月附「あとがき」。
- (15) 新潮文庫版『伊豆の踊子』解説、昭二五・八。
- (16) 「文學界」との関わりについては、拙稿「新資料・『文學界賞』関係全集未収録文四篇」（川端文学研究会編『川端文学への視界14』教育出版センター、一九九九・六）を参照されたい。
- (17) 昭和八年一月から「文藝」編集主任後、創作に専念する為に九年四月退社。川端を追悼した「上野桜木町」（昭四七・四）や「川端康成氏の人と芸について」（昭一四・五）等の川端論を書いている。
- (18) 「禽獣」以降川端を担当、『改造社の時代 戦前編』（図書出版社、昭五一・五）では、「雪国」の原稿を得た経緯等を回想している。
- (19) 「自著広告」（「文學界」昭一一・五）。尚、「虹」の二回目は「文藝」（昭九・四）、三回目は「文藝春秋」（同・六）に発表、五回目の「モダン日本」（昭一一・四）で完結。『花のワルツ』（改造社、同・一二）に収録。
- (20) （1）に同じ。
- (21) 羽鳥「戦争時代の川端康成」、「解釈と鑑賞」昭五六・四。後『作家川端の展開』（前述、前章）所収。
- (22) （14）に同じ。
- (23) 佐藤『文壇えんま帳』（学風書店、昭二七・一〇）・『編集長の回想』（前述、注（10））、及び松下『去年の人―回想の作家たち』（中央公論社、昭五二・八）には、当時のことも回想されている。佐藤の名は川端宛かの子書簡（昭一〇・四・一六、昭一一・一・九、同・二・二五、同・三・二八、同・一一・一二）にも見え、松下宛かの子書簡にも川端の名が頻出している。かの子については後述、第四章二3及び第九章二1。



- (24) 三月一〇日の書簡で北条に依頼の件を連絡、七月三十一日に北条から「危機」が送られ、川端が改題。九月三日の書簡で採用決定を伝えている。北条については後述、第六章一2、第七章二3。
- (25) 九月三〇日に戸隠からの絵葉書を秀子に出している。軽井沢の別荘を発ったのは一月二六日。
- (26) 三月の末は雪解時でバスが途中までしか通っていなかった為に果たせなかったと書いている。戸隠宛の四月三〇日附秀子書簡には、今朝藤田から電話があったとある。
- (27) 「熱海にて」とある。熱海からの一四年一二月七日附秀子宛書簡に、「牧歌切抜、一三年六月号分と同七月号分、至急送つて下さい」とある。
- (28) 「生花」(羽鳥・原編『川端康成全作品研究事典』勉誠出版、一九九八・六)。
- (29) 藤田「級長の探偵」(『日本児童文学名著事典』ほるぷ出版、昭五八・一一)。後述、第三章。
- (30) 後述、第Ⅲ部第二章一 **030 新声閣大悟法利雄宛参照**。
- (31) 『愛する人達』は、昭和二〇年一〇月一五日に第六刷改装版が、二一年一二月一〇月に第七刷改装版が刊行された。高見は、「牧歌」連載中の「婦人公論」一三年六月号にも、「魅力の探求」というテーマの下で「川端康成氏の魅力」を書いており、『高見順日記』にも川端の名が頻出する。日本近代文学館創設にあたって高見が死力を尽くしたことは、拙稿「日本近代文学館草創期と川端康成―『川端康成詳細年譜』を辿って」(『日本近代文学館年誌 資料探索』二〇一八・三)や第Ⅲ部第二章一 **042 高見順宛・071 小田切進宛書簡も参照されたい**。
- (32) 田中千代・マヤ片岡・丹羽文雄一家の記事も載せられている。また、愛犬を素材とした小説等については拙稿「『文壇小景』に見る川端康成―「黒牡丹」から「禽獣」「ルイ」へ―」(『群系』会報、二〇一八・六)で、前述の「ルイ」も含めて考察した。

- (33) 河出新書版は三〇年一月刊。
- (34) 『千羽鶴』(筑摩書房、昭二七・二。「山の音」既発表分も収録) 刊行により、二六年度芸術院賞受賞。七月号「新刊図書室 ミスの本棚」では、串田孫一が同書を取り上げている。
- (35) 五月号では、中里恒子が川端の戦後初の短編集『再婚者』(三笠書房、昭二八・二)について書いている。
- (36) SUN・E「週刊図書館」(六月二八日)。但し、引用箇所の後には、複雑な人間関係の上に構成されながら、各人物が当面している現代の苦悶に触れることが少ないのは物足りないとしている。
- (37) 二四年一月一九日の社長就任後、出版部長、「中央公論」編集部長、「婦人公論」編集部長(昭和三二年九月号から)等兼務、一九九七年三月死去、「中央公論」六月号は追悼特集を組んだ。第Ⅲ部第二章一 **069 中央公論嶋中鵬二**宛書簡も参照されたい。
- (38) 松田ふみ子『婦人公論の五十年』(中央公論社、昭四〇・一〇)。塩澤実信『雑誌をつくった編集者たち』(広松書店、昭五七・九)・『名編集者の足跡』(グリーンアロー出版社、一九九四・七)。
- (39) 今井正・豊田四郎・岸田国土・津村秀夫・水木洋子が参加。
- (40) 本文で言及した他に、二九年「母の初恋」(岸主演)、三〇年「川のある下町の話」(有馬主演)等。志村三代子「川端康成原作映画事典」(『川端康成スタディーズ 21世紀に読み継ぐために』笠間書院、二〇一六・一二)には四二作が取り上げられているが、固有名詞の誤り等ある。第Ⅲ部第二章一 **063 東宝制作本部文芸部**宛書簡も参照されたい。
- (41) 大映、吉村公三郎監督、新藤兼人脚本。詳しくは、拙稿「千羽鶴」の劇化・映画化をめぐる(前記、第Ⅰ部第一章注(6))。
- (42) 「古い日記」(昭三四・一二)として公表された昭和三一年一月二三日の日記に、「婦人公論」に選んだ文章と「選

の言葉」を取りにきた笹原金次郎が、「伊豆の踊子」をグラビヤにしたいと言い、承知したとある。

(43) 野村芳太郎監督、伏見晃脚色、美空ひばり主演、松竹。

(44) 伊豆物一篇を収録。「中央公論」・「婦人公論」各一月号に新刊広告、翌月の「中央公論」広告には三版とある。

(45) 「女優さんと私」第五回。当時の「婦人公論」は前月七日発売なので、前述の座談会掲載の直前である。

(46) 三枝『女性編集者』（筑摩書房、昭四二・四）に、「昨年秋、帝劇開場を機に東宝がつくった女優の写真集」に、川端の文章を発見して目を見はったとして引用されている文は全集未収録。三枝に問い合わせたところ詳細不明とのことだったが、書名や省略されていた後半部も確認できたので、引用の不正確だった箇所も正して以下に紹介する。

#### 全集未収録文⑦「有馬稲子」(『花咲く扉 東宝株式会社演劇部女優アルバム』昭四一・九)

有馬稲子の自伝(「婦人公論」掲載)、特にその幼少年期の部分は、実にすぐれた文章で、驚いたのは私一人ではなかった。彼女の文学好みは、むしろ、からかひの的にされがちのやうだが、「自伝」は文学好みなどでは及びもつかぬ、質のいい文才で張りつめてゐた。したがって、有馬の人を知るには、あるひは見直すには、「自伝」を読むにしくはない。／文章の方が私には分りいいで、先づそれを言ったが、本業の女優としての有馬稲子にも、この文章と素質は備はつてゐるのだからと思ふ。彼女は近年、舞台の出演が多く、それらを大体成功させてゐる。意望と熱意の演技は、彼女の存在を強めてゐる。しかし、器用や自在でないのはいいとしても、彼女の努力の現れは、一つの芝居のあひだにも、上下や断続や進退があつて、その質と技が流れるやうに高まってゆきかねる時がある。またしかし、それが驚くべき境地に、いつ突き抜けるかといふ力を感じさせている。「風と共に去りぬ」のスカレット・オハラでは、生まれながらの美しい名女優が光り出るかもしれない。

- 有馬は「松竹大船撮影所と川端康成」（大槻茂『鎌倉・都市再考』現代企画室、昭五七・九）の他、『バラと痛恨の日々 有馬稲子自伝』（中央公論社、一九九五・一一）、『のど元過ぎれば 有馬稲子』（日本経済新聞出版社、二〇一二・一一）でも、川端との交流を回顧している。拙稿「川端康成と有馬稲子―新資料「有馬稲子さん」に触れて―」（和洋九段女子中学校・高等学校「紀要」二〇〇〇・四）では、これとは別の全集未収録文等も紹介した。参照されたい。
- (47) シリーズ第一回は三島と水谷八重子、続いて源氏鶏太と司葉子、松本清張と新珠三千代、舟橋聖一と有馬稲子、井上靖と山本富士子。
- (48) 川頭義郎監督、田中澄江脚色、松竹。
- (49) 一栄は六月五日付書簡で、興行成績が大変よかったと松竹も喜んでいたと伝えている。
- (50) 鈴木晴夫が『『美しさと哀しみと』考』（『川端康成 現代の美意識』明治書院、昭五三・五）で紹介。全集未収録。
- (51) 三枝はヨーロッパを回り、七月二四日に帰国した。
- (52) 三七年四月号のみ休載。コーナーには「急病のため」とある。「古都」の連載終了後の二月八日に睡眠薬の禁断症状を起して入院、一〇日ほど意識不明で肺炎、腎盂炎も併発したが、三月八日に退院した。
- (53) 北条誠脚色、司葉子主演。文化放送・大阪放送・東海ラジオ・九州朝日放送。放送開始が最も早い文化放送は一〇月二日、翌年六月三〇日。毎週月、土曜日、各一五分間。三七年一月号でも、放送劇として放送中と触れられている。
- (54) 人形師井尻茂子を訪ねた写真等も掲載（川端には推薦文「井尻茂子『京ほり人形第八回作品展覧会』」（昭三五・一一）もある）。また、四一年五月号の巖谷大四「名作に描かれた古都」では、川端の「古都」への言及がある。
- (55) 『川端康成 瞳の伝説』（PHP研究所、一九九七・四）。伊吹は三六年晩秋頃から出版部で川端を担当、後「中央

公論」へ。『日本の文学』に関しては、『われよりほかに 谷崎潤一郎 最後の十二年』（講談社、一九九四・二）も参考になる。以降の伊吹の証言は、以上の二著による。

(56) 同号では第四回女流新人賞受賞作の発表があった。

(57) 中里恒子「遠い虹」・城夏子「孤独」・竹西寛子「儀式」。候補作は、他に由起しげ子「やさしい良人」・有吉佐和子「助左衛門四代記」の全六作。前年候補作は全九作。

(58) 劇団四季の「オンデイヌ」公演パンフレットに寄せたもの。加賀は「女性自身」（昭六〇・五・七、一四日合併号）で、川端との朝のデート等を語っている。

(59) 三好行雄「解説」（旺文社文庫『抒情歌・たまゆら』昭四九・六）。これを原作としてアレクサンドル・デスプラが書き下ろしたオペラが、二〇一九年二月ルクセンブルク、三月パリに続き、翌年一月二五日に日本でも上演された。

(60) 川端は吉川没（昭三七・九・七）後に、「吉川英治全集に寄せて」（講談社、昭四一・八）、「吉川英治展に寄せて」（『吉川英治展図録』昭四二・八）といった推薦文も書いている。

(61) 「サンデー毎日」（昭三九・三・八）に掲載。尚、川端の「尾崎士郎氏の「人生劇場」（『読売新聞』昭一〇・四・一六）は、この作品の再評価を促し、一二年七月、「人生劇場」は「雪国」と共に第三回文藝懇和会賞を受けた。

(62) NETテレビ初の昼の帯ドラマとして放映。「山の音」と合わせ、北条誠が脚色。淡島千景（音子）等が出演。川端没後程なく、関西テレビも、「雪国」「伊豆の踊子」に続く文芸企画として、「美しさと哀しみと」（昭四八・二・一八より）、「母の初恋」（同・四・一より）を放映。「週刊小説」二月一六日号、四月六日号ではグラビヤを組んでいる。

(63) 谷崎源氏も含めて谷崎との関係は、第Ⅲ部第一章32の推薦文も参照されたい。

(64) 胆石や死の前後に関しては後述、第九章二を参照されたい。

### 第三章 戦前・戦中の少女小説―「少女俱樂部」から「少女の友」へ―

川端の少女小説は、三つの時期に大別して考えることが出来る。早くは大橋清秀「川端康成と少女小説」(『論究日本文学』昭三〇・一一)が、①試作期、②川端自ら「少女のための小説を書くようになった第一歩の作品」<sup>1)</sup>と位置づけた「乙女の港」(昭一二・六―一三・三)以後、主として「少女の友」に発表した敗戦前、③主として「ひまわり」に発表した戦後、と区別した。これに対し後年の羽鳥徹哉「川端康成解説」(『日本児童文学体系23』ほるぷ出版、昭五二・一一)は、「薔薇の幽霊」(「少女世界」昭二・三)や川端唯一の少年小説「級長の探偵」(「少年俱樂部」昭四・三)を試作として除き、

#### ①昭和七年から一一年に至る「少女俱樂部」時代

小学校高学年から女学校低学年を読者対象とし、ほとんどが読切の短篇で動物を媒介にしたもの。

#### ②昭和一二年から一七年に至る「少女の友」時代

旧制女学校の女学生あたりを対象とし、女学生同士の愛情関係を素材とした長篇を主とするもの。

#### ③昭和二四年から三〇年に至る「ひまわり」時代

更に読者対象を引上げ、生い立ちや宿命にからまる屈折した心理や苦悩が書かれたもの。

と、発表誌によって三期に分けて分析した。どの辺りまでを試作と見るかで大橋とは異なっているが、大橋は「乙女の港」の先行作として「薔薇の幽霊」と「弟の愛犬」(「少女俱樂部」昭一〇・一二)を挙げ得たのみであるから、羽鳥の整理と分析は妥当であろう。

この後に刊行された三七巻本全集では、戦前の少年少女小説は第一九巻及び第二〇巻(昭五六・一一、一二)に纏められた一方で、戦後の少年少女小説は「別にそれぞれ協力者があつて」「今日に至っては、如何とも判断しがたい点が多く含まれ

てゐる」(「第三五巻 解題」昭五八・二)として割愛された。この第一九巻、第二〇巻刊行直前(昭五六・三)に少女小説の特集を組んだ「日本児童文学」が、「少女小説」は、研究対象として極めて興味深く、また重要なものだと思うが「ほとんど未開拓なのが気にかかる」(長谷川潮「編集委員のページ」)と触れているが、そのような少女小説研究全般の遅れがあるのに加えて、川端の場合には代筆問題もある。<sup>②</sup>後述するように中里は「乙女の港」「花日記」に深く関与しており、佐藤碧子にも戦後の「万葉姉妹」を手伝ったという証言がある<sup>③</sup>ことから、他の作にも協力者がいた可能性は考えられ、研究者に二の足を踏ませている。

だが、「大人向けの作品ではかえって書きにくかった」(羽鳥「解説」)川端文学固有のテーマも透かし見られる少女小説には、「川端文学開扉の(もう一つの鍵)」(馬場重行「川端康成の少女小説―「乙女の港」をめぐる―」「川端文学研究」昭五六・一)といった側面も確かに認められ、大森郁之助『「乙女の港」・その地位の検証』(『考証 少女伝説』有朋堂、一九九四・六)のように、「下請け」の事実にも左右されない形での論考も出されつつある。川端の少女小説も、やはり「研究対象として極めて興味深く」「重要なもの」であり、様々なアプローチの仕方が考えられる。まず本章では戦前・戦中の「少女倶楽部」「少女の友」二誌の調査で発掘した川端全集未収録文 a、f 等の資料も紹介しつつ、読者による受容のされ方も含めて、両誌における川端の在り様を探りたい。

### 一 「少女倶楽部」時代(昭和七年〜十一年)―「大人のための文学なんか、書くもいやらしい」―

川端は「少女倶楽部」に、次のような小説①〜⑨、及び全集未収録文 a、b を発表している。

① 七年一二月 短篇「愛犬エリ」(加藤まささを画)<sup>④</sup>

② 八年二月 短篇「開校記念日」(須藤重画)

- ③ 同年七月 短篇「夏の宿題」(加藤画)
- ④ 同年九〜一二月 連載「学校の花」(落谷虹児画)
  - \*全集未収録文 a 「作者の言葉」(昭八・八)
- ⑤ 九年二月 短篇「薔薇の家」(「薔薇の幽霊」の改作、加藤画) \*全集未収録文 b 「可愛い小鳥たち」(同)
- ⑥ 一〇年二月 短篇「駒鳥温泉」(加藤画)
- ⑦ 同年一二月 短篇「弟の愛犬」(後に「弟の秘密」と改題、加藤画)
- ⑧ 一一年六月 短篇「翼にのせて」(加藤画)
- ⑨ 同年一〇月 短篇「コスモスの友」(加藤画)

①③の予告はないが、「この期の最高傑作」(羽島「解説」)とされる②の「開校記念日」(前述、前章)は、「読切でのせたいと思ふ一粒えりの小説」の一篇として前号でタイトルが予告されている。川端の同誌初の連載小説④「学校の花」は、その前号で、「皆さまが大好きのおづきもの／少女小説「学校の花」が九月号からはじまります。／七月号に「夏の宿題」を書いて大評判になった川端康成先生が、九月号からおづきものを書いて下さいます。非常に面白い、優しい物語ですから、キツト皆さまが好きで／たまたまなくなります。挿絵は、この小説にピッタリと合ふ落谷虹児先生に描いて頂きますから、これもキツト皆さまが好きで／たまたまならないものです。あゝ早く九月号が読みたくてたまたまなくなりました。／どんなに面白い、美しい、優しい物語であるか、作者の言葉を御らん下さい」という宣伝文に続いて、以下の川端の言葉が載せられている。

**全集未収録文 a 「学校の花」作者の言葉** (昭八・八)

皆さんの学校にはどんな花が咲いてゐますか。／皆さんはみんな学校の生きた花です。／私のこの物語も、皆さんの学校の花となつてくれたら、どんなにうれしいでせう。／それで、「学校の花」といふ題をつけました。／「学校の花」と



いふ言葉は平凡ですけれども、考へてごらんさい、ずいぶんいろんな意味が含まれてゐます。／＼この物語のなかの少女達も、花のやうに愛らしく美しいでせう。花のやうに明るい喜びを持つてゐるでせう。花のやうに寂しい悲しみに生きてゐるでせう。姿ばかりが花のやうでも、心も花のやうでなければ、学校の花とはいへません。／＼やはりこの物語も、教室で皆さんと共に学び、校庭で共に遊ぶ、皆さんのお友達のことを書きました。／＼こんな花は皆さんの学校にも、きつと咲いてゐると思ひます。決して夢のやうな花ではありません。／＼皆さんといつしよに生きてゐる花です。

見開きの予告には、川端が書齋で愛犬を抱いた写真も添えられており、他の付録等も簡単に紹介されているものの、川端の新連載が次号の目玉となっている。内容については、「花のやう」な少女達の「喜び」や「悲しみ」を描きたい願いはうかがえるものの、それは「皆さんはみんな学校の生きた花」といった視点に立ったもので、「皆さんのお友達のこと」を書くのであつて「夢のやうな花」ではないのだと、この時点では強調されている。

連載の開始した九月号では、「つゞき物は、そろひもそろつて面白くなりますが、中にも新しく始まつた」「学校の花」は、「ドコの学校でも噂の種になつてゐます」と宣伝された。読者の頁である「仲よしクラブ」にも、「夏の宿題」でとても好きになつた「川端先生の連載、しかも「挿絵は大好きな露谷先生、なんてうれしいのでせう」といった前作にも触れた投書が寄せられ、「川端先生も今度の「学校の花」には特別力を入れてをられますから来月はます／＼面白くなることとせう（赤城）」とコメントも付けられて新連載への期待が煽られた。連載中は、「妹も弟もやんやといつてよろこびます。」（十一月号）、「始まつた月から面白くて、何度読みかへしたか知れませんが。清水さんはなぜ悲しいのでせうか。早く知りたいと思ひます。露谷先生のさしゑも好きです。」（同）、「少女倶楽部が来るとすぐ「学校の花」を見ます。清水さんのことややさしい千花子さんのことが知りたくてたまらないのですもの。小夜子さんはどうしたのでせう。早く来月号が見たくてなりません。」（一

二月号)といった便りが紹介され、最終回の一二月号は「愛読者方の心ををどらせた「学校の花」もごらんのとほりにめでたいをはりをつけました(桐水)」と結ばれている。

続く⑤の「薔薇の家」が発表された九年二月号では、「少倶談話室」という見開きの頁に、村岡花子の文章や田河水泡の記事等と並んで、川端の顔写真を添えて次の文章が載せられており、同誌における川端の人気の定着が感じられる。

#### 全集未収録文b「可愛い小鳥たち」(昭九・二)

皆さんは山雀が芸をすることはよく知つてゐるでせう。ところが芸をするのは山雀ばかりでなくペリコといふ小鳥は、歌やダンスまで覚えます。たいていの馴れた小鳥は、主人の口笛や蓄音機を喜んで、いつしよに鳴き出します。呼ぶと飛んで来て、髪の毛をひつぱつたり、黒子を突ついたりします。雀でも目白でも、主人の後から森や町へ飛んで来て、またいつしよに帰るのもあります。食卓の上へ来て箸を転がしたり、本の上で遊んだりします。／＼日本種の小鳥は、籠で卵を産みませんが、巢立前の雛を連れて来て、親鳥の代りに差餌をして育てますと、人の顔さへ見れば、黄色い口をあいてピイピイ鳴き、可愛い羽ばたきをして餌を欲しがります。大きくなってもこれを忘れず、籠に手を近づけると、羽ばたきして轉る駒鳥を、手振駒と言ひます。あの猛鳥の百舌だつて、朝は人の顔を見て一生懸命に餌の催促をします。小鳥は雛のうちから可愛がれば、どんなにだつて馴れるものです。

当時の川端の少女小説では、先の②「開校記念日」の山雀に続き、⑥「駒鳥温泉」の駒鳥、⑧「翼にのせて」や「令女界」の連載「翼の抒情歌」(昭八・一〜六)の伝書鳩と、タイトルでも明示されているように小鳥がそれぞれ重要な役割を果たしている。「出来るだけ、いやらしいものを書いてやれと、いささか意地悪まぎれの作品」(「文学的自叙伝」昭九・五)と自解

する「禽獣」が発表されたのは③と同月で、「冷たく、いやらしくつとめたものの、その頃の私の犬や小鳥に対する愛情が邪魔をして、十分徹底することは出来なかつた」と後に明かしている。<sup>5)</sup>「よく少女倶楽部に書きます私は、大人の読む小説なんかより子供のためによりものを書きたくなります。阿呆のやうですけれど」とは、⑤発表後の林芙美子宛書簡(昭九・四・三〇附)の言葉だが、その書簡の前日に観たコドモ座の上演に関して書いたのが前章で言及した「コドモ座」(昭九・六)で、「少年小説でなにを推奨するか」と問われて自作の「級長の探偵」「開校記念日」その他と敢えて答えたと記して、「子供の日常の現実生活に触れた作品のないこと」を嘆き、「大人のための文学なんか、書くもいやらしいと思ふ時もあり」と、子供のための小説を書く使命感や喜びを述べている。その裏返しとして、「禽獣」のような「大人」の小説を書く「自己嫌悪のたまらない気持」(「作家に聞く」昭二八・三)も漏らされていたが、これについては第六章で改めて考察する。

⑥「駒鳥温泉」は、前号での予告に「二月号の傑作」として、「傷ついた駒鳥が谷川で水浴してゐるので不思議に思つて、下りて見たらそこに温泉が湧いてゐました。その温泉へ毎年来る東京の少女と、宿屋の少女の友情を記念するために名をつけたのが駒鳥温泉です」とあるが、これを含め⑤以下の短篇については、「仲よしクラブ」等での言及は見られない。

以上「少女倶楽部」では④の「学校の花」連載以外は年二回程度の単発的な短篇等の発表にとどまっていたが、④は「全く驚くばかり」の反響を以て迎えられたと誌面では伝えられており、先の「コドモ座」での自負にも繋がったと思われる。「学校の花」は改造社版川端選集の第五卷(昭一三・一〇、当時川端は後述するように、既に「少女の友」で「花日記」を連載中だった)にも収められ、その「あとがき」には「子供の読物としてはふさはしくないとところが少なくない」としながらも、「子供のものを幾つか書いた記念に、この一篇を入れてみたかつた」とあり、川端の同作への愛着がうかがえる。また、異なる環境で育った姉妹の邂逅という同作で描かれたテーマは、戦後の少女小説「万葉姉妹」を経て「古都」へと繋がって

いく点でも注目される（後述、第五章三三）。「恋愛感情とか宿命の力とかの要素」の萌芽も見られ、「長篇になりかかっている」（羽鳥「解説」）と評される④の連載のような方向へと、川端は新たな少女小説執筆意欲をかきたてられたのであろう。そうした自覚こそが、「少女の友」時代への移行を促したと考えられる。⑤発表前に川端は、「大人の読む文芸が少い」と言われるが「私としては、多情多感の青年子女に読まれるなら、それで本望」、「文芸が純に受け取られ、大きく働きかけるのは、若い人に読まれる以外にない。」、私に才能があれば「少年少女の読物も書きたい」、「もの読む子供の心は、作者にとつてまことに勿体ないほどの苗床」で、「よい文学を普め、文学を高めるには、子供の情操から培つてゆかねばならぬ。大人の読む文芸が少ないとすれば、子供の読む文芸は更に貧しい。」（「文芸行路」昭一一・八・一六）と訴えてもいたのである。

「少女倶楽部」への作品発表は⑨の一年一〇月を以て終わり、翌一二年六月の「乙女の港」連載前から「少女の友」時代が始まっている。筆者は七年以降の「少女の友」を調査したが、一二年五月の「乙女の港」連載予告以前は、川端文の掲載は勿論川端関連記事も見られなかった。なぜこのように発表舞台がはっきり変わったのか、羽島も含めこれまでの研究者は明言していないが、競合誌にはなるべく執筆しないという暗黙の了解や、「学校の花」の出来た頃、私の掛りの「少女倶楽部」記者藤本三三氏は出征中、藤本氏に次いで私掛りの斉藤喬孝氏は病没した」（前述、選集第五巻「あとがき」といった担当者の問題等もあつたらうが、最大の原因は両誌（両社）の性格の相違であろう。

「少女倶楽部」は、大日本雄弁会講談社から「少年倶楽部」の兄妹誌として大正一二年に創刊された。同誌の少女小説は、同社のスローガン「おもしろくてためになる」を受けて「娯楽的な興味性の内側に現実的な機能を内在させ」たが、「現在をいかに生きるかといううわべだけの生活性をかかえこんでいた」とも言われている。そうした同誌の大衆性や「小学五、六年を標準にした」<sup>⑦</sup>読者年齢が、川端が新たに目指そうとしていた少女小説には合わなくなっていたと考えられる。一方、「少女倶楽部」に先行して明治四一年に実業之日本社から創刊されていた「少女の友」は、発売部数では完全に追い上げられて

いたが、昭和六年に内山基が主筆就任後は「読者との交流を強めるとともに娯楽性を徐々に排し、抒情の中に知性を盛った誌風を作り」、大都市の女学生の強い支持を得て「少女倶楽部」と異なる読者層に地位を築いた」と評されている<sup>8)</sup>。

川端は実はこの時期に、「少女倶楽部」に限らず、講談社の雑誌から離れていつている。「少女倶楽部」以外の同社の雑誌への川端の創作執筆状況は、次の通りである。

- |         |          |          |        |                |
|---------|----------|----------|--------|----------------|
| 「キング」   | (大一五・四)  | 「村の選手」   | 〔昭三・三〕 | 「罪か罪か」の四作      |
| 「現代」    | (昭三・一〇)  | 「母の誕生」   | 〔一〇・一〕 | 「出世人形」の七作      |
| 「講談倶楽部」 | (昭四・一)   | 「孝行海を渡る」 | 〔七・六〕  | 「ガンベッタの恋物語」の八作 |
| 「少年倶楽部」 | (昭四・三)   | 「級長の探偵」  | 四・八    | 「親ごころ」         |
| 「婦人倶楽部」 | (昭六・一、二) | 「霧の造花」   | 同・六、七  | 「ロミオとジュリエット」   |
| 「雄弁」    | (昭六・一)   | 「二重の失恋」  | 一一・八   | 「むすめごころ」       |

「雪国」で文藝懇話会賞を受けたのは一二年七月だが、そうした作家としての地位の確立に伴って発表誌も絞りこまれたと言え、それは第I部第二章で見たように「都新聞」での発表期間が限定的であったのと同様であろう。こうした流れの中で「少女倶楽部」時代が終結し、「少女の友」時代へ移行したと見ることができ。

「少女の友」主筆の内山は、まだ無名だった中原淳一を起用して七年一〇月から初めて挿絵を描かせ、一〇年からは表紙の専属画家として、付録・グラビヤ頁の企画等にも加わらせた。中原は圧倒的人気を誇った当時を振り返って、「それまでは、少女ということばは、小学生を対象とした女の子のことらしかった」が、「私の考える少女」は、「女学生、今でいえば中学生から高校生の年ごろだった」ので、「少女の友」の読者層もだんだんそうなっていく」と述べているが、『中原淳一画集第一集』講談社、昭五〇・三)、川端が「少女の友」の執筆を始めたのもそのような頃であり、「乙女の港」連載開始時(昭

二・六）には、昭和九年から書き継いだ「雪国」が単行本となり、翌月には「報知新聞」連載の「女性開眼」（昭一一・二・一）も完結して、川端自身も一つの節目を迎えようとしていた。次項では、中原との関係も含め、「少女の友」時代の川端を見ていきたい。

## 二 「少女の友」時代（昭和一二年～一八年）——「軍部にきらわれて」——

### 1 創刊四五周年「記念のことば」——「みな戦争前のことである」——

次の文章は、創刊四五周年を迎えた「少女の友」昭和二七年四月号に「記念のことば」として、吉屋信子「長い生命」・大佛次郎「思い出」と共に寄せられた川端の文章である。

## 全集未収録文c「美しい旅」（昭二七・四）

「少女の友」には「乙女の港」、「花日記」、「美しい旅」などの長編小説を書かせてもらった。そのあいだに短篇もあった。作文の選をつづけたこともあった。みな戦争前のことである。／「乙女の港」は愛読された。その時の少女読者は、今はもう大人になっている。しかし、少女の日に読んだものは、大人になってからも、なつかしく思い出してもらえないので、作者はしあわせである。／「美しい旅」は、めくらで、つんぼで、おしの女の子を主人公にした、変った試作であった。その女の子が二十くらいになるまで、書きつづけるつもりであったが、幼いころで切れてしまった。少しなららして、センチメンタルである。しかし、聾啞学校なども見学して、その場面はよいと思う。その賢い女教師は実在の人で、今は放送局に働いている。／太平洋戦争の始まる年に、「美しい旅」の続きを少し連載した。満州が舞台になっている。満州でも、私は盲学校や聾啞学校を見学した。戦争がなければ、「美しい旅」の続きが書いていたかもしれない。／「乙女の

港」から「美しい旅」まで、挿絵は中原淳一さんであった。私の小説は挿絵に助けられた。中原さんの絵は「少女の友」で非常な人気であった。そのころの軍部にきらわれて、圧迫を受けた。私の作文の選び方も軍政にいらまれた。／編集長は内山基さんであった。内山さんは当時の少女の多くの読者に記憶されているだろう。私の係りは桑原君<sup>(9)</sup>だった。内山君とともに、ずいぶん私を大事にしてくれて、私は桑原君の結婚の仲人をした。桑原君は小説家を志していたが、若いうちに戦死をしてしまった。／愛読者会などにも、私は顔を出した。読者の少女と鎌倉の名所めぐりをさせられ、その写真が口絵になったこともあった。／私は少女の読者のありがたかったことを思い出し、少女たちの読みものごとを思い、「少女の友」の長い歴史がなお光り出ることを望んでいる。私自身は少女のために、すぐれた作品は書けなかった。

ここで語られているのは、「軍政」の圧迫が強まる以前の、「少女の友」全盛期といってよい一時代である。川端はこの時期、「少女の友」本誌及び臨時増刊号に次のような小説①～⑦、全集未収録文d～fを含む小文を発表した他、作文の選を行って選評（昭一六・一～一八・一一。後述）も書いた。

- ① 一二年六月～一三年三月 連載「乙女の港」（中原淳一画） \*全集未収録文d「作者の言葉」（昭二一・五）
- ② 同年八月（夏季臨時増刊） 短篇「夏の友情」（不破俊子画）
- ③ 一三年四月（春季臨時増刊） 短篇「英習字帖」（中原画）
- ④ 同年四月～昭和一四年三月 連載「花日記」（中原画）
- ⑤ 同年八月（夏季臨時増刊） 短篇「試験の時」（不破画）
- ⑥ 一四年四月 短篇「兄の遺曲」（初山滋画）

⑦ 同年七月～一六年四月、 同九月～一七年一〇月（途中休載あり）連載「美しい旅」（中原、後に初山、落谷画）

\*全集未収録文 e 「選者の横顔」（昭一六・四）、 f 「お断り」（同・五）、 「新京から北京へ」（同・八）

以下、先の「記念のことば」を念頭に置きつつ、連載作品を柱にして「少女の友」時代の川端を辿っていく。

2 連載小説「乙女の港」―少女幻想共同体ということ―

「少女の友」初登場となった①「乙女の港」は、前号の折り込みに「長篇小説予告 川端康成作・中原淳一画」として、中原のカット、愛犬と佇む川端の写真の他、「川端先生は少女の友には此度初めての方」だが「我が国文壇の最高峰」、「その香り高い芸術は特異の存在として世の尊敬を得てゐられる」、「題名はまだ定つてをりません」が「豊かな詩囊から溢れ出る次号よりの長篇小説こそその清純さに於てその面白さに於て」御好評を以て迎えられらると思ふといった文に続いて、談話かとも思われるが次のような枠囲みの「作者の言葉」が載せられている。

#### 全集未収録文 d 「作者の言葉」（昭二一・五）

少女の友と云へば僕にとつて少年の日の忘れ難い思ひ出の一つだ。その頃は岩下小葉氏が編輯してゐられたが、今の貴女方と同じやうに僕は発行の日を待ちかねて愛読したものだつた。あれから幾年、かうしてその雑誌に小説を書くやうになつてみると、何んとも云へないなつかしさを以てあの頃を思い出す。まだ題目はきめてゐないけれど僕が且つて愛読したと同じやうにみなさんにも喜んでもらへる様な作品をきつと書くつもりだ、どうぞ期待してほしい。

この当時同誌は、読者の便りを「友ちゃんクラブ」として四段組で三〇頁前後も割いて積極的に紹介していたが、その冒頭



に置かれた「クラブ室より」でも、「あの詩人川端先生のお筆」だから「少女の友にピッタリした美しいもの」だろう、画は中原先生で「川端先生も中原先生に是非描いて欲しいと云つてゐられ」た、「すばらしいコンビ」になるでしょうと、「少女倶楽部」等での少女小説家としての経験よりも、「詩人」川端の芸術性及び中原とのコンビに大きな期待を寄せて、川端の同誌への初連載は華々しくスタートした。

予告の段階では題も未定、内容も不明だった「乙女の港」だが、連載が始まるや絶大な人気を得ている。「友ちゃんクラブ」には、「私達女学生のほんとの事書いてあるのね」、「美しい夢の様な物語りですね。淳一先生の、きれいなお絵とよくマツチして、一番好き」（昭一二・九）、「とても素敵ですわ。三千子と洋子が何時までも仲よしである事を御祈り致します。私の様にならない様」、「私達とよく似てて、くすぐつたいやう」（同・一二）、「息つかないで読んぢやふの。三千子さんがいつまでも洋子お姉さまのものでありますやうに」、「乙女の港素敵！克子も本当は良いところあるんだけど」（昭一三・二）といった共感や憧れを綴ったファンレターが多数載せられている。連載終了後の一三年六月号には、中原指導により、読者三人が洋子・克子・三千子を「実演」し、牧場や高原でのロケも行ったグラビヤ「乙女の港」が、八頁に亘って組まれた。読者モデルによる初の試みは好評で、「何て素敵でせう。淳一先生の御絵とそつくり、本当にいゝ思付き 花日記も何時かどうぞね」（昭一三・八）といった投書が多数寄せられ、既に連載の始まっていた④「花日記」への期待も膨らんだようである。

中原「川端康成先生のこと」(『中原淳一画集 第二集』昭五二・一)にも、連載の「第一回ができたとき」、挿絵を誰に頼むか記者が尋ねたところ川端は中原を指名し、「あの青年は若いけれど、なかなかいい青年だね」と言ったそうだが、その時の「乙女の港」は「さすがに、大作家の作品らしく、少女の抒情の世界をあつかいながら、骨ぐみのしつかりとした作品だと、女人すじにも評判のようであったし、読者間人気は最高のうちに」終わつたと回顧され、日本美術学校の先輩・益田隆（カジノ・フォーリーから川端が昭和六年に引き抜いた梅園龍子らと、七年五月に「益田トリオ」を結成）の楽屋でよく顔をみ

かけたのが川端だと聞いたこと、「当時できたばかりの銀座に近い有楽座」で川端から声をかけられて一緒に映画を見たことも記されている。まだ長篇の挿絵の経験はなかった中原だが、殊に「少女の友」時代の絵は「少女幻想共同体の象徴として、その典型的な映像を、妥協することなく、頑くなまでの潔癖さで、表現している」と評されるに至るその絵の資質をいち早く見抜き、自作にふさわしいものとして川端が選び取った点に注意したい（少女雑誌における絵の重要性を実感していたであろう川端が、戦後に中原の創刊した雑誌「ひまわり」等にも数多くの作品を発表したことは後述、第五章）。中原は全く困ってしまったこととして、「第一回目の原稿」はちゃんと貰ったが、「以後、三年近くの間」は少女雑誌の発売日は「毎月十日」なのに原稿ができあがるのは「その月の三日くらい」で、「一週間くらい前から」記者がついているがなかなかできず、「あらましのしかも、先生が、絵になりそうだと思っただけ」が中原に伝えられ、着物か洋服かもわからず「洋服らしいと心にきめて」「一睡もせず、何枚かの絵をかいて」みると、「本文では和服で、着物の柄までかいてある」、「そんなことばかりあると、もうなにをかいていいか、こわくなり、顔だけ大きくかいて、着物もバックもない絵にしてしまったこと」もあったと、川端の「異常なまでの遅筆」ぶりも語っている。

連載当時、中里への九月一四日附書簡で川端は、「だんだん文章が粗くなり、書き直すのがむつかしく」、なるべく初めの調子でやっていただくと助かる、「興が薄れてゆくやう」だったら「早く切り上げ、別のものをまた連載」しても結構だが、「受けてゐる様子ゆるゑ」なるべく続けてほしい、「三角関係少しモメタ方が、つなぎやすい」と伝えている。一方、中里からは、お言葉通り注意する、「どんな風に書いても、うまくなほして下さる」、こんなわがままな考え方が私にあると返信があった。また一〇月一六日附川端書簡には、「軽井沢が二度続き、話の進みもヤマも前と余り変わ」らないので大分書き変えた、「三月までとすれば、アト四回」だが「なるべく十一月中に全部お書き下さい」、本になれば売れるかと思うので「それもお楽しみとして」、同三二日附書簡には「昨夜からやつと少女の友執筆中、いそがしい」と記されており、細かな指示と添削の

あった状況や反響がうかがえる。(中里については第Ⅲ部第二章一 021、092、095、096の書簡も参照されたい。)

連載を始めてすぐ、増刊号にも初めて短篇小説②「夏の友情」を発表している。一二年八月号掲載の「夏休み特別増刊号(七月二四日発売)広告」では「題未定」とあったこの作の画は、中原ではなく不破俊子だった。また、「乙女の港」の連載も終盤を迎えた一三年二月号には、「作家・画家カメラ訪問」として、川端、中原、由利聖子(「あまのじゃく合戦」を連載中)、小林秀恒(吉屋の連載「伴先生」の画を担当中)の取材記事が各一頁で載せられた。書斎で写した川端の写真の下には、「大塔ノ宮のすぐお近く」にお住いの先生は大変無口で、いつもこちらの話すことをじつと聞いていて「何だか恐いやうで」、「先生が時々仰しやる言葉は、相手をはッ!とさせ、何か貴いもののやうにひしと胸に迫るもの」がある、この日「お訪ねしたとき、先生は暖い日の射す縁に」、「目白、カナリヤ、文鳥、紅雀、十姉妹」等「沢山の小鳥の籠を並べて、眺めて」いらっしやったという文が添えられ、同誌の看板作家としての川端の風貌が伝えられている。

川端自身、「多くの少女に愛され」「作者としても好きな小説」、「その後、「乙女の港」よりもよい作品はなかなか出来ない」(「乙女の港」作者のことば「昭二七・一一」と戦後に振り返っているこの作は、連載終了直後の四月一日に早くも単行本化され、春の臨時増刊号(三月二四日発売)には、一頁広告も出た。川端・中原の顔写真と中原が装幀した箱の写真も掲載された広告では、「お待ち兼ねの「乙女の港」、「月毎に雑誌で読んでゐた」のとは異なった情感が湧くとして、表紙には中原の「独得の叙情的な美しき乙女の姿」、扉には川端の肖像、「本文の各頁の上欄にはカット」と「見るからに美しい」装幀であることが強調されている。「附録として「ばらの花」の傑作短篇を添へて」とあるのは、「薔薇の家」(前述、「少女俱樂部」掲載)の誤りだったが、以後「少女の友」では毎号のように同書の広告が出ており、八月号には「好評増刷」とある。新刊広告が掲載された春の臨時増刊号には、③「英習字帖」が発表された他、川端、吉屋ら八名を取材したグラビア「私のスプニール」では「小鳥の歌 川端康成先生」として、鳥籠を見つめる川端の写真に添えて、「僕は、かうした小さい生命

に限りない愛撫と愛情をもつてゐる」、「西洋小鳥の声は、きれいでない」ので「日本小鳥が好き」、仕事に疲れた時など「いつでもかうして、鳥をみることでいやされます」といった川端の言葉が紹介され、「今、先生の所には、駒鳥、小雀、目白、頬白などが飼はれて、朝の水あみから、餌のお世話まで、すべて先生がおやりです。」とコメントされた。隣の頁には、「ピエロ 中原淳一先生」が組まれている。

### 3 連載小説「花日記」——続くヒット作——

「乙女の港」最終回末尾には、「4月号より引き続き新しい長篇小説」を書いて下さると記され、「友ちゃんクラブ」でもその旨言及された。それに加えて、川端康成作「題未定」と西條八十作「夜鶯の歌」の「二大長篇小説予告」が、各々の作家の写真（川端は、暖炉の前で読書している写真）を添えて掲載された。西條八十の方は小説の内容や題名の由来まで紹介されているが、川端の方は「すてきな小説を四月増大号にお書きくださいます」とあるのみで、「乙女の港」が終って失望なされたでしょう、先生の「乙女の港」への熱情はほんとにすばらしいもので、「美しく気高い洋子、こんなお姉様を持ちたいとは、日本の少女のほとんど総てのひそやかな願だったのですもの」と、「乙女の港」の川端が再度連載することのみが強調され、「クラブ室より」でも、「川端先生でなければ書きえない清純可憐、哀しき少女の姿」を書いて下さるでしょうと、次回については抽象的な表現にとどまっていた。

年度が改まった翌四月号から連載された④「花日記」は、中里からの書簡に「これは自分でもかいてみてたのしみ」、「虚構の人物」だが「私の思つてゐることをみんなさせてゐるせいかも」しれない（昭一三・九・一七附）とあり、「乙女の港」以上に中里の裁量に任されていたと推測される。④も前作の人氣に支えられて好評だったようで、「友ちゃんクラブ」にも、「康成先生の「花日記」又々素敵で飛上つちやいました」（昭一三・六）といった初回を喜ぶ便りに始まり、「終つてツマン

ナイ」、「花日記」の最後余りに悲しいですね。川端先生の次のお作楽しみです。淳一先生のみ絵と共に、「又乙女の港の様にグラビヤにして下さいませ」（昭一四・五）といった最終回を惜しむ声まで、多数の反響が紹介された。「花日記には体の弱い方がいらつしやるもので一寸遠慮してゐる」（「クラブ室より」昭一四・九）とあったグラビヤも、ファンの要望に押されたのか、翌一五年二月号に前回と同じく中原の指導で実現したが、「友ちゃんクラブ」四月号には、「うれしかった」という声の一方で、期待が大き過ぎた為か「幻滅！背景もちつとも感じが出てない。いつものグラビヤ写真としか思はれません」、「やっぱり乙女の港のグラビヤの方がよかつた」という投書も載せられた。

「花日記」については第五章二でも述べるが、同作連載中の一三年八月号には、「夏の増刊」（七月二五日発売）の広告も出ている。「乙女の港、花日記と続いてヒットをお出しになった川端先生」が「すてきな小説」を書いて下さったと、「題未定」、内容も不詳ながら紹介されたと共に、「忘れ難い憶ひ出を訊く」（川端、西條八十、浅原六朗、上田エルザ）という記事も予告された。この増刊号で発表されたのが⑤「試験の時」であり、記事の方は「忘れ難き憶ひ出を語る」と改題され、取材対象者も浅原が中原に変更されている。川端の記事は「純粹の声」と題して、縁側に置いた鳥籠をみつめる写真も添えて二段組二頁半が割かれている。鎌倉の二階堂の川端宅や書斎の描写に続いて、川端の随筆「純粹の声」（昭一〇・七）も引用し、「旅は書斎の移動だとも考へてゐるくらゐ家をはなれる機会が多い」が、「一番忘れられないのは」踊子一行との旅で、「伊豆の踊子」といふ作品の中に記録されたとはいへ、「一生忘れられない」とその旅を語り、軽井沢と違って鎌倉では、女乗りの自転車で散歩するとまだ慣れないと見えて「チロチロ人が見るので困る」と微笑したこと等が綴られている。

#### 4 連載小説「美しい旅」——「悉くの作に一貫してゐるもの」——

「花日記」最終回が掲載された一四年三月号には、川端と和田伝の二篇の「四月号長篇予告」が各々の顔写真を添え、一

頁を割いて掲載された。和田「黎む野の果て」の方は内容もある程度予告されたのに対し、川端の新連載は今回も「題未定」で、連載の終了した前作「花日記」に対しては、「清純な少女のかたく閉された心の世界」、「川端先生のやうな芸術家だけにしか判らない世界」「こんな美しい少女の世界の物語を少女の友にのせることの出来るのはほんとに嬉しい」と称賛の言葉を尽くす一方で、新作については「花日記に負けない美しい物語」としか触れられなかった。

連載開始予定だった翌月号の「クラブ室より」には、川端先生は「構想熟さず」、長篇小説は五月号から始まることになった、「その代り」あんなすてきな物語をお書き下さったから御満足下さいとあり、⑥の「兄の遺曲」が発表された。「今度の増刊はたよりないなアと思つたら川端先生が抜けていらしたわ」（昭一四・六）と読者からの指摘もあったように、それまでは、川端は連載（①④）に平行して春・夏の増刊号にも短篇（②③⑤）を発表している。このことから考えると、増刊号に用意していた⑥を連載が間に合わなかった穴埋めに使つたと推測される。

川端秀子によれば、この一月～三月にかけて川端は熱海の宿で碁の観戦記と綴り方の選にかかりつきりだったが（前述、第二章四）、「少女の友」から何度も電話があり、三月三日には担当の桑原（前述、注（9））が原稿を取りに来て、夜一二時まで三〇枚描いたという。これが⑥「兄の遺曲」であろう。同作は後に「実業之日本社文芸出版一〇〇年記念シリーズ企画 心に響く百年の名作」（「ジェイ・ノベル」<sup>(12)</sup>、二〇一一・一一）で復刻される等、一定の評価も得られているが、発表当時は「兄の遺曲」大好き。お絵淳一先生ではありませんのね」（昭一四・六）といった読者の便りが紹介された程度で、少女たちの関心は、専ら淳一とのコンビによる新連載の方に注がれていたようである。

翌五月号でも連載は始まらなかつたが、「新作長篇小説 新しき世界 川端康成 中原淳一画」と一頁予告が川端の顔写真入りで出ている。川端の言葉として、「六月号から」の連載は、「ヘレンケラー女史のやうに、盲で聾で唾といふ三重苦に宿命づけられた少女を主人公にして、その魂の発展」を書く、そのため「東京の聾唾学校に一週間も通つて、そこに学ぶ子供

たちの生活」を見る、「乙女の港」「花日記」よりも「遙かに自信がある」と伝えられ、初めて内容に踏み込んだ紹介がされた。「クラブ室より」でも、先生の本稿を頂けなかったのは「大変残念」だったが、先生は「此の二ヶ月全力を尽くして材料を募集」していらつしやっている、きつと「良き物語」が生まれるから大きな期待を以て六月号を待つてほしいと記された。

だが翌月も、再度一頁予告が出た。「新しき世界」は「先生の御健康がよくなる」七月号に延期、先生によれば、「充分準備をととのへて、力一杯のものを書きたい」ということで、「盲目で然も聾であり啞である一人の少女の苦しみと、そしてそこから生まれ出る新しい魂の世界の発展が主題」、「少女の友誌上にのる第三番目のこのお話に先生がどんなに強い熱意をかけてゐられるか」お知らせしたい、前二作に劣らず「皆さんのお心をうつに違ひない」とあり、「クラブ室より」にも、「ただすつかりお体がよくなるので、もう一月だけ待つて欲しい」とおつしやっていると、お詫びが載せられた。

確かに川端は、この三月後半は齒科・眼科・外科等の医者通いも続いており、④「花日記」完結後から⑦「美しい旅」が軌道に乗り始めた第三回目の九月までの半年は、⑥「兄の遺曲」を唯一の例外として、創作は一切発表されていない。これまで下請けをしていた中里がこの一四年二月に芥川賞を受賞、活発な作家活動を展開し始めたといった事情もあり、前二作の好評を意識しつつ川端独自のものを打ち出そうとした新作は、連載開始前から難航したのである。

盲目のモチーフは川端にとって根深いものだったが、<sup>(13)</sup>「少女倶楽部」から「少女の友」へ移行した一二年一二月には、盲目の少女を主人公にした『女性開眼』(創元社。この一四年六月一日に映画も封切された)と、盲目の少年を主人公とする「級長の探偵」を表題作とする自選の少年少女小説集の二冊<sup>(14)</sup>を刊行している。「無論、ヘレン・ケラー全集が、座右の参考書で、眼が見えず、耳が聞こえずとも、人生は美しいというテーマ」(昭一四・八「旅中片信」)だと「美しい旅」連載当初から明かしていたが、ヘレン・ケラー全集が完結したのも、彼女が来日したのも昭和一二年だった。「少女の友」時代の作品になると「だんだん川端のその時代の中心のテーマに接近してくる」(羽島「解説」)と指摘されているが、この連載こそは、一二

年頃から暖めてきた題材を用いて、自身の中心テーマ「悉くの作に一貫してゐるものは、或ひは人は意外とするかもしれないが、生命の輝きに対する、憧憬と賛美の心に外ならぬ」（昭一・二・三）「花のワルツ」と「雪国」<sup>(15)</sup>に――正面から取り組もうとした作品だったと言えよう。

「美しい旅」と改題して、ようやく連載が始まったのは七月号だった。「クラブ室より」では、「川端先生が想を練りに練ってお書き下さったこの珠玉篇、どんなにすばらしいか」、とやかく云う必要はない、「美しいだけではない、面白いだけではない、少女のもつ尊いもの」を秘めている、「貴女のよき魂がその尊きものをおみつけ下さるやうに」と特筆された。翌月号でも、「まだ本論には入つて居ませんが、流石は鋭い表現、心打たれるばかり」、「一字々々お味ひの上、御愛読下さい」と言及され、早速九月号には「今度のは大分今までのとは違ふらしくて楽しみです」、「花子可愛くて食べたいやう」といった投書があり、内山も「日本で初めての少女小説が出来上がるのではないかと期待してゐます」とコメントした。しかし、「初めは大きらひでした」（昭一五・三）といった便りが後に掲載されたように、「美しく」「面白」かった前二作とは異質なものを、少女達も感じていたようだ。川端自身も既に前述の「旅中片信」の時点で、「これはをかしな小説だ。書き進んでも、感興に乗れるといふことがなく、無理押しの努力である。骨が折れ、時間がかかる割に、面白さは乏しく、女学生達がよく読んでゐてくれると思ふ」と漏らしていた。

連載第一回が掲載された七月号には、八頁に亘るグラビヤ「鎌倉物語」が生まれ、「友ちゃんクラブ」の翌々月号では、「川端先生の御文で御写真も本当に嬉しく、先生に御案内して頂いた白いリボンの御方、どなたですの？羨ましいなア、川端先生にも御礼云つて下さいね」等の好評に、今度は先生に「日光物語」をして頂こうと思う、秋を楽しみにと内山も答えていたが、こちらは実現はしなかった。前述の全集未収録文<sup>c</sup>で「鎌倉の名所めぐり」として言及されていたのがこのグラビヤであろうが、同じく「愛読者会」とあったのは、やはりこの連載中に開かれた東京友ちゃん会のことであろう。同年一二月



号「東京・津・仙台友ちゃん会ニュース」には、「十月の二十日午後一時から例によって、YMCA講堂で開かれ」た同会に「川端島木中原由利不破岩下の先生方がお出で」下さったが、「中原先生以下の四人の方は大変お口数が少なく、たゞお辞儀だけしかして下さらない方もありました」という記事と共に、川端の顔写真も掲載されている。川端の声は小さかったよう<sup>16</sup>で、「後の方は聞こえませんでしたから来年にはもっと大きな御声で」といった投書もあった（昭一五・四）。

「美しい旅」はこの一五年四月号は休載となり、「くらぶ室より」には、「過労の為に」二月一五日突然目が見えなくなつて慶応病院に入院、一九日には退院したが、今月はあらゆる執筆を断つて静養することになったとお詫びが記された。当時川端は「新女苑」と「婦人公論」にも連載を書いていたが（前章・次章参照）、この月はそれらも含めて創作の発表はなく、「新女苑」でのコントの選も「今月は少し眼を悪くして、小説も休ませてもらったほどだから、自分では読まず、家人に朗読させて、耳で選をした」と選評で断っている。

六月号には病状を心配する投書が多数寄せられ、すっかりよくなった旨を内山がコメントした。川端は「新女苑」コント欄「選評」に、「盲啞の学校を見学するのに、鎌倉から通ふのは遠いので、東京に泊つてゐる。今日は盲学校を見て来た。明日は聾啞の学校へ行く。「少女の友」に書いてゐる小説の主人公が、盲啞の女児なので、その参考のために、これから毎月見学させてもらふことにした。」と記している。「明日」行く<sup>16</sup>とあつたのが、秋山ちえこ子（旧姓、橘川）の勤めていた東京聾啞学校で、五十嵐康夫によれば五月二五日のことだった。「若い女教師の授業を一時間見ただけで、私は深く心を動かされて、そのありさまを「美しい旅」と題する聾盲児小説中に写生した」（「北条誠『春服』序」昭一五・一二）と述べているように、この見学は筆の渋っていた連載に大きな弾みをつけ、その授業の様子は九く一一月号に詳しく描かれたが、秋山は一月に結婚、一二月には夫の任地の大陸へ渡り、川端に強い打撃を与えた。『春服』序には、「結婚するといふ思ひがけないらせ」で鎌倉へ別れに来てくれたのは「つい一月ほど前」で、「その日私はその人とはじめて会ひ、その二日後にその人

は婚礼」し、「まだ棄て切れなかつた最近の日記」を残して行ったと記されているが、五十嵐引用の秋山宛一〇月七日附書簡には、「御手紙拝見して、簡単には言ひ現し様のない衝撃を感じました。しまったなあ、困ったなあと、繰り返してをります」、「取り返しのつかない気持ちです。」「この小説の続く何年もの間、あなたも学校にゐて下さるとばかり考へてゐたのには、自分の勝手さに今気づくわけです。」「この前にいただいたよいお手紙は、三月旅先へ持ち歩き」、「あなたは作中にゐられます」と綿々と綴られており、その後秋山は式前に三、四回川端家を訪ね、授業ノートを貸すなどしたという。

豊唾学校の場面以前から、「筋だけではなくて文章が実に美しく、練絹にも似た見あきぬ美しさがあり」、「川端先生の少女小説中記念すべき傑作の一つとなられる事と期待」している(七月号)、「どんな人も慰められ、心に生きて行く糧が得られる(一〇月号)といった便りも取り上げられるようになっていたが、前述の「記念のことば」にもあつたように、軍部の圧迫も厳しくなり、中原の絵が一五年七月号から消えて「美しい旅」の挿絵も初山滋に変わった。「美しい旅」だけは淳一先生に描いて欲しかつた」(同)、「中原先生の花子ちゃん」と初山先生とは随分違う、「どちらを本当の花子ちゃんにしてよいかわからなくなつて」しまう(十一月号)といった投書が多数寄せられており、中原の絵に近しさを感じていただろう川端にも、単なる挿絵担当の変更で済まされぬ思いがあつたと推察される。中原を失つて同誌の変質も一気に表面化していき、後述のように、川端の「作文の選び方」も「軍部ににらまれ」るようになったのである。

一六年三月、川端は「幼女篇」は少し書き足して一先ず終わりとし、近いうち本にすると末記し、予告には翌月から「少女篇」が書かれるとあつたが、四月号に「幼女篇」の続きを發表した後、五月号は休載、代わりに次のような断りが出た。

#### 全集未収録文 e 「お断り」(昭一六・五)

「美しい旅」は、前月の「望みの海」で、その幼児篇を終りとします。直ぐ続けて、少女篇を書くつもりでしたが、四

月の初めから一月余り、満洲へ旅行することになりましたので、帰るまで続稿を待つていただきます。そのかはり満洲の旅行の見聞から、なにか書いてお送りいたします。／「美しい旅」の幼女篇は近く出版してもらひます。筋の面白さはありませんが、私としては真面目に書いたものですし、これから本題に入る序曲ですから、本にまとまるのは楽しみです。聾盲児そのものを書くのが目的でなく、聾盲児を通して、人生と自然のうつくしさを書くのが目的ですけど、続編を書く前には、また盲学校や聾学校を見学しなければなりません。

満洲日々新聞の招きによる旅行（四月二日神戸発、五月一六日同着。後述、第Ⅲ部第二章一 041 牛島春子宛参照）の見聞を綴ったのが、八頁に亘る八月号のグラビア記事「新京から北京へ」で、盲・聾学校を見てきたかったが慌しくてその折がなく、聾哑学院の生徒の作品を貰って帰ったにとどまると言及されており、「クラブ室だより」には、小説は書き出しが難しく、苦心をお重ねになった挙句間に合わなかったのですから、とお詫びが載せられた。

続篇は、九月号から露谷の挿絵で連載されたが、川端は関東軍の招聘で九月に再度渡満（六日神戸発）、一〇月から開戦直前の十一月末（三〇日同着）までは自費で滞在し、一二月号の「クラブ室便り」には、先生が先々月から旅行中で小説も作文も送ってもらえなかったが、「この二月に亘る収穫」が、「お作に一層輝かしきものをうみ出すことを考へれば」「お国の為には忍ぶべき失望」として今月はおあきらめ下さいとあり、同号の「異国クラブ」では、川端の声を初めてラジオで聞いたという撫順の少女からの便りに対し、先生はお便りを下さらないので小説も作文も催促出来ないとコメントが付けられている。翌一七年の一月号から満洲での取材を取り入れて続篇の連載が再開され、「又続いて嬉しく読」んだ、半分で切ってしまうえば「気の毒な花子さんがどうなつて行く事」か「心配でたまらない」から「学問や口話が出来るまではどうか続けて下さい」（昭一七・四）という投書もあった。

「正篇」が刊行されたのは一七年七月で、九月号には、「美しい聾盲の少女」が「周囲の人々の愛情によつて魂の目覚めてゆく経路」が描かれ、「心を清めてくれるやうな人生と自然の美しさ、愛情のたふとさが虹の様に貫いてゐます」といった広告も載せられたが、「続篇」の執筆は苦渋を極めた。八月号は「旅行中」<sup>(17)</sup>として僅かの発表にとどまり、九月号は休載、文末に（つづく）とある一〇月号を以て中断した。川端は戦後の「独影自命」に「女性開眼」や「美しい旅」のやうな作品も、私はいつか静かに書き上げてみたいと思つてゐる」と漏らしたが、遂に果たされなかつた。その原因について羽鳥は、モデルを失つたこと、女学生相手に書こうとするには無理なところへ踏み込んできたこと、構成的なものに川端の資質が適していなかつたこと等挙げているが、『美しい旅』あとがき（昭一七・七）で「この人（引用者注、秋山ちえ子のこと）なしにこの作品は書けないと言へるほど、私は落胆して、続稿の勇氣も挫け、しばらく呆然としてゐた。」「努力で推し進めたやうな書き方」で、「内山基氏等の鼓舞がなければ、到底続けられなかつた」、「連載のあひだ、ずるぶん面倒をかけ、またあまりおもしろい読みものでなかつた」と述べねばならなかつた川端自身にも、そうした自覚はあつたらう。「とにかく私は真面目な気持ちは失はなかつた」だけに、この中絶は手痛いものであつた。尚、本作連載中に、姉妹誌「新女苑」でも題名にやはり「旅」を用いた「旅への誘ひ」の連載が始まっていることは、第四章及び第八章で考察する。

##### 5 戦争への傾斜の中で―「作文」選など―

川端は姉妹紙「新女苑」で一三年二月から文章選を行なつていた（後述、次章）が、「美しい旅」連載中の一六年一月号からは「少女の友」での作文の選にも携わることとなつた。それ以前は編集部（内山）が選を行なつていたやうで「選の言葉」の類もなかつたが、一五年一一月号「編集室だより」に、「新年号より作文の選を川端康成先生にお願いし、詩を室生犀星先生に、短歌を窪田空穂先生にお願いして、より一層投書文芸の欄を充実させる」事にしたとお知らせが出た。一部選者の変

更もあり、選開始後の一六年四月号には、川端・室生・結城哀草果・森田多里の四人の「選者の横顔」が各一頁で紹介された。添えられた写真に触れて、川端は次のような文章を書いている。

#### 全集未収録文 f 「選者の横顔」(昭一六・四)

この写真は鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮の池の畔で写してもらひました。修学旅行の人達がよくお弁当を開いたりする、休み茶屋の前です。梅が咲きはじめてゐます。／節分には、八幡宮の豆撒きに、私も奉仕いたします。鎌倉に住む文人達の鎌倉ペンクラブ員が、去年からこの年男をとめる習はしになつてをります。／三月号の「少女の友」が出る頃は、もう節分も過ぎてゐますが、神殿で私は皆さんのためにも豆を撒いておきませう。―福は内、鬼は外―

この後三五回に亘つて川端は「大きい抱負を持ち、尊い意義を認め」<sup>(18)</sup>、熱心に選を行つた。一八年二月号では、今年も選を続ける、「紙の節約」で掲載の篇数は減つたが「作文の欄は残された」のだから「貴重な紙面」を十分意義のあるものにしてほしいと呼びかけ、同九月号では、よい作品を集めて『少女文章』<sup>(19)</sup>という本も出したいと抱負も述べていた。しかし、戦後の全集未収録文 c で明かしたように、その「作文の選び方も軍政ににらまれ」、同年一月の「新女苑」小品欄打ち切りにつき、「少女の友」も翌一九一九年一月号から、川端のみならず、短歌・詩の選者も予告なく一斉に変更になつた。新しい選者は「決戦下の評論家として最も優れた」浅野晃、「歌人代議士」吉植庄亮<sup>(20)</sup>、「決戦詩人」大木惇夫と紹介され、ひととき濃厚となつた戦時特色は、各々の投稿作の選び方や、「いまや前線銃後の別なく、たゞたゞ全員玉砕の道を歩みたいのである」(昭一九・二、浅野)、「皇国の少女のけなげな姿が彷彿として、心づよい限り」(同・三、同)といった選評にも顕著である。

「なるべくお投書の方の頁減らさないで」(昭一五・四)と早くから要望も寄せられていた「友ちゃんクラブ」も、一七年

一月号からは「生活教室」と名称も改められて三段組六頁に削られ、翌年六月号からは三頁となった。内山も陸軍報道班員として南方に派遣されて「美しい旅」の連載も途絶え、「美しい旅は取り止め」なのか、「独特のうるほひあるあの美しい文が見られなくて」淋しい、「他の小説がなくなっても」構わないから「美しい旅」だけは続けてといった投書に対し、「お氣持がまだ十分に醗酵して来ないもので書いて頂けない」とある一八年七月号を最後に、川端への言及もこの投書欄から消えている。一九年一月号には「生活全般を決戦的いきりかへて進ませう。生活教室の投書も出来るだけさういつた生活の報告でありたいと考へます」と記され、読者頁の質も大きく変化したのである。

かつて、第一高等学校「校友会雑誌」に川端の「ちよ」が発表されていると読者が指摘したり（「友ちゃんクラブ」昭一四・八。研究者の長谷川泉が同作を発掘し、これに注目したのは戦後である）、<sup>(21)</sup>「雪国」読後の、「この位徹底して自分の詩境でこの世ならぬ清澄な歌を奏でる事が出来たら素晴らしいものだといふ気がした。このやうな作品を無思想な作品と云ひきつてしまふのはずるぶん危険だと思ふ。勿論、社会的な時代的なイデオロギーといふものの表現はないけれども、もつとつきつめた人間の生命の原理といったものの表現がある事は否定できない。」（「生活教室」昭一七・一一）<sup>(22)</sup>といった読者の感想も載せた同誌も、雑誌存続の為には、中原に続いて川端さえ、「社会的な時代的なイデオロギー」に欠けるとして切り捨てねばならないまでに追い詰められていった。同誌と川端との縁はこの時点を以て終わり、戦後を迎えても新たな作品を同誌に発表することはなかったのである。この時代の川端、殊に選者としての側面については、次章以降で詳述する。

## 注

- (1) 大橋は「乙女の港・美しい旅・万葉姉妹」（河出書房、昭二九・九）から引用しているが、同内容の発言はポプラ社版「乙女の港」（昭二七・一一）の「作者のことば」に既にみえる。

(2) 前述の「乙女の港」も、「中里恒子」原作「だった」（「朝日新聞」一九八九・五・一九）と報道された。拙稿「川端訳」童話について」（前述、第I部第一章注（32））では、戦後川端の名で訳された童話五十数点のリストを作成、巖谷大四、中山知子、木村徳三等による代筆の事実も調査により明らかにした。

(3) 後述、第五章三三で詳述する。

(4) 同誌で川端作品の挿絵の大半を担当した加藤は、「少女の心理の襞をもっとも大衆的な形で描いた」（『昭和挿絵傑作選 少女少女篇』国書刊行会、昭六二・一）と評され、既に同社の「婦人倶楽部」でも川端の「霧の造花」（昭六・一、二）を手がけていた。また「令女界」「少女倶楽部」の「中心的執筆者」であった落谷は、「装飾的、理知的な画面構成」（『同前』）が特徴とされる。後進の須藤の絵は、落谷を少しリアルにした感じとも言われている（加太こうじ「少女小説の挿絵画家たち」、『季刊・子どもの本棚』昭五五・二）。

(5) 「改造社版『新日本文学全集・川端康成集』あとがき」昭一五・九。「禽獣」については、拙稿「『禽獣』論」（前述、第I部第一章一注（65））も参照されたい。

(6) 岡田純也「少女倶楽部」（『近代文学大事典 第五卷』前述、第一章）。

(7) 大藤幹夫「少女倶楽部」（『日本児童文学大事典 第二卷』大日本図書、一九九三・一〇）。

(8) 遠藤宏子「少女の友」（『日本児童文学大事典 第二卷』同前）。

(9) 桑原至誠。一三年五月五日に豊橋聯隊に応召入隊、一四年五月初旬に名古屋で川端が仲人をして結婚。一八年一月六日附の川端『女性文章』の「序」は、「『新女苑』の編輯記者であり、私の友人であった、桑原至誠君は陣没した。君の英霊にこの書を記念として供へたい。」と桑原への献辞で結ばれている（『新女苑』と『女性文章』については後述、第四章及び第六章）。

- (10) 岩下小葉は大正八年から昭和六年まで在職、大正一三年からは浅原鏡村(六朗)が主筆。
- (11) 本田和子「戦時下の少女雑誌」(大塚英志編『少女雑誌論』東京書籍、一九九一・一〇)。
- (12) 同号に寄せた拙稿「真摯に(少女)」を描いた文豪の足跡」も参照されたい。
- (13) 須藤宏明「盲目の人を動機にした川端康成の小説論」(川端文学研究会編『川端文学への視界9』教育出版センター、一九九四・六)等、多くの指摘がある。
- (14) 「少女倶楽部」発表の八篇(「薔薇の家」を除く)を収録。前章参照。
- (15) 『花のワルツ』は一二月、『雪国』は前述したように同年六月刊。いずれも「少女の友」への移行期間の刊行。
- (16) 「三十代の川端康成 第八回川端と秋山ちえ子」(『経済往来』一九九一・一〇)。直接秋山に取材し、本文に引用した秋山宛の川端書簡も翻刻している。
- (17) 八月下旬から一〇月下旬まで、川端は軽井沢に滞在している。
- (18) 昭和一六年一月号選評。前述したように、一六年一二月号のみ満洲旅行の為に選を休載した。
- (19) 同号で川端は、「婦人公論」「新女苑」の小品文の選を七年続けたが、いい作品を集めて『女性文章』(前述、注(9))という本を出すことになつたとも言及しているが、『少女文章』の方は実現しなかった。
- (20) 川端が古植の農場を訪れたルポ「土の子等」(昭一八・一〇)を書いていることは、前章で言及した。
- (21) 「伊豆の踊子」―『ちよ』『少年』『美しさと哀しみと』に触れて―の初出は、三九年一二月〜四〇年六月。
- (22) 「栃木、藤本弥生子」とあり、何度か川端に作文も取り上げられた当時女学校三年生の読者。尚、作文欄へ「投書する人の年齢」は「国民学校の五六年から、だいたい二十三歳の人まで」で、「女学生がそのうちの大部分を占めているが、「女学校を卒業して間もなく、二十歳前後の人も相当あります」と、川端は一七年四月号の選評に記している。



#### 第四章 戦時下の側面―「新女苑」における川端康成―

川端が戦前戦後の三〇年に亘って発表した数多くの少女小説は、その発表誌により三期に分けられる。前章では、第一期及び第二期にあたる「少女倶楽部」「少女の友」誌での川端の在り様を、新資料を踏まえながら見ていったが、その調査過程で、後者の姉妹誌「新女苑」も、川端研究の上で見過ごせぬ雑誌であると判明した。川端が同誌に積極的に関わった昭和一三年から一八年は、「少女の友」時代（昭一二―一八）にほぼ重なる。日中戦争勃発時に、「戦ひが終つたならば、その後、文学者の仕事はある」、「お粗末な戦争文学などを一夜作りして、恥を千載に残す勿れ」（「同人雑記」昭一二・九）と訴えた川端は、「この頃の小説はつまらぬ」と感じられるから、再び「時評を書いてみる気になつた」<sup>②</sup>、「戦争で文学者も勢立つのは当然だが、あたかもその時、自分の道の文学の精神は墮落と衰弱の一方ではないのか」（「文芸時評」昭一三・九・三〇）と批判し、戦争が拡大激化していく中、創元社版『雪国』（昭一二・六）の続篇「雪中火事」「天の河」を発表した（後述、第八章）他、信州の風土に根ざした長篇「牧歌」（前述、第二章）に続く「高原」（昭一三・一二―一四・一二）や、戦後の長篇「名人」のプレ・オリジナルとなる「本因坊秀哉名人」（昭一五・八―一〇）等も書いているが、この頃の川端に関する研究は他の時期に比べて手薄である。少女小説第三期にあたる戦後の「ひまわり」時代を考察する前に、本章では、「少女の友」との関連にも目配りしつつ、「新女苑」における動向を探ること、戦時下の川端に更に照明を当てていきたい。

##### 一 「少女の友」姉妹誌としての「新女苑」―「自己を創造せんとする若き婦人」のために―

「新女苑」は昭和一二年一月に「少女の友」と同じ実業之日本社から創刊され、戦争を挟んで三四年七月で終刊となった。一五年一二月号まで「少女の友」と主筆を兼任した内山基は、見開きの「創刊の辞」で、「現在の女性雑誌」は「最大顧客層

である家庭婦人の為」には極度に発達しているが、単に「実用的現実的」な点にのみ止って「自己を創造せんとする若き婦人の精神的要求」を満たせない、「未婚の若き女性にとつては更に広い深い世界があつてよい」し、「さうした世界の要求こそ若き女性の特権でもあり、象徴」だと指摘し、「我が新女苑はさうした若き女性の要求に副はんとして生まれ出たもの」で、「既成婦人雑誌の亜流」とは決してならないつもりだ、「少女雑誌と婦人雑誌の中間的存在である新女苑」の将来は必ずしも幸福な期待ばかりが待っているわけではないが、「家庭婦人と異なつた若き心の切実なる要求を持つ、新女性階級の存在」を固く信ずるが故に、「質的には必ず特異な新しき将来性を持つてゐる」と確信していると、高い理想を掲げた。

同誌に「お妹さんには「新女苑」の妹雑誌 上品で美しい「友ちゃん」といった広告が出る一方、「少女の友」の方にも、「少女の友は情緒を主にした少女の雑誌」だが、「新女苑は知識と教養を主にした若い婦人の雑誌」で、「女学校をお出になつて、これからの世の中に出ようとなさる方々」、「正しく生きたいとお思ひになる貴女のお姉様方」に勧めてほしい、「少し固苦しい」が、暫く読めばきつとよい雑誌と判るはずだといった広告が掲載されており、姉妹誌としての両誌の位置づけがうかがえる。

内山が「少女の友」で手腕を発揮していたことは前章で見たが、内山の開拓した読者層とその声を拾いあげるシステムがあつたればこそ、実業之日本社の「創業四十周年の記念事業」<sup>4</sup>として「新女苑」が創刊されるに至つたと考えられる。「少女の友」同様に内山色の濃かつた「新女苑」は、「新女性階級」を対象に、「毎号、名作絵物語、該月詩画譜、グラビア、のちに名画紹介などを巻頭に掲げ巻末には読者文芸欄を充実して読者の参加を図る一方、長短編小説、隨筆、教養と趣味欄、おしゃれ、料理などの実用記事のほか、結婚や生き方などに関する論文、座談会、フィルム・レビュー、ブック・レビュー欄等々が置かれた」<sup>5</sup>。この「読者文芸欄」<sup>6</sup>には、コント・短歌・詩・日記の他、「自由なる談話室」である「ペンルーム」があつた。「ペンルーム」第一回（昭一一・三）には、「長い間友ちゃんのお愛読者」だったが、創刊号から「卒業生として愛読」す

る、「友ちゃんらしい匂ひを感じる事が出来」て嬉しいといった声や、「七年も愛読」した「少女の友」だが、大きくなるにつれて物足りなくなり「心にぴつたりする婦人雑誌」もなく困っていたら友ちゃんの一二月号で新女苑の出来る事を知り、「基先生の主筆」ならと「期待」し「思った通り」だったといった声が早速寄せられた。この後も「少女の友」の卒業組の便りが多数寄せられたが、その一方で、「なつかしい友子と急に絆をきることは出来」ない、「当分の間の二心」を許してほしい（昭一・二・三）といった便りも少なくなかった。内山も、「少女の友の読者の会」で地方へ行き、「上級の方々に数多く新女苑の読者を発見」して驚いた旨記しており（「編輯後記」昭一・二・一）、また「友ちゃんクラブ」にも、「女苑にもお投書」した（昭一・四・五）、「学校の校友会図書室で少女の友と新女苑毎月とること」になった（同・一〇）、「私のお姉様「新女苑」なの。だから毎月「友」との批評しあふのよ」（昭一・五・六）、「新女苑見ても友へ出してもいいでせう」（昭一・六一）といった投書が見られる。「少女の友」時代の川端が深く関わっていた「新女苑」は、「少女の友」卒業生の受け皿に留まらず、独特な誌風を共有することで、当初予想されなかった程の読者層の重なりを持っていたと確認できる。

## 二 川端と「新女苑」（昭和一三年〜一八年）

さて、川端と「新女苑」との関わりであるが、次に掲げたように、川端は連載を含めて③⑦⑨三作の小説を発表し、コント欄の選をした他、評論、小文等も執筆しており、④⑥及び⑦の予告文の三篇は川端全集未収録である。

① 一三年五月 対談「文学清談」（横光利一・川端康成）

② 同年一二月〜一八年一月 「小品欄」（一五年一二月までは「コント欄」）選

③ 一四年一月 短篇「大牡丹」

- ④ 同年五月 川端全集未収録文 a グラビア「わが家の団欒」
- ⑤ 同年六月 随筆「私の趣味 犬と鳥」
- ⑥ 同年八月 川端全集未収録文 b グラビア「わが友」
- ⑦ 一五年一月〜九月 連載「旅への誘ひ」 \*一四年一二月、川端全集未収録文 c 予告文「神秘」
- ⑧ 同年七月 アート写真「僕の浅草地図」
- ⑨ 一六年二月 短篇「朝雲」
- ⑩ 同年八月 評論「思ひ出の作家 岡本かの子」

同誌では、自作の発表よりも①の対談（横光は同誌に「実いまだ熱せず」を連載中<sup>(7)</sup>）や②の選の方が先行していたのであり、一部の読者には、作家としてよりも「コント欄」選者としての親しみがあつたろうことは、「お作は不思議に今まで読む機会がありませんでした」（昭一五・八）といった投書からも推測される。本章でもまず、選者としての川端を見ていきたい。

1 「小品欄」選―《女性的なるもの》と《日本》―

「新女苑」で選を始めて間もない頃の時評「文学の嘘について―文芸時評」（昭一四・二）で川端は、

先日も小林秀雄氏が、君はまめだねとあきれてゐた。気がついてみると、選ばかりして暮らしてゐるやうである。（中略）芥川賞や、「日本小説代表作全集」<sup>(8)</sup>や、文芸時評のために、同じ作家仲間の作品を読むことは、少からず苦しいものが伴ふ。しかし、「婦人公論」や「新女苑」の女性の投書を読むのは楽しい。

と述べ、「女性の投書」には「文学以前」の「女性の生地よさが溢れてゐる」のに対し、「大方の職業作家の文学」は「人間や人生の虚飾に過ぎぬ」として、次のように続けている。

未熟な女の投書を読んで、こんな風に楽しんでゐるのは、われながら哀れと思ふこともある。それは多分、恋愛も生活も文学の病気で失つてしまつた人間が、遠い空にただよふやうな女性的なるものに、わづかに慰めを見出してゐるさまなのであらうか。(中略) なにか地獄の底に落ちて天国にあこがれてゐるやうな気もする。(中略) 下手な素人女(文学的に)の投書家は、私には天女なのであらうか。綴方の子供は天使なのであらうか。(傍線引用者、以下同じ。)

深い嘆きと共に吐かれたであろう言葉に、戦前・戦後の長きに亘つて川端が子供や女性の文章の選を続けた理由を解く鍵が隠されていよう。女性の文章の選を始める以前の随筆「純粹の声」(昭一〇・七)でも、「少女や処女」の「純粹の声」があり、「純粹の肉体」が在るなら、「純粹の精神」といふものもあるはず」で、「古往今来文学の贊美的とされて尽きないが、少女や若い娘自らに、傑れた作家が殆ど絶無であること」を問題にしながらも、「女の手紙の方が遙かに素直に感情が流露して、生々しく肉体的」なのは、「女といふもの<sup>の</sup>ありがたさと私は思つてゐる。若い無名の女の小説を読むと、下手であればあるだけ、反つてこの女のありがたさが溢れてゐることがあつて、「純粹の精神」の現れかと考へられる」と記している。

繰り返し述べられる「女性的なるもの」——戦後の「婦人公論」(「選の言葉」昭二八・四)でも、「このやうな選に時間をつぶすのも、自然に永遠に女性的なるものを感じたいと思ふから」で、「童心と女心とは芸術と人生との泉である」と述べている——の内実は、「女性的なるもの」(昭一二・七)という一文も含めて、必ずしも明確にされているとはいひ難いが、「芸術と

人生との泉」としてのそれへの強い憧れは、素直な感情の流露や生々しい肉体性から遠ざけられて、恋愛も生活も失っているという自己認識と表裏したものであったことを、まず確認しておきたい。昭和一〇年以降一二年六月までを虚無からの一応の回復期だったと見た羽鳥「戦争時代の川端康成」（前述、第二章注（21））は、「雪国」を例証として「女性の生きる力に触発されて」という面があったと論じているが、そうであるなら、選者となって新たに生な女性の文章に接する機会を得たことは、川端にとって特別な意味があったと言えよう。

昭和一二年に一年間「婦人公論」で選をしたのは編集者藤田圭雄との縁によるものだったが（前述、第二章）、「新女苑」での選は第一回（昭一二・三）からの選者片岡鉄兵の後任だった。川端初回の選評（昭一三・一二）に、片岡が「漢口攻略」の陸軍に従軍して、まだ帰らないので「急に今月から受けつぐことになったとあり、「編集後記」にもその旨記されている。片岡はその前月号で、従軍するが選評はしばらく続けると書いているから、間際の交替だったようだ。川端は「婦人公論」での選の実績もあり、第I部でも見たように学生時代から親交もあった片岡の後を引き受けることになったのであろう。

だが「ペンルーム」での反応は、「先生の名が毎月拝見できてうれしい」（昭一四・三）といった好意的なものの一方で、「片岡時代に活躍していた方々の作品がなつかしい」、川端の「コント」の選は「幼稚なのが選ばれるやう」でなじめない、「先生は一度出した者は二度と出さない主義でいらつしやいませうか」と不満を漏らすものもあった（同・六）。前任の片岡が、コントであるからには「人の心に訴へる中心点」と「構成」がなくてはならぬ（昭一二・三）と素人にも職業作家的な技術を求めたのとは対照的に、川端は「コント本来の字義」にかかわらず自由に書いてほしい、「形や纏まりがなくてもよい」と初回の「選評」から述べていた。先行する「婦人公論」選評でも、「文学の毒気に、日夜苦められてゐる」（昭一二・七）と漏らしていた川端であつてみれば、「悪い意味の文学少女臭を、寧ろ斥け」（同）るのは当然で、「投書達者を抑へて来たところ」に、選者としての私の功は多少あつただらう。功舞をしりぞけ稚拙を愛し過ぎて、才女を閉め出した傾きもあつたと

『女性文章』序（昭一八・一一・六附、後述）で振り返っているように、「女の生きる真実、真情があらはれておればよい」（「婦人公論」選の言葉、昭二八・三）という姿勢は戦後まで終始一貫していた。

「新女苑」でも、「今月はいいい作品がな」く、この欄も「私が選をしてゐる限り、この程度のところまでで、ゆきづまるのではないかと思ふと、少々残念で」、「適當の時に新しい選者と交替した方がよいのかとも考へられる」（昭一七・四）と記したことはあつたが、「旅行中」で三回休んだ<sup>9</sup>他は、「眼を悪くして、小説も休」んだ時でさえ、「家人に朗読させて、耳で選を」（昭一五・四。前述、第二章）して、熱心に取り組んでいる。一六年一月号からは「少女の友」での選も加わつたが、苦にするどころか「両方合わせて、わが国の女性文章の進歩改善につくすことができるのは、私の喜びである」、「年齢のつながりのついたことも選をする上に都合がよく、また投稿家の成長を見る楽しみがある」（昭一七・四）と述べている。

戦争が激化していく中で川端は、「紙の節約で頁が減るにかかはらず、小品欄は存続されるのだから、十分意義あるものにしたがひたい」、「読者の女性同志がお互ひの心や暮らしの真実を伝へ合ふ文章は、今の世の励ましや慰めとなることも大きいと思ふ」と一八年三月号で記していたが、同年一〇月号では「誌面の都合」で募集が「一時中止」となつた。一一月号では、「頁数減少のため」「当分休止となつた」という川端の「告別」の言葉が記され、二代目主筆・神山裕一の「感謝」と題した次のような長文も添えられて、同欄は遂に打ち切られた。

選者川端氏には御礼の申上げやうもない御骨折を、長い間願つてきた。しかも同氏はこの仕事を少しも面倒とせぬのみか、時によつては御自身の創作よりもこの仕事を愛されてゐるのではないかと思はれることすらあつた。投稿家にとつてこんな幸福なことはなかつたと思ふ。そればかりでなく近く川端氏の編により、この欄の優秀作を集めた「女性文章」が刊行の手筈になつてゐる。これはこの小品欄のよき記念として長く残るであらうし、またこの欄の中止に際してせめてもの慰

めともなるであらうと思ふ。

前章で述べたように、川端は「少女の友」の選もこの翌一二月号を以て急に下ろされたが、戦後に「新女苑」と同じ実業之日本社から創刊された「赤とんぼ」綴方欄の選を始めた時の最初の選評（昭二一・六）では、次のように明かしている。<sup>(10)</sup>

「新女苑」、「少女の友」二つとも私の選は戦時の軍官に禁ぜられた。「女性文章」は内地で出版を許されず、満洲で発行された。

私の選び方、私の選ぶ少女や女性の文章が戦争の妨げになるといふ見解ほど、私を驚かせたものはなかった。私は戦時のためを念じて選んでゐたのである。もつとも敗戦後には読めぬやうなもの、敵国には見せられぬやうなものは取れなかった。今日戦勝国人の前に出しても日本女性の美点を感じさせるやうな文章が、悪かつたのであらう。

ここでも言及された『女性文章』は、川端が選んだ四〇篇に、川端の長い序文（前述、昭一八・一一・六附）と「六十頁の『選後抄』をつけて」、満洲文藝春秋社から昭和二〇年一月に刊行された。「四千部印刷したが、間もなく敗戦で、内地にはほとんど入つてゐないだらう。」とも、後年記している。<sup>(11)</sup>

『女性文章』序文には、「今日戦ひにつれて、芸術作品の世に出るも世に行はれるも、国家の要請に添うてこれを統制する、少数の人の取捨による傾きが強まってゆくのをみると」といった言葉も見え、「児女の文章などを選びながら、戦ふ国と人と思つてゐた私が、まちがつてゐなければ幸ひこの上ない。昭和十二年からの七年は、支那事変から大東亜戦争の年月であった」と、時代状況が強く意識されている。「このやうな選集を思ひ立つたのは、選に携はつてまもなく、昭和十二年の夏前か



らであつた」と記しているように、既に「婦人公論」昭和一二年七月号の選評にも、

いづれ私は入選作中の傑れたものを一冊の本に纏めて、世に問ひたいと楽しみにしてゐる。その本は女性の模範文集たるに止らず、今日の女性はかく思ひ、かく生きると、その真実を素直に伝へ、またまことに女性的なるもの温かさで、世人の慰めの書とならうかと考へる。(太字引用者、以下同じ。)

と、戦時下の「今日」を生きる「女性」と「世人」に思いを馳せていた。「新女苑」選評でも、

\*私の見てきた女性の文章も、本にまとめてみたいと、かねてから考へてゐる。(中略)今日の女性がかく思ひ、かく生きてゐるといふ一つの記念碑になるばかりでなく、世の人達の文章のためにも役立つであらう。私は楽しみにしてゐる。

私は一昨年の春頃から目が悪くて、かういふ選などするのは少々苦痛なのであるが、今しばらく今しばらくと思ひながら続けてみるのは、自分流にその仕事に意義を感じてのことである。また、毎月読む習ひの女性の文章に別れたくないといふ未練からでもある。(昭一五・一)

\*私はこの欄の選の仕事を、世の中のためにも自分のためにも、意義を認めて尊重してゐる。(中略)よい作品を一冊の本にまとめて、近く世に問ふつもりである。(同・九)

\*前からの私の望み通り、この欄の当選作中のいいものを集めて、『女性文章読本』と題し、実業之日本社から出版してもらふことになつた。十月頃まで信州にゐるので、その後鎌倉へ帰つて、編輯に着手するつもりである。(同・一〇)

\*掲載出来ぬ作品は私の手もとに残して、小品文集の出版の時にも使はせてもらふことにする。(中略)戦争以来、人の心

が荒れた、乾いたと言はれる、その反証としても、女性のよい心の現れた作品を多く見ることは、私ばかりの喜びではない。この欄の文章は短いけれども、これを書くことによって、日本の美しさを守り続けてもらひたい。(昭一七・六)

\*これまでも掲載もれの優秀作は、私の手もとに保存してある。この欄の文章を本にまとめる時、改めて読んでみたいと思ふからである。その本は『女性文章』と題して、今年中に編集を終へる予定である。(同・一〇)

\*この欄の文章を集めて本にする仕事も、ぼつぼつ進めてゐる。(昭一八・一)

\*本欄の小品文の選集を単行本とすることは、選者年来の希望であつたが、いよいよその編輯に着手した。(同・七)

\*『女性文章』の編集を終へて、出版部へ原稿を渡した。近頃は出版の事も非常に手間取るが、数カ月のうちには本になるはずである。私は自分の作品が出るよりも、楽しみなくらゐである。(中略)いい作品を本にまとめることは、最初からの計画であつたが、やうやく結実を見た。昭和の一般女性の文集として、私はこの本を誇りに思つてゐる。

私が小品文の選を始めてからと支那事変以来の戦争とは、ほぼ同じ年月である。戦時下に私はこの仕事を続けて来たわけだ。雑誌も甚だしく減頁され、小品文の制限枚数も五枚が三校になつた。(同・八)

\*私は信念と愛情とを持つてこの選を続けて来た。(中略)選をしながら私は日本の女の心の美しさ、けなげさ、やさしさ、こまやかさに触れ、慰められ励まされた。近刊の『女性文章』は、それを多くの人に伝へると思ふ。(「告別」同・一一)

と読者と共に自分自身を鼓舞するかのようになり、繰り返し言及している。戦局が悪化していく中での『女性文章』編纂過程において、川端の内の『女性的なるもの』というテーマが、『日本』というテーマと出会い、交錯していった様もうかがえるのだが、これについては後述(第六章一三)したい。

こうした中で、川端は一六年三月には、「新女苑」第一回文化講座で「女性の文章に就て」という講演もしている。五月号

の選評に「私は講演が不得手で、大体ことわつてゐるが、本欄の選者として読者に直接話すのも、一つの義務であらうかと思つた。」と書いているこの講座について、四月号に会員募集一頁広告が出ている。予定されている講座は、

「支那に於ける文化工作の現状」 大本營報道部長・陸軍大佐馬淵逸雄

「最近の世界情勢」 海軍省事務局第四課長・海軍大佐平出英夫

「文化と教養」(交渉中) 岸田国士

「題未定」(交渉中) 柳田国男

「女性の文章に就て」 川端康成

「読書の指導」 河上徹太郎

「今日の女性問題」 宮本百合子

「日本歴史の理解の仕方」 國學院大學教授秋山謙蔵

「独逸の女性生活」 アン・マリー・キーフア

とあり、「読者諸姉の時局認識の強化と新しい教養の獲得」を目ざし、三月二四・二五・二六日の毎日の午前九時より正午まで、定員は六二〇名であった。<sup>(12)</sup> 別の頁でも、「おそらく婦人雑誌としてもかうした種類の企ては始めて」だが、「成功すれば」第二回、第三回と催したい等記されている。翌五月号には講座の報告があり、二日目の川端の講演についても、「時間の足りなかつた事」は惜しかったが、「平安朝以来の文学に現はれてゐる男の文学と違ふ女の文学について」いろいろと話された、「文章には作り方といつては別になく、たゞ日々の女性の生活のあらはれとしての真実な、清らかな愛情のある文章が書ゝ

れる事を望んでゐる」とおつしやられた事が心に残つてゐる、先生の選ばれた「新女苑」掲載の「小品」数篇を東童の舟木敦子が朗読したが、「素直な読み方で感じがよかつた」（浅井百合子記）と記されており、川端が「平安朝以来の文学」の流れの中で一般女性の文章も含めた「女の文学」を捉えようとしていた点が注目される。講座は盛況だったようで、第二回（六月）は一五〇〇名の、第三回（十一月）は三〇〇〇名の定員で行われているが、<sup>(14)</sup>前章で述べたように「少女の友」の愛読者会でも一度だけ話した（昭一四・一〇）川端は、「新女苑」でも講演したのはこの一度のみであつた。

## 2 小説執筆―「大牡丹」「旅への誘い」「朝雲」―

「少女の友」からの卒業組・二股組も次第に増え、それに伴つて、「此の頃では少女の友よりも新女苑の方が好きにな」つたが、「川端先生と島木先生のもの」載せてほしい（昭一四・八）、「少女の友からうつゝた時は親しみにくゝて」困つたが「今は、全部が心の糧になる様で離せ」ない、「中里、川端両先生の文も」載せて頂きたい（同・一〇）といった投書も見られるようになった。前章で述べたように「少女の友」の看板作家となつていた川端だが、読者の要望に答えるように「新女苑」にも小説を執筆することとなる。かつて「婦人公論」で選をしていた時、小説の連載は「私の小説の文章を手本と見たり、真似したりする人が出来そう」で「寧ろ困る」、「作家といふものは絶えず自分の文章を厭ひ、それから抜け出ようとす一面」があるから「この選をするにも文章を教へるより、教はる気持が先立つてゐる」（「小品選評」昭一二・五）と記していた川端は、今回も当初は乗り気でなかつたのかもしれない。

最初の小説発表は②の「選評」開始翌月の③「大牡丹」（昭一四・一）だが、これは前年「オール読物」七月号に発表した「愛」の続篇で、書き出しは「愛」の末尾と重なっている。「オール読物」は、「全部読切」を売り物にした文藝春秋社の雑誌で、「読切傑作集」巻頭の「愛」に対し、「編輯後記」では「不思議な運命に操られた姉妹を描いて、異常な美しさにみち

た一篇」と言及している。また翌月の「愛読者通信」には、「純文壇巨匠の作品だけあつて、姉妹の心理を深く描いて抜き出  
てゐる」、「春の感覚の作家」川端の「軽やかな生。伊豆の踊子の匂ひ」、「愛」に於ける肌理の細かさ」といった賞賛の便り  
が幾つも紹介され、係からも「低俗な小説を排して、香気高い作品のみを御覧に入れたのが本誌の念願」、「高級娯楽雑誌  
の本領は、号を遂ふて益々あざやか」とコメントされた。文末にも「完」とあるように妹双葉の死によって閉じられた短篇  
として受容されたが、「新女苑」の続篇では無理心中前の姉妹の会話や双葉死後の場面が描かれた。題名の「大牡丹」は隣家  
の鸚鵡の名で、小説は「妹の犠牲によつて自分の愛も確かとなつた」と感じる姉美奈子が見た、死を前にした双葉の「永遠  
の処女の肌」と同じように「きれいな」大牡丹の羽毛の描写で結ばれた。こうした鳥への眼差しは既に「禽獣」（昭八・七。  
前述、第I部第一章注（65）等）にも見られ、川端の鳥に対する愛着は⑤の「犬と鳥」にもよく表れている。分載による作  
品発表の仕方は、「雪国」（昭一〇・一〇〜二二・一〇。後述、第八章四）・「千羽鶴」（昭二四・五〜二九・七。「波千鳥」を含  
む）・「山の音」（昭二四・九〜二九・九）等川端には珍しいことではないが、「オール読物」との読者層の違いを考えれば、  
前編の存在さえ知らなかったであろう大半の「新女苑」読者（或いは編集部も含めて）には、美奈子との婚約を破った羽山  
を中にしての、愛を巡る姉妹の心の綾は読み解き難く、同誌初掲載作品としては、読者も川端自身も満足できなかったのだ  
はなからうか。「編輯後記」で軽く触れられた程度で、「ペンルーム」では取り上げられず、また、新潮社版一六巻本全集（第  
一〇巻、昭二五・五）に重複部を削って二篇を合わせて「愛」として収めた他は、生前刊行されることもなかった。  
この作品の後、⑦「旅への誘ひ」（昭一五・一〇〜一九）の連載開始までには一年あるが、一四年七月からは「少女の友」でや  
はり題名に「旅」を含んだ「美しい旅」の連載を始めており、「新女苑」では④⑤⑥の小文を発表している。このうちグラビ  
アに寄せられた次の④⑥は川端全集未収録である。

④全集未収録文 a 「わが家の団欒」(昭一四・五)

家族は女房一人きりである。団欒といふほどの賑やかさはない。客を迎へて雑談するくらゐのものであらうか。前には小鳥の外に犬が十頭近くもゐて、それが準家族のやうなこともあつたが、今は頬白一羽だけである。そのうちに、女の子を四五人も貰つて、養うことになるかもしれない。

勤めはなし、仕事はどこでも出来るし、子供のない身軽さで、よく旅をする。一年のうち半ば以上は、鎌倉の家にゐない。さういふ旅を共にすることが、私の家庭の団欒と言はゞ言へるだらうか。

リュック・サックを背負つて歩いてゐるところでも写して貰へばよいのだが、これは鎌倉町内の頼朝公の墓前で、余り楽しさうな散歩姿でもないだらうと思ふ。春は伊勢から大和路、初夏は信濃、梅雨時は北海道、夏は軽井沢、秋は北京、冬は琉球と今年の旅の予定である。

⑥全集未収録文 b 「わが友」(同・八)

横光は長生きをするといふ衆評だと、誰かが来て話してくれた。実にうれしかった。さういふことを思ふより外、今更別に言ふこともない。

会つて話す折が少なくても、彼がゐてくれる、そのことだけで、相通じるといふ風である。しかし、私に会ふ人々は、必ずいろいろと彼の消息を伝へてくれる習はしである。

去年の春、片岡鉄平に誘はれ、三人で田山花袋の「田舎教師」の遺跡を巡つた。近頃でゆつくりと横光と会つた時間だつた。片岡とは夏と冬とだけ同じ土地へ行つて、隣人の交りをする折があるが、横光とは滅多にさういふこともない。

お互ひの文筆生活が始まると共に出来た友人、さうしてもう生涯断れるはずはない。私が尚精励すれば、後世の文学史家や愛好家の上にまで、生き続いてゆく友達である。

④は、同タイトルで尾崎行雄・阿部知二・川端・松野一夫・坪田譲二・里見淳・河上徹太郎・有馬生馬の順に各々の文章と写真が掲載されている。川端の文は、着物姿の川端夫妻が散歩中といった風情で、階段を降りようとしている写真に添えられている。「昭和初年代の川端康成には、自分は滅んでいく家系の最後の人間だとか、子供を育てるより犬を育てたいというような、ニヒリスティックな認識」<sup>(16)</sup>があつたとも言われているが、その犬もいなくなったこの時期、冗談めかしてであれ養女の可能性に触れている点は注意される。綴方の「幼稚な単純さ」は「まことに天地の生命に通ずる近道」で、「自分の子供を育てれば、一層近道であらうが、私は子供を持たぬゆゑ子供の書いたものを読むのである」(「文芸時評」昭八・七)とかつて記していたが、一八年五月三日に自分の血縁から政子(昭七)。従兄黒田秀孝の三女)を養女として入籍、戦後も夫人の流産らしきことはあつたが、川端は生涯実子を持つことはなかった。

また、川端を「永遠の旅人」と呼んだのは三島由紀夫だが(後述、第八章)、この年も、一月には夫婦で伊勢に、三月までは主に熱海に逗留して碁の観戦記を執筆、五月には桑原至誠の結婚式で名古屋に行き(前章参照)、吉野まで足をのびし、京都に滞在、この後も六月は塩原から日光、夏は軽井沢、秋からは再び鎌倉と熱海を往復する形で仕事をしている。尚、北京には昭和一六年に「満州日日新聞」の招待で渡満した折に行つたが(同前)、戦前の琉球へは行けなかった(後述、第七章)。

一方⑥は、同じタイトルで、大谷藤子・亀井貫一郎・木下孝則・岡田禎子・川端・佐藤信衛・東山千栄子・市河晴子の順に、それぞれの文章と写真が掲載されている。川端の文は、横光と碁の対局中の写真に添えられている。「お互ひの文筆生活が始まると共に出来た友人」としての横光・片岡については前述したが(第I部第一章二)、この前年四月にも行田、羽生へ三人で旅している。しかし片岡は一九年一二月に急逝し、横光も「衆評」に反して二二年一二月に病没した。終戦前後に相ついだ親友の死が、川端に与えた衝撃の深さは、「片岡鉄平の死」(昭二〇・三)・「横光利一弔辞」(昭二三・二)等に見て

とれる（後述、第八章）。

こうした小文掲載が続いた同年一二月号には、「新女苑新年号・予告 新連載三大長篇小説」として、里見淳「無法者」・中里恒子「生きる土地」と共に、次のような川端の予告文が各々の作者の顔写真も添えて紹介された。

全集未収録文。 「神秘（仮題）」（昭一四・一二）

仮りに題して神秘といふが、普通の意味の神秘なるものを書かうとするのではない。女性崇拜といふやうな意味を、この言葉によつて現はさうと考へたのである。前から私は神聖な女性、女性のうちにある聖なるものを書いてみたいと思つてゐた。その材料はまだ十分熱してはゐないけれどもとにかく着手してみよう。

日本の文学の女性は大体卑俗であつて、青春の泉となるべき聖なる高さが乏しいやうである。遺憾なことの一つである。私自身も今のところ、崇拜すべき女性を現実知らぬので、書きにくいと思ふが、試みのうちからなにか生れて来るかもしれない。

「聖なる高さ」という言葉を考える時、「婦人公論」「新女苑」それぞれの選評の初回に、「女性の殉情可憐な一面ばかり溢れて、純潔高貴の一面が乏しかつたのは、いささか残念」（昭一二・一）、「女性的なものが溢れてゐて、寧ろ悲しいばかり」（昭一三・一二）と飽き足らぬ思いも漏らしていたことが想起される。「女性的なもの」を讀者から享受し、その「進歩改善」に尽くすに留まらず、容易には得られぬ「純潔高貴な天上の魂」（『女性文章』序）を、作家である自らの筆で描き出したい気持ちが高まつてきたのが、この予告文から読み取れる。そこには既に、「永遠に女性的なるものは、実は男性のあこがれのな



かにあるのかも」しれない(同)といった予感もあったと思われる。

こうして昭和一五年に連載が開始されたのが、⑦「旅への誘ひ」である。作家川端の「崇拜すべき女性」像は作中の市河明子に担わされたが、それ故に明子は、作家上杉に「地に伏したいやうな悲しみ」を呼び起こす人物として描かれていることに注意したい。「明子の美しい手で体のどこかにさはつてもらひながら自滅してしまひたいやうな悔い」を覚える上杉は、「放埒無頼の徒」とも、「結婚の幸福」から追い出されて「この世の通行手形のない人間」とも、「なにか生まれながらの悲しみと、いつも癒されぬ心の飢ゑとに、追ひ迫られ通しのやう」とも自ら感じており、「みづうみ」(昭二九・一〇一二)等、戦後の川端文学を語る際のキーワードである《魔界》の先住民的側面が認められる。そして、彼に憧憬される明子もまた、書き初めに写経をし、「故郷をさがし歩いて」一人旅を続けていくところに、戦後の「千羽鶴」で「永遠に彼方の人」とされたゆき子―その「光のきらめく鞭」は、「闇の生きもの」「罪人」と自身を嫌悪する菊治を「真向から」叩いた―に繋がるだけでなく、流離を続けざるを得ない文子のような孤独や罪の意識も感じさせる。また、上杉の目に時に「奇怪」とも「狂気に近い」とも映る孤児園子は、「血なまぐさいやうに女くさい」が故に、上杉に女の聖性や魔性、「宿命のあはれさ」さえも無防備にさらけ出し、「もの難い女達からあなどられ」もする存在となっている。《女性的なるもの》への憧憬と賛美の果てに見えてきたのが《魔界》であったと思われ、前述の「地獄の底に落ちて天国にあこがれてゐる」(「文学の嘘について」という言葉共々、今後検討していく必要がある)。

先の小文④⑥だけでなく⑤にも旅への言及が見られるのだが、「旅への誘ひ」はそのタイトルや「箱根」「熱海」「蒲郡」「東海道」といった章の展開にも明示されているように、旅或いは旅愁といったことが作品の核となっている。当時の取材旅行の様は、川端秀子『川端康成とともに』(前述、第I部第二章注(32))の他、書簡や「コント」欄選評等でも触れられている。殊に注目されるのは、七月号の選評の「このごろ、古い旅行記などを少しづつ読み、昔の人がどういふ心で旅をしたか、

日本らしい旅はどうあつたかを、追々知りたいたいと思つてゐる」といった記述だが、「旅の小説」としての側面については、⑦の最後の「東海道」の章を取り込んだ「満洲日日新聞」の連載小説「東海道」（昭一八・七〜一〇）も絡めて後述する（第八章二）。作品そのものの完成度は高くないにしても、このように川端文学展開の上で重要な作品が、戦時下の「新女苑」に発表されていることを本章では指摘しておきたい。

読者の反響は「少女の友」の時のような熱狂的なものではなかったが、「だん／＼好きになります。川端先生のお作は不思議に今まで読む機会がありませんでしたので、かぢりつくやうに読んでひきずり廻されてゐます」（昭一五・八）、「淋しいやうな哀しいやうな苦しいやうな妙な氣持を味はせられました。今月のは特にそんなに感じましたのでどうしてかしらと考へたり致しました。作家論中の川端康成の世界、少しは解つたやうな氣がしますが、よくは解りませんでした」（同・一一）といった便りもあり、連載完結時には、美しく清潔で浪漫的雰圍氣がよかつたという声が幾つも取り上げられている。

翌一六年二月号の⑨「朝雲」は、同号「編輯後記」でも「川端氏の短篇は久しぶりに新女苑の小説欄を飾る佳篇」と触れられた。この作は、女性独白体を用いて、新任の女教師に寄せる女学生の微妙な思いを綴つた短篇で、文末に「（或る少女の手記より）」と記されている。かつて川端は、「特に若い女の人の書いたもの」の「甘く幼い美しさなど」は「材料として与へられた作家も到底生かして書けさうもない」（昭九・七「俗論」）と述べていたが、「婦人公論」「新女苑」で小品の選をする以前にも、「むすめごころ」（昭一一・八）や「女学生」（同・一〇。後述、次章二及び第Ⅲ部第二章一 **015 吉積妙子苑**）と**19**いった「早世した娘の手記に基づいたもの」という短篇を書き、「文筆家でない女性の文章」の「味はひを多少作中に残せた」と手ごたえも感じていた。戦争末期から戦後にかけては、「婦人雑誌の小品投書の欄外作をもとにして、私流に書き変へた」**20**という掌篇「さと」（昭一九・一〇）、「紅梅」（昭二三・四）、「足袋」（同・九）、「笹舟」（昭二五・四）等も執筆しており、こうした直接的な形で小品の選は川端の血肉になつていったと言える。

特に注目されるのは、馬場重行も取り上げて<sup>(21)</sup>いるが、太宰の短篇「女生徒」(昭一四・四)に対する川端の時評「小説と批評」(同・五)である。やはり読者からの日記を基にして成った女性独白体の同作を、川端は「太宰氏の青春は、「女生徒」に、女性的なるものとして歌はれ」ており、「女生徒を借りて、作者自身の女性的なるものすぐれてゐることを現した、典型的な作品」で、「太宰氏の青春の虚構であり、女性への憧憬である」、「いはゆる「意識の流れ」風の手法」が、「心理的といふよりは抒情的に音楽じみた効果ををさめてゐる」と高く評価し、「このやうな心の流れも、日本では枕草子や連歌以来古く、「今は太宰氏のほかに余り顧る人のない手法だが、私には魅力があるばかりでなく、真実の或る程度の求め方では、どうしてもかうなるところのものである。」とも述べている。こうした言葉は、そのまま川端の「朝雲」にもあてはまろう。手記については未詳だが、「朝雲」もまた、作家川端の内にある「女性的なるもの」と「或る少女」のそれとが幸福な形で出会い、溶け合った作と言え、新たな「意識の流れ」風の手法の実践でもあった。

読者の反響は、「ペンルーム」が昭和一六年一月号から「今日の女性の在り様についての」「読者自らの女性時評」(「原稿募集」昭一五・一二)としての「私達の問題」欄へ衣替えされた<sup>(22)</sup>ために不明だが、語り手の少女の「甘く幼い美しさ」に加え、かぐや姫をも連想させる未婚の教師の気高い美しさと憂いも語りによって透かし見られるこの作品は、戦後すぐに単行本『朝雲』(新潮社、昭二〇・一〇)の表題作となり、自選の細川書店版二巻本川端選集『下巻 心の雅歌』<sup>(23)</sup>(昭二三・一)にも、横光が「川端の心理状態が実によく出てゐるので、今後、川端論を書くものにとつては、好個の参考材料になる」と言ったと「あとがき」に特筆して収められた他、『二十歳(文藝春秋選書10)』(同・一一)や、生前刊行された四度の新潮社版全集(実質は自選集)の何れにも収められる等、川端自身の高い評価がうかがえる(かぐや姫に寄せる川端の憧憬については前述、第I部第二章四)。

以上の三篇は、「新女苑」読者層と同年代の女性―それは、「女の感情」は「もともと貧しい上に、ひからびやすく、硬く

なりやすい」（「文芸時評」昭九・八・一）と見た川端が、そうなる直前の束の間の時として最も好んだ年頃でもあった――を主要人物とし、その年齢特有の脆さ、美しさを描こうとした作品だった。それはまた、「硬い自分はいけない」として、「書かうとする材料の魅力、そして生命にとらへられること」で、「自分を虚しうしたところから、強い自分が生れて来る」（「選評」昭一六・八）とも考えていた川端にとって、書こうとする女性の《女性的なるもの》の魅力と生命に捉えられて自らの内なる《女性的なるもの》を最大限に開放させることで、男であり作家である自分の「虚飾」を剥いで生まれ直していく試みでもあったと言えよう。だが、「予告」に記したような意図の下に書き始められた「旅への誘ひ」も、作家川端が投影された、聖なる女性を崇拜する上杉が、女性を写し出す鏡の役割を越えて自我に苦しめられていくところに、川端文学を考える上での大きな問題点もあった。また、この作が、日本の古の旅人の心へ遡行する旅という趣を次第に強めていったように、次の「朝雲」も「枕草子や連歌以来」の日本の「意識の流れ」風の手法を意識したもので、創作の面でも、《女性的なるもの》に加えて《日本》のテーマが、戦時下の川端において大きな位置を占めてきたことがわかる。

### 3 「岡本かの子」に触れて――《東方の大きい母》を求めて――

選評を除けば、一六年八月号の⑩「岡本かの子」が、戦時下の「新女苑」に発表した最後の文章となった。これは、「思ひ出の作家」として、里見淳の「武郎を語る」等四篇と共に発表された回想である。

「旅への誘ひ」では、東海道を歩く明子の手にかの子の「東海道五十三次」（後述）があつたが、川端自身もこの作品を参照しながら取材旅行していたことが、前述の「旅中片信」からうかがえる。また、この前年二月の「文学の嘘について」（前巻）では一章を割いてかの子を取り上げ、「高いいのちへのあこがれ」が「艶な肉体をほのめかせて」おり、「なにものにも生命を流れさせる見方は、或ひは仏法の心でもあるのか、確かにこれは、東方の大きい母である。日本の心の深さを、西方

の人に知らしめるべき現代の作家」の、「最初の人ではないかと、私は常々ひそかに畏れをなしてゐる」と絶賛している。

川端の学生時代から面識があったかの子は、「本腰に小説を書き出さうとして、原稿を見せるやうに」（「岡本かの子」昭一四・四）なったという。「初めて見せた小説」に川端が早くも「感銘」を受けて藤田に取り次いだのは、前章で述べたように九年六月のことだった。「不安も苦悶も虚無も」「一種の安逸」であり、「文学的には死せる魂」だとして退け、「女流作家が自ら知らず見せる肌に、私が生きた人間を感じるのは、何の不思議があるか」（「文芸時評」昭一〇・八）と表白する川端にとっては、かつて自らが造型した「禽獣」（前述）の（彼）のような「不安も苦悶も虚無も」、全て踏み越えていかねばならぬものと映ったであろう。そうした中で、かの子文学は一つの指針ともなっていたと考えられる。

だが、「文学の嘘について」発表直後の一四年三月にかの子は急逝し（一八日、公表は二四日）、川端は追悼文「岡本かの子」（前出）に続いて「岡本かの子序説」（昭一四・七）も発表、遺稿「女体開頭」を解説文を添えて紹介したのは翌一五年の二月、「旅への誘ひ」連載開始の翌月であった。この「岡本かの子序説」は、次のような言葉で結ばれている。

今は岡本さんを私の文学の先達ともし、師として、同じ方向の道を歩もうとするのである。私が久しく求めていまだ到り得ない境地を岡本さんに見るのである。岡本さんの血脈が、自分にも貧しいながら通るのを、かねて感じてみた私は、私の将来の読者としての岡本さんを失ったことも、また取り返しが見つからない。

「旅への誘ひ」執筆時の川端には、「東海道五十三次」（初出は「新日本」昭一三・八。『老妓抄』（中央公論社、昭一四・三）所収）のみならず、かの子の「女性による女人崇拜の芸術」、「高貴な魂のあこがれ」（「女体開頭」について）昭一五・一二が強く意識されていたであろうことは想像に難くない。かの子文学に冠した『東方の大きい母』という概念は、『女性的なる

もの」と《日本》を止揚し得る概念ではあったが、これに比せられるような「崇拜すべき女性」は、「旅への誘ひ」では十分に像を結ばなかったし、「朝雲」でも「聖なる高さ」はやはり少女の憧れの彼方に浮かび上がっていく形でしか描かれなかったのである。

「あなたはどこにおいでなのでせうか。」——この呼びかけが始まる戦後の「住吉」連作は、<sup>(24)</sup>「もはや生にやぶれ果て死も近い」と自覚した「私」の四通の手紙という形式をとっている。「あなた」とは「遠い空にただよふやうな女性的なるもの」なのか、虚空に放ったやうな手紙の中では、満たされぬ《母恋》故に女性遍歴を重ねて「地獄」の底へ落ちていったと感ずる「私」の過去が、断片的に、だが衝撃的に明かされていく。敗戦後間もなく発表された三部作（昭二三・一〇、二四・一、同・四）では、先の呼びかけは結びの部分でも繰り返されたが、二〇余年の時を経て書き継がれた「隅田川」（昭四六・一一）では、「それも今はむかしとなりました」という言葉に置き換えられ、川端最後の小説となった。

昭和四七年四月一六日、川端は逗子のマンションで自殺し、鎌倉の自宅書斎には冬樹社版かの子全集の推薦文が書きかけのまま残されていた。これはかの子についてこれまで書いてきた文章を瀬戸内晴美（前述、第二章八）が抽出したもので、「このやうに大きく豊かで深い女人は、今後いつまた文学の世界に生まれて来るだらうか」、その文学は「生命の賛歌」であり、作品の女人は「永遠の恋人と母性の象徴」で「宗教じみた後光を放つ」といった言葉が見える。<sup>(25)</sup>

その美女が死や滅びを思はせるほどの、生命の極光を放つこともあった。かの子のたいていの小説の頂点には、突然天がひらけたやうな電光がはためいてある。それは凄艶な戦慄であり、崇高な啓示である。また、

遺されていた原稿はここで筆が止められているが、川端にはどのような思いが去来していたのであったか。かの子について自身の書いた文章を読み返しながら、《東方の大きい母》は断念した幻影として浮かんだのであろうか、「素肌で巻かうとして、直ぐそこに降りて来てゐる」（『雪国』）姿が見えたのであろうか。川端の晩年については、第九章二で改めて検討したい。

## 注

(1) 一八年以降、川端が同誌に執筆したのは、筆者の調査では、戦後の「広島・長崎」（昭二五・八。後述、第九章一）の一文に留まった。拙文「新資料・全集未収録文―「広島・長崎」他三篇―」（川端文学研究会編『川端文学への視界12』教育出版センター、一九九七・六）では、同文を紹介し、戦後の同誌での川端関連記事も列挙して解説した。

(2) 文壇登場の当初から評論・時評を執筆していたことは第I部で述べたが、「十幾年、馬鹿げた根気よさで書き続けて来た文芸時評をびたりと休んでから、三年になる」と同「文芸時評」に記している。

(3) 同号の「編輯後記」には、「十月三十一日を以て内山基は「少女の友」主筆に専任し本誌主筆には新に神山裕一が就任した」とある。主筆以外にも、「四年間「少女の友」にゐて月から「新女苑」に關はることになつた（K）」（「編輯後記」昭一四・六）といった姉妹誌間での編集部員の異動があつた。

(4) 大塚豊子「新女苑」（『復刻日本の雑誌』講談社、昭五七・六）

(5) 遠藤宏子「新女苑」（『日本児童文学大事典 第二卷』、前章注（7））

(6) 「文芸欄規定発表」（昭一一・一、二）によれば、「コント」は「一人一篇、四百字詰原稿用紙五枚以内、題は自由、入選作品には、賞金を呈す」、「ペンルーム」は「一人一篇。用紙は葉書又は葉書大の厚紙。内容制限なし」、「編輯局選」とある。

- (7) 昭一三・七〜一四・六。「編輯後記」でも「両氏の文学の反面を知るにふさわしい記事」と触れられたこの対談は、横光全集未収録であり、十重田裕一が「国文学」(一九九二・三)にて紹介している。翌月の「ペンルーム」には、「両先生の興味あるお話をお側で直接伺がったやうでうれしかった。多数の座談会よりも私はいいと思ひます」等の便りがあり、以後八月は片岡鉄兵・阿部知二、九月は菊池寛・杉山平助の対談が掲載された。
- (8) 川端は、芥川賞には第一回(昭一〇)から銚衡にあたっている。『日本小説代表作全集』(小山書店、昭一三・一〇)の序に川端は、「国を挙げての戦ひの最中に、この第一巻を出し得るといふことも、種々と思ひが深い」と記している。
- (9) 一六年一二月は休載。一七年一月、一八年五月は編集局が代選。
- (10) 「婦人公論」文章欄「選の言葉」(昭三二・一)等でも言及あり。
- (11) 「婦人公論」文章欄「選の言葉」(昭三〇・一二)。
- (12) 「資格」は女性に限る、「会費」は一円、「会場」は有楽町の産業組合中央会館六階講堂、午後は要所見学、とも広告されている。
- (13) 講演予定者・題目の一部に差し替えがあった。一日目は窪川稲子「女性の問題」、馬淵「支那における文化工作について」(改題)、秋山。二日目は平出、河上「読書について」(改題)、川端。三日目は独逸大使夫人秘書キーファ、帝大教授鈴木文助「食物と科学」、柳田「たのしい生活」の講座で、二日目には「音楽と映画の午後」も催された。「開会の辞と共に今後かうした講座を続けて開催することを約した」神山主筆は、同号の「感想」で、「今後講師の話の性質によつて時間の長短を決めた方がよいだらう」と記している。
- (14) 同年六、七月号には第二回の、一一月号には第三回の予告あり。それぞれの会場は九段下軍人会館、共立講堂。
- (15) 創刊号に短編「雲の柱」、翌々月号にも「毛皮」を発表。川端の少女小説の下書をしていたことは前章で述べた。



- (16) 川嶋至 『天授の子』 書評（『読売新聞』 昭五〇・七・二八）。尚、犬との関係については、拙稿「『文壇小景』に見る川端康成」（前述、第二章注（32））を参照されたい。
- (17) 拙稿「『千羽鶴』のゆくえ」（前述、「はじめに」注（5））で考察した。
- (18) 河上徹太郎 「現代作家論 川端康成の世界」（昭一五・六）。
- (19) 改造社版川端選集第四巻 「あとがき」（昭一三・六）。
- (20) 「独影自命」（昭二五・七）。他に「ざくろ―少女の手記より」（昭一八・五）や「五拾錢銀貨」（昭二一・二）。文末に「H女の手記より」と明記）もあり、森晴雄 「川端康成 「五拾錢銀貨」論―平島愛子 「特賣場」に触れつつ」（『芸術至上主義文芸』一九八九・一一）は、下敷きになったと推測される「新女苑」コント欄入選作との比較を行っている。
- (21) 「川端文学小論―『朝雲』をめぐる」（『陽と波』 昭六〇・六）。
- (22) 翌昭和一七年から、「少女の友」の「友ちゃんクラブ」も「生活教室」に改められたことは、前章で述べた。
- (23) 「母」（大一一・三二）、「禽獣」（昭八・七）、「雨傘」（昭七・三三）、「朝雲」、「死顔の出来事」（大一一・四）、「イタリアの歌」（昭一一・一）、「離婚の子」（昭四・六）、「抒情歌」（昭七・二二）、「笑はぬ男」（発表年月未詳）、「散りぬるを」（昭八・一一）（九・五）を収録。
- (24) 拙稿「川端康成「住吉」連作序説」（前述、第I部第二章注（7））を参照されたい。
- (25) この未定稿を分析したものに、長谷川泉 「時空を超越するもの」（『川端康成論考』一九九一・一一、明治書院。初出は「解釈」昭四七・七）がある。かの子に関しては、拙稿「川端康成と岡本かの子―『いのち』をめぐる」（田村充正・馬場重行・原善編『川端文学の世界 第四巻』、勉誠出版、一九九九・五）を参照されたい。

第五章 「ひまわり」に見る戦後の川端康成―《少女期の終焉》と少女小説の終焉―

「私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。現実なるものもあるひは信じない」（「哀愁」昭二二・一〇）との川端の言は、これまでも度々引かれてきた。このように敗戦後の皮相を否定した川端は、戦中に書き継いだ「雪国」を同月にひとまず完結させ、翌昭和二三年には、五〇歳を「再生の第一年」として一六巻本川端全集編纂（昭二三・五〇二九・四）に着手し、これと並行して少年時代の日記・書簡・草稿等を取り込んだ「少年」（昭二三・五〇二四・三、二七・九）や後述の「住吉」三部作（昭二三・一〇〇二四・四）も執筆し、二四年には「千羽鶴」（昭二四・五〇二六・一〇）、続篇「波千鳥」（昭二八・四〇二九・七）、「山の音」（昭二四・九〇二九・四）の分載を開始して、以降の多作期に入ってしまった。<sup>(1)</sup>戦前戦後の断続を見るにしろ、不変を言うにしろ、重要である筈のこの時期の研究は、にもかかわらず、一部の作品に論が集中しがちで、十全に為されてきたとは言い難い。

鎌倉文庫の創立（昭二〇・九）に始まる川端の戦後は、ペンクラブ会長（昭二三・六就任）としての実務の他、少年少女文学の改新にも力が注がれた。<sup>(2)</sup>戦前も綴方や少女雑誌の作文の選を行っていた川端は（前述、第二〇四章）、敗戦直後、「どん底に落ちた日本を美と力に満ちた国に作り上げて行かねばならぬ今の子供たち」（「創刊のことば」昭二一・四）に向けて創刊された「赤とんぼ」では編集顧問となり、「敗戦後の改革に綴方は泉だ」（「選の言葉」同・六）との信念を持って綴方の選に当たった。同誌廃刊（昭二三・一〇）後は、他の児童誌で選を継続したに留まらず（後述、第六章）、しばらく筆を執っていないかった少女小説も発表し始めているが、これは、「良心的な児童雑誌」の相次ぐ廃刊に、「子供の読物も俗悪なものがかへつてはびこつてゆくやう」との危機感を募らせ、「子供の読物のよい制作、よい批評は、今日重要な問題」と訴えたのに<sup>(3)</sup>も呼応していた。その主な発表舞台として選ばれた「ひまわり」は、中原淳一のヒマワリ社から、季刊誌「ソレイユ」（昭二

一・八創刊。二三年から「それいゆ」に続いて昭和二二年一月に月刊誌として創刊され、中原の美学に基づいた独特な誌面で半年後には二〇万部を発行し、少女雑誌界屈指の存在と言われた。

第三章では、川端が「少女の友」での最初の連載の挿絵に中原を指名して以来、川端・中原コンビによる連載が同誌の看板となったこと、軍部の圧力により中原が同誌を降ろされ、後に川端も同誌での作文欄の選を戦時の軍官に禁ぜられたこと、そこには反体制とまでは言えぬにしても共に時流とは相容れぬものがあつたことに言及した。「解釈と鑑賞」の川端特集（一九九七・四）でも「川端文学における聖少女の系譜とその特徴」という一項目がたてられたように、《少女》或いは《聖少女》を重要なモチーフとする川端と、「少女」という語感に特別な情感を与え、「少女の世界」という未開の分野を開拓しえたと評される（田辺聖子「監修のことば」<sup>4</sup>）中原との関心は、《少女》という一点で深くクロスしていたと思われる。「少女の感傷にこびるような」少女雑誌の編集を嫌った中原と同じく、川端も「感傷」については否定的であつたことも前述した（第一部第二章五）が、《少女》をめぐる両者の感性や志向に近いものがあつたろうことは、後述するように戦後も自作の挿絵に中原を指名し、その雑誌に協力していった川端自身が、誰よりも知っていたのではなからうか。

「ひまわり」に発表された川端作品は四作あり、うち連載三篇というのは同誌で最多である。「生い立ちや宿命にからまる屈折した心理や苦悩が書かれるようになった」（羽鳥「川端康成解説」<sup>6</sup>）との評価もある一方で、前章で述べたように三七巻本全集には戦後の少年少女小説は一切収録されず、研究は著しく遅れている。<sup>7</sup>少女を讀者とし、少女を描いた川端の少女小説の考察は、その《少女》観を探る為にも有効であろうが、前述したような下書き問題等厄介な面もある。本章では、個々の作品に対して現時点での筆者の判断も示しつつ、中原との交点にも留意し、全集未収録文も踏まえて、「ひまわり」での川端を眺めわたしたい。それは、少女小説のみならず、川端の戦後を考える一つの手掛りともなっていくかと思う。

川端が同誌に少女小説を発表したのは昭和二四年以降だが（後述）、それ以前にも同誌及びひまわり社と浅からぬ関わりが

あった。まずは、それらについて見ておこう。

### 一 巻頭文「美しい言葉」と懸賞少女小説選（昭和二十二年）

早くも創刊号（昭二二・一）には、川端を選者とする懸賞少女小説の募集が為されている。二〇枚前後で、「少女の皆様でなくては書けぬやうな清新な瑞々しい作品」を期待とある。当初は、一月三〇日〆切、四月号誌上で発表とあったが、結局発表は七号（同・一〇）の付録誌上まで持ち越された。この間、三号（同・四）の巻頭には、次のような川端の文章が載せられた。

#### 全集未収録文 a 「美しい言葉」（昭二二・四）

うちの娘がこの春は三年生になりますから、F子さんはこんど五年生ですね。いや、今年から教育の制度が変わって、女学校の五年級というものはなくなつたんですね。うちの娘が義務教育の終りの年で、F子さんが高等学校の二学年というわけですね。／教育の制度や学年の名称が変わるだけではありません。日本の教育の気持と仕方が変わります。今年度の新しい教科書をごらんになつたら、その変わり方にきつとびつくりなさるでしょう。／私も実は新しい国語教科書を作るのに相談を受けた一人です。そのために文部省え通マツいました。文学者としてむしろ最もおどろいたことは、中等学校の新しい国語教科書の大半を、文学者の文章が占めているということです。文学者の責任を感じないわけにまいりませんでした。／この国語教科書を習う一人の女学生として、F子さんはこの教科書の言葉と文章とをどうお思いですか。一人の文学者としての私は、このなかに美しい文章、確かな文章の少いことを情けなく思いました。文部省の編輯官のせいではありません。現在の日本の国語がこうなのです。現在の日本の文章がこうなのです。これでも前の古い教科書よりはよほどよくな

つているのですが、私どもがていねいに読むと、これを国語の教科書、文章の手本として、少年や少女に与えなければならぬことに悲しみを覚えます。／このようなことは国語の教科書だけではないでしょう。また学校の教育だけではないでしょう。今の日本のすべてのことがそうだとと言えるのです。私たちはうちの娘にもF子さんにも、信頼するに足る国語の教科書一冊さえ、今は与えることが出来ないのです。／私は日本の国語を美しくするために働きたいと思えますけれども、その力がありませんし、そう長くない残りの生涯はほかの仕事に追われて過すでしょう。Fさんたちの時代の人々で日本語を改めてほしいと望みます。美しい言葉、確かな言葉、真実の言葉で、話したり書いたりするようにならないと、日本は無駄な骨折や心暗い迷いがなお続くでしょう。／日本の自然の春のような言葉と文章との本を、私はFさんにもうちの娘にも見せたいと思いますが、今はめつたにありません。御自分の使う言葉、本で読む文章を、よく批判して考えてみて下さいと言うだけです。美しい日本の言葉と文章とがFさんたちの未来にありますように。

敗戦を機に、「日本の国語を美しく」という思いが「文学者」川端の中でより切実となっていたことが、この一文からもうかがえる。読者の小品・作文の選に、川端が戦後一層精力的に取り組むようになったのも、一つには「美しい日本の言葉と文章」を育てる為であったろう。新しい国語教科書に關与したこの昭和二四年には、「白鳥」に「わが愛する文章」（昭二四・一〇二五・七）を、「文芸往来」に「新文章講座」（昭二四・二〇一〇）を連載してもいる（後述、第六章）。「ひまわり」での小説選も、まずはそうした流れの中で考えられようが、「女学生の「小説」を集めて読む」のは自分にも初めてで「疑問と期待」を持ったと「選の言葉」（昭二二・一〇）で率直に述べているように、「赤とんぼ」の選等の心持とは異なる面があった。「少女は人に歌はれたり描かれたりするもので、少女みづから自分を歌ったり描いたり出来ないもの」とは大正末年の「少女と文芸」（「若草」大一五・三）の言葉だが、少女達の小説の選をして改めてそう実感したのではなからうか。「生涯に不滅

の少女が一人書ければ、それだけで終つてもいいではないか」（『自慢十話』昭三七・八）と後年記しているが、再び少女小説を書き始めたのにはそうした気持ちもあつたかと思われる。

## 二 「ひまわり・らいぶらり」誕生、川端責任編集「婦人文庫」復刊（昭和二十二年～二十六年）

中原装幀によって川端作品の幾つかがヒマワリ社（のちに「ひまわり社」に改名）等から刊行されたが、それらは「ひまわり」誌上でも積極的に紹介されている。創刊号（昭二二・一）の「読書案内」では、『学校の花』（湘南書房、昭二二・八。「少女倶楽部」初出時の挿絵は落谷虹児）を取り上げ、同じ作者の「乙女達を主題にした」他の作品も読むといい、中原の装幀は「此の内容にふさはしい、美しく抒情的なもの」と記されており、増補版も中原の装幀で二度出ている（昭二二・六、昭二五・一）。「ひまわり」第二号（同・二）の「読書案内」でも『乙女の港』（ヒマワリ社、昭二二・一二）を紹介、第四号（昭二二・六）の「編集室だより」では「ひまわり・らいぶらり」の誕生が報じられ、翌二三年六月号にはその一冊として短篇集『女学生』の広告が載せられた。「とくに少女を主題にした物語」を自選したという同書の表題作「女学生」（前章二二で言及）はこれが初刊で、「若草」（昭一一・一〇）での初出時に、「匂ひ高い筆で、めづらしくも同性愛を描」（編集後記）いたものとして、読者の頁「座談室」でも評判の高かった作である。一二月の村岡花子「今月の読書から」で同書が紹介されたが、同年一二月に「近日発売」とある『花日記』（前述、第三章二三）も一二月に刊行された。翌二四年一月号（同号に後述の小説「椿」を發表）裏表紙の「ひまわり・らいぶらり」の広告では、「はじめて一冊の単行本として刊行をゆるされた」と『花日記』を紹介し、二・三月合併号には「全部淳一先生の美しい装幀」、「早速売り切れ再版」とある。同書は「ひまわり読書サークル」（昭二五・七）でも取り上げられ、「短い一生の内」、「少女と云う時期ほど幸せな時はない」、「出来事の一つ／＼が、私達の生活に近いことなのだけれど、まるで私達のそれとは異なつた様な、それでしかも思い当たる点」が

多いといった声が、読者である少女の側から提出されているのも注目される。「ひまわり・らいぶらり」の両書の広告は、以降も度々同誌に掲載されている。

中原装幀の、或いは中原のヒマワリ社刊行の川端本が出版されたのみならず、「ひまわり」二五年四・五月合併号には、川端責任編集による「婦人文庫」が「ひまわり」「それいゆ」の姉妹誌として発行されるとお知らせが出た。これは、川端が「どうせ出すなら婦人雑誌にしよう」と発案して二二年五月に鎌倉文庫から創刊した雑誌の復刊だが、「ひまわり」では復刊に至った経緯等は触れられていない。「親しみのなかに女性の精神をたかめ、潤いのなかに、生活とのつながりを求めていこうとした女性雑誌」とも評されている鎌倉文庫版は、「幾多の変遷」を経て川端が編輯に当たり、更に新しい組織になったという。<sup>(11)</sup> 同誌に川端は短篇や連載小説を発表した他、座談会（昭二一・五「新しき女性の再建によせて」、同・六「結婚と道徳について」）に出席、グラビアやアンケート（全集未収録文b「女性に薦める図書」<sup>(14)</sup>）にも協力し、小品の選も行ったが、鎌倉文庫倒産に伴って二四年八〜一二月合併号で廃刊となっていた。

一方中原は、鎌倉文庫版「婦人文庫」第三号（昭二一・七）から表紙を描いた（一時中断あり）他、口絵やオフセット頁のスタイルブックも度々担当していた。そうした縁もあって、中原のヒマワリ社から同誌が復刊されることになったのである。ろうし、「ひまわり」「それいゆ」の姉妹誌として復刊するにあたっては、川端の側にも中原やヒマワリ社及び両誌に対する強い信頼感があつたと言える。既に二四年一月に、川端は推薦文「少女雑誌「ひまわり」について」を書き、「社会万般のことと同じく、混乱し、荒穢し、俗化してゐる」敗戦後の少女の読物の中にあつて、「ひまわり」の美しさにははつきり特色がある、「かねてから敬意を持つてゐる」中原は、「今日の荒野に美しい火をともしてゐる一人」と支持を表明してもいた。

「婦人文庫」刊行に際して「ひまわり」二五年八月号では、「川端康成先生の責任編集で、女流文学者会の先生方が協力して下さる女性文芸雑誌」と予告された。川端はその前月に後述の②「歌劇学校」の連載が終了したところで、一二月に「婦

人文庫」が復刊した。その後に③「万葉姉妹」の連載が始まり、「ひまわり」(昭二六・三)には、「万葉姉妹」の川端先生が編集顧問で「270頁もある、豪華な新しい、女性教養季刊雑誌で、女流文壇への登龍門」と、「第一号只今発売中」の「婦人文庫」の広告が掲載された。この復刊された「婦人文庫」でも、川端は引き続き読者文芸欄の小品の選に当たっている。復刊号の若槻茂「後記」では、「四カ年に亘る誌歴」を顧みて、鎌倉文庫専務取締役だった川端と編集次長北条誠等によって発足したのと前後して、同誌を編集するために若槻も鎌倉文庫に入社し、早々に表紙絵を中原にお願いすることにしたので、「ひまわり社」から復刊されるのは「感慨更にあたたなものがある」と触れ、その末尾では特に読者文芸欄に対する誇りと抱負が記されている(選については第六章で後述。若槻については第Ⅲ部第二章「043 宗岡薫宛参照」)。

このように「婦人文庫」の創刊・復刊に深く関わったところにも、「新しい女性の再建」に寄せる川端の期待と願いは見て取れる。前述の座談会(昭二一・六)の席上で川端が、幸福も道徳も「家庭」が単位といった考えが日本の婦人に根深いのは今後の問題点とする一方で、「生活の形式のアメリカ化を憧憬するのは、いよいよよみじめ」と発言しているのも注意される。だが、ヒマワリ版「婦人文庫」も八月刊行の第二号で終わったようである。<sup>(15)</sup>

### 三 少女小説の発表(昭和二四年〜二七年)

以上のような幾重もの中原と、或いはヒマワリ社との結ばれの中で、昭和二四年以降は川端の少女小説も、次のように連続的に発表されていく。「ひまわり」に発表したこれらの小説について、当時の反響も含めて順に考察していきたい。

#### ① 二四年一月

短篇「椿」

#### ② 同年六月〜昭和二五年七月 連載「歌劇学校」



③ 二六年一月〜二月

連載「万葉姉妹」

④ 二七年二月〜一二月

連載「花と小鈴」(この一二月号を以て「ひまわり」廃刊)

1 短篇小説「椿」―養女だった妹―

①の短篇は、前月号の「新年号予告」(一二月月中旬発売とある)に小説「椿」とタイトルのみが記された。原稿用紙にして二〇枚足らずの三段組三頁に、中原の挿絵三葉が添えられた口絵小説は、娘を返してほしいと実母が言ってきたのを契機に、妹文子が養女だったと知った姉鈴子の視点から描かれている。十一月初め、「文子の幸福」は「この家の子でない」と知ったその日に終わってしまうと案じた鈴子は、裏庭の椿の蕊が思いがけないほど成長していたのに驚き、文子の中にも「思いがけないなにかが成長しているかもしれないと考えてみた」。正月三日、咲いたばかりの椿を鈴子は文子に手渡したが、その二日後に、文子は父から聞いたらしく、熱を出す。これまで養女と知らなかったからこそわがままで押せた文子が、知った上で、涙を落としそうになりながら鈴子に爪を切らせる。この一週間、父母と姉が心配して部屋へ様子を見に来てくれた回数  
を文子がキャラメル(16)の空箱に書いていたと知り、鈴子が「胸を突かれた」ところで作は閉じられている。

「血による結ばれを疑わなかった家庭」―だが真実を知らなかったのは文子だけだった―の解体によって、文子は自分が注がれてきた愛の重さも知る。姉とママレイドを作るのにも幸福を感じるようだった少女文子の一途さ、はりつめた美しさが、既に大人の眼を持ってしまった鈴子の眼差しに浮かび上がり、一気に迎えてしまったその《少女期の終焉》が、椿の開花や、或いは切られた爪、空になったキャラメル(17)の箱にも象徴的に重ね合わせられつつ、切なく、鮮やかに映し出されている。

この小説は『陽炎の丘』(東光出版、昭二四・六)を初め種々の刊本に収められ、先の羽鳥や与田準一・古谷綱武等何れも

寸評だが高く評価している。ごく短く、その完成度からしても他作家の関与は考えられない川端独自の作品と考えられる。

## 2 連載小説「歌劇学校」―束の間の《少女》の時／歌劇学校という場―

「椿」以外の三作は全て連載小説であるが、最初の連載となった②の前月号（昭二四・五）では、川端作・中原絵による「新連載 宝塚日記」、「乙女の港」でなじみの川端先生が久し振りに美しい長篇小説を執筆と予告され、次のような川端の文章が載せられた。

### 全集未収録文b 「作者の言葉」（昭二四・五）

題は仮り宝塚日記としておきます。変わるかもしれませんが。／宝塚の歌劇の女生徒のことを書くのですが、宝塚になるべく迷惑のかからぬように書きたいと思えます。皆さんの方でも、事実の話ではなく、小説として読んで下されれば幸いです。はつきりしたモデルもありません。また実際の宝塚とはずいぶんちがっているでしょう。／歌劇学校という背景を借りて、一人の少女を書こうとしたものです。歌劇学校は宝塚しかありませんので、露骨な題名にしましたが、主眼は少女の心理あるいは感情を書きたいだけです。／時も十年以上前のつもりです。

同号「編集室から」でも、「乙女の港」の作者の「巻頭を飾る」名作と触れられ、翌六月号から「歌劇学校」と新たに題して②の連載が始まった。同月のグラビア「川端康成先生を訪問して―小鳥の訪れる日に」には、執筆の手を止めて裏山の鶯に耳を傾けた川端が、机上の青銅の「ロダンの手」を見つめたまま、日本の小鳥は好い声だ、小鳥でも自分の啼声をいろいろ研究する、少女も小鳥を飼うといい、愛情を持つことが少女を一等美しくさせるのだからと静かに語ったとあり、「禽獣」を

始め小鳥を題材にした小説を幾つか書いた川端が（前述、第三章）、この年も掌篇「かけす」（一月）を発表していることや、「住吉」三部作の「しぐれ」（同）でデュウラアの使徒や死者の手が連想によって語られていたことも想起される。

同号「編集室から」でも、いよいよ川端の長篇小説が始まった、「宝塚の或る時代を舞台」に、一人の少女の微妙な心の動きと美しい物語とは、中原の流麗な挿絵と共にあなた方を引きつけるだろうと言及された。中原の回想にも、この挿絵は特に川端の希望があつて書いた、少女小説の在り方に新風を注いだものだったとあるが、連載当初から同誌が力を注ぎ、注目された作品と言える。同誌に宝塚関係の記事が多かつたことは、先の田辺や皆川美恵子「ひまわり」と「ジュニアそれいゆ」<sup>(19)</sup>も指摘しているが、八月号からは宝塚の思い出を綴つた葦原邦子（中原淳一夫人）の「忘れじの歌」の連載も始まり、「歌劇学校」とともに来月もご期待下さい」（「編集室から」と、その相乗効果が狙われていた。

だが新連載は「この「歌劇学校」はいまから二十年ほどまえのものがたりです」と、予告より更に一〇年も遡つた時代設定が為されたように、宝塚は「背景」として意識的に距離がとられ、女学校時代の友人テレジア美奈子へ宛てた友子の一通の手紙から成る書簡体小説―改題前には日記体であつたものが、改変されたと推測される―となつた。友子は「父の苦勞を軽く」との思いもあつて「独立」を望んで歌劇学校に進学して、寄宿舎に入ったのだが、踊りに打ちこむべく学校を出る山城さんと、結婚に入つていく波早さんと「歌劇少女の未来の、非凡な道と平凡な道」を見て、気持ち揺れ動いていく。作中でも、「少女歌劇」って「まあ温室みたいなもの」と語らせているように、タイトルとなつた「歌劇学校」とは、日常性から隔離されて束の間の《少女》の時を過ごせる特別な場であつた。

先の皆川は、「ひまわり」の求めた少女像が、宝塚で展開されていた汚れなき少女像と共通していた点に注目し、「物語世界を生きる半ば幻想的な少女」、「永遠の少女の結晶体」を「丹念に挿絵がとらえ、文章をよりふくよかで鮮やかなものとしていた」と述べているが、《少女期の終焉》を迎える直前に「永遠の少女の結晶体」として筆を止められた友子は、「舞台生

活のひとたちが、配役を争うなかについて、競争も嫉妬もなくと祈る、それだけで私はもう敗北者の運命かもしれないと思いますすけれど……」というような少女として描かれていることにも注目したい。そうした「汚れなき少女」として在ることは、浜野卓也「虹」と少女小説「歌劇学校」<sup>(20)</sup>が指摘したような、生へのエネルギーの希薄さに繋がる一面もあった。浜野はこれを共通項としながら浅草物の「虹」との比較考察をしているが、時代設定からすれば同時代の「浅草紅団」と「歌劇学校」を舞踊小説として並べて読み直すことも有効であろう。宝塚に関しての積極的な題材提供があったことは後に明らかになったが、《少女》<sup>(21)</sup>をめぐるモチーフには川端ならではのものも感じられる。少女達の心を掴んだこの作は、連載終了間もない一二月に、中原の装幀・挿絵によりヒマワリ社から刊行され、以降度々同誌に広告が出た。後にはポプラ社からも刊行されている。<sup>(22)</sup>

### 3 連載小説「万葉姉妹」―「あなたとわたしはおなじよ」／「住吉」三部作から「古都」へ―

②の「歌劇学校」の好評に支えられ、「婦人文庫」復刊前後の動きも一段落したと思われる二六年一月号から③「万葉姉妹」の連載が始まった。②連載中の一〇月号「編集室より」には、川端がひよっこ編集部に来て今度短篇小説を書こうと約束してくれたとあるが、一二月号には「題未定」として、川端の新連載が始まることのみ予告された。

この「万葉姉妹」については、川端の没後に佐藤碧子『灌の音 懐旧の川端康成』（東京白川書院、昭五五・一二）が「古都」（昭三六・一〇・八〜三七・一・二三）に触れて、「千重子とは、あたしの次女の名前である。終戦後に手伝った少女小説「万葉姉妹」の姉妹が全く別な人生を送るストーリーイが底流になっているとも思われた」と記しているが、どの程度「手伝った」かは明らかにしていない。<sup>(23)</sup>

同書によれば、碧子（大正元（一九一二）〜二〇〇八）の実父は零落して佐藤家の差配の手伝いなどしていたが、その死

後、一歳半のひ弱だった碧子は佐藤家に預けられ、身重の実母は帰郷して妹を産んだ。父の唯一の遺品として、妹が嫁ぐ前に（昭一五）渡してくれたのが死の一週間前まで一〇年間書き続けた日記で、これによって養女になった経緯を知ったとのことである。「万葉姉妹」では、こうした碧子姉妹の生い立ちは前史として組み込まれ、「顔も見おぼえないうちに死んでしまった父、生きわかれの母」に代わって育ててくれた祖母の死後、夏実が東京の池辺家を訪ねるところから始まっている。そして、亡き父宛の手紙の形で記されていく夏実の日記が点綴され、姉典子（安見子）の死後、池辺のおばあさまからすべてを聞いた日の長い日記で終わっている。池辺の母が遺した日記で自分が「もらい子」と知っていた典子と、父の遺した日記で姉がいたと知った夏実とは、互いに姉妹だと確信を深めつつ引かれあつていく。異なる環境で育った姉妹の邂逅は「学校の花」（「少女倶楽部」昭八・九〇一二。前述、第三章一）でも書かれたが、死の間際の姉―「自尊心が強く」「だれかが自分に似ているなんて、気にいらぬ」と噂されていた典子―が妹に言う台詞「あなたとわたしはおなじよ」は、後述（第八章五）する「住吉」三部作の《二人で一人、一人で二人》の幻想―それは、戦前の「妹の着物」<sup>(24)</sup>（昭七・四）にも顕著に表れていた―とも響きあいながら、同じ日に生まれあわせ、双子のように似ている二人の少女を描いた少女小説「親友」（「女学生の友」昭二九・一〇三〇・三）<sup>(25)</sup>から「古都」<sup>(26)</sup>へと繋がっていく。親の記憶を持たぬ姉妹のうち、「生きていくものの、生命力の強さを考えるまえに、生きているものはもろく死にそうなおそれにばかりとらわれてしまう」ような池辺の祖母と母（二代に及んで子は産めず、養女を得た）に慈しまれて育った姉は病んで《少女期の終焉》を迎えることなく「この世のひととも思えないほど、ますますすんだ美しさに細って」死に、妹は《永遠の少女》となった姉を一面では体現すべく生きていく。

「なににでも夢中になれるのは幸福なことよ。生きているしるしですもの。わたしにはできないことだけれど」と漏らした典子の分まで、夏実は「美しくおどること」を夢見た。と同時に、「もらい子」と気づいてから母や祖母の「せつない愛」

を改めて思い、密かにそれに応えようとしていた典子の分まで、「おばあさまの杖」にもなりつつあった。亡き祖母の顔が、池辺の「老夫人の顔にかさなるように、うかんで」くるように感じ始めてもいた夏実は、作品末尾の日記で、姉・父・祖母等死んだ肉親達の「大きい愛情のかたまりのうえに、のせていただいているよう」で、「わたしもだんだん、自分が典子ねえさまにそっくりになってゆくように思いますわ」と亡父に告白している。

佐藤の提供した素材を用い、「純粹に人を愛することのむなしさ、美しさ」（「作者のことば」、『日本少年少女名作全集四』河出書房、昭二九・九）という普遍的なテーマを扱いながらも、ここには「愛」という概念を媒介に、幽明の境さえ次第に朧になり、生者が死者の世界に限り無く接近した果てに包み込まれ融合していく、極めて川端的な万物一如・自他一如の感覺（前述、第Ⅰ部第二章四）がいつしか流れ込んでいる。

こうした姉妹の邂逅と死別の物語に、読者の頁「ひまわりさろん」にも連載中から反響が寄せられ、一二月号のグラビア「万葉姉妹」の両先生<sup>(27)</sup>では、挿絵の玉井徳太郎が川端を訪ねるのに編集部も同行取材し、「大好評の「万葉姉妹」は、いよいよ最高潮」と宣伝された。また、最終回を迎えた一二月号には、物語を「写真によって回顧」した「万葉姉妹 フォト・ストーリー」が八頁に亘り載せられた。これは中原が「少女の友」で「乙女の港」「花日記」のグラビア写真を手がけた手法を踏襲したのだが、中原はこの連載中の四月から三年間の予定で渡欧中で、「ひまわり」の編集方針にも「不統一が見られ」（田辺<sup>(28)</sup>）るようになっていった（後述）。

「万葉姉妹」は翌二七年八月にポプラ社から刊行され、その「作者のことば」にも、「ひまわり」に出たとき、少女の姉や母も読んでくれたやうでした」とある。後に、玉井の挿絵で『日本少年少女名作全集四』（前出）にも収められている。

また、『少年世界』等戦後の少年少女雑誌には川端の旧作が題名を替えたり脚色されたりして掲載されている例が見られるが（注（25）参照）、「少女ブック」（昭三〇・一〜八）に連載された写真小説「白鳥の夢」は、当時三谷晴美として少女

小説を発表していた瀬戸内晴美（寂聴。前述、第二章八）がこの「万葉姉妹」を脚色したものである。<sup>(29)</sup>

#### 4 連載小説「花と小鈴」―《永遠の少女》の形象とその背景―

③の「万葉姉妹」連載終了の翌月号（昭二七・一）には、二月号から川端の新連載「花と小鈴」が玉井の挿絵で始まると予告された。二月号のグラビア「また逢う日の庭で……」では、「名コンビの両先生が、名作を生むまでの御苦心の御相談」をした、記者が美しい題名は何か意味があるのかと聞くと、川端は顔を綻ばし、とにかく続けて読んでみて下さい、短篇の題みたいなので変えようかとも思ったがやはりこのままにしましたと答えたとある。玉井が「聖少女のような清純な少女」を描きたいと言っているのも、「相談」の際に川端から出た言葉と考えられ、こうして「順子、節子などの少女の、美しくかない運命をえがいた長編」<sup>(30)</sup>（川端「解説」）がスタートした。

この小説でも、二人の少女節子と順子が対になって登場する。節子一家は疎開先から七年振りに戻ってきたが、父の事業が失敗した順子は芸者屋の養女となり、看病の間もなく母は病死して妹は父と旅立ち、弟は節子の家に預けられる。家庭も崩壊して順子は「かない運命」を辿っていると見えようし、そう読むならいかにも少女の「感傷」を刺激する物語であるが、節子への手紙に順子は次のように記している。―今更「節子さんたちのいらつしやる世界へ帰つても」退屈以上にさびしいとはつきりわかるようになった、低い世界に落ちたように見られているのなら間違いで、ぼんやりと夢見ているも咎められないこの家は私には住心地のよい場所なのです、「私は順子であるよりも、天女になったり、童子になったり、桜の精になつたりすることが、好きでたまりません」と。

節子の兄英一から届いた小鈴を鳴らして「美しい夢に誘われようと思つた」と書かれているから、先の手紙は言葉通りに解釈できないにしても、「静かに、幸福に、何の不自由もなくあたたかい家庭の中で、育つて来た」（同誌「あらすじ」）節

子やその姉優子がよく家事をしたのと異なり、「ぼんやりと空想しながら、時を過ごしてばかり」で、「人が普通に出来ること、しなければならぬことは」「出来ないし、しなかった」と振り返る順子には、恰かも天上への帰還が運命づけられたかぐや姫のように（第Ⅰ部第二章四参照）、節子達の世界（地上）での成熟は望むべくもなかったであろうか。前作「万葉姉妹」の「あこがれの多い少女」夏実も、「大人になるのはいやね」と呟いたが、どこにいても「ひとりぼっちのようにさびしく、「いつも少女らしくありたい」、「いつまでも、いつまでも」少女の日が続けばと願う順子は、「鳥の言葉を伝えたり、お花の心を現したりすることに夢中」な《永遠の少女》であろうとする。

また、これまでも見られた《養女》のモチーフ―「万葉姉妹」の典子は、「椿」の文子のその後の一つの姿でもあったろうか―については、先の「美しい言葉」（昭二二・四）の時点で「義務教育の終りの年」と触れられた養女政子（前述、第四章二二）の存在が大きい。②の連載中（昭二五・三）には、北条誠が「ひまわり少女」として「川端政子」を同誌で紹介しているが、これは、ひまわりのように「どこまでも少女らしい少女」を、村岡花子他の「お馴染みの先生方」が各々推薦するという企画の中の一文である。北条は、初めて会ったのは六、七年前、「痛々しいほど華奢な感じ。何だか、誰かがうしろから御支えしていないと、はらはらと散って」しまいそうな印象だった、運動や舞踊で鍛えて丈夫になられたが、昔の印象も尚感じられて「美しさの、ありがたい影になつて」おり、それが「人間の本当の気品、知性、床しさ」に繋がっている、多く言うことは大切な心の宝物を汚すようで切なく、これぐらいしか言えないと記している。姉妹誌の「それいゆ」の同年九月号には、政子のインタビュー記事「結婚の条件」が掲載されているのも注目される。当時、高等女学校を卒業して華道や茶道の稽古を続けていた政子は、親戚の美しい女性は婚約中に清らかに自殺した、離婚しても元には帰れないし、結婚しても楽しむ前に死んでしまうかもしれないと、結婚に否定的で、《永遠の少女》であろうとする順子に重なるものが感じられる。

「よその人からなにかしてもらおうと、どんな最敬礼しようかと、心が重くなります」といった順子の心情は、前述したよ



うに（第Ⅰ部第二章五）、居候根性・孤児根性としてかつて川端が実感したものであったが、父の事業の失敗・養女・実母の死・日本舞踊・カトリックの学校といった少女小説にしばしば見られる素材は、政子をめぐるものでもあったし、何よりも北条やインタビュ―記事が伝えるような《少女》が《孤児》川端の元で《養女》として生いたったということ、少女小説に留まらず、川端作品の広範に亘って微妙な問題を投げかけている。

「花と小鈴」の連載が終わった二七年一二月号の社告には、「今までの抒情と知性を中心とした編集方針を更に拡げて、少女のための服装、生活などに基調を置いたものに内容の充実を計る」とある。前年四月から中原は三年間遊学の予定でパリに滞在していたが（前述）、雑誌の売り上げが激減したためにこの六月に帰国して社の建て直しに奔走していた。「ひまわり」の方向転換もその一環で、季刊「ひまわり」第一号（昭二八・三）が「それいゆジュニア号」の第一冊目として誕生し、三冊目（昭二九・七）からは「ジュニアそれいゆ」の名称で正式にスタートした。パリ崇拜者の中原が、この雑誌に限ってアメリカ的な感覚で創ったと評されている（皆川「ひまわり」と「ジュニアそれいゆ」）が、川端はこの「ジュニアそれいゆ」誌には全く関わっていない。三四年八月、過密な編集作業の最中に中原は倒れ、「それいゆ」は三五年八月に、「ジュニアそれいゆ」も同年一〇月に廃刊となり、四五年の「女の部屋」の創刊（川端が巻頭文を執筆した）<sup>31</sup>まで長い療養生活に入った。「ひまわり」の少女小説では《少女期の終焉》に拘った川端だが、昭和の初期から断続的に続いてきた少女小説執筆自体も、終焉を迎えようとしていた。適当な発表舞台を失ったことも一つの契機ではあったが、読者が少女であることが少女を描くことの足枷になりつつあったと思われる。この後《少女》は、例えば醜い足を持たされた銀平（「みづうみ」昭二九・一〇一二）や、老いた江口（「眠れる美女」昭三五・一〇三六・一一）の、憧憬と絶望の彼方に在って、その醜や孤独を照らし出す光源として描かれるようになる。それは、ゆき子が菊治にとって「永遠に彼方の人」として在り、その「光のきらめ

く鞭」が「闇の生きもの」「罪人」と自己嫌悪する彼を「真向から叩いた」（『千羽鶴』）のと平行で、続篇「波千鳥」でもゆき子は不可侵の処女妻であるしかなかった。

姉妹誌への並行執筆は、実業之日本社の「少女の友」「新女苑」（前述、第三章及び第四章）や、ヒマワリ社の「ひまわり」「それいゆ」<sup>(32)</sup>に見られたが、この時期川端は少女雑誌から婦人雑誌へと移っていく。児童の文章の選が「少年少女」の廃刊（昭二六・一二）を以て実質的に終わり、「婦人公論」の選のみが続けられた（昭二八・三〇三三二・一二）ように、「ひまわり」廃刊後の翌二八年には、既に「婦人公論」に連載中の「日も月も」（昭二七・一〇二八・五。前述、第二章六）に加え、「婦人画報」に「川のある下町の話」も一年間連載となり、例えば「花と小鈴」のアパートでの暮らしといった市井の風俗描写等も生かされていった。この後に迎える川端の多作期は、文芸雑誌に「純文学」を発表する傍ら、婦人雑誌等に「中間小説」―そこでは（女であること）（『朝日新聞』（昭三一・三〇一一）連載小説のタイトルでもある）の意味が問われた―を連載する形で続いていく。それらについては今後更に検討せねばなるまい。

#### 注

- (1) この時期の作品を取り上げた拙稿に、「少年」論（前述、第I部第一章注（37））、「川端康成「住吉」連作序説」（前述、第I部第二章注（7））、「『千羽鶴』のゆくえ」（前述、「はじめに」注（5））がある。
- (2) 拙稿「川端訳」童話について―そのリストと実際二（前述、第I部第一章注（32））では、川端の戦後児童文学への関わり全般も考察した。
- (3) 「Iはじめの言葉」（『少年文学代表選集』光文社、昭二四・一一）。
- (4) 『「ひまわり」復刻版』（国書刊行会、昭五九・九）。

- (5) 『中原淳一画集 第二集』(購談社、昭五二・一)。
- (6) 『日本児童文学大系23』(前述、第三章)。
- (7) 初出(後掲、「初出一覧」15)脱稿後に、大森郁之助「川端康成・少女伝説」の終焉―「歌劇学校」以後私観」(札幌大学総合論叢)一九九七・三)・「川端康成戦後長篇少女小説私観―少女像の変貌」(『国語と国文学』一九九七・六)等が出た。
- (8) 「古今東西の良書の中から、特に若い女性におすゝめ出来るものを選択し、順次刊行」するとある。
- (9) 全集の「著作目録」には未記載。「女学生」「夢の姉」「ゆくひと」「朝雲」「むすめごころ」「霧の造花」を収録、八月に刊行された。
- (10) 「高見順日記」(昭二〇・一一・一六)。
- (11) 『展望 戦後雑誌』(河出書房新社、昭五二・六)。
- (12) 「編輯日記(8月17日)」(昭二一・一〇)。先の高見日記共々、木本至『雑誌で読む戦後史』(新潮選響、昭六〇・八)に指摘がある。
- (13) 短篇「生命の樹」(昭二一・七)、「夢」(昭二二・一二)。二四年には「美しい人達」の連載も試みたが、「雪」(二月号)に続く四月号からの「花のいのち」は「病気のため」五月号休載、そのまま中絶した。
- (14) **全集未収録文b 「女性に薦める図書」(昭二二・三)**  
 (おたづね 一、女性に薦めたい図書 一、その理由)  
 とにかく何かにつけて、辞書を見る習慣をつける事を先づ、薦めたい。知識が確実になるばかりでなく、自分の持つ知識が確実といふ自信を確実にしてくれる。辞書は専門別か百科辞書が多い程よいが、例へば「辞苑」一

冊でもよい。

女性に辞書を薦めるこの文は、「美しい日本の言葉と文章」を少女達に望んだ同時期の全集未収録文aと対になる。

- (15) 木本『雑誌で読む戦後史』(前出、注(12))。川端は第一号に随筆「美について」(全集第二七卷所収)も執筆している。

- (16) 『五年生のための川端康成文芸童話集』(三十書房、昭二五・九)・『翼の抒情歌』(東光出版、昭二八・一〇)・『駒鳥温泉』(ポプラ社、昭三〇・八)・『ばらの家・つるのふえ』(三十書房、昭三二・三)・『川端康成少年少女小説集』(中央公論社、昭四三・一二)。

- (17) 順に、与田「あとがき」(『ばらの家・つるのふえ』前出、注(16))、古谷「川端さんの少年少女小説に見る日本の生活」(「児童文芸」昭四四・三)。他に二上洋一「川端康成の少女小説」(「日本児童文学」昭五六・三)、樫内久義「川端康成の少年少女」(「南山大学近代文学ゼミ論集」昭六二・七)等。

- (18) (5)に同じ。

- (19) 『少女雑誌論』(前出、第三章注(11))

- (20) 「昭和文学研究」昭五九・七。

- (21) 平山城児『川端康成 余白を埋める』(研文出版、二〇〇三・六)は、宝塚歌劇団に在籍した母森下宮子(芸名・近江ひさ子)の草稿「宝塚日記」が下敷きにされていることを明らかにした。平山瑞穂(城児の息子)のブログによれば、祖母宮子は第一三期生、大正一三(一九二四)年四月〜一五年九月在籍。

- (22) 昭二八・一二、昭三六・一。『万葉姉妹』の他、『花と小鈴』の初刊も同社(昭二八・七)。いずれも松本昌美装幀、

花房英樹絵。

- (23) この言に注目した大森論(前出二篇)も、「どの程度協力したのか等は、審らかでない」としているのみである。
- (24) 拙稿「妹の着物」―(二人で一人)から(一人で二人)へ―(川端文学研究会編『論集 川端康成―掌の小説』おうふう、二〇〇一・三)を参照されたい。
- (25) 「ひまわり」廃刊後に発表された唯一の少女小説と思われる。尚、戦後の単行本に「陽炎の丘」という作品が収められており、これを戦後作品とした論も幾つかあるが、これは「学校の花」を改題したものである。
- (26) 拙稿「古都」―(天神さん)に託されたもの―(前述、第I部第二章注(7))を参照されたい。
- (27) 玉井に「ひまわりと川端先生」(『「ひまわり」復刻版別冊』前述、注(4))の回想がある。
- (28) (4)に同じ。
- (29) 拙稿「研究展望 作家研究と年譜」『川端康成詳細年譜』を刊行して(後掲、「初出一覧」1)を参照されたい。
- (30) 川端編『少女世界名作全集(2) 日本編』(東西五月社、昭三五・六)。但し編集は「二反長半氏の協力を得た」と明記されており、「解説」にも二反長半が関与している可能性が考えられる。
- (31) 川端全集未収録文「幸福の時」。川端文学研究会編『川端文学への視界9』(教育出版センター、一九九四・六)に武田勝彦提供・林武志解説で紹介された。
- (32) 「それいゆ」には「石塚茂子さんのこと」(昭二四・六)、「おとずれて来る幸福の思い」(昭三二・六)、「光悦会」入洛の数日を楽しむ(同・一二)の小文(何れも川端全集未収録)を執筆している。拙稿「新資料・全集未収録文―「それいゆ」誌から・「石塚茂子さんのこと」他二篇―」(川端文学研究会編『川端文学への視界13』教育出版センター、一九九八・六)を参照されたい。

## 第六章 川端康成の女性文章・綴方選―喪われた《故郷》への憧憬／絶対の距離―

「ものを実写し、直写し得るのは私達でなく、女と子供だけではあるまいか。わが文藝に欠けてゐるのは、寧ろ成人的なものと男性的なものであるにしろ、児童的なものと女性的なものとは、この自然と共に常に明るい鏡であり、新しい泉である。女子供に使はれる時、言葉は生な喜びに甦る」―これは、「本に拠る感想」（昭一一・三）で鈴木三重吉『綴方読本』（中央公論社、昭一〇・一二）を取り上げた際の川端の言葉だが、これ以前にも、「早熟の少年少女の文集」は「常に机辺から離れたくない本」で、「まことに天地の生命に通ずる近道である」（『文芸時評』昭八・六。傍線引用者、以下同じ）と記していた川端は、この後子供や女性の文章の選を数多く務めるようになった。三七巻本全集の第三四巻（昭五七・一二）には、芥川賞等の文学賞の選評と共にそうした選評も収められ、解題にも、川端が「昭和十二年（三十八歳）から昭和三十二年（五十八歳）まで、そのいちばん働きざかりの二十年間を―作品歴からいへば、「雪国」から「山の音」にいたる期間、―一方では、少年少女の作文選から女性の投稿文の選まで、全く地道な仕事にささげてゐた」ことは「世間に知られて」いなかったが、「自らの創作をなすと同じやうに、誠意をもつて事にあたつてゐた。投稿の一少女は、女学生に成長し、やがて結婚、出産、人生の有為転変に遭ふやうなことになる、所かはつても選者である著者をもとめては、自らの姿を語りつげるやうに、投稿を続けた。また、姉のあとには妹が、<sup>(1)</sup>といふこともあつた。佳作入選者のうち、波多野里望、大岡信、田辺聖子、岩橋邦枝といふ名は、年齢を逆算してみれば、恐らく今日活躍中の諸氏の幼き日のことであつたらう。」<sup>(2)</sup>と言及されたが、こうした川端の選評に対する研究はまだ無い。「かなりの煩勞で、自分の制作をさまざまにみだされる」（『女性文章』序）昭一八・一一・六附）と言いながらもこうした選を長く続けたのは、「好奇や感傷の浅い心からではなく、「文学的にも人生的にも、深い理由があつて」（『婦人公論』小品欄「選評」昭一二・一）と記しているが、では、その「深い理由」とは何か。「女性の

文章を見る私の眼には、私一個の確かなものがある」(同)というその選をみていくことは、作家川端を考える上でも有効であろう。

既に第二章では、編集者藤田圭雄との縁で、川端が戦前から戦後に亘って女性の文章や綴方の様々な選に携わっていたことを指摘した。また第四章では、「新女苑」への最初の関わりが「小品欄」の選者としてであったことを確認し、「恋愛も生活も文学の病気で失ってしまった人間」といった否定的な自己認識の裏返しとして、童心や女心への憧れがあったことを考察し、同誌及び「婦人公論」の選の集大成である『女性文章』の編纂過程において、川端の内の《女性的なるもの》と《日本》とが交錯していった様も見た。第三章及び第五章でも少女雑誌「少女の友」「ひまわり」での選について個々に触れたが、本章では全集未収録の幾つかの選評も紹介しつつ、主に戦中から戦後にかけての時期に行ったこれらの選を見渡すことで、作家川端に迫ってみたい。その際特に川端の自己認識の内実や背景と共に、そうした認識が川端文学にいかなる形で現われ、変遷していったかにも留意したい。

まず、川端が行った素人の文章(小説を含む)の選評一覧を以下に示す。丸数字は各々の選評発表順を示しているが、①⑧⑨⑭⑱⑳以外はすべて女性もしくは子供の文章のみを対象としたもので、⑭⑳は結果的に女性の文章が選ばれている。また、全集未収録文の a h は太字で示し、必要に応じて引用した。各々の全文は本章の初出稿(後掲「初出一覧」16)で紹介したので参照されたい。

①一〇年二月 第一高等学校「校友会雑誌」第三五〇号記念懸賞創作「選後小感」

②一二年一月〜一二月 「婦人公論」小品欄「選評」

③一三年一二月〜一八年一二月 「新女苑」小品欄(一五年一二月まではコント欄)「選評」

④一四年五、六月

『模範綴方全集』（中央公論社）「選の言葉」

\*これに先立つ一三年一〇月

「選者の一人として」（全集未収録文a）

⑤一四年六月

「婦人公論」懸賞短篇「選評」（全集未収録文b）

⑥一六年一月〜一八年一二月

「少女の友」作文欄「選者の言葉」

⑦一七年一二月

『満洲国の私たち』（中央公論社）「序」

⑧一八年一〇月

長島愛生園「愛生」創作「選評」（全集未収録文c）

⑨一九年六月二二日

「陸輪新報」懸賞小説「選後評」<sup>3</sup>

⑩二〇年一月

『女性文章』（満洲文藝春秋社）「序」及び「選評抄はしがき」

⑪二一年六月〜二三年一〇月

「赤とんぼ」綴方欄「選の言葉」

⑫二一年八月〜二四年八―一二月合併号 「婦人文庫」読者文芸欄 小品「選の言葉」

⑬二一年九月

「女性線」創刊記念懸賞創作「選者言」<sup>4</sup>

⑭二二年七月

「新潮」新かなづかいと当用漢字による懸賞創作「選の言葉」<sup>5</sup>

⑮ 同年一〇月

「ひまわり」懸賞少女小説「選の言葉」

⑯二三年三月〜二四年一月

「白鳥」コンクール文章入選作発表「選の言葉」

⑰二三年八月〜二四年一月

「白鳥」白鳥の頁文章「選の言葉」（全集未収録文d）

⑱二四年六月

「文藝往来」読者応募小説「選の言葉」<sup>6</sup>

⑲ 同年一二月〜二五年六月

「アンクル・レイズ・マガジン」みんなのつづり方欄「選の言葉」

\*これに先立つ二四年八月

「選者の言葉」



及び同年一二月

「選の言葉」は全集未収録文 e

⑳二五年一月～二六年一二月

「少年少女」文章欄「選の言葉」

㉑二五年一月～三月

「婦人公論」全国未亡人の短歌・手記「選後評」

\* 同年一月・二月

「選後評」は全集未収録文 f

㉒ 同年四月一〇日

「東京タイムズ」第一回懸賞新聞小説「選者の言葉」(全集未収録文 g)

㉓ 同年五月

「婦人公論」作文欄「推薦の言葉」

㉔二五年一二月

(復刊)「婦人文庫」読者文芸欄 小品「選の言葉」(全集未収録文 h)

㉕二八年三月～三二年一二月

「婦人公論」文章欄「選の言葉」

この他、選評は書いていないが、読売新聞主催全国小中学校綴方の中央コンクール審査員を長く務めて(後述、注(40))座談会「作品を審査して」(「読売新聞」昭二九・一一・五)に出席し、二九年～三一年に河出書房の「全国学生小説コンクール」審査員を務め、モービル児童文学賞の審査会に参加(昭三八・一一・四。波多野完治他)もしている。

前述したように、綴方や一般女性の文章を見る縁をつけたのは当時「婦人公論」編集者だった藤田で、②④⑤⑦⑪⑫⑯⑰⑲⑳㉑㉒㉓は藤田との、或いは中央公論社との縁によるものである。うち、戦後の⑪は藤田編集・川端編集顧問による実業之日本社の児童雑誌だが、先行する③⑥の「新女苑」「少女の友」も同社の、⑮の「ひまわり」は「少女の友」でコンビを組んだ中原淳一のひまわり社の雑誌で、それぞれ川端と深く関わりがあったことも前述した。また、戦後の⑫⑬の「婦人文庫」「文藝往来」は川端等が興した鎌倉文庫(⑭はひまわり社から復刊、第五章二で前述)の、⑯⑰の「白鳥」は「川端訳」童話にも深く関与した野上彰(詳しくは拙稿「川端訳」童話について)(前述、第I部第一章注(32))が企画した雑誌であり、いず

れも川端と結びつきが強い雑誌であることをまず確認しておきたい。

## 一 戦前・戦中の活動

1 「婦人公論」「新女苑」小品欄、『模範綴方全集』の選等——「純粋な肉声」を——

初めて女性の文章（小品）を継続的に選んだのが②であり、一方、二万六千もの綴方を読んだのが④である。

「婦人公論」の「新年号予告」（昭一一・一一）では、「文芸欄の新設」として従来の短歌・詩・俳句欄に加え、創作欄（岸田国土選）と小品欄（川端選）が出来ると報じられた。<sup>9</sup> 小品は題材自由、筆者は女性に限る、長さ一篇四百字詰原稿用紙五枚迄とあるが、冒頭に引用したように「実写」「直写」を重んじた川端は、②の初回の「選の初めに」（昭一二・一）でも既に「自由に生き生きと真実を書いてほしい」と強く要望している。その後も、「作家といふものは絶えず自分の文章を厭い、それから抜け出ようとする一面があり、自分はこの選をするにも文章を教えるより教わる気持ち先立っているし、事実学ぶところが多いと記し（同・五。前述、第四章二二）、文章は「一部文業家ばかりのものではない（同・八）、事にあたり折にふれて文章に心が向うことは「自分の精神のありかと姿を確かめるために、一番よい方法」だ（同・一〇）と、「書く」ことの意味を示し、「芸術には本来女性的なものがある」（同・五）との実感も述べている。

一方、綴り方に対しては『模範綴方全集』の「選者の一人として」（昭一三・一〇。全集未収録文a）で、子供の文章は「文学の一つの確かな古里」だが、「文学的な意味」に偏って読んでいくのではなく「もつとぢかな気持」（傍点は原文）で読んでいく、「人生のおのづからなるありがたさに最も純潔に触れる思ひが、子供の文章にある。」と述べて、当時の芸術教育的綴方観や童心主義とは異なる姿勢を表明している。この一文は「中央公論」折込広告に載せられ、翌一一月号にも再掲載されたが、藤田の手になると思われる同広告には、『綴方読本』『綴方教室』<sup>10</sup>によって開かれた綴方の楽土に全国小学生諸君

を導き入れたい、綴方の本旨は現実の姿をありのままに把握し、素直な言葉でこれを表現するところにあると記されており、そうした編纂方針は川端の基本姿勢ともよく合致していた。選者は他に島崎藤村・森田たま、受付は一〇月二〇日より一月二〇日まで、優秀作を出した学校全部と全応募者に記念品を、優秀作は全部同書に採録という大がかりな募集で、「婦人公論」一〇、一一月号でも、この三人の選者こそは本社でなければ得られぬ選者であり、「この事業は我邦の綴方教育に正しき方向を齎す唯一の羅針盤になる」といった折込広告が為されており、社を挙げての意気込みが伝わる。川端も「予選といふことは排して、綴方全てを選者が読むことは約束する」（「選者の一人として」前述、全集未収録文a）と述べているように、藤田と共に選に打ち込み、綴方運動の機運も盛り上がりを見せた。

この④の選は年明けから行われたが、その直前には第四章で見たように③「新女苑」の選も始まっている。③④の選を並行して行っていた当時に発表された「文学の嘘について」（昭一四・二）では、「一万五千人ばかりの子供の綴方」を読みつつある今、一等確かな思いは「人間のよさ」「人間の美しさ」を現すものが言葉だということ、この思いは女性の文章の選をしてもほぼ同じだと記していて、女性の文章と子供の綴方との美質を並置しているのが注目される。

②で「文学の毒気に、日夜苦められて」（昭一一・七）いると述べて「文学少女臭」を斥けた川端は、③でも、前任の片岡が職業作家的な技術を素人にも求めたのとは対照的に、「生半可な文学趣味」よりも「純粹な肉声」（昭一四・一二）を尊び、⑤懸賞短篇の選評（昭一四・六。全集未収録文b）でも、「専門の作家と味のちがった、素人のよさ」を選びたかった、「文章を大切にすることは、書く事柄を大切にすることであり、それはまた自分の心情や生活<sup>レ</sup>を大切にすることとなる。」と述べ、昭和一六年から加わった⑥「少女の友」での選でも同様の姿勢で熱心に選にあたった。一方、「苦しいものが伴ふ」（「文学の嘘について」前述）文芸時評の執筆は昭和一〇年代に入って激減し、遂に昭和一六年二月で最後となった。では、川端の言う「文学の病氣」「文学の毒氣」とは何であったか。

2 「文学の病氣」「文学の毒氣」——「故郷を失った文学」が提起した問題——

川端が文壇に立ったのは、第一次大戦後の精神の危機を背景とする近代主義（モダニズム）が、世界的同時性において震災後の日本にも深刻な影響を及ぼし始めた頃だった。初期の川端については第Ⅰ部で考察したが、「文藝時代」創刊の辞（大一三・一〇）で川端は、自分達の責務は「人生に於ける文芸を、或は芸術意識を本源的に新しくすること」だと宣言し、翌年の「文壇的文学論」では、「新しい生活」「新しい時代」と盛んに言われるのは、「それをしつかりと擱んで明らかな形で見てゐてくれる人が、世界中にどこにもゐないから」だ（大一一四・一）と述べる一方、「私には、新しい生活どこるか、単に一個の生活すらないのではなからうか」（「創刊の辞」）という消し去れぬ疑念も漏らしていた。

川端が確かな生活実感を持ちえずに生い立ったとは既に幾つかの論考があるが、川端の基盤は、「ものを書く力はものを見る力であり、ものを見る力は、ある意味で生きる力である。悲しみや過ちでも、それを書くといふことで、自分への愛を新たに」できる（③昭一四・四）という信念を持って、生との唯一の確かな足掛かりを「書くといふこと」に求めた点にあった。だが、文章という回路を通してしか「恋愛」にも「生活」にも触れえぬ「仮装人物」（観察者、表現者）としての作家が本質的に抱え持つ問題に加え、文学を無力化させてしまうような時代の問題も、そこには立ちはだかつていた。「現代は或はプロレタリア作家以外には明確な生活の方向を持ち得ない時代であるのかもしれない」（「文壇的文学論」大一一四・一一）という暗い予感を持ちながらも、川端はあくまでも作家として「知識階級」の問題にも拘り続けた。それは「芸術感は或程度の知的教養に寄生するもの」である以上、文芸も知識階級の所有であり、「知識階級の人々の苦悶を新しく解決するのだから、私達はどんな文芸にも満足しない」という切実な思いによるものであり（「同」同・一）、川端は混迷した時代の中で生の局面を切り開く「新しい人生の鍵」（「同」同前）を模索したのである。

随筆「末期の眼」(昭八・一二)では、「文学の新しい傾向、新しい形式」を追い求める「奇術師」とも見られた道程を振り返り、「胸の嘆きとか弱く戦つてゐる」と語ったが、この「胸の嘆き」は、第三章で述べた「禽獣」(同・七)の〈彼〉における「生きる力」に直結する生活及び肉体性の欠落感、現実世界からの疎外感、否定的な自己認識(自己疎外)にも深く影を落としているが、「男の鬱陶しさを嫌ふ」という〈彼〉に「天地のありがたさ」を感じさせたのは禽獣であり、〈彼〉を「幼なごころに温」めたのは「少年少女の文章」であり、「虚無のありがたさ」で打ちのめしたのはかつての千花子だったということも見落とせない。

中村光夫は川端に「誠実な自己批評あるいは自己否定の熱情」を見、「知識階級であり男である」自己の「否定の対極」には「女性、民衆あるいは日本」があり、「この対立が氏の制作の根底」をなしていると論じたが、<sup>(13)</sup>「禽獣」に続く中篇「散りぬるを」(昭八・一一〜九・五)でも、「おれは小説家といふ無期懲役人だ」という〈私〉が、女流作家を志しながら殺された瀧子の、「小説にも文章にもなつて」いない習作に現れた「無条件で、無制限な愛情」と「裸の温かさ」にたわいなく涙をこぼし、「女つていいものだなあ。」と、いまさらのやうに気の遠くなるほどありがたくなつた、「瀧子が女のありがたさを自ら文章で公にすることを、なにかしら危つかしく、なにかしら惜しく思つたのには、早くも男の嫉妬が芽生えてゐたのかもしれない」、「作家とは人心をむしばむ仕事であるとしても、瀧子のやうな女は文学に生活力を弱められる憂へがあるまいと思はれた」と独白している。こうした「禽獣」の〈彼〉や「散りぬるを」の〈私〉の延長線上に、昭和一〇年代以降の、女性や子供の文章の選をしてその魂に温められながらも(或いは、一時的に温められたからこそ)、一方では「知識階級であり男である」他ない自分を思わないではいられなかった川端があつたと解される。羽鳥徹哉「躍動的な生命への憧憬 川端康成の場合」<sup>(14)</sup>は「新しい生活感情」探求の結果、「澁刺とした生命の躍動を最も貴重とするような方向」が目指されたと指摘しているが、「生活」「生活力」といった語への川端の拘りは、初期の批評・小説から一貫したものであったのである。

同時代を生きた小林秀雄も、「故郷を失った文学」（昭八・五）で、「自分の生活<sup>15</sup>を省みて、そこに何かしら具体性というものが大変欠如している事に気づく」と表白している。これは谷崎潤一郎「芸について」（同・四）を受けて書かれたものだが、川端もこの一文とその反響に強い関心を寄せ、時評でも屢々言及している。冒頭に引用した「本に拠る感想」に「わが文芸に欠けてゐるのは、寧ろ成人的なものと男性的なものであるにしろ」とあったのも、実は「芸について」での指摘を踏まえたものであった。饗庭孝男『小林秀雄とその時代』（文藝春秋社、昭六一・五）は、小林は「喪失につぐ喪失の上になり立った『近代』という、いわば特異な空間と時間の交点にあり、ただ生活者の現実感を求めることに自己の根拠を示そうとした」のだとして、「不安な『抽象人』としての自覚」から出発した小林を論じたが、川端も、「今日の文学は故郷を失つてゐる」（『都会と田舎』昭九・一〇）、「東京には日本がない。私達の文学もまた、精神の故郷を失つてゐるだらう。私の読んだ長篇小説も、悉く出奔者の焦燥である」（『長篇小説評』昭一二・一二・一六）と述べている。そこには、祖父も死んで家屋敷が売り渡され、墓山も削り取られていくと嘆く「故郷へ」（『骨拾ひ』昭二四・一〇）中に引用。大正五年春頃の執筆か）等に見られるような、作家となる以前から、極めて私的レベルでの《故郷》喪失の思いがあったことが注意される。であればこそ、小林以上に生活者の根本的なリアリティに「強い魅力」を感じ、「何の感傷もなしに生活者の現実感のみを見る眼を求めていた」と思われる。「生活<sup>16</sup>は一々具体的であつて、人生の幸福の原形を抱き、源泉に浴する」（⑩「序」）と感じる女性の文章や、「生活力の美しさ」が「一番早分り」（『文芸時評』昭八・六）と見た小学生の作文を愛したのも、「精神の故郷」を求める心の一つの現われであつたと、まずは言えよう。

①の「校友会雑誌」懸賞創作の選（昭一〇・二）でも、「新しい時代の出発」、「新しい文学精神の、また技法の、萌芽」を求めたが得られず、一高生の上にも「暗鬱にかぶさつてゐる」時代を改めて実感したが、「時代」の為に「青春の生活力<sup>16</sup>を失つてはならぬ」、虚無も頽廃も諸君の年齢で正体の掴めるはずはない、「文学とは結局、生活の感激」だと述べているが、

その前月（同・一）から分載の始まったのが「雪国」であった。

川端自身、「悉くの作に一貫してゐるものは、或ひは人は意外とするかもしれないが、生命の輝きに対する、憧憬と讚美の心に外ならぬ。」（「花のワルツ」と「雪国」昭一一・三）とも明かし、「雪国」等は「旅の小説」であり、「それはいはば、日本の故郷をもとめてゆく巡礼の心」（改造社版選集「あとがき」昭一三・五）だとも言っていることは前述したが（第三章）、それらを踏まえて小泉浩一郎『雪国』をめぐる雑感<sup>(17)</sup>は、そこで発見したのは「女性に仮託せしめられた「生命の輝き」であり、「生命の女性性の確認」こそ日本の「古い調べ」に還ることであると同時に、日本の文化伝統の現代的意味を再確認することだったと見た（後述、第八章）。「伊豆の踊子」（大一一・一、二）から「雪国」までの一〇年は、「プロレタリア文学の急激な勃興と衰退を含む複雑な過渡期」で、川端にとつても「模索と試練の時代」だったとされるが、小泉が「雪国」を「川端文学におけるモダニズム時代からの脱却を告げる一つの里程碑」と位置づけた上で、「女性の言葉と共にある生命性、実存性、永遠性を以て、男性の言葉と共にある非生命性、歴史性、一過性―即ち近代それ自体を相対化しえた女性原理小説」と見たのは、本章の問題を考える上でも示唆深い。

川端は「文芸時評」（昭九・九・二八）で、萩原朔太郎が「詩に告別した室生犀星君へ」で提起した問題を、「文学全体に及ぶ西洋思潮と日本の伝統」の問題、「詩や文学全体の喪失」の問題だとして大きく取り上げているが、「をさなごころに文芸の出發はあり、また常に帰郷がある。女性的なるものについても同じである」（⑩「序」）と後に断じているように、文芸に限らず「日本の故郷」とは、「この自然と共に」《をさなごころ》や《女性的なるもの》に結びついたものだ。この時期に「発見」しつつあった。川端の女性文章・綴方の選は、「喪失につぐ喪失」の後に、「地獄の底におちて天国にあこがれ」（「文学の嘘について」）る心持ちで、彼方の《故郷》に「わづかに慰めを見出」す形で始まったと言えようことは、前述した②の初回の選評にも④にも、はっきり表れていたのである。創元社版『雪国』を刊行（昭一二・六）した後もこれを書き継いで

いくのと並行して、「月々日本の女の『あはれ』が身にしみた。日本の女のありがたさを思った。」(同)と回顧するような女性の文章や、膨大な数に昇る綴方に接し得たことは、そうした「発見」や「確認」にも大きな意味があったと思われる。

小林秀雄が川端を、「彼が少年少女達の作文を愛読して倦む事を知らない」のは「彼の天稟が命ずるのだ。社会的人間より生理的人間へ」、「歴史の衣は脱落し、人間は生理に則った一様な歌を歌ふ様になる」、「天稟が彼を引摺って行く。片足で「伊豆の踊子」から「雪国」に至る道を、もう一方の足で「葬式の名人」から「禽獣」に至る道を引摺って行く」(「川端康成」昭一六・六)と評したのはよく知られている。「生理的人間」とは、「歴史の衣」に限らず、人間社会の現実<sup>(19)</sup>に纏わるあらゆるものから解放された「生命」だけが、びくびくと生きてゐる」(北条民雄「いのちの初夜」)人間と言えようが、問題となるのは、川端自身はそのような「生理に則った一様な歌を歌ふ」人間(「少年少女達」に限らず、「生きようとしてゐる命が裸の肌のやう」な駒子ら「女」も)にはなり得ず、「生命の輝き」から絶対的に隔てられた「仮装人物」として生きざるをえなかったということであり、その自覚を生きる険しさは、「葬式の名人」から「禽獣」に至る道<sup>(20)</sup>が既に物語っていたということだ。当時小林の眼に平行線と見えた二筋の道が、戦後改稿された「雪国」では一筋となったかと思われるが、これについては第八章で考察したい。

### 3 『女性文章』刊行と「英霊の遺文」―昭和『万葉集』の夢想―

⑥⑦については前述したが(第三章二五及び同第二章4)、⑧長島愛生園「愛生」<sup>(20)</sup>創作の選(昭一八・一〇。全集未収録文c)は、小川正子『小島の春』(長崎書店、昭一三・一二)で知られる岡山県にある国立癩療養所長島愛生園の機関誌「愛生」の文芸特集号に掲載されたものである。川端は入賞作品の個々の評に先立って、「癩療養所にあつて文学をされる方々には、常に古今東西最高の書によつて、高いものに目をあげてゐることが、殊に生命の慰めと思ふけれども、日本の古典の新しい



読み方で、悲苦といふものゝ日本風なありやうに心を静めることも考へるべきだらう。たとへば、文学の暗黒時代とされた室町に、実は日本の道が立つたことなどを、近来の研究によつて知るのも、なにかの鍵にならう。西洋近代の悩みは所詮日本人の身には沁まずに終りさうだが、おのづから日本の温い寂しさが癩の文学にもやはり通つてゐるのは、決して甘さや浅さではあるまい。」と、北条民雄と同じく「癩療養所にあつて文学をされる方々」に向けて述べているが、そこには室町と同様の「文学の暗黒時代」を生きる戦時下の日本の文学者のある種の覚悟も感じられる。

⑨『女性文章』の刊行経緯については前述(第四章二一)したが、その「序」は⑧と同年の十一月六日附となっている。同書刊行の目論見は既に②の「婦人公論」の選を始めて間もなく、創元社版『雪国』刊行の翌月に述べていたが(②昭一二・七)、同月には廬溝橋事件も勃発、一六年一二月には遂に太平洋戦争に突入し、政治の言葉は、プロレタリア作家のみならず、知識人、更には一般大衆の言葉をも、直接的・間接的に封じ込めていった。男性の言葉がますます「真実を素直に伝へ」(②昭一二・七)得なくなる中で、まず川端自身が「女性的なるものの温かさ」に「慰め」(同前)を見出していたことは明らかである。

かつて『模範綴方全集』の「選者の一人として」(前述、**全集未収録文a**)で、「事変に関係した文章が多くならうかと思ふが、子供の世界の自由な広さは失ひたくない」と願つたのと同様、⑩の『女性文章』の選も、戦時中でありながら、寧ろそうであるからこそ川端は「自由な広さ」を求めた。当時の川端の気持ちの高ぶりも感じられる『女性文章』の長い「序」には、「『万葉集』の読者知らずの歌を、今の世の女性の散文で成すのが、私の願ひでもあつた。事実、民族と国土との魂はこれら無名の女の散文にも流れて不滅だった。」「心のふるさととしての日本、母と妻との国としての日本が、これほど感じられる書は少ないと信じ、私は多年出版を志して来たのである。」と記されている。川端が「巡礼の心」によつて求めていった『故郷』は、ここでははつきりと「母と妻との国としての日本」として見出されており、それは軍国者や国粹主義者の『日

本』とは異なるものであった。終始「女の生きる真実、真情の表れ」(23昭二八・三)を重んじた川端の選は、「戦争の妨げになる」(11昭二二・六)として一八年末には③⑥とも軍官に禁じられ、『女性文章』も内地での出版を許されず、漸く満洲で刊行されたのは敗戦の半年前だった。戦後に川端も、「自由主義的な、そして文学的・芸術的な、感覚的・写実的な綴方が戦時に抑圧されて衰退して行つた」(「わが愛する文章」昭二二・九)と振り返っているように、「戦時中の教育のブランク・ページ」(21)が訪れ、川端の綴方選も戦後まで中断された。

創作発表の場も次第に狭められていった一七年から一九年の三年間、「新聞社から頼まれてのことだが」と断りながらも、川端は開戦記念日の前後に数多くの「英霊の遺文」を読み、紹介している。(22) 検閲を慮つての屈折は川端の文章にも遺文自体にも認められるが、「偽飾の俗文学よりも、戦死者の稚純な遺文集」に「日本の魂」の閃めき(昭一七・一二・一三)や「感傷」を越えた「純粹の眼、純粹の声」を感じ(同・同・一四)、その「無言の祈り」(昭一九・一二・一五)を全身で受け止めようとしている姿が、そこには透かし見られる。まさに「末期の眼」であった特攻隊員の臉の底に浮かんたであろう幻の「母なる内地」(同・同・一三)こそ、川端の希求した『日本』により近いものではなかったかと思われる。

「故園」が失われた個人の幼時への旅といえるなら、「東海道」は、民族の、日本人の失われた過去への旅とよび得る(佐伯彰二)と評される二作の連載が始まったのも、③⑥の選が禁じられたのと同じ昭和一八年である。古典への深い傾斜を見せた「東海道」は、「読みようによつては、敗戦に先立つ落城の譜の調べが聞かれる作品」(疋田寛吉)とも言われているが、その「作者の言葉」(昭一八・七)に、「母国」と題する小説を書くはずであったが」と記されているのも見逃せない。遙かに『母』を恋う「英霊の遺文」の声ならぬ声に促されたかのように、そしてまた「落城」の予感に急かされたかのように執筆していずれも中絶した二作からは、滅びゆくかに見えた日本の『故郷』を求める切実な思いが伝わってくるのである。

この一八年の十一月、川端は⑩の『女性文章』の「序」で『万葉集』の読人知らずの歌(前述)に触れていたが、年末

の「英霊の遺文」（昭一八・一二・八）では、「出征軍人の詩歌を大規模に纂撰して、昭和の日本民族歌集が後世に遺されることを、私は望んでやまない。今集めておかなければ、散逸の憂へがある。陣中の日記や手紙についても、同じである。」と訴えている。「万葉集」を意識した言葉は、既に「綴方の話」（昭一四・八）に「今の綴方と昔の「万葉集」とを、私は思ひ比べてみたりする」とあったのだが、戦況が日々悪化していく中で「母なる内地」を恋う「出征軍人の詩歌」は、昭和の防人の歌として意識されるようになったと推察される。そして「母と妻との国としての日本」を象徴する女性の文章と一対にして、「英霊の遺文」は綴方と同様に「万葉集」の読人知らずの歌に連なるものと捉えられていたとうかがえる。その連載の切り抜きを川端が全部原稿用紙に貼り、「第一章」「第二章」と大見出しをつけて文章に念入りに手を入れていたという秀子夫人の証言<sup>(25)</sup>からも、『模範綴方全集』『女性文章』と並んで川端が大切に考えていたことが分かる。「英霊の遺文」だが、その纂撰は果たされなかった。

続く昭和一九年には、断片的だが「自由日記」が残されており、特攻隊員の遺書と硫黄島兵士の通信の朗読の放送に涙して、「僅か一時間ばかりの間にかゝる文章二つも朗読ある時、かゝる感動の累積の日々、われなにを書きつつありや。慙死すべし」（二・五記）と記し、「敗亡を生きては見ない、といふ実際の覚悟はまだきまつてゐないやうだ。必ずしも死を惜むのではないが。死ぬまで自分の仕事に生きようといふ思ひ、まだそんなところだ。無論国を生かす仕事であるが」（同・一七記）と漏らす等、川端の揺れ動く心情の一端が見える。「いっどこで死ぬ事になるか分らぬ日々なれば」と考えて頼まれた短冊を書くことを思い、「この人への最後の手紙になるかもしれぬ」という気持ちで手紙を書く（六・二〇記）といった「死の影のさす思い」（七・一三記）を記す中で、満州での『女性文章』四千部出版許可の報に喜んだりもしている（八・一〇記）。一二月には、打ち続く空襲警報の合間を縫って、「英霊の遺文」を書き継ぎ、「故園」を書きあぐね、「源氏物語」の「あはれ」に次第に沈潜してもいる。この年に発表された小説はその「故園」（一、三、六、一一、一二月。後述、第八章三）と「名人」

(三月)の続篇の他は掌篇五篇のみだが、掌篇はいずれも女性の小品を下敷きにしたと思われるような素材と視線による作品であるのも興味深い<sup>(26)</sup>。翌昭和二〇年、川端は鹿屋の特攻基地へ赴いたが、これについては第七章及び第九章一で後述する。

## 二 戦後の活動

1 「赤とんぼ」綴方、「婦人文庫」小品の選等——「なほ失はぬもの」を——

こうして敗戦を迎えた川端は、かつて「改造」で世話になっていた水島治男(前述、第二章二〜四)が編集長となった「世界文化」の創刊号に、「感傷の塔」(昭二一・二二)を発表した。これは「たよりをとりかはし心を通はせる」女性読者達に宛てた作家の(私)の手紙という形式の短篇である(後述、第三部第二章一 **038 水島治男** 苑参照)。「現実の世界とは別な私」に、「現実でも実在でもない人のやう」なあなたがたが「永遠に女性的なるもの」の花の匂いをさせて下さったのは「素直にありがた」いし、「日本の女性的なるもの」に戦争中どれだけ温められたかしのれない、このように敗れた戦争が「私の胸のうちの近代の病毒」を多少ともゆるめてくれたとしたらなんとさえいえるのか、「戦争がさほど私を変えなかつた」という罪業の悲嘆」で「しばらくはかなしんでゐたい」と記す(私)を透かして、作者川端自身の「かなしみ」も感じられる。

同月に鎌倉文庫から刊行した『雪国』の「あとがき」では、出版の年に支那事変が始まった『雪国』は「平和時よりも痛切な愛情をもつて読まれ」たとして、慰問文をくれた出征兵士や、「異境」にあつて「故国日本」を思うよすがとして読んでくれたという婦人達、防空壕で気を鎮めるため読んだという無名の読者達に言及し、「今後の仕事をそれら日本人々に献げて恩頼に酬い、戦争によつて失はれた生霊傷つけられた精神をも慰めたいと思ふ。私はただ一つ日本の笛を持つて生まれてゐるだけである」と決意を表明した。

共にこの年から始められた⑪の「赤とんぼ」での綴方の選も、⑫の「婦人文庫」での女性の文章の選も、やはりそうした

「かなしみ」と決意の上に為されたと言えよう。それらの選の基本態度は戦前と変わらなかったが、「敗戦後の改革に綴方は泉だ」(⑩昭二一・六)との使命感と、「敗戦の惨苦をやはらげるには、この日本の婦人がなほ失はぬものによる治癒の力も大きいだらう」(⑫昭二二・一)という期待とが新たに加わっている。

前者の「赤とんぼ」は、「赤い鳥」の文芸精神の復興を標榜した児童誌で、川端の選による綴方運動の再建が創刊の大きな目標になっていた。<sup>(27)</sup> 深刻な紙不足の当時にあつて、綴方の長さに制限を設けなかったところにも、同誌の「綴方を非常に重んじた編集のしるし」(⑪昭二三・五)は表れている。川端も、戦前の『模範綴方全集』は他人が育てたのを品評・展覧して過去を整理しただけだったが、今度は「持続的」に「育てて行くこと」であり、「未来を創造するのだ」(⑪昭二一・六)との自負を持って、実業之日本社の綴方研究会にも出席し、現場の教師による「実際の指導上の意見」に耳を傾ける(⑪同・一一)等した。「綴方は児童と教師との共同の創作」(⑪昭二二・四)という『模範綴方全集』以来の考えから、選評も指導者(教師や父兄)と児童の両方に読んでもらうことを前提に書く旨明記し(⑪昭二一・七)、「児童は白紙であり、それになにを書くかは教師です。」(⑪昭二二・一一)として、「私たちのやうに言葉や文章に苦しむ日常の者」にはなお強く感じられる「綴方の単純無垢な真実」こそよく見ねばならぬと、指導者に注意を促した(⑪同・一一)。またそうした「真実」を重く見るが故に、戦時中「とざされ、しばらく忘れてみた」児童の心が蘇り、「戦争前の綴方開花期のやうな、子供特有の直観の閃めき、感覚の鋭さ、写生の自由な新しさ」を取り戻すのを第一に願ひ、綴方を「天才教育」「芸術教育」とすることには、戦前と変わることなく疑義を投げかけている(⑪昭二一・八)。後の⑳「選の言葉」第一回目(昭二八・三)でも、「編集長の藤田君とは、「赤とんぼ」や「少年少女」などで、子供の綴方を共に見た縁もある。近くは山本映佑さんの「風の子」や森田卿子さんの「風の小父さん」や「野上の鉄ちゃん」などもその中から出た。」と振り返っているように「綴方作家」<sup>(28)</sup>も誕生したが、川端はその一方で「赤とんぼ」に集まる綴方は熱心な教師の指導による秀でた児童の作品であるという特殊性を思い、

「精神の糧に恵まれない日本の多くの子供」の現状も考え、「今の国語国字の問題、日用文章の問題」(⑩昭二二・一〇)、「教育全体」「国全体」の在り方(⑪昭二二・一一)にまで目を向けている。

川端はまた、少女雑誌「白鳥」で「わが愛する文章」(昭二二・一〇二三・七)を連載したが、第一回には「古今の文章を選び出してみようとするにあたり」『模範綴方全集』の島崎藤村の序をまず紹介し、第四回にも同書から往復書簡体の作品を取り上げている。この連載と並行して⑫のコンクールの選評を書き、更に連載終了後には⑬の「文章」欄の選も始めた。少女期の問題については第五章で述べたが、「少年少女の作文を愛読するが、芽むめくものを楽しむ心よりも、消えゆくものを惜む心が多い」(「文芸時評」昭九・一)とかつて述べていた川端は、《をさなごころ》が次第に失せ、《女性的なるもの》の十分な発現も望めない少女期の文章の難しさについて⑭⑮⑯等の選評で指摘し、⑰の初回(白鳥の頁文章「選の言葉」全集未収録文d)でも、「女学生の文章」は大体悪いものに決まっていたが「私の選がそれをよくするために少しでも役に立てばよいと望んで」と記している。少女が陥りがちな《感傷》についても、「眼を曇らせる」(⑱昭二三・三)、「感傷におほはれて実体がかくれ」る(⑲昭二四・一)と警戒し、やはり真実の直視を重んじた。

一方⑳㉑の「白鳥」での選に先行して開始していたのが前述の㉒「婦人文庫」の選で、川端は「再び女性の文章と会へた」とまず喜び、「日本の女の心の美しさ、けなげさ、やさしさ、こまやかさ、つましさは、今日も滅びずに、短文の投書を意義あらしめると信じたい。」と信頼を寄せ(㉓昭二二・八)、実際に投稿を読む中で「日本婦人の心情や性格は案外変つてゐない。都会の街頭や新聞雑誌の紙面で目につくほど、日本婦人のよいところは失はれてゐない。」(㉔昭二二・一)とその普遍性を「確認」している。そこには裏返せば、敗戦によって「非生命性、歴史性、一過性」(小泉『雪国』をめぐる雑感)、(前述)を暴露した政治的な言葉と、そうした言葉を生み出した男性社会及び男性原理―それらこそ戦争を引き起こした元凶であり、《をさなごころ》をも圧迫したと言えよう―或いはそれに依拠した近代そのものへの深い不信があった。「東京裁判

判決の日」(昭二四・一)では「私は戦争中も政治の言葉をそれほど信じなかった。戦後の現在も政治の言葉はあまり信じられない。」と述べているが、この言葉はまた、「敗戦後の私は日本古来の悲しみのなかに帰ってゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。現実なるものもあるひは信じない。」と表白した随筆「哀愁」(昭二二・一〇)とも響き合って聞こえる。

## 2 「雪国」改稿に触れて―フェミニズム批判の彼方へ―

「哀愁」は、「若い女歌」の甘い夢から書き起こされ、慰問の手紙をくれた「異郷にある軍人」達が川端作品でとらえられた「郷愁」も、川端が「源氏物語」に感じた「郷愁」も、同じ心の流れであり、「その悲しみやあはれそのもののなかで、日本風な慰めと救ひとにやはらげられてゐる」としているが、それは「日本の女性的なるもの」「女性の言葉と共にある生命性、実存性、永遠性」(小泉、同前)による「慰めと救ひ」に他ならなかったと言える。戦時中、川端は声高に日本を語る多くの知識人に背を向けて、女性読者達に「昔の日本の偉さを静かに思ふのも、今は特に必要であらう。」(③昭一七・六)、「今日の書物や新聞雑誌紙面は、悪文の洪水だから、よほど自戒してゐないと、その濁流に溺れる。」(③同・八)と注意を促し、「国家全体を男性原理としての強さとか、力とかが支配した時代」<sup>(29)</sup>に女性原理の側に拠って立とうとしたところ、あえて敗戦後に日本回帰を宣言したところに川端の独自性があつた。だが、先の「東京裁判判決の日」にも繰り返し「憂鬱」の語が記され、それは「なにか自己懷疑のやうな心理のせりもあつた」とあるように、「私の胸のうちの近代の病毒」が消せない自覚も、同時に川端は深めていかざるをえなかったのである。

『雪国』が、戦前の「天の河」(昭一六・八)以来の空白を破って「雪国抄」(昭二一・五)・「続雪国」(昭二二・一〇)での改稿加筆の上、創元社から「決定版」と銘打たれて刊行されたのは二三年一二月、「東京裁判判決の日」の頃であり、また

「赤とんぼ」「白鳥」<sup>(30)</sup> 廃刊を前後に挟んだ、敗戦後の日本が一つの節目を迎えつつある時期だった。島村が「生命的なる女性」の言葉を了解しつつ、再び非生命的なる男性的近代に帰還しなければならない存在<sup>(31)</sup>であるところに、「雪国」の「近代における男性性と女性性の邂逅と別離の全的形を描く」象徴的意味があるとした小泉論は卓見であるが、その「別離」が抜き差しならぬものとして川端に明確に意識されたのは、次のような改稿が為された戦後の決定版であったことを見逃してはならない。

決定版でまず目を引くのは、作品末尾の大幅な改稿である。戦前の「天の河」では、火事の鎮まった様子が描かれると共に、島村と駒子との愛情の危機も天の河に美しく昇華されて、穏やかで安らぎさえ感じられる終局だったとの指摘もあるが、決定版では駒子の手の熱さに「なぜか島村は別離が迫つてゐるやうに感じ」、燃える繭倉から転落した葉子を「自分の犠牲か刑罰」のように抱いて「物狂はしい」駒子に近づこうとして、「男達に押されてよるめ」く島村の中に音立てて天の河が流れて来たど、書き改められている。そうした新たな結末に向かつて、縮みの里行きを思い立つ島村にも加筆が施されているのも見落とせない。戦前の「雪中火事」(昭一五・一一)では、「駒子を愛する術さへ知らぬことが情けなくてならず」、「この温泉場から出発するはずみをつけるつもりもいくらかあつて」とあり、いまだ踏み切れぬ島村が描かれ、続く「天の河」でも、駒子の覚悟―「泣いたわ。離れるのこはいわ。だけでも早く行きなさい。(いい女だと)言はれて泣いたこと、私忘れないから」(括弧内の補足は引用者)―は告げられたが、島村は「女のあたたかい哀しみ」に絞めつけられ、「瞼が濡れ」と記されるに留まっていた。それに対し戦後の「雪国抄」では、「駒子がせつなく迫つて来れば来るほど、島村は自分が生きてゐないかのやうな苛責がつのつた」、「駒子のすべてが島村に通じて来るのに、島村のなにも駒子には通じてゐさうにない。駒子が虚しい壁に突きあたる木霊に似た音を島村は自分の胸の底に雪が降りつむやうに聞いた。このやうな島村のわがままはいつまでも続けられるものではなかつた。こんど帰ったらもうかりそめにこの温泉場へは来られないだらうといふ気がし



て、「最早ここを去らねばならぬと心立った。」と、別れの決意がはっきりと書かれたのである。

また、島村に対する川端の言及も変化していった。「私自身からは強ひて遠くの人物をねらつて、嫌悪と憎悪を向けたに過ぎない。落漠とした虚像である」（「あとがき」昭一五・九）という一見きっぱりした物言いは、改稿後の「島村は無論私ではない。つまるところ駒子を引き立てる道具に過ぎないのだらう」、「作者は作中人物の駒子のなかに深くはいり、島村には浅く背を向けた。その意味で私は島村であるよりも駒子であるところもあらう。私は意識して島村をなるべく自分と離して書いた」（「同」昭二三・六附）という言葉と並べるとき、「強ひて」「意識して」いなければ距離が取れない近しさを逆に浮き上がらせ、近親憎悪的なものさえ感じさせる。第五章で述べたように、当時川端は五〇歳を「再生の第一年」として一六巻本全集の編纂に着手しているが、その編纂過程で旧作や日記も丹念に読み返し、それらを引用しつつ詳細な「あとがき」（後の「独影自命」）も執筆した。その副産物として書かれたのが「少年」や「住吉」三部作（後述）といった己の生の根源を探る試みとも呼べる作品で、これらは戦争末期の「故園」「東海道」の連載と対応するものでもあった。敗戦と老いの自覚の中でのこうした自己確認を経て、「雪国」も一六巻本に再録された（昭二四・五）が、その「あとがき」では、「作者の私に島村は気がかりの人物である」、「島村は愛し得ぬかなしみと悔いとを胸に沈めてみて、その空虚がかへつて作品のなかの駒子をつつなく浮き出させてみるのではなからうか」と、島村の「かなしみと悔い」を秘めた「空虚」が川端の意識の前面にせり出すに至っているのである。

「ほんたうに人を好きになれるのは、もう女だけなんですから。」（「火の枕」昭一一・一〇）と駒子に言わせ、「駒子の熱い火に身のまはりをつつまれ」ながらも島村はなぜか「死の象徴」（「雪中火事」前述）を感じていたが、『女性文章』の「序」でも、「母なる地霊は文章の端々にも肌が温かだった」、「身のまはりの物にぢかに触れて、愛の血を通はせるのは女性」で、そういう「女の愛と幸ひ」とがこの集のような文章を生んでいる、「本然な愛情は女のものである」と述べる一方で、「一般

男性の文章」はこのように「息づく肉体」を持たないと言わないではいられなかったように、そうした女性の側に身を置こうとして叶わず、「愛し得ぬ」どころか、愛を受け止めることさえできぬのを確と自覚したとき、島村のみならず作者川端に「生きてゐないかのやうな苛責」、「かなしみと悔い」が募ったのではあるまいか。馬場重行「少年論」<sup>(32)</sup>が、少年清野の《をさなごころ》と《女性的なるもの》に洗われることで自己再生を凶ろうとするまでが描かれたとしながらも、「宮本」それ自身は、《をさなごころ》を真に体得することは許されず、ただ憧れゆく様が描かれてある所に「宮本」にとつての「清野」の重要性が窺われもする」と指摘しているように、そうした自覚を促していったところに、「島村」及び作家川端にとつての「駒子」の重要性があったと言えよう。

こうした「雪国」或いは川端に対し、フェミニズムの立場から批判も出たが、例えば田嶋陽子「駒子の視点から読む「雪国」」<sup>(33)</sup>が、田嶋自身の旧稿「女性差別とノーベル賞―川端康成の「雪国」をとりあげて」<sup>(34)</sup>にはあった「作者川端は少なくとも、島村にさせていること」が「何を意味するか、半ば意識していたのではないか」という視点を敢えて消し去ることで島村批判をそのまま川端批判にすり替えていったように、それらの多くは作中人物と作者とを峻別する事なく論じるという過ちを、意識的・無意識的に犯していた。田嶋は当初の島村の「自分の願望で染め上げた虚像としての女性像を生み出すへ人形師」<sup>(35)</sup>的側面を批判し、駒子が島村の「近代人の虚無や悲哀」さえつき抜け、「制度的女性像」からも「はみ出して」確かな身体性を以て存在していくのを評価したが、そうした駒子の「生命性、実存性、永遠性」こそ、岡庭昇が言う、川端が「自己の文学的力量を賭けて描」こうとしたもの、「生涯かけた川端の、自己否定の『映像化』」であつたらうし、そこにこそ「雪国」の大きな魅力があつたと言える（感傷的な「私」から「彼」への変貌については前述、第Ⅰ部第二章五）。田嶋はまた、「二人の間の絶対的な距離」が黙認されたとき、いわゆる恋愛小説」は成立せず、「女と男の間にある関係の不可能性をごまかすことなく」描き切っていると皮肉まじりに論じているが、その不可能性は既に前述の「雪中火事」の時点で島村にも（当然

川端にも) 見えていたことであり、「伊豆の踊子」でも、「雪国」でも、私は愛情に対する感謝を持って書いてある。「伊豆の踊子」にはそれが素直に現はれてゐる。「雪国」では少し深く入つて、つらく現はれてゐる」(前出「独影自命」と言うようなつらさ)「それへの同化(同化の願望)と、窮極的な断念、そして断念を自己に強要する原罪意識」(岡庭)―もそこにはあつたのである。

### 3 「白鳥」廃刊後―自らの創作に向けて―

「赤とんぼ」「白鳥」の廃刊後ほぼ一年の時を置いた二四年一二月、「婦人文庫」も廃刊となつたが、同月から⑱の「アンクル・レイズ・マガジン」の選が始まつている。同誌は、『人類発達史』の著者ロマン・コフマン主宰のアメリカでベスト・セラーの少年少女雑誌<sup>(36)</sup>「日本語版ということ、文芸色の濃かつた児童誌が多かつた中で、「世界及人類についての知識、科学の進歩、人間生活を豊にした人々についての知識をひろく子供たちに普及させようとして企てられ」<sup>(37)</sup>た異色の雑誌だった。「今度本誌の松田君の依頼を受けて、また毎月綴方をみることになつた」が「第一回は応募数も極めて少なく、佳作は全くなかつた」(みんなのつづり方欄「選の言葉」昭二四・一二。全集未収録文e)<sup>(38)</sup>とあるように応募作は奮わず、同誌自体も二五年七月号で早くも廃刊となつたようである。

⑲と並行して二五年一月号から始まつたのが、⑳「少年少女」の選である。「赤とんぼ」廃刊に先立つて藤田が中央公論社へ戻つたことは前述(第二章五)したが、「声望だけ高く、売行の悪い」同誌の廃刊期限を延ばして二五年いっぱいの子定で編集を引き受けたもの<sup>(39)</sup>で、「婦人公論」八、九月号の折り込みでも、同社が「第一流の文化人を総動員」した編集で、「同じ傾向の雑誌が次々と廃刊乃至休刊し、今やたつた一つだけ残されたこの雑誌は、子供に対する良心の最後のよりどころ」だと危機感と自負を持って広告された。川端も前述の⑲の選評(全集未収録文e)で、戦後、教育は考え方が自由になって教

え方も進歩したが、困った点も多いとして、「赤とんぼ」等「良心的な雑誌」が廃刊になったことに言及し、「子供の全部の現はれ、教育の全体の現はれ」としても綴方を重く見られなければならないという態度を以て選にあたった。「少女少女」投稿中で出色だった森田卿子（前述）「別れ路」を「婦人公論」作文欄に推薦したのが②③（昭二五・五）で、その後④「少女少女」には、森田の「風の小父さん」（同・八）、「野上の鉄ちゃん」（同・一一）が川端の熱のこもった選評と共に掲載された。前者は川端ら編纂の『少年文学代表選集二』（光文社、昭二六・一）に収録され、川端が寄せた「森田卿子の「風の小父さん」」には、「少女少女」の投書欄に掲載された。私はその欄の選をつづけてゐる。」と記されている。後者は中央公論社から刊行され（昭二七・三）、川端の「あとがき」も添えられたが、これは⑤「選の言葉」（昭二五・一一）の一部を改めたものである。このように優れた投稿もあった「少女少女」だが、二六年にはいいものがなかったという選評が次第に続くようになり、八月号は入選作なく休載、九月号も一つしか取れないのはさびしいと記され、同誌自体も昭和二六年末を以て廃刊となった。

目を転じれば、二五年一〇月には生活綴方運動の流れを継いだ日本綴方の会が発足、一二月の日本児童文学者協会年次総会では「赤い鳥」の綴方運動を先例とした文学教育運動が基本方針に決定し、三二年四月には「文学教育の会」（後の「日本文学教育連盟」）創立といった動きもあった。しかし川端は、児童大衆誌の台頭の中で「少女少女」が廃刊となったこの二六年末を以て、綴方の選から実質的には遠ざかった。<sup>40</sup>それだけでなく三〇年代に川端は、「赤とんぼ」廃刊後に再び筆を執っていた少女小説からも、戦後立て続けに川端の名で発表していた「川端訳」童話からも退いていった。<sup>41</sup>

成人を対象とした選の単発的なものとしては、里見弴と共に選者を務めた⑥「東京タイムズ」第一回懸賞新聞小説「選者の言葉 新聞小説の懸賞として成功」（昭二五・四・一〇。全集未収録文）がある。当選作の大山景子「道絶えず」に対して「感心した」としながらも、「達者過ぎて、私などそこに疑問をいただき、反ばつをおぼえる」、「作品の印象が小面憎くもあり、荒れた感じもあるのは、やはり達者な料理のせいである」と、その「達者」な点を警戒しているのは、これまでの川端

の発言からすると自然なことであった。受賞作は同紙に連載され（四月一三日～八月一四日）、第二回の募集（選者は第一回と同じ里見・川端）が六月末締切で行われているが結果等未詳である。八月に刊行された大山『道絶えず―東京タイムズ文芸作品』（小峰書店）には、②の全集未収録文fが一部削除し、改変の上、掲載されている。

戦後の「婦人公論」での最初は①**全国未亡人の短歌・手記「選後評」**で、②「少年少女」の選と同月の、二五年一月号から四月号まで掲載されたが、川端全集には第三回発表の三月号と入選決定発表の四月号しか収録されていない。川端は、「同情を感じた」が「これらの作品は生の材料を出ないと云わなければならない」（昭二五・一、**全集未収録文f**。谷川徹三・林芙美子・宮本百合子の評と共に掲載）、「未亡人という身の上も一つの人間の姿に過ぎないと感じる高い救いが、これらの手記には欠けていると思う」（同・二、同）といった不満を漏らしてもいる。二月号には「忘れられた未亡人の問題が真剣にとりあげられ、世論を喚起すること」を願って単行本化する旨が予告されていたように、早くも同年五月、『この果てに君ある如く 全国未亡人の短歌・手記』が中央公論社から刊行された。「山の音」で重要な役割を果たす戦争未亡人池田が描かれたのは、翌二六年一〇月「朝の水」以降であり、①の選も一つの契機になったかと思われる。

また第五章二で述べたように、二五年一二月には「婦人文庫」が一年間の休刊を経てひまわり社から季刊誌として復刊され、川端は引き続き小品の選をした。その初回「選の言葉」（④**全集未収録文h**。第二号まで出たらしいが未見）では、「この雑誌の出るあいだが長かつたので、投稿の数はずいぶんたまり、したがって、いい作品も多く、選ぶのに迷った。佳作は私の手もとに保存しておくことにした。」と記し、三篇を選んで、講評している。例えばその一篇「人工中絶」は、「筆達者」過ぎる点を批判しつつも、「一つの経験の心理を書きその心理に筋道を立ててつかみ、その経験は女性によくありそうなことなので、選んでみた。」とある。中絶が日本で合法化されたのは二三年制定の「優生保護法」からで、「山の音」でも菊子の中絶（初めて言及されたのは二七年三月の「夜の声」）が描かれた。全集未収録文hは「三篇それぞれに女性は十分感じられ

る。どれも三枚に書くのは無理な材料で、このために足りないところはしかたがない。」と結ばれているが、四百字詰三枚の規定は⑫を踏襲したもので、第二回（一月三十一日締切。第二号で発表）も同じ規定で募集されている。

これに対し、⑮の「婦人公論」では題材・長さとも自由とされた。「少年少女」廃刊後、藤田は同誌編集長に就任（昭二七・一）し、同月から川端は連載小説「日も月も」（前述）第二章を開始、戦死者の「遺文」が題材に用いられている点でも注目される作であったが、その連載中の二八年二月号には、川端選「文章」と窪田空穂選「短歌」の教室新設の予告が出た。川端は、「も早読書の量が少なくなつたし、人の原稿を読むのはまれだが」、「幾年ぶりかまた月々、女の文章を読めることになつたのはしあはせ」（⑮昭二八・三）と記し、「このやうな選に時間をつぶすのも、自然に「永遠に女性的なるもの」を感じたいと思ふから」で、「荒涼とした残生の慰め」になり、「児童の綴方を見るのも、童心を感じたいからで、童心と女心とは芸術と人生との泉」（⑮同・四）とも述べている。

だが「婦人公論」も、藤田が二八年一〇月号から「中央公論」へ異動した後は次第に様変わりしていった。川端は三〇年一二月号の選評では来年も選を続ける旨記し、戦時中の『女性文章』刊行に言及して「戦後の女性文章の選も長く続けてゐれば、また選集を出版出来る時があらう。」と記し、三二年一月号でもまた一年選を続けることになつたとして再び『女性文章』に言及、「戦前も、戦時も、戦後も、私の選の考へはあまり変ら」ず、投稿の佳作を見ると「日本の女性も心情の根はあまり変つてゐない」と振り返っていたが、ペンクラブ会長に加えて、三三年には国際ペンクラブ副会長にも就任、多忙を極めて体調も崩しぎみだった川端は、戦後版『女性文章』は編めぬまま、この三二年いっぱい同誌の選者を降り（後任は永井龍男）、川端の二〇年に及んだ女性文章への選者としての関わりも絶えた。女性作家自身の手によって、「（女性なるもの）の（内部）の名状しがたい風景の歪みを小説化する試み」<sup>(42)</sup>が為され始めたのもこの頃だった。

かつて『女性文章』の序に、「永遠に女性的なるものは、実は男性のあこがれのなかにあるのかもしれない」女性の文章

にも求めて得られなかったと述べた川端は、「永遠の女性も見果てぬ夢でせう」（「雪」昭二四・一、一二）とも、「婦人の短文の投書には、行きどまりの線があり」、「それを抜け出て進歩することはむづかしいやうである」（「婦人文庫」グラビア「お馴染作家カメラ訪問」、同・一）とも述べていた。繰り返し川端が記した《女性的なるもの》の内実は、「女性的なるもの」（昭一二・七）という一文を含めて必ずしも明確にされているとは言い難いが、この後川端は、「女であること」（昭三一・三〇一一）といった連載小説の題名にも先取りされていたように、女性達の文章よりも、むしろ自ら創作を為すことでその意味を探り、求め続けていくことになる。

「みづうみ」（昭二九・一〇一二）の銀平が、「清らかな幸福と温かい救済」を感じた湯女に、「永遠の女性の声か、慈悲の母の声」を思い、「あんたの国はどこ？」「天国か？」と問い、「あんたとちがって、僕は故郷をうしなつたから」と言いながら、無時間の空間（「地獄の底」）をさまよい続けたように、川端の「日本の故郷をもとめてゆく巡礼」の旅も続いた。美しい姉の眠る信州への幻の紅葉見を末尾に置いた「山の音」（昭二四・九〇二九・四）や、「故郷であつて同時に異郷であるよな」父の故郷竹田への文子の贖罪の旅を一つの核とした「波千鳥」（昭二八・四〇一二。未完）から、醜い父が変死した場所でもある「母の村のみづうみ」を題名とした先の「みづうみ」を経て、「日本のふるさとをたずねる」と予告された「古都」（昭三六・一〇・八〇三七・一・二三）、「神話の発祥の地」日向に始まる「日本の旅」遍歴を描こうとした「たまゆら」（書下し原稿によるNHKテレビ放送は昭四〇・四・五から。「小説新潮」連載は同・九〇昭四一・三。未完）、彼岸を思わせる生田を舞台とする「たんぽぽ」（昭三九・六〇四三・一〇。未完）と続き、「隅田川」（昭四六・一一）へ辿り着く。「あなたはどこにおいでなのでせうか」という呼びかけで始まる「隅田川」が、「住吉」連作最後の作品にして生前発表した最後の創作であり、敗戦直後の三部作では末尾にも繰り返し返されていた呼びかけが消え、「それも今はむかしとなりました」と結ばれていることは前述（第四章二三）したが、「みづうみ」「古都」等と同様、己の生涯の原点としての《故郷》は、解けぬ謎を秘

めたまま（私）を拒んでいるかのようである。「虚空を冥府に帰」った「精霊」（「古都」）の棲む《故郷》、即ち「あなた」の在りかを捜し続けてきた（私）の彷徨は、遂に断念されたのであろうか。

野島秀勝『「日本回帰」のドン・キホーテたち』（冬樹社、昭四六・四）は、饗庭に先行して小林の「故郷を失った文学」や萩原朔太郎の「日本への回帰 我が独り歌えるうた」（昭一二・一）に注目しつつ、「故郷」喪失の主題―裏返せば「故郷」奪還、「日本回帰」という主題―は日本の近代文学を貫く底流だと見ている。野島は「西欧近代の毒を充分にあおっていた」朔太郎や有島武郎等には「西洋から日本へという単純な回帰」はもはや許されておらず、「虚無の只中に投げ出された自我」に対するひたすらな「誠実」の追求が、必然的に自我から「故郷」を剥奪せずにはおかなかったと指摘し、「帰るべき「日本」を失って「一切の支柱が瓦解した自我とは、また分解する自我に他なら」ず、「自我の分解」の徹底の果て」の有島の「自裁への道」は、「何よりも先ず西欧近代が強いた誠実の道程だった」と論じた。また野島は、川端にもその主題が揺曳しているとする「眠れる美女」（昭三五・一―三六・一一）に「不到達性の抒情」の完成を、「片腕」（昭三八・八―一一）に「川端文学における「女」からの「距離」の完成を指摘しているが、最終章で三島の自決を論じた同書が刊行されたのは、「隅田川」発表以前であり、川端の死のわずか一年前のことでもあった。

#### 4 「東方の歌」―幻の《日本》への回帰―

末尾に「昭和四十七年一月二月書く」と筆書きした「雪国抄」を遺して、川端はその年四月に自殺した。この遺稿は、『定本雪国』（牧羊社、昭四六・八）を元に、分載第三回めの「物語」（昭一〇・一一）辺りまでの部分を抄出したもので、島村という名のみ与えられた男が、名さえ持たぬ女と雪国で再会を果たした翌朝、小泉の言葉を使えば「男性性と女性性の邂逅」で閉じられている。が、「女の相手の男を「無」のやうに書いたのは、モデルにたいしておのれをむなしうするためでもあつ



て、あの男が私といふわけではない」「〔伊豆の踊子〕の作者」昭四三・一一）、「島村は私ではありません。男としての存在ですらないやうで、ただ駒子をうつす鏡のやうなもの、でせうか」〔雪国〕について「同・一二」と男としての島村を無化する志向を強めていた川端を考え合わせれば、ここでは「男性性」は「女性性」との類い稀な出逢いにより、これに吸収され、昇華されていつているようにも見える。

川端追悼特集を組んだ「文藝」（昭四七・六）に発表された清水徹「距離のない距離―ひとつの素描」も、《距離》をキーワードとしつつ、川端の主人公達の外部との距離関係は「距離でありつづけながら、同時に内面化されて」いるという特殊性を指摘し、「絶対的な距離」を乗り越えようとして、「二人で一人、一人で二人」（前述、第五章三三）という「エロティスムの両義的なありかた」に溶け込ませることが狙われたと論じている。《距離のない距離》によつて隔てられた眠る女達の内部を想いながら、彼女らとの同一を空しく願っている「眠れる美女」の構成自体が、川端における「根源的不安定」を最も鮮明に提示しているとして、野島とは異なる視点を提出している。<sup>(46)</sup>

昭和九年五月の「文学的自叙伝」に、「『東方の歌』と題する作品の構想」を一五年も前から心に抱いていて、これを「白鳥の歌」としたいと思つてゐる。」「西洋の近代文学の洗礼を受け、自分でも真似ごとを試みた」が、根が東洋人である自分は「行方を見失つた時はなかつた」、『西方の偉大なリアリスト達のうちには、難行苦行の果て死に近づいて、やうやく遙かな東方を望み得た者もあつたが、私はをさな心の歌で、それに遊べるかもしれない。』と記したのは、文壇でも《故郷》喪失が問われていた頃のことだったが、そうした「をさな心の歌」を、川端は自ら歌うことができたのであろうか。「書けずに死にゆくかもしれないが」と述べていた「東方の歌」を「白鳥の歌」とする願い、幻の《日本》への回帰は、果たせたのであろうか。「遠い空にただよふ」《永遠に女性的なるもの》や《をさなころころ》と川端との最終的な距離は、更に検討せねばなるまい。川端の最晩年については、第九章で改めて考察したい。

- (1) 例えば「赤とんぼ」(昭二一・一二)で三姉妹の綴方が取り上げられたりもしている。(後述、第Ⅲ部第二章一 108石 澤小枝子より藤田圭雄宛参照)
- (2) 本章の初出稿(後掲「初出稿一覧」16)と当時の選評をお送りしたところ、大岡信先生から、『模範綴方全集 二年生』佳作の「なまづ」は間違いなく先生の綴方で、お父様が中央公論社に送ってくれた、「天下に公表された私の処女作」として今もこの本を珍藏している、生活感が出ているところを川端も良しとしたのだろうかといった旨のお手紙を頂いた。岩橋邦枝先生からも、当時愛読していた川端が選者だったのでせつせと投稿していたことを憶えている、「足袋」「土塊」「買ひそこねたカメラ」の選評(㊸昭二九・六、九、一〇)を再び目にして、忘れていた棄て子とめぐり合ったような心持だとお便りを頂いた。田辺聖子は「さら」(㊹昭一八・七)について、『美しい旅』を愛読していたので、その先生の批評がいただけたことはたいそう嬉しかった。」と『欲しがりません勝つまでは 私の終戦まで』(ポプラ社、昭五二・四)に記しており、波多野完治(第Ⅲ部第一章20、波多野完治他編『作文教育講座』も参照されたい)・勤子の長男里望の綴方は、『模範綴方全集』(後述)の「一年の部」特選に選ばれており、波多野勤子『少年期・母と子の四年間の記録』(光文社、昭二五・一)にも言及がある。
- (3) 「自由日記」の昭和一九年六月一九日記載分に、「懸賞小説の選評を陸輸新聞に送る」とある。
- (4) 同誌は昭和二一年二月創刊。第二号(四月号)に「創刊記念懸賞論文・創作募集」として、応募資格は女性に限る、創作は三〇枚以内、六月号発表、締切五月一〇日とある。六月号には、論文は堀真琴・神近市子、創作は川端・林芙美子が目下審査中で七月号発表とあるが、更に発表延期となった。

- (5) 主宰は国民の国語運動連盟と新潮社。三月号掲載の募集要項には、「現代かなづかいを用い、わかりよく美しい新文体の創造」をめざした「創作小説であること」、三〇枚乃至百枚、選者は川端・谷川徹三・山本有三、五月末日締切、九月号発表とあった。七月号には、発表が繰り上がったのは「応募原稿五百余編に達したが」、審査が「意外に速やかに進捗したので」と記されている。しかし実際には、「応募原稿の水準は、必ずしも文運盛んなりとは」言えず、「殆ど割愛せざるを得なかった」（編集後記）。「選の言葉」は川端のもののみ掲載された。同年の「人間」二月号の座談会「当用漢字と現代かなづかひ」にも、川端は柳田国男、山本有三、安藤正次らと列席している。
- (6) 「編集後記」には、「小説入選作は丹羽、高見両氏には該当者なく、川端氏選のみ掲載した。枚数が少し超過していたが他に該当者なきため特に採用した」とある。創刊号（昭二四・一）の小説投稿案内には、三人のうち「希望選者を明記の事」とあった。
- (7) 川端の発言は、「文藝」一九二九年四月・十一月、三〇年六月・十一月、三一年五月・十一月掲載の「作品審査委員会」で伝えられている。審査員は他に丹羽（第六回から三島に交替）、佐多、青野、臼井。河出書房の経営破綻によって六回で中絶したが、入賞者の中には岩橋邦枝、大江健三郎、後藤明生、山本道子らの名が見える。
- (8) 藤田『『赤とんぼ』の創刊から『少年少女』の廃刊まで』（『新選日本児童文学3』小峰書店、昭三四・四）に詳しい記述がある。
- (9) この「文芸欄」は昭和一二年までで打ち切られ（一二月号には、創作欄は選者岸田が上海視察の為今月は休載と、「おことわり」が出たのみ）、「特輯実話」欄が組まれるようになった。
- (10) 『綴方読本』（前述）と同じく中央公論社刊（昭一二・八）。
- (11) 磯貝英夫「川端康成の人と文学」（『国文学』昭四一・八）・根本橋夫「門に立つ子ら（Ⅱ）——孤児の心理 川端康成

における自我発達」(「東京家政学院大学紀要」一九九六・七)等。

- (12) 川端は、「徳田秋聲氏の「仮装人物」(昭一四・四)で、「作家といふものは、実生活に登場することが、遂に出来ないのである。」と、秋聲の作品に触れて述べている。

- (13) 「川端文学の特質」(三七七巻本全集「月報」昭五五・三)。

- (14) 「国文学 解釈と鑑賞」別冊「生命」で読む20世紀日本文芸(至文堂、一九九六・二)。

- (15) 「三月文壇の一印象」(昭八・四)、「自由主義作品の一例」(同・六)、「文芸時評」(同・七)、「文芸時評」(同・八)。

- (16) 川端は一高在学中に、文藝部委員氷室吉平の勧めで、「校友会雑誌」に処女作とも言える短篇「ちよ」(大八・六)を発表している(第三章二五及び第Ⅲ部第二章一 **071小田切進宛参照**)。

- (17) 川端文学研究会編『川端文学への視界12』(教育出版センター、一九九七・六)。

- (18) 中村光夫「川端康成氏」(「読売新聞」昭四三・一〇・二三)。

- (19) 川端が北条を「中央公論」へ推薦したことは前述、第二章二。川端は北条の作品に「文学と生命ののつびきならぬ絶対の結合」(『いのちの初夜』跋「昭一一・一一附)を見、同人誌「文学界」にも紹介した。『いのちの初夜』推薦(同・二)によれば、原題「最初の一夜」を、文中の「いのち」の語を生かし改題したのも川端である(同作については第七章二3で後述)。北条没後、川端は北条全集を編纂し(創元社、昭一三・四、六)、北条をモデルにした小説「寒風」も発表している(昭一六・一、二。昭一七・四)。

- (20) 七月二〇日締切。創作二四編が川端に送られて、後、金原健児が二度川端宅を訪ねている。金原は前年下期、翌年下期芥川賞候補になっており、その兄田尻敢が同園の医師で同誌に歌を発表し、長篇短歌の選も行っていた。金原を介して選の依頼があったかと推測される。川端は、森田竹次、宮島俊夫、吉成稔らの作品を選んでいる。

- (21) 藤田「あとがき」(山本映佑『綴方集 風の子』実業之日本社、昭二三・一一)。
- (22) 「東京新聞」(昭一七・一二・八、一〇〜一五。昭一八・一二・六〜一二。昭一九・一二・一〇〜一五)。
- (23) 「解説」(『天授の子』新潮社、昭五〇・四)。「故園」は昭一八・五〜二〇・一、「東海道」は昭一八・七・二〇〜一〇・三一。いずれも未完。詳しくは第八章。
- (24) 『川端康成「魔界」の書』(芸術新聞社、昭六二・一〇)。
- (25) 『川端康成とともに』(前述、第I部第二章注(32))。
- (26) 「十七歳」・「わかめ」・「小切」(七月)、「さと」・「水」(一〇月)。婦人雑誌の小品投書を基にした掌篇群を、終戦前後に発表していることについては前述、第四章注(20)。
- (27) (8)に同じ。
- (28) 山本『綴方集「風の子」』(注(21))の序文で、川端は「山本君は「赤とんぼ」が生んだ綴方作家」と紹介している。「あとがき」には同書出版までの経緯と反響も記されている。野上彰が脚色した『学校劇 風の子』も同社から翌年一〇月に刊行された。また、根本正義『子ども文化にみる綴方と作文―昭和をふりかえるもうひとつの歴史』(KTC中央出版、二〇〇四・五)に、川端が「赤とんぼ」二二年八月号で選んだ山本「先生と皆様へ」が二三年九月一日にラジオで朗読されていると指摘がある。(「少年少女」の森田卿子については後述。)
- (29) 東郷克美「鼎談 太宰治をどう読むか」(「解釈と鑑賞」昭六三・六)。東郷は、そうした戦中であって弱さに徹した太宰を評価している。
- (30) 昭二三・一〇、昭二四・一。後者は一二月号休刊。
- (31) 河村清一郎「雪中火事」と「天の河」―「雪国」・結末の改稿をめぐる―(「金城国文」昭四〇・一)。

- (32) 川端文学研究会編『川端康成研究叢書10 孤影の哀愁』（教育出版センター、昭五六・一〇）。
- (33) 江種満子・藤田和代編『女が読む日本近代文学 フェミニズム批評の試み』（新曜社、一九九二・三）。
- (34) 「女性空間」（一九八九・三）。
- (35) 「虚無を撃つ娼婦たち 川端康成の浅草ものを読む」昭五七・一一。後『性の歪みに映るもの』（青豹書房、昭六二・九）所収。
- (36) 阿部真之助「発刊の言葉」（昭二四・六）。
- (37) 「学校と家庭の皆さんへ」（同前）。
- (38) 日本児童文学者協会編『児童文学の戦後史』（東京書籍、昭五三・二）所収の、詳細な「現代日本児童文学年表」には二月に廃刊とあるが、日本近代文学館及び神奈川近代文学館で七月号まで確認できた。
- (39) (8) に同じ。
- (40) 例えば前述の読売新聞社主催綴方コンクールに藤田らと共に審査員に二五年から四六年秋まで名を連ね、同コンクールの作品集に序文「つづり方は子供だけのものではない」を寄せている（読売新聞社、昭二九・一二）が、審査会には何度か欠席し、選評も公にしていなかった。
- (41) 少女小説については第五章。『川端訳』童話について―そのリストと実際二（前述、第I部第一章注（32））も参照されたい。また注（7）の「全国学生小説コンクール」も、同誌廃刊（昭三一・一二）により第七回で終わっている。
- (42) 山田有策「内部の方法と文学」（『岩波講座日本文学史14』一九九七・二）は、河野多恵子の「蟹」（昭三八・六）などを出発点として現代に至る一連の文学営為をこう呼び、〈内向の世代〉の中心に位置づけられるとした。
- (43) 拙稿『千羽鶴』のゆくえ（前述、「はじめに」注（5））を参照されたい。

(44) 『古都』作者の言葉(昭三六・一〇・四)。拙稿『古都』―〈天神さん〉に託されたもの(前述、第I部第二章注(7))も参照されたい。

(45) 「たまゆら」原作者言(昭四〇・五・一五)

(46) 拙稿「眠れる美女」(『川端康成全作品研究事典』勉誠出版、一九九八・六)では、やはり《距離》をキーワードとした関根英二・前田久徳論等も紹介している。また、本章の初出稿発表後、やはり《距離》をキーワードとした原善『川端康成、その遠近法』(大修館書店、一九九九・一)も刊行された。

## 第七章 川端康成と沖縄―幻の長篇「南海孤島」／米国統治下の沖縄行―

昭和三三年六月、川端はまだ米国統治下にあった沖縄を初めて訪れた。その歓迎会で川端は、戦前に沖縄県知事が度々鎌倉まで来て、是非来島して何か書いてもらいたいと勧められたがとうとう来られなかったこと、沖縄戦の時に軍の委嘱を受けて沖縄に発つ特攻の基地で過ごし、毎日のように特攻機を見送ったこと等を明かし、沖縄には関心を持ち続けていたと話している（後述）。実は戦前から晩年に至るまで川端は沖縄との関りがあつたのだが、従来の川端研究では看過されてきた。本章では、当時の沖縄の地元紙等の資料も踏まえて沖縄との関係を明らかにすることで、作家川端を考察したい。

### 一 幻の長篇「南海孤島」―戦前の企て―

昭和一二年、川端は「南海孤島」（『書きおろし長篇小説叢書』河出書房、一〇月）と題して、以下の一文を記している。

琉球に行つて、琉球を書くといふことしか、今のところまだ纏つてゐない。「南海孤島」も仮題である。「孤島」といふ感じとはちがつたものが出来るかも知らぬ。／秋の初めに出發する。夏中に他の仕事を片づけておいて、琉球滞在中は、この一作に没頭する。今のところは、琉球に関する書物をぼつぼつ集めてゐる程度で、私が琉球を書くと言ふよりも、琉球が私になにか書かせてくれると言はねばなるまいから、予告も控目にしたい。／最も残念なのは、余り長く行つてをれないことである。せいぜい三四ヶ月である。季節も一つしか見られまい。その間に一作仕上げるのだから、十年も二十年も、或ひは生涯を費して、郷土の書を一冊残すやうな人々に比べれば、真に汗顔の至りであつて、現代文学の浅さを一身に背負ふやうなものである。書きおろし一作の印税で、せめて二年は暮らせるやうな文壇になつてほしいものだ。／書きお



ろし長篇の意義に就ては、既に他の諸君が述べられたであらうが、私もこの日本に絶対必要の文学運動を成功させたい念願から、自分には無理な仕事と知りつつ、参加させて貰ったわけである。東京近くで雑事に紛れてゐては、到底書き上げる余裕もないので、遠く南海のはてに逃げ出すようなものだ。／琉球は風俗人情自然など、よほど変つてゐるらしく、それを写すだけでも、後世に残る作となろうと楽しみである。いずれにしろ当の琉球各方面の支援を仰がねば成り立たぬことで、種々の便宜を賜はれば幸甚である。

「夏中に」とあるから、この予告文は春か夏の初め頃の執筆であろう。七月二二日附林芙美子宛書簡にも、新聞小説の方は失敗だったが其間に種々考えるところあり、今後少しく「真の小説に向かい得るか」と楽しみにしている、「明後日より軽井沢の宿へ参り秋ハ琉球の予定であります<sup>(1)</sup> 例の書下し長編叢書の作東京近くにゐてハ到底無理ですので琉球へ行つてみます」とある。この「新聞小説」とは「報知新聞」での連載を終えた「女性開眼」(昭一一・一一・一一〜一一・六・三〇。前述、第三章)で、「新聞小説で毎日一回書き続けなければならぬことが、私には無理であつた」、「長篇の意図を貫けず計画も崩れた」とは戦後の「独影自命」の言葉だが、そうした悔いは当時からあつたようだ。先の予告文にも、日々締め切りに追われる新聞連載よりも、琉球に腰を据えて長篇に専念して「真の小説」を書下ろしたいとの意欲がうかがえる。

また「琉球に関する書物を集めている」とあるが、当時改造社で編集をしていた沖繩出身の比嘉春潮<sup>(2)</sup>によれば、沖繩の小説を書く<sup>(3)</sup>と決まつた川端が比嘉に色々聞いて勉強を始め、柳田国男の『海南小記』<sup>(3)</sup>等の著作や琉球建築の専門書といった資料も贈つたそうだ。川端の全集を出したい意向があつた改造社社長の山本実彦(第三部第二章一 **113 文藝春秋新社より中村光夫夫妻宛参照**)は、川端と近しいと判断した比嘉に全集の仕事を命じて川端も承諾(後に、九卷本川端選集(昭一三・四一四・一二)が刊行された)、同社は川端が沖繩に行く盛大な歓送会<sup>(4)</sup>の宴も張つたという。鹿兒島出身の山本は沖繩で小学校

の代用教員をしたことがあり、改造社にはその時の教え子饒平名よへな（永丘）智太郎や宮城聡も入社したが、永丘はこの七月から拓務省嘱託として大臣官房に務め、宮城も作家活動を始めていた。「婦人公論」六月号から連載を始めた「牧歌」（前述、第二章3）を夏に信州で書き、秋の初めから「三四ヶ月」琉球で長篇を書き下ろそうと目論んでいた川端は、三度目の沖縄行き（昭一〇・一二）を果たしていた折口信夫のところへ、この夏の終わり頃に話を聞きに訪ねてもいる。<sup>(5)</sup>

「琉球王の金塊引揚事件」（昭五・五）の一文もある川端だが、このように沖縄に所縁の人が身近にいたことは注意される。<sup>(6)</sup>仲程昌徳が指摘しているように、昭和九年〜十二年は先の宮城の他、與儀正昌、石野径一郎（後述）等沖縄出身の作家の作品発表が目覚ましい時期だった。與儀の「顛末」を「文學界」（昭一〇・三）に推薦もした川端は、宮城の「樫の芽生え」「罪」も時評で取り上げて、注目している（昭九・七、一〇・八）。「樫の芽生え」（昭九・三）には「生まれた南海の孤島―その山嶽地方である牧歌調を思ひ出した」（傍線引用者）と生活の苦難の中で故郷が回想されており、川端の「牧歌」「南海孤島」の題のヒントもこの辺りにあったのかもしれない。また比嘉は、ハワイかどこから帰って来た無名の新人中村地平の「長耳国漂流記」を川端が大変褒めて文壇に紹介していたのに親しみを感じて、自分が懇意にしていた林芙美子を通じて近づいたとも述べている。比嘉は「長耳国漂流記」を昭和五、六年頃の作としているが同作は一四年の発表であり、この新人とは中島直人の誤りであろう。川端は「一九三二年創作界の印象」（昭六・一二）以降しばしば中島に言及しており、「約十年間ハワイの小説ばかり」書き続けた中島の「ワイアワ駅」も「文學界」に推薦し（「文芸時評」昭九・二・一）、『ハワイ物語』（砂子屋書房、昭一一・一二）の序文も書いている。南の島の独特な「風俗人情自然」への興味が諸作家の作品からも高まっていたところに、『書きおろし長篇小説叢書』の話―昭和一一年一〇月二三日附秀子書簡に河出書房から行先を尋ねられたとあるのが、この叢書への参加打診だったのかもしれない―があり、「各方面からの支援」の見込みも得て、長篇執筆のための琉球行きが計画されたと推測される。

当時河出書房の編集顧問だった豊島与志雄からの九月三日附書簡には、琉球行きは「よほど慎重に」考える必要があるだろう、自分の方でも機会があったら聞き合せてお知らせする、「書きおろし全集」は一〇月か十一月に出すので原稿を是非頼むとあり、「琉球行きはやめるらしい」（同月一四日神西清宛堀辰雄書簡）という噂も文学仲間の間に流れたようだ。豊島からは「書き下し長篇（河出の）、順調に運んでるやうです。そろそろ、吾々の原稿がさし迫ってきました。あなたの方もどうぞよろしく。」と重ねて原稿執筆を促す書簡（一〇月三〇日附）があった。

そうした中で、一二月には「琉球出身の名士」が川端の為に会を催したいという話が改造社の山本から電話で伝えられ、川端は一八日に沖繩の代議士や拓務省参与官に呼ばれて、山本同席で会うことになった。当時の参与官は沖繩県選出の衆議院議員伊礼肇（明二六〇昭五一。後述）で、「少々大仰で驚いた」と川端は秀子宛一一日附書簡に記しているが、この会合が契機となり、川端の琉球行きもかなり具体的なものになったようだ。山里永吉「壺中天地―印象」（『月刊琉球』昭一三・一。新城栄徳のアーカイヴ「琉文21」より引用）には、「13年の新春早々」川端が来県し、「沖繩を主題とした小説『南島孤島』を執筆するといふ」、この題は「使い古した平俗な響きと内容を思はせ」、川端が「あんな安っぽい題を採用するかどうか、甚だ疑問」だが、この報をいち早く耳にした蔵重久知事（明二三〇昭三七、昭和一〇年六月に沖繩県知事着任）は「東京の本宅から鎌倉の川端氏に電話」したとのことで、川端の愛読者である知事は「川端氏が来県せば、その書齋として官舎の離室を提供したいと筆者に語った」とある。山里（明三五〇一九八九）は「マヴォ」同人として同誌創刊号（大二三・七）の表紙に作品写真も用いられた画家・作家で、昭和二年に沖繩へ帰島後も、菊池へ送った小説「心中した琉球王」が「オール読物」（昭八・九）に掲載される等しており、後述するように、菊池、川端が各々来島した時には案内もしている。

「新春早々」とあった沖繩行きの話は、一三年一月二七日中里宛堀書簡には「川端が琉球に行く前に話がある」、三月二十五日の片岡鉄平宛川端書簡には「来月一〇日過ぎまでの信州滞在の用を済ませて琉球に行く」とあり、高見順との「新潮」四

月号の対談でも、琉球に行くのに写真機を買った、「オヤケアカハチ」<sup>(8)</sup>は国辱映画だと問題になったので自作は「南洋」ということにした、「異国情緒」で見られるのは気になるようだが書きに行くのと優待してくれるらしく、自分の所にも知事が来て、知事官舎への宿泊や船の手配、季節外れの年中行事の実施等あらゆる便宜を図ってくれるそうだと話している。(川端からは蔵重知事に、川端選集(前述)の限定版と北条民雄全集を四月末には送っていることが、秀子との往復書簡から確認できる。)

一方沖繩の「沖繩日報」「琉球新報」(以下、「日報」「新報」と略記)でも、川端の来島が期待を込めて大きく報じられ始めたが、その来島時期は次第に先延ばしになっている。この昭和一三年の関連記事とその概要を、報道順で以下に示す。

\*二月一九日「日報」。川端「来月来訪」。

\*三月二三日「新報」。川端「本月下旬来島」。これまで唾腺傷害で入院手当、選集収録作品選定、婦人公論の長篇書き溜め等で延期を重ねていた。折口が『辻の今昔』、比嘉が『遺老説伝』を川端に寄贈<sup>(9)</sup>した。

\*四月一三日「新報」。当間光男「川端康成氏の琉球旅行 第三回」(全五回)。四月四日、比嘉の紹介で川端に会う約束だったが、この日信州に発つとその当日に鎌倉から電話があった。比嘉によれば「婦人公論」の原稿を書き溜めるのに信州で四、五日過ごしてきた。沖繩へは四月中旬の予定だが月末になるかもしれない、前に在京県人有志が招待した時、「自分は変わった土地を旅行するのが好きで只だ漫然と遊びにゆくんだ」、「軍中蚊帳を吊つてゐる」ようだと笑っていた。「雪国」のような美しい小説を書く人だから人柄も良く個人的につき合ってみても人情が熱く親しみの持てる人で、川端滞在中に川端と親しい林芙美子も五月中旬頃来島する筈だそうだ。林の取材もできなかつたとして、「新潮」対談を紹介。

\*四月一九日「日報」。川端「琉球への旅の前に」(川端全集未収録。四百字詰原稿用紙約四枚分、六段落。以下はその概要) 長篇ばやりでこの節は二百枚三百枚と云うのでないと長い小説とは云わないが、私は短篇小説にも浅くない愛着を持っている。ちよつとしたことを書いて急所をつく短篇の良さは忘れてよいものではない(第一・二段落)。近々のうち琉球

に行く。那覇、首里等から小さな島へも行ってみたい。全部の島へ行っても知れた数である。この旅行は書き下ろし長篇として出す。「南海孤島」の舞台を見に行くようなものだ。「雪国」で北国の温泉場を書いたが、今度は南洋の島を物語中に取り入れる(第三段落)。事実をその通り書いて小説になっていけば名人の業である。スケッチの仕方でも面白いものが出来る例を近頃「綴方教室」<sup>(10)</sup>でみた。小説としては原始的なもので写真のようだが、ピントがかつきりあっている。小説の出発点という気がした。その少女は文章を書くことより、ものを見る目が優れている(第四く六段落)。

\* 同月二六日「新報」。「忙しい川端さん 今月中に立ちたい」。比嘉が聞いたら、皆がせき立てるから今月中には立たないといけませんまいと語っていた。「牧歌」の原稿執筆に忙しく、信州に滞在する。

川端は、「文學界」六月号の「旅中」でも「信州の方は早く一段落をつけて、琉球へ行かねば」と記しているが、四月二七日から五月五日過ぎまで信州に滞在した後、講演等で横光と北海道に行ったり(六月一五日く二〇日)、本因坊秀哉名人の引退碁(六月二六日打ち始め)<sup>(11)</sup>の観戦記の執筆が始まったりもしている。

一方、川端に来県を熱心に勧めていた蔵重はこの六月二四日に鹿児島県知事へ異動、後任の淵上知事は一高同期の菊池に来県を打診し、<sup>(13)</sup>菊池は一五年一二月、文芸銃後運動の講演の折に立ち寄った。山里によれば、この時菊池に会い、その数年後に上京した際に川端への紹介状を菊池に書いてもらったという。<sup>(14)</sup>第一次近衛内閣崩壊(昭一四・一)に伴って伊礼は解任となり、昭和八年に策定された「沖縄県振興一五カ年計画」も戦時体制へ突き進む中で有名無実化した。<sup>(15)</sup>

一四年三月二四日に行われた「文學界」五月号の座談会(片岡鉄兵・林芙美子・中里恒子)の記録では、「川端君なら書下しなら売れますよ」という片岡の発言に続いて、林が「川端さん、琉球行はどうなりました。」と尋ねているが、片岡が「北京へ行つて、恋愛小説を書かうと思つてゐます。」と発言して林や中里が旅行の話をした後、川端が「僕は北京へ行つて、小説を書きますよ。」と言った形になっていて答えが曖昧だが、「新女苑」同月号「わが家の団欒」(第四章で川端全集未収録文

aとして紹介)では、「秋は北京、冬は琉球と今年の旅の予定である」と、まだ琉球行きを諦めていなかった。小島政二郎(第Ⅲ部第二章一 026小島政二郎宛参照)「百叩き」(昭四五・一〜四八・六)には、川端と沖繩へ行く計画を立てたが経済的理由で叶わなかったとあるのは後ろ盾を失って以降であろうか、叢書の方も、各巻末に第一巻として広告されていた川端の『南海孤島』に変わって、一四年一月に深田久弥『知と愛』が刊行されて第一期が完結し、翌一五年からの第二期の広告では川端の巻はなくなった。

こうして、「雪国」とある意味で対を成すはずの、南洋の琉球諸島を舞台にした書下ろし長篇の企ては挫折した。また、やはり旅の「スケッチ」を基にした「牧歌」も、「戸隠の巫女」の部分のみを九巻本選集最終巻(昭一四・一二)に抽出し、「序の口までしか」書けなかった「信州見聞記風」と「あとがき」に記して中絶したが、「旅の小説」としての「雪国」「牧歌」については第八章二で後述したい。<sup>(17)</sup>

## 二 昭和三三年、米國統治下の沖繩行

三三年二月七日「新報」は、「川端が月末頃に來島することを了承した」と第一報を載せた。東京に出張して川端の沖繩渡航実現のため奔走していた沖繩相互銀行頭取具志頭得助(明三八〜昭五三)<sup>(18)</sup>から、日本ペンクラブ会員・龜川正東琉球大学助教授(大五〜二〇一八)へ六日に電報があり、沖繩ペンクラブが招聘し、文化人との懇談会を始め一般人並びに琉球大学生に対して講演することになっている、渡航については民政府当局は内諾を与えているとのことで、「大物」作家の來島はこれが初とあって期待されるとあり、以下、当時日本ペンクラブ会長でもあった川端をめぐって次のような報道が続いた。

\*八日「新報」。「時の人 國際ペンクラブ副会長になる川端康成氏」<sup>(19)</sup>。

\*一日「読売新聞」の「よみうり抄」。川端が今月下旬に約二週間の予定で沖繩を訪問、龜川ら沖繩の文化人の招きによる。

亀川らの提唱で結成される「沖繩ペン・クラブの発会式」に出席する他、各方面の人々と話し合い、戦跡地等を視察する。

\*一二日「新報」。川端は「現在旅券申請中」、八日に日本ペンクラブで同社東京総局記者と対談し、沖繩関係の文書の話から現在の沖繩の生活状態等を熱心に聞き、滞在は一〇日位と話した。

\*二月二六日～三月二日「沖繩タイムス」（以下「タイムス」と略記）。「川端康成 その人と作品」。「近く来島」とあり。

亀川『心に残るあの人この人』（琉球青年乃村、昭五六）に多数掲載されている川端関係の写真（後述）のうち、この時期のものに亀川『北緯二九度線 時評でとらえた琉球十年』（富士書店、昭三三・二）出版の祝電（三月二八日）と五月一三日附亀川宛書簡がある。後者には、「旅券の関係」で四月初めの予定が「病氣」で今日になつたと詫び、<sup>(21)</sup>「五月一九日ノオス・ウエスト」で「一週間か十日の日程」、「スケジュールはなるべく少なく、自由に見物出来ませれば」とあるが、五月の予定も更に遅れた。川端来島の「うわさがたつてから長いことなので、新聞はとうとう「日本脱出」などと書いたものもあつた」という（「タイムス」六月七日夕刊）。

「六月二日に来島予定」と初報道したのは「タイムス」五月二三日である。五月一九日に鎌倉の川端へ電話したところ、「沖繩のことは色々聞いてはいるが」特にコレと取り立てるより一〇日ばかり色々回りたい、沖繩で見たことを題材に何か書くか考えてないが、或いは書くようになるかもしれないと聞いたと伝えている。同紙六月六日夕刊コラム「川端文学と沖繩」でも、政治の匂いのしない日はない沖繩だが、「戦前戦中にまたがって沖繩と関係が深かった川端」が際物に書くことは考えられないし、沖繩人としても望まない、沖繩から何を持ち帰るか期待しないではおれないと記している。こうした思いを背景に、沖繩の「新報」「タイムス」二紙は沖繩滞在中の川端の動向、発言を連日詳細に報道している。それらの記事を軸に、以下沖繩での川端を追っていく。煩雑になるので、記事の掲載紙名・掲載月日等の記載は最小限にとどめ、インタビュー内容も簡略な形で紹介した。また、特に断っていないのは朝刊の記事である。

## 1 戦跡の巡拝、民芸の鑑賞

六月二日、川端は午後一時羽田発、午後四時四〇分頃那覇空港到着。亀川への前日の電報では、滞在は一〇日程の予定。具志頭が東京から案内し、沖縄ペンクラブの亀川や中今信、文化財保護委員会委員長となっていた山里や、戦後帰島していた作家の宮城、沖縄タイムス常務豊平良頭ら関係者多数が出迎えた。空港ロビーでの記者会見では「戦前から伺いたくて古本屋を回って本を買い漁っていたほどだ。体調も悪いし、色々予定もあつて遅れたが、やっと望みが叶った。短い滞在だが色々見て回りたい。講演はなるだけやらないつもりだが、機会があれば沖縄の若い人達にも会って話したい。話し合いによって、文学をやっている人達に少しでも役立てば幸いだ。スケジュールはまだ決めていないが、一日の誕生日は沖縄で過ごすことになるだろう。沖縄の方達の期待に沿うように有意義に過ごしたい。」と話した。この時出迎えた中今（大五）は、亀川と同じく琉球大学助教授で、父は沖縄芝居の名優仲井真盛良、かつて主宰した沖縄演劇文化研究所には、後に沖縄初の芥川賞作家となる大城立裕（大一四）、後述）も研究生として在籍していた。豊平（明三七〜一九九一）は昭和二三年に沖縄タイムスを創立、四一年の「新沖縄文学」（その選考委員を宮城が務めた）創刊にも関わった。<sup>(25)</sup>「意向を聞いてから発表」（「新報」二二日）とされた滞在中のスケジュールは①「新報」三日朝刊、②「タイムス」四日夕刊に、各々一〇日までの分が掲載されたが、後述するようにそれぞれ一部変更があった。

翌三日、川端は二時から山里・亀川の案内で南部戦跡（ひめゆりの塔、健児の塔、島守の塔、糸満幸地腹門<sup>ばるもんちゆう</sup>中の墓、白銀堂等）を巡拝して当時の話を聞き、熱心にメモを取った。「ひめゆりの塔は、映画では岩に囲まれているようだったが案内広い。曇り空で海の鮮やかな色が見えないのが残念だが、戦跡近くの農村も素朴で石垣等の構造も面白い。墓も立派で王様の墓といった感じだ。沖縄全般の感想についてはまだ何も言えないが、いずれ北部等もゆっくり見せてもらおう。」等と話した。



映画「ひめゆりの塔」<sup>(26)</sup>(昭二八・一封切、東映。監督今井正、脚本水木洋子)の原作は前述の石野で、二七年度の興行成績第一位だった。七時から料亭那覇で沖繩ペンクラブ主宰の歓迎会、同人約三〇人が参加。川端の挨拶(原稿用紙一枚分)は前述したが、具志頭、宮城、来島中の内村直也も挨拶した。<sup>(27)</sup>川端は歓談の合間にも踊りを見てよくメモや質問をした。

四日は、朝から具志頭・亀川・山里の案内で琉球大学、琉球放送、博物館、紅房、壺屋の新垣次郎の陶器作製場を訪れた。博物館では琉球古来の陳列品を鑑賞し、約二時間滞在。作製場でも熱心にメモし、「すばらしい民芸をみせてもらった。東京でも沖繩の民芸に接する機会はあるが、現地で鑑賞するのはまたひとしおだ。民芸はその民族のシンボルで、伝来の芸術は末長く保護育成されなければならない。」と話し、路傍のがじゅまるにもいちいち目をとめるなどしたという。夜は料亭新鶴で古典音楽、琉球舞踊を鑑賞した。

## 2 沖繩タイムス主催「川端を囲む座談会」、乙姫劇団

五日は、①②にあつた壺屋、紅房の予定が四日に前倒しとなり、新たに座安盛徳宅<sup>ざやすせいとく</sup>での「川端を囲む座談会」(豊平・宮城・大城・牧港篤三・南風原朝光・池田和・太田良博)<sup>はえぼるちようこう</sup>が組まれた。その模様は「タイムス」八・九日に掲載された(原稿用紙一二枚分)。参加者のうち、豊平・宮城は前述したが、太田<sup>(28)</sup>(大七〜二〇〇二)は沖繩における戦後小説の嚆矢「黒ダイヤ」(昭二四・三)を発表した後、牧港<sup>(29)</sup>(大元〜二〇〇四)との共著、豊平監修で沖繩戦記『鉄の暴風』(初版は「朝日新聞」昭二五・一。改版は沖繩タイムス、昭四五・六)を刊行した。その際米軍とのパイプ役等を果たしたとされるのが座安<sup>(30)</sup>(明三四〜昭四六)である。朝日新聞時代から歩を共にした豊平・座安・牧港は、沖繩タイムス創立時に豊平は編集面を、座安は経営・資金面を担当、牧港は編集同人で、後述の仲本政基も創立メンバーだった。大城(大一一四〜)は、太田や池田<sup>(31)</sup>(昭七〜五三)等と昭和三一年に「沖繩文学の会」を結成したが、当時は県庁職員・琉球大学非常勤講師を勤めながら作品を発表していた。「新

潮」全国雑誌推薦小説特集に「棒兵隊」が採用されたのはこの直後の一二月号である。黒古一夫編『大城立裕文学アルバム』（勉誠出版、二〇〇四・三）に「川端さんが私的な招聘を受けての沖縄訪問であったらしいが、新聞社の肝いりで引き合わされた。一九六五年ごろである。」として掲載された川端と六人での写真は、写っていない牧港が撮った座談会当日の記念写真と推測される。南風原（明三七〇昭三六）は山之口彥と共に沖縄の伝統文化の紹介に尽力した洋画家で、戦後帰島して伝統芸能の振興に努めた。

彼らとの座談会で川端は、「新感覚派時代」の自分の傾向は今とそう違わない、文章は感覚的だったが感覚派ではあまりうまくなかったと振り返り、鹿屋の飛行場に四〇日ばかりいた時の感想を聞かれて「なんとも言えない」と沈黙し、「あの時分は、私も日本が勝ってくれればいいと思っていた。大方は学生で、とても真面目で、気持ちを静めるためだったか飛び立つ直前まで静かに本を読んでいた。自分は今まで小説らしい物を書いておらず、みんなスケッチである。霜田正次の「沖縄島」みたいな、骨格のあるいい物をこれから書こうと思っている。「雪国」等は各国で翻訳されているが、それならもっといいを書いておけばよかった」と顧みている。占領下で書きにくい点もあると言う大城に対し、「とにかく書くことだ。なにも基地問題に限ったことではない。女の甘さを書いてもいい。中城城跡を今日見てきたが、内地にはないああいう城の良さを書いてもいいではないか。」と鼓舞した。二〇二二、三年沖縄では伝統の継承と創造が盛んに問題にされているがと言う豊平に、「伝統は大事でそれから出られない。日本の小説で翻訳されたいずれの物にも、外国人は伝統的な物を感じるらしい。若い人は、どしどし外国の新しい文学の傾向を取り入れた方がよい。とにかく残るようなものを書けばよい。フランスでマルロウとも話したが、小説は一九世紀から下り坂で、今はアメリカが一番いい。スタインベック、フォークナー、ヘミングウェイもいて民族の上り坂で、作品も力がある。<sup>(33)</sup> 沖縄は人情風俗とか確かにいい。沖縄だけでなく日本人にはモーリヤック等西洋の作家のようなしつこいものは書けないし、それほどしつこく追求しなくてもいい。沖縄を題材にした作品は石野や「ち

ぎれた縄」等読んだが、とにかくその本を読んで沖縄に来てみたいと思わせるような本を書いたらよいではないか。そういう小説もあっていい。」と意見した。また海外旅行の体験に触れて、「北京やパリはよかった。戦わずに逃げた方が破壊されないからいい。デンマークも安心出来て良かった。沖縄の博物館もなかなかよい。戦後買い戻してよかった。だんだん値段が高くなる。紅型も近代性があるから古典として残っている。その古典の良さ、近代性を見つけるには多少力が要ると言える。」と話している。

この座談会では、マルロウ（後述）とはサルトルやカミュの話もしたと言及されているが、このことは一〇月発表の「枕の草子」に記された。石野については前述したが、火野葦平の『ちぎられた縄―琉球物語』（小壺天書房）と霜多正次の『沖縄島』（筑摩書房）は共に前年に刊行されている。目取真俊（後述）は、『沖縄島』の毎日出版文化賞受賞（昭三二）が当時の沖縄の書き手に与えた刺激と励ましの大きさを述べている。<sup>(34)</sup>「話し合いによって文学をやっている人達に少しでも役立てば」という川端の沖縄到着時の言葉に力を得て、この座談会の申し出も改めてあったと推測されるが、座談会での発言には、沖縄の文学関係者への理解と応援の気持ちと共に、川端自身の文学観もよく表れている。

夜は予定通りに、石川で巡業中の乙姫劇団へ、具志頭に車で連れて行ってもらった。演目は「中城情話」「薬師堂」「高砂」、舞踊「浜千鳥」「太鼓ばやし」。「女ばかりの琉球芝居」に胸打たれた体験は、秀子宛書簡（全集に五月六日附とあるのは六月六日附の誤り）にも、後の「一所不住」（昭三五・八・二〇）にも書かれている。稲垣真美『女だけの「乙姫劇団」奮闘記』（講談社、一九九〇・一〇）によれば、石川三善座にて開演午後八時三五分、終演一時三五分、終演後の川端を囲んだ座談会では、「薬師堂」より「中城情話」の方がよかった等と話し、直筆色紙も二、三枚贈ったという。

六日は①では北部回り（二泊）、②では空手見学、琉大学生会との懇談とされていたが、懇談は講演会形式となり（後述）、四時からは国映館地下「クラブ国映」で「沖縄の各界婦人との座談会」が約三時間に亘って行われた。七日の「タイムス」によれ

ば、沖縄の印象やヨーロッパの土産話、主に文学や映画芸能についての座談会で、三島由紀夫や岸恵子、石原慎太郎、石原裕次郎も話題に上った。特に舞踊に関心を寄せた川端は、「暇があれば劇団の仲間入りをして各地を巡業してみたい。」とも漏らした。同紙に掲載された出席者一人の中には、亀川や作家新垣美登子<sup>(35)</sup>（明三四〜一九九六）、琉球紅型を復興した渡嘉敷貞子（明四四〜昭四四）、女医千原繁子<sup>(36)</sup>、沖展を設立した大嶺政寛の妻・山里勝子の名等が見える。

七日は、正午から具志頭・宮城・亀川の案内で北部を回った（②には「名護、愛楽園、塩屋、喜如嘉、辺土名」とある）。比謝橋、万座毛では吉屋チル、恩納ナベ<sup>(37)</sup>等女流歌人について色々尋ね、ムーンビーチを経由して名護厚養館で中食後、国頭、喜如嘉へ行き、文化財指定予定の高倉も見た。北部の自然に川端は惹かれたようで、「静かでいい。特に海がきれいで、雨季だというのに天気恵まれて非常に良かった。景色が美しく、そこに適当な人物が浮かべばいい作品が生まれると、沖縄に来てふと思った。」と話している。夜は②の予定通り、名護に泊まった。

### 3 ハンセン病療養所愛楽園訪問と講演「逢い難くして……」

八日は①②とも「コザ、中城城跡、夜政府主催パーティー」だったが、中城城跡は五日に繰り上げられ、当日の「タイムス」には「愛楽園をみてコザ經由那覇へ帰る」と報じられた。①には記載がなかった名護のハンセン病療養所愛楽園だが、当時園内の澄井中学三年だった伊波敏男<sup>(38)</sup>の『花に逢はん』（日本放送出版協会、一九九七・六）は、川端の呼び掛けが書物を読む喜びに誘ってくれたと書き起こされ、続いて「川端先生があさって愛楽園に来られるそうです。学校までお出で下さるそうで、皆さんの作文を是非読みたいので今晩中にホテルまで届けてほしいと連絡がありました」と国語科担任が顔を上気させて教室に入って来た。五日に行われた座談会（前述）で愛楽園に行く予定と言及されているので、②が報じられた四日までにスケジュール調整があり、事前に作文も読み、園内の学校も訪問したいという川端の意向も五日のうちには明らかにされたと推測される。『花に逢はん』

によれば、作文を読んだ川端から「この子（伊波）」と話したい」と電話があったと、八日始業前に校長から聞いたという。同書には、二時間目の終わり頃に川端が園長と総婦長の案内で予防衣も一人だけ着けずに教室に入ってきて、生徒一人一人に声をかけたとあり、職員室に呼ばれて北条『いのちの初夜』の感想も聞かれ、むつかしくて全部は分からないが、民雄の「僕には、何よりも、生きるか死ぬか、この問題が大切だったのです。文学するよりも根本問題だったのです。」といった心に残っている言葉を口にしたら、川端は涙を浮かべて大きくうなずき、伊波の手を握り締めて「あなたは、分かっています。『いのちの初夜』が、民雄の悲しみが。」と言い、伊波の膝をたたいて「たくさん書きなさい。自分の中に一杯蓄えなさい。」と話したという。川端に欲しい物を聞かれて「本」と答えたところ、四週間後に段ボールに詰められた本が届いたことも含めて、川端との出逢いが生き生きと回想されている。

同園の機関誌『愛楽』一〇号（八月発行）には、「講演速記」と末記した川端「逢い難くして……」（原稿用紙約五枚分）が掲載されている。伊波のことも念頭に置きつつ話したであろうこの講演では、来園の経緯も触れられているが、後述するように即興の講演であっただけに、川端の率直な気持ちが出露されている。尚、以下の引用は用字の不統一も見られるが、速記通りである。

私は話ができないから文章を書いているわけでありす。うまく喋ればそれにこしたことはないであります。このたび沖繩に参りましてみなさんにお会いできましたことは大変ご縁だと思っております。私、いつも言うのでありますが、親鸞上人の言葉に「逢いがたくして今、逢うことを得たり、聞きがたくして今、聞くことを得たり」というのがあります。<sup>(39)</sup>（中略）この世で人と人とが逢うということは大変むづかしいことでもあります。日本の人口が八千万おりますが、実際に会える人は数少ないのであります。（中略）私は別に尊い話もできませんし、もともと偉い人間でもありませんが、とにかくこ

ちらにいらつしやるみなさんにお逢いできたことは有難いことには違いありません。(中略)

東京を發ちます前からは是非こちらに寄つてくれるようにとの話がありました。又こちらの亀川さんあたりにも私が来たら連れてくるようにと皆さんからお話があつたようであります。

歓迎の俳句や短歌のプリントを頂いて非常に有難く思っています。その中に北条民雄、云々というのがありますが、北条民雄君は東京の全生園にしまして北条君の書いた小説を私が世間に紹介しましたところが、その小説が非常に有名になつたばかりでなく大変な感動を呼びおこしました。それが私と全生園との縁となつていきます。北条君の小説は(中略)社会と隔てられた一人の人間が非常に思索して、人生をギリギリの処まで考えているのが現れています。それが感動を呼んだのであります。(中略)

私たちが文章を書いているのと、みなさんが俳句や短歌をお書きになるのは同じであります。多少違ふところは皆さんはしじゆう考えずにいられないところにあると思います。そのしじゆう考えずにいられないところから深い詠み方なり、書き方なりが生れてくると思います。頂いたプリントの中にもいいのがあります。(中略)ただ慰めとしてでなく、生きる心としてやつて欲しいと思います。そこに価値があると思います。先程、図書館というところを廻つてみましたが、帰りましたら本でも送りますから、私の代りにして読んで頂けばよいと思います。小さい方たちもありますからお送りします。それから先程、手の不自由な三味線を作つておられる爺さんにお逢い致しましたが、その人から三味線をきかして貰いました。あの不自由な手で立派な三味線をつくり、ひかれるということは辛抱があるのだと思います。(中略)口に筆をくわえて立派な絵を書かれる人がアメリカにいられるようで(中略)ヘレン・ケラー女史は目も耳も口も使えないのに立派な文章を書き、社会事業をやつていきます。みなさんのところには花がたくさんあるようですが皆さんは花をお作りになるのもお好きらしいし、私なんか自殺をしようと思つたことも何度かありますが一輪の花でも咲いているうちは

死なない方がよいと思ったりしています。花が美しく咲いている。それは小さいことではありませんが、その一輪の花にも人生の意義があると思います。

大体、いまの小説家というものは自然をよく見なくなっています。歌や俳句を作る人たちが自然をよく見ているようです。一輪の花でも手にとつてよく見ますと素晴らしい発見をするのであります。そういう発見はただ花だけにとどまらずここの海の色にも、いたるところにたくさんあると思います。そうした発見の中にも私たちは生きるよろこびを見出すのであります。

「一輪の花でも咲いているうちは死なない方がよいと思ったりしています。」と話しているが、この沖縄滞在中も、牧港『沖縄人物シネマ』（前述）によれば、川端は月桃の花が石垣から垂れているのに目をとめ、牧に根掘り葉掘りきいて手帳に書いていたという。美との邂逅に「人生の意義」「生きるよろこび」を見出そうとするこの講演については、第八章及び第九章でも触れたい。この速記録の存在については西村峰龍の言及もあつたが、九月の一一号としたのは誤りである。また西村は指摘していないが、一〇号のグラビアには園内での川端の写真を掲載、「園内日誌」と「あとがき」にも八日に亀川・具志頭の案内で川端が来園したことが記されており、一一号の「感謝欄」には「六〇九月寄贈分」として、川端からの単行本六一冊、児童書三一冊が記録されてもいる。

#### 4 琉球新報主催「川端康成氏を囲んで 文学を語る座談会」

九日は①では空手道場見学・琉球古典舞踊鑑賞、②では自由とされていたが、先の沖縄タイムス主催の座談会と対になるかのように、琉球新報主催の「川端康成氏を囲んで 文学を語る座談会」が琉球料理屋の美栄で、中今、亀川、仲宗根政善（明

四〇（一九九五）に、同社主筆の池宮城秀意（明四〇（一九九五）を交えて行われ、その詳細（原稿用紙約一一枚分）が「新報」二〇、二四、二六日に掲載された。座談会ではあるが、基本的には川端が質問に答える形で進行している。

「地元の人たちと親しく話したというわけではないから内面的なことはいえませんが」と断りながら、川端は沖繩の旅や女性の印象を、「戦争という不幸があつたにしては明るい」、「生きかたの上で健全なものを覚え」た等と語り、こちらで手帳を三冊も求めて各所でメモを取っていたが、沖繩で作品のモチーフを得たかとの問いには、「一応整理しなければならぬが容易に書けるものじゃない」と答えている。当時、仲宗根は琉球大学教授、中今と亀川は同大助教授（前述）だったが、「琉大文学」は「基地意識が強すぎるのでしよう」、「戦争の最中は十歳余り」だから「影響されるのは必然的なもので世界文学が戦争によって大きく変わったのだから」と言い、戦後に読んで力を覚えた海外作家としてはフォークナーを挙げ、「モーリヤック、ヘミングウェイ、スタインベックなどもそうですか、サルトル、カミュなどとは大部ちがいますねえ」と話している。石原慎太郎への批判に対しては「文壇からボイコットされた形でも、精力的にいろんなことをやっている。」と擁護し、沖繩での文学活動が振るわないという嘆きには「文芸雑誌の発刊など資金難だということを知ることが、純粋な文学的向上を図ろうとするなら、沖繩の場合同人の形できびしく批判しあわなければならぬでしょう。」と意見し、「長篇が少なくなった」とか、沖繩から「喜劇、諷刺もの」があまり生まれないといいた悲観的な声に対しても、もしそうなら「日本人は短気だから読者が長篇を敬遠しているのではしう」、「精神的な笑いというものを忘れていくことはいえる」と述べている。

舞踊や民藝にも関心の深かった川端は、乙姫劇団の「中城情話」や踊りはよかつた。妙に優雅で不思議なものを感じた、「足の動きを注意してみると南方というよりむしろ朝鮮のそれに近いような」気がする、「陶器は前から素晴らしいものだ」と「拝見」していたが、紅型も「沖繩人の根強さというのか性格的なもの」を感じたと触れ、沖繩に来てよかつた、創作を「書けるかどうかは帰ってまとめてみなければいえないが、実に美しい島」だ、「豊かな古典を単に原型のまま保存するのではな



くそれに近代性をもたして保護育成することが大事だ」、「秋になったら一度お邪魔して離島やウスデークなどみせていただいで、沖繩をもっとよく知りたい。」と、今後の希望も語っている。

夜七時から川端と鳥海青児の歓迎琉球古典舞踊鑑賞会が沖繩タイムス社主催で行われ、関係者三七〇人がタイムス・ホールに集まった。「こういうような優雅なものを大事にしていくのは大変いいことだ」等と川端は話し、豊平が「この催しは川端さんの一一日の誕生日の祝いと、鳥海さんの第三回現代日本美術展最優秀賞受賞のお祝い」と結んだ。

## 5 「タイムス文化講座講演」

一〇日は①②とも自由とされていたが、夜にタイムス文化講座の講演がタイムス・ホールで行われた。「タイムス」は九日に、「明日三時から社会事業家の沢田美喜と横山初子、七時から川端（演題未定）と鳥海「ヨーロッパ再遊記」と、四段抜きで報じた。川端の演題は当日の記事でも未定だったが、翌一日には「国際ペン大会と外国作家」の内容で聴衆数百人、両氏ともユーモアを交えてヨーロッパとヨーロッパ人、ヨーロッパの芸術と日本の芸術について講演し、一〇時過ぎに終了したと伝えられた。「タイムス」一三日〜一五日には、約一時間に亘った川端の講演要旨（原稿用紙一六枚分）が掲載されている。川端は、「一高に入った頃に白樺派の文芸講演を聞きに神田のキリスト教青年会へ行った」ことに触れつつ、「自分はロレツがまわらない方で講演会等には出ないことにしているから、沖繩でのスケジュールも講演の予定がないのは気を遣ってくれたのだと思った。戦争で大変苦勞なさった皆さんの前で偉そうに講演などという気持ちにはとてもなれないと思ったが、御好意に感動して自発的に演壇に立つことにした。」とまず断り、「愛楽園では患者さん達が簡単な演壇を作って待っていたので話し、琉球大学の学生さん達との懇談会は数百人の学生が集まったので講演をし、とうとう二回演台に立った。」とも打ち明けている。「沖繩のことは内地の新聞も見て、相当緊張していることを予想していたが、来てみて全て物柔らかい印象を

受けたのは意外だった。」と沖縄での印象を話し、前年の渡欧で「痛切に感じたこと」の一つは「日本人は誰も彼もヒジを張って、威張ってせかせかと道を歩いているということ」で、「どうすればよい旅行ができるかと考えて、結局、ゆっくりして、先を急がないことが一番いいという考えに帰着した。」として、幾つかのエピソード<sup>(44)</sup>を紹介している。

「ヒロシマ」を書いたジョン・ハーシーの「東京は、東西の文化のめぐり合いの場所としては、最も理想的な場所である。こんな文化の結婚から生まれる子孫の中には、しかし、見苦しいものもできるだろう。」という言葉を引きつつ、「戦後は、日本の文化がどしどし海外に紹介されている。日本文学の翻訳もその一面を物語っている。敗戦国の文化が戦勝国に浸潤していくのは、いつの時代でもあることで、歴史が証明している事実であって、また、アメリカは色んな文化のるつぼだが、いま西洋と東洋との文化のるつぼになりつつある日本の文化は、アメリカ人にとっても無意味ではない。」と、敗戦国日本の、殊に米国統治下にある沖縄の文化の在り方に対して意見を述べている。

更に、日本で開催した前年の東京国際ペン大会<sup>(45)</sup>での印象として、東欧の共産圏からきた人たちの穏やかだった様子や、特にアメリカの作家を取り上げ、「ジョン・ハーシーなどは日本でちょうど行われていたジラード裁判<sup>(46)</sup>を欠かさず傍聴し、帰国時に自身の原稿料の一部を日本文学に役立ててくれと置いていく」といった風で「日本に相当の関心を見せていた」ことや、「病床にあった」スタインベックが宿泊中の帝国ホテルに忍び込んだ愛読者の少女に対してとった「感動的な」対応、出版社から「とても内気ではにかみ屋」だがよろしくと事前に手紙のあったフォークナーの意外な一面といった秘話の他、エリザベス・ジョン・ウェーン<sup>(47)</sup>「二頭の獅子」に書かれている「獅子」は自分とスペンダー<sup>(48)</sup>だと明かし、スペンダーがペン大会の宣誓書にサインする時、「文学者は宣言を書いてそれにサインをするのは上手だが、それを実行することはすこぶる下手である。自分は宣誓書にサインするよりは、一人でもいいから具体的に隣人を助けたい。九州から北海道まで日本の大学を見て回ったが、日本の学生はとても貧乏で気の毒だったから毎年一人ずつ日本の大学生を選定して月一万円ずつ奨学金をあげたい。」

と申し出たこと、国際ペンクラブ会長のフランスのアンドレ・シャンソンやフランス代表（ロシフコオ公爵夫人）が日本に大変好意的だったこと、フランス国務相のアンドレ・マルロウが「日本のセトモノは実にすばらしい」から気後れすると言いながらフランスの瀬戸物を贈ってくれたこと等、興味深いエピソードを次々と語っている。そして、「沖繩の文学愛好者」にこれだけは責任をもって言えるとして、「日本語でいい小説を書いたら、必ずそれが、世界中で紹介される」と結んでいる。

新聞で報道されたスケジュール①②は一〇日までだったが、一日は誕生日の祝いが昼と夜の二回もあった（後述）。一時からは沖繩ペンクラブが、お別れパーティーを兼ねて川端の誕生を料亭新鶴で祝福した。千原『カルテの余白』（若夏社、昭五三・九）に掲載されている集合写真はこの時のものと思われるが、豊平、山里、千原、新垣、具志頭、太田、牧港、亀川、宮城、池宮城、仲本の他、後に大城と共著『悪石島』（文林書房、昭三六・一）を刊行した嘉陽安男（大二三）と船越義彰（大一一四）二〇〇七。『環礁』同人、乙姫劇団顧問）や、写真家の当真莊平（明四二）等が写っている。また、「ペンをついだお客様」（前述）に掲載された写真のキャプションにも、「こんなに誕生日を祝ってもらったのは初めて」と喜びを語った、新鶴で具志頭、亀川、比嘉那覇薬品社長、山城紅房支配人、新里沖相銀常務、吉田沖繩海上支配人らに囲まれて「楽しい一夜を過ごした」とあり、同じ新鶴で昼夜入れ替えをしたのであろう、二枚の写真の背景は同じ会場のようで、川端の服装も背広着用の有無（前者の写真では着用）の違いだけのように見える。

一二日一時半に川端は那覇空港を出発、関係者多数が見送った。空港ロビーで川端は、「短期間だったのが残念。戦跡も色々みたが、やはり生々しい戦争の跡がうかがえた。しかし那覇の街は大変な復興ぶりだ。近代化とでも言おうか、ローカルなものを塗り替えてしまったのが戦後だが、演劇や舞踊には沖繩の持つ独自の美しさが残っていて、改めて魅了された。帰ったら表だけを見てきた旅行記ぐらいしか書けないだろう。ぜひ沖繩を舞台にしたものを書きたいと思うので今冬にもう一度来る。その時じっくり見せていただくつもりだ。」と語っている。

### 三 沖繩行以後の川端と沖繩

七月一日、日本ペンクラブの例会で、川端は沖繩の土産話を披露した。三日「よみうり抄」によると、「沖繩で一番強く印象に残ったのは旧い日本の健康さが残っていることだ。一日の誕生日には昼と夜と二回もお祝いをしてもらったが、そのとき古い踊りを見せてくれた少女たちの美しさとしとやかさ、王朝時代、万葉時代に通ずる変らぬ人の心が残っていると思った。沖繩に行つて本当の小説が書けそうな気がした。また行きたい。」と話したという。

三五年八月、新潮社版一二巻本川端全集第七巻口絵には、「沖繩にて」として七日の万座毛であろう、メモを取る川端と三人の男性の写真が載せられた。翌九月の全集月報第八号「口絵解説」では、前号の写真の「向かつて右が沖繩出身の作家宮城聡氏、中央が私を沖繩に招待し案内してくれた具志頭得助氏、左が琉球大学亀川教授」と紹介された。亀川『心に残るあの人この人』（前述）によれば、帰京後に届いた礼状には「一期一會」をもじつて人間の不可思議さが書かれていて、送られた川端全集には、一冊ごとに「亀川正東様、一九五八年六月、川端康成」とまめに書いてあったという。同書掲載の川端の「一期一會」扁額の写真には「一九五八六一七」と揮毫の日付も添えられており、礼状と一緒に寄贈されたと推測される。同書には、東京国際ペン大会の前夜祭や沖繩での写真に加え、昭和四三年の年賀状、同年一二月のノーベル文学賞受賞祝いの礼状（第Ⅲ部第二章一 **021中里（佐藤）恒子**宛四三年一二月二〇日書簡解題を参照されたい）、四四年の毎日新聞主催「川端康成展―その人と芸術―」の案内状等の写真もあり、亀川との長い交流がうかがえる。

また時期は不明だが、比嘉によれば、丸の内でひよつくり合つた川端からペンクラブ沖繩支部の招きで沖繩行きが決まつたと聞いて、「今行つても、昔のように見るものはないかもしれない。その代わり今は古典芸能が非常に盛んで、それだけは是非御覧なさい。」と勧め、自分が連絡をとつておいてもいいと話したところ、沖繩から帰つてくると「舞踊がたいへんよかつ

た」と早速礼状をくれたという。

四二年七月、「新沖繩文学」に発表された大城「カクテル・パーティー」が、沖繩の作家としては初の芥川賞を受賞した。川端は、その選評に次のように書いている。

私は迷ふことなく、大城立裕氏の「カクテル・パーティー」を推した。(中略)これは「沖繩問題」を扱つてゐるが、私はその題材のために推したのではない。沖繩に同情して選んだのでもない。むしろ私は、問題小説である点に、問題の図式に乗つてゐるやうな点に、初めはこの作品に多少の疑問を感じたくらゐであつた。／＼しかし、決定した後では、勿論、沖繩を書いた作品として考へられる。また、これはつけたりだが、沖繩の人が「本土」で、なにかいいことが一つでもあればいいと願つてゐる私は、大城氏の受賞がよろこばしい。ほかの選考委員たちもさうであらう。／＼「カクテル・パーティー」は問題の図式に乗つたやうな構成だが、その計算に感情が通り、しかも抑制で強まつてゐる。(中略)「カクテル・パーティー」といふ題名から寓意的なやうで、中国語を話す、日本人、アメリカ人、中国人の交友といふ設定も、現在の沖繩のやうな状況での「国際親善」といふものの限界の悲劇を書くのに適切である。そして、ただ沖繩での問題といふにとどまらない広がりがあるが、この作品から感じられるのは成功である。

川端のノーベル文学賞受賞が決定した四三年一〇月、「タイムス」は「沖繩にも深い関心」として豊平、大城のコメントを一八日、一九日に、「新報」も一八日に大城のコメントを掲載した。豊平は「川端は乙姫劇団に非常に愛着を抱いていた。滞在中に五分間だけ演壇に立つて何か話してほしいと申し入れたところ喜んで引き受けてくれ、予定を二、三〇分も延長して話してくれた。「沖繩は文学の素材が豊富だ。沖繩を素材にぜひ小説を書きたい。きっと優れたものを書けるだろう。」と何度

も口にしていたのが印象に残っており、もう一度来て沖縄を書いてほしい。」と話し、大城は「川端の言葉で印象に残ったのは「沖縄にきて、私のこれまでの作品が習作であったと感じるようになった。私がほんとうの文学を書くのはこれからだ」という言葉で、社会性がないとの批判も為されていたが、土俗的な伝統感覚が現実の激しい社会現象と絡み合いながらたくましく生きている沖縄を見て、これを書けば素晴らしい社会文学になる可能性があると感じ取ったのではないか。それは自分<sup>(49)</sup>が文学で目指していることと無縁ではない。」と述べた。

四四年二月八日、川端と湯川秀樹は京都・都ホテルで記者会見し、世界七人委員会の声明「沖縄問題について本土の同胞に訴える」を発表、沖縄の即時・全面・無条件返還を訴えた。以前から沖縄問題について討議を重ねていた同委員会は、当時国会論戦などで同問題がクローズアップされてきたため、見解をまとめて発表したというが、委員会事務局長内山尚三によれば、<sup>(50)</sup>声明文は事務局案を元にして川端が書いたものだった。沖縄復帰が果たされたのは四七年五月一五日、川端はその一月前の四月一六日に自殺し、沖縄でも大きく報道された。四月二四日の「新報」掲載の亀川の談話には、川端来島に関する話の他、翌月出版予定のエッセイ集に川端の手紙や写真を添えようと打ち合わせをしていたこと、最後に会ったのは一昨年のソウルのペン大会だったこと等が記されている。一方、二五日の「タイムス」は、沖縄国際大学教授玉栄清「川端美学の崩壊」を掲載、これは川端が戦争の影響を少しも受けずに日本の美を追究したとする、やや批判的なものだった。

二〇〇〇年四月一六日には目取真が「魂込め」で、二〇一四年の同日には大城が「レールの向こう」で、川端康成文学賞を受賞した。目取真は、「川端氏は、復帰前の沖縄に来た時にハンセン病療養所を訪れ、入園者の中学生と話して涙したという。社会から疎外された人々に注ぐまなざしに共感したので、受賞はうれしい。」（「朝日新聞」）とコメントしている。

川端の戦前の沖縄行きは、書きおろし長篇小説「南海孤島」の執筆という明確で限定的な目的があったのに対し、戦後の訪問は、日本ペンクラブ会長という立場を背負った面も多く、米国統治下にある沖縄の人々、殊に文学に関わる人たちへの格

別の思いもあった。戦後の川端が書きたかったのは、政治的な問題を越えた「沖縄に来てみたいと思わせるような本」、「旧い日本」の健かさや「変らぬ人の心」を伝えて「生きるよろこび」に繋がるような作であったろうか。川端はまた、土地に取材した長篇を書きあげたいという意欲を持ち続けてもいた。昭和四七年三月初め、かねてから夕刊の連載小説執筆を約束していた毎日新聞の加藤貞夫記者に、「新宿・赤坂・六本木」という題はどうか。私はこの頃あの辺は詳しい」と話したという（『毎日新聞』四月一七日々刊）が、しかし新たな創作の筆は執られぬまま、その一か月後に川端は自殺してしまった。最晩年については、第九章二で改めて述べたい。

## 注

- (1) 九月の『文學界』同人雑記にも同様の記述が見られた（前述、第二章三）。
- (2) 『沖縄の歲月 自伝的回想から』（中公新書、昭四四・一。後、『比嘉春潮 沖縄の歲月 自伝的回想から』日本図書センター、一九九七・一二）。以下の比嘉の証言は同書によるが、記憶の誤りも見られる。
- (3) 大岡山書店（大・四・四）。大正一〇年に柳田が沖縄から帰って『朝日新聞』三〇五月に連載したのを纏めたもの。翌年柳田が創設した南島談話会には、折口や比嘉、後述の仲宗根政善もいた。
- (4) ハワイから小波津幸秀（明二〇〇〇昭四二）も来た歓迎会と合わせて行ったとある。小波津は大正一五年に布哇<sup>はわい</sup>沖縄海外協会を設立し、同理事長を務めた。
- (5) 加藤守雄「異郷の生」（慶應義塾大学国文学研究会編『折口学と古代学』桜楓社、一九八九・一一）。折口の沖縄行に関しては、西村亨『折口信夫とその古代学』（中央公論社、一九九九・三）、小川直之『折口信夫と沖縄』（國學院大學院友会沖縄県支部、二〇〇八・一二）等。宮城聡「文学と私」（『新沖縄文学』昭四二・一一）に、折口が初めて沖縄

を訪れた際（大10・七。注（3）の柳田の連載終了直後である）に案内したことが回想されている。

（6）『沖繩の文学―一九二七年―一九四五年』（沖繩タイムス社、一九九一・三）。

（7）下賀茂温泉ホテル滞在中の川端宛九日附秀子書簡にも、この電話の件が言及されている。

（8）重宗努・豊田四郎監督、伊波南哲原作、八田尚之脚本、東京発声映画製作所。前年に封切られている。

（9）前者は来和雀著、昭和九年に那覇市で発行。「沖繩の歓楽郷」辻遊郭に関する書。後者は王府時代に編纂された説話集で『海南小記』でも取り上げられたが、初めて印刷されたのは昭和一〇年、島袋盛敏校訂訳注、学芸社。

（10）豊田正子『綴方教室』（中央公論社、昭二二・八）。前述、第六章注（10）。

（11）引退碁の観戦記は、後に小説「名人」の素材として活かされた。拙稿「川端康成と囲碁―全集未収録文「坂田名人に捧げる」から遡って」（川端康成学会編『川端文学への視界28』銀の鈴社、二〇一三・六）及び第Ⅲ部第二章一〇二〇砂

子屋書房宛・094尾崎一雄より、も参照されたい。

（12）二七日の「新報」には「文学知事のお引越し 蔵書の数何と五千冊」とある。

（13）「琉球新報」は早くも一月二六日に「菊池近く来県」と報じたが、この時は実現しなかった。菊池は「話の屑籠」（昭一六・二。一月二二日執筆）に「一高時代の知合淵上房太郎君に頼まれたから」「途中沖繩に寄る」と記している。

（14）『私の戦後史 第二集』沖繩タイムス社、昭五五・六。来島時に菊池が山里を探していたことが、牧港『沖繩人物シネマー会った人、すれちがった人』（ポーターインク、二〇〇四・六）にも書かれている。

（15）金城正篤他『県民百年史四七 沖繩県の百年』山川出版社、二〇〇五年。

（16）『南海孤島』は、第一〇巻の葉山『海と山と』（昭一四・二）まで巻末広告に掲載されている。

（17）「雪国」については第六章二及び第八章四、「牧歌」の執筆経緯については第二章及び第八章二でも述べた。



- (18) 昭和二八年に沖縄相互銀行頭取に着任、この翌三四年に沖縄初のテレビ局である沖縄テレビ放送を創立、その初代表取締役社長、琉球漆器の老舗紅房社社長等を務めた。「オキナワグラフ」三三年八月号の「ペンをかついだお客様川端康成氏来島」に、「篤之介のペンネームと感覚的な詩で知られる文学頭取」の「数次にわたる交渉の熱意が実を結び」、川端が来島したとある。
- (19) 副会長就任が正式に決定したのは三月二十七日、ロンドンの国際執行委員会においてである。
- (20) 『心に残るあの人この人』(前述)に、「出版祝賀会におくられた祝電」とある。
- (21) 「病気やパスポートの関係で」延びていたと、六月三日の「タイムス」も報道している。四月一六日附サイデンステッカー宛川端書簡には、四月には夫婦とも入院して川端は手術せずに退院したが、胆嚢を切るか迷っている、昨秋合衆国に行けるはずが病気で行けなかったとある。四月二二日高見宛書簡時点では「五月に沖縄」となっている。沖縄から戻った後、川端年来の腹痛が胆石症(後述、第九章二)によるものと八月に判明、一〇月に入院した。
- (22) 「朝日新聞」六月二日。翌日の「よみうり抄」では〇時四五分発。
- (23) 自筆年譜にも六月一日出生と記されており、川端は長くこの日と思い込んでいたようだが、一四日誕生を知らせる父英吉の書簡もあり、戸籍面でも一四日である。
- (24) 各々の略歴・業績は、亀川は「琉球大学語学文学論集」(昭五六・一二)及び「北九州大学外国語学部紀要」(昭六二・一一)に、中今は「琉球大学教育学部紀要」(昭五八・一)に掲載。中今は後に琉球博物館館長等務めた。
- (25) 元朝日新聞那覇支局長、一県一紙に統合後沖縄新報編集局長として沖縄戦を体験した。沖縄伝統文化の復興に努めたとして、昭和四七年に菊池賞受賞。「豊平率いる沖縄タイムスは米軍統治下にあった沖縄のあらゆる領域の文化の奨励者、庇護者であった」とは、朝日新聞琉球特派員を務めた筑紫哲也「人間巡礼(二〇) 豊平良頭 初めての「先輩」

〔二冊の本〕二〇〇四・五の弁である。

- (26) 姫百合学徒を引率した仲宗根政善（後述）が『沖繩の悲劇』（華頂書房、昭二六・一）を纏めている。
- (27) 第一回芥川賞予選に川端は内村を残していたことが、選評（昭一〇・九）で分かる。この夜沖繩演劇の印象を語った内村は、三五年三月に戯曲「沖繩」を執筆、上演した。同作は岡本恵徳『現代文学にみる沖繩の自画像』（高文研、一九九六・六）でも取り上げられている。
- (28) 『太田良博著作集5 諸事雑考』（ボーダーインク、二〇〇七・一二）に年譜あり。『鉄の暴風』は、民政府から沖繩タイムスに移った後に刊行した。この当時は、琉球放送局に務めていた。
- (29) 『新沖繩文学』初代編集長。『叙説』（一九九七・八）に宮城義弘編年譜あり。
- (30) 「新報」では監査役。二九年に沖繩初の放送局である琉球放送を設立。
- (31) 池田の遺作集『池田和選集』（沖繩タイムス社、一九八〇・一一。年譜あり）の刊行会代表は、沖繩詩人グループ『環礁』の同人仲間だった牧港である。
- (32) 鹿屋の基地体験に関しては後述、第九章一1。また「虹いくたび」（昭二五・三〇二六・四）では、百子の「純潔」を奪った一週間ほど後に、「鹿屋の航空基地に移動して、沖繩で戦死した」啓太が描かれている。拙稿「川端康成「虹いくたび」論」（前述、第I部第二章注（10））も参照されたい。
- (33) 後の「自慢十話」（昭三七・八）では、この三大作家も晩年には芸術的衰退をしたと書かれるに至っている。
- (34) 「米民政府時代の文学」（『岩波講座 日本文学史 第一五巻』岩波書店、一九九六・五）。大城の他、戦前からの山里・宮城・新垣（後述）や戦後の太田・池田にも言及。近代沖繩文学に関しては、岡本恵徳等の論考がある。
- (35) 著作等については三木健編『新垣美登子作品集』（ニライ社、一九八八・五）。沖繩の美容師第一号でもあった。

- (36) 後述の『カルテの余白』の他、『私の戦後史 第二集』（前述、注(14)）に回顧録を掲載。
- (37) 共に琉球王国を代表する歌人。吉屋チルは遊郭に売られて行く時に比謝橋で詠んだ歌が、恩納ナベ（恩納村出身とされる）は国王が万座毛に立ち寄った時の歌が有名である。
- (38) 二〇一九年六月二三日、BS1スペシャルに出演し、愛楽園での川端との邂逅を語った。拙稿「NHK特集番組「三島由紀夫×川端康成」をめぐる」（「群系」会報「二〇一九・七」）を参照されたい。『花に逢はん』は沖縄タイムス出版文化賞受賞。改訂新版（人文書館、二〇〇七・九）では、後述の職員室の場面が裏表紙に印刷され、大城貞俊「解説」でも言及された。
- (39) 川端は「東京都知事選挙記」（昭四六・四・一）でも、この親鸞の「教行信証」総序の言葉を引用している。
- (40) 川端康成学会例会口頭発表「川端康成と『癩』（二〇一一・一二）。療養所機関誌には、西村が挙げた他にも東條耿一宛書簡（昭一三・一〇・三附。「多磨」二〇〇五・五）、「愛生」創作選評（昭一八・一〇、第六章で紹介）等全集未収録資料が見られ、『詳細年譜』で紹介した。尚、北条については前述、第二章二及び第六章一・二。
- (41) 後に琉球新報社社長、沖縄テレビ会長。
- (42) 五穀豊穡を願って旧暦八〜九月に行われる女性の円形舞踊。
- (43) 後述のジョン・ハーシーと共に、第九章一で触れる。
- (44) ローマの郵便局の挿話は、後に「旅のおもしろ」（昭三七・八・六）にも書かれている。
- (45) 『国際ペン大会議事録』（日本ペンクラブ、昭三三・一〇）には前年の大会（後述、第三部第二章一 **059 河村敦子** 参照）における川端の**開会式・閉会式の言葉**（いずれも**全集未収録**）等を収めており、合わせて参照されたい。尚、「新潮」三二年一〇月号に発表された「開会の辞」は開会式の言葉（その原稿の写真が日本近代文学館編『定本図録 川端康

成』(世界文化社、昭四八・一)に収められている)を基に改稿したものである。

- (46) 三二年一月三〇日、群馬県の在日米軍演習地内で兵士ジラードが日本人主婦を射殺した事件。米陸軍が米軍事法廷での裁判を主張する等、アメリカ側からは強い反発があった。

- (47) 高見宛四月二二日書簡に、五月沖繩の予定だが一日のスペンダーの会には行くと記されているが、これは日本ペンクラブによるスペンダーの来日歓迎レセプションで、「ヨオロッパ」(昭三二・八)には、スペンダー等がロンドンでカクテルパーティーを催してくれたことも書かれている。

- (48) 三三年元日にNHK国際放送を通じてフランスに向けて放送された「新しい年への挨拶」で、川端は国際ペン大会で両国文化の親愛が強まったと述べ、日本ペンの会で「パリ評論」のロシフコオ公爵夫人の「日本の十日間」を読み合い、自分は今マルロウの「芸術的創造」を読んでいること、マルロウやシャンソンの住まいを訪れたこと等に触れている。公爵夫人については、同日の日本経済新聞に「世界の佳人」も書いている。シャンソンは、「私のまたとない友人は今も昔も川端」と後年のアンケート(「海」昭四四・六)に記している。また小松清の紹介でマルロウと会ったことは、「ヨオロッパ」「岸恵子さんの婚礼」「パリ郷愁」等に記されており、「鎌倉の書齋から」(昭三四・七・一)には、川端を見舞ってくれたことが書かれている。三三年一月八日夜に来日したマルロウは、過密なスケジュールの中で翌日東大大本外科に胆石で入院中の(前述、注(21))川端を見舞い、予定時間が延びる程のなごやかな再会ぶりだったと、「読売新聞」九日、「朝日新聞」一〇日に報じられている。

- (49) 「朝日新聞」四四年二月九日。七人委員会等について詳しくは後述、第九章一2。

- (50) 読売新聞文化部『実録川端康成』読売新聞社(昭四四・一)。

- (51) 前述の『心に残るあの人の人』のことか。

## 第八章 川端康成における芭蕉／「雪国」の《天の河》再考

研究資料としての内容見本類の特殊性と有効性については後述（第Ⅲ部第一章）するが、次に紹介する推薦文は、久松潜一・井本農一責任編集『古典俳文学大系』（集英社、全一六巻。昭四五・三・一〇～四七・八・三〇）の内容見本（二月一日第一回配本」とある版。完結後の版では川端の文は省かれている）に掲載されているが、川端研究でも看過されてきた川端全集未収録文である。

### 「古典俳文学大系」に―一般の教養書としても座右にすすめる―

芭蕉の「ゆく春を近江の人と」の句（猿蓑）について、去来は「風流はおのづからその場にあるものを」と言ったそうだが、ゆく春、近江のように、その場、その時を知るのが美のめぐみの極致といってよいだろう。ふいに思いがけない美に出会うことがある。このような美との邂逅のねうちをさとするのが詩であり、文学ではないかと思うことがある。それを即座に短くて的確に表現できる詩型を持っている俳人はうらやましいかぎりである。

じぶん勝手な鑑賞者に過ぎないわたくしにとつても、即吟性に生きる俳句は、その場その時に身をさらす恐ろしい芸術に思えることがある。芭蕉はこの恐ろしさに自分をきたえぬいて、わずか十七文字で表現される世界を、驚くほど深く、ゆたかに、強いものにしてしまった。彼にとつては俳句は移り変わる季節折々の月や花や雪の美しさと彼の詩心と、あいだに発した火花であったと思われることもある。しかも森羅万象から人事百般に至るまで、季節というその時、その季節によつてとらえるところに、日本の心が脈々と流れている。俳句が芭蕉を頂点として、今にいたるまで、榮えに榮えているのは、簡潔な詩型内容のゆたかさ、季節の心にふれるよろこびなど民族性にならなっているからである。

文明が加速度的に躍進する七十年代には、人間はその激流に押し流されかねない。断絶が深まるほど、芭蕉をはじめとする俳人が詠んだ自然の美しさと人間を愛する心が貴重になる。俳句の意義が改めて見直されねばならないとき、「古典俳文学大系」のように良心的な企画が世に問われる。専門家だけでなく、一般の教養書としても座右におかれることをおすすめする。

この「内容見本」はB五版二二頁で、一頁目に井本「編集のことば」、二頁目に顔写真入りで川端の文、三〇八頁目に麻生磯次・杉捷夫・高木市之助・山本健吉・山口誓子・高橋義孝の推薦文を掲載の後、組見本・全一六巻内容・資料が示されている。責任編集者の久松は川端の一高時代の恩師で、前年末に発足した川端文学研究会（現・川端康成学会）準備委員会の会長（五月に研究会発足後は初代会長）となっており、そうした縁もあって川端はこの推薦文を書いたかと察せられるが、単なる推薦にとどまらず、川端自身の民族観や時代観―川端没後であるが、松林尚志「現代俳壇の芭蕉ブームと蕉風表現」（『解釈と鑑賞』昭四七・九）は、当時の芭蕉ブームの要因を、太平爛熟の世と近代文明の行き詰まりに求めた―も絡めた俳句観、ひいては文学観がよく表れている。

俳句は「芭蕉を頂点」とすると川端が戦前から繰り返し述べていたことは後述するが、この前後は、ハワイ大学での公開講演「美の存在と発見」（昭四四・五・一、後述<sup>29</sup>）やサンフランシスコでの移住百年記念週間の特別講演「日本文学の美」（同・九・一七、後述<sup>30</sup>）で芭蕉を取り上げた他、台北のアジア作家会議での講演では特に「源氏物語と芭蕉」（昭四五・六一六、後述<sup>32</sup>）と題し、芭蕉の思想や旅には杜甫の影響が見られる等とも話している。川端文学と古典との繋がりの深さについて<sup>33</sup>はしばしば指摘されてきたが、論考となると源氏物語関係に集中している。芭蕉への関心にいち早く着目したのは久保田晴次<sup>33</sup>だが、三七巻本全集刊行以前でもあったため、川端の芭蕉言及作として挙げ得たのは戦後の「しぐれ」「私の考へ」

「ほろびぬ美」「美の存在と発見」（後述⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲）の四篇のみで、戦中から芭蕉を受容した保田與重郎らとは自ら異なると結論している。また張月環「芭蕉の捨子に対する川端康成の心情」（一九九九・三。後『川端康成の美の性格』（サン・エントープライズ、二〇〇一・一一）に収録）は芭蕉の「富士川の捨子」（野ざらし紀行）に触れた「故園」（後述⑲）を取り挙げ、「みづうみ」や「古都」の捨子の発想もこれに端を発していると論じているが、川端が「芭蕉から直接の影響を受けた」のは「捨子の発想」だけだと限定し、「千羽鶴」や「山の音」で異性を「捨てる」のも同列に論じているのは肯定し難い。

これまでに出版されている二種の川端全集索引では、芭蕉の名が見える作は三四作にのぼる。但し、両索引では漏れているが「大正九年 読書ノート」の九月二日にも「芭蕉「奥の細道」」の記載もある。両索引掲載作のうちごく断片的な言及等は除いて、両索引の漏れも補えば、川端が芭蕉を取り上げたものとしては、以下の①②③④を挙げることができ、作家以前から晩年までの広範囲に亘っていることが、まず確認できる。本稿ではこれらに関連事項も加え、更には芭蕉を踏まえて加筆された「雪国」終章の問題にも踏み込むことで、川端における芭蕉の意味を考察したい。

- ① 大正九年九月二日 「大正九年 読書ノート」
- ② 一二年一二月二六日 「遺産と魔」（「時事新報」）
- ③ 一三年三月 卒論「日本小説史小論」（前述、第I部第二章二）
- ④ 昭和九年六月 「作家と作品」（「中央公論」）
- ⑤ 同年九月二八日 「詩人の嘆き―文学全体の問題として」（「東京朝日新聞」）
- ⑥ 一一年三月二一日 「本に拠る感想」（「東京日日新聞」）
- ⑦ 同 年三月 「雑言」（「文藝懇話会」）

- ⑧ 一二年六月～一三年二月  
小説「牧歌」(「婦人公論」)
- ⑨ 一二年一〇月  
講演「信濃の話」(文化学院夏季講習会、「文藝」)
- ⑩ 一五年一月～九月  
小説「旅への誘ひ」(「新女苑」)
- ⑪ 一六年八月  
小説「天の河―雪国のつづき」(「雪国」九)(「文藝春秋」)
- ⑫ 一七年一二月八日～一五日  
「英霊の遺文」(「東京新聞」)
- ⑬ 一八年五月～二〇年一月  
小説「故園」(「文藝」)
- ⑭ 一八年七月二〇日～一〇月三一日  
小説「東海道」(「満州日日新聞」)
- ⑮ 一九年三月  
「真珠船」(「読書人」)
- ⑯ 二四年一月  
小説「しぐれ」(「住吉」連作二)(「文藝往来」)
- ⑰ 同年一〇月一〇日  
「芥川龍之介と菊池寛」(『現代日本小説大系』河出書房)
- ⑱ 二五年三月一五日  
あとがき「天の象徴」(横光利一『寢園』細川書店)
- ⑲ 同年一一月一〇日  
『新文章読本』あかね書房
- ⑳ 二六年八月  
「私の考へ」(「世界」)
- ㉑ 二七年四月  
「新文章論」(「文學界」)
- ㉒ 二八年七月  
「初夏」(「世界」)
- ㉓ 三六年一月～三八年一〇月  
小説「美しさと哀しみと」(「婦人公論」)
- ㉔ 三六年四月二〇日  
「横光君の故郷」(『日本現代文学全集六五 横光利一集』講談社)
- ㉕ 同年八月一七日～一八日  
「青野さんのこと」(「東京新聞」夕刊)



②6 三八年一月一日 「宿駅」(「河北新報」)

②7 四四年四月二八日 「ほろびぬ美」(「朝日新聞」)

②8 同年執筆 「日本美の展開」<sup>(5)</sup>

②9 同年五月一日 特別講演 「美の存在と発見」(ハワイ大学、五月三日「朝日新聞」)

③0 同年九月一七日 特別講演 「日本文学の美」(サンフランシスコ、「毎日新聞」)

③1 四五年二月一八日 『古典俳文学大系』第一回配本

③2 同年六月一六日 推薦文 「『古典俳文学大系』に――一般の教養書としても座右にすすめる」

講演 「源氏物語と芭蕉」(アジア作家会議、一九九九年六月「新潮」)

### 一 「不易流行」と故郷喪失―初期の評論―

川端は大学在籍中の②「遺産と魔」で芭蕉の「不易流行」(三冊子)に触れ、③卒論「日本小説史小論」でも「不易の美」と共に「藝術の変遷性」としての「流行」の重要性を論じたが、以降は昭和九年まで芭蕉への言及は絶えている。大正末に新たな「文藝時代」を目指して旗揚げした川端は、西欧文学を積極的に学んだが、やがて「今日の文学は故郷を失つてゐる」(「都会と田舎」昭九・一〇、「長篇小説評」同・一一・一六)と改めて意識せざるをえなくなってきた。その時代的・個人的背景については前述したが(第六章一②)、小林秀雄「故郷を失つた文学」(昭八・五)等が提起した日本近代文学、殊に小説の問題に対して、④「作家と作品」では瀧井孝作と同じく宇野浩二は芭蕉風を愛していると評し、⑤「詩人の嘆き―文学全体の問題として」では「万葉集」や芭蕉を老年の詩と思うのは疑問だとして芭蕉に言及している。また⑥「本に抛る感想」(昭一一・三・二二)では、「近頃必要あつて」「日本の古典文芸を読み散らした」が、「万葉や芭蕉の古きをたづね

て「新しい短歌や俳句が興ったようには、「日本の古典」、「特にその小説を改めて探ることによつて、この後の日本の小説道を誘ひ得るか。私は先ず悲観的である」と述べ、同月の⑦「雑言」では、「文学は詩に発し詩に極ま」との前提に立って「俳句と小説の関係」について論じ、芭蕉などの詩精神も「日本文学の伝統に苗床を持つ」と触れている。同年の「自然描写」（一〇・二）でも、「俳人や歌人は古風の言葉に縛られながら」「散文家の自然描写より反つて鮮烈」だが、「散文家にはまた別な道があらう」と記しているように、これらの文章から立ち上がってくるのは、日本の古典ではむしろ芭蕉らの詩（韻文）に「不易」の美を感じつつも、それとは異なる小説独自の「流行」の道を模索している川端の姿である。

## 二 「旅の小説」の試み―「牧歌」「旅への誘ひ」「東海道」／「旅情」から「旅愁」へ―

「旅人の心にも似よ椎の花」（続猿蓑）―昭和一二年六月から「婦人公論」に連載した⑧「牧歌」（以下第二章三参照）の序章では、芭蕉「続猿蓑」の句の引用に続いて、「旅人である作者」は信濃に生きる男女を「旅情で眺める」に過ぎず、「生活に深く触れて描き出すこと」は難しいと述べ、芭蕉と同じ「旅人」である「作者」の視点と限界がまず明示された。それは連載予告である「作者の言葉」（前述、第二章で全集未収録文②として紹介）でも、一年続けば「信濃の風物の牧歌暦」とはなるだろうが、「旅人の眼は、その土地と人とに深く触れることがむづかしく、皮相に流れ勝ち」とあらかじめ断られていたのとも符合する。精力的に実地踏査や文献渉猟を続けた川端は、芭蕉に関して他に「更級紀行」の句「月影や四門四宗も只一つ」も引き、軽井沢集會堂での講演⑨「信濃の話」（昭二一・一〇、前述、第Ⅰ部第二章三）では「野ざらし紀行」の句「馬をさへながむる雪のあした哉」にも言及している。

翌一三年に刊行を開始した改造社版選集は作家生活一五年の決算でもあったが、川端は五月刊の第二巻「あとがき」で、同巻には「伊豆の踊子」等「旅の小説」を集めたが、「雪国」や「牧歌」は「旅の小説が少しく育つて来たもの」で、「この

旅の小説といふもの」に今後は尚意義を認めているいろいろ試みたい、それは「日本の故郷をもとめてゆく巡礼の心」であり、「古来の日本の文学」の著しい特色の一つは「旅情」といふより「旅愁」だと、「牧歌」の序章で記した「旅情」（前述）は「旅愁」の自覚へと深められ、それは戦後の「哀愁」（前述、第六章）へと連なっていく。同月号の「牧歌」中でも、戸隠の少女の「日本の故郷を書かうとお思ひになつて、奥信濃までいらしているんですね。」との問いかけに対して、「作者」が「故郷が書けたらいい」がどの故郷も「ただ素通りして歩いて、死ぬこと」だろう、「あさましい根性」だと答える場面が苦々しく描かれている。この連載は同年末をもつて一年半で終了し、選集最終巻の第九巻（昭一四・一二）には、「信州見聞記風な」「牧歌」は「序の口までしか」書けず、「完成はいつの日か知れぬ」と「あとがき」に記して、「戸隠の巫女」の部分のみが抽出して収められた。また、「雪国」「牧歌」といった「旅の小説」の延長線上に、数年がかりで企てられ、民俗学的な勉強や資料収集も行っていた書下ろし長篇「南海孤島」が、琉球行きが叶わずに挫折したのも同じ頃だった（前述、第七章）。

「東海道の一筋も知らぬ人、風雅に覚束なし」（三冊子）―選集完結の翌月、一五年一月から連載が始まった⑩「旅への誘ひ」（以下、第四章二、三参照）は、「出発の章」「箱根・熱海の章」「蒲郡の章」「東海道の章」から成る構成にも明らかな「旅の小説」だったが、最終章「東海道の章」の冒頭で、箱根から届いた明子の絵葉書の書き出しとして置かれていたのがやはり芭蕉の言葉であった。「神秘（仮題）」（第四章で全集未収録文cとして紹介）で「女性のうちにある聖なるもの」を書いてみたいと予告された当初は、「地に伏したいやうな悲しみ」を呼び起こさせる令嬢明子の聖性を描くことに主眼があったと考えられるが、「旅への誘い」という新たな題の下、明子もまた「旅をしてゐるのではなくて、故郷をさがして歩いてゐるのかと思ふ時がある」と作家上杉に告げる《旅愁》を抱いた人物として登場することとなった。同章開始と同じ「新女苑」七月号の「コント」欄選評で「古い旅行記など」をこの頃少しづつ読み、「昔の人がどういふ心で旅をしたか、日本らしい旅はどうであつたか」知りたいと思っていると記しているのも注目されるが、川端自身、横光・片岡との春の旅以降、芭蕉の

言葉に促されたかのように、幾度も東海道を旅している。同じ七月の「文學界」発表の「旅中片信」には、東海道を歩きながら岡本かの子の「東海道五十三次」を繰り返し読んだこと、吐月峰芝屋寺の僧が川端のリュックの重さに驚いたが、中に入っていたのは「東海道の参考書」であったこと等も記されている。

古典への傾斜が顕著になっていく最終章「東海道の章」では、「東海道を往来した昔の人々の亡霊」が「誘ひ出すのか」、「放埒無頼の徒」とも「この世の通行手形のない人間」とも自ら思い做していた作家上杉も明子を追って旅立つのだが、明子の《旅愁》の内面―戦後の「みづうみ」で、銀平に追われる宮子の《魔》にも繋がっていると考えられる―は明かされぬまま、「明子のうしろ姿が見えたら」黙って見送って「東京へ帰ろう」と上杉が思う九月号で、作は閉じられている。

同章を活かしたのが「想を練ること二年有予」と予告された⑭「東海道」<sup>7)</sup>で、一八年七月二〇日から満洲日日新聞で連載された。この「東海道」では、東海道筋の旧家に生まれ、『日本の旅人』の著もある、「詩人になり損ねた」国文学者植田（川端自身の陰画的人物と言えよう）を設定することで、その読者として明子を再登場させ、「西行の和歌における、宗祇の連歌における（中略）其貫道するものは一なり」という芭蕉「笈の小文」等も新たに盛り込まれることとなった。

だが戦局も悪化し、長い休載（九月三〇日―一〇月二四日）の後に一〇月末で、この連載は終了した。その直後の片岡宛書簡（昭一八・一一・一九）で川端は、「かなり本を読ん」だが「新聞で追はれて」消化できず、「ゆつくり書き直す事にした」と記している。戦後の『猿蓑』『奥の細道』寄贈に対する杉浦正一郎宛礼状（昭二六・七・二三）でも川端は、「東海道といふ小説を書く事になり、八月から少しづつ歩いてみるつもり」、「随筆風のもの」になるかと思うと告げており、川端は実際に八月、九月と箱根に行っているのだが、養女政子宛に「仕事は出来ない、書くこともない、頭が働かない」（同・九・一〇）と漏らしてもいる。後の⑯「宿駅」<sup>9)</sup>（「河北新報」昭三八・一・一）では、戦争中この小説のために東海道を歩いたり宿駅に泊まったりした際に念頭にあったのは、「東海道の一筋も」という芭蕉の言葉（前述）だった、戦争の激しい時で、「満

州国にゐる日本人たちに、故国の風雅を伝へたい」と念じたと回顧されてもいる。しかし、新たな「東海道」は遂に書かれることはなかったのである。

### 三 捨子の「かなしみ」と旅人芭蕉―「故園」の〈私〉の叫び―

「東海道」連載期間を覆う形で「文藝」に断続的に発表されたのが⑬「故園」(前述、第六章一三)で、養女を貰うために故郷の村近くを訪ねたことを発端として、〈私〉の幼時が回想されている。その第一〇回、「東海道」連載終了の翌一九年の一二月号では、次のように記している。

私は祖父が死ぬ間際に藤村詩集などを音読してゐて、人の同情を失つたけれども、富士川の捨子が人の同情を惹いた泣声と同じ叫びであつた。悲しみの声といふよりも生の叫びであつた。

以下、「あはれみの目で見られ過ぎて来た」「幼い私」と絡めて、「野ざらし紀行」富士川捨子の段が大きく取り上げられている。この段を書いた芭蕉の胸に、愛する女(寿貞)をすて、子供をすてて「生きてゆかねばならない自分の運命」への痛恨を広末保が読んだのも、「捨子とは芭蕉にとつて、自分自身の問題」と山本健吉が論じたのも戦後のことだったが、それらより早く「かなしみは芭蕉のうちにあつた」と戦時中の「故園」の〈私〉は看破していたのであり、「捨子」とは家族を捨てて孤独な《旅》を続ける芭蕉であると共に、「富士川の捨子」の泣声と「同じ叫び」をあげ、「月下の旅舟に遠い笛を聞く」孤児としてこの世に遺棄された自分自身でもあると痛烈に感じていたのである。詩人芭蕉と語り手の〈私〉とを重ねていく視線は、前項で辿つたように芭蕉を柱とした「旅の小説」で既に準備されつつあつたが、迫り来る祖国日本の存亡の恐れの中

で、「生の確証」「絶対の真実の自分」を求めて幼年時代へ遡行してゆく自伝的作品「故園」において、芭蕉と同じく、ただ一人この世に投げ出されて漂泊する「かなしみ」（旅愁）に向き合い、表現する者として、川端が自覚を深めていることに注意したい。尚、他に戦中のもものでは、⑫「英霊の遺文」（前述、第六章一三）で芭蕉の死が話題になっており、⑬「真珠船」でも「宗祇は詩人として芭蕉とは径庭があらうけれども」と言及されている。

#### 四 「雪国」―《天の河》の加筆と改稿―

ああ、天の河と、島村も振り仰いだとたんに、天の河のなかへ体がすつと浮き上つてゆくやうだつた。天の河の明るさが島村を掬ひ上げさうに近かつた。旅の芭蕉が荒海の上に見たのは、このやうにあざやかな天の河の大きさであつたか。裸の天の河は夜の大地を素肌で巻かうとして、直ぐそこに降りて来てゐる。恐ろしい艶めかしさだ。

中山眞彦「救済としての文学―「雪国」とその仏訳について」（『現代文学』昭五九・六）は、『雪国』の真の主（主語・主体・主人公）は「もう一人の芭蕉」であり「川端康成その人」と見たが、この⑭「天の河―雪国のつづき」（『雪国』第九篇）が発表されたのは『雪国』初刊の四年後（昭一六・八）、芭蕉の言葉を念頭に「東海道」の構想を練っていた頃だつた。

川端は後年、「二夜の底の白い」雪国」に入るところから始まって「雪のなかの火事場で天の河を見上げる」ところで終る「首尾照応の構図」は書き出す前に考えついていたと記しているが（『雪国』について）昭四三・一二）、実際に先の第九篇執筆に至る経緯を辿ると以下のようになる。

一〇年一〇月二〇日、第四篇「徒勞」（「日本評論」一二月月号）の原稿を送る。

一〇月二三日、改造社編集部水島治男宛。「雪に埋れた活動小屋の火事で幕を閉ぢようかと、昨夜火事を見て」思いついた、「雪国」と題して二月に再度来て最後を書く」と記す。（この時は雪がまだ降っていなかった。<sup>12</sup>）

一一年七月四日、湯沢へ。第五篇「萱の花」（「中央公論」八月号）を執筆。

一二年三月、「花のワルツ」と「雪国」発表。近く創元社から出す「雪国」で分載されたものが初めて首尾纏まるが「火の

枕」（第六篇、「文藝春秋」一一年一〇月号）の後を書き足さねばならないので厄介、「その最後の部分は、余程前から腹案が出来てゐたためか、反つて蛇足のやうな気がして書きづらい」と漏らす。

五月、第七篇「手毬歌」を「改造」に発表。

六月一二日、創元社版『雪国』（以下『旧版』と記す）刊行。初雪の降った朝の場面まで書き下ろす。

一三年一〇月二〇日、「雪国」を選集第五巻へ収録。

その「あとがき」で、この後に「雪中の火事の場合」を書くと一段落つくが、「少し芝居じみて余情を失ふおそれがあり」、「判断に迷つたので、しばらくこれだけの分を本にして様子を見てゐる」と明かす。

一四年一二月一九日、改造社版選集最終の第九巻刊行。「あとがき」に、「雪国」は終章を書き加えるか迷っていると記す。

このように躊躇し続けた終章の執筆に踏み切った契機に、旧版を出してから読んだと「独影自命（六）」（昭二四・六）で記している鈴木牧之『北越雪譜』（岩波文庫版は一一年一月刊）があったことは確かだが、同著にも引用された『天の河』の問題も見逃せない。これに注目した原善「川端康成「雪国」の遠近」（一九九六・一一）。後『川端康成―その遠近法』（前述、第六章注（46））に収録）は、第八篇「雪中火事」（昭一五・一二）のラストで思わず書いてしまった天の河のイメージが膨

らみ、第九篇の章題にされるほど格上げされたと論じているが、この《天の河》もまた『北越雪譜』によって「雪国」に呼び込まれ、芭蕉を通過し、沈潜させていくことで、「首尾照応」の要へと変容したというのが、筆者の仮説である。

岩波文庫版『北越雪譜』の冒頭「地気雪と成る弁」には、

（地気は）天に上騰のぼる事人の氣息いきのごとく、昼夜片時も絶る事なし。天も又氣を吐て地に下す、是天地の呼吸なり。人の呼よびと吸ひのごとし。天地呼吸して万物を生育そだつ也。

とあり、「二編卷之二」には芭蕉の逸話と共に「荒海や佐渡に横たふ天の川」等の句も引用されている。「雪国」終章の「氣を吐て地に下す」天の象徴として「横たふ」天の川と「天に上騰」火の子との構図は、『北越雪譜』を介して成立したと思われるが、加えて「天の川。きれいなえ。」と駒子がつぶやきながらまた走り出す第八篇「雪中火事」では、『北越雪譜』の引用でも用いられた一般的な「天の川」の表記であったのが、最終篇「天の河」では芭蕉の表記に倣なまったのであろう、題も本文も「天の河」に改められていることも指摘したい。「奥の細道」の「荒海や」の句は人口に膾炙くわいししているが、以下に引用するのは句の前書き「銀河の序」である。『北越雪譜』によって「荒海や」の句とも再会したことで迷いを絶ち、終章を書き始めた川端は、島村が「空を見上げたまま立つてゐた」場面で「雪中火事」の筆を止めてから、この「銀河の序」も含めて改めて読んだのではないか。「雪中火事」から「天の河」発表までの八か月は、芭蕉の再読熟読期間でもあったと推測される。

むべ此の島は（中略）大罪朝敵の類、遠流せらるゝによりて、たゞ恐ろしき名の聞こえあるも、本意なき事におもひて、窓押し開きて、暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈んで、月ほのくらく、銀河半天にかゝりて、星きら



／＼と冴えたるに、沖のかたより、波の音しば／＼運びて、魂削るが如く、腸はらわたちぎれて、そゞろに悲しび来れば、草の枕も定らず、墨の袂何故とはなくて、絞るばかりになむ侍る。（「風俗文選」、傍線部引用者）

月のほの暗い夜、罪を負って故郷を追われた人たちを思つて「旅愁」に沈む芭蕉を、天に横たわる銀河の星がきらきらと照らし出す。「自然描写には、空想と見えるところも案外写生がもとになつてゐる」（創元社版『雪国』あとがき）昭二三・一二」というから、「薄月夜よりも淡い星明り」で旅人島村を「しんしんと悲し」くさせる天の河も、写生に基づいたものかもしれないが、そうだとしてもそれは芭蕉のフィルターを一度通過させたものであつたらう。「天の河」は次のように結ばれた。

島村も新しい火の手に眼を誘はれて、その上に横たはる天の河を見た。天の河は静かに冴え渡つてゐた。豊かなやさしさもこめて、天に広々と流れてゐた。（傍線引用者）

敗戦後程なく鎌倉文庫から刊行した作品集『雪国』（昭二二・一二）には、旧版の形での収録となつたが、その「あとがき」に川端は、出版の年に支那事変が始まつた『雪国』は「平和時よりも痛切な愛情をもつて読まれた」、「この集の作品は心貧しいやう」だが「今後の仕事をそれら日本人々に献げ」たいと新たな決意を記している（前述、第六章二）。翌二二年、七月には新潮文庫創刊第一冊として旧版の『雪国』が刊行されたが、それを挟んで川端は、終章二篇を大幅に改稿した「雪国抄」（五月）・「続雪国」（一〇月）を発表した。燃える繭倉からの葉子転落も加筆した「続雪国」では、駒子は「昇天」しそうな葉子を「犠牲か刑罰」のように抱いて狂わしく叫び、近づこうとした島村は男達に押されてよろめく。同篇は「さあつと音を立てて天の河が島村のなかへ流れて来た。」と閉じられたが、二三年一二月、全九篇にかなりの推敲を加えて決定版『雪

国』(創元社)が刊行された際には、末文は、「踏みこたへて目を上げた途端、さあつと音を立てて天の河が島村のなかへ流れ落ちるやうであつた。」と改められ、その後も何度か細かな手が加えられた。<sup>(14)</sup>

終結部の天の河は、戦後の改稿によって、日常から非日常への転換装置だった冒頭のトンネルと同じ役割を果たすようになったとの指摘もあるが、天の河のみならず島村の描き方や島村に対する川端の言及も大きく変わったことは第六章二で考察した。敗戦前後、死を強く意識しつつ深められた自己確認作業や遺稿「雪国抄」の問題も含めて前述したが、本章では、「島村の胸を流れて、地の果てに立つてゐるかと感じさせ」た、振り仰ぐ客体としての芭蕉の《天の河》は、戦後の改稿を経て、「底なしの深さが視線を吸ひ込」み、「島村の身を浸し」、「島村のなかへ」と圧倒的な力で流れ落ちて来る全く新たな存在として生み出されたことを確認しておきたい。また、富士川の「捨子」と同様に佐渡に流された「罪人」も、「旅の芭蕉」自身であつたろうし、それは後述の「住吉」連作等で描かれていく、罪の意識を抱いて貴種流離譚の世界を漂泊する(私)にも重なると思われるのである。

##### 五 「しぐれ」―《二人で一人、一人で二人》の願い―

芭蕉の「荒海や」の詩は今や「実にさみしく美しい」とは、「日本が降伏して間もない九月」の横光の日記(「夜の靴」)の言葉である。川端は<sup>(18)</sup>「天の象徴」(昭二五・三)でこれを引き、「このやうな考へ」によつて「さみしさを支え、かなしきを通らうとした」晩年の横光を偲び、「このやうな詩の象徴」が常に横光の「うちを流れていた」と記しているが、それは川端自身を語った言葉でもあつたろう。「天の象徴」では、「住吉」連作第二篇<sup>(16)</sup>「しぐれ」(昭二四・一)で描いた亡き友人須山は横光ではないかと言われて驚いたとも明かしているが、決定版『雪国』の刊行と同時期に発表された「しぐれ」では、「東海道」でも引かれた「笈の小文」の枕に続いて、同じく「笈の小文」の「旅人とわが名呼ばれん初しぐれ」の句も記さ

れて、これが作品名ともなっている。三島は、「川端康成のベストスリー」(昭三〇・四)でこの連作を挙げ、殊に「しぐれ」を高く評価して、「永遠の旅人―川端康成氏の人と作品」(昭三一・七)では川端を「旅人」と呼び、「しぐれ」にも引用された芭蕉の「終に無能無才にして此の一筋につながる」(幻住庵記)を川端の「作品と生活の最後の manifesto」と評した。三島の没した翌年に書かれたのが連作第四篇「隅田川」で、川端が生前発表した最後の小説となったことは、既に第四章二・三でも述べた。

連作には古典が夥しく引用されているが、戦中の「東海道」等とは異なり、それらは〈私〉の潜在意識を顕在化させ、生涯の原点へ遡及させる機能も担うようになっていく。そして「芭蕉の百代の達眼」を感じるよりもその「大雄猛心に打たれる」という〈私〉が、「野ざらし」(死)を心に旅した芭蕉のかなしみに身を寄せていく「しぐれ」には、連作を止揚する可能性も秘められていた。<sup>16)</sup> また、第五章三・三で前述した≪二人で一人、一人で二人≫のモチーフは、連作では、姉妹を思わせる生母と継母、双子の娼婦といった女達に向けられた眼差しであったのみならず、〈私〉(行平)と須山、〈私〉と父、〈私〉と在原行平や芭蕉ら漂泊詩人といった、幾層もの〈私〉と死者達との関係性(前述、第I部第二章五)に向けられた願いとして書かれていたことにも留意したい。

#### 六 美との邂逅と創造―「ほろびぬ美」「美の存在と発見」他―

この後川端は、昭和二〇年代には⑰「芥川龍之介と菊池寛」や⑱『新文章読本』で芭蕉の死を取り巻く場面を書いた芥川「枯野抄」に言及し、⑳「私の考へ」で日本の文学の流れは歌にたどるべきであり、新古今の後は芭蕉の俳諧まで飛ぶとの考えを再提示した。また、㉑「新文章論」では芭蕉を崇敬した蕪村に触れ、㉒「初夏」では「芭蕉の句入り菊の図」を買い逃したことを記すといった形で、芭蕉の名の出ていることが確認できる。三〇年代にも、㉓「美しさと哀しみと」で四条河

原夕涼みの描写に芭蕉の俳文を引用し、<sup>②④</sup>「横光君の故郷」で芭蕉の生誕地争いの話題を取り上げ、<sup>②⑤</sup>「青野さんのこと」で芭蕉等を考察した青野季吉「心霊の復活」に言及するというように芭蕉の話題が散見されるが、注目すべきは、ノーベル文学賞受賞時に「日本人の心の精髓を、すぐれた感受性をもって表現する、その叙述の巧みさ」（「選考経過」）が評価を得て以降の、多くは国際的な場において為された日本の美をめぐる川端の発言である。

受賞記念講演「美しい日本の私―その序説」（昭四三・一一・一二）では話が芭蕉の時代まで至らなかったが、出講先のハワイから「朝日新聞」へ寄稿した<sup>②⑦</sup>「ほろびぬ美」では「風雅の美学」を表した言葉として再度「笈の小文」の枕（同年執筆の<sup>②⑧</sup>「日本美の展開」でも、この言葉が「恐ろしくもある」と言及されている）を引用し、「古人も多く旅に死せるあり」（「奥の細道」）として宗祇、定家へと話題を遡らせている。この「日本美の展開」では、戦後の高村光太郎の言葉「いつたんこの世にあらはれた美は、決してほろびない」（「美の日本的源泉」昭二六・九）を冒頭に置き、日本語の「かなしみ」とは「美といふのに通ふ」、敗戦の日々に争乱や悪政は跡をとどめず「美だけが今に伝はる」のを思ったと述べている。それは、「美しさと哀しみと」で提起した「美は消え去るものか」という問いへの川端の答えでもあり、その答えの核に芭蕉があったことの意味は大きいと言える。

「序説」の本論とも言えるハワイでの講演<sup>②⑨</sup>「美の存在と発見」（前述）では、紫式部には「芭蕉に流れる日本の心」があるとして、不易流行や旅の句も挙げて芭蕉を詳述している。春の近江にさしかかる度に必ず「ゆく春を」の句を思い浮かべ、「芭蕉の美の発見におどろく」として、山本『芭蕉』（前述）の評釈も引きながら「存在する美を発見するにも、発見した美を感得するにも、感得した美を創造とするにも「その場」は、まことに大切」であり、「天の恵み」だと話している。かつて沖繩のハンセン病療養所で行った講演「逢い難くして……」（昭三三・六・八。前章で紹介）でも、「自殺をしようと思ったことも何度か」あるが「一輪の花でも咲いているうちは死なない方がよい」と思ったりしている、「一輪の花にも人生の意義が

ある」が、今の小説家は「自然をよく見なくなつて」いる、「歌や俳句を作る人たちの方が自然をよく見ているよう」だと話していたが、「ふいに思いがけない美に出会うことがある」(31)という「美」とは、例えば雪国の自然やそこに生きる「駒子」であり、芭蕉の詠んだ地球をも包み込む天の川銀河でもあったろう。「美との邂逅」は眼前の風景や女にも古典にもあり、それを不滅のものとして「創造」することにこそ作家としての真の天恵(救済)があるとは、川端の実感であった。

「秋の野に鈴鳴らし行く人見えず」とノーベル賞決定の報を聞いた夜に詠み(「秋の野に」昭四三・一二。第九章二で後述)、「秋の野に行く巡礼の鈴のやうなのが、私の日本風の作品」、「巡礼の鈴は哀傷、寂寥のやうだが、その巡礼の旅に出た人の心底には、どのやうな悪鬼、妖魔が潜んであるかもしれない」と「夕日野」(昭四四・一)に記しているのは、《魔界》との関連からも興味深いが、「私の少年のころのふるさとの景」とあるのも見落とせない。第一章では中学時代の川端が俳句や短歌を盛んに投稿していたことを述べたが、「孤児」のかなしみを多く詠んだ当時の「歌稿」には、「順礼の銀鈴の声にしみど、心淋しき初秋の夕」の他、「五月雨や湯に通ひ行く旅役者」「漂泊の旅に出でなむ孤児のむねあたゝむるよすがともなれ」と、順礼や旅役者に心を寄せ、「漂泊の旅」を思う句や歌も見られた。川端の句については、今村潤子「川端康成と俳句」(前述、第一章注(5))の他、車谷弘『わが俳句交遊記』(角川書店、昭五一・一)や中田雅敏『横光利一 文学と俳句』(勉誠社、一九九七・一〇)にも言及はあるが、こうした句や短歌が作家川端の源泉にあったことも注意したい。

武田勝彦「川端康成「雪国」について」(「国文学」昭四一・九)によれば、「雪国」を英訳したサイデンステッカーがその序文(昭三二・一)で川端文学と俳句との関連性に言及して以来、「俳句技法論が英語圏の日本文学研究者に長く尾を曳いた」という。エステルリングによるノーベル賞授与の演説(『ノーベル賞文学全集 第一六巻』主婦の友社、昭四六・一)でも川端の散文には俳句が反映していると述べられたが、川端文学に対するこうした抽象的な「俳句的」という評言の掘り下げも含めて、「美しい日本」という故郷を探し求める「巡礼者」川端の胸にあった「かなしみ」と、そこから創造された「美」の

内実とを明らかにすることが、川端研究の大きな課題であると言えよう。

注

- (1) 昭和四六年末には、久松を名誉顧問に迎えるという条件で、川端が日本近代文学館名誉館長を引き受けてもいる（拙稿「日本近代文学館草創期と川端康成」（前述、第二章注（31））。久松「近代文学館のことなど」（「新潮」臨時増刊、昭四七・六）。また、集英社からはこの頃豪華愛蔵版『川端康成自選集』（昭四三・一一）を刊行、川端は同社の『東山魁夷代表画集』（昭四六・一一）に序を書いたりもしている（後述、第九章二、第三部第二章一 **083 集英社出版部横川（亮一）宛**）。

- (2) 筆者にも「川端康成「住吉」連作序説」（前述、第I部第二章注（7））、「千羽鶴」のゆくえ」（前述、「はじめに」注（5））、「川端康成「浮舟」論―〈哀愁〉の果て／〈反橋〉の頂き―」（「芸術至上主義文芸」二〇〇二・一一）、「川端康成「虹いくたび」論」（前述、第I部第二章注（10））等一連の論考がある。

- (3) 「日本文学の伝統と美的実存―川端康成における芭蕉への関心と理解」（「大阪学院大学論叢」昭四五・九）、及び『芭蕉受容の研究 近代作家たちの芭蕉論を中心に』（桜楓社、昭四九・九）。

- (4) 三橋透「川端文学古典索引人名編」（「成蹊国文」一九九四・三）、原善・福田淳子他「川端康成全集固有名詞索引X 日本文学（古典―人名）篇」（「上武大学経営情報学部紀要」二〇〇〇・九）。

- (5) 講談社版『世界文化史蹟』第八卷（日本語版四四年刊、イタリア版一九七一（昭和四六）年刊）の海外版の「巻頭言」として執筆。『現代世界百科事典』第三卷（講談社、昭四七・四）で初めて日本語の文章が活字化された。

- (6) 三人連名で箱根から方々へ絵葉書を出しており、第III部第二章一 **024 片岡藍子宛・025 佐多稲子宛**の絵葉書も同日の

ものである。拙稿「熱海、東伊豆、箱根と川端文学」（羽鳥徹哉編集『川端康成 旅とふるさと』至文堂、一九九九・一一）も参照されたい。

(7) 三七巻本全集では連載期間不明とされたが、筆者が「東海道」（『川端康成全作品研究事典』前述、第六章注（46））で明らかにし、予告記事も紹介した。

(8) 同書簡は全集未収録。杉浦が註を付した武蔵野書院『影印新註猿蓑』（昭二六・一）と同『奥の細道』校註（昭二四・八）の礼状と推測されることは、『詳細年譜』で指摘した。芭蕉の遺墨数点が出るといって古美術商から図録を見せられたとも記している。

(9) 初出・初刊とも三七巻本全集では未詳とされたが、『詳細年譜』で指摘した。

(10) 広末『日本文学の古典』（岩波新書、昭二九・三）。山本『芭蕉―その鑑賞と批評』（新潮社、昭三二・一）。後者は、新潮社文学賞受賞。その選評で川端は、山本の『古典と現代文学』（講談社、昭三〇・一二）も評価している。

(11) 戦後の「続雪国」（後述）では「ふうと」に改められた。

(12) 平山三男『遺稿『雪国抄』 影印本文と注釈・論考』（至文堂、一九九三・九）の調査による。

(13) 『古典俳文学大系』によれば、「奥の細道」他では「天河」、「真蹟色紙」では「天の河」。

(14) 昭和二四年六月刊行の一六巻本第六巻で、末文の「さあつと」は「さあと」に変えられた。

(15) たつみ都志「川端康成「雪国」におけるトポス―日常からの脱却」（『昭和文学研究』一九九五・二）。

(16) 拙稿「川端康成「住吉」連作序説」（前述、第I部第二章注（7））を参照されたい。

(17) この小説が鎌原正巳の随筆「美は消え去るものか」を踏まえたものであることは、拙稿『美は消え去るものか』―川端康成「美しさと哀しみと」考」（『芸術至上主義文芸』二〇〇七・一）で明らかにした。

## 第九章 最晩年の書簡二通

### 一 新発掘・成瀬記念館蔵上代たの宛川端康成書簡について

#### ―パール・バックのノーベル平和賞推薦依頼に関して／平和への願いと国際的活動―

日本女子大学成瀬記念館で新たに確認された昭和四七年三月二十九日附上代たの宛川端書簡が、同館紀要（二〇二〇・八）で写真も添えて翻刻された。便箋二枚に毛筆で丁寧認められた同書簡は、パール・バック及びパール・バック財団に対するノーベル平和賞推薦依頼についての返書で、川端最晩年の書簡の一通として貴重であり、内容的にも大変興味深い。川端が自殺するのはこの僅か半月後の四月一六日で、パール・バック（一八九二～一九七三）も翌年三月六日に病没した。共にノーベル文学賞を受賞したパール・バックと川端であるが、前者の受賞は昭和一三（一九三八）年と比較的早かったのに対し、僅か七歳年下の川端の受賞は昭和四三（一九六八）年だった。

第六代日本女子大学長も務めた上代たの（明一九〇〇～昭五七、川端より一三歳年長である）と川端の接点は、世界平和アピール七人委員会である。上代は昭和三〇年からの創設メンバーで、川端も三七年から同委員会に加わっていた。以下にこの書簡の前後を、後述の関連資料を踏まえて、七人委員会の動向にも留意しつつ整理しておく。

昭和四六（一九七一）年

九月、和洋女子大学の田中睦夫教授がヴァーモントのパール・バック宅に三日程滞在。

セオドア・F・ハリスが、パール・バックにノーベル平和賞を受賞させたいと話す。

昭和四七（一九七二）年



一月八日、七人委員会例会、川端最後の出席となる。

二月 一日、日本ペンクラブ懇親会、川端は風邪を理由に早退。

この頃か、「パール・バック伝記作家」と名乗って、ハリスが上代宛にノーベル平和賞推薦依頼状を書く。

同依頼状によれば、パール・バックが懇意にしている川端には既に書簡を書いている。

同一五日、上代がハリスの依頼状を受領。

同二二日、川端、風邪を理由に七人委員会例会を欠席。

(この後、上代が川端に書簡を出す。)

三月 七日、川端、盲腸炎で入院、翌日手術。

同一七日、川端、退院。以後自宅療養する。

同二〇日、川端連名の最後の七人委員会アピール、中華人民共和国首相周恩来宛。

同二九日、川端、上代宛に返書を書く。三一日消印。

同三〇日、川端、医師の往診を受け、胆石症の薬一五日分を処方される。

四月一二日、上代、ハリス宛に推薦の依頼を断る返書を書く。

同一六日、川端、自殺。満七二歳。享年七四。

さて川端書簡の内容についてだが、上代からの見舞いに対する札に続いて、「実は盲腸の手術で入院中なのを、どなたにも風邪と申上げさせておいた」、手術は簡単に済んだが、年のせいか「いまだにぐづぐづ引籠つて」いる、「しかし御心配いただく事は全くございません。」とある。上代は二二日の七人委員会ではハリスからの推薦依頼について川端と話す心づもりであつ

たかもしれないが、川端は委員会を欠席した。上代は三月二〇日のアピールの文面についての相談もあったはずだが、それとは別にハリスの依頼の件で問合せ、アピールの案件が終わった後に、川端が返書を出したと推測される。川端の書簡中に「推せんを私はためらひ、参加の気持が動かない」「先生と全く同感」とあるから、上代からの書簡にも「パックさんとパール・パック財団の平和賞」推薦に対して否定的な言葉があったと考えられる。

1 川端とパール・バックの接点―「ノー・モア・ヒロシマズ」／国境・人種を越えて―

ハリス書簡には「懇意」と記されていた川端とパール・バックの関係だが、まず注目されるのは、昭和二五年四月一五日に広島で行った「平和宣言」である。この宣言で川端は、「既にアメリカに於きましては、「ヒロシマ」の著者、ジョン・ハアセイ氏をはじめ、東洋に理解を持つパール・バック女史」等によって「ノー・モア・ヒロシマズ」の運動が行われていると、特にパール・バックの名を挙げている。『ヒロシマ』<sup>(3)</sup>（法政大学出版社、昭二四・四）の訳者の一人で、その「あとがき」も記した広島流川教会牧師・谷本清らの核兵器反対運動への協力を、パール・バックは積極的に呼びかけ、谷本らの「ヒロシマ・ピース・センター」の理事にもなったが、そうした活動を川端も早くから承知し、共感していたとかがえる。

「平和宣言」は「世界平和と文化講演会」において、川端が日本ペンクラブ会長として起草して読み上げたものだが、「武器は戦争を招く」と改題して「キング」七月号「広島から長崎へ―特集ルポルタージュ」に掲載された。実は川端が「広島や長崎へ作家が行ってその惨害を詳しく調べて後々のために書いておく必要がある」と提案したのは敗戦直後で、発案者の川端が広島へ行く話も出たことが、早くも昭和二〇年八月三〇日の『高見順日記』<sup>(4)</sup>に記されている。川端は二三年に日本ペンクラブ会長に就任したが、その翌二四年一月には、広島県・広島市・中国新聞の招きにより原爆の被災地を視察し、「ノー・モア・ヒロシマズ 原爆体験者と作者の座談会」等にも出席した。続いて二五年四月には日本ペンクラブ代表らと共に広島・

長崎を訪ね、先の宣言を行ったのである。川端は妻秀子宛の書簡で、初めて広島を訪れた感動を「起死回生の思ひ」と言い、「原子爆弾の惨禍について何としても書きたいと思ふ。人類の歴史と道徳のための仕事だ。自分は自分一人のために生きてゐるので無く、一作家として今日生きてゐる覚悟を新たにしたい。平和の信念も強くなつた」（昭二四・一一・二八）と伝え、翌年の広島・長崎視察時も「広島長崎の原子爆弾の小説も書きたい」（昭二五・四・二二）と記している。生前は刊行されなかつた私小説「天授の子」<sup>5</sup>（初出は昭二五・二）では、次のように書いている。少し長いが、被爆地広島を初めて見た川端の心情が吐露されたものとして引用したい。

しかしたとへばペン・クラブのベニス大会の宣言のやうな理想と希望とを、現実には照して懐疑を持ち矛盾を知り逡巡を感じるころがあるのは、平和を望むねがひがまだ痛切でなかつたからだ、私は広島で思つた。私などの平和への愛が現実の政治でなくてもよい。私ひとりが生きたための心の糧として平和を念じてゐるだけでもよい。

簡単に言つてしまへば、私は広島で原子爆弾の悲劇が書きたくなつたのだ。私にとつてはそれだけのことだ。実際に書いても書かなくても、ただ書きたくなつただけで、私は生きる思ひをしたのだつた。

私は戦争の日本をいきどほるよりもかなしんだやうに、原子爆弾の広島をいきどほるよりもかなしんだから、もし広島を書いてもかなしみの記録になるかもしれないが、平和を願はずには書けるものではなかつた。敗戦のみじめさのなかで私は生きてゐたいと思つたやうに、広島をむごたらしさも私に生きてゐたいと思はせた。

「新女苑」昭和二五年八月号特集「平和への祈り」の巻頭に据えられた「広島・長崎」<sup>6</sup>（全集未収録。同特集には、ジョン・ハーシー、谷本清らも寄稿している）でも川端は、原爆被害の調査を報じた新聞記事を引用し、「調査の結果を見て、な

ほ第三発以下の原子爆弾を投じる命令は、人間の誰が下せるのであらうか」と強く訴え、「原子爆弾の被害は勿論、物理化学的、医学的な調査とともに、人間的な精神的な体験とその同情とがあつて、日本の文学者に表現されるべきである」と被爆国の文学者の表現者としての使命を述べた。結びでは、長崎の山里小・中学校「原子雲子供会」のメッセージを伝えているが、これは爆心地から七百メートルの同校をペンクラブ一行が訪問した際に、小中学生代表が日本文と英文で読み上げたもので、その際川端は「私達日本ペンクラブは世界中の文学者と友達になり、世界の平和の為に働こうとする団体です。」「早速このメッセージを全世界の人々に紹介して期待に添いたいと思います。」と挨拶したという。

川端は、戦中の小説「高原」(昭二一・一一―一四・一二)で「世界中が混血児ばかり」になる夢想を登場人物に語らせ、美しい混血の娘も描いていたが、前述の「平和宣言」の四年後には、米軍人との間に産んだ娘エミーに宛てて病の床から未婚の母金子和代が綴った手紙を纏めた書『エミーよ 愛の遺書』(日本織物出版社、昭二九・四)「序」(全集未収録文)で次のように書いている。

世界は国境がなくなり、人間は民族あるひは人種のなくなるのが、未来の必然の理想であり、現在はその過渡の受難である、私は信じている。翼ある鳥は国境を越え、海の魚は国境を知らず、天然の生態にしたがつて自由であるのに、ひとり人間のみ科学の人為によつて、空を飛び海を渡りながら、その智慧の自由を生存の不自由としてゐる。人間の生態あるひは精神の悪習や悪徳が、人間みづからの科学の進みにたいして、人間みづからの歩みおくれをいよいよ増し、その距りに恐怖と狂惑とでよろめいてゐること、今日のやうにいちじるしい時はない。そのいちじるしさも極まれば、国境も人種も、そして原子力の武器用も、人間の過去からのただの悪習と翻然さとするほかに救はれやうはないであらう。

「国境」「人種」からの自由を想い、武器としての原子力使用を強く否定している序文だが「この書の出版者、鳥居達也君」に求められて「右の思ひを新たにした」と言及しているのも、注意される。川端が戦争末期に報道班員として鹿屋基地に赴いたことは第七章で述べたが、候補生だった鳥居に川端は特攻隊員をいつか必ず書く<sup>(9)</sup>と約したといい、「特攻隊員を忘れることが出来ない」「敗戦の頃」昭三〇・八）との思いから、「生命の樹」(昭二一・七)の他、「虹いくたび」(昭二五・三)二六・四。前述、第二章注(10)・「自然」(昭二六・一〇)・「弓浦市」(昭三三・一)等の小説を書き、「神雷戦士の碑」除幕式(昭四〇・三・二一)にも参列している。ちなみに「序」は四月二三日附だが、昭和二〇年の同日は川端が鹿屋へ行くよう高戸頭隆主計大尉から命じられた日でもある。『エミーよ』には、エミーが託された「エリザベス・サンダース・ホーム」の創設者沢田美喜(前述、第七章二五)も「金子和代さんのこと」の一文を寄せているが、沢田の最晩年の書『母と子の絆——エリザベス・サンダース・ホームの三十年』<sup>(9)</sup>では、「最後に、どうしても忘れられない一人の日本女性」として、『エミーよ』以後、病気の再発による死に至るまで、混血の子らとその母達に尽くした金子の生涯を語ると共に、「いかなる中傷や妨害の中でも、終始」励ましてくれた「心の友」としてパール・バックも回顧されている。同ホームを金銭的にも支援したパール・バック自身も、一九四九(昭和二四)年に「ウエルカム・ハウス」を、一九六四(昭和三九)年には「パール・バック財団」も設立し、米軍人との間に生まれた混血児らの養育と養子縁組推進運動に尽力した。「五〇〇年もしくは一〇〇〇年後には人間が誰も混血になるだろうと考える。私は現在の混血の人を『新しい人間(New People)』と呼ぶ」とは、パール・バックが一九六七(昭和四二)年に人種差別撤廃を叫んで韓国を訪れた際の言葉であるが、川端の「高原」で語られた夢想や『エミーよ』序文とも響き合うものが感じられる。

昭和四〇年六月に大江健三郎が『ヒロシマ・ノート』(岩波新書)を刊行して川端に贈った際、その礼状に川端は「自分もまた原爆被爆者について小説を書かねばならぬと、永くねがってきた」と記していた<sup>(11)</sup>という。この願いは終生のものであり

ながら遂に果たされることはなかったが、その一方で、川端は日本ペンクラブ会長として（昭和四〇年まで。三三年からは国際ペンクラブ副会長も兼任。前述、第七章二）のみならず、世界平和アピール七人委員会のメンバーとしても、率先して平和活動を行っている。

## 2 世界平和アピール七人委員会等における川端の平和活動

七人委員会弔辞（昭四七・五・二七附）冒頭には、「先生が平和七人委員会に参加されたのは、一九六二年のキューバ・ミサイル危機の時」で、「原爆小説を書きたいと言われていた先生は、七人委が目標とする核兵器の廃絶には強い関心」を持ち、「七人委の活動には大変積極的」だったと述べられている。この弔辞で特に取り上げられている事柄に関して、以下に簡単に注釈を施しておく、

- ① 「北爆問題でライシユアワー大使と会見した時に、ベトナム政策の誤りを強く説かれた」 ↓昭和四〇（一九六五）年四月二三日、植村環と七人委で、米国のベトナム介入に反対するジョンソン大統領宛抗議文を大使館へ持って行き、ライシヤワー駐日大使に反駁した。既に二月一四日に七人委はベトナム問題についての要望書を米大統領に送ると発表しており、四月六日、川端らは首相官邸に佐藤栄作総理を訪ね、ベトナム問題に関する要望書を手渡ししていた。四三年一月一日、茅誠司、内山事務局長と共に学士会館で記者会見し、米の北爆全面停止にともなう声明文を発表した。
- ② 「京都で長い時間をかけて沖縄返還の問題について話しあった後、夜遅くまで声明文の作成に取組まれた」 ↓昭和四四（一九六九）年二月八日、湯川秀樹と共に京都・都ホテルで記者会見し、七人委の声明文「沖縄問題について本土の同胞に訴える」を発表。（前述、第七章二）

③「七人委で四次防問題を取り上げるべきだと主張された」 ↓昭和四六（一九七二）年一月二五日、七人委の川端ら五名が、第四次防衛力整備計画反対の声明を竹下登官房長官に手渡しし、学士会館で記者会見をした。

他にも川端は、七人委としてジュネーブ軍縮委員会に対して茅、内山と共に案文を作成し、核停止協定のアピール（昭三八・二・一二）等しており、七人委以外でも、日本ペンクラブ会長の川端の名で、核実験再開の中止要請の電文をフルシチョフ首相宛に、また韓国ジャーナリストの死刑確定に対し寛大な配慮を求める旨の電文を朴正熙国家再建最高会議長宛に、各々打電することを決議し（昭三六・九・一）、茅ら一八名と原爆被害者援護法を作るよう佐藤総理に陳情する（昭四二・六・一二）等もしている。

### 3 ノーベル平和賞推薦依頼を断った背景

このように平和への強い願いと国際的な活動という点ではある程度共通していた川端とパール・バックだが、松岡洋子「ペンクラブの川端さん」〔川端康成全集9 月報〕新潮社、昭三五・一一）によれば、川端がブラジルペン大会からの帰国便で、英語を話すか隣席の婦人からスチュワーデスを介して聞かれて断ったが、実はその婦人がパール・バックだったとは、川喜多かしこが川端宅へ連れて来た時に初めて知ったと、川端がペンクラブ事務所で話したという。パール・バックと監督が川端を見て、映画の主役になってほしいと頼もうとしていたのだと後で聞いて、俳優になれたかもしれないのに残念だったとも言ったとのことである。同月報には、北鎌倉の料亭・好々亭におけるパール・バック、川喜多、高見、大佛と写った写真も「昭和三三年九月」として載せられているが、これは昭和三五（一九六〇）年の誤りである。<sup>(13)</sup>三五年に川端はブラジル国際ペン大会へゲスト・オヴ・オナーとして出席し（前述、第二章六）、八月二三日に帰国している。一方、パール・バック

クは同年五月二四日に自作の「大津波」の映画撮影のために来日したが、長患いしていた夫の死の知らせで到着直後に帰国し、八月末に再来日後は一二月まで滞在したと報道等で判明しており、この再来日の際に川端と同乗した時点では、互いに面識がなかったと分かる。パール・バックは「撮影の前に、出演俳優の人選、日本の撮影スタッフとの交渉と機材の準備などで、何日かを東京で過ごした」というから、雲仙等でのロケへ同行する以前に、同年に「フィルム・ライブラリー助成協議会」も組織した鎌倉の川喜多を訪ね、鎌倉文士にも紹介してもらったと考えられる。

川端は上代宛書簡に、「すでに文学賞を受けてゐるバックさんをまた平和賞へ」推薦とは意外、その活動を「確実にはほとんど」知らないし、「先生も仰せのやうに」推薦の資格はないし、「何賞に限らず」推薦を頼まれて推薦するということは私には先ずないと記している。キュリー夫人のようにノーベル物理学賞と化学賞を受賞している例等もあるが、ノーベル文学賞推薦に関しては、沼津市芹沢光治良記念館『図録 企画展 光治良と川端康成展（第二回）』（二〇二〇・三）に掲載されているスウェーデンアカデミー・ノーベル委員会から芹沢宛の「一九六九年度ノーベル文学賞推薦依頼状」（一九六八（昭和四三）年一二月一六日消印）、及び「ノーベル賞文学全集二六 月報」原稿（「年不明」とあるが、五一年七月、主婦の友社刊。「ノーベル文学賞推薦者として」と題して、若干の修正を加えて収録されている）が参考になる。前者には、「来年度中の検討」を受けるためには遅くとも一九六九年二月一日までに候補者名を委員会宛に知らせる必要があること、「推薦候補者を指名する権利は、スウェーデンアカデミーおよびその構成員や理念を同じくするその他のアカデミー、機関、学会、文学史学または言語学の総合大学や専門校の教授、既にノーベル文学賞を受賞している者および各国の文学活動の代表作家組織の長によって享受される」等、同賞定款に従った文面が英仏独の三か国語で印刷されている。後者の原稿には、この年に突然依頼状が届いて以来「ただ一回欠けたが、今日まで毎年同じ書状が届いた」等と記されている。当時芹沢は川端の後任として日本ペンクラブ会長を務めており、吉武信彦によれば、<sup>(14)</sup>「同アカデミーが世界中のノーベル文学賞推薦有資格者に大量



に配布する回章であろう」とのことである。川端の場合も、自身のノーベル文学賞受賞以前から日本ペンクラブ会長として文学賞の推薦権利はあり、例えば昭和三〇（一九五五）年二月のペンクラブ例会では、谷崎のノーベル賞推薦が異議なく賛成を得ている（後述、第Ⅲ部第一章 32 参照。ちなみに、パール・バックの推薦が決め手となって谷崎が一九五八年に最終候補の一步手前に入ったと、二〇〇九年の情報開示により報じられた）。だが、平和賞に関しては、川端には個人としての推薦資格はなく、七人委員会等の「機関」の一員として推薦に加わる気持ちも動かなかったようである。

「文豪」川端の推薦は各方面で重宝されて依頼も多かったことは、「はじめに」でも述べた。殊にノーベル文学賞受賞以降は依頼が殺到したが、川端はその大半を断ったようだ。また、推薦の依頼をしたハリス（一九三一〜）については、ピーター・コン、丸田浩他訳『パール・バック伝』上・下巻（舞字社、二〇〇一）がパール・バックの「生涯中、最大のスキヤンダル」として詳細に伝えている。日本でも、パール・バックの対談集『ひろやかな空のために』に関連して、同書は「若いダンス教師との共著で、彼女はルンバを習うためにこの男を雇ったが、その人柄が気に入って、二年前に彼女が設立した「パール・バック基金」の会長に彼を就任させ、ふたりでアメリカ各地を募金運動して」回ったと、聊か揶揄的に書かれている（「朝日新聞」昭四一・八・一六）。

また、推薦人としてハリスに上代の名を挙げたとされる田中睦夫（明四四〜昭五三。当時、和洋女子大学文家政学部英文学科教授。和洋女子短大英文科長）は、田中睦夫遺稿集刊行会『鹿屋への思慕』（私家版、昭五四・六）所収の詳細な年譜によれば、昭和三五（一九六〇）年一月に「日本モーム協会」を設立し、同年六月に川端の紹介でペンクラブ会員となっている。パール・バックとも一九五二（昭和二七）年三月にニューヨークへ初訪問して以来親交を重ね、パール・バック死去の際にも「日本でパール・バックと最も親しいひとり」として取材を受け、パール・バックが「美しい日本」を懐かしんだ死の二か月前の書簡等も紹介している（「朝日新聞」昭四八・三・七）。パール・バックとハリスとの関係については、パール・

バック没後間もない「朝日新聞」(同・七・六)掲載の「パール・バックの晩年の恋」では控えめな言及であったが、後の「群像」(昭五一・四)掲載の「煩惱の人パール・バック」では、一九七一(昭和四六)年九月に三日ほどパール・バック宅に滞在した時、「生活に異常を感じたのは、彼女の身边にセオドア・ハリスなる壮年の男がはべっていること」で、「しかも、パール・バックが社会的に非常な熱意を持って創設した人道的な企業パール・バック財団」の理事長として、ビジネス方面の管理を一切ハリスに委ねていたのは驚くべきこと」だった、「色と欲との二道かけてハリスがバック女史に近づいたことは一目瞭然」だが、にもかかわらずパール・バックが「あらゆる材料を提供」して伝記を書くことを許したのは、「伝記作者としての地位を、ジゴロ上りのハリスに与え」たかったからだ、と、踏み込んだ記述をしている。<sup>(17)</sup>

このようなハリスや彼が会長を務める「パール・バック基金」及び彼が理事長を務める「パール・バック財団」の良からぬ評判を、書簡を受け取った当時既に川端も耳にしていた可能性は十分に考えられる。そうであったならば、平和賞推薦依頼の断り状の筆を執るのは、かつて「私ひとりが生きるための心の糧として平和を念じてゐるだけでもよい。」と「天授の子」(前述)にも記していたように、平和へ寄せる思いを「生きる」糧ともしていただけに、心身消耗状態に陥っていた川端にとって(詳しくは後述)一層気を重くさせることであつたらうと推測される。七人委員会最後の出席となつた一月例会で、川端は「日本の現状を憂い、七人委の積極的な活動を主張」(前述、弔辞)したといい、三月二〇日附「中華人民共和国首相周恩来」宛七人委員会アピールも、同国が「このたびあえてした大気圏内の核実験」に対して、「いかなる国、いかなる形のものであると、核実験に対し常に反対してきた私どもは強く抗議」するものであつた。しかし、最初に上代、次いで川端の名が記されたこのアピールが、川端連名の最後のものとなつた。アピール文の後に書かれた上代への書簡は、「御返事になりませぬ御返事しか申し上げられません」として、「何のお役にも立ちませぬ事申し上げましておゆるし下さい。」と詫びの言葉で閉じられていた。

## 二 川端康成最後の書簡―「不浄」ということ―

二〇一九年二月四日のNHKクローズアップ現代＋「三島由紀夫×川端康成 ノーベル賞の光と影」で、筆者は一通の川端書簡を紹介した。昭和四七年四月一〇日に日本画家安田靉彦（明一七〇昭五三）宛、便箋三枚に毛筆でしたためられた速達だ。第Ⅲ部第二章で紹介する未翻刻の書簡を含めても、現在のところ川端の死の日に最も近い書簡で、放送では詳細なコメントは省かれたが、謎を孕んだ書簡である。

川端全集未収録のこの速達は、一九九六年の川端生誕月に大阪の茨木市立川端康成文学館で特別展示されたが、川端家に戻された後に行方不明になった幻の書簡だが、幸なことに同館には展示の際に作られたレプリカが残されており、番組ではそれを用いた。また川端香男里・安田建一監修『大和し美し 川端康成と安田靉彦』（求龍堂、二〇〇八・九）には、安田家が保存していた写真に翻刻も添えられて掲載されたが、番組で紹介するまでこの書簡が特に話題になったことはなかった。

川端と安田の交流は、安田が一六巻本川端全集（昭二三・五〇二九・四）の題簽と表紙画一六枚を引き受けたところから始まった。『新潮社一〇〇年図書目録』（新潮社、一九九六・一）によれば、この全集は同社としては戦後初の個人全集で、川端生誕五〇年記念として企画され、資材難の当時としては最高の材料を用いた全集だった。既に日本画壇の重鎮であった安田が各冊ごとに表紙絵を描くことになったのは、二二年秋に入社したての新米編集者だった進藤純孝（前述、第Ⅰ部第一章二六。本名は若倉雅郎）が誤って依頼したためで、川端も新潮社も大変驚いたようだ。以来、川端は一五歳年長の安田を「先生」として厚く敬い、後に国宝となった大雅・蕪村の「十便十宜」を大磯の安田邸まで自ら背負って持参する等、美術を仲立ちにした親交を続けていたことは、前述『大和し美し』が往復書簡も紹介して詳細に辿っている。

「拝復 天心について短文書けとの御言葉いただきありがたく存じますものの、ためらわれ御返事延引いたしてをりますう

ちに、二月風邪をこじらし、また盲腸の手術などもいたしました」——速達は、そう始まっている。岡倉天心に認められて画壇に立った安田は、この昭和四七年一月七日からの「天心と現代日本画展」に新作を出展し、川端も観覧しているが、同展に関連してであろう、安田から寄稿依頼の手紙があったようだ。その後川端は二月一日のペンクラブ懇親会を風邪で早退し（前述）、二五日には兄のように慕っていた大阪の従兄秋岡義愛（前述、第Ⅰ部第一章二一）が死去したが、発熱のために翌日まで発せず、二七日には葬式後に火葬場まで行ったものの、胆石及び盲腸炎が起りかかっていたのか激痛と発熱で骨上げを待てずに帰宅、三月七日に盲腸炎で入院して手術し、退院後も、伊豆での静養予定を中止し、胆石の薬を処方されて自宅療養していた。

胆石は川端の宿痾で、前年四六年の夏も腹痛のため渡欧を直前に断念して秀子夫人のみ出発、川端は軽井沢の別荘にも行かず、鎌倉に留まって客も断っていた。その当時遅延を重ねていたのが『東山魁夷代表画集』（前述、第八章一）の序文で、代筆案も出していた編集者の横川亮一<sup>19</sup>が夏に急死、秋になって漸く川端が書き上げたのは、出版社側の想定を遥かに超えた三〇枚の長文だった。「東山さんの風景画の「敬虔」と「浄福」だけを、短く書けばいいはず」と断りつつも、序文には「この夏の私の病ひは、心気の悄寂、喪衰、鬱厭であつたので、東山さんの絵と文に親しむ日々<sup>20</sup>に癒されて、よみがへつた」という感謝と感動が横溢している。敗戦後間もなく発表された「住吉」連作が二二年ぶりに突如書き継がれたのもこの秋だが、第四作「隅田川」（「新潮」一一月号）は生前発表した最後の小説となつた（前述、第八章五他）。「心気の」病は再び川端に取り憑いたようで、安田宛書簡にも「この春は花も見ず、病ひとも申せませぬ病ひの心弱りに引籠もつてをりました」とある。当時の川端の言動を日を追って辿ってみると、『詳細年譜』でもうかがえるように先々の予定を入れていく一方で、直近の死を考えていたと思わせるようなものも見られ、心の揺れの大きさが感じられる。魁夷の序文と同様、冬樹社版岡本かの子全集の推薦文一枚も一年がかりで果たされず、口述か代筆という話が出ていた。この四月には、かつて川端が書いた

文を瀬戸内晴美（前述、第二章八他）が纏め直して担当者が持参したが、川端はやはり自分が書くと言ったという（死の日の自宅の机にあった「岡本かの子」の原稿は、当初絶筆と見なされて自殺翌日の新聞各紙に大きく報道された。かの子については前述、第四章二三）。

こうした中で、応じる気の起こらないハリスからの依頼状（前述）のみならず、安田からの依頼も保留されていた。「私の若いころ天心の著書が続けて新刊されたのを感銘を受けつつ読みました」と書簡にあるのは、『天心全集』三冊や『天心先生欧文著書抄訳』が日本美術院から刊行された大正十一年、川端が東大在学中のことと推測されるが、それらに感化された川端は、天心の『東洋の理想』（創元社、昭一三・二・二）が新刊された時すぐさまこれを読み、同月一九日「東京朝日新聞」掲載の「新万葉集」で同書をいち早く取り上げ、「天心の言ふ、文化を「保存する」日本、「固執する」民族性、この一面に就て、改めて考へてみるのは、徒らな復古や排外に、私達を逆戻りさせることにはなるまい。」と述べていた。「入院中も天心といふ人がもしるなかつたらなどと少し考へてみた」とあるのだが、しかし「天心について」の筆は執られなかった。

安田宛速達で特に注目すべきは、次の箇所である。――「今度の御本に私などがつまらぬ事を書きましては反つて不浄の一点を落とすものと存ぜられます」。「不浄」の語は先の「浄福」をも喚起させるが、「不浄の一点を落とす」とは、「拙い文で」御本を汚すという単なる謙遜というよりも、「自殺者の文で」御本を汚すと読めまいか。そう考えた時、「迷ひました末のお返事でございます」という小さな文字で添えられた追つて書きも、迷つた末に川端が下した決断の重さを秘めたものと見えてくる。

安田宛速達は、「昨年院展の前田先生、天心展の先生ありがたい事に存ぜられます」と結ばれている。前年の院展は前田青邨八八歳の回顧展で、安田の米寿記念展（昭四五・九・八〜一三）に推薦文を寄せていた川端は、『前田青邨作品集』（朝

日新聞社、昭四七・五）にも青邨米寿の作を中心に取り上げて、「強い生命の動きが、永遠の若さであらう」と推薦文を書いている。同書は川端が没した翌月に刊行されたが、米寿を迎えて尚新作を描き得た二人の日本画家を「ありがたい事に存ぜられ」と書いて筆を擱いた数え七四歳の川端の胸中は、如何ばかりであったかと思われる。

安田宛書簡の少し前、川端は四月三日にはクノツプ社のストラウスに宛てて、病気のため海外へは行けず幸いを失った、預けてあった印税を送ってほしい、三島の死の悲しみは離れないと書いている。四日に川端を訪ねた吉村貞司は、後になって思えば不覚だったと川端の異変に気付けなかった強い後悔をその著<sup>(20)</sup>に記している。秀子によれば、「古都」執筆時に北山杉の縁で親しくなった京都の森下久一（北山丸太生産協同組合初代理事長。一九二二〜二〇〇〇）に、死の一週間前頃に「川端が会いたがっている、眠れない」と電話で伝え、森下は十日ぐらい後に上京すると答えたという（「週刊朝日」昭五二・七・二二）。

或いは川端は、速達を受け取った安田の返書か訪問を待っていたのかもしれない。だが、配達側速達消印の一二日には、同じ鎌倉在住の歌人吉野秀雄<sup>(21)</sup>の長男陽一がガス自殺を遂げた。昭和一年に結成された鎌倉ペンクラブに入会以来吉野家と家族ぐるみの交流があった川端は、吉野秀雄の追悼文（昭四二・七）に続き、父秀雄の死や兄陽一の発狂を材題とした次男壮児の『歌びとの家』（新潮社、昭四三・三）の推薦文も書いていた。吉野壮児によれば、一二日当日に弔問に来た川端に兄の死の経緯を語ったというが、陽一のガス自殺は川端に強い衝撃と共に、ある示唆も与えたのではなからうか。

生前と没後に書の個展も開かれた川端だが（後述、第Ⅲ部第一章18）、その書風には大きな振幅がある。ノーベル賞受賞の夜半過ぎ、一人書齋にこもって即興の句「秋の野に鈴鳴らし行く人見えす」等を筆で大きく書いたことは随筆「秋の野に」（昭四三・一二）にも記されている（前述、第八章六）。干支が亥だった川端は、六巡の亥年を迎えた昭和四六年正月前後

には、「亥」の書を多数書き、亥年の友人知人などに頒けており、やはり亥年生まれの大江健三郎は、自分も「新潮」編集者の坂本忠雄も「豊麗とも凄絶ともいつくせぬ、大様な書体で書きしるした色紙」を貰ったと、「自殺について」（前述、注（11））で明かしている。川端自殺の速報を見た真夜中、電話で坂本とわずかな言葉を交換した大江は、「荒涼たる暗闇に、花やかで凄まじい「亥」が、皆既蝕の太陽のようにかかる幻を一瞬ともに見ていたように思う。しかしその幻のむこうから響く声が、オレハイヤダ、という拒絶の声でもまたあったことを、すくなくとも僕は否定することができない」と記している。

原稿をペンで執筆した川端は、書簡には多く毛筆を用いた。その文字は年代によって変化するだけでなく、巻紙に書くか、便箋や葉書に書くか等によっても変わっている。古美術収集の大先輩であり、能筆家としても知られていた安田に宛てた書簡の文字は、気安い友人に宛てたものとは自ずから異なっている。安田宛の最後の書簡は、他の安田宛書簡の流麗な美しさに比べ、かそけく息苦しいようにも感じられる。筆者（深澤）が指さし、テレビ画面に大きく映し出された複製の書簡の、薄くかすれた「心弱り」の文字は、安田に、私達に、何を語りかけていたのであろうか。

昭和三三年六月、まだ米軍統治下にあった沖縄へ渡航し、当初の予定にはなかったハンセン病施設を訪ねた際の講演「逢い難くして……」で川端は、次のように話していた。第七章二3で紹介したが、再度引用したい。

皆さんは花をお作りになるのもお好きらしいし、私なんか自殺をしようと思つたことも何度かありますが一輪の花でも咲いているうちは死なない方がよいと思つたりしています。花が美しく咲いている。それは小さいことではありませんが、その一輪の花にも人生の意義があると思います。（中略）一輪の花でも手にとつてよく見ますと素晴らしい発見をするので

あります。そういう発見はただ花だけにとどまらずこの海の色にも、いたるところにたくさんあると思います。そうした発見の中にも私たちは生きるよろこびを見出すのであります。

生命力の衰え、筆の衰えの自覚は、自殺の大きな要因の一つであったのは確かだ。だが、晩年になって初めて死を思い立ったのではない。何度も自殺を踏みとどまってきた川端だったが、「この春は花も見ず」、海に臨んだ逗子マリーナマンションの自室でガス自殺を遂げた。遺書はなかった。

## 注

(1) 同紀要(後掲「初出一覧」19)には、拙稿の他に同館学芸員大橋有希子による解説、後述する上代・ハリス往復書簡、川端連名最後の七人委員会アピール、七人委員会による川端への弔辞等も併載されている。また、七月一日発行の三和テッキ広報紙「三和新聞」掲載の拙稿「新発見・川端康成最晩年の書簡に触れて」も参照されたい。

(2) 川端の詳しい動向やその典拠等については、『詳細年譜』を参照されたい。

(3) 石川欣一・谷本清・明田川融訳。原文は一九四六(昭和二一)年八月三十一日「ニューヨーカー」全誌を飾って、大きな反響があった。増補版は二〇〇三年七月刊行。ハーシーについては前述、第七章。

(4) 第五卷(勁草書房、昭四〇・一)。

(5) 川端没後に『天授の子』(新潮社、昭五〇・六)として刊行。尚、一九五〇(昭和二五)年二月二八日に「読売新聞」が、「平和を守る会」パリ本部から日本支部に国際平和賞候補作品の推薦依頼があり、日本支部ではペンクラブなどに委嘱し、文学は川端執筆中のヒロシマもの(「天授の子」か)などが有力候補と報道したが、翌年一月三〇日、



日本平和を守る会（後の日本平和委員会）会長大山郁夫が同賞を受賞した。

- (6) 拙稿「新資料・全集未収録文―「広島・長崎」他三篇―」（前述、第四章注（1））で全文を紹介し、二度の視察に  
関しても地元紙の報道等踏まえて解説した。

- (7) 同校視察の様子は、長崎日日新聞（昭二五・四・一九）や立野信之「浦上を行く」（前述「キング」）に詳しい。

- (8) 拙稿「川端康成全集未収録文―水盛源一郎（水守三郎）『湖畔舞台』序等三篇」（川端康成学会編『川端文学への視  
界27』銀の鈴社、二〇二二・六）で全文を紹介し、鹿屋基地体験や後述の鳥居達也の経歴も含めてその背景も述べた。

- (9) P H P 研究所、昭和五五・五。

- (10) 「中央日報日本語版」（二〇一九・三・二二）。チャン・ワンノク・ソウル大学名誉教授と交わした会話として、世  
界人種差別撤廃の日である三月二一日に、「韓国・パール・バック財団」を訪問した記事中で伝えられている。

- (11) 大江「自殺について」（「新潮」川端追悼号、昭四七・六、後述）

- (12) 昭和三七年一〇月二七日の例会で下中弥三郎の後継として参加が決定。委員は、茅誠司、上代たの、平塚らいてう、  
湯川秀樹、植村環。日高一輝が事務局長。前田多門の死で一人欠員。

- (13) 『詳細年譜』でも年を誤った。お詫びし、訂正したい。

- (14) 松坂清俊『知的障害の娘の母…パール・バック ノーベル文学賞を超えて』（文芸社、二〇〇八・九）。谷本一家や  
沢田美喜との交流についても取材を行っている。日米合作映画「大津波」の原作は、一七九二（寛政四）年の大津波  
を題材にしたとされる短篇（一九四八年刊）。パール・バックは中国滞在中の一九二七（昭和二）年、国民革命軍の南  
京攻略で外国人襲撃にあい、知的障害のある娘を連れて雲仙へ避難し、「島原大変肥後迷惑」と呼ばれた津波の話を知  
いたという。監督はタッド・ダニエルスキー、日系俳優の早川雪洲やミツキー・カーチスの他、子役でジュディ・オ

ングや伊丹十三らも出演、特撮は円谷英二。セリフは全編英語で、当時は劇場公開されなかったが、二〇〇四年二月のスマトラ沖地震の大津波の翌年、日本語版（トレヴィル、昭六三・一二）が復刻され、川喜多記念映画文化財団が所有していたフィルムが、「雲仙お山の文化祭」で上映された。同書は、二〇一一年三月一日の東日本大震災の後に重版されている。

(15) 「ノーベル賞の国際政治学 ノーベル文学賞と日本、一九五八〜一九六七年の日本人候補に関する基礎的研究(一)」

(「地域政策研究」二〇一九・二)。

(16) パール・バックに関して書いた文章を、『英文学への道』(八潮出版、昭四八・五)・『一筋の道』(桐原書店、昭五一・六)等に収めている。

(17) 「バッグ女史のハリスへの激しい打ち込み方」は、全財産をハリスに遺すと遺言したことに表れているが、遺書を楯にして遺産相続の裁判を争ったハリスが敗れ、彼の夢は消えたとも書いている。

(18) 続いて「茅誠司、朝永振一郎、植村環、湯川秀樹、事務局長内山尚三」の順で署名されている。

(19) 第Ⅲ部第二章一 **083 集英社出版部横川宛書簡を参照されたい。**

(20) 『妖美と純愛―川端康成作品論―』(東京書籍、昭五四・一二)。

(21) 第Ⅲ部第二章一 **068 吉野秀雄宛書簡を参照されたい。**

(22) 「二眼」の記憶(「湘南文学」一九九二・春)。



第Ⅲ部

新発掘資料編



## 第一章 内容見本類に見る川端康成―新発掘推薦文等六五篇・各篇概要と解題―

第Ⅱ部第八章では、内容見本に掲載された川端の推薦文を糸口として川端における芭蕉を論じたが、かつて続々と刊行された内容見本に注目したものに、中津原睦三『出版内容見本書誌』『同 第二集』（私家版、昭四六・九、五二・一一。以下纏めて『書誌』と略記）、紀田順一郎『内容見本にみる出版昭和史』（本の雑誌社、一九九二・五）の他、近年にも中村邦夫『推薦文、作家による作家の 全集内容見本は名文の宝庫』（風濤社、二〇一八・一一）があり、一部では価値や魅力も認められてきた内容見本だが、「選書資料として使用された後はあつさりと廃棄され」る（高梨章「内容見本のお話」、『日本古書通信』二〇一二・七）状況は現在も概ね変わらない。大切に扱われる月報類とは異なり、国立国会図書館でも数点の例外を除いて収蔵対象から外されており、散佚が著しい。幸い、大正頃からの数千点が日本近代文学館や神奈川近代文学館に残されていると判明したが、前者は七〇〇弱の出版社毎に袋分けされているのみで検索は不能、所蔵数も未詳である。後者は、約二五〇〇点の見本個々に請求記号が振られているが、一部の資料を除き作家名による検索は出来ず、過半数は発行年の表記もなく、特別閲覧登録の上、各請求記号を明記して一週間以上前に予約する必要がある。いずれにしても調査するには膨大な見本類にほぼ網羅的に当たるしかなく、研究に活用するには困難な状況にある。だが、未開拓であるだけに、先の第八章や拙稿「内容見本・資料としての可能性―『一葉全集』『現代女性講座』を例として」（『群系』二〇一九・六）でもその活用法を探ってみたが、作家論の手掛かりとしてのみならず、大量出版時代の熱気を帯びた紙面からは当時の出版社・編集者・推薦者各々の思いもよくうかがえ、文学とそれを取り巻く時代を考察する資料としても、その秘めた可能性は大きいと言えるよう。

三七巻本全集には一二三篇の推薦文が収められているが、この度前掲の二館で調査を行い、新たに六五篇の川端全集未収

録文を発掘した。川端が少女小説家としても人気があり、川端名義で訳された童話も多数あることは前述（第Ⅱ部第三章）したが、そうした児童文学から三島や谷崎、プルーストまでの古今東西の文学のみならず、川端の推薦文は、造詣の深かった美術関係や各種事典等、広範囲に亘って書かれていることが明らかとなった。以下の凡例に従って、個々に紹介したい。

〔凡例〕

一、内容見本類は数次出されることも多く、その際川端の文も題や長さを変えて再掲載されている場合もあるが、便宜上、閲覧した中で川端の推薦文を掲載した最も古いと判断されるパンフレットを取り上げ、その発行日が書かれている場合は併記した。リーフレット類しか確認できなかったものはその旨明記した。

一、単行本は著者名・書名・出版社・刊行予定を、全集・叢書類はシリーズ名・出版社・内容見本に記された巻数と配本予定を、それぞれ一字下げで示した。刊行予定年が省略されているものも多いが、実際の刊行年を参照して「」で補った。

一、『書誌』掲載のものは書名の後に（書）と付した。詳細は同書を参照されたい。

一、『書誌』に掲載されていても、推薦者として川端の名前だけ若しくは顔写真だけで推薦文が確認できなかったもの（例えば、大和書房『吉田松陰全集』リーフレット（昭四七・四）は顔写真掲載のみ）や、連名のものや既発表の文を編集し直したもの（改題したものも含む）、全集未収録文として既に紹介済みの文は、本稿では省いた。

一、配列は、実際の刊行年月ではなく、推薦文が執筆されたと推定される順（概ね該当の内容見本が出た順）に配列した。

一、紙数の都合もあり、川端の推薦文は概要を（）で括って示した。全文を紹介する場合は、その旨明記した。

一、実際の巻数や配本開始日等の刊行状況も記したが、内容見本の予告通りであった箇所は省略した。他の主な推薦者の他、簡単な解題も付したが、その典拠や周辺の事柄等は『詳細年譜』（以下『年譜』と略記）を参照されたい。

1、『岸田國士長篇小説』改造社、一三年一月二二日（全

八卷、一三年一二月第一回配本、一四年七月完結予定）

「新しい道徳の探求」（例えば支那に従軍しても、わが岸田氏は南京や漢口の一歩乗りの功は急がない。後方の政策、支那人の生活を見る。それが却って、文化人としては戦争に一番乗りしたことになる。事実いち早く戦後の日支文化提携を論じたのは岸田氏で、氏の理想の潔癖な革新運動は、

近頃漸く現実的な根を張ってきた。この選集の長篇も、発表当時は先んじすぎて真価が普及されぬ憾みがあったが、今日読み返されて、新しい生命を溢れさすに違いない。軍人の家に生れ、陸軍の学校に学び、青春の日をフランスで過ごし、帰来文学に転出した特異な経歴の氏は、目下の日本の大きい動きにつれ、自然と重要な人物となってきた。その知性のため穏和な中道を歩むかに見えるが、理想は激しく燃えている。新しい道徳の探求を、フランス風に典雅で洗練された詩情で匂わせている。今の世の良識家がいかに生くべきかを肉化して見せたこれらの長篇は必読の文学だ。趣味の涵養という点でもこれほどよい教科書はないだろう。

う。）

川端は「文藝」の岸田追悼特集（昭二九・五）で、「文藝時代」以降親交を重ねた先輩作家岸田の晩年を綴っているが、そうした敬愛に支えられた岸田文学への理解と、日中戦争当時の文学をめぐる時代観がうかがえる。推薦文は他に山本有三、豊島与志雄。一二月一六日〜翌三九年七月一八日刊。

2、近藤一郎編『現代文章講座』三笠書房（全六卷、一五

年三月第一回配本、八月完結予定）

「日本文章道の確立」（明日の文章の正しい姿を、今日の文章の群の中から、はつきり浮かび上がらせることはむずかしい。科学の時代、機械の時代にふさわしい新文体論が、一ころ唱えられたが、立ち消えとなった。混沌たる日本文章道の指導的立場を明示した講座の出版は、大いに待望されていたものであろう。）

志賀直哉、久米正雄、石坂洋次郎他。三月三〇日〜九月二一日刊。尚、川端の名で各巻に分載された「小説の構成」



は後に同社から刊行されたが、瀬沼茂樹の代筆である。

3、『ハンス・カロツサ全集』三笠書房、一六年初夏（全八巻、五月下旬第一回配本）

推薦の辞「美しい文学カロツサ」（その美しさは花の内部と  
いったようなもので、無上の純潔な空間であり、又優美な  
光に守られた時間であろうか。その静けさが吾々を感動せ  
しめる。多くはない作品の一つ一つが美しさに輝いており、  
ドイツ文学の純粋な美しさを示してくれる。）

阿部知二、武者小路実篤他推薦。五月二八日〜一七年四  
月二〇日刊。「自慢十話」（昭三七・八）・「ミュンヘン」（昭  
四二・三）では、カロツサが没した翌三二年、川端がミュ  
ンヘンのカール・ハンザー出版社を訪ねた際にハンザーが  
カロツサの死を嘆いていたことを回顧している。

4、折口信夫、片岡良一他監修『日本文学講座』河出書房

（第二次予約募集。全八巻、「二五年」九月上旬第一回  
配本）

推薦の辞「必要な常識」（このような書の出版が、戦後の惑  
乱の落着きと立直りとのしるしであれば幸いだ。人は激し  
い現実を見過ぎると自分を見失いがちだが、日本文学の歴  
史を思う者は、戦争の中でも後でも、日本の変らぬ流れを  
見、日本を哀しみ愛した。戦時に曲げられた日本は戦後に  
逆に歪められている。まことの姿を文学の伝統に省みる時  
だ。明治以来の西洋文物の受入れ方は、反省すべきだとも  
今言われる。転落を招いたからだが、明治の先達が深く強  
い日本・東洋の精神と教養をもって西洋を入れた向上も今  
考えられている。講和によって更に日本は欧化の波に溺れ  
るであろうか。殖民地文化の浅薄は次に日本をどこへ転落  
させるか。自国の文学伝統の常識が必要だ。この講座は、  
国文学にも戦前と違う自由の見方が入っており、学界の新  
人が多く加わり、時代に応じ、また読者の研究を誘発する。  
監修者も執筆者も、今日の世情人心に訴え願う気持ちも  
あって、この仕事をされたことと思う。）

川端の戦後観と文学者としての気概がよく現れている。  
中村真一郎他推薦。一〇月三〇日〜二六年九月一五日刊。

5、『横光利一作品集』創元社（全八巻、「二六年」八月末  
第一回配本）

推薦の言葉「横光氏を憶ふ」（横光の弔辞に「君は日輪の出  
現の初めから問題の人」と書いた。今、選集が出るについ  
ても、横光の作品が現代文学の開巻であった、いろいろの  
意味が思われる。この選集は横光の主要な長篇に主要な短  
篇を配して、ほぼ年代順に編集されている。）

他に亀井勝一郎、河上徹太郎、中谷宇吉郎。九月五日（  
二七年三月三一日刊。川端は最終回配本の第一巻では「解  
説」も書いている。拙稿「川端康成と横光利一・その一断  
面―『川端康成全集』未収録文二篇に沿って―」（『芸術至  
上主義文芸』二〇一二・一一）及び、次章一 **074 松村泰太郎**  
宛も参照されたい。

6、雲の会編集『演劇講座』河出書房（全五巻、「二六年」  
九月下旬以降毎月一冊配本）

演劇講座をすすめる「私も愛読者に」（近頃演劇の研究・発

表が盛んと聞くが、そうした情熱が美しく歪められないで  
実を結ぶためにもこの講座は役立つだろう。演劇への関心  
に親しく呼びかけ、斬新な知識を拡大していく構成で執筆  
されていくのが予想される。演劇に非常な関心を持つ自分  
も愛読者になりたい。）

武者小路実篤、久保田万太郎、正宗白鳥他。九月二五日  
（二七年三月三一日刊。雲の会は二五年に岸田らが結成、  
雑誌「演劇」を創刊した。川端と演劇については前述、第  
I部第一章。）

7、三島由紀夫『禁色』新潮社、リーフレット（二六年）  
一〇月末刊

「推薦 川端康成氏」（以下は全文）

これは背徳への誘ひの書である。そして又、青春の純  
潔と、汚されゆく憧憬と、成人の秘密と、悪意を隠し  
た情熱と、人間の精神性の喜劇とを描いた作品である。  
その題材は、恋愛にせよ、性にせよ、未だ現代文学で  
扱はれなかつたものであつた。心理描写の巧緻は言ふ

までもない。華麗な背景の前に展開する事件の数々さへも、すべて、著者の仮構の情熱によつて、驚嘆すべき美しさを持つてゐる。

縦一五五mm×横一〇七mmの三段組の二段目が川端の文、三段目は「作者の言葉」で七文から成る。三島全集収録の帯文はその第四文のみの抜粋である。邪心に執着して書き上げたのが第一部、精神性の喜劇は執拗に追いかけてきた主題で、これを具体化した老作家に對置した「自然」に近似する人間を描こうとした、悠一の如きは小説の素材ではあるまいと知りながら作家として愛した、とある。

川端は三島宛八月一〇日書簡に「禁色は驚くべき作品です。しかし西洋へ行かれればまた新しい世界がひらけると思ひます」と示唆、三島から九月一〇日に返信。その後この推薦文の依頼があつたと考えられる。第一部は一月一〇日刊。『秘楽 禁色第二部』（新潮社、昭二八・九・三〇）の推薦文も川端全集未収録、『年譜』で紹介した。尚、「禁色」の老作家「檜俊輔の発想を、三島は川端康成という人物から受けたのかもしれない」（ドナルド・キーン『日本

文学の歴史 第一五卷』（中央公論、一九九六・九）といった指摘も為されている。

8、『現代文豪名作全集』河出書房（全一一卷、二八年二月上旬第一回配本、予約申込締切四月三〇日、既刊発売中）現代文豪名作全集を薦める「すぐれた結果」（名作は時代を超えて人の心をとらえる。そうした作品を読み返すことは、たのしみを深め想いを重ねさせる。この全集は作家精神の苦悩と、すぐれた精進の結晶だ。各一卷で作家の全貌を展望し得られる編集意図も良く、低廉な定価は広く人々に愛されることと思う。）

野間宏、平林たい子、安倍能成、中島健蔵他推薦。「増刊八冊愈々発売」、「全二四巻」と書かれた版等も確認できた。初巻刊行前の版もあつたと考えられるが未見。全二四巻別巻一、二七年三月三〇日（二九年一月一五）日刊。

9、ブルースト『失われた時を求めて』新潮社（全七巻・一三冊。（二八年）二月下旬発売）

「文学の扉」(淀野らの訳した「スワン家の方」は、「文学」連載中も本になってからも読んだ。表現に心開かれた。特に文章がその精神や哲学と離しがたいと思われた。その頃横光や私の作品にプルーストやジョイスなどの影響が見られると言われたが、心域の広大や深厚を教えられたことは確かだ。その後日本でも小説の心理的手法がいろいろ試みられた今日、プルーストの紹介は最大の扉が開くことであろうか。)

他に伊藤整、高橋義孝、堀辰雄、中村光夫。三月一日(三〇年一〇月三〇日刊。プルーストらの受容を知るのに重要な資料。「スワン家の方」訳が発表された当時、川端は長谷川巳之吉の痛罵に対してこれを擁護し(「中島氏その他」昭六・九。「英訳で読んだ」とある)、新しい心理文学の方法を取り入れるのは易しいようで難しいと述べた(「文壇明暗二道」同・一一)。後の「枕の草子」(昭三七・一〇)では、「意識の流れ」の文学は、堅固整齊の古典に対して、近代から現代の衰弱、頹廢、惑乱と考えていると記している。

10、『現代世界文学全集』三笠書房(第二次募集に際して)

全二七巻、既刊分一〇冊。二八年四月第一回配本)

推薦の辞(私たちの文学は、明治以後、新しさをいつも外国文学に求めてきた。今もそうであり、今後も益々そうであろう。外国文学翻訳書の発刊に力を注いできた三笠書房が創立二〇周年記念に刊行する全集の内容の充実に瞠目するにつけ、これらの作品に生動する二〇世紀精神とその多彩な表現が、私たちの文学にどのような新しさを齎すことかと思われて、若い人々にこの全集の精読を期待する。)

正宗白鳥、谷崎他推薦。全二七巻別巻四。二八年四月五日(三二年七月三〇日刊。三笠書房を創業した竹内道之助の『地獄の季節』(昭二四・七)にも、川端は乞われて序を書いている。同社刊行の飯島正『フランス映画』(昭二五・五)序文も川端の名で書かれているが、これは同社に勤めていた淀野隆三の代筆である。

11、『世界少年少女文学全集』創元社(全三二巻、二二八年)

四月下旬第一回配本。満二カ年で完結予定)

責任編集者の抱負「心ある多くの母親に競って愛読されるに違いない」(ここに一つの世界がある。少年少女の心をみだし、その渴きをうるおす豊かさ。少年少女の魂を織りなす光の彩の美しさ。この全集は集成される広さにおいても、類を見ない。愛するものの健やかに美しく育つのを願う世の母達へこの上もない贈物となるだろう。同時に母親自身にも競って愛読されるに違いない。)

小川未明、小林秀雄他。全五〇巻、五月一日〜三一年一月三〇日。第三巻『小公子・小公女』及び第三六巻『あしながおじさん』は野上彰との共訳となっているが、代作問題や訳文の異同等の詳細については『川端訳』童話について(前述、第I部第一章注(32))を参照されたい。

12、『昭和文学全集』角川書店(第一期二五巻、第三次予約募集。二八年八月一日配本開始)

推薦の言葉「新鮮な魅力」(『昭和文学全集』は新鮮な企画で、昭和文学の要点をおさえて魅力的だ。このような企画は円本以来だが、円本に比べて内容も充実し、装幀も明る

く美しい。昭和の二十余年は短いようで波瀾があり、それぞれ名作が花開いた。やがて第二期の発表もあるというが、更に多くの人によって愛され読まれてゆくことを見守りたいと思う。)

大正末(一九二五)年からの円本ブームを想起しつつ、昭和文学の二〇余年を振り返っている点が興味深い。青野季吉、野上弥生子、武者小路実篤他推薦。全二五巻別冊一。二七年一月二五日〜二八年一月二五日刊だが、内容見本の「昭和二七年一月上旬第一回配本」とある第一期刊行前の版には、川端の推薦文は掲載されていない。九州講演に発表する大岡昇平・伊藤整・川端と店主角川源義の写真も掲載。二八年六月五日に出版し、熊本・福岡・長崎の講演を終えた川端は、一日に一行と別れ、「続千羽鶴」の取材で竹田・九重へ行った。拙稿「千羽鶴」のゆくえ(前述、「はじめに」注(5))を参照されたい。

13、塩田良平・和田芳恵編『一葉全集』筑摩書房(定本版全七巻、「二八年」七月中旬第一回配本)

すいせんのことば「滅びないもの」(戦いに破れて荒廃した日本から、滅びない美をひたすら私は追い求めてきた。日本を愛する故に憂える人達の思いは、深く伝統を探し求めているかに見える。終戦後、明治文学に対する関心が高まり、その研究も高度に発展し、一葉についても幾多のすぐれた創見が発表されている。現存する草稿、発表当時の雑誌・新聞を広く求めて校合し、定本を作り上げようとした

筑摩書房の企ては、編纂者の熱意と周到さによって一葉の不滅の業績を完全に復元するであろう。編者に人を得た今度の全集に十分な信頼を寄せる私は、広く世に薦めたい。)

伊藤整、久保田万太郎、小島政二郎、佐藤春夫、なかの・

しげはる、野上弥生子他推薦。八月一〇日〜三一年六月二〇日刊。川端は後の「古都愛賞」にこたへて」(昭三七・

一)でも、「たけくらべ」は明治文学では最も愛誦した作品で何度読んだかしのれない、今も美登利の姿は心にあると記しているが、この推薦文にも一葉敬慕の心情と敗戦後の思いがうかがえる。戦前に川端は、和田芳恵「樋口一葉の日記」序」(昭一八・九)を書き、二二年には和田を大地書房

に紹介している。拙稿「内容見本・資料としての可能性」(前述)では、この内容見本を例として取り上げ、研究資料としての価値や活用法等について考察したので参照されたい。

14、a 座右宝刊行会編『現代世界美術全集』(書) 河出書房

(全八巻。二八年一〇月一五日第一回配本)

推薦者の言葉(この一二年の間に、マティス、ピカソ、ブ拉克という現代フランス三巨匠の絵画展が催され、この秋にはルオー展が観られそうなのが楽しみだ。今度出版されるという全集は、私にとって何より嬉しい企てである。心配なのは日本の印刷技術だが、座右宝が之迄の経験を生かすことによって解消するのではないかと期待する。)

同全集刊行の宣伝を兼ねて、一〇月一日に志賀、武者小路実篤、川端、福島繁太郎の座談会「西洋美術を語る」(「文藝」十一月)が開かれた。

b 『同』(第二次予約募集、全一二巻)

「増刊をよろこぶ」(心配した印刷は巻を追うに従い良く

なっており、殊に原色版は発刊当初からこれまでの美術出版を凌ぐ出色である。今度四冊を追増して刊行するという話で、当初の巻数を異動させるのは異論もあるが、不充分な点を充実整備することに賛成であり、新しい外国作品に触れ、日本画再評価の一つの基点を見出せば幸いと思っている。）

各氏の推薦文の他、書評も掲載。二九年九月二五日完。

15、中野好夫、吉田精一他『現代文学論大系』河出書房（全六巻、「二八年」一〇月下旬第一回配本）

現代文学論大系を薦める「要を得た成果」（河出書房からは、私も編者の一人として『現代日本小説大系』を刊行したが、文学評論をも明治以来の文学思潮を展望できるように編みたいとは、この編者達の間でも強い希望となっていた。実現されるのも嬉しい限りで、『小説大系』の編集者が多数参加しているので、新しい経験を生かしていくことが出来ると思う。巻数が少ないだけに編集の困難さがいやられるが、要を得た成果を充分にあげよう。第一回配本の内容を

見ても、はつきりとそれが言える。作家・作品論や序文・跋文も収めていることなど読者にとっても親切な編集ぶりだ、愛される叢書となるであろう。）

正宗白鳥他推薦。全八巻、一月二五日〜三〇年八月三一日。両大系の編者となったのは伊藤整、中島健蔵、中野重治、中村光夫。これに前記二名が加わった。

16、『少年世界美術全集』実業之日本社、リーフレット（全六巻、二七年一二月の矢崎美盛「序」掲載）

「やさしく、正確な美術史」（幼い頃からよきもの、美しきものに慣れ親しむのは大切なことだ。近頃少年少女向けの美術書が大いに刊行されているのは結構だが、歴史的な把握、様式を一つの生命ある流れとして理解させるのは、不十分な点があった。本全集は、優れた美術品を真に歴史的なものとして理解させようとしている点が美点の一つだ。また、序文にも記されているように、学問的な正確さを期しているようで、従来の誤りを具体的に指摘し、やさしい文章で説明している。中学生、高校生の父兄諸氏に特に推

薦したい。)

通説の誤りをこの『美術全集』で修正している具体例も示しつつ、少年少女にも美術品を歴史的に捉えさせようとする同全集の立場に賛同している点が注目される。亀井勝一郎他推薦。二八年一月三〇日〜三〇年一月五日刊。

17、『現代語訳 日本古典文学全集』河出書房、二八年一〇

月(全二四巻。「二八年」一月第一回配本)

日本古典文学全集をすすめる「大きい期待と楽しみ」(私はこれまで、日本の古典文学に深い関心を抱いてきたし、これからも、それにかわりはないと思っている。古典はじかに訴えてくる美と智慧を、現在もなお保持していると信じている。このたびの全集は、伝統の正しい受け取り方を、適切に、優美に示してくれるものとして賛美を惜しまない。古典の言葉を現代に生かすという困難な事業は、めまぐるしい今日においてこそ完成されねばならない。各訳者はその道の第一人者であり、私は期待と楽しみが一層大きい。) 高木市之助他推薦。「一二月第一回配本、全二七巻」と改

められた版もあるが、全二七巻のうち八冊は未確認、一月三〇日〜三一年一〇月三一日まで一九巻出して中絶か。前述(第Ⅱ部第二章八)したように、後年川端も源氏物語の訳を志したことがあった。31の推薦文も参照されたい。

18、『書道全集』平凡社(全二五巻。二九年四月第一回配本)

「象徴的な美」(書は最もよく人を現し、心を宿すものとして、古来尊ばれて来たが、今もその伝統は消えていない。墨一色の線の表現が無限の美しさ高さで人をうつのは東洋の根元にある象徴性によるからで、近代の造型美術にも通じる。本全集は美術史的な観点から名蹟を網羅し、その成り立ちも詳細に説明されるという。古い文学や古い絵画彫刻の全集の出版が盛んな時に、書が欠けていた渴を癒してくれるだろう。)

第Ⅱ部第九章二で触れたように、書の個展を二度も開いた川端の書道観がよくうかがえる。武者小路実篤、高村光太郎、高浜虚子、窪田空穂、和辻哲郎、吉川英治他推薦。



四月三〇日〜三六年七月二〇日刊。

19、『少年少女漫画世界名作全集』河出書房、二九年六月

(一・二・三卷七月上旬一斉発売)

推薦のことは「美しい心のために」(すぐれた漫画は健やかな笑いを心に広げてくれる。世界の名作物語をすぐれた漫画で飾れば、物語は生きた絵となって子供の心に育つことだろう。この漫画集が、大人の汚れた世界のためによりこびの少い今の子供達の心に生きてくれれば幸いだ。それだけ心の美しい子供が増えることになる。)

サトウ・ハチロー、村岡花子他推薦。七月一〇日に三冊刊行、三〇年には第四二巻が刊行されているが、途中巻も未確認のものがあ、巻数・最終刊行日とも未詳である。

20、波多野完治他編『作文教育講座』河出書房(全六巻、

〔二九年〕一〇月下旬第一回配本)

「私も一人の愛読者になりたい」(藤村は「すぐれた古人は皆、最後まですなおな心を持ち続けた人達のやうである」

と書いている。作文の尊さも、第一に「すなおな心」にある。私達は作文において人間の心が生来よいものであり、美しいものであることを知る。作文のよし悪しの問題は子供の情操や生活のよし悪しにも密接に繋がっている。作文教育に深い情熱を抱いている研究者により企てられたこの講座は、教育関係者は勿論、一般の人々にも迎えられて、そうした情熱が美しく実を結ぶのを期待する。綴方に関心を持つ私も、一人の愛読者になりたい。)

伊藤整、亀井勝一郎他推薦。一月五日〜三〇年七月三〇日刊。第六巻には川端「綴方の話」も収録。綴方への川端の積極的な関わり及び波多野完治については前述、第二部第六章。

21、座右宝刊行会編『現代日本美術全集』(書) 角川書店、

二九年一〇月(全一〇巻、一月中旬第一回配本)

推薦の辞「戦後画壇の動向」(河出書房の『現代世界美術全集』が近く完結するのに続いて、角川書店から『現代日本美術全集』が出版される。編集はやはり座右宝刊行会だが、

今度は原画も身近に在るから、図版等も一層秀れた出来栄えになるだろうと期待している。収録の画家名を見ると、極めて若い世代の作品も入るらしい。戦後画壇の動向が一望の下に眺められるのは私にとって特に興味がある。

川端は文学のみならず、美術においても草間彌生など新人にいち早く注目していたことが思い合わされる。一月二〇日〜三一年七月一五日刊。

22、藤村作編『縮約日本文学大辞典』新潮社（全一卷）

「得難い読む辞典」(『日本文学大辞典』は常に座右に置いてたよりになっている。戦後一〇年を経て尚、若い人達は古典の知識が乏しい。戦災で多くの貴重図書が焼失し、手近に、それに代る刊行書の少ないことも原因だ。八巻本が縮約され、廉価普及版ができたことを欣喜としたい。先ず自国の文学に通じるために、読む辞書としても得難い良書である。)

土岐善麿、伊藤整他推薦。三〇年一月二〇日刊。

23、『世界大百科事典』平凡社、二九年一月（全二八巻、

三〇年二月第一回配本）

世界大百科に寄せる大きな期待「物を書くに必要」(文章を書くにも、小説を書くにも、思わぬところで困難に出会う。些細なことでも、まちがいは書けないからである。ことに近頃のように、さまざまな新しい事柄が、日々世界中に生まれるいそがしい時代には、字引や百科事典を調べる必要が多くなる。平凡社の前の大百科も重宝だったが、全く新しいものが出版されると聞いて待望している。)

石川達三、三島他推薦。全三二巻、三月一五日〜三四年六月三〇日刊。三八年四月補遺一卷刊。

24、『伊藤整全集』(書)河出書房、三〇年三月(全一四巻、

三〇年第一回配本)

推薦の言葉(先ず私は、古くからの知人の一人として、次に熱心な読者として、多彩な才気と努力とから生れた数々の作品が収められるこの全集を期待する。時代の要求に適った全集で、従来の文学愛好者の領域を超えて、沢山の

読者から迎えられることと思われる。氏を最もよく知る瀬沼茂樹氏が解説を全巻担当するのも、個人全集の形式としては望ましい。

三月三十一日～三一年六月三〇日刊。両者の交流は、四年五月一五日に伊藤が川端へ同人誌「文藝レビュー」執筆依頼状を出したのを契機に始った。『小説の研究』(第一書房、昭一・一〇)は伊藤の代筆である(次章 029 伊藤整宛書簡参照)。この推薦文と同じ三〇年刊行の『現代日本文学全集三七 川端康成集』(筑摩書房、一月)には、伊藤「川端康成の芸術」(初出、昭一三・二)が再録されている。

25、亀井勝一郎他編『現代女性講座』角川書店(全七巻、三〇年九月中旬第一回配本)

推薦の言葉「ゆきとどいた内容」(編集者と執筆者の顔ぶれを見ると、ゆきとどいた内容で、安心して若い女性たちに薦められる。この種類の講座は実用に傾き易いのが常だが、そのような常識を破って、豊かな知恵と教養の糧が供給されているのが特色のようだ。)

井上靖、佐多稲子、武者小路実篤、三島他。亀井勝一郎、河盛好蔵、永井龍男らの「編集者の言葉」も掲載。九月三〇日～三一年三月一五日刊行。同講座の史的意味等は拙稿「内容見本・資料としての可能性」(前述)を参照されたい。

26、『日本むかしむかし』角川書店(全八巻。三〇年九月下旬、第一回配本)

推薦のことは「大人の童話を」(歴史は人生の故郷、私達は歴史から生まれて歴史に帰って行く。本書は歴史の流れをとらえて現代のむかし語りを実現させようという大胆な試みである。人生を豊かにし、生活を明るく彩る「大人の童話」の誕生を期待する。)

吉川英治他推薦。角川源義「刊行のことは」等。九月二〇日～三一年七月三一日刊。

27、『島崎藤村全集』筑摩書房(全三一巻。「三一年」四月五日第一回配本、毎月二冊刊行)

すいせんのことば「藤村全集に寄せて」(藤村は、西欧の小

説を日本の基盤に移植しようとする烈しい意欲をもち、明治以後の作家だれしもが苦しまねばならなかった国語の問題をたえず意識した。その文章は平明とはいえないが、ことばに注意深く神経をくばり、均整の保たれている点、独特の魅力を持っている。その意味でも、今度の全集が漢字制限、新仮名遣いで刊行されると聞いて、その成果に注目している。）

壺井栄、野間宏、和辻哲郎他推薦。三二年七月二五日完。

中学時代の川端は、藤村調の詩を作り、藤村を「現今十二文豪」に選んで崇拝していた。

28、『図説 日本文化史大系』小学館（全一四巻、三一年五月下旬第一回配本）

**推薦のことば**（私は昔からの日本人がわれわれにのこしてくれたものには、何によらず強く興味をひかれたが、美術とか工芸とかいう面のものばかりでなく、生活について記録的な役目をするいろいろなもの、美しい写真になって載せられているときいて、大いに楽しみにしている。また、

それらの文化遺産の持つ位置が、それぞれの専門家によって示されるということも、アマチュア的立場にある者からいって、大きな期待を寄せたい。日本人全体の歴史感覚・文化感覚を養い育てるために役立つことを祈ってやまない。）

久保田万太郎、亀井勝一郎、谷川徹三他推薦。七月二五日〜三三年九月二五日刊。

29、女流文学者会編『現代女流文学全集』長嶋書房（全一二巻、附別冊一卷、「三一年」七月中旬第一回配本、同月下旬第二回配本）

**諸家の推薦「新しい女性文学を築くために」**（この国には古くから女性の文学の輝しい伝統があり、現代もその時代といえる。現代の女性作家の全代表作を集めて全集を編むということは、古い伝統に照らして現代の女性文学を思い、この基盤の上に次の時代の女性文学を築くことが考えられ、大きな意味を持っている。）

他に青野、河盛、村岡花子、金森徳次郎、神近市子、高

峰秀子推薦。編集委員は宇野千代、平林たい子、板垣直子、壺井栄、円地文子。九月一日〜三二年一月一日刊行の五冊（第一巻平林たい子、第五巻林芙美子、第八巻吉屋信子、第四巻佐多稲子、第二巻壺井栄）で中絶か。川端が責任編集した鎌倉文庫『婦人文庫』（昭二一・五〜二四・一二）は、女流文学者会協賛だったことは前述、第Ⅱ部第五章二。

30、『丹羽文雄作品集』角川書店（全八巻。三一年一二月一五日第一回配本）

丹羽文雄作品集を読む人に（丹羽のおびただしい作品から、主要な長編短編を選んで八巻に収められたことは、かねて丹羽を恐るべき作家として見ている私には、今日の文学という町に、最も大きい「人間会場」が建つように思われる。丹羽の作風は終始人間の現実根ざし、世相を生かし、なかならず男女の愛欲を究き、凡愚の煩惱を暴き、一貫して倦まないようできて、時に新手法を試み、その逞しい足の太さは、実は長く凝滞することのない探索と実験によって、美醜、清濁も流れまざるほどの前進の力から来ており、重

量の単調ではなく、複雑多岐である。それをこの作品集は明らかにし、天成の小説家の広い厚みも示してくれるだろう。）

五年六月の「新人才華」でいち早く丹羽に注目して以降、丹羽文学を親しく知る者として作品集への期待を記している。伊藤整、尾崎一雄、永井龍男他推薦。十返肇「丹羽文学入門」。全八巻別巻一、一二月二〇日〜三二年八月一五日刊。一二月一日「読売新聞」の同書広告には、「人間会場」と題して川端の推薦文も掲載されている。

31、『日本古典鑑賞講座』角川書店（全二五巻、「三二年」五月二五日第一回配本）

すいせんの言葉「私の古典愛」（敗戦ももう一〇年以上の昔のことになったが、当時の思いは深まるばかりだ。私は日本の作家として日本の古典を愛する。今度講座が出るそうだが、私も愛読しようと思っている。源氏物語など中学から読みかじり、戦争中も横須賀線の往復などにも読んだが、学説も変わっていろいろ。楽しみに待っている。）

推薦文は和辻他。「私と古典アンケート」上林暁他。六月一〇日〜三八年二月一五日刊。源氏物語に関しては、17の推薦文も参照されたい。

32、『谷崎潤一郎全集』中央公論社（豪華普及版全三〇巻）

三二年一二月一〇日第一回配本）

推薦の辞「私たちの力強い誇り」（谷崎作品は以前から多く翻訳されていたが、近年は「細雪」等の翻訳が出て、西洋諸国にも尊敬され、現代日本の代表的な大作家と見られていることは、国内の私達も自然なことだと思ふ。後期作品に私達は日本の伝統を多く感じるが、そこにも西欧文学が最もよく吸収されているという外人の考えも正当であろう。日本文学の海外への紹介が盛んになりつつある今日、谷崎さんの存在は私たちの誇りとしなければならぬ。）

円地文子、舟橋聖一、ドナルド・キーン、小林秀雄、久保田万太郎、正宗白鳥、武田泰淳、和辻哲郎他推薦。伊藤整「解説者として」。三四年七月三〇日完。中央公論社との関係は前述、第Ⅱ部第二章。川端は同社から出た谷崎の『瘋

癡老人日記』（後述44）、『新訳源氏物語』（昭二六・五）、『新々訳源氏物語』（昭三九・一一）、『二八巻本谷崎全集』（昭四一・一一）にも推薦文を書いており、三〇年には谷崎のノーベル賞推薦文執筆の依頼もサイデンステッカーから受けている。三二年一〇月四日には、「ノーベル文学賞候補に谷崎、川端、芹沢」といった誤報もあった（第Ⅱ部第九章一3及び次章076谷崎松子宛も参照されたい）。

33、千宗左『表千家茶の湯全書』婦人画報社、リーフレット

「親切な手引書」（茶の湯を習うには、昔から目に伝え、口に伝えて、きびしい修行を積んだだろうが、その幽玄な茶の湯を、この本ではカメラで伝えようとしている。京都の家元邸内の茶室、茶庭が細かく紹介されているのは、京都まで出掛ける機会の少ない方にはよろこばれるだろうし、家元に伝えられるお道具類が数多く紹介されているのも親切な企画である。お茶の勉強には、道具類を見る目を養うのも大事なことだ。お手前に上達するだけでは、十分なお

茶の勉強とは言い難い。この本は茶の湯全般にわたるよい手引書となるう。）

他に千「刊行のことば」。三三年八月一日刊。しばしば不審庵東京の表千家初釜に参加した川端は、前年二月二十七日には、同所で私蔵の「凍雲篩雪」を掛けた表千家による茶会を開き、志賀、大佛次郎らも招いた。この後、千宗左編『表千家』（角川書店、昭四〇）にも推薦文を寄せ、千宗員（現・宗左）と細川護貞長女の結婚式（昭四四・一〇・二五）の媒酌も務めた。

34、『世界若草文学全集』（書）三笠書房、リーフレット、三四年四月（全三二巻、三四年四月一〇日第一回配本）  
監修者の言葉「みずみずしく、楽しい全集」（若草文学という呼称は、三笠書房の発明であろう。十代の生活と感受性と夢にかよう文学作品をさすものである。こういう清潔な青春文学は、日本では数少ないが、西洋文学には名作が多い。そのほとんど全てを収めた全集の刊行はおそらく初めてで、企画自体がみずみずしく、楽しい。どの作品も全訳

を期したことは、若い人達に贈るこの全集の役割を深めるものと信じている。）

八月五日の第四回配本までの四冊で中絶か。『書誌』によれば、パンフレットの方の題は「十代の夢にかよう文学」。

35、『日本文学全集』（書）新潮社、三四年四月（全七二巻、五月中旬第一回配本）

編者のことば（明治以来の文芸作品を全集に編む企ては、これまでに随分試みられたことだし、違ったやり方も考えられないかと思われた。老舗の新潮社が初めて手がける日本文学全集編集の相談を受けて、格別の知恵の出しようもなかったが、いろいろとプランを練っているうちに、読者の側に立つ編年というものが活路として開けてきた。読むということからいえば、わずか百年にみたない文学の流れでも、はや大正は遠く、明治はさらに遠い。そういう見方をとれば、また新しい編集の工夫もあり、作品の選びようもある。七二巻に編んで一覧してみると、本当に読まれる全集とはこういうものであろうかと思われる。）

編集プランへの川端の関わり様がうかがえて、興味深い。  
五月一二日〜四〇年一月二〇日刊。

36、『児童世界文学全集』偕成社（全二二巻、「三四年」九

月上旬第一回配本、三六年四月完結予定）

監修者のことば「少年少女のための珠玉」（すぐれた児童文学の遺産ほど、純粋な値打ちを持ち続けるものはない。この珠玉の光が少年少女の心を美しく照らすようにさせたい。監修者の一人として、多くの少年少女の机上の珠玉となることを望む。）

他に小川未明、浜田広介、佐藤春夫推薦。全二五巻、九月五日〜三六年一〇月一五日刊。第一五巻川端著『家なき子』等については、『川端訳』童話について」（前述、第一部第一章注（32））を参照されたい。尚、姉妹編『日本児童文学全集』（昭三六〜三八）及びあかね書房『世界児童文学全集』（昭三三〜三五）の推薦文は、川端文学研究会編『川端文学への視界10、11』（教育出版センター、一九九五・六、一九九六・六）掲載の拙稿では巻末広告掲載文の形で

紹介したが、いずれも内容見本掲載の推薦文（全集未収録）の抜粋だったことを今回確認した。

37、『薬師寺』実業之日本社（三四年一〇月中旬発売予定）

推薦の言葉（天平の美術には、天平独特の美しさ、大きさ、豊かさがある。薬師寺金堂の三尊は、そのような天平の最初の具現で、澁刺たる生氣と豊成のうちに繊細な神経が行き届いている。日本の美術の中でこれほどの大きさを持つた美しさは、他にない。町田甲一氏が強く惹かれているのも、この故であろう。坂本万七氏の写真も、肉眼でとらえることの出来ない美しさ、大きさ、繊細さを、よくとらえている。町田氏が多年の薬師寺研究の成果を生かしつつ綴られた文章は、坂本氏のみごとな写真の協力を得て、読者の理解を誘発するところが多いであろうと信じる。）

武者小路実篤他推薦。三五年五月一五日刊。薬師寺に惹かれた川端は、推薦文執筆後の三四年一月一四日にも同寺を訪れている。



38、藤沢衛彦著『図説 日本民俗学全集』（書）あかね書房

（全八巻。「三四年」一月二〇日第一回配本）

推薦のことば（民俗学は特に人間の生活に、芸術に、密接にむすびついた学問で、私たちのような門外漢にも興味深い。その道の権威である藤沢氏の長年の研鑽が実って出版されるのは意義深い。）

柳田國男・折口信夫らとも接点のあった川端の、民俗学への関心の一端がうかがえる（前述、第Ⅱ部第七章一）。

一二月一五日〜三六年五月五日刊。『書誌』では、「一五日配本」と記載された版が紹介されている。藤沢は大正三年に日本伝説学会を設立、大正一〇年には日本児童文学者協会創立に参画し、昭和七年〜一一年には会長も務めた。

39、『世界文学全集』新潮社（新編五〇巻、「三五年」三月

一五日第一回配本）

清新な書（小型本の『日本文学全集』の姉妹編として期待する。今日の清新作も加えられ、万人必携の世界の名作が美装堅牢の携帯本となるのはよろこばしい。いろいろに批

判されているマスコミは一般の読書力を広めたとも考えられるが、これらの名作もマスコミの中に投じられてマスコミの浮薄雑騒を救い、人間の精神と生活との深高を感知させるだろう。これらの名作もマスコミによって尚多く読まれるところに読書界のマスコミによる向上、或いはマスコミによる低俗化への抵抗があると言えるかもしれない。）

マスコミへの言及が注目される。辰野隆、山崎豊子他推薦。三九年一月二五日完。姉妹版『日本文学全集』は全七二巻、三四年五月一二日〜四〇年一月二〇日刊。

40、『決定版 日本童話全集』あかね書房（全一二巻、「三

五年」五月五日第一回配本、三六年三月完結予定）

すいせんのことば（日本民族に長く受け継がれた伝説・物語を少年少女に読ませることはいつの世にも大切だ。少年少女の心を美しく豊かに育てるために、それらは多くの尊い光を秘めている。この全集は、その集大成として完璧なものだと思う。）

武者小路実篤他。三六年四月一五日完。

41、『少年少女世界名作文学全集』小学館（第一期全二八巻、

〔三五年〕五月二〇日第一回配本）

編集委員の言葉「私自身の経験からの願い」（幾世代もの心から心へ伝えられている世界名作を思うとき、私は自分自身幼い心の初々しいよるこびが懐かしくなる。幼い心にしみこんだ感激は、いつまでもかわることがない。今の少年少女たちが夢と希望を持つことを望みたい。）

小川未明、井上靖他。第一回配本の野上共訳『小公子』は二八年の創元社版共訳に加筆したものである。詳しくは拙稿『川端訳』童話について」（前述、第I部第一章注（32））を参照されたい。三七年六月二〇日完。

42、野田宇太郎『定本文学散歩全集』雪華社、リーフレッ

ト（全一二巻、〔三五年〕一月第一回配本、毎月上旬一冊配本）

無題（氏は文学散歩という独特の文学形態をつくり始めてもう一〇年になる。その間に日本の風土も一変している。

旅はつらかったろうと思うが、おかげで日本にも文学散歩という記録文学が生れたわけで、その成果が全集として刊行されるのは日本文学のためよるこばしい。現代に生きる我々にとっても勿論だが、後世の人々にとっては遥かに重要な著作となろう。）

山内義雄、岩淵悦太郎。一二月五日〜四〇年八月三〇日までの一〇冊で中絶か。川端は野田とは、戦時中の小山書店時代から河出書房「文藝」編集長時代にも交際があった。

43、野上彰訳『ターザン物語』実業之日本社、リーフレッ

ト（全六巻、第一巻発売中。第二巻〔三六年〕一〇月上旬、最終巻第六巻、三七年二月上旬刊行予定）

ターザン物語を推薦する（冒険を愛し、悪を憎み、常に善に向うのは少年少女の天性である。健康に満ちた生命に溢れるターザンの物語は、永遠の夢をうたう。この選集が翻訳されたのを遅く育ちゆく日本の少年少女と共に飲びたい。）

九月一日〜三七年二月一〇日刊。雑誌「白鳥」の企画も

した野上との関係については、第Ⅱ部第六章を参照されたい。推薦文執筆に、野上自身も関与しているか。

44、谷崎潤一郎『瘋癲老人日記』（書）中央公論社、リーフ

レット（三七年五月二八日）

礼讃「古今に類を絶する名作」（以下は全文）

谷崎氏の文学生涯が遂にここまで来たかと思へる名作である。古今に類を絶する。身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれとでも言ふやうな名作であらうか。従来の谷崎氏の官能耽美、女体愛喪志がここに極まった作品であるが、ここまで思ひきり大胆に徹底して書かれると、「瘋癲老人日記」の痴情は老いの妖艶に底光りする。残りの生の花が燃えて冷めたくもある。とにかく、このやうに異端な名作がよくまあ書けたものとおどろかれる。

冒頭部分のみは、橋本芳一郎（『谷崎潤一郎の文学』昭四

〇・六、増訂版昭五一・九）や三枝康高（『谷崎潤一郎論考』

昭四四・六）らが引き、よく知られているが、いずれも典拠は示していない。川端は、三島宛書簡（昭三七・四・一

七）にも「遺言状のような傑作」云々と、同作への驚きと感動を記している。

45、座右宝刊行会編『現代の絵画』（書）小学館、リーフレッ

ト（全七巻、三八年一月下旬第一回配本）

書齋、仕事場に「国際的スタッフの意義」（この全集は、二

〇世紀絵画の特質を余すところなく把握したもので、編集委員には外国の著名な学者や批評家も参画しているときく。国際的なスタッフによって選ばれた今日の絵画にじかに触れるのは、意義も大きいし、なにより嬉しい。）

「リーフレット」には、「小学館創立四〇周年記念出版」とある。二月五日〜三九年五月一〇日刊。

46、『世界の文学』（書）中央公論社（全五四巻、三八年二

月四日第一回配本）

「世界文学の一大交響曲」（欧米の多くの名作は、既に日本の古典と比べていいほどわれわれの骨肉にしみこんで、日本人の精神形成に役立つている。今『世界の文学』の内容

をみると、それらが過不足なくとり入れられていて、世界文学の一大交響曲を聞く思いがする。現代の作家についても深い関心が払われているのは、若い読者のために殊に喜ばしい。若い世代の共感を得ることになるだろう。

言及されている欧米の名作の影響や現代作家への関心は、川端自身のものであった。『書誌』には記されていないが、アンケート「私と世界文学」には有吉佐和子、大江健三郎、亀井勝一郎、曾野綾子らが回答している。四二年七月一日完。

47、『現代の文学』（書）河出書房新社（全四三巻、三八年五月七日第一回配本）

編集にあたって「異色・生彩ある全集」（この全集は従来に類例がなく、小説家だけが編集して小説だけを集めた。六人の小説家の自主、自由の、生きた感受は、広い読者に合うかと思う。異色・生彩ある全集の成果は、編集の私達にもおもしろい。）

五月一〇日〜四一年一〇月八日刊。四月一六日『朝日新

聞』全面広告にも川端ら編集者のコメントが掲載された。連名による「編集のことば」は、三島全集第三六巻「解題」（新潮社、二〇〇三・一一）によれば、三島が執筆を担当。

48、座右宝刊行会編『世界の美術』（書）河出書房新社、リーフレット（全二五巻、三八年一〇月二〇日第一回配本）  
推薦のことば「私たちに欠かせぬ教養と趣味」（『世界の美術』の特色は、図版は全て色刷りでスキラ版型であることなどだが、近頃日本の色刷りは、世界に名高いスイス・スキラの美術印刷に劣らぬほど進み、しかも価は何分の一である。西洋美術の鑑賞と知識とが、もう私達に欠かせぬ教養と趣味である今日、『世界の美術』も多くの人々のものとなつていいと思う楽しい小型本だ。）

全三〇巻、一〇月一八日〜四一年四月一五日日刊。

49、毎日新聞社国宝委員会編『国宝』毎日新聞社（全六巻、三八年一〇月第一回配本。四一年五月完結予定）

「この全集こそ国の宝に」（今日なお目で見られるものとし

て、これだけの国宝が遺されているのは、日本の幸いであり誇りである。国宝によって、日本民族の心と美との伝統を知るばかりでなく、世界の中における日本が明らかになる。国宝は現在にも生き、未来をも照らす。最高の日本が国宝に具現されている。その国宝の全てを今のすぐれた色写真と解説とで精到美麗に集めた図録は、これまでなく、この全集も国の宝であり、私たちのよろこびだ。国宝を大観して人々は多くの啓示を得、開眼するところがあるう。

小泉信三他推薦。一月三〇日〜四二年七月二一日刊。

同全集刊行前のこの推薦文と、「第一巻を見て」とある川端全集収録の推薦文「王者の出現」とは別文である。

#### 50、『豪華版 日本文学全集』河出書房新社（全二九巻、四

〇年）六月三日第一回配本）

「岩下志麻さんの『雪国』（「古都」でも主役を演じてくれた岩下さんが、近くまた「雪国」で駒子を演じてくれることになった。以前岸恵子さんが好演してくれたが、岩下さんのもち味を生かして、おのずから違った「雪国」ができ

ようと、雪のなかのロケ風景を想像しながら楽しみに思っている。）

石原慎太郎他推薦。四二年一〇月二〇日完。『第一八巻川端康成集』（昭四一・一・三）に「雪国」を収録。岩下主演「雪国」は四〇年四月一〇日公開、松竹、大庭秀雄監督。岸主演の東宝映画については前述、第Ⅱ部第二章6。

#### 51、矢代幸雄著『日本美術の特質（第二版）』岩波書店、四

〇年七月（八月一四日発売）

「世界的な視野」（旧版の面目を一新するほどの改訂増補を経て新版の出るのは実にありがたい。戦時中の旧版は繰り返し愛読し、日本美術を知る基本としてあらかた頭に入っているほどだ。旧版も今日の美術書氾濫のなかで、なお類書のない名著として、人々を開眼、啓発し続けている。戦時中の制約を受けたと氏自らが言い、図版に多少の不足はあったが、新版では改補され、著者の二十余年の成長円熟が加わった。世界のための日本美術の名著だが、行文は流麗平明のうちに愛情がこもり、一般に親しみやすいのも幸

いだ。）

他に田中一松・吉川逸治推薦。矢代は東山魁夷の友人で川端香男里・平山三男解説「川端康成・東山魁夷往復書簡」(「新潮」二二〇〇五・六)にも名前が出ている。「千羽鶴」を独訳した八代佐知子は矢代の夫人で、川端宅も夫婦で訪れている。「美しい日本の私」(昭四三・一二)でも、愛読した『日本美術の特質』に言及している。次章 **080 矢代幸雄** 宛書簡も参照されたい。

52、『デラックス版 旺文社文庫特選名作セット』リーフレット(名作四〇冊)

私も旺文社文庫をおすすめします(長い年月の評価にたえて色あせぬ東西の本こそ、まず第一に読みたい。そこには時代をこえた真理と美があるからだ。)

滑川道夫他推薦。旺文社文庫は四〇年創刊、名作セットには川端のものとしては『伊豆の踊子・花のワルツ』(昭四二・七・一〇)が選ばれており、旺文社文庫『山の音』(同・一〇・一〇)には「四〇冊厳選」の広告が載っている。読

売新聞広告には四一年三月二五日に既刊三九点とあり、九月七日には六二冊になっていることから、この頃の刊行であろうか。旺文社にも問い合わせたが、未詳である。

53、『カラー版 国民の文学』河出書房、リーフレット(全二六巻、「四二年」八月下旬第一回配本)

無題(この全集の作品は、真に「国民の文学」の名称にふさわしい作品ばかりだ。)

桑原武夫、徳川夢声、千宗室他推薦。全二六巻、八月二〇日〜四四年一月三〇日刊。

54、土門拳『古寺巡礼 第三集』美術出版社(四三年三月下旬刊行)

すいせん「肉眼を超えた」(「写真は肉眼を超える」とは土門さんの言葉だが、写真という機械による写実に強い個性を打ち出す。千古の不動無言の寺院や仏像は、現代に土門さんを得て、精神の対話や感応を新たにした。『古寺巡礼』こそは土門さん生涯の業績である。敬虔な巡礼の無限の道

を行く心があって、写真が胸に入る。「肉眼を超える」と同時に、古今東西を超えた美の写真集に感謝しなければならぬ。

棟方志功他推薦。三月三〇日刊。最終巻の第四集（昭四六・九・三〇。第五集は国際版）の題字は川端。川端は土門写真の『大師のみてら東寺』（美術出版社、昭四〇・一〇）の題簽も書いており、『古寺巡礼』の題字も第三集の刊行前に頼まれていた。土門が脳出血後の左手で書いた依頼状に感動したことが、「書」（昭四六・五）に記されている。第一集は三八年七月三〇日刊。土門『日本名匠伝』（駸々堂出版、昭四九・五。文・草柳大蔵）には、一六人の名匠の一人として川端も選ばれている。

55、奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』岩波書店（全一四巻、「四三年」四月二四日第一回配本）

「民族の貴重な出版」（全巻の内容細目を知り、写真の一部を見て、私は狂喜し、感謝をこめて出版を待望する。百年に一度という出版であって、奈良の六大寺が今日の姿にあ

る幸いが、大観により周到に伝えられるのは今日の幸いだ。六大寺自身が出版を主催するのはこの大観の大きい特色で、寺が写真家に従来にない便宜をはかり、学者の解説に寺の意見も出した。解説者に若い学者が多いのも、敬虔な熱心が全巻に通るであろう。奈良の六大寺は世界の宝であるから、『大観』は民族の貴重な出版として、世界の本でもある。六大寺の全貌を教えられる幸いは言葉につくせない。感動をもって迎えるべき大出版だ。）

志賀、広津和郎、野上弥生子他。四八年五月二一日完。

56、『デュエット版世界文学全集』集英社、リーフレット（全六六巻、二冊同時配本、第一回、「四三年」五月二〇日）

すいせんのことば「世界の若い人の共通の文学」（青春のロマンは世界の若人の共通の言葉であり、すぐれた外国文学を読んで心の世界を深め広げるのは、若さのもつ特徴だ。この全集は初めて外国文学に接する若人にこそふさわしく、文学に疎遠な人々も十分理解できるように配慮がうかがえる。）

石坂洋次郎他推薦。六月一〇日〜四六年二月二五日刊。

配本)

57、a 『名著複製全集・近代文学館』日本近代文学館(全四セット、「四三年」九月上旬・明治後期二七篇二九冊第一回刊、第四回は昭和四四年度)

推薦文のなかから「壯観」(近代日本文学から芸術的な薫り

高い名作を選び、もとの姿のまま覆刻するという。文学研究だけでなく、文学教育にも生かされれば、画期の意義を持つものとなる。日本文化の遺産を伝える日本近代文学館の発足を記念するにふさわしく、明治百年を記念するに最もふさわしい大事業。その壯観をはやく見たい。)

三島他推薦。三島全集によれば内容見本は六月刊行。全一二〇点・附録六・解題四。九月一〇日〜四四年九月一日刊。同館発足時の川端については、拙稿「日本近代文学館草創期と川端康成」(前述、第Ⅱ部第二章注(31))を参照されたい。

b 『特選 名著複製全集・近代文学館』同(全二九点三一冊。附録一・解題一。「四六年」五月初旬全巻一挙

「画期の事業」(『名著複製全集』が、今度新たに三一冊を加えて完結する。望んでも得られまいと思っただけに、大きな慶びだ。日本近代文学館の発足を記念する全集が、文学教育に広く生かされ、明日の日本文化の創造に役だてられることを願う。)

井上靖他推薦。五月一〇日刊。

c 『精選 名著複製全集・近代文学館』同(全三二点四五冊。附録一・解題一。「四七年」五月中旬より全巻直送)

推薦のことは「類のない企て」(文学全集は数多くあり、それぞれ独自の性格、価値をもち、すぐれた文学の生命を伝えているが、明治以来の日本文学の粹美を網羅した企ては日本出版史上画期だ。名作の初版本、稀覯本には、手にすることも容易ならぬものも少なくない。この豪華文学館が精選版の実現で完結に至ったのは大きな喜びだ。学校教育だけでなく、明日の日本文化の創造に大きな意義を持つものとなる。)



円地他推薦。六月一〇日刊。

58、窪田般弥訳『カザノヴァ回想録』河出書房（全六巻、

四三年一〇月）

推薦のことば「すぐれた古典」（『カザノヴァ回想録』ほど名のみ高く、内容が知られていない書物は少ないのではなからうか。一八世紀のヨーロッパを代表するカザノヴァの生彩ある生涯は情熱とロマンの世紀にふさわしい。今回初めて完訳紹介されるという。時代の記録としても文学としてもすぐれた古典である。古典は時代とともにしづかに生き続け、その声を聞こうとする者に、その心を開く。）

川端のカザノヴァ評として貴重。他に石川淳、円地文子、埴谷雄高、吉行淳之介も推薦しており、当時のカザノヴァ受容状況を知る有効な資料である。一〇月二〇日〜四四年三月二〇日。

59、『学研版 日本文化の歴史』（全一六巻、〔四四年〕三月

中旬第一回配本）

「史と美と心を総合的にとらえる」（歴史叢書や美術全集の出版は多いが、歴史の眼で日本文化の根源の底流にもとくみ、史と美と心を総合的にとらえようとする出版は乏しかった。各民族独自の道が究められている今日、わが民族が創造してきた文化の根源から伝統に思いを深めることは切に必要だ。各巻の半ばを占める美しいカラー頁は無言のうち民族の魂の形象に親しませてくれる。）

寺山修司、横尾忠則他推薦。全一六巻、四月一日〜四五年八月一日刊。

60、『名著複製日本児童文学館』ほるぷ出版、リーフレット（全三二巻、付録一・解説書一。全巻先渡し）

「貴重な宝物」（今日、児童の世界は美しい本の洪水だが、明治大正の頃は子供にとって本は貴重な宝物で、繰り返し何遍も読んだ。大部分は粗末なものだったが、無限の愛着があり、今日の児童文学の隆盛を導き出す原動力が秘められていた。今、その中から選ばれた三二冊を並べてみると、どの一冊にも思い出がある。それは日本人の心の歴史であ

り、これから伸びていく子供達への最高の贈り物だ。)

坪田譲治他推薦。四六年一月一〇日刊。

61、『中尊寺』河出書房新社、四五年十一月(四六年二月

下旬刊)

推せんのことば「藤原美術工芸の絶品」(今東光が貫主になつていたので金色堂の落慶式に会う幸を得たが、繊細巧緻を極めたうちに古代の勁さが鮮烈に通っているのは私のよろこびであった。紙面の大きい写真によって図録し、新たな調査が集成されたのは本書が初めてだ。中尊寺の全容を見、知るとは、平安王朝の美、日本の伝統の美を見、知るための心を与えられたことにもなる。)

今日出海他推薦。三月三〇日刊。四三年二月二日に川端

は新宿の中尊寺展の開眼に立ち会い、二四日に「中尊寺展」を「東京新聞」に発表、五月一日に落慶式に行った。

62、『複製日本古典文学館』日本古典文学刊行会(四六年

一〇月上旬第一期第一回配本)

推薦のことば「温故知新」(温故知新という言葉があるが、今のようない時代こそ、過去を振り返り、これからの日本文化の進む道をじっくりと考えてみる必要がある。近頃、古典の複製が盛んになつてきたのも、この現われか。我々の祖先が作り出し、伝えてきた民族の遺産を、さながらの姿で手許に置くことが、古典の中に生きた人の心を知るのにかに有意義か、言うまでもない。日本古典文学会が古典の複製の集大成化に向かつてふみ出された。大きな期待をもつて完成を待っている。)

井上靖、円地文子他推薦。第一期は全四〇巻、一〇月一

日、五〇年四月二五日刊。「複製日本古典文学館ニュース」(昭四六・七、四七・六、図書月販)も併せて刊行された。

## 第二章 文学館・記念館所蔵書簡に見る川端康成―未翻刻書簡三〇六通 解題と一覽―

筆者は各地の文学館等で調査して多数の資料を発掘したが、本章では、神奈川近代文学館・茨木市立川端康成文学館・日本近代文学館・北海道立文学館・日本女子大学成瀬記念館の五館が所蔵する、翻刻にはかなり時間を要する、またその内容から一般公開が困難と思われるものも含む書簡を取り上げ、凡例に従って解題を付した後、その一覽も示す。これらによって、川端及び関係する文学者等の動向のみならず、当時の文学的・社会的状況も詳らかとなる部分も大きい。一覽に示した各書簡（閲覧制限のあるものも含む）の具体的な内容については、各館のHPで示されている特別閲覧等の手順によって確認されたい。尚、以下の文献にも各文学館所蔵の全集未収録書簡が翻刻されているので、参照されたい。

\*・「神奈川近代文学館」(二〇一二・四・一五、二〇一三・四・一五)

↓神奈川近代文学館所蔵の書簡

\*・川端香男里「新発見 川端康成青春書簡九通」(「新潮」昭六二・八)

・川端富枝『川端康成のふるさと 宿久庄』(私家版、一九八九・四)

・笹川隆平『川端康成 大阪茨木時代と青春書簡集』(和泉書院、一九九一・九。以下『茨木時代』と略す)

・茨木市立川端康成文学館『川端康成文学館のあゆみ』

(二〇〇一・三。以下『あゆみ』と略し、同書に写真や一部の翻刻が掲載されている書簡には★印を付す)

・同「茨木市立川端康成記念館 川端康成書簡」(『全国文学館協議会紀要』二〇〇八・三。以下『紀要』と略す)

・三重県立美術館『川端康成と横光利一』(二〇一八・一〇) ↓川端康成文学館所蔵の書簡

\*・「川端康成書簡一〇一〇」(「日本近代文学館」一九九二・一・一〜二〇〇九・三・一五、以下「日文」と略す)

・「徳島県立文学書道館研究紀要 水脈」(二〇一〇・三〜二〇一六・三) ↓日本近代文学館他所蔵の書簡

〔凡例〕

一、五館が所蔵する川端関係未翻刻書簡を、①川端書簡、②川端来簡、③川端関連書簡（A中里恒子宛川端秀子書簡、B藤田圭雄来簡、Cその他）に大別し、①は宛名ごとに、②・③Bは発信者ごとに細分した。

一、各グループ内は三七巻本全集に倣って第一信の古い順に並べた。但し、川端義一・絹枝宛（001）等同一世帯複数名宛のものは一纏めとし、**広津和郎・（広津和郎娘）広津桃子宛（011・012）、中里（佐藤）恒子・（中里恒子夫）佐藤信重宛（021・022）、小島政二郎・（小島政二郎妻）小島みつ子宛（026・027）**は組として扱い、001から122の番号を付した。同番号内は古い順に配列した。

一、各書簡は、神奈川近代文学館蔵は（神）、茨木市立川端康成文学館蔵は（川）、日本近代文学館蔵は（日）、北海道立文学館蔵は（北）、日本女子大学成瀬記念館は（成）と、宛名若しくは書簡ごとに付記して区別した。

一、各館の検索画面等で示される書簡の日附は後付と消印が混在しているものもあるが、本章では後付に従い、無いものは「消印」と明記した。年賀状の場合は、消印があれば併記した。年月日を推定した部分は括弧で括って示した。館によって推定が為されているものも、誤りと考えられるものは修正した。

一、各書簡の年月日推定根拠等参考事項は、各書簡の後に「\*」印を付けて一字下げで記し、献本の礼の場合は書名等も補った。

一、書簡の発着信者に関する注は、各項末尾に改行して、適宜付した。書簡前後の事柄やその典拠は『詳細年譜』（以下『年譜』と略す）を参照されたい。

一、元号は、特に注記していないものは昭和である。尚、平成以降は西暦で記した。

一、書簡一覧は年月日順とし、日附が同一の書簡は番号の早い順に配列した。

一 書簡解題

①川端書簡

001 川端義一・絹枝宛（川）

★大正一一年一月一日・一日消印義一宛 \*絹枝の父川端松太郎（前述、第I部第一章2）喪明け後初の年賀状。川端は伊藤初代を迎えるために前年一一月に根津へ越し、婚約破棄後に駒込へ転居したが、時期は未詳だった（第I部第二章52参照）。この年賀状の住所は、既に駒込になっているのが注目される。

★二六年正月・六日消印義一宛 \*『あゆみ』には宛名の記さ  
れていない葉書裏面の写真のみを掲載。

★二九年正月・七日消印絹枝宛 \*同前。

三〇年正月・一〇日消印康成・一栄（妻秀子）・麻紗子（娘政子）

より義一・絹枝宛

★三五年正月・八日消印義一・皆々様宛

★四三年正月・三日消印義一・キヌエ・誠治・逸男宛

義一は絹枝（明三九〇一九九四）の婿、誠治は長男。四五年五月の京都・都ホテルでの誠治の結婚式では、川端が親族代表で

挨拶した。大正一二年義一宛年賀状が『茨木時代』に、二五年の絹枝宛年賀状が『あゆみ』に写真を添えて翻刻されている。

002 佐々木味津三宛（日）

大正一五年元旦・大正一四年一二月消印 \*伊豆の湯ヶ島湯本館より。

「文藝時代」編輯は、川端・片岡に次いで大正一四年一月号と三月号は佐々木・横光が担当した。その前年、川端は「文藝春秋」に読書雑誌「佐々木味津三氏の「呪はしき生存」」（大二三・七）を発表している。

003 日日新聞社学芸部沖本常吉宛（日）

三年一二月二日消印 \*原稿送付について。「芝居とキネマ」一月号「映画気の毒録」を一〇日頃に送ったか。「日文」（一九九二・一・一）では、沖本宛大正一五年と昭和三年の九通及び同時期と推定される「サンデー毎日」宛一通を翻刻。<sup>3</sup>

004 民謡音楽編集部藤田健次宛（日）

四年一二月一七日 \*「民謡音楽」への執筆依頼に対しての返信。「民謡音楽」は藤田を編輯人として一二月にコロムビア

出版社内民謡音楽発行所から創刊。全く畑違いで何を差し上げたらいいか困却する、新聞に追われているので延ばしてとある。「東京朝日新聞」夕刊連載の「浅草紅団」は、二月一六日まで。「民謡音楽」五年三月号掲載の川端「アンケート回答文」が『川端文学への視界9』（教育出版センター、一九九四・六）に林武志解説により紹介されているが、筆者が確認しえた五年一二月号（同号で終刊か）まで、川端はこのアンケートの他は執筆していない。

#### 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）

五年一〇月二五日消印、添田唾蟬坊宛 \*礼が遅れたが前日求めたところだったというのは、一五日刊の『浅草底流記』（近代生活社）であろう。翌月七日の川端宛尾崎士郎書簡には、添田が本を出して会をやりたく君に発起人になってくれるよう頼まれたとある。同書は長男知道が代筆。翌年からの川端書簡は全て知道宛。「浅草紅団」（前述）で「改造」所載の貴文も参酌したというのは二八年五月号掲載の「浅草底流記」で、「浅草紅団」中でも「浅草通の添田唾蟬坊氏」の言葉として引用している。

六年正月・四日消印

八年元旦・五日消印

九年六月一五日消印 \*湯沢温泉高半旅館絵葉書。「文藝」八月

号より久しぶりに浅草物を連載するとあるのは「浅草祭」（九月号）翌年三月号）。御高教御助力頂きたく二二、三日頃拝謁したい、御返事は滞在中のこちらへとある。

同年六月二八日 \*返書への礼と旅行中に転居した知らせ。谷

中の自宅地図添書きあり。近日当方より伺いたいとある。

二五年正月・四日消印

二六年正月・六日消印 \*虚子の句のスタンプは、『あゆみ』に

写真が掲載されている同年の年賀状（044 矢倉年宛）と同一。

同年一二月一七日消印 \*『教育者』（春歩堂、五日刊）献本の

礼。

二八年正月・七日消印

二九年正月・七日消印

三〇年正月・一二日消印

三三年正月・六日消印

三五年正月・八日消印

四二年八月一四日消印（日本近代文学館寄付募金委員長川端・

副募金委員長今日出海・理事長伊藤整連名） \*日本近代文

学館維持会加入のお願い（印刷）。

四六年正月・九日消印

006 細田源吉宛（川）

八年正月・三日消印

007 田中直樹宛（神）

八年七月二八日消印、文化公論社田中宛 \*興津山岸屋より。

挨拶状や<sup>レ</sup>切の件。田中の経営する同社から九月一五日に

「文學界」を創刊、「創刊号編輯後記」は川端が執筆した。

同年九月消印、同前 \*消印の日附の下一桁が不分明であるが、

二一日か。承諾を得たとある戸川秋骨の「文學界」の思い出

とは、「文學界」一一月号掲載の戸川「四十年前の「文學界」

であろう。

同年一二月二日消印速達、同前 \*別封で送る淀野の梶井論を

一二月号に載せてほしい、梶井の全集が同月に出る、梶井の

相当長い小説も「文藝」一二月号に出るとある。「文學界」

には淀野「梶井基次郎に就いての覚書」が、「文藝」には六

〇枚の遺稿として「瀬山の話」が発表され、全集（六峰書房）

は翌三四年、梶井の三回忌である三月二四日に出た。川端「本

誌の新人推薦に就て」（昭九・六）にも、淀野の梶井論掲載

の経緯が記されている。

同年一二月一日消印、同前 \*佐々木氏のもの新年に、小坂氏

のは二月か三月にとあり、一月号に佐々木一夫「没落後」、

二月号に小坂たき子「父の家」が掲載された。

（同年か）一二月二八日夜（川端康成内） \*「ただ今は、お

忙しいのにわざわざ」とあり、使者から何か受け取った折り

返しのお礼状。今日川端は「新潮」の座談会へ出て留守とある

のは、九年二月号「新年号の創作評文壇の動向について」か。

「文學界」は一〇年一月で休刊、六月に文圃堂書店から復刊。

一〇年一二月五日消印、共同印刷所内美編輯部田中宛 \*新年

号のため火急の仕事で書けそうにない、新しい仕事の成功

を祈るとある。新年号は、「改造」に「イタリアの歌」、「文

藝春秋」に「これを見し時」、「若草」に「花の湖」連載第一

回、「文學界」「文藝懇話会」に評論等を発表している。

他に、久保隆一郎を「文學界」の手伝いに紹介する田中宛川端

の名刺、河上徹太郎から川端に小林さき子（佐規子。長谷川泰子）を紹介する名刺も神奈川近代文学館に所蔵されている。

**008 文化公論社文学界宛往復はがき（神）**

八年九月一二日 \*一四日に行う会の時間問い合わせ。川端宛  
林房雄一六日書簡には、この日の集まりで、やっと「文学界」の同人の気持ちがあつたのを感じたとある。

**009 澤田貞雄宛（日）**

九年正月・五日消印

一〇年一月三〇日附・二月二日消印（秀子代筆）

一二年一月一日・同消印

（同年）四月一五日 \*日本近代文学館では一一年と推定して

いるが、同人間でも時評でも大好評だったと書簡中にある澤田の小説は、川端の推薦文「澤田貞雄君」を添えて「文学界」一一年一二月号に掲載された「鶏供養」と考えられることから年を修正。翌一二年一月号の「文学界賞」選考で、阿部知二が同作に一票を投じている。拙稿「新資料・文学界賞」関係全集未収録文四篇」（前述、第Ⅱ部第二章注（16））でも澤田に言及した。「日本古書通信」（二〇一三・七）の「八

木書店新蒐品目録」には、九年一〇月二四日澤田宛未翻刻書簡の写真が掲載されている。

**010 井伏鱒二宛（神）**

九年二月二日速達 \*軸装。深田に就いての感想を三月二日発行の「文学界」四月号に、二七日メ切で書いてほしい、あすなろうの出版に際してという意味もあるので同著に触れてと依頼。深田『翌檜』は江川書房、前年一月一〇日刊。井伏「深田久弥の印象」は「文学界」六月号掲載。

三九年二月一三日 \*献本の礼。『無心状』（新潮社、前年二月二五日刊）か。

月二五日刊）か。

四三年五月二五日速達

\*藝術院第二部長辞退のお願い。志賀らにも同様の速達を同日附で出している（後述、**011 広津和郎宛・023 中山義秀宛・046 尾崎一雄宛・053 井上靖宛・080 矢代幸雄宛・081 岩田豊雄宛・082 西条八十宛**）。第二部長は任期三年、郵送投票で六月一二日に丹羽文雄が引き継いだ。  
同年六月二日速達 \*返書拝見、三〇何名かに藝術院第二部長辞退の件で連絡したことの釈明。

**011 広津和郎宛（神）**



九年四月二日 \*本郷区菊坂菊富士ホテル宛封筒のみ。大正

一四年頃から同年まで、広津は同ホテルで執筆していた。

(一〇年)三月三〇日 \*片岡鉄兵『花嫁学校』(中央公論社、

一〇年四月三日刊) 出版記念会の発起人依頼であることから、年を推定。同会は一三日に開催。片岡宛四月五日書簡に、発起人のうち川端から頼んだ諸氏として広津の名も挙げられている。

一九年一月一八日 \*川端が編輯する「八雲」に広津「徳田秋

聲論」を得た感動と礼。同誌第三輯「評論随筆編」(七月一五日刊)掉尾に(昭和十九年一月)と末記して広津の秋聲論を掲載。川端は「徳田秋聲」縮図「(二一・八)や後年の「徳田秋聲」集解説」(四二・九・五)でも、同論を称賛している。

(二六年)六月二四日 \*二六年六月一日刊『同時代の作家たち』(文藝春秋新社) 献本の礼と近況から年を推定。

三六年七月一三日 \*「御趣意には勿論賛同」とあるのは松川事件関連か。坂本育雄『評伝廣津和郎』(翰林書房、二〇〇一・九)によれば、八月二六日に広津・志賀・吉川・川端・

河盛・武者小路・宇野・井伏・尾崎士郎らを代表とし、第二審の鈴木裁判長宛に裁判の公正を要求する請願書を提出。

四三年五月二五日速達 \*藝術院第二部長辞退願い。前述、010

井伏鱒二宛同日書簡参照。他に広津宛書簡が「神奈川近代文学館」(二〇一一・四・一五、二〇一三・四・一五)で紹介されている。

012 (広津和郎娘) 広津桃子宛(神)

四五年正月・七日消印 \*四三年九月二一日父和郎死去、二五日の葬儀では桃子が喪主を務めた。喪明け後初の正月。

四六年正月・九日消印

013 新潮社(編集部) 檜崎勤宛(川)

九年四月二二日消印 \*「新潮」五月号の「文学的自叙伝」に言及。送るとある『水晶幻想』は改造社、一九日刊。六月に復活とある「文学界」は文圃堂より復刊。佐左木俊郎(前年三月一三日没)に就てよろしくと頼んでいるが、川端・檜崎・中村武羅夫の三人で葬式の前日に弔問した折のことが、「文芸時評」(昭八・六)や「末期の眼」(同・一二)に書かれている。下谷の消印だが、その後、新橋午後三時五九分発で伊

東下車、同泊。翌日は伊豆熱川温泉泊。

**一一年九月（一九日）** \*二〇日鎌倉消印。明後月曜日に原稿

（一一月号「原作と映画化に就いて」）を届けるとあること  
から一九日（土）に書いたと推定。小諸・松原湖・諏訪・甲  
斐を経て昨日帰宅とある。一五日に堀・神西らと軽井沢から  
面替へ出かけた留守に、川端が滞在していた藤屋旅館へ秀子  
が到着している。

**四五年一月一四日** \*『作家の舞台裏 一編集者のみた昭和

文壇史』（読売新聞社、一五日刊）献本の礼。『年譜』には、  
八木書店『近代名家自筆物特輯』（一九九九）掲載の写真に  
よって同書簡を取り上げたが、現在は川端文学館が所蔵。

**014 菅忠雄宛（川）**

**九年九月九日** \*改造の小説あつて動けないが、お父さんに本

の題字を書いていただけそうなら改造の人をやり、一三、四  
日に（鎌倉へ）うかがうとある「本」は、後述の改造社『川  
端康成集』。「改造」一〇月号には「扉」を発表。菅の父虎雄  
は独語学者、書家、一高教授。

**同年九月一七日** \*昨日の礼。出来上がる頃改めて伺う。翌日

の部屋がないというので帰ったとある米新は、小林秀雄の随  
筆等にも登場する鎌倉扇ヶ谷の鉱泉宿、後の香風園。

**同年一〇月一五日** \*昨日は銀座三越でワイヤアの、松屋でエ

アデルの鑑賞会、ワイヤアには自家産の子犬を出品とある。  
二〇日までには出来る筈とある『川端康成集』は一九日に刊  
行されたが、この第一巻のみで中絶した。発行主が病気で延  
びるかもしれないとある「文學界」（前述）は、翌年一月号  
を出して休刊。

**一二年六月八日**東北帝大病院熊谷内科宛 \*仙台で入院中の六

日附書簡への返信。お見舞いの他、五日六日に野鳥の会の  
旅行で山中湖へ行った留守中に二階堂へ越したこと、鎌倉へ  
ンクラブのハイキングの計画等。二五日のハイキングの様子  
は「鎌倉アルプス」（一九〇二）に書いている。

**015 ★兵庫県氷上郡成松村・吉積妙子宛（川）**

**（九年）一二月一八日** \*消印判読不能。発信地が「谷中坂町

七九」であるから九、一〇年、「新刊」とあるのは九年の『川  
端康成集』（前述）か。『あゆみ』によれば、吉積は大阪の女  
子専門学校を卒業して上京、康成に師事し、病を得て帰京し

た。療養の見舞いであることから川端文学館が年を推定。「母の読める」(昭一四〇一五)の、故郷に戻って亡くなった文学志望の少女のモデルか。川端が「早世した娘の手記に基づいたもの」(改造社版川端選集第四巻「あとがき」昭一三・六)と明かす「むすめごころ」(昭一一・八)や「女学生」(同・一〇)も書いていることは、第Ⅱ部第四章二一で前述。

016 犬田卯宛 (日)

九年二月二日 \*『農村』(平凡社、二二日刊) 献本の礼と書評依頼に対して。前年九月に、犬田ら農民作家同盟発行の第五次「農民」が終刊している。

017 一橋新聞部宛 (日)

一一年二月二八日 \*執筆依頼に対して。

018 上司小剣宛 (日)

一二年元旦・一日消印

川端は大正年間で最も記憶に残る作品というアンケート(昭二・三)に小剣の短篇集『天満宮』等を挙げ、学生時代の日記にも「私の最も好く作家」(大四・三・二五)、「此頃推賞せる作家」(大一〇・四・七)と記している。

019 笹本寅宛 (日)

一二年元旦・五日消印

笹本は九年に時事新報社退社、『文壇手帖』(橋書店、九年刊)等刊行している。

020 砂子屋書房宛 (神)

一二年二月二〇日消印速達 \*翌年一月二〇日、印税を文人囲碁会の維持費に充てる黒白叢書の一冊として、川端『短篇集』が同社から刊行された。黒白叢書及び砂子屋書房については拙稿「川端康成と囲碁」(前述、第Ⅱ部第七章注(11))。

021 中里(佐藤)恒子宛 (神)

一二年二月二九日速達 \*封筒のみ。

一七年八月二二日 \*島木の軽井沢の家購入については、中里

宛一三日書簡で仲介を依頼、一七日書簡でも言及。

(二四年) 一二月二三日 \*近刊を届けるとある『哀愁』は二

四年二月一〇日刊(細川書店)であることから年を推定。意見申した、お待ち下さいとある「お作」は、次便の注参照。

二五年一月二三日 \*「新潮」に再度推薦した、遅れるようならば「人間」の木村君にでもとあるのは、「人間」三月号に

掲載された中里「白き煖爐の前」か。木村徳三は、当時鎌倉文庫刊「人間」編集長（前述、第Ⅱ部第二章注（2））。この返信が後掲の二月三日中里書簡であろう。

**二七年一月七日** \*長女の留学決定の知らせへの返信。

**（三〇年）六月一日** \*渡米の件について、三〇年八月一九日の書簡に先行するものと考えられることから年を推定した。

**三〇年八月一九日速達** \*軽井沢より。問い合わせへの返信。

**三四年六月二〇日** \*『天使の季節』（文藝春秋社、二五日刊）献本の礼。

**四三年一月一日** \*二九日から京都、午後のひかりで帰る。差

上げた文章は即興、写して送ってほしいとある。

**同年一月二〇日** \*ロンドンのグロブナーズ・ハウスより封

書及び同月附・消印のない葉書。「川端康成・東山魁夷往復書簡」（前述、第一章51）には、同ホテルの用箋に毛筆で書

いた年末年始の挨拶を兼ねたノーベル文学賞受賞礼状を、集英社版『自選集』（前述、第Ⅱ部第九章二）に添えて多数送ったことが注記されており、日本近代文学館には、受賞挨拶の印刷された宛名なし封筒・葉書・便箋のセットが所蔵されて

いる。封書は『大和し美し』（同前）に写真が掲載されている安田鞞彦宛と、葉書は後述の **039 那須辰造宛・067 中村光夫宛** と同一。

尚、神奈川近代文学館所蔵一六年四月一六日書簡は、二六日書簡として川端全集に翻刻されている。『年譜』で、書簡の内容から一五日に書いた一六日消印の書簡と推定したものである。

**022（中里恒子夫）佐藤信重宛（神）**

**（二二年か）八月一七日** \*恒子を長く引止めた詫び。絶食の後流動物を召上っている有様ゆえ長い汽車は心配だったとある。軽井沢からの一二年七月三〇日中里宛書簡に、「乙女の港」の後の相談もあり、八月になってから来てくださいと記されており、この夏か。同作は「少女の友」六月号から翌年三月号まで連載された。前述、第Ⅱ部第三章二2。

**023 中山義秀宛（神）**

**一三年一月一三日** \*熱海金城館の便箋・封筒。明日名人が来て一緒に伊東へとある。一八日から引退碁が再開され、七月から「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」で連載中の「本因坊名人引退碁観戦記」を執筆した。

(一九九年) 十一月二四日 \* 神奈川近代文学館では一六六年〜一

九年と推定しているが、京都から吹田に通ったとあることから年を推定した。

三三年二月八日 \* 『戦国史記』(中央公論社、一月二〇

日刊) 献本の礼。昨年より雑用多くとあるが、この年九月に国際ペン大会を日本で開催、川端は会長として多忙を極めた。

四三年五月二五日速達 \* 藝術院第二部長辞退願い (010 井伏鱒

二宛同日書簡参照)。

024 (片岡鉄兵妻) 片岡光枝・(娘) 藍子宛 (日)

一五年三月一四日消印 (片岡鉄兵・横光連名) 藍子宛 \* 湖と

富士の絵葉書。箱根ホテルにて。今日の旅程について。連名の同日附絵葉書を、次項の佐多や秀子夫人・林芙美子・中央公論出版部藤田にも出している。川端は一八日頃に帰宅、二

三日に再度単身出発、翌月まで旅した。第Ⅱ部第二章参照。

二九年正月・九日消印光枝・藍子宛

三三年正月・七日消印光枝宛

「日文」(一九九九・三・一五)では、藍子宛一通(二八年)・光枝宛二通(二〇、一年頃と二六年。鉄兵は一九年没)の書簡

を翻刻。

025 窪川(佐多) 稲子宛 (日)

一五年三月一四日消印 (片岡鉄兵・横光連名) \* 富士山絵葉

書。箱根関所の印。『素足の娘』(新潮社、八日刊) 献本の礼。

三人での東海道五十三次の旅、昨夜の宿について。

三八年二月二日 \* 『女の宿』(講談社、一月二〇日刊) 献本

の礼。同作は一〇月に女流文学賞を受賞。追悼文「川端さん

との縁」(昭四七・六)や佐多全集第一八巻「あとがき」(講

談社、昭五四・六)に、かつて「レストラン洛陽」(昭四・

九)で伊藤初代を描いたこと、女流文学賞銓衡委員だった川

端に好意を受けたと感じたこと等を記している。

四一年九月二二日 \* 『塑像』(講談社、八月二〇日刊) 献本

の礼。

四五年四月二二日 \* 『重き流れに』(講談社、三月一六日刊)

献本の礼。

026 小島政二郎宛 (神)

年月日不明 \* 封筒に住所・切手なし。「先程の絵」とあり、持

参便か。

**一五年四月一日** \*今は芥川賞選中、「薙露の章」の作者の本名が知れる心配があるのでとあるが、桜田常久（筆名並木宗之介）は川端とは東大同期でドイツ文学科だったこと等「独影自命」に記している。桜田は次作で芥川賞受賞。川端は両回とも選評で取り上げている。

**同年一〇月一四日** \*石炭、砂糖の礼。いよいよ一五日か六日に軽井沢から引上げるとある。

**同年一二月三一日** \*熱海西山荘延寿より。

**（一六年）一月一〇日** \*延寿より。これを含め、一五年一二月三一日〜翌年二月一八日の書簡は熱海文士村の地所をめぐるものであることから同年と推定。同時期の妻秀子や片岡鉄兵宛一〇月八日以降の書簡も参照されたい。

**一六年一月二三日** \*片岡・横光らの意向等。

**同年一月三〇日** \*延寿の便箋。仮契約、委員の腹案等。

**同年一月三一日** 速達 \*土地の件、危険と認めたら中止。

**同年二月一日** 速達 \*延寿より。御足労願えれば。

**同年二月一八日** \*成行に任せる。預かった金は上京時に。

**同年三月一六日** \*五月一日から一月余り満支へ行くので、京

都へはお伴ならずとある。「満洲日日新聞」の招きで三月三一日に東京発、五月一八日同着。

**一七年三月二一日** \*新聞小説が始まりそうだが万難を排して参加するというのは、小山書店の企てによる古寺巡礼か。四月二〇日〜二五日、友人達の一行に京都で加わっている。「満洲日日新聞」の連載「東海道」は翌年七月から開始。

**同年四月三〇日** \*京都柘屋旅館より。同日の書簡に林芙美子宛もある。

**（一七年）一月二五日** \*一七年一月一日刊『眼中の人』（三田文学出版部）献本の礼であることから年を推定。飯田で買ったとある小島の旧著『新居』は、春陽堂、大正一五年一月一日刊。

**一八年四月五日** 附・五月四日消印 \*承德喇嘛寺絵葉書。後付は五月四日の誤記か。車中から読んだという小島『芭蕉』（至文堂）は四月二〇日刊。「うちの子供」とあるのは、五月三日に入籍した養女政子。川端が満支へ行ったのは二年前の春（前述）で、承徳の喇嘛寺は四月二七日に訪れた。

**同年一〇月二〇日** \*修学院仙洞も拝観し、この朝帰った。

(二一〜二四年) 二月四日 \*封筒には切手・住所なし。神奈

川近代文学館では一四年と推定しているが、株式会社鎌倉文庫の便箋を使用していることから年を修正した。

三五年二月二八日 \*『場末風流』(青蛙房、二〇日刊) 献本の礼。

同年四月一七日 \*京都より。同日に政子・東山へも書簡。

「神奈川近代文学館」(二〇二一・四・一五)では小島宛一七年五月二八日の書簡が紹介されている。「菊池さんと私」(昭三五・三・六)には、菊池との縁で出会い、後々まで好意を受けることになった文学者として小島を挙げている。(第II部第七章一参照)

027 (小島政二郎妻) 小島みつ子宛 (神)

一七年四月二七日 \*柘屋より。書簡には、満洲の新聞小説に

古都の風景を書きたいとあるが、翌年七月から「満州日日新聞」に「東海道」を連載。(第II部第八章二参照)

同年七月一〇日 \*フェルナンド・オリヴィエ著、益田義信訳

『ピカソと其の友達』(筑摩書房、四月一五日刊) 献本や京都の写真等の礼。五月三〇日の同書出版を祝う会には、小島

政二郎から川端に案内状が送られている。

028 久米正雄・(妻) 艶子宛 (川)

★(一五年) 九月九日 久米正雄宛 \*軽井沢より。昨日の礼。

ゴルフ道具を買って車で帰ってきたとあり、『あゆみ』で昭和五年と推定されていたのを、内容から『年譜』で修正した。

二七年一〇月二八日 久米艶子宛 \*別府亀の井ホテルより。文

藝春秋の講演(二三日からの三〇周年記念近畿地方講演)後の九州の旅について。川端は一九日に神戸港出港、大分県の招きで三一日まで旅して「千羽鶴」続篇の構想を得た。拙稿「千羽鶴」のゆくえ(前述、「はじめに」注(5))参照。

029 伊藤整宛 (日)

一五年一〇月二九日 \*四日の伊藤書簡の返信。今日から伊豆

で来月には一度帰るつもりといった予定にも触れ、伊藤が代筆した『小説の研究』(第一書房、昭一一・一〇)の改訂版は出すなり止めるなり伊藤の意志に任せる旨を記している。

二八年七月二二日 \*別送したとある『小説の研究』は、要書

房、一五日刊。

三三年八月二五日 \*パリ・ロンドンのペン大会出席の餞別を

同封、パリで今日出海に出会ったらペンの会に誘うよう依頼している。伊藤は二七日に返信、九月二三日に出発した。

**四三年正月・八日消印**

**四四年五月三〇日**ホノルルより航空便 \*病気見舞い。空港まで見送ってもらったこと等の詫び、大学の日程が終わって元氣、来月中頃には帰国と触れている。川端はハワイ大学での日本文学の特別講義で三月から渡航、ノーベル賞受賞記念の「川端康成展」(後述、**090 日本近代文学館宛参照**)。伊藤が尽力した)の準備で一時帰国、四月二一日に出航、名誉文学博士号を授与されて、六月二四日に帰国した。

この他、一一年八月一五日伊藤宛書簡が、曾根博義「川端康成『小説の研究』の代作者」(『遡河』一九八九・八)で紹介されている。前章**24**、『伊藤整全集』も参照されたい。

**030 新声閣大悟法利雄宛(川)**

**一五年一二月八日**消印速達 \*お手紙拝見、八日は信州、九日は伊豆、九日正午までにお越し下さればとあるが、**095 川端秀**

子より**中里恒子**宛同月七日附書簡によれば、七日は川奈滞在。

同社から翌月二〇日に刊行した『正月三ヶ日』(前掲、第II部

第二章四)は横光『秘色』に続く同社の第二出版、帯文は大悟法。特装版・愛蔵限定本一五〇部、装幀は芹沢銈介。牧水門下の大悟法は、牧水没後に『牧水全集』(改造社、昭四五)を編集して改造社に勤めた後、一五年に独立して新声閣を経営した。

**031 ★有光社出版部中井正晃宛(川)**

**一六年七月三〇日** \*軽井沢より。有光名作選集の出来喜ばしい、表紙は小生の(第四卷『寝顔』一五日刊)はよく、宇野(第一卷『夢の通ひ路』同)のは悪いとある。装幀はいずれも小穴隆一。

**032 石塚喜久三宛**

**一八年二月一日**蒙疆張家口鉄路局経理処審査科内宛(北) \*一月一三日の石塚宛書簡(「紀要」に翻刻)に続く書簡。改稿を期待しているとある「纏足の頃」は横光・川端らを選者とした蒙疆文学賞受賞作として「蒙疆文学」一月号に掲載、八月に芥川賞受賞。『満洲国各民族創作選集』第二卷(創元社)編集集中とあるが、翌年三月三〇日刊。その第一・二巻に後述の牛島春子の、第一巻に日向仲夫の作品を収録。



同年一月十五日蒙疆張家口鐵路局総務部文書課宛（川） \*

芥川賞にも小生等の非礼の言にも拘泥せずお書き下さいとある。

二年一〇月二六日札幌市鎌倉文庫支社宛（神） \* 書簡中の

ジイド「架空会見記」は、同社の「人間」四月号掲載の後、一月一五日刊。石塚は前年一〇月に華北交通を退職、小樽の家族の元に引揚げる際、四月七日に川端宅を訪ね、川端らの鎌倉文庫の支社に勤めた。二年一二月に単身上京、川端は『花の海』序（二三・九・一五）で、帰国後まだあまり書いていないが期待すべき作家と考えていると記した。

### 033 兵庫県尼崎市北難波・長尾桃郎宛（川）

（一九九年）五月四日 \* 郵便料金から川端文学館が年推定。依頼にて送るとある志賀署名入り『暗夜行路』は、座右宝刊行会版（昭一八・一一・一九）か。同書は梅原龍三郎、小林古径、坂本繁二郎、武者小路実篤、安井曾太郎、安田靫彦ら挿絵。長尾は『小林多喜二随筆集』（書物展望社、昭一二・六）等を編み、後年「愛書家くらぶ」「本の虫」等にも執筆した。

### 034 山崎斌宛（川）

（一九九年）五月二三日 \* 『月夜の雪国』（月明会出版部、一九

年四月一五日刊）献本の礼であることから、年を推定した。一昨日大河内家であったという茶会は、二四日横光宛に、警報中で連絡できなかったと記されている。

草木染作家の山崎は、草木屋・月明会を興して編著書等を刊行していた。川端「自由日記」六月一六日には、山崎に表装を頼んでいた岸駒がくの虎が届けられたとある。

### 035 梅田晴夫宛（川）

★二〇年四月一〇日 \* 「三田文学」に小説を書くつもりとして当初考えていた題も記しているが、川端は同誌に執筆していない。「文藝」四月号に「一草一花」の連れのような短篇できたとあるのは「冬の曲」、前年の「文藝春秋」七月号に「一草一花（十七歳、わかめ、小切）」として三篇を發表している。掌の小説集『一草一花』は二三年一月、青龍社刊。

四二年七月一四日 \* ふなさの佃煮の礼。紀伊の旅から帰ったというのは、三日く九日の藤田圭雄夫妻との家族旅行。

梅田は一九年に慶應大学院終了、一時中央公論出版部に勤務の後、慶應文化学院に勤めながら執筆活動を始めた。『シナリオの

工夫』（室町書房、昭三〇・一）に未定稿のシナリオ『伊豆の踊子』七七枚を収録、一月二七日附同書「あとがき」には川端への謝辞が記されている。

### 036 志賀直哉宛（川）

二一年二月八日 \*『和解』（鎌倉文庫、一二月二五日刊）が用紙等粗悪だった詫び。お預かりした作品は、批評難しく、木村（徳三）に読ませたいとあるのは、茶谷半次郎の原稿か。

一月一日中村純一・茶谷宛志賀書簡を参照されたい。

### ★（二二年）三月七日 \*『あゆみ』が「昭和二一年」と推定

していたのを『年譜』で修正。年不鮮明な消印の下一桁も二。土居良三の短篇拝見、作家として立つには欠けるものあるかと記しているが土居は、後に伝記作家となった（志賀全集「日記人名注・索引」参照）。志賀をベンルと訪ねたこと（二〇年一月七日）やベンルの帰国（二二年二月二二日）、梶井全集の編纂委員に志賀の名がほしいという淀野の取次等。ベンルは「伊豆の踊子」「暗夜行路」等の独訳者。高桐書院版梶井全集は川端・志賀らを編纂委員として一二月二〇日発刊、倒産のため二巻で中絶した。

### 037 栃木県島上町仲町・河原萬吉宛（川）

二一年四月一六日 \*適當の作に思い当たらないが、お好みのものあつて自分でもよさそうに思ったら書かせていただいても結構、原稿はないと記している。河原は翻訳家、書誌学者、評論家。二八年には「北関東郷土史研究 保呂葉」を創刊。この時もそうした企てがあつたか。

### 038 水島治男宛（川）

二一年九月一九日 \*今日面会して正式に辞表を受け取つたとある清水（立夫）は、「社会」一〇月創刊号（九月二〇日発行）の編輯長で、高見日記によれば四月一二日に鎌倉文庫入社、九月には何度も進退のやり取りがあつた。転居が決まつたともあるが、川端は鎌倉市二階堂から長谷の新居へ荷物の運び出しを翌日より開始、一〇月二日に転居した。

水島については前述（第Ⅱ部第二章二〜四、及び第六章二）。「独影自命」には、「改造」の水島は「特に恩義を受けた編輯者」と記している。二一年当時は「世界文化」編集長。同年二月の創刊号に川端は「感傷の塔」を発表した。

### 039 那須辰造宛（神）

二二年一月一九日 \*ジャック・ドラマン著、那須訳『小鳥のよるひる』（東京出版株式会社、一〇月二〇日刊） 献本の礼。

四三年十二月三日消印 \*ノーベル賞受賞挨拶葉書（印刷）。

前述、021中里（佐藤）恒子宛同月附葉書等と同一）。

040 前田豊秀宛（神）

（二二年）二月二〇日 \*封筒なし。『散りぬるを』（前田出版社、二二年九月二〇日刊）印税の件であることから、年を推定。

041 牛島春子宛（川）

（二二年）二月二三日 \*春子の夫の帰還を慶ぶという文面から年を推定した。二二年七月に春子が満洲から引揚げた後に夫も沖縄から生還、二二年一月二五日には四男誕生。同じく沖縄へ行った在満作家日向仲夫の消息も尋ねている。

「満洲新聞」に連載した「祝という男」は、芥川賞次席として「文藝春秋」（昭一六・三）に掲載、川端は同年に新京へ行った際（前述、第Ⅱ部第三章二四）、牛島と単行本化のこと等相談して一九年に序文も書いたが、戦争の混乱で刊行されなかった。

042 高見順宛（日）

二四年六月一〇日（日本ペンクラブ会長川端）日本ペンクラブ年次総会案内（印刷）。同日の金子洋文宛案内状（秋田市立土崎図書館蔵）と同じものである。

三七年九月二九日朝日新聞新館日本ペンクラブ宛速達 \*封筒に「一日理事会前手渡し」とある。高見日記一〇月一日に南本史から受け取ったとある書簡。

『高見順 秋子との便り、知友との便り』（博文館新社、二〇〇四・二。初出「日文」に追補あり）には、高見宛（一一年〜三九年）七通、妻秋子宛（三五年）一通が翻刻されている。

043 宗岡薫宛（川）

（二五年）五月二三日 \*消印の年不明。福沢諭吉八円切手を使用していることから川端文学館が年を推定。「人間」の木村徳三と「ひまわり」の若槻繁にお手紙の事相談してきた、どちらも校正の人は入用、兩人に会って相談を、とある。

044 矢倉年宛（川）

★二六年元旦・四日消印新甲鳥宛 \*『あゆみ』には葉書裏面の写真のみ掲載。虚子の句のスタンプは、同年の005 添田知道

宛年賀状と同じ。

★**二九年正月**・七日消印新甲鳥書林宛 \*『あゆみ』に葉書表面の写真のみ掲載。

★**三七年正月**・四日消印早川電気資料室内宛 \*同じく葉書裏面の写真のみ掲載。

**三八年元旦**・六日消印早川電気工業宣伝部宛

**三九年正月**・一日消印早川電気工業KK宣伝部宛

**四〇年正月**・一〇日消印

矢倉は一四年に甲鳥書林を創業、川端の『高原』（昭一七・七）を堀辰雄の装幀で刊行したことを「堀さんの本づくり」（七巻本堀全集月報。新潮社、昭二九・九）に書いている。一九年に数社を統合して養徳社となり、奈良ホテルでの創立祝賀会（一〇月二七日）には川端も出席した（当時、同社の京都支社に木村徳三が勤務していた）。二五年〜三一年頃まで書林新甲鳥として独立した。

**045 竹内道之助宛**（日）

**二六年正月**・六日消印

竹内は二〇年に三笠書房（前章2、3、10、34参照）を株式会

社に改組、処女小説集『地獄の季節』（昭二四・七）には川端の「序」が添えられているが、四月二日に竹内がその依頼に行った旨が淀野隆三日記に記されている。

**046 尾崎一雄宛**（神）

**二六年六月二八日**（林芙美子嗣子林泰、親戚総代内田伸也、友人総代川端・平林たい子連名） \*葬儀の案内（印刷）。

**二八年正月**・七日消印

**二九年正月**・五日消印

**三〇年正月**・四日消印

**三二年八月八日**（ペンクラブ会長川端・文藝春秋社長佐佐木茂索連名） \*二七日「恋多き女」試写会の案内（印刷）。

売り上げは国際ペン大会（九月）の基金にするとある。国際ペン大会については後述、**059 河村敦子宛**参照。

**三八年元旦**・九日消印

**三九年正月**・八日消印

**四〇年正月**・九日消印

**同年一〇月二四日** \*『虫も樹も』（講談社、二〇日刊）献本の礼。

四三年五月二五日速達 \* 藝術院第二部長辞退願い(前述、010

井伏鱒二宛同日書簡参照)。

047 片岡良一宛(神)

二六年一月三日 \* 往復葉書。小説「夏の靴」に関する問い合わせの返事。片岡は川端の東京帝大文学科の一年後輩。

048 坂本一亀宛(神)

二七年正月・七日消印

二八年正月・二〇日消印

三〇年正月・一三日消印

三三年正月・二日消印

四三年正月・六日消印

049 堀田善衛宛(神)

二七年一月一七日 \* 西芳寺湘南亭絵葉書。『搜索』(未来社、

一五期刊) 献本の礼。九州から帰り、京の光悦会に行った。

三〇年五月五日 \* 『時間』(新潮社、四月二五期刊) 献本の礼。

同年七月二九日 \* 『砕かれた顔』(筑摩書房、二〇期刊) 献本

の礼。

四〇年六月六日 \* 『スフィンクス』(毎日新聞社、五月二〇日

刊) 献本の礼。

(四三年) 一〇月三日 \* 四三年九月三〇日刊『若き日の詩人

たちの肖像』(新潮社) 献本の礼であることから年を推定。

四四年二月一〇日 \* 『美しきもの見し人は』(新潮社、一月三

〇日刊) 献本の礼。

050 船山馨宛(北)

二八年正月・七日消印

四五年正月・七日消印

船山は川端・中島健蔵と共に『林芙美子全集』全二三巻(新潮社、昭二六〜二八)の編集委員を務め、後年の「風景」編集長時代(昭四二・一〜四四・一)には川端の「一草一花」「伊豆の踊子」の作者(昭四二・五〜四三・一)を連載、同誌の川端追悼号(昭四七・六)の座談会では、一五年に矢田津世子と大谷藤子の紹介で川端に小説をみてもらって、書き続けようと思ったと話している。川西政明『孤客 船山馨の人と文学』(北海道新聞社、昭五七・八)引用の日記には、大谷宛川端書簡中に書かれていた船山「夜の笛」(昭一六・一)評を大谷から伝えられた(同年二月二二日)、川端の書二枚を貰って大感激した(四

三年一月二三日)といった記述がある。

051★藤森淳三宛(川)

二八年五月一九日 \*昨夜「美術案内」拝読、自著の装幀で古  
径、靱彦の絵を貰ったこと等画家の話。季刊誌「美術案内」  
は、藤森個人誌として独断社から同月に創刊された。

052 谷田昌平宛(堀多恵子・葬儀委員長川端連名)(神)

二八年六月三日 \*堀辰雄葬儀礼状(印刷葉書)。

053 井上靖宛(神)

(二八年)七月二三日 \*二八年六月五日刊『暗い平原』(筑摩  
書房) 献本の礼であることから、年を推定した。

三四年六月三〇日附・五月二二日消印 \*鎌倉の書齋から「夢」

(「週刊朝日別冊」六月二五日号)に、日附を「一月まちが  
へた」と今朝出してから夕方気づいたと記している書簡。五

月一〇日刊『楼蘭』(講談社) 献本の礼。

三四年十二月二日 \*『敦煌』(講談社、十一月一〇日刊)の  
献本の礼。

(四二年)九月二二日 \*『化石』(講談社、六月二〇日刊)・『運  
河』(筑摩書房、同二五日刊) 献本の礼。

四三年五月二五日速達 \*藝術院第二部長辞退願い(前述、

井伏鱒二宛同日書簡参照)。

四五年一月三一日速達 \*『自選井上靖短篇全集』(人文書院、  
二〇日刊) 献本の礼。

同年五月二九日速達 \*穂高の件。川端・井上・東山魁夷三組  
の夫婦の一三日〜一四日の旅は、井上「晩年の川端さん」(昭  
四七・六)や東山「安曇野への道」(昭四九・四)でも回顧  
されている。

同年一〇月一五日 \*『ローマの宿』(新潮社、九月五日刊) 献  
本の礼。「駿河湾の見える地所」とあるのは、葦山の別荘地。

054 塩田良平宛(日)

二九年正月・五日消印

三三年正月・一日消印

塩田は東京帝大国文学科の後輩。「日文」(一九九二・三・一五)  
では、『現代語訳國文學全集』代筆依頼の一二年の書簡二通を翻  
刻している。

055 川上欣宏宛(日)

二九年九月一八日

三〇年正月・(一八日)消印 \*やや不分明な消印を日本近代文

学館では一三日消印としているが、「古い日記」によれば、

一月一七日に書いた札状の中に「一読者からの「東京の人」

のなかのまちがひについての注」に対したものがあり、この

書簡のことと考えられる。実際には九月の方が札状で、一月

の方は年賀状への添書きである。

二通の寄贈経緯が、二〇一〇年五月二六日附日本近代文学館宛

川上書簡に記されている。

#### 056 須知善一宛(川)

二九年一月二三日 \*同日夕に川端を訪ねた時の置手紙、と

メモがある。義理の約束あつて出かける、家内と行く先は別

だが、両方とも今夜は帰ると記されている。川端は午後六時

から新橋の「金田中」で野間文藝賞選考会、帰宅後に午前三

時まで須知と語ったという。実業家・郷土史家須知との交流

については、上田利男『須知善一のけむりの細道』(小集団

研究所、二〇一四・四)等に詳しい。

#### 057 芥川比呂志宛(日)

三〇年正月・一二日消印

三一年七月一三日消印 \*ドナルド・キーン編アンソロジーへ

の芥川龍之介「地獄変」「寒さ」翻訳収録許可の取次につい

て。

#### 058 畔柳二美宛(日)

三一年正月・六日消印

芥川賞候補作「川音」を川端は選評(昭二七・三)で好意的に

取り上げた。三〇年に毎日出版文化賞受賞作「姉妹」が映画化

されている。

#### 059 河村敦子宛(川)

三一年八月一九日大病院宛 \*軽井沢より入院見舞い。ペン

クラブの世界大会前に世界を一廻りして来たい、やはりペン

クラブの事で軽井沢へ来るのが遅れた、松岡洋子がロンドン

から帰国したのを迎えに福田家へ行ってから無沙汰とある。

福田家は川端の紀尾井町の常宿で、河村あつ子(ゆき)が川

端を担当した。松岡帰国は七月一七日、川端は翌年三月二二

日、五月一三日渡欧、東京招致が正式に決定し、九月に世界

大会を日本ペンクラブ会長として開催した。東京大会に関し

ては、前述(第Ⅱ部第七章注(45)等)や、046 尾崎一雄宛・

060 森田たま宛・062 瀧井孝作宛・117 佐藤正彰より佐藤鏡子・

純子・崇子宛も参照されたい。

(三九年か) 四月二四日福田家宛 \*京都下鴨より。川端文学

館では三六年と推定しているが、巴金らが鎌倉に来て川端宅に寄ったとあるのは三八年一月一六日の訪問のことか。今月には京の花を拝見、二三日に帰ってまた大阪から京に来て仕事、ペンクラブの用事で二七日に帰るとある。川端は三四年一二月一三日から左京区下鴨泉川町武市龍雄宅の二間を仕事場として借りていた(前述、第Ⅱ部第二章一)。

三九年一月八日消印福田家宛 \*指宿観光ホテルより。TV

ドラマ(NHK連続テレビ小説「たまゆら」)の仕事で宮崎から鹿児島に二〇日余り旅をしたとある。渡辺綱纜の『夕日に魅せられた川端康成と日向路』(鉦脈社、二〇一二・九)

他の、前月一六日から宮崎に一五日間滞在、えびの高原に一泊、鹿児島市に二泊(一泊とした文章もある)した川端が帰京するのを空港で見送ったという証言とは食い違っている。

四〇年八月に河村は銀座にバー「ゆきさん」を開いた。川端は「気さくな女」(同・一〇)に、店の名をつけ、開店挨拶状や看

板、マッチの字まで書いたと明かしている。

060 森田たま宛(北)

三一年一月二四日(日本ペン・クラブ川端康成) \*宛名と

日附以外は印刷。評議員に選任された知らせとお願い。国際ペン大会東京開催(前述、059 河村敦子宛参照)を控えて社団法人とすることになったとある。

三二年三月三日 \*ペン大会の事で外遊するが、国内の準備も

あるので放浪癖の私も今度は長く居られないとある。前述の渡欧後、三一年六月一〇日には川端・芹沢・高見・森田・石川達三が読売ホールで記念講演を行った。

三五年一月〇月二三日 \*すやの栗きんとんを今年も貰った礼。

「すや」は森田熨肩の中津川の栗きんとん本家。ブラジルペソ大会から帰国した川端らを歓迎した一日のペンクラブ例会に、森田も出席している。

川端は、戦前に森田・島崎藤村と『模範綴方全集』(中央公論社、昭一四・五、六。詳しくは第Ⅱ部第六章一)の選を務め、「森田たま氏『花菖蒲』」(同・三・二〇)も書いている。

061 有馬頼義宛(日)



三三二年正月・一〇日消印

062 ★瀧井孝作宛（川）

（三三二年）七月七日 『あゆみ』では三〇年頃と推定していたが、角川文庫『名人』（昭三二・七・一〇）解説執筆とペンクラブ色紙展染筆の礼であることから、『年譜』で年を修正した。東京大会（前述、059河村敦子宛参照）資金集めの為の色紙即売展は同月二日～四日、日本橋三越で開催。

川端は瀧井のことを「先輩と言ふより実に親しい友人」（『西国紀行』昭二・八）とも、「最も早く私の作品を認めてくれた」「最もいやな、またこはい読者」（『作家と作品』昭九・六）とも書いており、「瀧井孝作氏の「無限抱擁」（昭一〇・一〇・二二）では同作を絶賛した。

063 東宝制作本部文芸部宛（川）

（三三二年）二月二五日 \*歳暮の礼。川端文学館が年を推定。『あゆみ』には、三三二年四月二七日公開「雪国」に続いて、翌年一月一五日公開「女であること」の映画化に触れた七月一五日附の中元の礼状が、写真付きで翻刻されている。川端作品の映画化については前述、第Ⅱ部第二章六。

064 石光葆宛（日）

三三三年正月・六日消印  
三五年正月・消印不鮮明  
三九年正月・九日消印  
四五年正月・七日消印  
四六年正月・九日消印  
四七年正月・一三日消印

石光は同人雑誌「集団」以来（石光『高見順 人と作品』（清水書院、昭四四・一）によれば、種々の年譜に「文藝交錯」以来としてあるのは誤り）高見と親交があり、川端とも高見宅や新田潤歓迎会（一九年五月二一日）等で顔を合わせている。

065 石森延男宛（北）

（三三三年）二月九日 \*『コタンの口笛』（東都書房、第一・二部とも昭三二・一二・二七）献本の礼であることから年を推定。少年文学のさびしい日本に大きな力を加えるものと、拝読が楽しみとある。川端は後年、『石森延男児童文学全集』（学習研究社、昭四六・一〇～一二）に推薦文も書いている。

066 伊藤和恵宛（川）

三四年一月二五日 \*見舞いの礼。自分は一時退院、女房は残

るとある。川端は前年一月一七日から胆石で、一二月からは秀子も珍しい病気で東大病院に入院。伊藤は後、『四年三組よつくと友だち』（立風書房、昭六三・一）を刊行した。

067 中村光夫宛（神）

（三四年）一月二八日 \*読売賞の祝い。中村は同賞を三度受賞したが、一昨日退院したと記していることから、『二葉亭四迷伝』で三三年度評論・伝記賞受賞時の書簡と推定した。  
（三五年か）十一月一〇日 \*お見舞いの礼等から年を推定した。日伯文化協会とあるのは、三〇年にサンパウロ日本文化協会として設立されたものである。

（三六年）一月一五日 \*乳癌の疑いで入院していたこと等から年を推定した。川端は三五年一二月二九日に退院。

（三七年一月）七日 \*切符返送の詫び状。「御高作御上演」とあるのは、三七年一月七日〜二九日の「パリ繁盛記」。同作は前年岸田演劇賞を受賞、川端は審査員を務めた。八日夕方から京都へとあるのは、「古都」執筆のため。一月は五日に、一二月は五日か六日に京都に戻っていることから年月を

推定した。

四〇年二月三日 \*『汽笛一声』（筑摩書房、一月二五日刊）献本の礼、読売賞（戯曲賞）祝い。

四三年一月二八日消印 \*ノーベル賞受賞挨拶葉書（前述、

021 中里（佐藤）恒子宛参照）。

四四年七月二九日 \*書簡小包封筒のみ。同時期に、三島・東山・立原正秋らへ、二五日刊行の『美の存在と発見』（毎日新聞社）に『美しい日本の私』（三月一六日、講談社現代新書）を添えて贈っている。中村にも同じ二冊を送ったか。

068 吉野秀雄宛（神）

（三四年一月二八日頃） \*読売賞の祝い。吉野は『吉野秀雄歌集』で中村と共に三三年度読売文学賞（詩歌俳句賞）を受賞。前掲の中村宛と同時期の書簡と推定される。

（年未詳）六月二一日 \*封筒には住所・切手なし、持参便か。鎌倉ペンクラブが発足した一一年以降、「病床日録」が執筆された三七年以前であろう。

吉野秀雄一家との交流については前述、第Ⅱ部第九章二。

069 中央公論嶋中鵬二宛（神）

**三五年四月三〇日** \* 餞別の礼等。川端は二七日に借金の保証

人になつてほしいと依頼、五月二日から米国国務省の招きで渡米、七月にブラジル国際ペン大会に出席している。「婦人公論」に連載を執筆する旨をこの旅先で編集長の三枝に承諾して、翌年から「美しさと哀しみと」の連載を始めた。鳴中や中央公論社との関係も含めて前述、第Ⅱ部第二章。

**070 藤田圭雄宛（神）**

**（三七年か）三月六日** \* 軸装、封筒なし。修学院拝観の便宜を図るため、石川館長（作家石川利光の兄）へ依頼紹介を同封とある。石川の計らいで川端が拝観した三五年四月以降の書簡であろう。見舞いの礼も書かれているので、入院（二月八日～三月八日）していた三七年か。藤田「日記の中の川端さん」（前述、第Ⅱ部第二章注（7））にはこの書簡に関する記述はないが、同年三月は一、三、六日と見舞っている。

**（年未詳）五月五日** \* 同じく軸装で、やはり「日記の中の川端さん」に記述はないが、前の書簡と近い時期か。

他に中央公論社藤田宛一〇年の書簡二通が「日本近代文学館」（一九九二・一・一、同・三・一五）に紹介されている。藤田

については前述、第Ⅱ部第二章。

**071 小田切進宛（日）**

**三八年元旦**

**四〇年八月一三日速達** \* 軽井沢より。一六日の（日本近代文学館）起工式の件。

**同年一〇月五日**上野図書館近代文学文庫宛速達 \* 京都ホテルの封筒・便箋。七日の博物館の会議欠席と、ペンの会長芹沢と交替について。

**四一年一二月一一日速達** \* 高校大学の友人で日経連にいる氷室吉平の手紙の取次について。文藝部委員だった氷室の勧めで「ちよ」（大八・六）を「校友会雑誌」に発表したことは前述、第Ⅱ部第六章注（16）。

四二年の日本近代文学館開館へ向けて小田切らと尽力した詳細は、拙稿「日本近代文学館草創期と川端康成」（前述、第Ⅱ部第二章注（31））を参照されたい。

**072 ★笹川泰広宛（川）**

**三九年正月・六日消印**

**四二年正月・八日消印**

四三年正月・五日消印

四四年正月・三日消印

笹川泰広は茨木中学の五年後輩で、川端と同じ大正一三年五月に大阪府三島郡役所で徴兵検査を受けた。不合格の二人だけが別室に残された話の聞き書きが『茨木』にある。

073 原田康子宛（北）

三九年一〇月一六日 \*『望郷』（文藝春秋新社、一〇日刊）献

本の礼。夏の外遊中にパリで「挽歌」の翻訳者と会食したと

あるのは、Fumiko Issomura et Henriette Valotのこと。

四七年正月・一三日消印

三四年一〇月一三日三島宛書簡に、いつか眠り薬を飲んだ後で原田に手紙を書いて出したのは大失敗だったとあるが未詳。

074 松村泰太郎宛（日）

四〇年正月・八日消印

四一年正月・一四日消印

四二年正月・八日消印

四三年正月・五日消印

四四年正月・二日消印

四六年正月・九日消印

「日文」（一九九二・七・一五）に二二年の松村宛書簡翻刻あり。

松村は横光に師事し、創元社の後、新潮社・角川書店にも勤めた。拙稿「川端康成と横光利一」（前述、第一章5『横光利一作品集』）では、松村の親族に聞き取り調査も行った。

075 福永武彦宛（川）

四〇年五月五日附・六月六日消印 \*五月一二日刊の『藝術の

慰め』（講談社）献本の礼。後付は六月の誤記か。「東京の仕

事場から帰ると」とあり、一日のペンクラブ理事会の頃から

四日の劇団四季「オンディーヌ」初日までは東京滞在か。

同年一〇月一八日 \*昨夜京より帰った。特製『象牙集』（垂水

書房、七月二〇日刊）献本の礼。『片腕』（新潮社、一〇月五

日刊）を送る。

四一年一二月一七日 \*京都よりの葉書拝見、凍雲篩雪は出陳

日を一週間としていた、気の向いた時に自宅へ来て見てほし

いとある。凍雲篩雪を出陳したのは、前月の京都国立博物館

新館落成記念展覧会。福永は追悼文「末世の人」（昭四七・

六）で、この手紙の一件を回顧している。

**四二年九月二日** \*『幼年 或いは純粹記憶』(プレス・ビブリオマーズ、五月刊。限定二六五部) 献本の礼。幼年を純粹記憶としてこのように書いた事は得がたいと記している。

**四五年二月八日** \*『夜の三部作』(講談社、前年一二月一二日刊) 献本の礼。煩わせたとあるのは、一九卷本川端全集第一四卷(新潮社、一〇月二五日刊)の「独影自命」、福永が目次を作成した。

福永は講談社ロマンブックス『高原』(昭三八・一二)、『伊豆の踊子』(昭三九・五)や『新潮日本文学15 川端康成集』(昭四三・一)に解説を、川端は『海市』(新潮社、同)に推薦文を執筆している。

**076 谷崎松子宛(川)**

**(四〇年)一〇月二三日** \*先生の会でお目にかかりながら前夜京都より帰ったばかりで、先生のみごとな風呂敷をいただいていたのを知らず失礼した、法然院のお墓参りをして御逝去のさびしさ一入とある。谷崎は四〇年七月三〇日没、封書料金も勘案して川端文学館が年推定。川端は九月二日、上野寛永寺での谷崎五七日忌と七七日忌の法要で挨拶した。前掲

の福永宛を参照すれば、谷崎の(百が日の)会は一八日。会の後に京都で墓参し、帰宅してから香典返しを受け取ったか。

**077 荻原井泉水宛(神)**

**四一年一二月二日** \*『層雲作品選第二』(層雲社、一月一日刊) 献本の礼。

**078 松下英麿宛(川)**

**四二年六月二日** \*福井、金沢から帰ると『池大雅』(春秋社、一〇日刊)を頂いていたとある。川端は高見の文学碑除幕式等で同月三日〜七、八日頃まで北陸や京都へ行っていた。解説のため秋聲を読んでいるとあるのは、『日本の文学9 徳田秋聲』(中央公論社、九月五日刊)。「中央公論」編集者だった松下については前述、第II部第二章三。

**079 高橋和己宛(日)**

**四二年一月六日** \*『我が心は石にあらず』(新潮社、一〇月二〇日刊) 献本の礼。

**080 矢代幸雄宛(川)**

**四三年五月二五日速達** \*藝術院第二部長辞退願い(前述、**010 井伏鱒二宛同日書簡参照**)。

同年六月二日速達 \*忝い御言葉の御返事に感動、このような

速達を三〇何通も書いたのを悔むところもある。親しく見たと記している「埴輪の少女の首」は、この後に金を工面して購入、六日に届き、速達で東山に知らせて披露した。

東山も絡めた三者の交流については、前章51、矢代幸雄著『日本美術の特質』の推薦文解題を参照されたい。

081 岩田豊雄（獅子文六）宛（神）

四三年五月二五日速達 \*藝術院第二部長辞退願い（前述、010

井伏鱒二宛同日書簡参照）。

082 西条八十宛（神）

四三年五月二五日速達 \*藝術院第二部長辞退願い（同前）。

083 ★集英社出版部横川（亮一）宛（川）

四三年六月二七日速達 \*京都都ホテルより。今東光が二三、

四日は京都だったので、こちらで例月の仕事する。今月はお手元にとどめ置るか京でお会いするのも幸い、保田與重郎とも初めて選挙で会った、東光の連呼車で京都滋賀をドライブしたとある。参議院選挙で、川端は東光の選挙事務長を務めた。集英社では豪華愛蔵版『川端康成自选集』の準備中で、七月一日に

横川が京都に来て、二人で保田を訪ねたり、横川に梅原猛を紹介されたりしている。同書は一月二九日刊、ノーベル賞受賞時にキーンとサイデンステッカーの文も増補し、礼状（前述、021 中里（佐藤） 恒子宛参照）を添えて諸方に贈られた。

横山に関して、吉村貞司『妖美と純愛』に、ノーベル賞授賞式の頃のことや川端序文の『東山魁夷代表画集』編集集中に急死したこと等記されている（前述、第Ⅱ部第九章二）。

084 有島生馬宛（日）

四三年一月二日一八日消印 \*ノーベル文学賞受賞挨拶の印刷葉書。前述、021 中里（佐藤） 恒子宛同月附葉書等と同一。

085 求龍堂石原宛（川）

四四年七月二〇日 \*白桃を貰った礼。別封で送るといふ豆本は、067 中村光夫宛同月二九日の解題で挙げた二冊か。

086 （子母澤寛息子）梅谷龍一宛（神）

四四年一〇月三日 \*前年七月一九日に没した寛の思い出。

087 春秋社赤木健介（赤羽尚志）宛（日）

四四年一〇月三一日消印編集部赤羽宛 \*青木先生への詫びと、推薦文等は一切断っていることについて。当時同社から刊行

中だった青木正児全集推薦文の断りか。

**四五年正月・八日消印赤木健介宛**

本名は赤羽だが、姫路高校時代に個人雑誌「世界人」を出していた当時から、川端は赤木健介として注目しており、「新進評論家」大・三・一・二・二七）、外村繁宛梶井書簡（昭二・一・一）には「文戦の赤木」は川端が「見付けて文藝時代へ書かせた」と聞いたとある。赤木は「文藝時代」創刊の翌大正一四年三月に、「新象徴主義の基調について」で初掲載された。「日文」（一九九二・三・一五）に、一九九年と推定された日本評論出版部赤羽宛書簡が翻刻されている。

**088 安岡章太郎宛（神）**

**四四年一月二一日** \*安岡編『現代作家と文章』（三省堂新書、一五・日刊） 献本の礼。

**四五年二月一六日** \*『アメリカカ夏象冬記』（中公新書、一二月二五・日刊） 献本の礼。

**089 和田謹吾宛（北）**

**四五年正月・七日消印** \*和田は北大教授、藤田圭雄の従弟。

四二年八月に政子が同大の山本香男里と結婚した際、川端は

政子夫妻の札幌のアパートの世話を依頼した。

**090 日本近代文学館宛（日）**

**四五年七月二七日** \*新たに見つかった「雪国」のメモ送付について。同館も後援して前年に川端展が各地で開催され（前述、**029 伊藤整宛**）、「雪国」のメモ等も展示された。

**091 上代たの宛（成）**

**四七年三月二九日** \*詳細は、第Ⅱ部第九章二。

②川端来簡

**092 中里恒子より（下書か）（神）**

**（一二年六月）四日** \*他に四パターンの下書き各一枚。今月の「文学界」は例によって川上喜久子が二百枚の大作掲載の筈、あわただしく書いたとあるのは、一二年六月号の川上「郷愁」（目次に「二百十枚」とある）と七月号の中里「西洋館」と考えられることから年月を推定した。川上は同誌一一年一月号に「滅亡の門」（一六〇枚）、一二年二月号に「光灰かなり」（同）も発表している。

**（一二年一〇月上旬）** \*中里「物語風景」（「文藝」一二年一

○月号。九月一九日附川端書簡に「誰が何と申さうともよろしいゆゑ、つづき是非お書きなさい」とある)の評判に言及、秀子から戸隠へ滞在中との便りをもらったともある。一二年には九月二九日に戸隠へ行っており、中里宛一〇月一六日付の軽井沢からの書簡に先行するものと推定される。

(二四年か) 六月二二日 \*他に一枚目の下書き。神奈川近代文学館では二一〜二六年と推定しているが、熱海からの手紙への返信であることや「人間」への言及内容等から年を推定した。或いは二五年か。

(二五年) 二月三日 \*三〜五枚目と三枚目の下書き。同じく神奈川近代文学館では二一〜二六年としているが、**021 中里** (佐藤) 恒子宛の二五年一月二三日川端書簡への返信として年を推定した。「斉藤氏」とあるのは、二一年から「新潮」編集長となった斉藤十一。

(四三年) 一〇月一七日 \*ノーベル賞受賞の祝いであることから年を推定した。

**093 片岡鉄兵**より (日)

(一五年八月初め) \*志賀高原温泉ホテルロビーの絵葉書。

日本近代文学館では一三年夏頃としているが、川端が発咄へ来るといふ一五年八月九日附秋子宛高見書簡(『高見順 秋子との便り、知友との便り』(前述、**042 高見順**宛)収録)直前のものとして年月を推定した。

**094 尾崎一雄**より (神)

(四六年) 二月一四日 \*下書きか。封筒なし。「本因坊名人引退碁観戦記」(前述、**023 中山義秀**宛)全文を初収録した『本因坊戦全集別巻』(毎日新聞社、昭四五・一一・三〇) 献本の礼であることから年を推定。「名人」の一節を引用した「白紙の境地」を収めた『沢がに』(皆美社、昭四四・七・一〇)を遅蒔ながら届けるとある。三八年末に、文壇祝賀碁会で川端・尾崎・大岡・梅崎は四段を贈られている。拙稿「川端康成と囲碁」(前述、第Ⅱ部第七章注(11))を参照されたい。

**③ 川端関連書簡**

A.

**095 川端秀子**より**中里**(佐藤) 恒子宛 (神)

一二年六月二二日 \*中里恒子・圭子宛、奈良ホテル絵葉書。



報知（新聞）の原稿、昨夜は大阪の宿で徹夜、今夜ホテル着、明日はまた一回分書かなくてはとあるのは「女性開眼」（前述、第Ⅱ部第三章二4）。

（一二年一月一六日頃） \* 軽井沢一三〇七より。二日程秋晴れで帰るのが惜しい、堀は油屋とあり、神奈川近代文学館では九〇月と推定しているが、購入した軽井沢の別荘に移ったのは一〇月二五日以降である。一月一〇日の中里宛川端書簡には一〇日ばかり霧や雨とあり、一三日は浅間泊、堀は七日〜一五日上京し、一八日川端の別荘に一泊、油屋は翌日消失したことから年月日を推定した。

同年一月一三日 \* 川端も大変喜んだとある中里の訪問は、翌日伊豆へ出かけたとあるから六日と推定される。

一三年二月二四日 \* 原稿は頂戴したとあるのは、「少女の友」四月号から連載の「花日記」（前述、第Ⅱ部第三章二3）か。

同年七月二六日消印 \* 軽井沢より。川端は着く早々東日（東京日日新聞）の記事に悩まされている、今日手合せで昨夕箱根に出向いたとあるが、「引退碁観戦記」（前述、094尾崎一雄より）を同紙に連載中だった。

同年七月二七日書留 \* 川端からの為替七〇円を送る。

同年九月一九日速達 \* 軽井沢より。前日はハイキング。

同年一〇月一三日消印 \* 名古屋城の絵葉書。「旅」とあるのは、「木曾馬籠」に書かれた中里夫婦との旅、同月六〜九日。

同年一二月一三日消印 \* 切抜きは川端が持っているとする。

同日附で、川端は熱海から秀子宛速達を出している。

同年一二月二三日 \* 二人共風邪とある。この後熱海へ。

一四年一月二九日消印 \* 下賀茂温泉ホテル伊古奈絵葉書。昨日熱海から来たとある。川端の「昭和十四年（東宝映画手帖）」

では伊古奈行きは「二十五日（火）」となっているが、前後から二四日（火）と推定される。

同年三月二日 \* 小山書店とあるのは四月一〇日刊の『乗合馬車』、二月に中里は芥川賞受賞。南浦園は長谷の中華料理屋。

同年三月一九日消印 \* 伊古奈絵葉書。熱海から引上げ、当分滞在とあるが、二二日に東京音楽学校卒業式に列席した。

（同年）八月一日 \* 軽井沢より。神奈川近代文学館では一三年と推定。親戚の子供が海水浴に来て鎌倉に帰ったのは一四年か。

同年八月二日消印 \* 軽井沢より。昨日は駅で堀に合った、九月中頃には引上げるとある。

同年八月二七日 \* 赤倉観光ホテルの便箋・封筒。今日一緒に来て、これから野尻に出て一泊、(軽井沢へ)帰るとある。「大倉さんのホテル」(昭四〇・五)に大倉喜七郎に招かれたこと等書いている。

(一五年か)五月七日消印 \* 館では一三年と推定しているが、一五年春開催の第二〇回春陽会美術展覧会出品絵葉書(横堀角次郎「洋蘭」)を用いていることから年を修正した。

一五年五月一九日消印速達 \* 熱海聚楽旅館絵葉書。昨夜帰ったとあるのは奈良・京都の旅、帰りに熱海に寄っている。

(一五年一一月三日か) \* 封筒に切手・消印なし。今日これから又伊東へ出かけるので外套を貸してほしい、川端は前に行っているとあり、次便を参照して年月日を推定した。

同年一一月七日 \* 川奈ホテルの便箋・封筒。ジャンパーは丁度よかった、川端が三〇日に熱海で「少女の友」と「婦人公論」を済ませ、三日の午後に来て伊東で一泊して、川奈に来たとある。(この書簡については前述、第Ⅱ部第二章四)

一六年一月三日消印 \* 延寿絵葉書。四日の仕事が済むまでは帰れなくなったとあり、秀子が帰った後も川端は滞在した。(前述、第Ⅱ部第二章四)。

一七年六月一日消印 \* 川端は二八日から伊豆に滞在。

B. 藤田圭雄宛(神)

096 中里(佐藤)恒子より藤田圭雄宛(神)

一一年七月二三日 \* 先達て川端夫妻来て「文學界」へあとを書きよう言われたが、思うようなものが書けないとある。中里は五月号の「花亜麻」の後、翌年一月号の「ふみぬすびと」まで同誌へ発表していない。

097 与田準一より藤田圭雄宛(神)

二二年七月二〇日 \* 川端「武田麟太郎と島木健作」(「人間」五月号)について。

098 野上彰より藤田圭雄宛(神)

二二年八月二九日 \* 軽井沢より。

二三年一月二七日消印速達 \* 「月曜の今日」とあるから、書いたのは二六日(月)と推定される。

同年四月消印（二十何日か消印の日附不鮮明）

二三年の書簡二通は「小公子」の訳の件。創元社『世界少年少女文学全集』の一冊として、二八年六月に川端・野上訳『小公子・小公女』が刊行されたが、「共訳」の実際については『川端訳』童話について（前述、第I部第一章注（32））を参照されたい。大石征也・亀本美砂「詩人・野上彰の形成と発展―川端康成宛書簡に見る戦中・戦後」（徳島県立文学書道館研究紀要 水脈』二〇一〇・三〜二〇一四・三）が多数の書簡を翻刻し、詳細な解題を付している。

099 上司海雲より藤田圭雄宛（神）

三六年一月一三日 \*前年に藤田・川端両夫妻で東大寺のお水取りを拝観した際に上司（同寺第二〇六世別当）が便宜を図った。藤田「日記の中の川端さん」（前述、070 藤田圭雄宛）には、海雲書簡も引用して記されている。

100 和田謹吾より藤田圭雄宛（神）

四三年四月一五日

101 吉田精一より藤田圭雄宛（神）

四四年九月二一日消印

102 Lyovin, 恵美子より藤田圭雄宛（神）

四四年一月六日

103 中山知子より藤田圭雄宛（神）

四五年六月一六日

104 田中西二郎より藤田圭雄宛（神）

四七年五月四日

105 戸隠山中社・神原貢より藤田圭雄宛（神）

五〇年三月五日

106 坂本朝一より藤田圭雄宛（神）

五三年一〇月消印（消印の日附不鮮明）

107 中川李枝子より藤田圭雄宛（神）

（五三年）一月一〇日 \*五三年九月二〇日刊『ハワイの虹』

（晩成書房）献本の礼であることから年を推定した。川端は『いやいやえん』（福音館書店、三七年一月二五日日刊）を最初にほめてくれた方とあるが、NHK児童文学賞・野間児童文芸賞の審査でも川端は同作を推し、同作は他に厚生大臣賞・サンケイ児童出版文化賞も受賞した。

108 石澤小枝子より藤田圭雄宛（神）

六二年七月二八日 \* 「内海三姉妹」の川端選評とあるのは、

田克己か。

「赤とんぼ」二一年一二月号で内海（石澤）小枝子・靖子・

秋子姉妹の綴方を取り上げた「選の言葉」。二三年八月にも

靖子の童話を取り上げられている。姉妹の父は「白痴群」「ス

ルヤ」同人の内海誓一郎か。第Ⅱ部第六章注（1）参照。

113 文藝春秋新社より中村光夫妻宛（神）

二七年五月三〇日開催四氏授賞祝賀会の案内状（印刷） \* 中

村と大岡の読売文学賞、川端（「千羽鶴」）の芸術院賞、神

西の藝術選奨の祝賀会。八日に山本実彦（第Ⅱ部第七章一参

照）が来て会を催してくれると話があったと「続・月下の門」

（昭二七・七）に記されている。尚、「千羽鶴」「山の音」が

筑摩書房から刊行されたのは中村の強い勧めがあったこと、

一月三日の藝術院賞を祝う鎌倉市の表彰式では中村が「千

羽鶴」について講演してくれたことが「独影自命」（昭二八・

二）に記されている。

### C. その他

109 林房雄より田中直樹宛（神）

八年九月二八日消印

110 村松梢風より井伏鱒二宛（神）

一六年三月二七日

111 川端一栄（秀子）より山川朝子宛（日）

二五年（四月一三日） \* 川端が今朝京都から広島に発つたと

あることから月日を推定。

112 川嶋悌一より川端氣付中山義秀宛（神）

二五年五月二七日附・六月一四日消印 \* 住所不明なので川端

氣付で送る、神田に酒の店を開くから川端先生・久米先生も

誘つてとある。書簡中の「克己氏」は、「日本未来派」の池

114 野上彰より尾崎一雄宛（神）

二九年二月一日消印

115 H. Fisherより尾崎一雄宛（神）

二九年七月一日

116 石濱恒夫より安岡章太郎宛（神）

三〇年二月八日

117 佐藤正彰より佐藤鏡子・純子・崇子宛（神）

三二年四月二日 \*川端は国際ペンクラブ執行委員会等で三月

二二日から渡欧(翌年の東京大会については059河村敦子宛参

照)、五月二一日帰国。巴里からの三月二五日秀子・政子宛

書簡に、佐藤正彰が明日ホテルに来るとある。佐藤は、一一年の鎌倉ペンクラブ発足時に幹事を務めた。

118 佐藤正彰より佐藤鏡子宛(神)

三二年五月二二日

119 三島由紀夫より中村光夫宛(神)

三七年四月二六日 \*話題になっているのは、同月一七日附三

島宛川端書簡中の「瘋癲老人日記」に対する中村評。「眠れ

る美女」にも言及している。

120 川端秀子・香男里・麻紗子(政子)より坂本一亀宛(神)

四七年四月二二日 \*初七日供養の挨拶(印刷葉書)。

121 「川端康成さんを偲ぶ会」より尾崎一雄宛(神)

五八年三月一七日消印 \*発起人は、芹沢・山本健吉・井上靖

・東山魁夷。

122 川端香男里より安岡章太郎宛(神)

一九九九年四月一四日消印

## 注

(1) 同書で、年末詳六月二八日川端松太郎・岩次郎宛書簡と紹介されているものは、「二七日表記に帰省」の記述から大正八年と年を推定できる。貴重な資料を多数収めた同書だが、翻刻には文や句読点の脱落等見られる箇所がある。

(2) 同書で大正七年一月一三日とされた川端松太郎宛書簡は、『年譜』で大正八年に年を修正した。川端文学館所蔵の書簡後付は一一日、消印が一月一三日(年不鮮明)である。また、川端全集で大正八年九月一三日とされている松太郎宛書簡も同館所蔵で、後付は一一日、消印が一三日である。

(3) 三浦卓「文壇ゴシップを随筆として書くこと―「サンデー毎日」の川端康成―」(川端康成学会編『川端文学への視界34』叡知の海出版、二〇一九・六)に書簡を含めての考察がある。

二 書簡一覽

- 大正十一年（一九二二）一月一日・一日消印 001 川端義一宛（川）
- 大正十五年（一九二六）元旦・大正十四年一月消印 002 佐々木味津三宛（日）
- 三年（一九二八）一月二日消印 003 沖本常吉宛（日）
- 四年（一九二九）一月二日消印 004 藤田健次宛（日）
- 五年（一九三〇）一月二日消印 005 添田唾蟬坊宛（神）
- 六年（一九三一）正月・四日消印 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）
- 八年（一九三三）元旦・五日消印 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）、正月・三日消印 006 細田源吉宛（川）、七月二日消印 007 田中直樹宛（神）、九月二日消印 008 文化公論社文學界宛（神）、同（二日か）消印 007 田中直樹宛（神）、同二日消印 109 林房雄より田中直樹宛（神）、一月二日消印速達 007 田中直樹宛（神）、一月一日消印 007 田中直樹宛（神）、（同年か）一月二日消印 007 田中直樹宛（神）
- 九年（一九三四）正月・五日消印 009 澤田貞雄宛（日）、二月二日消印速達 010 井伏鱒二宛（神）、四月二日消印 011 広津和郎宛（神）、同二日消印 013 檜崎勤宛（川）、六月一日消印 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）、同二日消印 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）、九月九日消印 014 菅忠雄宛（川）、同二日消印 014 菅忠雄宛（川）、一〇月一日消印 014 菅忠雄宛（川）、（同年）一月一日消印 015 吉積妙子宛（川）、一月二日消印 016 犬田卯宛（日）
- 一〇年（一九三五）（同年）三月三〇日消印 011 広津和郎宛（神）、

一一年（一九三六）  
一月三〇日附・二月二一日消印<sup>009</sup>澤田貞雄宛（日）、 二月五日消印<sup>007</sup>田中直樹宛（神）、  
七月二三日<sup>096</sup>中里（佐藤）恒子より藤田圭雄宛（神）、

九月（一九日）<sup>013</sup>檜崎勤宛（川）、 二月一八日<sup>017</sup>一橋新聞部宛（日）  
元旦・一日消印<sup>018</sup>上司小剣宛（日）、 元旦・五日消印<sup>019</sup>笹本寅宛（日）、

一二年（一九三七）  
一月一日・同消印<sup>009</sup>澤田貞雄宛（日）、 （同年）四月一五日<sup>009</sup>澤田貞雄宛（日）、  
（同年六月）四日<sup>092</sup>中里（佐藤）恒子より（神）、 同八日<sup>014</sup>菅忠雄宛（川）、

同二一日<sup>095</sup>川端秀子より中里（佐藤）恒子・圭子宛（神）、  
（同年か）八月一七日<sup>022</sup>（中里恒子夫）佐藤信重宛（神）、

（同年一〇月上旬）<sup>092</sup>中里（佐藤）恒子より（神）、  
（同年十一月一六日頃）<sup>095</sup>川端秀子より中里（佐藤）恒子宛（神）、

一二月一三日<sup>095</sup>川端秀子より中里（佐藤）恒子宛（神）、 同二〇日消印速達<sup>020</sup>砂子屋書房宛（神）、  
同二九日速達<sup>021</sup>中里（佐藤）恒子宛（神）

一三年（一九三八）  
二月二四日<sup>095</sup>川端秀子より中里（佐藤）恒子宛（神）、

七月二六日消印<sup>095</sup>川端秀子より中里（佐藤）恒子宛（神）、

同二七日書留<sup>095</sup>川端秀子より中里（佐藤）恒子宛（神）、

九月一九日速達<sup>095</sup>川端秀子より中里（佐藤）恒子宛（神）、

一〇月一三日消印<sup>095</sup>川端秀子より中里（佐藤）恒子宛（神）、

十一月一三日<sup>023</sup>中山義秀宛（神）、 十二月一三日消印<sup>095</sup>川端秀子より中里（佐藤）恒子宛（神）、

一四年（一九三九）  
同二三日 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）  
一月二九日消印 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、

三月二日 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、  
同一九日消印 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、  
（同年）八月一日 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、

同二一日消印 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、  
同二七日 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）

一五年（一九四〇）  
三月一四日消印 024 〈片岡鉄兵・横光連名〉（片岡鉄兵娘） 片岡藍子宛（日）、  
同日消印 025 〈片岡鉄兵・横光連名〉 窪川（佐多） 稲子宛（日）、 四月一一日 026 小島政二郎宛（神）、

（同年か）五月七日消印 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、  
同一九日消印速達 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、

（同年八月初め） 093 片岡鉄兵より（日）、 （同年）九月九日 028 久米正雄宛（川）、  
一〇月一四日 026 小島政二郎宛（神）、 一〇月二九日 029 伊藤整宛（日）、

（同年一一月三日か） 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、  
一一月七日 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、 同八日消印速達 030 新声閣大悟法利雄宛（川）、  
一二月三十一日 026 小島政二郎宛（神）

一六年（一九四一）  
一月三日消印 095 川端秀子より中里（佐藤） 恒子宛（神）、 （同年）同一〇日 026 小島政二郎宛（神）、  
同二三日 026 小島政二郎宛（神）、 同三〇日 026 小島政二郎宛（神）、



- 同三一 日速達 026 小島政二郎宛 (神)、 二月一日速達 026 小島政二郎宛 (神)、  
 同一八日 026 小島政二郎宛 (神)、 三月一六日 026 小島政二郎宛 (神)  
 三月二七日 110 村松梢風より井伏鱒二宛 (神)、 七月三〇日 031 中井正晃宛 (川)  
 三月二一日 026 小島政二郎宛 (神)、 四月二七日 027 (小島政二郎妻) 小島みつ子宛 (神)、  
 四月三〇日 026 小島政二郎宛 (神)、 六月一日消印 095 川端秀子より中里 (佐藤) 恒子宛 (神)、  
 七月一〇日 027 (小島政二郎妻) 小島みつ子宛 (神)、 八月二二日 021 中里 (佐藤) 恒子宛 (神)、  
 (同年) 十一月二五日 026 小島政二郎宛 (神)  
 一八年 (一九四三)  
 二月一日 032 石塚喜久三宛 (北)、 四月五日附・五月四日消印 026 小島政二郎宛 (神)、  
 一〇月二〇日 026 小島政二郎宛 (神)、 十一月一日 032 石塚喜久三宛 (川)  
 一〇月一八日 011 広津和郎宛 (神)、 (同年) 五月四日 033 長尾桃郎宛 (川)、  
 (同年) 五月二三日 034 山崎斌宛 (川)、 (同年) 十一月一四日 023 中山義秀宛 (神)  
 四月一〇日 035 梅田晴夫宛 (川)  
 二〇年 (一九四五)  
 二月八日 036 志賀直哉宛 (川)、 四月一六日 037 河原萬吉宛 (川)、  
 七月二〇日 097 与田準一より藤田圭雄宛 (神)、 九月一九日 038 水島治男宛 (川)、  
 一〇月二六日 032 石塚喜久三宛 (神)、 十一月一九日 039 那須辰造宛 (神)、  
 (二一〜二四年) 二月四日 026 小島政二郎宛 (神)  
 (同年) 二月二〇日 040 前田豊秀宛 (神)、 (同年) 二月二三日 041 牛島春子宛 (川)、  
 (同年) 三月七日 036 志賀直哉宛 (川)、 八月二九日 098 野上彰より藤田圭雄宛 (神)
- 二二年 (一九四七)

- 二三年（一九四八） 一月二七日消印速達<sup>098</sup>野上彰より藤田圭雄宛（神）、  
四月消印（二十何日か消印の日附不鮮明）<sup>098</sup>野上彰より藤田圭雄宛（神）
- 二四年（一九四九） 六月一〇日<sup>042</sup>高見順宛（日）、（同年か）六月二二日<sup>092</sup>中里（佐藤）恒子より（神）、  
（同年）一二月二三日<sup>021</sup>中里（佐藤）恒子宛（神）
- 二五年（一九五〇） 正月四日消印<sup>005</sup>添田唾蟬坊・知道宛（神）、一月二三日<sup>021</sup>中里（佐藤）恒子宛（神）  
（同年）二月三日<sup>092</sup>中里（佐藤）恒子より（神）、  
（四月一三日）<sup>111</sup>川端一栄（秀子）より山川朝子宛（日）、（同年）五月二三日<sup>043</sup>宗岡薫宛（川）、  
同二七日附・六月一四日消印<sup>112</sup>川嶋悌一より川端氣付中山義秀宛（神）
- 二六年（一九五一） 元旦・四日消印<sup>044</sup>矢倉年宛（川）、正月・六日消印<sup>001</sup>川端義一宛（川）、  
同・六日消印<sup>005</sup>添田唾蟬坊・知道宛（神）、同・六日消印<sup>045</sup>竹内道之助宛（日）、  
（同年）六月二四日<sup>011</sup>広津和郎宛（神）、六月二八日<sup>046</sup>尾崎一雄宛（神）、  
一二月一七日消印<sup>005</sup>添田唾蟬坊・知道宛（神）、一二月三一日<sup>047</sup>片岡良一宛（神）
- 二七年（一九五二） 正月・七日消印<sup>048</sup>坂本一亀宛（神）、  
五月三〇日開催四氏授賞祝賀会の案内状（印刷）<sup>113</sup>文藝春秋新社より中村光夫妻宛（神）、  
一〇月二八日<sup>028</sup>（久米正雄妻）久米艶子宛（川）、十一月七日<sup>021</sup>中里（佐藤）恒子宛（神）、  
同一七日<sup>049</sup>堀田善衛宛（神）
- 二八年（一九五三） 正月・七日消印<sup>005</sup>添田唾蟬坊・知道宛（神）、同・七日消印<sup>046</sup>尾崎一雄宛（神）、  
同・七日消印<sup>050</sup>船山馨宛（北）、同・二〇日消印<sup>048</sup>坂本一亀宛（神）、

五月一九日 051 藤森淳三宛（川）、六月三日 052 谷田昌平宛（神）、七月二二日 029 伊藤整宛（日）、  
（同年）七月二三日 053 井上靖宛（神）  
二九年（一九五四）  
正月・五日消印 046 尾崎一雄宛（神）、同・五日消印 054 塩田良平宛（日）、  
同・七日消印 001 川端絹枝宛（川）、同・七日消印 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）、  
同・七日消印 044 矢倉年宛（川）、同・九日消印 024（片岡鉄兵妻）片岡光枝・（娘）藍子宛（日）、

二月一日消印 114 野上彰より尾崎一雄宛（神）、七月一日 115 H. Fisherより尾崎一雄宛（神）、  
九月一日消印 055 川上欣宏宛（日）、十一月二三日 056 須知善一宛（川）  
三〇年（一九五五）  
正月・四日消印 046 尾崎一雄宛（神）、  
同・一〇日消印 001 康成・一栄（妻秀子）・麻紗子（娘政子）より川端義一・絹枝宛（川）、  
同・一二日消印 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）、同・一二日消印 057 芥川比呂志宛（日）、  
同・一三日消印 048 坂本一亀宛（神）、同・（一八日）消印 055 川上欣宏宛（日）、  
二月八日 116 石濱恒夫より安岡章太郎宛（神）、五月五日 049 堀田善衛宛（神）、  
（同年）六月一日 021 中里（佐藤）恒子宛（神）、七月二九日 049 堀田善衛宛（神）、  
八月一九日速達 021 中里（佐藤）恒子宛（神）

三二年（一九五六）  
正月・六日消印 058 畔柳二美宛（日）、七月一三日消印 057 芥川比呂志宛（日）、  
八月一九日 059 河村敦子宛（川）、一〇月二四日 060 森田たま宛（北）  
三二年（一九五七）  
正月・七日消印 024（片岡鉄兵妻）片岡光枝宛（日）、同・一〇日消印 061 有馬頼義宛（日）、  
三月三日 060 森田たま宛（北）、四月二日 117 佐藤正彰より佐藤鏡子・純子・崇子宛（神）、

- 五月一二日 118 佐藤正彰より佐藤鏡子宛（神）、（同年）七月七日 062 瀧井孝作宛（川）、  
 八月八日 046 尾崎一雄宛（神）、 一二月八日 023 中山義秀宛（神）、  
 （同年）同二五日 063 東宝制作本部文芸部宛（川）
- 三三年（一九五八）  
 正月・一日消印 054 塩田良平宛（日）、 同・二日消印 048 坂本一亀宛（神）、  
 同・六日消印 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）、 同・六日消印 064 石光葆宛（日）、  
 （同年）二月九日 065 石森延男宛（北）、 八月二五日 029 伊藤整宛（日）
- 三四年（一九五九）  
 一月二五日 066 伊藤和恵宛（川）、 （同年）一月二八日 067 中村光夫宛（神）、  
 （同年一月二八日頃） 068 吉野秀雄宛（神）、 六月三〇日附・五月三一日消印 053 井上靖宛（神）、  
 六月二〇日 021 中里（佐藤）恒子宛（神）、 一二月一日 053 井上靖宛（神）
- 三五年（一九六〇）  
 正月・八日消印 001 川端義一・皆々様宛（川）、 同・八日消印 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）、  
 同・消印不鮮明 064 石光葆宛（日）、 二月二八日 026 小島政二郎宛（神）、  
 四月一七日 026 小島政二郎宛（神）、 同三〇日 069 嶋中鵬二宛（神）、 一〇月二三日 060 森田たま宛（北）、  
 （同年か）十一月一〇日 067 中村光夫宛（神）
- 三六年（一九六一）  
 （同年）一月一五日 067 中村光夫宛（神）、 七月一三日 011 広津和郎宛（神）、  
 十一月三日 099 上司海雲より藤田圭雄宛（神）
- 三七年（一九六二）  
 正月・四日消印 044 矢倉年宛（川）、 （同年一月）七日 067 中村光夫宛（神）、  
 （同年か）三月六日 070 藤田圭雄宛（神）、 四月二六日 119 三島由紀夫より中村光夫宛（神）、  
 九月二九日速達 042 高見順宛（日）

三八年（一九六三） 元旦 071 小田切進宛（日）、 同・六日消印 044 矢倉年宛（川）、 同・九日消印 046 尾崎一雄宛（神）、

二月二日 025 窪川（佐多）稲子宛（日）

三九年（一九六四） 正月・六日消印 072 笹川泰広宛（川）、 同・八日消印 046 尾崎一雄宛（神）、

同・九日消印 064 石光葆宛（日）、 同・一日消印 044 矢倉年宛（川）、

二月一三日 010 井伏鱒二宛（神）、 （同年か）四月二四日 059 河村敦子宛（川）、

一〇月一六日 073 原田康子宛（北）、 一二月八日 059 河村敦子宛（川）

四〇年（一九六五） 正月・八日消印 074 松村泰太郎宛（日）、 同・九日消印 046 尾崎一雄宛（神）、

同・一〇日消印 044 矢倉年宛（川）、 二月三日 067 中村光夫宛（神）、

（六月か）五日附・六月六日消印 075 福永武彦宛（川）、 六月六日 049 堀田善衛宛（神）、

八月一三日速達 071 小田切進宛（日）、 一〇月五日速達 071 小田切進宛（日）、

同一八日 075 福永武彦宛（川）、 （同年）同二三日 076 谷崎松子宛（川）、 同二四日 046 尾崎一雄宛（神）

四一年（一九六六） 正月・一四日消印 074 松村泰太郎宛（日）、 九月二二日 025 窪川（佐多）稲子宛（日）、

一月一七日 075 福永武彦宛（川）、 一二月一日速達 071 小田切進宛（日）、

同一日 077 荻原井泉水宛（神）

四二年（一九六七） 正月・八日消印 072 笹川泰広宛（川）、 同・八日消印 074 松村泰太郎宛（日）、

六月一日 078 松下英麿宛（川）、 七月一四日 035 梅田晴夫宛（川）、

八月一四日消印 005 添田唾蟬坊・知道宛（神）、 九月一二日 053 井上靖宛（神）、

同日 075 福永武彦宛（川）、 一二月六日 079 高橋和己宛（日）

四三年（一九六八）

- 一月一日 021 中里（佐藤）恒子宛（神）、  
 正月・三日消印 001 川端義一・キヌエ（絹枝）・誠治・逸男宛（川）、  
 同・五日消印 072 笹川泰広宛（川）、同・五日消印 074 松村泰太郎宛（日）、  
 同・六日消印 048 坂本一亀宛（神）、同・八日消印 029 伊藤整宛（日）、  
 四月一五日 100 和田謹吾より藤田圭雄宛（神）、五月二五日速達 010 井伏鱒二宛（神）、  
 同二五日速達 011 広津和郎宛（神）、同二五日速達 023 中山義秀宛（神）、  
 同二五日速達 046 尾崎一雄宛（神）、同二五日速達 053 井上靖宛（神）、  
 同二五日速達 080 矢代幸雄宛（川）、同二五日速達 081 岩田豊雄（獅子文六）宛（神）、  
 同二五日速達 082 西条八十宛（神）、六月二日速達 010 井伏鱒二宛（神）、  
 同二日速達 080 矢代幸雄宛（川）、同二七日速達 083 横川（亮一）宛（川）、  
 （同年）一〇月三日 049 堀田善衛宛（神）、（同年）同一七日 092 中里（佐藤）恒子より（神）、  
 一二月一八日消印 084 有島生馬宛（日）、同二〇日 021 中里（佐藤）恒子宛（神）、  
 同二三日消印 039 那須辰造宛（神）、同二八日消印 067 中村光夫宛（神）、  
 正月・二日消印 074 松村泰太郎宛（日）、同・三日消印 072 笹川泰広宛（川）、  
 二月一〇日 049 堀田善衛宛（神）、五月三〇日航空便 029 伊藤整宛（日）、  
 七月二〇日 085 求龍堂石原宛（川）、同二九日 067 中村光夫宛（神）、  
 九月二一日消印 101 吉田精一より藤田圭雄宛（神）、一〇月三日 086 （子母澤寛息子）梅谷龍一宛（神）、  
 同三一日消印 087 赤木健介（赤羽尚志）宛（日）、

四四年（一九六九）

四五年（一九七〇）

一月六日<sup>102</sup> Lyovin, 恵美子より藤田圭雄宛（神）、 同二一日<sup>099</sup>安岡章太郎宛（神）

正月・七日消印<sup>012</sup>広津和郎娘・広津桃子宛（神）、 同・七日消印<sup>050</sup>船山馨宛（北）、

同・七日消印<sup>064</sup>石光葆宛（日）、 同・七日消印<sup>089</sup>和田謹吾宛（北）、

同・八日消印<sup>087</sup>赤木健介（赤羽尚志）宛（日）、 一月三一日速達<sup>053</sup>井上靖宛（神）、

二月八日<sup>075</sup>福永武彦宛（川）、 同一六日<sup>088</sup>安岡章太郎宛（神）、

四月二二日<sup>025</sup>窪川（佐多）稻子宛（日）、 五月二九日速達<sup>053</sup>井上靖宛（神）、

六月一六日<sup>103</sup>中山知子より藤田圭雄宛（神）、 七月二七日<sup>090</sup>日本近代文学館宛（日）、

一〇月一五日<sup>053</sup>井上靖宛（神）、 十一月一四日<sup>013</sup>檜崎勤宛（川）

四六年（一九七一）

正月・九日消印<sup>005</sup>添田唾蟬坊・知道宛（神）、 同・九日消印<sup>012</sup>広津和郎娘・広津桃子宛（神）、

同・九日消印<sup>064</sup>石光葆宛（日）、 同・九日消印<sup>074</sup>松村泰太郎宛（日）、

（同年）二月一四日<sup>094</sup>尾崎一雄より（神）

四七年（一九七二）

正月・一三日消印<sup>064</sup>石光葆宛（日）、 同・一三日消印<sup>073</sup>原田康子宛（北）、

三月二九日<sup>091</sup>上代たの宛（成）、

四月二二日<sup>120</sup>川端秀子・香男里・麻紗子（政子）より坂本一亀宛（神）、

五月四日<sup>104</sup>田中西二郎より藤田圭雄宛（神）

五〇年（一九七五）

三月五日<sup>105</sup>戸隠山中社・神原貢より藤田圭雄宛（神）

五三年（一九七八）

一〇月消印（消印の日附不鮮明）<sup>106</sup>坂本朝一より藤田圭雄宛（神）、

（同年）十一月一〇日<sup>107</sup>中川李枝子より藤田圭雄宛（神）

- 五八年（一九八三） 三月一七日消印 121 「川端康成さんを偲ぶ会」より尾崎一雄宛（神）  
 六二年（一九八七） 七月二八日 108 石澤小枝子より藤田圭雄宛（神）  
 一九九九年 四月一四日消印 122 川端香男里より安岡章太郎宛（神）  
 年未詳（一一年～三六年か） 六月一日 068 吉野秀雄宛（神）  
 年未詳（三七年頃か） 五月五日 070 藤田圭雄宛（神）  
 年月日未詳 026 小島政二郎宛（神）



初出一覧（目次順、いずれも大幅な加筆修正あり）

はじめに

- 1 「研究展望 作家研究と年譜―『川端康成詳細年譜』を刊行して―」（『昭和文学研究』二〇一七・三）
- 2 「川端の「推薦文」が映す社会」（『読売新聞』二〇一九・三・二三夕刊）

第I部

- 3 「解説・川端康成「星を盗んだ父」（『新潮』二〇一三・二）
- 4 「川端康成「星を盗んだ父」―執筆時期の推定と執筆の背景」（岩波書店「文学」二〇一三・七、八月号）
- 5 「川端康成「星を盗んだ父」論―その特質と意義」（お茶の水女子大学「国文」二〇一三・一二）
- 6 「解説・川端康成新発掘作品「名月の病」「妻競」（『新潮』二〇一八・三）
- 7 「川端康成・未刊行作品五篇 解説」（『新潮』一九九二・六）
- 8 「新発掘小説 川端康成「名月の病」を読む」（『アジア文化』二〇二〇・六）
- 9 「全集未収録 川端康成「父」解題」（岩波書店「文学」一九九二・春季号）
- 10 「川端康成「ちよ物」試論―全集未収録作品「父」を核として」（『文藝空間』一九九二・四）

第II部

- 11 「投書家時代の川端康成―大正五年の掲載作品十三―」（川端文学研究会編『川端文学への視界16』教育出版センター、二〇〇一・六）
- 12 「『婦人公論』『中央公論』における川端康成―時代との交点を探って―」（和洋九段女子中学校・高等学校「紀要」一

九九九・四）＊以下、「紀要」と略す。

13 「少女倶楽部」「少女の友」における川端康成」（「芸術至上主義文芸」一九九六・一二）

14 「新女苑」における川端康成―戦時下の側面」（「紀要」一九九七・三）

15 「ひまわり」における川端康成―（少女期の終焉）と少女小説の終焉」（川端文学研究会編『川端文学への視界13』教育出版センター、一九九八・六）

16 「川端康成の女性文章・綴方選―喪われた（故郷）への憧憬／絶対の距離」（「紀要」一九九八・五）

17 「川端康成と沖繩―幻の長篇「南海孤島」／米国占領下の沖繩行」（川端康成学会編『川端文学への視界29』銀の鈴社、二〇一四・六）

18 「川端康成における芭蕉／「雪国」の（天の河）再考―川端康成全集未収録文に触れて―」（「芸術至上主義文芸」二〇一八・一一）

19 「成瀬記念館蔵・上代たの宛川端康成書簡について」（日本女子大学成瀬記念館「成瀬記念館」二〇二〇・八）

20 「川端康成最後の書簡 「不浄」ということ」（「新潮」二〇一九・四）

### 第Ⅲ部

21 「新発掘・川端康成全集未収録文六五篇―日本近代文学館及び神奈川近代文学館所蔵内容見本類より」（川端康成学会編『川端文学への視界34』叡知の海出版、二〇一九・六）

22 「神奈川近代文学館所蔵・川端康成関係未翻刻書簡一八〇通」（「昭和文学研究」二〇一九・三）

23 「川端康成関係未翻刻書簡一二二通―茨木市立川端康成文学館・日本近代文学館・北海道立文学館所蔵川端康成書簡来簡等」（「芸術至上主義文芸」二〇一九・一〇）

## 終わりに

『新潮現代文学一 川端康成』（昭五四・五）をふと手にしたのは、大学生になって間もない頃であったろうか。「千羽鶴」「波千鳥」「眠れる美女」「古都」と読み進んで、未完の「たんぽぽ」——たんぽぽの咲き乱れる生田町と白い鼠、たんぽぽのような美少年、通奏低音として鳴り響く老狂人の撞く鐘の音、人体欠視症という奇病にかかった稲子、稲子を精神病院に置いてきた母と稲子の恋人の延々と続く会話、その中で明かされる戦争で義足となった稲子の父の墜落死、等々——に至った時には、「伊豆の踊子」「雪国」の作家として記憶していた川端文学の世界の、底知れない妖しい美しさに魅せられていた。

私がお茶の水女子大学の国文学科に入学したのは昭和五五年、ちょうど三七巻本川端全集も出始めたところで、その刊行（昭五五・二く五九・五）は私の学部在学期間にほぼ重なっており、川端研究も漸く本格化していく時期でもあった。卒業論文、修士論文で川端を取り上げて以来、時代は昭和から平成、令和へと、はや三〇年が過ぎた。

中学・高校の教員を長く勤める傍ら川端研究を継続できたのは、多くの先学に教えを受けると共に、師友に叱咤激励され、刺激を受けたことが大きい。殊に、学部時代から所属した川端康成学会には大変お世話になった。本稿が成るにあたっては、茨木市立川端康成文学館元館長の田中洋子及び今井瞳良、金沢近代文学館元館長の井口哲郎、日本近代文学館の小川桃、神奈川近代文学館の和田明子、日本女子大学成瀬記念館の岸本美香子及び大橋有希子、『川端康成詳細年譜』共著者の小谷野敦、アーカイヴ「琉文21」の新城栄徳の諸氏をはじめ多くの方々のお力添えを頂いた。また、博士論文提出の機会を与えてくださった川端康成学会会長・鶴見大学文学部片山倫太郎教授はじめ鶴見大学関係各位にも、心よりお礼申し上げたい。

年々新たな川端論が書かれているが、その対象はいまだ特定の作品への偏りが見られ、その視点も固定されがちである。未発掘の作品や資料も、多数残されていると予測される。課題は数多い。豊かな読みに向けて、更なる探求を続けたい。